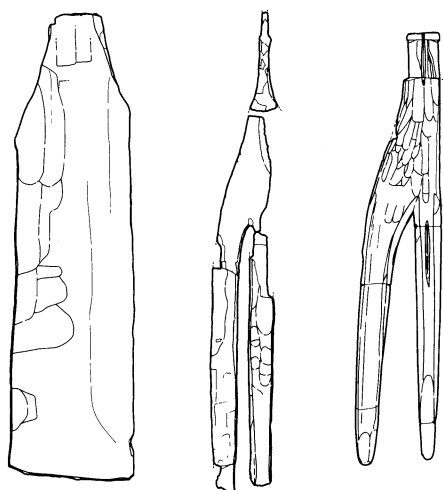


鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(57)

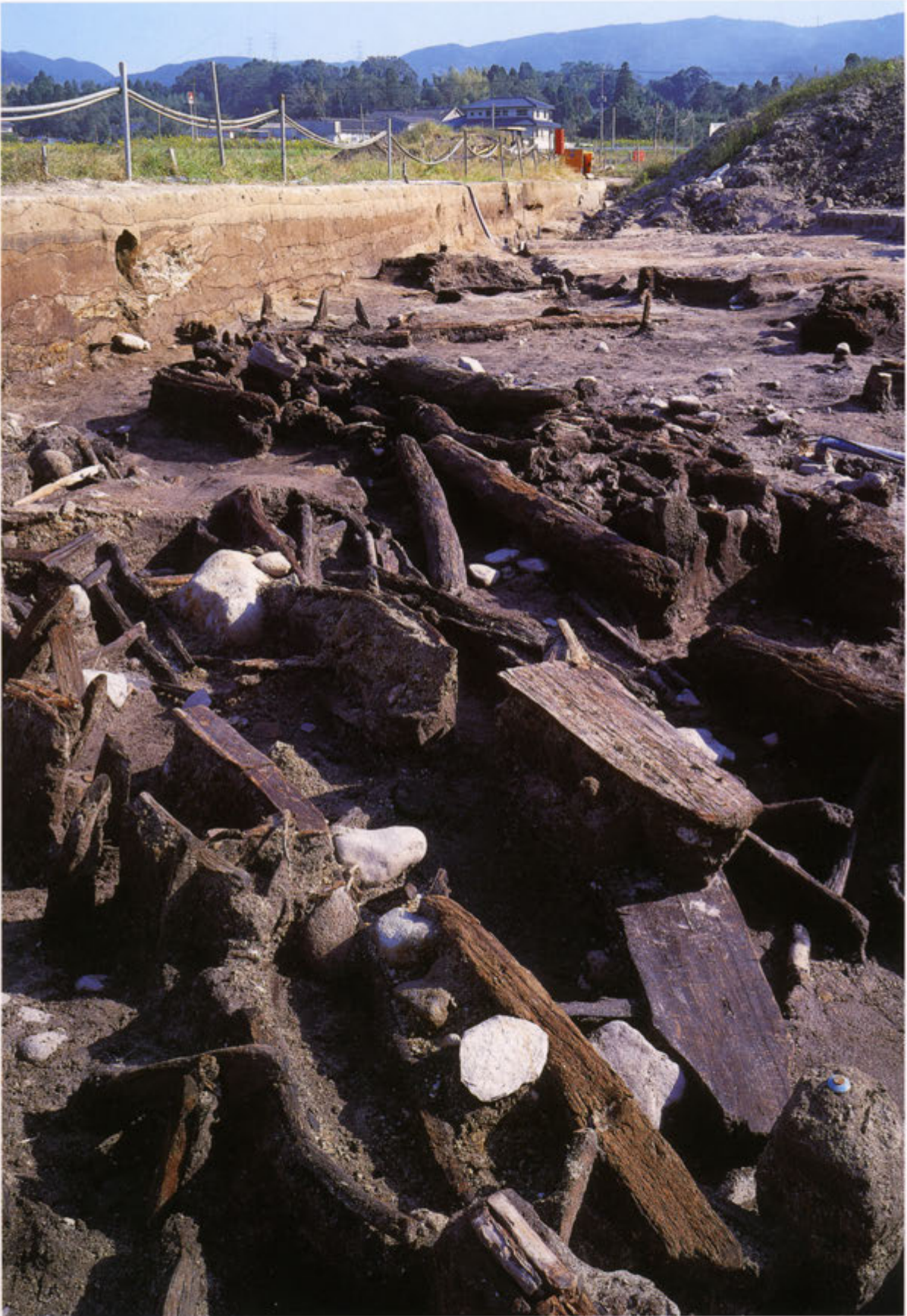
—九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書VI—

# 楠元・城下遺跡



2003年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



自然流路 1 木製品出土状況



楠元遺跡出土の木製品

## 序 文

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う発掘調査は、西鹿児島駅緊急整備事業に伴う調査として平成5年に開始しましたが、諸般の事情で中断をし、平成8年度から再開しました。

建設計画地内の遺跡は鹿児島市から出水市まで21か所であり、関係機関との協議により、事前の記録保存調査を実施し、平成13年5月に全ての調査が終了しました。

本報告書は21か所の遺跡のうち川内市に所在する楠元遺跡・城下遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。

楠元遺跡は縄文時代、弥生時代、古代・中世・近世の複合遺跡です。特に弥生時代の木製品が県内で初めてまとまって出土し、稲作を始めた人々の生活を知る上で重要な発見となりました。

楠元遺跡に居住した人々の縄文時代から近世までの多くの遺物は、当時の生活を偲ばせます。ここにその調査成果をまとめました。本報告書が県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただく一助となれば幸いです。

発刊にあたり、日本鉄道建設公団九州新幹線建設局をはじめ、ご協力をいただいた川内市の関係部局、関係諸機関、そして、調査に参加された方々に対し、厚くお礼を申し上げます。

平成15年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

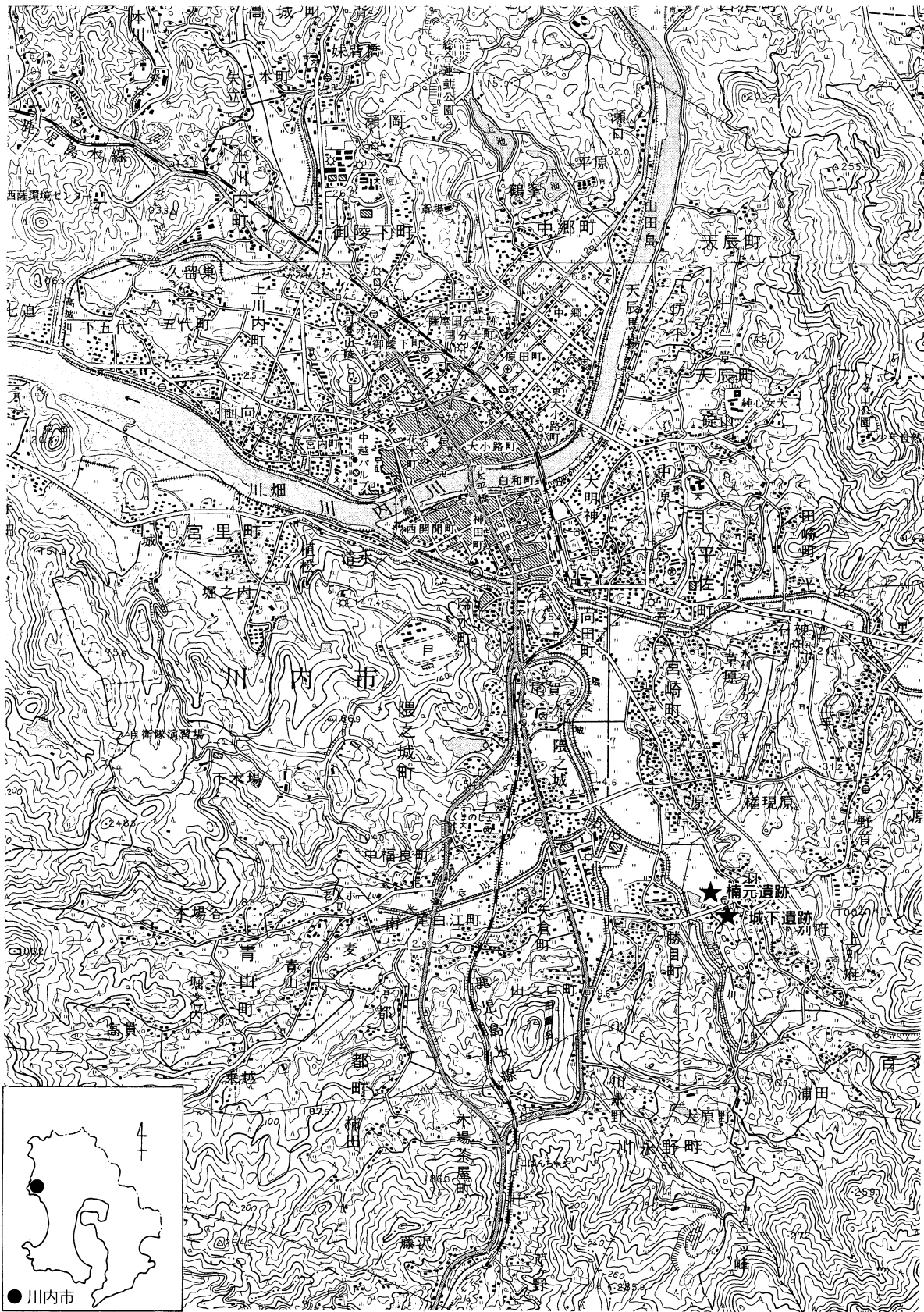
所 長 井 上 明 文

## 報告書抄録

ふりがな	くすもといせき							
書名	楠元遺跡							
副書名	九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第Ⅵ集							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	57							
編著者名	川口雅之・山元真美子・加藤ゆかり・東和幸・長崎慎太郎							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査起因
		市町村	遺跡番号					
くすもといせき 楠元遺跡	鹿児島県川内 市百次町楠元	462021	6-124	31° 47'	130° 19' 42"	19990506 ～ 19991108	790㎡	九州新幹線 鹿児島ルー ト建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
楠元遺跡	遺物散 布地	縄文時代後期		市来式土器・北久根山式 土器・鐘崎式土器・西平 式土器・スクレーパー・ 石斧・礫器・磨石・敲石・ 石皿				
	集落跡	弥生時代終末 ～古墳時代初 頭	竪穴住居跡2 軒・屋外炉2 基・土坑10基・ 溝状遺構2条・ 自然流路1条	中津野式土器・石斧・木 製品（曲柄鍬・丸木弓・ 容器など）				
		古墳時代	自然流路1条	壺・高坏				
		古代・中世	自然流路3条 溝状遺構3条 集石遺構1基	土師器・白磁				
		近世	溝状遺構1条 自然流路1条	薩摩焼・磁器・染付			パンケース 220箱	

## 報告書抄録

ふりがな	しろしたいせき							
書名	城下遺跡							
副書名	九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第Ⅵ集							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	57							
編著者名	川口雅之・加藤ゆかり・山元真美子							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査起因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
<small>しろしたいせき</small> 城下遺跡	鹿児島県川内市百次町城下	462021	6-199	31° 46' 56"	130° 19' 42"	19990902 ～ 19991206	470㎡	九州新幹線 鹿児島ルート建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
城下遺跡	遺物散布地	古墳時代・平安時代前期  中世  近世		土師器・須恵器  土師器・青磁・陶器・白磁  薩摩焼・平佐焼・伊万里焼・ガラス製品・ふいごの羽口・金属製品・土錘・古銭			パンケース 15箱	



遺跡位置図 (1 : 5000)

## 例 言

1. 本報告書は、平成11年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが日本鉄道建設公団九州新幹線建設局の受託事業として実施した九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書に用いたレベル数値は、海拔絶対高に基づく。
3. 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・図版の番号は一致する。
4. 遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局 監修）2001年度版に従った。
5. 本報告における執筆分担は以下の通り  
第1章（川口）  
楠元遺跡  
第1章 第1・2節（川口）  
第3節 弥生時代の遺構（川口）・縄文土器（加藤）・石器（東）・弥生土器（山元）・木製品（川口）・古代・中世・近世の調査成果（川口）  
第3章（川口）  
第4章（川口・加藤・山元）  
城下遺跡（川口）
6. 本報告書に掲載した遺物の縮尺はそれぞれの挿図内に提示してある。竪穴住居跡が60分の1、屋外炉・土坑が30分の1、溝状遺構が40分の1を原則とする。土器・土師器・陶器・染付は3分の1、石鏃・スクレーパーなどの剥片石器が5分の4、礫器・磨石が3分の1、木製品が4分の1、鉄製品が2分の1を原則とする。
7. 遺物の実測・製図のうち、土器の一部と石器を九州文化財研究所、木製品を埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
8. 本報告に使用した写真図版のうち、発掘調査の撮影は前田・川口が行い、遺物撮影については鶴田静彦・福永修一・横手浩二郎が行った。
9. 縄文土器は鹿児島大学助教授本田道輝氏、弥生土器は同大学助教授中村直子氏の指導を受けた。木製品については東京都立大学助教授山田昌久氏、陶磁器については坊津町教育委員会橋口亘氏の指導を受けた。
10. 木製品の樹種同定については鹿児島大学講師寺床勝也氏に依頼した。
11. 遺跡周辺の地形については鹿児島大学教授森脇広氏の指導を受けた。
12. 楠元遺跡のプラントオパール分析・花粉分析・放射性炭素年代測定・種子同定分析・DNA分析・樹種同定分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、分析結果を第2章に掲載した。
13. 木製品・金属製品の保存処理、顔料の分析については鹿児島県立埋蔵文化財センター永瀆功治が行った。
14. 出土した遺物は報告書作成後、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し活用する予定である。



# 目次

第1章 発掘調査の経過	
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の概要と調査経過	3
第4節 報告書作成業務の経緯	8
第5節 九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財調査の概要	9
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	12
第2節 歴史的環境	13
<b>楠元遺跡</b>	
第1章 発掘調査の成果	
第1節 発掘調査の方法	21
第2節 遺跡の層位	22
第3節 発掘調査の成果	26
1 縄文時代の調査成果	26
2 弥生時代から古墳時代初頭の調査成果	98
3 古墳時代の調査成果	214
4 古代の調査成果	215
5 中世の調査成果	219
6 近世の調査成果	221
第2章 同定・分析	
第1節 楠元遺跡出土土器に付着した赤色顔料について	227
第2節 楠元遺跡の自然科学分析報告(H11)	228
第3節 楠元遺跡の自然科学分析報告(H14)	251
第4節 楠元遺跡の出土種子の分析結果について(H14)	257
第3章 遺跡の残存状況	262
第4章 発掘調査のまとめ	263

## 城下遺跡

第1章 発掘調査の概要	
第1節 発掘調査の方法	323
第2節 遺跡の層位	324
第3節 発掘調査の成果	324
1 古墳時代の出土遺物	324
2 古代の出土遺物	324
3 中世の出土遺物	327
4 近世の出土遺物	329
第2章 遺跡の残存状況	336
第3章 発掘調査のまとめ	336

# 表目次

第1表 九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財調査の概要	9
第2表 周辺の遺跡一覧表	17
<b>楠元遺跡</b>	
第3表 円盤形土製品観察表	65
第4表 縄文土器観察表	66~72
第5表 石器観察表	95~97
第6表 1号竪穴住居跡柱穴計測表	103
第7表 2号竪穴住居跡柱穴計測表	106
第8表 1号竪穴住居跡出土土器観察表	109
第9表 2号竪穴住居跡出土土器観察表	110
第10表 1号竪穴住居跡出土石器観察表	110
第11表 2号竪穴住居跡出土石器観察表	110
第12表 炉跡1出土土器観察表	116~117
第13表 炉跡1出土石器観察表	117
第14表 炉跡2出土土器観察表	117
第15表 土抗1出土土器観察表	120
第16表 土抗出土石器観察表	124
第17表 溝状遺構1出土土器観察表	124
第18表 自然流路1出土土器観察表	172~176
第19表 自然流路1出土石器観察表	177
第20表 自然流路1出土木製品観察表	178~181

第21表	分類別弥生土器出土一覧表	194
第22表	溝状遺構2出土土器観察表	206~209
第23表	溝状遺構出土石器観察表	209
第24表	溝状遺構2出土木製品観察表	210~211
第25表	自然流路2出土遺物観察表	214
第26表	自然流路3出土遺物観察表	217
第27表	自然流路4出土遺物観察表	217
第28表	溝状遺構3遺物観察表	221
第29表	溝状遺構4・5観察表	221
第30表	自然流路5出土遺物観察表	221
第31表	自然流路6出土遺物観察表	224
第32表	溝状遺構6遺物観察表	224

### 同定・分析

第33表	試料の一覧及び分析試料	228
------	-------------	-----

第34表	放射性炭素年代分析結果	231
第35表	珪藻分析結果	232
第36表	花粉分析結果	235
第37表	植物珪酸体分析結果	236
第38表	種実同定結果	238
第39表	試料表一覧及び分析試料	239
第40表	放射性炭素年代測定結果	252
第41表	種実同定結果	253
第42表	試料一覧	257
第43表	遺跡一覧表	265
第44表	木製品出土遺跡	269

### 城下遺跡

第1表	出土古銭観察表	333
第2表	出土土器観察表	333~335

## 挿図目次

第1図	楠元遺跡トレンチ配置図 1	4
第2図	楠元遺跡トレンチ配置図 2	5
第3図	遺跡の位置及び周辺遺跡図	16

### 楠元遺跡

第4図	グリッド配置図	21
第5図	土層柱状模式図	22
第6図	土層断面図	23
第7図	遺構配置図	27
第8図	縄文後期土器出土状況	29
第9図	縄文土器分類模式図(1)	30
第10図	縄文土器分類模式図(2)	31
第11図	縄文土器分類模式図(3)	32
第12図	縄文土器分類模式図(4)	33
第13図	縄文土器 I類	35
第14図	縄文土器 IIa類(1)	36
第15図	縄文土器 IIa類(2)	37
第16図	縄文土器 IIb-1類(1)	39
第17図	縄文土器 IIb-1類(2)	40
第18図	縄文土器 IIb-1類(3)・IIb-2類(1)	41
第19図	縄文土器 IIb-2類(2)	43
第20図	縄文土器 IIb-2類(3)	44
第21図	縄文土器 IIb-2類(4)	45
第22図	縄文土器 IIb-2類(5)・V類(1)	46
第23図	縄文土器 IIc類	48
第24図	縄文土器 IId類(1)	49
第25図	縄文土器 IId類(2)	50

第26図	縄文土器 III類	52
第27図	縄文土器 IV類・V類(2)・VI類(1)	54
第28図	縄文土器 VI類(2)	55
第29図	縄文土器 VII類	56
第30図	縄文土器 VIII類・IX類	58
第31図	縄文土器 X類	59
第32図	縄文土器 XI類	60
第33図	縄文土器 底部I・II類	61
第34図	縄文土器 台付皿形土器(1)	62
第35図	縄文土器 台付皿形土器(2)	63
第36図	縄文土器 台付皿形土器脚部	64
第37図	縄文土器 円盤形土製品	65
第38図	縄文土器 (早期~晩期)	73
第39図	出土石器 1	75
第40図	出土石器 2	76
第41図	出土石器 3	78
第42図	出土石器 4	79
第43図	出土石器 5	80
第44図	出土石器 6	81
第45図	出土石器 7	82
第46図	出土石器 8	83
第47図	出土石器 9	84
第48図	出土石器 10	85
第49図	出土石器 11	86
第50図	出土石器 12	87
第51図	出土石器 13	88
第52図	出土石器 14	89

第53図	出土石器 15	90	第99図	抗列2 (1)	154
第54図	出土石器 16	91	第100図	抗列3 (2)	155
第55図	出土石器 17	92	第101図	抗列3 (1)	157
第56図	出土石器 18	93	第102図	抗列3 (2)	158
第57図	出土石器 19	94	第103図	抗列4 (1)	159
第58図	弥生時代終末～古墳時代初頭遺構配置図	99	第104図	抗列4 (2)	160
第59図	弥生土器分類模式図 1	100	第105図	抗列5	161
第60図	弥生土器分類模式図 2	101	第106図	自然流路1 出土木製品 (1)	163
第61図	1号竪穴住居跡	102	第107図	自然流路1 出土木製品 (2)	164
第62図	1号竪穴住居跡出土土器	103	第108図	自然流路1 出土木製品 (3)	165
第63図	1号竪穴住居跡出土石器 (1)	104	第109図	自然流路1 出土木製品 (4)	166
第64図	1号竪穴住居跡出土石器 (2)	105	第110図	自然流路1 出土木製品 (5)	167
第65図	2号竪穴住居跡	106	第111図	自然流路1 出土木製品 (6)	168
第66図	2号竪穴住居跡出土土器	107	第112図	自然流路1 出土木製品 (7)	169
第67図	2号竪穴住居跡出土石器 (1)	108	第113図	自然流路1 出土木製品 (8)	170
第68図	2号竪穴住居跡出土石器 (2)	109	第114図	自然流路1 出土木製品 (9)	171
第69図	炉跡1	112	第115図	溝状遺構2	183
第70図	炉跡1 出土土器 (1)	113	第116図	溝状遺構2 出土土器 (1)	186
第71図	炉跡1 出土土器 (2)	114	第117図	溝状遺構2 出土土器 (2)	187
第72図	炉跡1 出土石器	115	第118図	溝状遺構2 出土土器 (3)	188
第73図	炉跡2及び出土遺物	116	第119図	溝状遺構2 出土土器 (4)	190
第74図	土坑1遺物出土状況	118	第120図	溝状遺構2 出土土器 (5)	191
第75図	土坑1 出土土器	119	第121図	溝状遺構2 出土土器 (6)	192
第76図	土坑1・土坑7 出土石器	121	第122図	溝状遺構2 出土土器 (7)	193
第77図	土坑2～10	123	第123図	溝状遺構2 出土石器 (1)	195
第78図	溝状遺構1及び出土遺物	125	第124図	溝状遺構2 出土石器 (2)	196
第79図	自然流路1	128	第125図	溝状遺構2 出土石器 (3)	197
第80図	自然流路1 出土土器 (1)	131	第126図	溝状遺構2内杭 (1)	199
第81図	自然流路1 出土土器 (2)	132	第127図	溝状遺構2内杭 (2)	200
第82図	自然流路1 出土土器 (3)	133	第128図	溝状遺構2内杭 (3)	201
第83図	自然流路1 出土土器 (4)	134	第129図	溝状遺構2内杭 (4)	202
第84図	自然流路1 出土土器 (5)	135	第130図	溝状遺構2内杭 (5)	203
第85図	自然流路1 出土土器 (6)	136	第131図	溝状遺構2 出土木製品 (1)	204
第86図	自然流路1 出土土器 (7)	139	第132図	溝状遺構2 出土木製品 (2)	205
第87図	自然流路1 出土土器 (8)	140	第133図	A-12・13区出土石器・木製品	212
第88図	自然流路1 出土土器 (9)	141	第134図	1地点遺構配置図	213
第89図	自然流路1 出土土器 (10)	142	第135図	自然流路2・出土遺物	214
第90図	自然流路1 出土土器 (11)	143	第136図	自然流路3・出土遺物	215
第91図	自然流路1 出土石器 (1)	145	第137図	自然流路4 出土遺物	215
第92図	自然流路1 出土石器 (2)	146	第138図	自然流路3 集石遺構	216
第93図	自然流路1 出土石器 (3)	147	第139図	集石遺構	218
第94図	自然流路1 出土石器 (4)	148	第140図	溝状遺構4・5 出土遺物	219
第95図	自然流路1 出土石器 (5)	149	第141図	自然流路5 出土遺物	219
第96図	自然流路1 出土石器 (6)	150	第142図	溝状遺構3及び出土遺物	220
第97図	自然流路1 出土石器 (7)	151	第143図	溝状遺構4・5	222
第98図	自然流路1 出土石器 (8)	152	第144図	自然流路6 出土遺物	224

第145図	溝状遺構6 出土遺物	224
第146図	溝状遺構6・自然流路6	225
第147図	模式柱状図及び分析層位	229
第148図	主要珪藻化石群衆の層位分布	234
第149図	主要花粉化石群衆の層位分布	236
第150図	植物珪酸体群衆の層位分布	237
第151図	遺跡の残存状況図	262

### 城下遺跡

第1図	グリッド配置図	323
-----	---------	-----

第2図	基本土層柱状模式図	324
第3図	土層断面図	325
第4図	古墳時代・古代の出土遺物	326
第5図	中世の出土遺物(1)	327
第6図	中世の出土遺物(2)	328
第7図	近世の出土遺物(1)	330
第8図	近世の出土遺物(2)	331
第9図	出土古銭	332
第10図	遺跡の残存範囲	336

## 図版目次

### 楠元遺跡

図版1	楠元遺跡航空写真	273
図版2	上 調査前風景	274
	下左 3地点土層断面	
	下右 2地点土層断面	
図版3	台付皿	275
図版4	上 縄文土器出土状況	276
	下 1号竪穴住居跡	
図版5	上 2号竪穴住居	277
	下左 2号竪穴住居跡土坑	
	下右 台石出土状況	
図版6	上 炉跡1	278
	下左 炉跡1炭化層・焼土	
	下右 炉跡1土器出土状況(No 578)	
図版7	上左 杭列1出土状況(自然流路1)	279
	上右 杭列5出土状況(自然流路1)	
	下左 曲柄又鍬出土状況	
	下右 曲柄又鍬未製品出土状況	
図版8	上左 農具未製品出土状況(自然流路1)	280
	上右 ひょうたん出土状況(自然流路1)	
	中 溝状遺構2遺物出土状況	
	下左 木製品出土状況(溝状遺構2)	
	下右 曲柄平鍬出土状況(溝状遺構2)	
図版9	上左 溝状遺構2完掘	281
	上右 杭出土状況(溝状遺構2)	
	下 溝状遺構2土層	
図版10	上 A-11~12区樹根出土状況(弥生~古墳)	282
	下 石組遺構(古代)	
図版11	上 溝状遺構3(中世)	283
	下左 作業風景(自然流路1掘り下げ)	
	下右 作業風景(木製品取り上げ)	
図版12	上 溝状遺構6	284

### 下 溝状遺構6石列

図版13	縄文土器 1	285
図版14	縄文土器 2	286
図版15	縄文土器 3	287
図版16	縄文土器 4	288
図版17	縄文土器 5	289
図版18	縄文土器 6	290
図版19	縄文土器 7	291
図版20	縄文土器 8	292
図版21	縄文土器 9	293
図版22	縄文土器 10	294
図版23	縄文土器 11	295
図版24	縄文土器 12	296
図版25	縄文土器 13	297
図版26	出土石器 1	298
図版27	出土石器 2	299
図版28	出土石器 3	300
図版29	出土石器 4	301
図版30	出土石器 5	302
図版31	出土石器 6	303
図版32	出土石器 7	304
図版33	出土石器 8	305
図版34	出土石器 9	306
図版35	出土石器 10	307
図版36	出土石器 11	308
図版37	出土石器 12	309
図版38	出土石器 13	310
図版39	自然流路1 甕	311
図版40	自然流路1 壺	312
図版41	自然流路1・溝状遺構2 出土土器(甕・壺)	313
図版42	上左 溝状遺構2 壺	314
	上右 自然流路2 壺	

中	溝状遺構2 小型丸底壺	
下	自然流路1・溝状遺構2出土土器(匙状土製品他)	
図版43	自然流路1・溝状遺構2出土土器(鉢・高坏)	315
図版44	上 曲柄鍬	316
下	曲柄鍬・横鍬	
図版45	上 農具未製品	317
下左	鍬の柄	
下右	丸木弓	
図版46	上 掘り棒	318
下	用途不明木製品	
図版47	上左 容器	319
上右	ひょうたん	
下	建築材・用途不明木製品	
図版48	上左 用途不明木製品	320

上右	建築材の可能性のある木製品
下	加工のある杭(溝状遺構1)

### 城下遺跡

図版1	上 土層断面図	339
下	3トレンチ遺物出土状況	
図版2	上 遺物出土状況	340
下	作業状況	
図版3	出土遺物(1)	341
図版4	出土遺物(2)	342
図版5	上 出土遺物(3)	343
下	出土遺物(4)	
図版6	上 出土遺物(5)	344
下	出土遺物(6)	

# 第1章 発掘調査の経過

## 第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会文化課（以下県文化課）は、埋蔵文化財の保護・活用を図るため、工事着手前に当該事業区内における埋蔵文化財の有無、およびその取り扱いについて各開発関係機関と協議し諸開発との調整を行っている。

日本鉄道建設公団九州新幹線建設局は、九州新幹線鹿児島ルート建設を計画し、事業予定区の埋蔵文化財の有無について、県文化課（平成8年4月以降文化財課）に照会した。それを受けて県文化課は、平成4年12月に事業予定地内の分布調査を実施し、楠元・城下遺跡を含む21か所の遺跡を確認した。同年、西鹿児島駅舎建設予定地にある武遺跡については、遺跡の確認・全面調査が行われた。

その後、日本鉄道建設公団九州新幹線建設局、県教育庁文化財課、県立埋蔵文化財センターの三者で遺跡の取り扱いについて協議を行い、平成8年度から平成10年度にかけて用地取得等条件の整った遺跡から確認調査を行うと共に、川内市大原野遺跡、前畑遺跡の全面調査を行った。さらに、確認調査の結果を受けて平成11年度から平成13年度にかけて本格的な全面調査が実施された。

確認調査は鹿児島県教育委員会が日本鉄道建設公団からの受託事業として実施し、発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが行った。

楠元・城下遺跡の確認調査は平成10年9月17日～30日、平成10年11月4日～24日の2回に分けて行った(実働23日)。確認調査で多くの遺構・遺物が確認されたために、楠元遺跡の全面調査を平成11年5月6日～同年11月8日(実働110日)、城下遺跡の全面調査を平成11年9月2日～同年12月6日(実働36日)に行った。

## 第2節 調査の組織

### 1 確認調査の組織（平成10年度）

事業主体	日本鉄道建設公団九州新幹線建設局		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長 吉永 和人
調査企画者	〃	次長兼総務課長	尾崎 進
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋
	〃	課長補佐兼第一調査係長	新東 晃一
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	立神 次郎
発掘調査担当者	〃	主任文化財主事	彌榮 久志
	〃	文化財主事	前田 誠
調査事務担当者	〃	主 事	前屋敷裕徳
	〃	主 事	政倉 孝弘

## 2 全面調査の組織（平成11年度）

事業主体	日本鉄道建設公団九州新幹線建設局		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	吉永 和人
調査企画者	"	次長兼総務課長	黒木 友幸
	"	主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋
	"	課長補佐兼第一調査係長	新東 晃一
	"	主任文化財主事兼第二調査係長	立神 次郎
	"	主任文化財主事	彌榮 久志
発掘調査担当者	"	文化財主事	前田 誠
	"	文化財調査員	川口 雅之
調査事務担当者	"	主 事	今村孝一郎
	"	主 事	溜池 圭子
現地指導	鹿児島大学	教 授	上村 俊雄
	"	教 授	森脇 広
	"	助 教 授	本田 道輝
	"	助 教 授	中村 直子
	東京都立大学	助 教 授	山田 昌久

## 3 報告書作成事業の組織（平成14年度）

事業主体者	日本鉄道建設公団九州新幹線建設局		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
調査企画調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井上 明文
調査企画者	"	次長兼総務課長	田中 文雄
	"	調 査 課 長	新東 晃一
	"	課 長 補 佐	立神 次郎
	"	主任文化財主事兼第二調査係長	彌榮 久志
担 当 者	"	文化財研究員	川口 雅之
	"	文化財調査員	加藤ゆかり
	"	文化財調査員	山元真美子
調査事務担当	"	総 務 係 長	前田 昭信
	"	主 査	脇田 清幸
	"	主 事	池 珠美
現地指導	鹿児島大学	助 教 授	本田 道輝
	"	助 教 授	中村 直子
	"	講 師	寺床 勝也

### 第3節 調査の概要と調査経過

#### 1 確認調査の概要

楠元・城下遺跡の確認調査は平成10年9月17日～30日、同年11月4日～24日に実施した。以下各遺跡ごとに概略を述べる。

##### 楠元遺跡（第1図）

楠元遺跡の確認調査は合計10か所のトレンチを設定して実施した。北側の1トレンチでは遺物包含層は確認されなかった。また、2トレンチの北側は削平されていたことから全面調査の北限を2トレンチまでとし、南限については古墳時代の樹木が多く残っていた6トレンチまでとした。7～10トレンチでは自然木が少量出土したのみで遺構・遺物は確認されなかった。10トレンチについては橋脚工事の必要性が生じたため、トレンチを拡張して橋脚部分の全面調査を行った。2・3トレンチでは自然流路・屋外炉跡が検出され、4～6トレンチでは弥生時代から古墳時代を中心とする多量の遺物が出土した。特に6トレンチでは古墳時代の樹木が良好な状態で残っておりトレンチを拡張して調査を行った。しかし、湧水が多く土層の堆積が複雑であったことや、13区～18区までが未買収であったことなども関連して、各トレンチ間の土層の対応関係や遺物包含層の時期特定、遺構と遺物の出土状況などが検討されないまま全面調査へと移行した。このことは、全面調査に大きな支障をきたすこととなった。

##### 城下遺跡（第2図）

用地買収の遅れや、調査工程の都合により、トレンチを設定し掘り下げることができたのは調査区の北端に位置する1トレンチと2トレンチの2か所のみであった。調査の結果、2枚の遺物包含層が確認され、古代から近世の土師器、陶磁器類が出土した。また、IV層上面で溝状遺構の可能性のある落ち込みを検出した。

平成10年度の確認調査によって遺跡の様相を知ることができたのは北端の一部であった。当初、城下遺跡の調査対象面積は3,300㎡であり、正確な全面調査範囲を確定するための確認調査及び、全面調査は平成11年度に実施した。

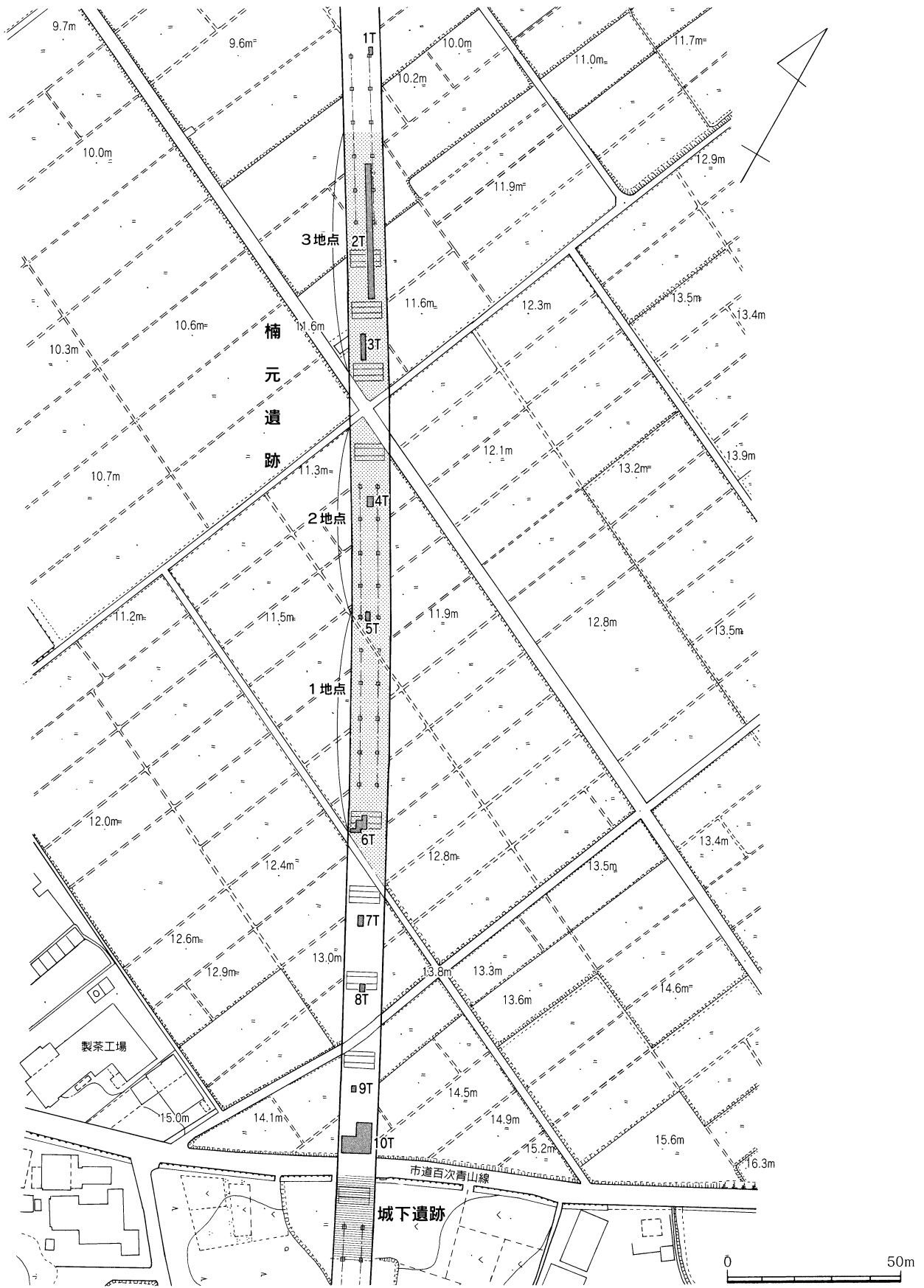
#### 2 全面調査の概要

楠元遺跡の全面調査は平成11年5月6日～11月8日、城下遺跡の調査は同年9月2日～12月6日に行った。以下各遺跡の調査について概略を述べる。

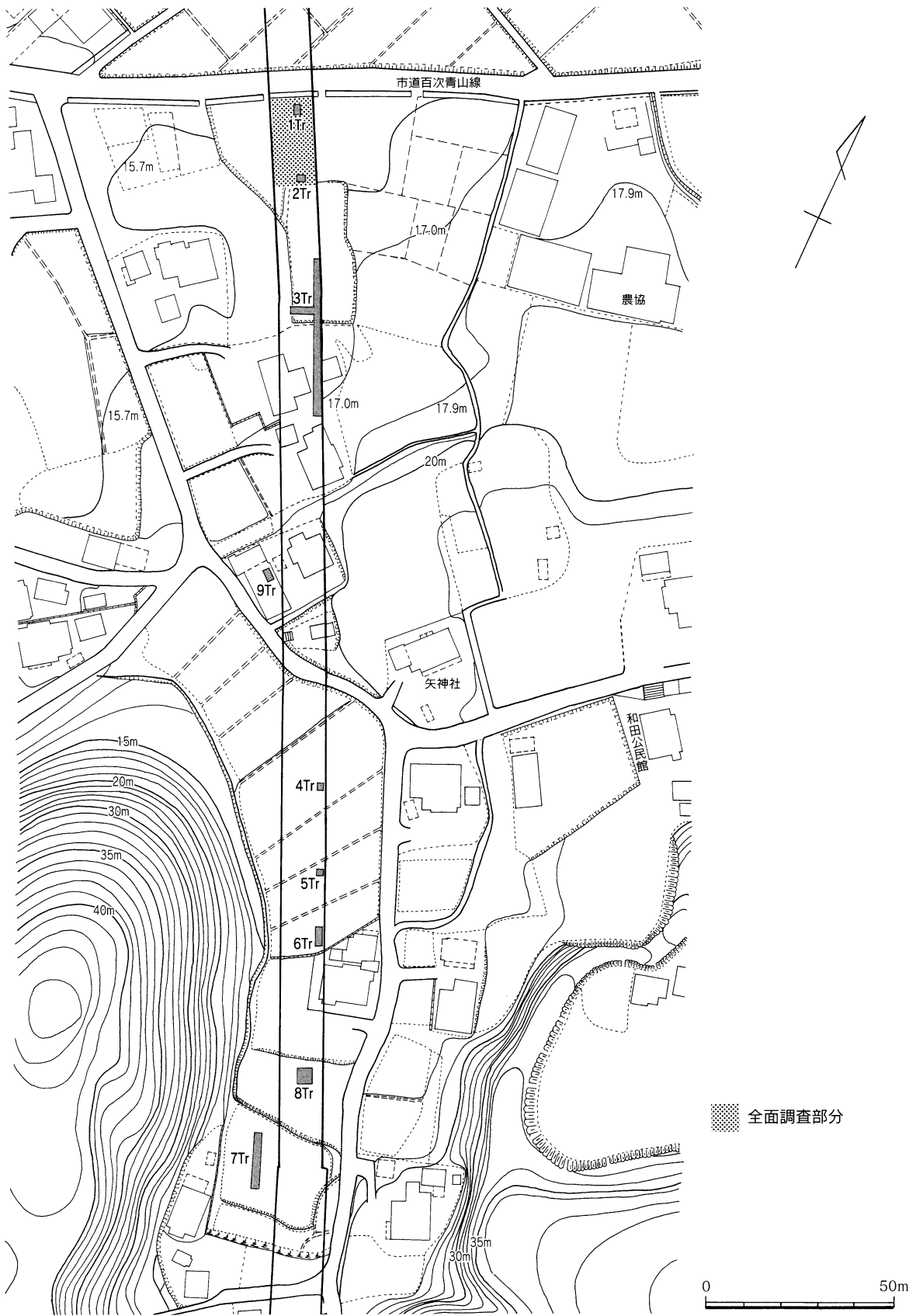
##### 楠元遺跡（第1図）

調査区は現道によって3地区にわかれており、南から1地点、2地点、3地点と呼称して調査を行った。現道部分は周辺住民の農業用道路であり、橋脚の高架部分になることから調査範囲から除外した。発掘調査は橋脚工事の都合により3地点の南部と2地点から開始した。3地点の調査中に工事工程が急きょ変更し1地点の調査を開始することとなった。2地点では予想以上に大量の木製品・土器が出土し、調査期間の延長が必要となり、8月4日に日本鉄道建設公団九州新幹線建設局と協議を行った。協議の結果、当初7月31日であった調査終了日が10月31日に変更となった。1地点の調査終了後、調査途中であった3地点の調査を





第1図 楠元遺跡トレンチ配置図 (1 : 1600)



第2図 城下遺跡トレンチ配置図 (1:1500)

行い、最後に2地点の調査を行った。調査時に未買収地が残っていたことや、開発部局との調整が十分になされなかったことから調査地点が虫食い状態に分かれ発掘調査が難航した。このことは、確認調査からの課題であった各地点の土層の堆積状況の把握や遺構検出を困難なものとした。さらに、調査期間が農繁期と重なり水田の水が調査区に集中して流れ込んだことから、水田が干上がってしまう問題が起きた。このような問題点は確認調査と全面調査の担当者間で十分な打ち合わせが行われなかったことが大きな原因の1つである。今後、沖積平野に立地する遺跡の調査方法、調査期間などについては十分に検討する必要がある。

## 城下遺跡（第2図）

城下遺跡の調査は、9月2日から開始した。平成10年度の確認調査が不十分であったので、まず遺跡の範囲を把握するための確認調査を楠元遺跡の全面調査、上野城跡の確認調査と並行して行った。平成10年度に調査を行った地点より南側に7本の確認トレンチを設定し調査を行った。トレンチを設定した地点は、シラス台地の縁辺部に形成された谷部に立地し、現在は水田として利用されていた。谷底に位置する4～8トレンチは、3m以上掘り下げても基盤層まで到達することはできなかった。また、3トレンチの南側はシラス台地の末端部にあたるが削平のために遺構は検出されなかった。各トレンチの調査の結果、3トレンチより南側は遺構が存在せず、遺物の出土が希薄なことから全面調査は2トレンチより以北を中心に行った。全面調査は、楠元遺跡の調査終了を待って11月10日から開始した。後半は、上野城跡の全面調査と並行して調査を行い12月6日に調査を終了した。

楠元・城下遺跡の調査経過は日誌抄により以下略述する。

## 平成11年度

### 5月6日（木）～5月28日（金）

**楠元遺跡** 楠元遺跡発掘作業開始。発掘機材搬入。A B-12・13区、19・20区の表土を重機で剥ぎ、グリッド杭を設定する。A B-10～13区Ⅲ層を掘り下げ自然木を検出する。用水路設置部分を先行して調査を行う。A B-19区で近世の溝状遺構6を検出後、掘り下げ、写真撮影、図面作成を行う。3地点の表土剥ぎを行う。梅雨に入り室内作業が増える。

### 6月1日（火）～7月2日（金）

**楠元遺跡** 1地点を掘り下げ木材の検出を行う。雨が多く作業がはかどらない。3地点のI c層から市来式土器、中津野式土器が大量に出土し、平板実測で取り上げを行う。確認トレンチで検出されていた屋外炉の写真撮影を行う。II層上面で遺構検出を行い、自然流路3・溝状遺構3を掘り下げる。6月17日に自然流路3の調査方法について担当者間で検討した結果、遺物を1mメッシュを設定し取り上げ、周辺の遺構検出を行う。1地点の未買収地（A B-15～18区）にトレンチを設定し遺物包含層の状況を確認する。A B-20～24区（2地点）の表土剥ぎを行いII層以下を掘り下げ。溝状遺構6、自然流路6を完掘し図面作成を行う。

### 7月5日（月）～7月28日（水）

**楠元遺跡** 1地点の未買収地（A B-13～18区）に先行トレンチを設定し掘り下げ、遺

物包含層を確認する。2地点（AB-20～23区）のⅣ層上面まで表土を剥いた後掘り下げを行う。木製品大量に出土し、7月9日横楾が出土する。3地点の遺構精査を行う。住居跡や土坑などを検出し、写真撮影後掘り下げを行う。

#### 8月2日（月）～9月3日（金）

**楠元遺跡** 1地点（AB-14～18区）のⅢ層、Ⅳ層の掘り下げを開始。AB-17・18区周辺で市来式土器がまとまって出土し実測を行う。2地点（AB-21・22区）に先行トレンチを設定し遺物の出土状況を確認する。3地点の住居跡、土坑の掘り下げ、実測、航空写真撮影を行う。台風接近のために土手の補強や排水溝の整備を行う。8月4日に日本鉄道建設公団と楠元遺跡・城下遺跡・上野城跡の調査日程について協議を行う。楠元遺跡の調査期間については10月31日までの延長が決定する。8月3・4日に鹿児島大学本田道輝助教授、中村直子助教授の現地指導を受ける。8月11日鹿児島大学上村俊雄教授の現地指導を受ける。8月26日鹿児島大学森脇広教授の指導を受ける。8月24日南日本新聞社園田記者の取材を受ける。雨天が多く作業がはかどらない。

**城下遺跡** 9月2日発掘調査開始。雑草を払い境界杭を探す。重機で3トレンチ（2×40m）の表土剥ぎを行う。

#### 9月6日（月）～10月1日（金）

**楠元遺跡** 1地点AB-17・18区の市来式土器取り上げ。1地点の自然流路2、掘り下げ。2地点の溝状遺構2出土木製品実測、取り上げ。3地点の遺構調査終了後、埋め戻しを行う。上野城跡の確認調査を行う。台風によりプレハブ、仮設トイレ損壊のため復旧作業を行う。雨が多く作業がほとんどできなかった。

**城下遺跡** 3トレンチⅠb・Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。近世の遺物が出土し、写真撮影・平板実測を行う。Ⅳ層上面で遺構精査を行う。遺構は確認されず。

#### 10月4日（月）～10月28日（金）

**楠元遺跡** 1地点（AB-13区）の樹根、木製品の図面作成、取り上げ。土層断面図作成。2地点溝状遺構2、自然流路1の木製品実測、取り上げ。

**城下遺跡** 3トレンチ拡張区Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。遺物取り上げ後、遺構精査を行う。3トレンチ東壁沿いに下層確認トレンチを設定し掘り下げる。遺構、遺物は検出されず。遺跡の南側への広がりを調べるために確認調査開始。4～6トレンチを設定し、表土を重機で剥ぎⅡ層を掘り下げる。

#### 11月1日（月）～12月6日（月）

**楠元遺跡** 2地点（AB-21・22区）溝状遺構2遺物取り上げ、実測終了。11月8日楠元遺跡の調査終了。

**城下遺跡** 上野城跡の全面調査開始のために2か所に分かれて作業を行う。3～6トレンチ遺物取り上げ、写真撮影。新たに7トレンチを設定し掘り下げ開始。3～7トレンチ土層断面実測、写真撮影後埋め戻し。確認調査が終了し全面調査開始。A・B-1～3区表土剥ぎを行い、Ⅱ・Ⅲ層を掘り下げる。A・B-1～3区、Ⅳ層上面で遺構精査。北壁、東西ベルト土層断面図作成。発掘機材を移動し、城下遺跡の調査終了。

## 第4節 報告書作成業務の経緯

### 1 報告書作成業務の経緯

楠元・城下遺跡の発掘調査報告書作成に伴う整理作業については、平成11年度の発掘調査中に、遺物の水洗・注記作業を並行して行い、本格的な整理作業を平成14年度に実施した。整理作業は鹿児島県立埋蔵文化財センターで平成14年4月～平成15年3月まで行った。

### 2 発掘調査および報告書作成業務従事者

#### (1) 発掘作業従事者

有川シヅエ 岩月幸朗 内田政美 小倉司郎 勝田良巳 木佐貫千秋 窪園和子 坂下キヨ子 坂下富夫 坂元明美 崎山晋太郎 崎山智富 下野弘子 白石ミツ子 高江幸子 竹添富士子 武元又男 竹本美代子 立野芳明 時任由美子 中城洋子 中野愛子 中園尚美 新原尚子 新原康子 濱瀬昭子 濱田作也 原喜三郎 前原ヒデ子 宮本里見 盛岡イクコ 森木幸子 山崎絹子 山崎恵子 若松育子

#### (2) 報告書作成従事者

市蘭厚子 稲満和子 岩切孝子 大田雅子 児玉恭子 田代祐子 原口節子 日高千津子 堀ノ内鈴子〈50音順〉



発掘作業員の皆さん



整理作業員の皆さん

## 第5節 九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財調査の概要

九州新幹線鹿児島ルートの発掘調査は、平成5年5月12日より鹿児島市武遺跡から開始し、平成13年5月30日川内市京田遺跡で全てを終了した。

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う発掘調査は、一覧表のとおりである。

第1表 九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財調査の概要（1）

番	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物
1	茶屋ノ元	出水市境町	H10.7.2~3 H11.3.2~4 計5日間	240㎡	彌榮久志 前田 誠	縄文早期 縄文前期	塞ノ神式、轟式、磨製石斧、黒曜石
2	鳥越平	出水市境町	H8.8.5 計1日間	55㎡	池畑耕一 中原一成	時期不明	包含層は確認されず。
3	鏡・安原	出水市安原町	H11.2.17,18 H11.2.24,25 H11.3.9 計5日間	60㎡	彌榮久志 前田 誠	縄文晩期 平安時代	研磨土器、黒曜石、土師器
4	榎木田 見入来 大坪	出水市美原町	H11.1.5~3.9 H11.5.6 ~12.3.31 H12.5.1 ~13.3.27 計420日間	27,247㎡	彌榮久志 前田 誠 濱崎一富 東 和幸 高岡和也 上床 真 森田裕之	縄文晩期 平安時代 鎌倉時代	縄文晩期埋設土器38基、平安期竈付竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡9棟、焼土遺構3基、溝状遺構30条、波板状遺構27条、上加世田式、入佐式、黒川式、土師器、須恵器、玉縁白磁滑石製石鍋、刻書土器鉄製品、石鏃、磨製石斧、打製土掘り具石匙、石皿、磨石、凹石、異形石器、玉類（勾玉6、管玉25、丸玉5、平玉3、垂飾品1、剥片46、未製品30）
5	宮野脇	出水市上鯖淵	H11.2.19 H12.2.20 計2日間	48㎡	彌榮久志 前田 誠 東 和幸	時代不明	包含層確認されず。
6	松ヶ迫	出水市武本	H8.8.6 計1日間	12,5㎡	池畑耕一 中原一成	時期不明	包含層確認されず。
7	小松	出水市武本	H10.7.8~10 計3日間	108㎡	彌榮久志 前田 誠	縄文早期	土器、黒曜石
8	前畑	川内市城上町	H9.11.1 ~H10.3.31 H10.5.6 ~H10.12.24 H11.12.13 ~H12.2.24 計195日間	11,800㎡	長野眞一 上床 真 彌榮久志 前田 誠 宮田栄二 平木場秀男	旧石器時代 縄文早期 縄文前期 縄文後期 中世 近世	土坑(陥し穴含)25基、集石4基、竪穴状遺構1基、五輪塔、大型掘立柱建物跡7軒、ナイフ形石器、細石刃核、吉田式、石坂式、轟式、石鏃、石斧、石皿、磨石、敲石、土師器、青磁、白磁、染付薩摩焼

第1表 九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財調査の概要(2)

番	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物
9	計志加里	川内市中郷町	H11.7.1~8.27 H12.5.23 ~H13.3.26 計218日間	5,900㎡	宮田栄二 平木場秀男 樋渡将太郎	縄文早期 縄文後期 縄文晩期 弥生時代 古墳時代 平安時代 中世	竪穴住居1軒, 掘立柱建物跡5棟, 土坑墓3基, 円形溝状遺構1基, 土坑5基, 中世掘立柱建物跡2棟, 古道, 溝状遺構, 早期押型文土器, 曾畑土器, 磨製石鏃, 打製石斧, 錐, ピエス, スクレイパー, 磨石石皿, 石匙, 石鏃, 砥石, 土師器, 須恵器, 瓦, 青磁, 白磁, 滑石製品, 刀子, 青銅製品, 紡錘車
10	京田 (薩摩国分寺下)	川内市中郷町	H11.6.1~20 H12.5.8~6.6 H12.9.4 ~H13.3.24 H13.4.9~5.31 計191日間	5,900㎡	宮田栄二 上之園健二 平木場秀男 川口雅之 徳田有希乃 樋渡将太郎	弥生中期 平安時代 中世 近世	弥生期水田跡, 土留め状遺構, 杭列, ウケ跡, ドングリピット, 古代水田跡, 弥生土器, 三又鍬, 二又鍬, 大足, 一本梯子, 横架材, 網杵, 曲物, 土師器, 須恵器
11	原田・大島	川内市東大小路町	H10.11.26 H11.5.6 ~H12.3.24 H12.5.7 ~H13.3.19 計275日間	1,960㎡	宮田栄二 平木場秀男 樋渡将太郎	縄文晩期 弥生中期 古墳時代 平安時代 中世	弥生期竪穴住居跡4軒, 土坑1基, 古墳期竪穴住居跡1軒, 平安期竪穴住居跡31軒(竈付2軒), 掘立柱建物跡2棟, 土坑墓1, 中世竪穴住居跡1軒, 掘立柱建物跡1棟, 畠跡, 弥生期甕・壺, 石包丁, 磨製石鏃, 古墳期成川式, 須恵器, 大刀, 鉄鏃, 平安期土師器, 須恵器, 瓦, 越州窯青磁, 緑釉, 陶器, 転用硯, 帯金具, 石製丸柄, 玉類, 土錘, 金環, 青銅製鈴, 鉄製品
12	鍛冶屋馬場 春田	川内市平佐町	H10.11.25 H11.9.1~9.27 H12.5.9~6.15 H12.9.1 ~12.27 計103日間	2,850㎡	彌榮久志 前田 誠 宮田栄二 平木場秀男 川口雅之 徳田有希乃	古代 中世 近世	古代鍛冶炉6基, 土坑2基, 竪穴住居跡1軒, 掘立柱建物跡4棟, 畠跡, 炉跡7基, 越州窯系青磁, 陶器壺, 土師器, 鉄滓, 古銭, 中世青磁, 鉄製品(鎌, 鋤先, 紡錘車, 鉄鏃), 近世薩摩焼, 平佐焼, 伊万里焼, 土師器, 羽口, 鉄滓
13	楠元 城下	川内市百次町	H10.9.17~30 H10.11.4~24 H11.9.2~12.6 H11.5.6~11.8 計209日間	1,800㎡	彌榮久志 前田 誠 川口雅之	縄文後期 弥生 古墳	弥生~古墳期竪穴住居跡2軒, 炉跡2基, 土坑10基, 溝7条, 縄文早期押形文・市来式・西平式・北久根山式, 弥生~古墳時代の土器, 木製平鍬, 又鍬横鍬, 鍬の柄, 掘り棒, 丸木弓, 容器, 櫛状木製品
14	上野城跡	川内市百次町	H11.12.1 ~3.24 H12.5.1 ~H13.3.29 計316日間	19,400㎡	前田 誠 川口雅之 前野潤一郎 切通雅子 徳田有希乃 彌榮久志	旧石器 縄文 古墳 中世	中世掘立柱建物跡30棟, 土坑墓3基, 方形竪穴建物跡5軒, 溝4条, 古道1条, 畠跡剥片先頭器, ナイフ形石器, 押形文, 石坂式, 阿高式, 土師器, 石皿, 敲石, 凹石, 石鏃, 土師器, 須恵器, 白磁青磁, 短刀, 古銭, 滑石製石鍋, 中世陶器, 鉄鏃

第1表 九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財調査の概要（3）

番	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物
15	大原野	川内市百次町 浦田	H8.10.1～29 H9.11.1 ～H10.3.31 計171日間	2,815㎡	青崎和憲 中原一成 長野眞一 国生 誠 上床 真	旧石器 縄文早期 縄文前期	ナイフ形石器, 細石器, 吉田式, 石坂式 条痕土器, 轟式, 石鏃, 石皿, 磨石, 敲 石, 石斧
16	東下原	日置郡東市来 町養母	H10.10.27～29 H10.12.1～18 H11.3.12 計20日間	248㎡	彌榮久志 前田 誠	旧石器 縄文早期 古墳 古代	古代焼土付土坑, 細石刃核, 成川式, 土師器
17	上ノ平	日置郡伊集院 町下神殿四区	H11.2.26 H11.10.1～25 H12.11.14 ～H13.3.29 計92日間	2,328㎡	彌榮久志 前田 誠 上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道	旧石器 縄文後期 中世	縄文竪穴住居跡5軒, 集石4基, 中世溝1 条, 細石刃核, 指宿式, 磨製石斧, 石鏃
18	山ノ脇 石坂 西原	日置郡伊集院 町郡	H11.5.6～24 H11.6.4～30 H11.11.1 ～H12.3.24 H12.5.1 ～11.13 計184日間	1,900㎡	上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文草創期 縄文早期 縄文中期 古墳 中世	集石(草創期1基, 早期3基, 中期3基)中 世溝, 農具埋納土坑, 掘立柱建物跡12棟 縄文早期土器, 船元式, 成川式, 土師器 陶磁器(中国南部), 滑石製石鍋
19	梅落	日置郡伊集院 町郡	H11.5.19～21 H11.6.14～17 H12.6.19 ～7.14 計24日間	340㎡	上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文早期	集石, 塞之神式, スクレイパー
20	尾崎	鹿児島市	発掘調査せず				遺跡は工事に触れず残存
21	武ABC	鹿児島市武一 丁目	H5.4.12～5.25 H5.5.21～7.2 H5.12.6 ～H6.2.21 H6.3.9～30	9,104㎡	彌榮久志 倉元良文 鶴田静彦	縄文前期 縄文中期 弥生中期	古墳住居跡27軒, 土坑18基, 溝2条ピッ ト30, 近世溝9条, 轟式, 深浦式, 春日式 船元式, 山之口式, 成川式,
22	寿国寺跡	鹿児島市武二 丁目	H11.5.24 ～6.11 H11.7.1～9.28 H12.5.8～6.13 計175日間		上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	近世	陶器, 磁器, 瓦, 木製品, 金属製品, 寿国寺跡のはん池(門前池)跡。
23	前市野原	串木野市	H10.12.15 計1日間	22㎡	彌榮久志 前田 誠	時期不明	追加調査で挿入。 包含層は確認されず。



## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

#### 1 川内市の地形

川内市は薩摩半島の北西部北緯31度49分、経度は東経130度19分に位置している。東シナ海に面し、川内川を有する川内市は、古代以来陸上・水産交通の要所であり、北薩地方の経済、商業の中心地である。川内市の地形的特徴は、三方を山地で囲まれた盆地状の地形をなし、その中央部に熊本県白髪岳に源を発し、九州でも有数の長流である川内川とその支流によって形成された沖積平野が広がる。この平野は川内平野、川内盆地と呼ばれ、山地・台地が多く平野の少ない南九州において、大口盆地、出水平野、肝属平野などと肩を並べる穀倉地帯である。行政的には北及び北東は紫尾山（標高1067m）に続く出水山地で阿久根市・東郷町と、東は上床山地で樋脇町と、南は東西に連なる冠岳山地と高江山地を境に串木野市と接し、これらの山地は川内川が注ぐ東シナ海側に開けている。山地の麓には、盆地の北側から東側にかけて権現原台地や国分寺台地などの標高20～30m程の低いシラス台地が発達し宅地や畑地として利用されている。台地の縁辺部にはシラス台地特有の浸食谷が複雑に発達し、急崖をなして沖積平野へと移行する。標高が低く平野に面しているこれらの台地上では薩摩国分寺跡など多くの重要な遺跡が発見されている。平野の中央部を、九州でも有数の長流である川内川が西流し東シナ海に注いでいる。川内川は白和町付近で大きく西に流れを変え、その両岸には天辰町から高江町にかけて長さ約8kmに渡って自然堤防が形成されている。自然堤防が最も発達した大小路町、向田町周辺は現在の川内市街地の中心部である。近年の発掘調査によって、多くの遺跡が存在することが明らかとなり、古代以来、人々の活動の中心地であったことをうかがわせる。川内川は、河口付近で大きく川幅を広げ、その両岸には川内砂丘が発達し、川内市の特徴的な地形の一つとなっている。

川内川によって形成された大小路町、向田町付近の沖積平野の周辺には、北から高城川、高江川、平佐川、隈之城川などの支流によって、狭小な谷底平野が発達している。その中の1つに隈之城町、宮崎町、百次町に広がる隈之城平野がある。平野は、川内市の南部に位置し、東を権現原台地、西を高江山地から延びる平ノ山などの平坦な台地に挟まれ南北に細長く（平野の幅は約800m）川内川方向に開けている。この平野を網流状に流れる百次川、勝目川、木場谷川は、合流して隈之城川となり、さらに下流で平佐川と合流して川内川へと注いでいる。これらの河川によって形成された隈之城平野は、川内市の中でも有数の米所であり、平野を望む周辺の台地には旧石器時代から近世にかけての多くの遺跡が発見されている。遺跡の多くは、隈之城平野の開発の歴史と相まって営まれてきたと考えられ、楠元・城下遺跡もその中の1つである。

#### (1) 楠元遺跡の周辺地形（第3図）

遺跡は川内市百次町楠元に所在し、JR鹿児島本線川内駅の南約3.4kmの位置にある。遺跡は隈之城平野の東端にあたる山間部よりに立地し、遺跡の約250m西を流れる百次川によ

って形成された小扇状地に立地している。調査区周辺の標高は11m程で台地から百次川に向かって緩やかに傾斜している。調査区周辺は東側のシラス台地側から延びる扇状地礫層堆積以前に形成された台地が存在し地形に起伏がみられる。台地の土層には扇状地礫層が、さらにその上位にはフラッドローム層が堆積し、ここの低地をつくる堆積物の基本構成となっている。台地を中心に微高地が形成され、その周辺に広がる扇状地礫層からは伏流水が豊富に湧き出ている。このような地理的特徴は遺跡の形成にも大きく影響しており、特に弥生時代においては、微高地上に居住域がその周辺の低地部には自然流路や溝跡が検出され当時の土地利用のあり方を考える上で重要である。調査区における地形については第3章2節で詳しく述べる。

## (2) 城下遺跡

遺跡は川内市百次町城下に所在し、JR鹿児島本線川内駅の南約3.6kmの位置にある。遺跡は権現原台地の南部に形成された浸食谷に隣接するシラス台地の末端部に位置し、台地が緩やかに傾斜をしながら扇状地へと移行する標高15m程の傾斜面に立地する。地形は南から北、つまり台地から平野へ緩やかに傾斜していくが、調査区の西側半分は谷部にあたるために西側へ落ちている。遺構検出面の地形は、後方の台地より供給されたシラスの2次堆積によって形成されている。調査区周辺における地形の傾斜はシラス堆積以前の礫層の地形に影響を受けていると思われる。

## 第2節 歴史的環境

肥沃な川内平野を有し、交通の要所でもあった川内市は古代以来、政治、文化、経済の中心地であった。川内という地名は、古代において薩摩国の設置に伴い薩摩国府が置かれた地域が川内川の内側にあるから「川内」、対岸に属する地域を「川外」と呼んだことに由来するといわれ、本県における奈良時代・平安時代の歴史を知る上で欠かすことのできない地域である。また、それだけでなく楠元町馬立遺跡において県内で初めて旧石器時代の尖頭器が発見され、本県における旧石器時代研究の出発点となった地域でもある。近年の発掘調査では、中福良町成岡遺跡、百次町上野城跡から剥片尖頭器、ナイフ形石器、細石刃などが発見され、川内平野における資料の蓄積が進みつつある。

縄文時代になると、西海岸沿いを介した交流の活発さを示す遺物が多くの遺跡で発見されている。川内平野において縄文時代の中心を担う時期は後期である。分布調査でも多くの遺跡が発見されており最も華やかな時期である。1987年に調査が行われた陽成町麦之浦貝塚では、在地の土器である市来式土器に伴って、鐘崎式土器や骨角器（かんざし、垂飾品）が発見された。貝塚に接して検出された土坑墓にはサメ歯で作られた耳飾りが副葬されており縄文時代の墓制を考える上で重要な発見となった。1999年に調査が行われた楠元遺跡でも多くの市来式土器に伴って北久根山式土器、鐘崎式土器が出土した。遺構は検出されなかったものの、多くの石器が出土し、平野部における遺跡の様相が明らかとなった。縄文時代晩期になると遺跡数は減少する。2001年に調査が行われた城上町計志加里遺跡では黒川式土器や晩期の壺形土器

が出土しており、弥生時代を担う人々の存在を確認することができる。

弥生時代前期は五代町若宮遺跡で石包丁、石鎌が採集されているのみで、弥生時代の開始期における遺跡はほとんどみつかっていない。川内地域において、遺跡数が増加してくるのは中期後半以降である。五代町外川江遺跡では後期の内向花文鏡が、麦之浦貝塚では後漢鏡片が出土し、弥生時代においても重要な地域であったことがうかがえる。百次町楠元遺跡では、終末頃の河川跡や溝跡から多くの木製品が出土し注目された。2002年に調査が行われた中郷町京田遺跡では、中期後半頃の水田跡や川跡に伴って多くの木製品が出土した。これらの数少ない平野部の調査は川内地域における稲作の広がりを示すだけでなく、南九州における稲作文化の解明に繋がる重要な発見となった。

古墳時代の川内地域は、川内川流域を中心に分布する在地性の強い地下式板石積石室墓と畿内系の高塚古墳が重複する地域である。上川内町横岡古墳では7基の地下式板石積石室墓が発見された。石室には鉄剣・刀子・鉄鎌・銅製鞘口などが副葬されていた。高塚古墳としては前方後円墳の可能性のある端稜、円墳の可能性のある安養寺丘古墳・船間島古墳などがあり、御釣場古墳・若宮古墳からは石棺が出土している。また、中福良町成岡遺跡では堅穴住居跡が19棟、麦之浦貝塚では16棟の堅穴住居跡がみついている。

大宝元年（701年）大宝律令が制定され、これにより中央・地方の官制が規定された。それを受けて翌702年には薩摩国府が御領町・国分寺町に広がる台地上に置かれた。また、奈良時代末には、薩摩国府に隣接する形で薩摩国分寺が建立され、薩摩国における政治、文化の中心地となった。1968～1970年の発掘調査によって国分寺跡の寺域や、伽藍配置などが明らかとなり、国分寺創建時の瓦を焼いた鶴峯窯跡の発掘調査も行われた。2002年に調査が行われた京田遺跡は、薩摩国分寺跡に隣接する低湿地に立地している。調査では、告知札と呼ばれる木簡が県内で初めて出土し、古代の地方行政のあり方や、土地支配を考える上で重要な発見となった。国分寺台地から谷を1つ挟んだ台地上に立地する計志加里遺跡では、方形周溝墓や、古道が発見され、薩摩国府・国分寺跡との関係が注目される。また、川内川北岸の自然堤防上に立地する大島遺跡では、多くの堅穴住居跡が発見され、高城郡の中心部を構成する集落の様相が明らかとなった。薩摩郡と呼ばれた川内川以南に目を移すと、中福良町西ノ平遺跡では多数の掘立柱建物跡が検出され薩摩郡の郡衙に比定されている。西ノ平遺跡の眼前に広がる隈之城平野は、条里制に関わる地名が残っていることから、条里地割が復元されている。大島遺跡の対岸に立地する鍛冶屋馬場遺跡では鍛冶炉が発見され多くの鉄製品が出土した。このように、川内平野全域で多くの遺跡の調査が行われ、様々な視点での社会復元が可能となった。

鎌倉時代から室町時代にかけては、島津氏、渋谷氏などの下向してきた鎌倉武士に、在地領主である武光、薩摩氏を加え川内は領地支配をめぐる争いが絶えることがなかった。これらの諸氏は南北朝の動乱を挟んで激しく争い、それに伴って多くの山城が築かれた。1999～2000年に上野氏の居城である上野城跡の調査が行われた。調査の結果、多くの掘立柱建物跡や方形堅穴建物跡、土坑墓などが発見され中世山城の解明に繋がることが期待される。これらの争乱は戦国時代末期の元亀元年（1570年）に島津氏による三州統一と同時に終息を向かえる。その後、天正15年（1587年）豊臣秀吉の島津氏追討に伴い、平佐城において激しい戦いが繰り

広げられた。この戦いは、豊臣側と島津側の和睦によって終わりを向かえ、大小路町太平寺には和睦石が残されている。このような争乱の歴史も川内の地理的な重要性を示しているといえる。

江戸時代には薩摩藩のもとで、商業が発達した。その中心地は向田町で、水陸交通の要衝として賑わった。天明年間（1781～1788年）には、北郷家の家臣伊地知団右衛門李甫が天辰町に磁器窯を開いた。焼かれた磁器は平佐焼と呼ばれ、県内各地に流通するほど隆盛を誇った。近年、新窯の調査によって窯の形態や作業小屋、石垣の存在が明らかとなっている。また、近世、近代において鍛冶も盛んに行われており、天辰町吉原遺跡、平佐町鍛冶屋馬場遺跡では鍛冶に関連する遺構が検出されている。川内川は平佐焼や鍛冶に関わる原料の搬入、製品の搬出にも積極的に利用され、商業だけでなく工業の発展にも大きな役割を担っていたのである。

#### 参考文献

- 鹿児島県教育委員会『薩摩国府・国分寺跡』1975  
鹿児島県教育委員会『成岡・西ノ平・上ノ原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（28）1983  
鹿児島県教育委員会『外川江遺跡 横岡古墳』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（30）1984  
川内市教育委員会『麦之浦貝塚』1987  
川内市教育委員会『川内市文化財基礎調査報告書（埋蔵文化財）』川内市埋蔵文化財報告書（2）1992  
鹿児島県教育委員会『計志加里遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書（38）2002  
鹿児島県教育委員会『鍛冶屋馬場遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書（39）2002  
川内郷土史編さん会『川内市史 上巻』1976  
川内市歴史資料館『川内市文化財要覧』1985  
河口貞徳『日本の古代遺跡』38鹿児島 保育社 1988



第3図 遺跡の位置及び周辺遺跡図 (1:25000)

第2表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺構・遺物	備考
1	原口	田原町原口・外園	台地	縄文～江戸	土器, 須恵器, 染付	
2	大明原	田崎町大明原	台地	縄文～江戸	土器, 染付, 石鏃	
3	喜入原	平佐町喜入	台地	縄文～江戸	土器, 須恵器, 染付	
4	平佐城	平佐町藤崎・庵ノ城・寄持	丘陵	鎌倉～戦国		空堀跡, 土塁跡
5	田中原	陽成町田中原	河岸段丘	鎌倉～室町	土器, 青磁, 白磁	
6	石神城	永利町石神	丘陵	不詳		堀切跡
7	赤殿原	宮崎町赤殿原	微高地	古墳～室町	土器, 土師器	
8	石神原B	永利町石神原	台地	古墳～室町	土器, 須恵器, 青磁	
9	若宮北	永利町西永崎・東永崎ほか	台地	縄文～室町	土器, 須恵器, 青磁, 石鏃	
10	若宮南	永利町若宮前・大堀ほか	台地	縄文～室町	土器, 須恵器, 青磁, 石鏃	
11	宮崎北原	宮崎町出居原・下原ほか	台地	古墳～室町	土器, 須恵器, 陶器	
12	瀬戸口	宮崎町瀬戸口	台地下	縄文～平安	土器, 土師器, 石鏃	
13	赤殿原	宮崎町赤殿原	微高地	古墳～室町	土器, 土師器	
14	赤沢津	宮崎町赤沢津	微高地	縄文～古墳	並木式土器, 須恵器, 石斧	
15	日暮丘	向田町鉢本・諏訪平ほか	丘陵	古墳～江戸	土器, 須恵器, 染付	
16	尾賀台	隈之城町尾賀原・古寺・後原ほか	丘陵	縄文～室町	土器, 須恵器, 染付, 石鏃	一部域貝塚
17	榕城	隈之城町尾賀	丘陵	不詳		堀切跡
18	池尻	隈之城町池尻	丘陵斜面	古墳	須恵器	
19	西ノ口	隈之城町西ノ口	台地	古墳	土器	
20	湯之谷	隈之城町湯之谷	丘陵	平安	土師器	
21	上ノ原	中福良町上ノ原	台地	縄文～戦国	土器, 須恵器, 青磁, 染付	昭和55年発掘調査
22	西ノ平	中福良町西ノ平	台地	旧石器～江戸	土器, 土師器, 青磁, (細石刃核)	昭和55年～59年発掘調査
23	成岡	中福良町成岡	台地	旧石器～江戸	土器, 須恵器, 青磁, (細石刃)	昭和55年～59年発掘調査
24	金剛院跡	中福良町石原		鎌倉		層塔, 宝塔
25	立石A	中福良町立石	丘陵	縄文～室町	土器, 内黒土師器, 青磁	

第2表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺構・遺物	備考
26	立石B	中福良町立石	丘陵	縄文～室町	土器, 石鏃, 黒曜石	
27	集	中福良町集	丘陵	縄文～室町	土器, 陶器, 黒曜石	
28	上中原	永利町上中原	台地	古墳～室町	土器, 土師器	
29	権現原	平佐町権現原	台地	古墳～室町	土器, 青磁, 染付	
30	鎮守原	宮崎町鎮守原	台地	古墳～室町	土器, 須恵器, 青磁	
31	宮崎南原	宮崎町大堀	台地	古墳～室町	土器, 須恵器, 青磁	
32	三本松	宮崎町三本松	台地	古墳～室町	土器, 内黒土師器, 陶器	
33	百次原	百次町六反・森原ほか	台地	古墳～室町	土器, 内黒土師器	
34	別府原	百次町別府原	台地	古墳～室町	土器, 須恵器, 青磁, 染付	
35	楠元	百次町楠元	平野	縄文～近世	土器, 木製品石斧, 石鏃, 磨石, 陶磁器	平成10～11年発掘調査
36	城下	百次町城下	台地末端部	縄文～近世	土器, 土師器, 須恵器陶磁器, 鉄製品	平成10～11年発掘調査
37	上野	百次町上野	台地	古墳～江戸	土器, 染付	上野城跡
38	上野氏三代の墓	百次町2383番地		鎌倉		宝塔, 五輪塔
39	大島	百次町大島	台地端	古墳～江戸	土器, 青磁, 染付	平成3年発掘調査
40	小城	勝目町小城	平地	不詳		消滅
41	楯城	勝目町楯	丘陵	不詳		「東ノ丸」・「東陣」などの字名あり
42	勝目原	勝目町楯・集・勝目道・白木原ほか	台地	古墳～江戸	土器, 須恵器, 青磁, 染付	
43	二福城	隈之城町城	丘陵	鎌倉～戦国		曲輪跡
44	矢倉城	矢倉町矢倉城	平地	不詳		消滅
45	山口原	山之口町山口原	台地	古墳～江戸	土器, 青磁, 染付	
46	四反畑	尾白江町四反畑	微高地	平安～室町	内黒土師器, 青磁, 染付	
47	瀬戸山	木場茶屋町瀬戸山	丘陵	古墳～江戸	土器, 須恵器, 青磁	
48	都城	都町都原	丘陵	不詳		空堀跡
49	都原	都町都原・山口	台地	平安～室町	内黒土師器, 青磁, 染付	
50	総徳城	都町麦・灰原・門前・屋敷田	丘陵	不詳		堀切り跡
51	霜月田	都町霜月田	台地	古墳～室町	土器, 青磁, 染付	

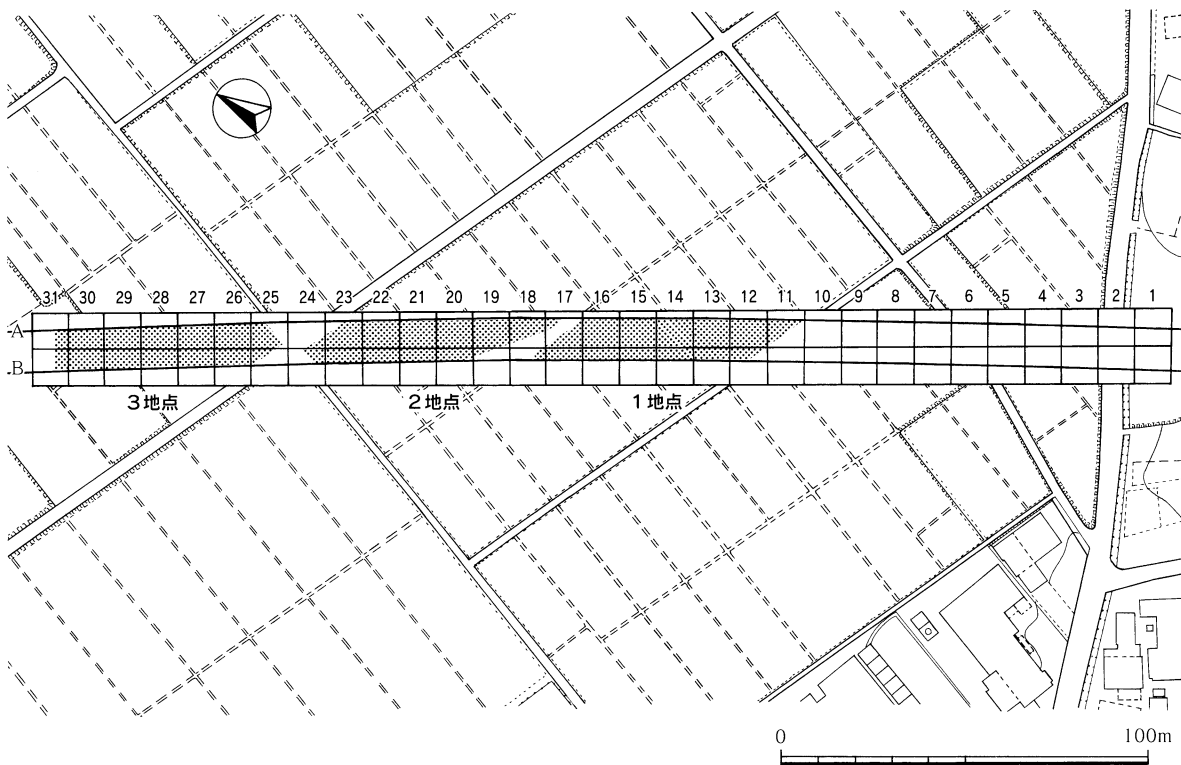
楠元遺跡



# 第1章 発掘調査の成果

## 第1節 発掘調査の方法

全面調査は確認調査の際に設定した10mグリッドをもとに実施した。(第4図)グリッドには調査区の南から東西にA・B、南北に1～31区の名を付し、このグリッドを基準に遺構実測、遺物の取り上げを行った。調査対象区であるA・B-11～31区は農道によって3つに分断されており、南から各調査区ごとに1地点、2地点、3地点と便宜的に呼称して調査を行った。発掘調査は重機で表土を除去した後、人力で遺物包含層を掘り下げ遺構検出を行った。掘削と並行して壁沿いに先行トレンチを設定し土層の堆積状況の把握に努めた。調査区の周囲が水田であるために湧水が多く、遺構調査の際には壁沿いに排水用の側溝を巡らせ、水中ポンプで24時間水を汲み出しながら調査を行った。しかし、土層の堆積状況が把握できないうちに掘削を行ったためにいくつかの遺構は適正な検出面で捉えることができなかった。2地点で大量に出土した木製品については、直射日光を避けるためにタオルで覆い休日も定期的に水をかけ乾燥を防ぎながら取り上げを行った。取り上げた木製品は現場で水洗し選別を行った後、PTS袋に真空パックを行い保管した。調査期間は梅雨と重なり、さらに平成11年度は雨天、台風が多い年であった。調査区周辺の水路から水が溢れ、排水が間に合わず調査区が水没し壁面が崩壊することが度々あり、層序の把握や遺構の調査を困難なものとした。発掘調査期間中はまさに水との戦いであった。



第4図 グリッド配置図(1:2000)  
1グリッドは10m×10m

## 第2節 遺跡の層位

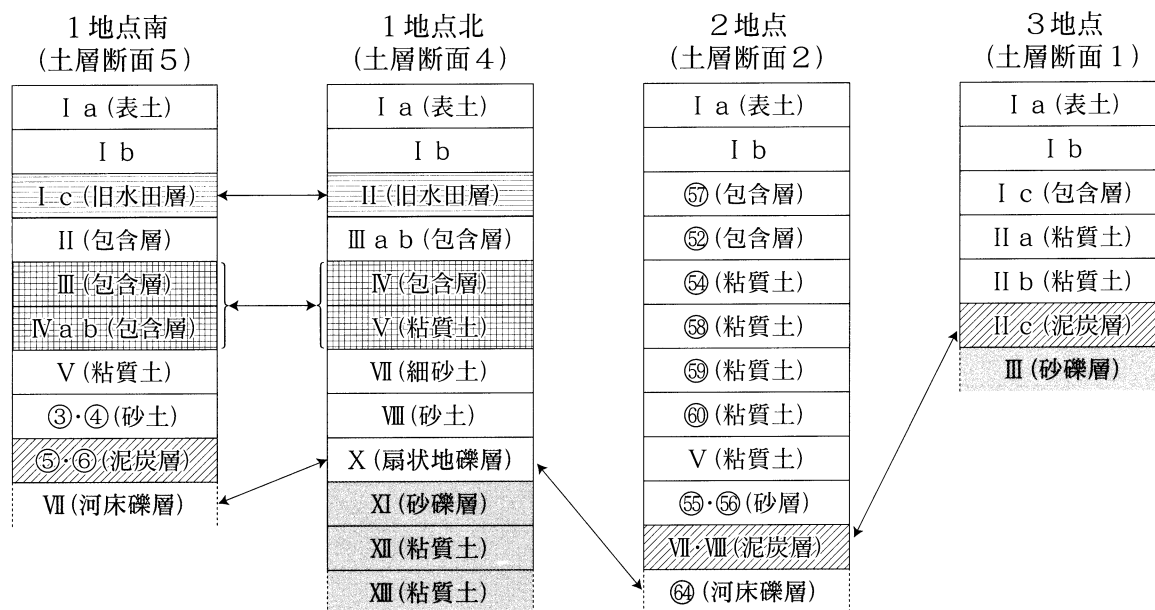
楠元遺跡の土層は各地点によって複雑に堆積している。調査地点によって基本土層が異なることからまず、遺跡全体の層序について触れた後に各地点の遺物包含層について説明を行う。

### 1 扇状地の成立に関わる土層 (第6図)

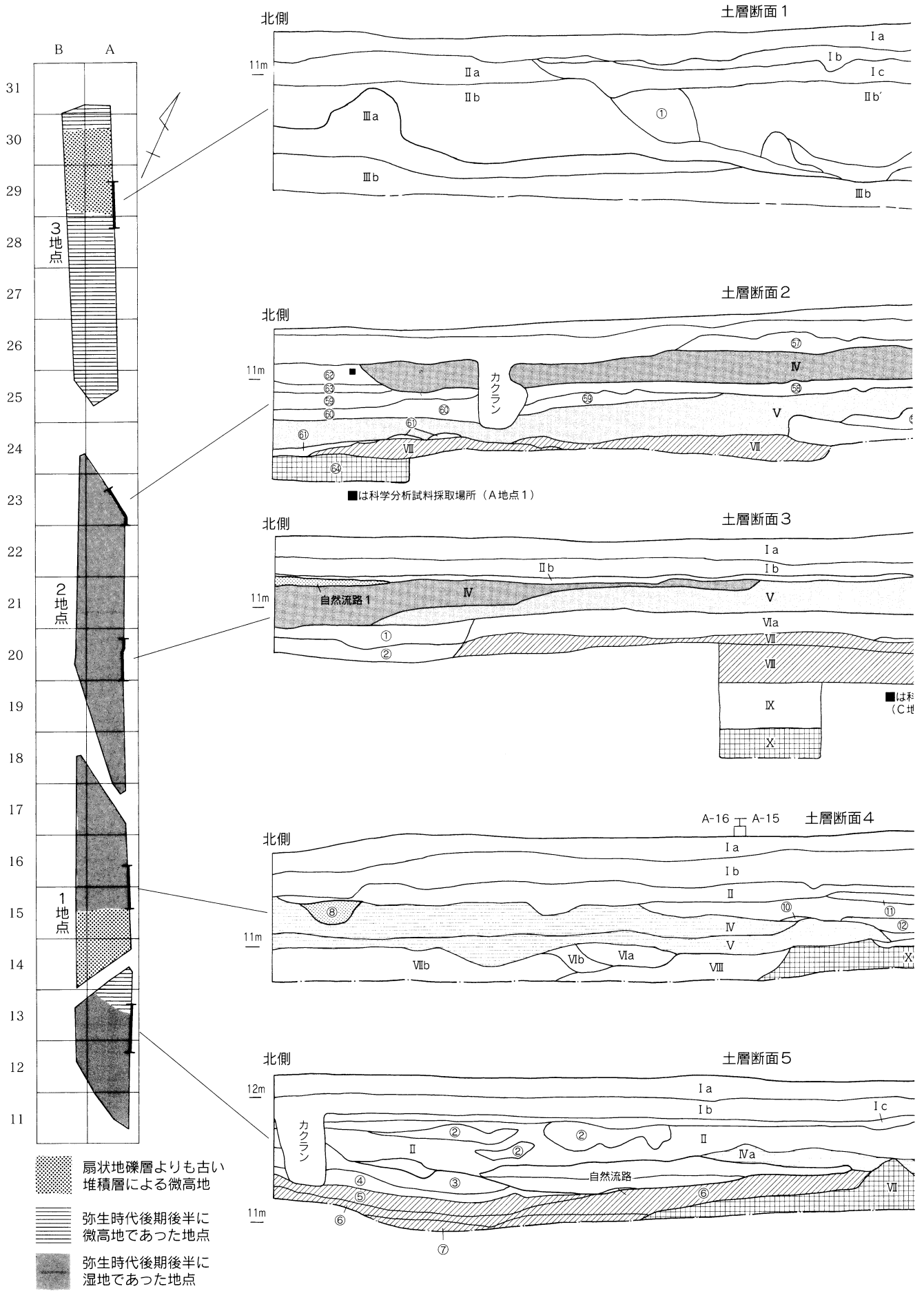
楠元遺跡の基盤層は、百次川によって運ばれた河床礫層 (土層断面4・X層) とそれよりも古い東側のシラス台地から延びる砂礫層 (土層断面1・Ⅲ層) からなる。砂礫層は3地点北側と1地点の中央部で低い微高地を形成しその周囲を扇状地礫層が取り巻くように堆積しており、調査区における地形の起伏はこの砂礫層の地形に起因していると考えられる。砂礫層と河床礫層の上面には、3地点の北部と1地点の中央部の微高地を除く調査区全域に泥炭層 (土層断面2・Ⅷ層) が堆積している。標高が低く河床礫層に覆われている1地点の北側から2地点にかけては泥炭層が流失している箇所がある。そのような場所は泥炭層上面に砂層のクロスラミナが複雑に発達しており流水の影響を強く受ける地点である。泥炭層の放射性炭素年代値は13080年±80年前でありこの時期に微高地を除く調査区周辺が静穏な環境下におかれたことが推測される。

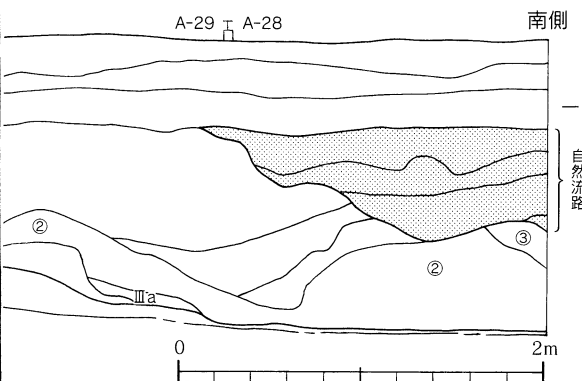
### 2 泥炭層以後の堆積 (第6図)

泥炭層より上位の堆積物は、3地点などの微高地と標高の低い2地点では大きく異なる。前者は主に百次川の氾濫によって供給されたと思われる厚い粘質土 (土層断面1・Ⅱ層) が安定して堆積しているのに対し、後者は粘質土と砂層が複雑に重なり、絶えず流水の影響を強く受けながら堆積したことがうかがえる。そのために、標高差のある2・3地点間と、特に流水の影響を強く受けた1・2地点間の土層の対応関係は明らかにすることができなかった。3地点では微高地が徐々に拡大していく状況が観察でき、特に弥生時代後期後半以降は大きな洪水層もないことか



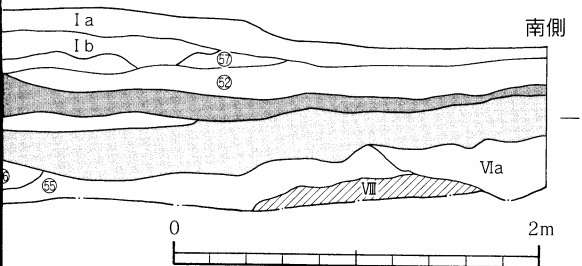
第5図 土層柱状模式図





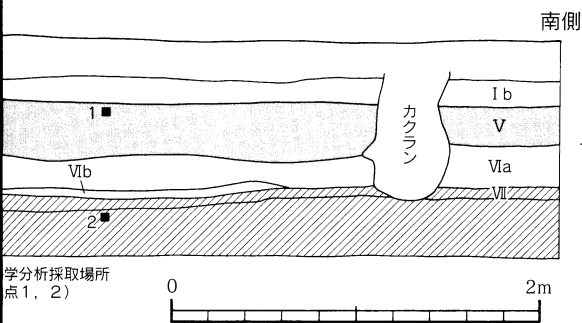
土層

- I a…表土
  - I b…灰色砂質土 現水田の基盤層
  - I c…灰褐色粘質土 縄文後期～中世までの遺物を含む。
  - II a…灰色粘質土 粘性が弱く鉄分を多く含む。
  - II b…淡灰色砂質土 1～2cmの軽石を多く含む。
  - II b'…淡灰色砂質土 砂粒を含まない。
  - III a…砂礫層 灰色粘質土に3～12cmの礫、粗砂を多く含む。
  - III b…灰色の粗砂土に2～10cmの礫を多く含む。
- Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層は土層断面4のⅡ層と対応。
- ①…灰色粘質土に3～10cmの円礫、角礫を多く含む。 ②…淡黄色粘質土
- ③…灰色粘質土 細砂を含むために粘性が弱い。



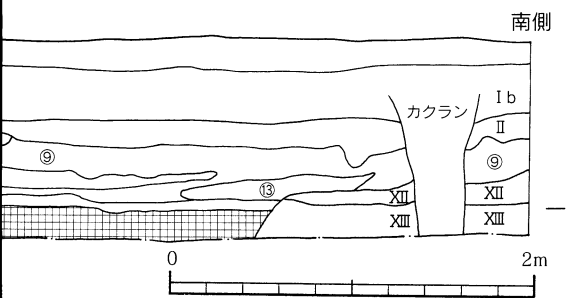
土層

- IV…灰色粘質土 鉄分、軽石を少量含む。
- V…黒褐色粘質土 粘性が強くしまりがよい。
- VI a…灰褐色砂土 1mm以下のきめの細かい砂によって構成される。
- VII…暗灰色泥炭層
- VIII…黒色泥炭層
- ②④…灰黄褐色粘質土 (弥生～中世の遺物を含む) ⑤⑥…灰色粘質土 しまりがよく粗砂を多く含む
- ⑦…灰色砂質土 ⑧…褐色砂質土 (弥生～中世の遺物を含む) ⑨…灰黄褐色粘質土
- ⑩…褐色粘質土 ⑪…黒褐色粘質土 ⑫…にぶい褐色砂土 ⑬…黒褐色砂質土
- ⑭…褐色粘質土 ⑮…黄灰色砂礫層 扇状地礫層 10～20cm大の礫と粗い砂粒で構成。



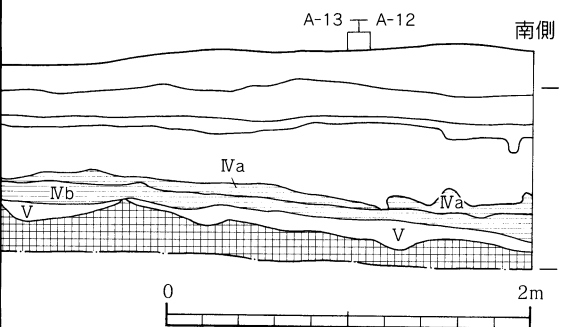
土層

- II b…暗灰色粘質土
  - VI b…褐色砂土 VI aよりも粗い粗砂で構成。薄いレンズ状に堆積。
  - IX…青灰色粘質土 砂粒を多く含むために粘性が弱い。
  - X…青灰色礫層 扇状地礫層。
  - ①…暗灰色砂土 ②…暗灰黄色砂土 ①よりもきめが粗い。
- IV・V・VI a・VII・VIII層は土層断面2を参考。



土層

- II…灰色粘質土 上部に鉄分の付着が多くみられる。中世～近世の遺物を含む、耕地整理以前の水田層。
  - IV…暗褐色粘質土 しまりがよく5mm大の炭化物を多く含む。縄文後期～弥生時代の遺物を少量含む。
  - V…IV層よりも細砂を多く含むのでしまりが弱い。縄文後期～弥生時代の遺物を少量含む。
  - VI a…茶褐色砂質土
  - VI b…灰褐色砂土
  - VII b…淡緑色砂土 1mm以下の細砂粒で構成される。
  - VIII…灰白色砂土 粗い砂粒で構成されている。5mm大の円礫を所々に含む。
  - X…灰白色砂礫層 扇状地礫層。
  - XII…淡黄色粘質土 しまりがよく粘性が強い。
  - XIII…灰色砂土 粗砂と灰色粘質土で構成。
- Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層は土層断面4のⅡ層と対応。
- ⑧…溝状遺構5の埋土。 ⑨…暗褐色砂質土 自然流路の埋土。細砂で構成された小さなクロスラミナが多数確認できる。 ⑩～⑬…茶褐色砂土



土層

- I c…土層断面図4のII層に対応
- II…暗褐色粘質土 III層との境には砂層が堆積。中世の遺物を少量含む。
- IV a…褐色粘質土 木片、種実、木の葉などの有機質を多く含んでいる。弥生時代の遺物と共に、多くの樹根が検出された。
- IV b…茶褐色粘質土 III層、IV層よりも粘性が強くしまりがよい。弥生時代の遺物を少量含む。
- V…明茶褐色粘質土 粘性が強く、灰白色の砂粒を少量含む。
- VII…灰褐色砂礫層 扇状地礫層。
- ①・②白色砂土 自然流路の埋土。 ③灰茶褐色砂質土 土層断面4のVII層と対応。
- ④茶褐色粘質土 ⑤・⑥・⑦茶褐色泥炭層

6 図 土層断面図

ら、百次川の河道が固定し氾濫源から離れた安定した地域となる。2地点では弥生時代後期後半頃の堆積層である62層の珪藻、花粉分析から微高地周辺に湿地が広がることが予想され、湿地林や河畔林を構成するハンノキ属の樹根が残存していることもこのような湿潤な環境を反映している。このことから、楠元遺跡では弥生時代後期には水害から安全な微高地と流水の豊富な湿地・小流路とが近接していたことが読みとれ当時の人々の土地利用のあり方を知る上で重要な遺跡である。発掘調査では微高地上に住居群が、低地部には溝状遺構が検出されている。調査区全体に広がるI b層は近年の耕地整理の際に敷き詰めた水田の基盤層である。耕地整理によって微高地は大きく削平され現状から旧地形を推察することは困難である。

### 3 遺跡包含層と遺構検出面

#### (1) 1地点 (第5図)

AB-13区の微高地を境に南北で層序に違いがみられる。遺物包含層は現在の水田の基盤であるI b層より下位に堆積している。1地点南のI c層、1地点北のII層は耕地整理が行われる以前のの水田層と思われ、近世から近代かけての遺物が出土した。1地点南のII層、1地点北のIII層は古代から中世にかけての遺物包含層である。1地点北において古代・中世の遺構はIV層上面で検出した。1地点南のIII層と1地点北のIV・V層は縄文時代後期から古墳時代の遺物包含層である。特に縄文時代後期の遺物はAB-16・17区のIV層下部からVII層上面で集中して出土している。1地点北はVII層以下が無遺物層となり、X層で扇状地礫層となる。扇状地礫層の上面に泥炭層はみられず、砂層が堆積している。微高地となるAB-15区付近ではXII層以下の砂礫層が扇状地礫層より下にもぐり込み微高地を形成している状況が確認できた。1地点南はV層以下が無遺物層となりVII層で扇状地礫層に至る。泥炭層はA-13区付近にのみ堆積している。

#### (2) 2地点 (第5図)

I b層以下⑤⑦・⑤⑨層が中世から弥生時代にかけての遺物包含層である。包含層からは、出土量は多くないものの各時代の遺物が混在して出土した。弥生時代の自然流路はIV層及びV層から掘り込まれている。IV層より下層は有機質を多く含む粘質土(⑤⑧~⑥①・⑥②層)が堆積している。このような土壌は2地点が湿潤な環境であったことをうかがわせ、科学分析の結果をよく反映している。なお、V層の放射性炭素年代測定値はBP5510年±310年である。

泥炭層(VII・VIII層)上面には砂層(⑤⑤・⑤⑥層)が部分的に堆積し、泥炭層以下は河床礫層(⑥④層)が2地点全域に広がっている。

#### (1) 3地点 (第5図)

遺物包含層であるI c層からは縄文後期から中世にかけての遺物が出土した。II層より下位は無遺物層である。弥生時代、中世の遺構はII層上面で検出された。弥生時代の遺構は、検出面から浅いことからI c層堆積時(中世)に攪乱されたと思われる。I c層は耕地整理の際に削平されている。II層の直下に堆積しているIII層(泥炭層)は、3地点の中でも南側に堆積し、III層(砂礫層)によって微高地が形成される北側には堆積していない。

### 第3節 発掘調査の成果

楠元遺跡では縄文時代早期から近世にかけての遺構・遺物が検出された。その中でも主体となる時期は縄文時代後期と弥生時代終末から古墳時代初頭である。縄文時代後期の遺構は検出されなかったが、市来式土器、鐘崎式土器、北久根山式土器に伴って多くの石器が出土し、土器の共伴関係だけでなく平野部の遺跡における生業のあり方を考える上で重要な発見となった。

弥生時代の遺構としては竪穴住居跡2軒、炉跡2基、土坑10基、溝状遺構2条、自然流路1条が検出された。特に注目されることは、低地部から検出された自然流路・溝状遺構から多くの木製品が出土したことである。遺構からは曲柄又鋤、曲柄平鋤、掘り棒、丸木弓、容器などが出土し、本県で初めて弥生時代における木製品のセット関係が明らかとなった。また、微高地には住居跡が、隣接する低地部には水田跡の存在が確認され、居住域と生産区域の立地についても重要な成果を得ることができた。遺構からまとまって出土した土器は、弥生時代から古墳時代の過渡期のものであり土器編年における良好な資料になると思われる。

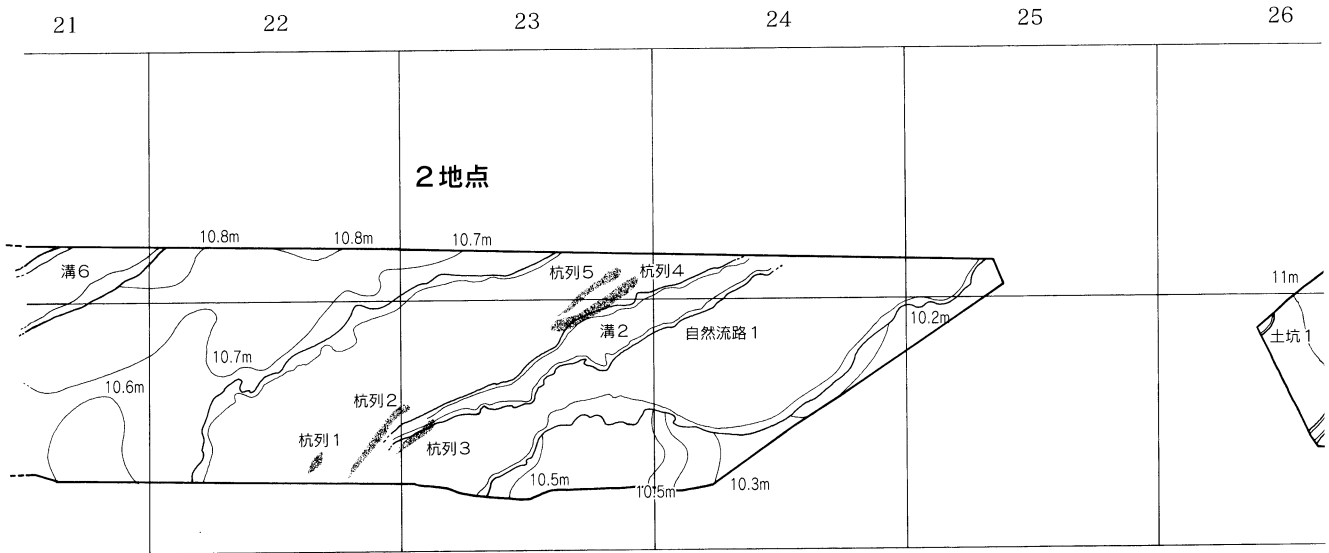
遺構・遺物の説明については各時代ごとに行う。包含層からは総重量146kgの土器が出土したが細片が多いことから遺構内出土の土器を中心に分類し紹介する。また、弥生時代の遺構から出土した縄文土器については縄文時代の調査成果の中で報告している。包含層や古代・中世・近世の遺構から出土した石器は、縄文時代の調査成果の中で紹介し、弥生時代の遺構から出土している石器は各遺構ごとに紹介した。

#### 1 縄文時代の調査成果

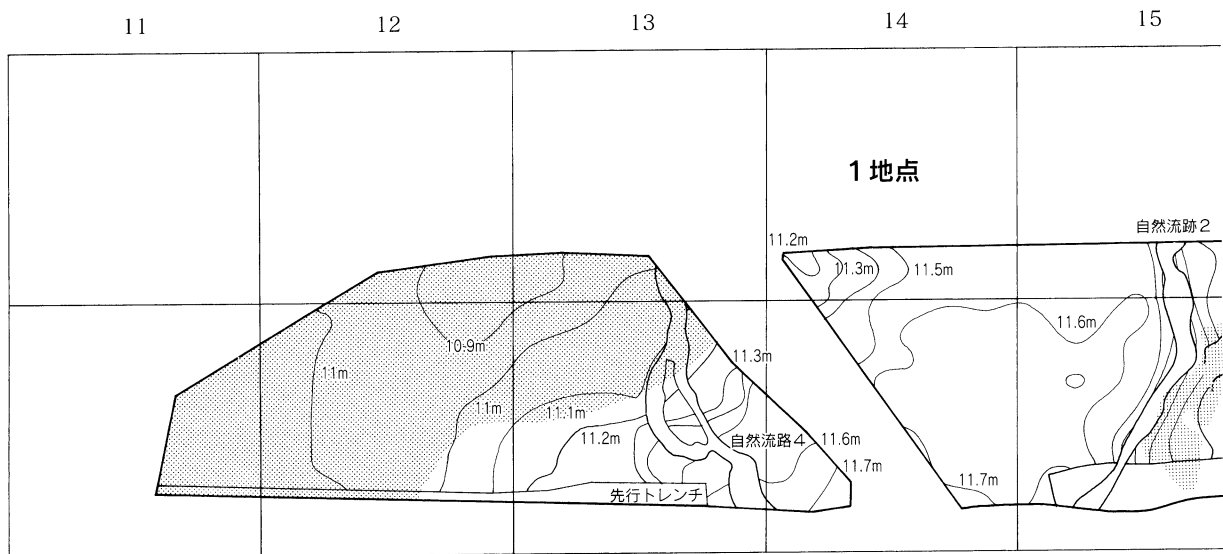
中心となる遺物は市来式土器、北久根山式土器、鐘崎式土器、西平式土器などの縄文時代後期土器とそれに伴う石器である。遺物のほとんどはA B-17・18区とA B-25・26区の2か所で集中して出土した。A B-17・18区ではⅣ層下部からⅦ層上面にかけて遺物が集中して出土したために、部分的に遺物を取り上げ遺構検出を行った（第8図）。遺構が検出されなかったことや標高の低い北側ほど遺物が濃密に分布することから、遺物集中域は標高の高い南側からの自然堆積によって形成されたと考えられる。ただし、土器の磨滅が少なく、石皿、台石などが出土していることを考えると遺物の供給先はそれほど遠くないことが想定され、廃棄により堆積した可能性も残されている。A B-25・26区ではⅠc層より弥生時代、古墳時代、中世の遺物と混在した状態で出土した。土器の説明については、各層、各地点間で土器を比較した結果、型式や時期に大きな違いがみいだせなかったことから分類ごとに行なう。

##### (1) 縄文土器の分類

本遺跡からは早～晩期に該当する縄文土器が出土しているが、後期に該当するものがほとんどである。そこで、ここでは後期に該当する土器を中心に形態及び文様、特に口縁部形態によってⅠ類～ⅩⅠ類、そして底部、台付皿形土器の13類に分類し、他の時期の土器については一括して述べることにした。以下、各分類について述べる。



● 自然流路1内の杭列



● 樹根が残っていた地区

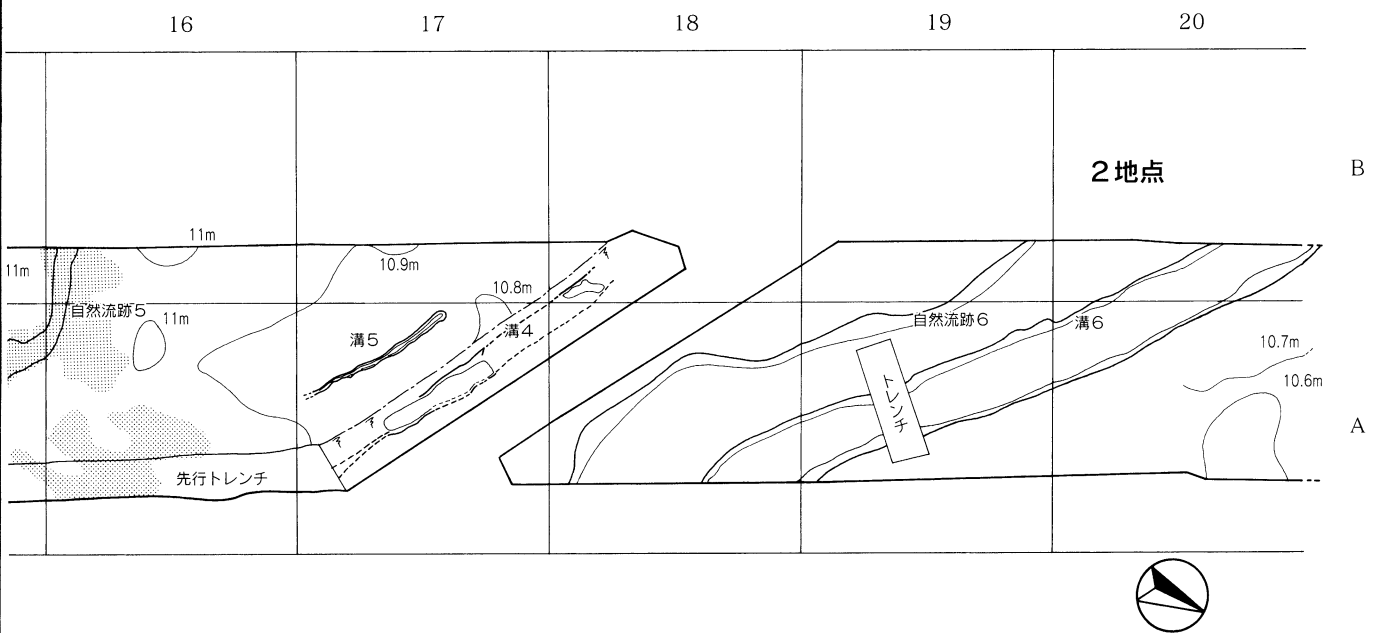
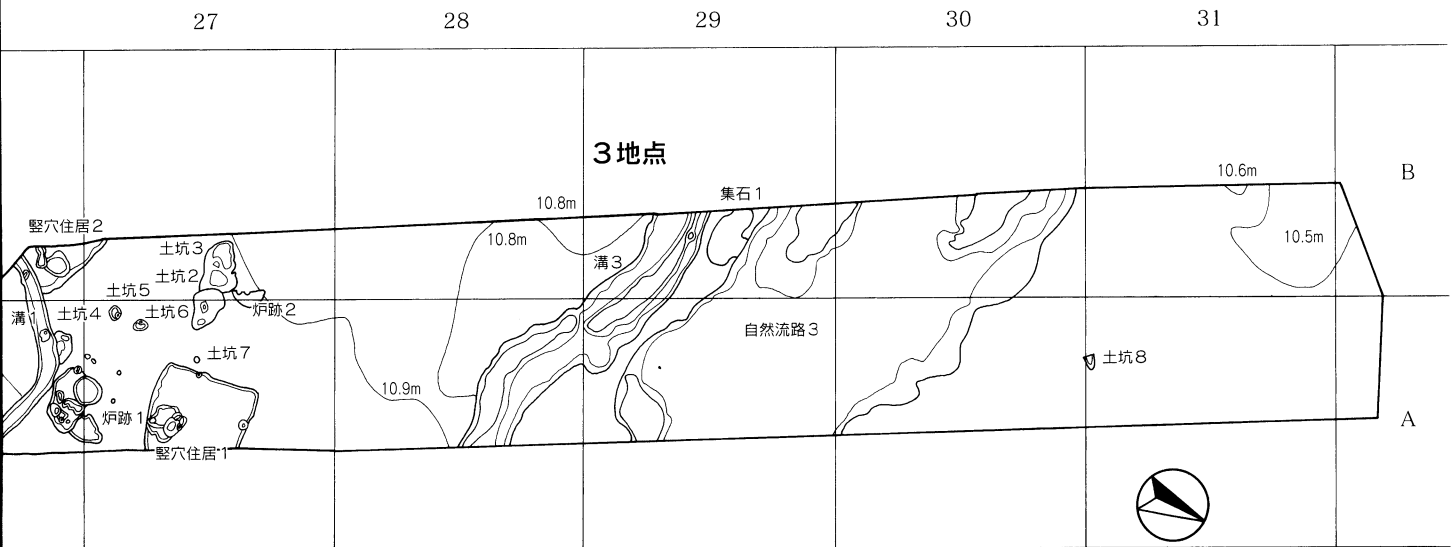
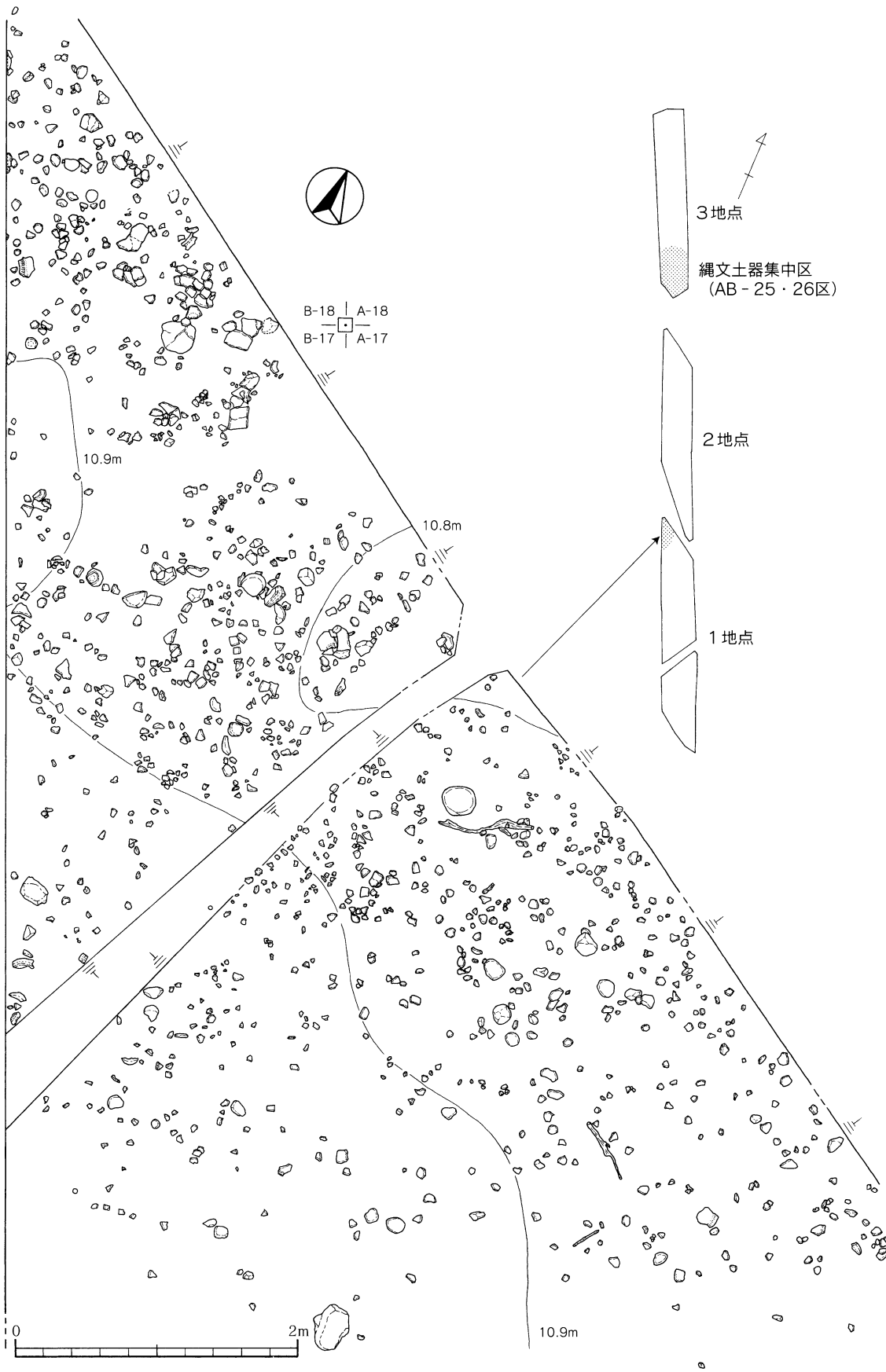


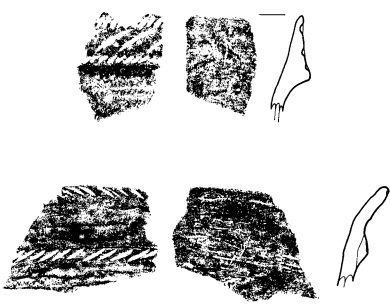
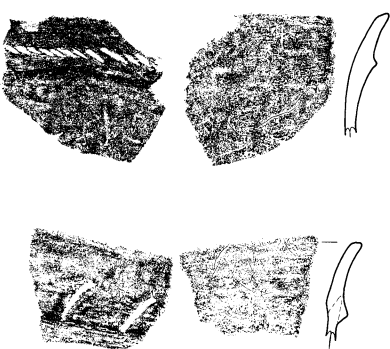


図 (1 グリッドは10m×10m)





第8図 縄文後期土器出土状況

<p>I類 松山式土器 (第13図 1~25)</p> <p>標識遺跡；上屋久町一湊字松山 一湊遺跡</p> <p>器形；口縁部上面が拡張し、そこに文様を施す。口縁部が外反するものが多い。</p> <p>文様；口唇部に刺突文や貝殻刺突文・あるいは沈線文が施される。単一文様を繰り返すものや沈線文と貝殻刺突文や刺突文を組み合わせるものもある。</p> <p>調整；ナデ・貝殻条痕・工具不明の条痕</p>	
<p>II類 市来式土器</p> <p>標識遺跡；鹿児島県日置郡市来町川上 市来貝塚</p> <p>II a類 市来式土器 (第14・15図 26~55)</p> <p>器形；口縁部を肥厚させて、断面三角形を呈する。口縁部に文様を施すが、文様帯幅が狭い。</p> <p>文様；口縁部文様帯に刺突文や貝殻刺突文・沈線文が施される。単一文様を繰り返すものや沈線文と貝殻刺突文や刺突文を組み合わせるものがある。</p> <p>調整；ナデ・貝殻条痕・工具不明の条痕</p>	
<p>II b-1類 市来式土器 (第16~18図 56~96)</p> <p>器形；口縁部が断面三角形を呈するもの間延びしたものや「く」字状になる。口唇部は舌状を呈する。</p> <p>文様；口縁部文様帯に刺突文や貝殻刺突文・沈線文が施される。単一文様を繰り返すものもあるが沈線文と貝殻刺突文を組み合わせたものが多い。</p> <p>調整；ナデ・貝殻条痕・工具不明の条痕</p>	
<p>II b-2類 市来式土器 (第18~22図 97~148)</p> <p>器形；口縁部が断面三角形を呈するもの間延びしたものや「く」字状になる。口唇部が平坦面をもつもの、あるいは断面かまぼこ状を呈するもの。</p> <p>文様；口縁部文様帯に刺突文や貝殻刺突文・沈線文が施される。単一文様を繰り返すものもあるが、沈線文と貝殻刺突文や刺突文を組み合わせたものが多い。</p> <p>調整；ナデ・貝殻条痕・工具不明の条痕</p>	

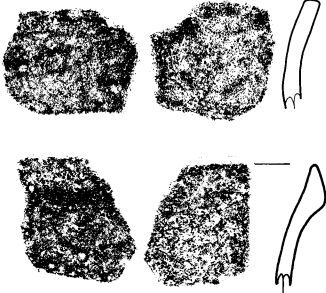
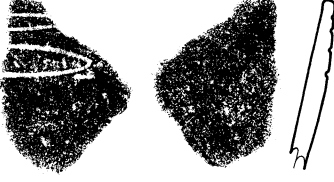
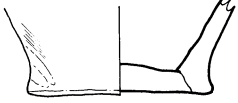


第9図 縄文土器分類模式図(1)

<p>II c 類 市来式土器 (第 23 図 150 ~ 165)</p> <p>器形；口縁部断面が、三角形あるいは「く」字状を呈さず、方形に近い形態を呈するもの。口唇部が平坦になるものが多い。</p> <p>文様；口縁部文様帯に刺突文や貝殻刺突文・沈線文が施される。単一な文様を繰り返すものが多い。沈線文と貝殻刺突文や刺突文を組み合わせたものもある。</p> <p>調整；ナデ・貝殻条痕・工具不明の条痕</p>	
<p>II d 類 市来式土器 (第 24・25 図 166 ~ 203)</p> <p>器形；口縁部断面が肥厚し、II b, II c 類に類似するが特殊なもの。</p> <p>文様；口縁部文様帯に刺突文や貝殻刺突文・沈線文が施される。</p> <p>調整；ナデ・貝殻条痕・工具不明の条痕</p>	
<p>III 類 草野式土器 (第 26 図 204 ~ 221)</p> <p>標識遺跡；鹿児島県鹿児島市下福元町草野貝塚</p> <p>器形；II 類と器形・施文方法は類似するが、口縁部肥厚が弱く、口唇部が丸身をおびるか平坦面をもつ。</p> <p>文様；刺突文や貝殻刺突文・沈線文が施される。単一な文様を繰り返す。</p> <p>調整；ナデ・貝殻条痕・工具不明の条痕</p>	
<p>IV 類 小池原上層式土器 (第 27 図 222)</p> <p>標識遺跡；大分市小池原貝塚</p> <p>器形；胴部がはり、胴部にも文様を施すものである。</p> <p>文様；太い沈線文と幅の広い磨消縄文が施される。</p> <p>調整；内外面ミガキ</p> <p>備考；1 点のみの出土である。</p>	
<p>V 類 御手洗 C 式土器 (第 27 図 223)</p> <p>標識遺跡；熊本県菊池郡合志町御手洗遺跡</p> <p>器形；口縁部から胴部にかけて直行する。</p> <p>文様；口唇部に 1 条の沈線文が施され、外面に刺突文が施される。</p> <p>調整；1 点のみの出土である。</p>	

第10図 縄文土器分類模式図 (2)

<p>VI類 鐘崎式土器 (第27・28図 224～250)</p> <p>標識遺跡；福岡県宗像郡玄海町上八遺跡</p> <p>器形；鉢形を呈し、口唇部は平坦となる。</p> <p>文様；口唇部に刺突文と沈線文を施し、口縁部下には磨消縄文が施される。</p> <p>調整；内面にミガキ</p> <p>備考；橋状把手と突起をもつものがある。</p>	
<p>VII類 白浜・浜ノ洲タイプ (第29図 251～262)</p> <p>標識遺跡；白浜タイプ—長崎県福江市白浜貝塚 浜ノ洲タイプ—熊本県三角町浜ノ洲貝塚</p> <p>器形；鉢形を呈し、口縁部が平坦となる。口縁部がVI類に比べて間延びし、口唇部と口縁部文様帯の間の無文帯が長くなる。</p> <p>文様；磨消縄文あるいは沈線文が施される。また、沈線文端に円形の刺突文が施される。</p> <p>調整；内面にミガキ整形が施される。</p> <p>備考；橋状把手をもつものがある。</p>	
<p>VIII類 北久根山式土器 (第30図 263～271)</p> <p>標識遺跡；熊本県熊本市北久根山遺跡</p> <p>器形；口縁部がやや肥厚し、口縁部断面形が緩やかな三角形を呈し、胴部が張る。口縁端部にM字の粘土紐貼付を持つものがある。</p> <p>文様；口縁部に沈線文や篋状工具による刺突文が施される。</p> <p>調整；内面にナデ整形が施される。</p> <p>備考；橋状把手をもつものがある。</p>	
<p>IX類 西平式土器 (第30図 272～274)</p> <p>標識遺跡；熊本県竜北町西平貝塚</p> <p>器形；口縁部が断面三角形を呈して内弯し、胴部へ直行する。</p> <p>文様；口縁部に沈線文が施される。</p> <p>調整；内面にナデ整形が施される。</p>	

第11図 縄文土器分類模式図(3)

<p>X類 無文土器 (第25・31図 195・275～296)</p> <p>無文の土器を一括してとりあげる。</p> <p>器形；口縁部が肥厚して断面三角形を呈し肥厚するものや、口縁部が直行する。</p> <p>文様；無文</p> <p>調整；ナテ整形や工具不明の条痕</p>	
<p>XI類 型式不明土器 (第32図 297～303)</p> <p>型式不明の土器を一括して取り上げた。</p>	
<p>底部</p> <p>I類 (第33図 304～315)</p> <p>器形；深鉢や鉢の底部。平底あるいはやや上げ底気味の平底になる。</p> <p>調整；ナテ整形</p>	
<p>II類 (第33図 315～320)</p> <p>器形；深鉢や鉢の脚台。</p> <p>調整；ナテ整形</p>	
<p>台付皿形土器</p> <p>皿部 (第34・35図 321～326)</p> <p>脚部 (第35・36図 326～342)</p> <p>器形；皿部・脚台ともに沈線文や刺突文などを組み合わせ文様が施される。赤色顔料を塗布されたものがある。皿部に穿孔を脚部に透かしをもつものがある。</p> <p>調整；ミガキ、ナテ整形がみられ、丁寧な作りとなる。</p>	

第12図 縄文土器分類模式図(4)

## (2) 縄文土器

### I 類 (第13図 1～25)

口縁部がやや外反し、口唇部が平坦あるいはやや丸身を帯びるものである。口唇部に沈線文、刺突文がある。

1・2はヘラ状工具による刻目が斜位に施される。3～7は貝殻腹縁による刺突文（貝殻刺突文）が施されている。3・6・7は斜位に、4は横位や斜位に、5は横位にそれぞれ施されている。8・9はヘラ状工具による縦位の刺突文である。

10～13は沈線文のみが施され、14～24は沈線文と貝殻刺突文、沈線文と刺突文など2種類を組み合わせて施文している。10・13は1条の沈線文を、11・12は2条の沈線文が施される。また、10・12・13は口縁部がやや内湾している。

14～16は1条の沈線文を挟んで、その上下に刺突文あるいは貝殻刺突文が施されている。16は1条の沈線文があり、その上には横位の貝殻刺突文、沈線文下には斜位の貝殻刺突文が施され、口縁部はやや内湾する。

17～19・21は2条の沈線文があり、その間に刺突文や貝殻刺突文が施される。20・22・23も沈線文と貝殻刺突文の組合せであるが、22・23は縦位に沈線文が施される。特に22は沈線文と貝殻刺突文が交互に施され、また口縁部が波状口縁となる。24はやや波状口縁を呈し、頂部に縦位の沈線文が3条施され、そこから横位の沈線文が施されている。

25は唯一口縁部内面にも施文されるもので、内面には3条の沈線文を、口唇部には斜位の刻目が施されている。波状口縁を呈し、内面文様は頂部に施されている。

### II 類 (第15～25図 26～203)

口縁部の形態によってa類～e類の5種に分類できる。主に貝殻刺突文や沈線文、刺突文などによって文様を構成しており、単一あるいは組み合わせて文様が施される。

#### II a 類 (第14・15図 26～55)

口縁部が断面三角形を呈し、I類の文様施文部が口縁部に移行したようなものである。口縁部文様帯の幅が狭いものが多い、主に単一の文様が施されたものが多い。

26～32は工具による刺突文が施されており、31は内外面に貝殻条痕が残る。

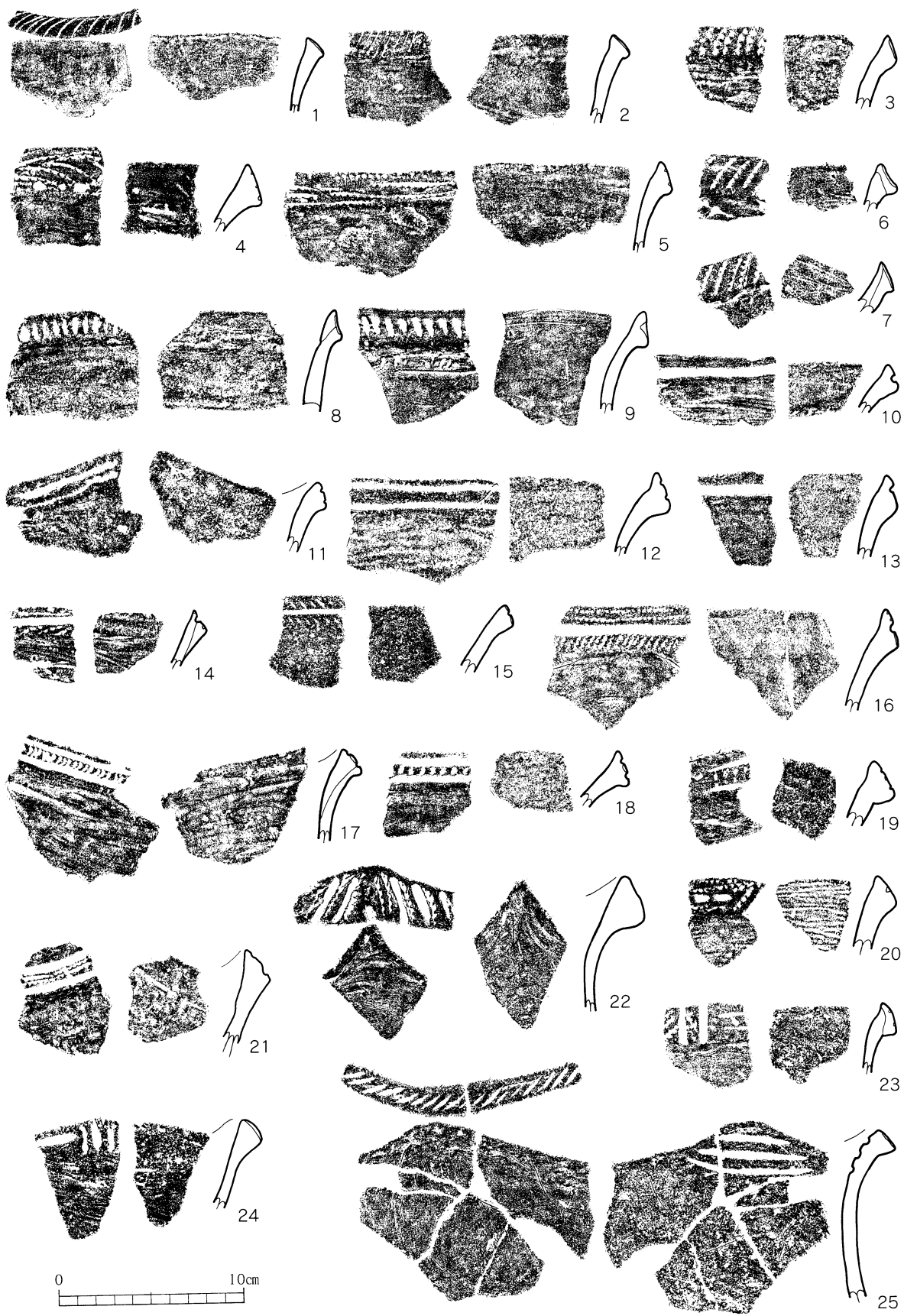
33～35は斜位の貝殻刺突文が施されている。33・34は口縁部がやや内湾する。

36は円形の刺突文が施されている。37・38は縦位の刺突文が施され、38は口唇部に平坦面をもち、その中央がやや窪んでいる。

39～41は貝殻による刺突文が施され、39は横位に2条の貝殻刺突文を、40は縦位の貝殻刺突文を、41は斜位の貝殻刺突文がそれぞれ施されている。42はヘラ状工具による斜位の刺突文が施され、口縁部が外に張り出す。43・44は口縁部が丸身を帯びて、肥厚するもので、43は胴部がやや張り、縦位の刺突文が施される。

45・46・49は外面または内面に貝殻条痕が残る。45は口縁部に斜位の、46・49は横位の貝殻刺突文がそれぞれ施されている。47・48は沈線文と貝殻刺突文を組み合わせている。

50は2条の沈線文があり、その間に刺突文が施される。51は口縁部がやや内湾するもの

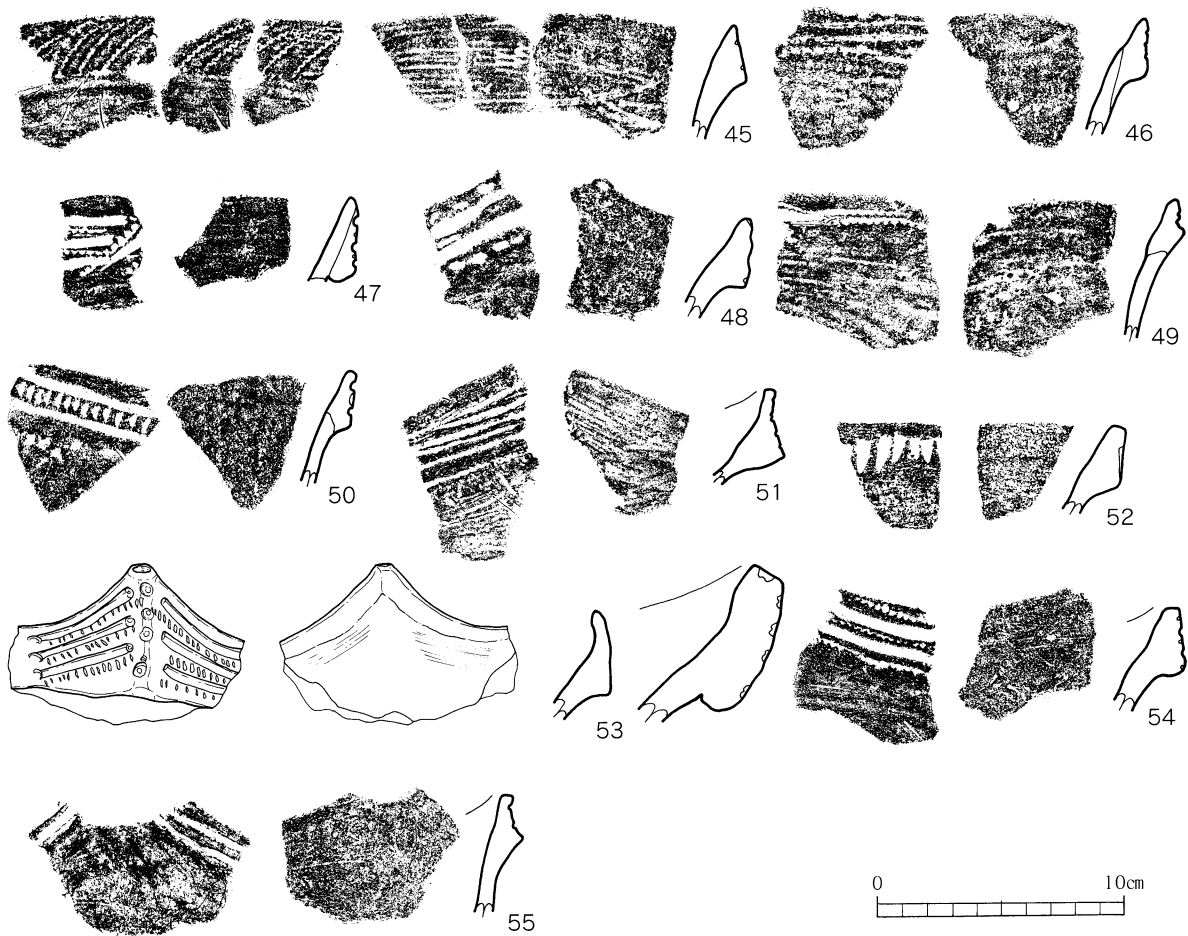


第13図 縄文土器 I類



第14図 縄文土器 IIa類 (1)





第15図 縄文土器 II a類 (2)

で、文様帯の幅が比較的広く、数条の沈線文が施されている。内外面には貝殻条痕が残る。52は口唇部がやや平坦面で、縦位の刺突文が施される。

53～55は波状口縁を呈する。53は上面観が方形を呈するようなものである。波頂部には竹管文を縦位に施し、波頂部を中心に文様が展開している。口縁部には3条の沈線を施し、その下に刻目を、そして沈線端には竹管文をそれぞれ施す。口縁部はやや内湾する。54は2条の沈線文とその上下に貝殻刺突文を施す。55は2条の沈線文を施す。

### II b類

口縁部が断面三角形を呈するが、II a類よりも間延びするもの、または口縁部が外反し、「く」字状となるものである。口唇部形態により2類に分け、口唇部が舌状を呈するものをII b-1類、口唇部が平坦面をもつもの、あるいは断面かまぼこ状を呈するものをII b-2類とした。

#### II b-1類 (第16～18図 56～96)

56・57は斜位の刺突文が施される。58・59は口縁部の肥厚が強く、沈線文と貝殻刺突文を組み合わせ文様を描いている。

60・61・64は斜位の貝殻刺突文が施される。61は口縁部が断面三角形を呈し、若干口縁部が内湾するものである。62は沈線文と円形の刺突文を組み合わせる施文し、内外面にナデの調整痕が残る。

63・65は口縁部が断面三角形を呈しつつ間延びしたものであり、斜位の貝殻刺突文が施され、その上下に短沈線文が施されている。66は2条の貝殻刺突文が横位に施される。

67・68は文様帯下端に、70は文様帯上下端に刺突文が施される。69は斜位の貝殻刺突文が施され、外面には貝殻条痕が残る。71は数条の貝殻刺突文が施され、口縁部断面の肥厚は弱い。

72・73は比較的の文様帯の幅が広いものである。72は文様帯下端に斜位の刺突文を、その上に数条の沈線文が施される。73は文様帯の上下端に斜位の刺突文が相対するように施される。

74・77・78は斜位の貝殻刺突文があり、その上下に横位の貝殻刺突文が施される。75は2条の沈線文とその上下に刺突文が施される。76は貝殻刺突文が山形に施され、その上下に斜位の貝殻刺突文が施されている。

79・80は沈線文と刺突文を組み合わせる文様が施される。81は刺突文が施される。82・85は1条の沈線文とその上下に刺突文が施される。

83・84は沈線文と貝殻刺突文を組み合わせる施文する。83は2条の沈線間に斜位の貝殻刺突文が施され、84は沈線文と横位の貝殻刺突文を交互に2段描いている。なお、83は接合部から剥離したと考えられる。

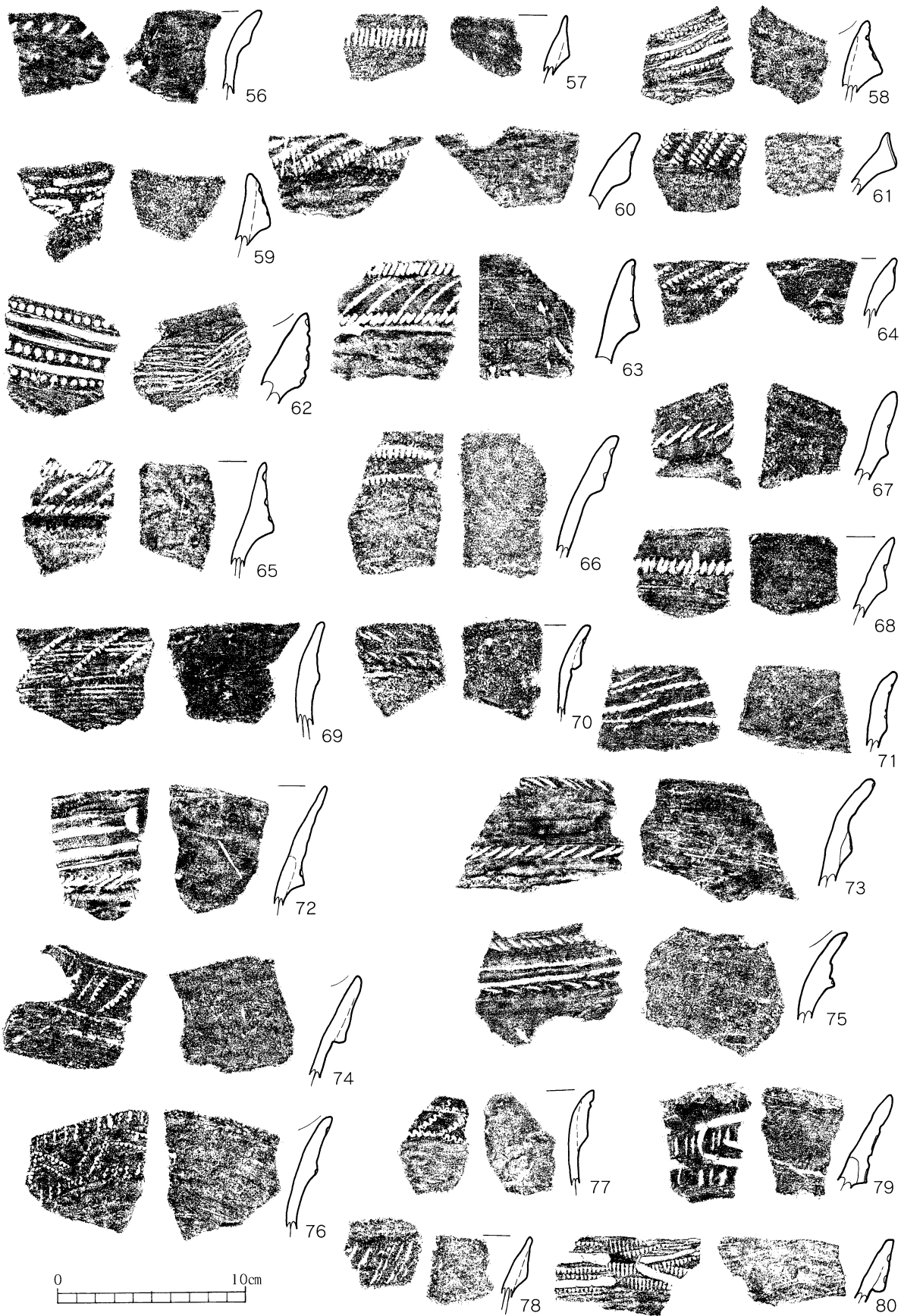
86は波状口縁を呈し、斜位の貝殻刺突文が施される。87は沈線で円形に文様を描く。88は浅い凹線文を施し、その工具痕が認められる。また、口縁部上端に円形の刺突文が施される。89は波状口縁を呈し、円形の刺突文が施される。

90は文様帯上下端に縦位の刺突文が施され、その間に斜位の貝殻刺突文が施されている。91は刺突文を組み合わせる文様を描いており、内面に貝殻条痕が残る。92は横位の貝殻刺突文が施される。93は波状口縁であり、口縁部は外反して文様帯部分が突起し、そこに浅い刺突文が施されている。94も波状口縁を呈し、内外面に貝殻刺突文が施されている。95は波状口縁を呈するもので、斜位の貝殻刺突文があり、その上下に刺突文が施される。96は口縁部が外反し、口縁部上端に斜位の刺突文が施される。

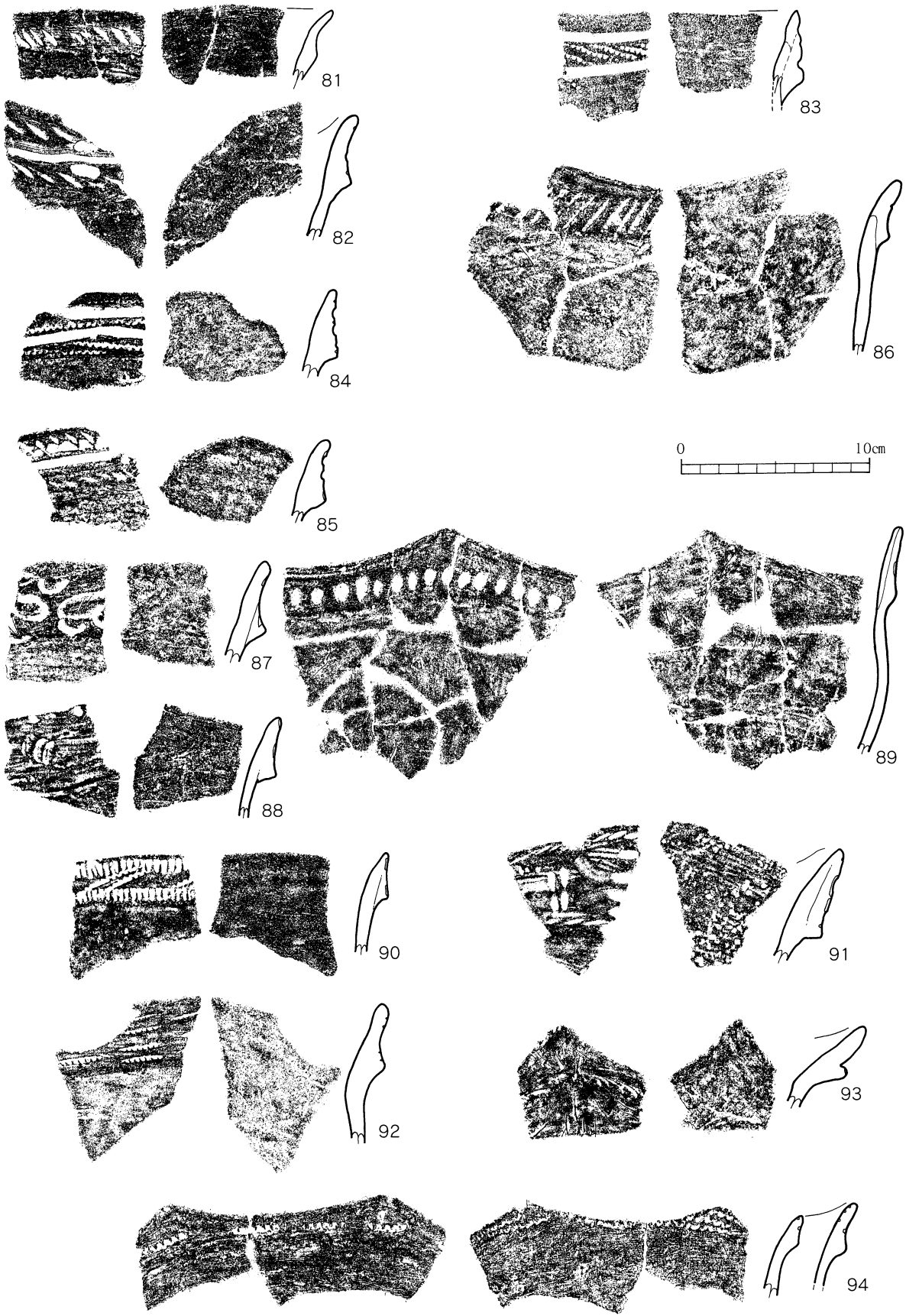
## II b - 2 類 (第18図～第22図 97～148)

97は沈線文とその上下に刺突文が施される。98～102は数条の沈線文があり、その上下に刺突文が施され、100は太い沈線文である。103は4つの円形の刺突文が施され、数条の貝殻刺突文を組み合わせる文様を構成している。104は文様帯下端に連続した斜位の刺突文を描く。

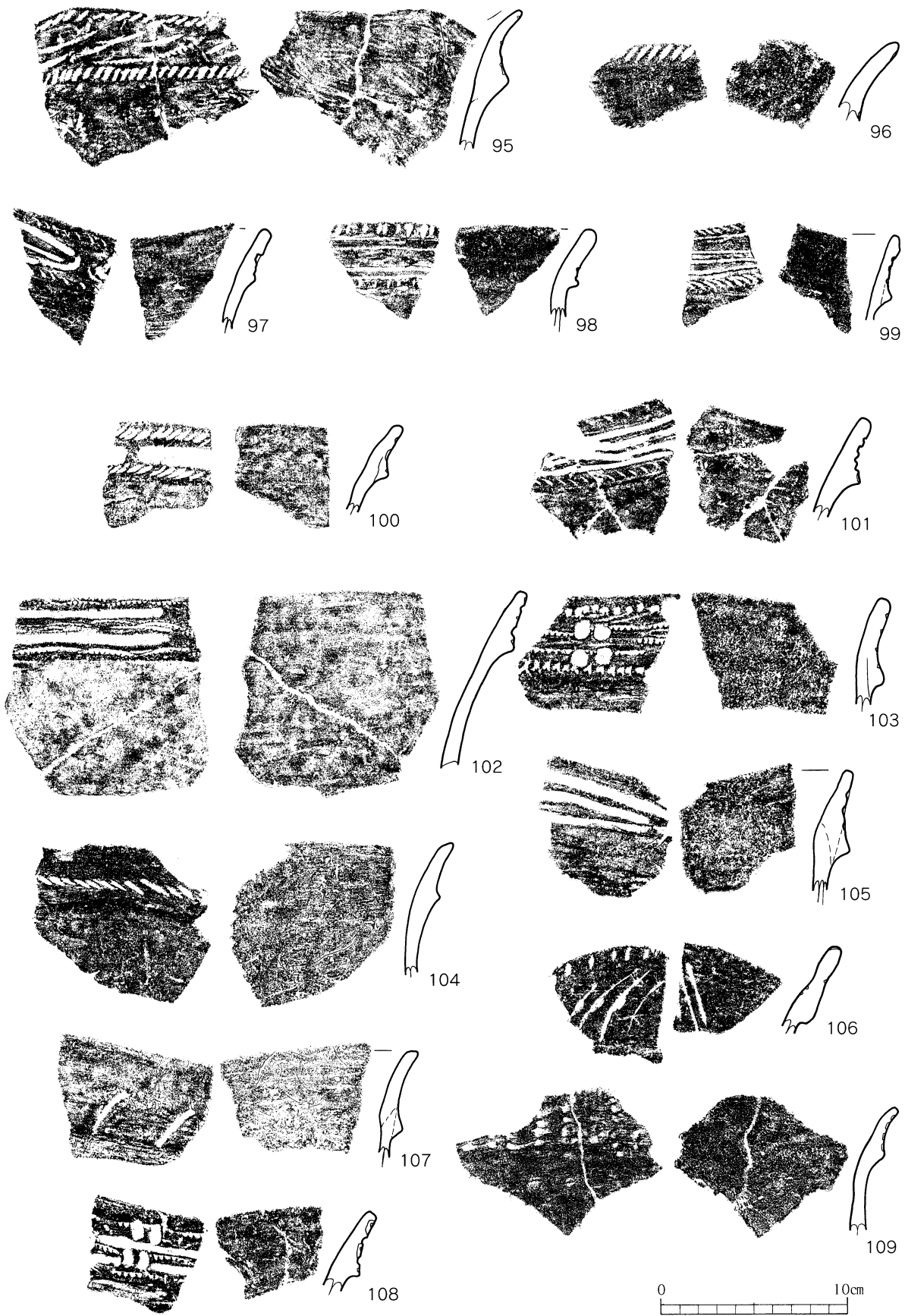
105～109はやや波状口縁を呈するものである。105は3条の太い沈線文が施され、文様帯下端に刺突文が施されている。106は内外面に文様を描き、外面は斜位の沈線文と口縁部上端に刺突文、内面には斜位の沈線文が施される。108は円形の刺突文と沈線文、貝殻刺突文を組み合わせる文様を構成している。109は4段に円形の刺突文が施され、連続す



第16図 縄文土器 IIb-1類(1)



第17図 縄文土器 IIb-1類(2)



第18図 繩文土器 IIb-1類(3)・IIb-2類(1)

る。

110は文様帯の幅が狭く、斜位の刺突文が施される。111・113は浅い沈線文が施される。112は屈曲部に横位の貝殻刺突文が1条施されている。115は文様帯の幅が広く、文様帯上下端に貝殻刺突文が施され、その間に数条の沈線文がある。114は数条の沈線文を施し、また波状口縁を呈する可能性がある。116は文様帯下端に刺突文を施し、119は数条の細い沈線文が施される。

117・118・120は貝殻刺突文と沈線文を組み合わせ文様が施される。117は横位の貝殻刺突文とその下に1条の沈線文が施され、118は2条の沈線間に斜位の貝殻刺突文が施される。120は文様帯の幅が広く、数条の沈線文とその下に横位の貝殻刺突文が施され、また口唇部にも2条の貝殻刺突文が施される。

121・122は刺突文と沈線文を組み合わせ文様を構成する。121は波状口縁を呈し、頂部には突起がつき、数条の沈線文と文様帯下端及び口唇部に刺突文が施される。122は文様帯を2段構成し、数条の沈線文とその上下に斜位の刺突文が施される。123は文様帯下端に刺突文が施され、また粘土紐を貼り付けて、その部分に刺突文が施されている。

124・125は口唇部と文様帯下端に刺突文があり、その間に2条の沈線文が施されており、また125は波状口縁を呈する。126は文様帯上下端に貝殻刺突文が施され、その間に斜位の貝殻刺突文が施される。127は文様帯上下端に刺突文が施あり、その間に幅広の板状工具で凹線文が施されている。128は波状口縁を呈し、文様帯下端に刺突文が施される。また、断面が深い「く」字状を呈する。

129・130は数条の沈線文とその上下に刺突文が施され、また130は波状口縁気味になる。131は斜位の貝殻刺突文が施される。132は浅い貝殻刺突文が施される。

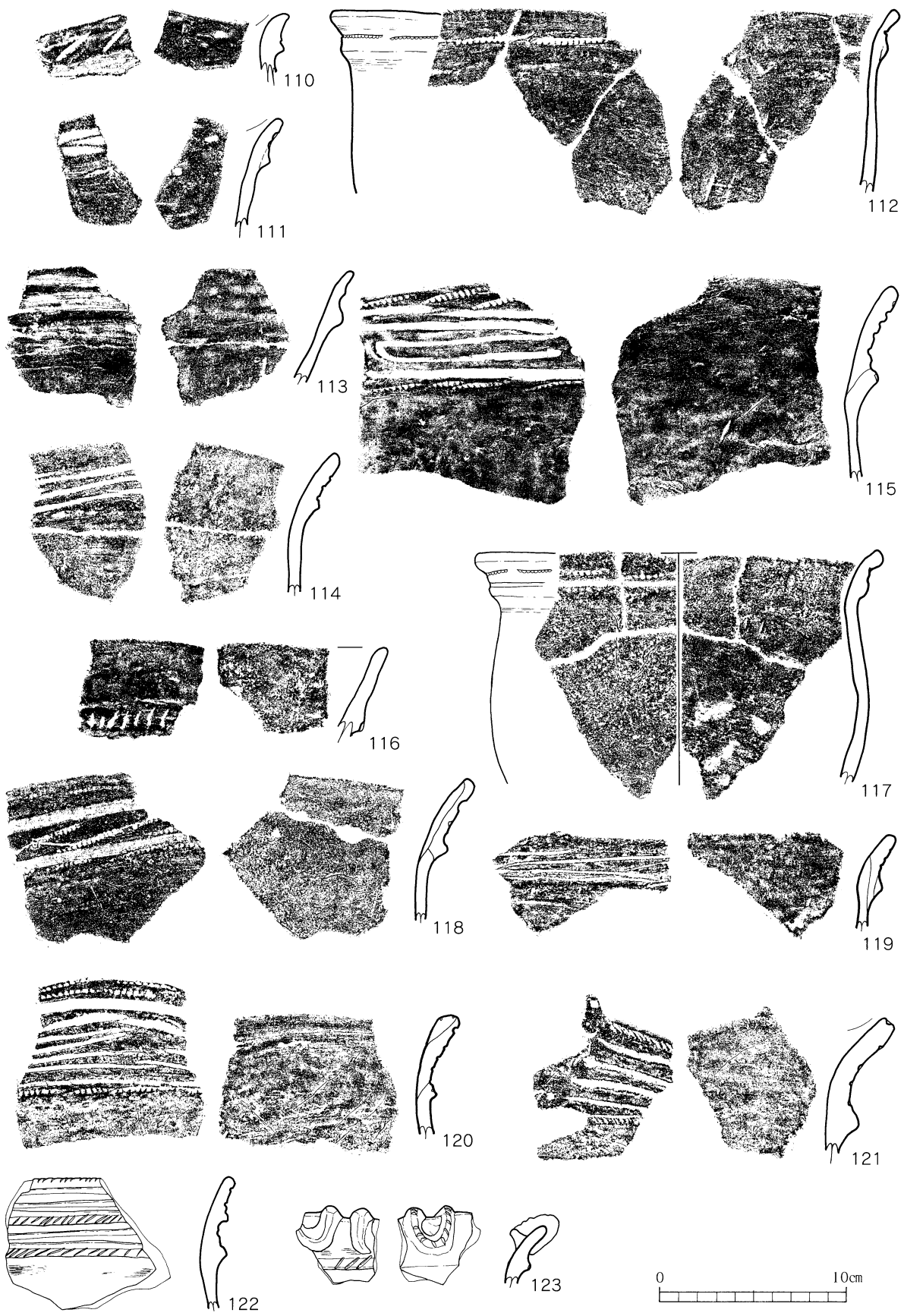
133・134は貝殻刺突文と沈線文を組み合わせ文様が施され、133は数条の沈線文とその上下に貝殻刺突文が施されている。134は横位の貝殻刺突文と沈線文が交互に施され、口縁端部が若干内湾する。

135・136は貝殻刺突文を、137斜位の刺突文がそれぞれ施される。136は波状口縁を呈し、135・137は口縁部断面形が方形に近く、また僅かに外反する。138は数条の沈線文とその上下に刺突文が施される。139は貝殻刺突文が斜位に施され、貝殻押圧文が縦位に施される。また、貝殻条痕が内外面に残る。

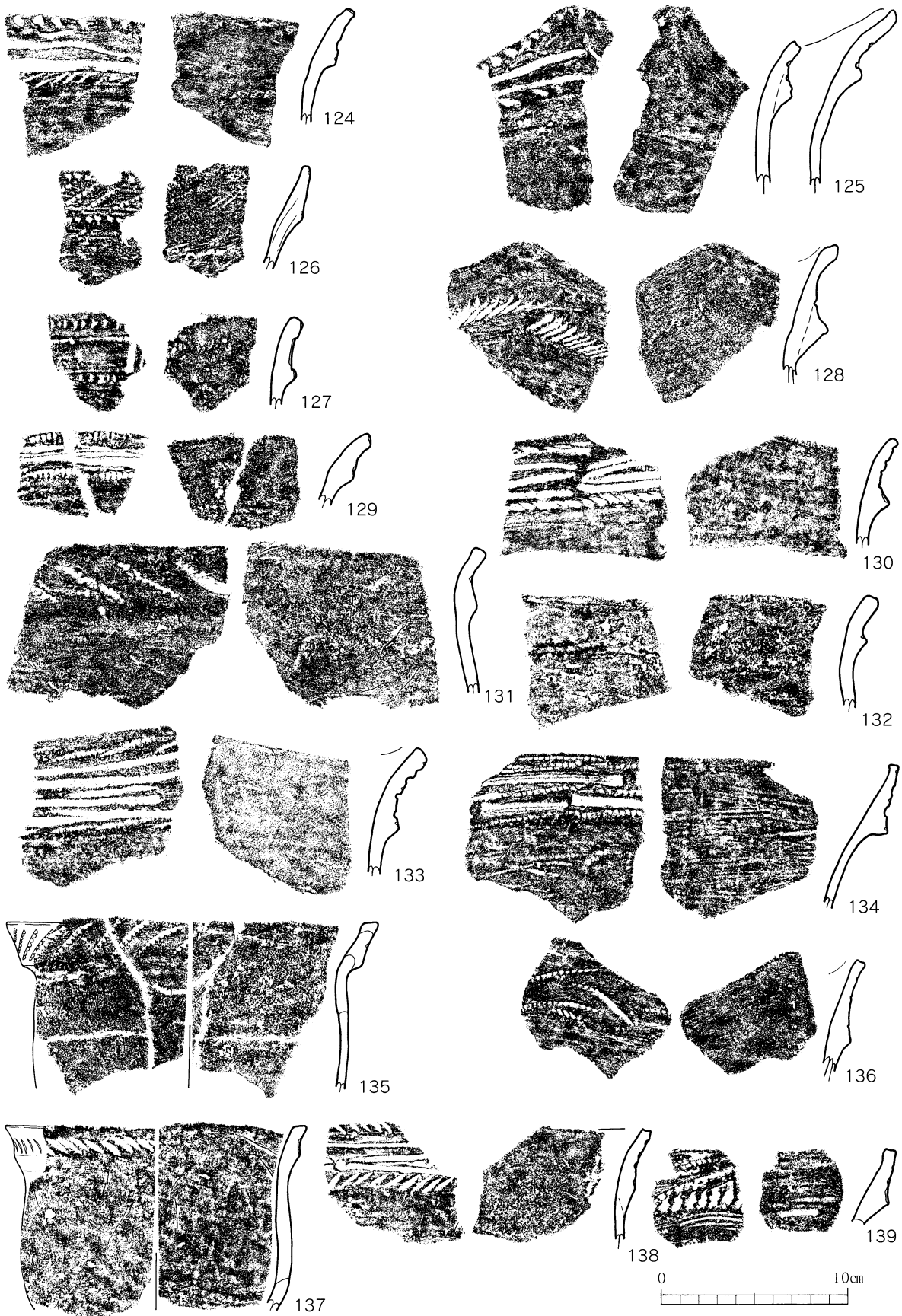
140は口径が大きく、沈線文と竹管文が施される。141は波状口縁を呈し、頂部には2段の橋状把手を作り出す。文様は頂部を中心に展開し、沈線文と刺突文で構成されている。また、頂部内面に沈線文が施されている。142は文様帯上下端に刺突文が施され、その間に沈線文を「ハ」字状に描いている。

143は数条の沈線文とその下に横位の貝殻刺突文が施され、波頂部および間隔をおいて円形の刺突文が施されている。また、頂部内面に数条の貝殻刺突文が施され、内面には板ナデ痕が残る。144は数条の沈線文を施し、文様帯下端に刺突文を施す。

145は波状口縁を呈する。数条の沈線文が施され、文様帯下端には刺突文が施される。頂部には粘土紐を貼り付け、1条の沈線文を描き、その上下に刺突文が施されている。146は

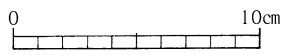
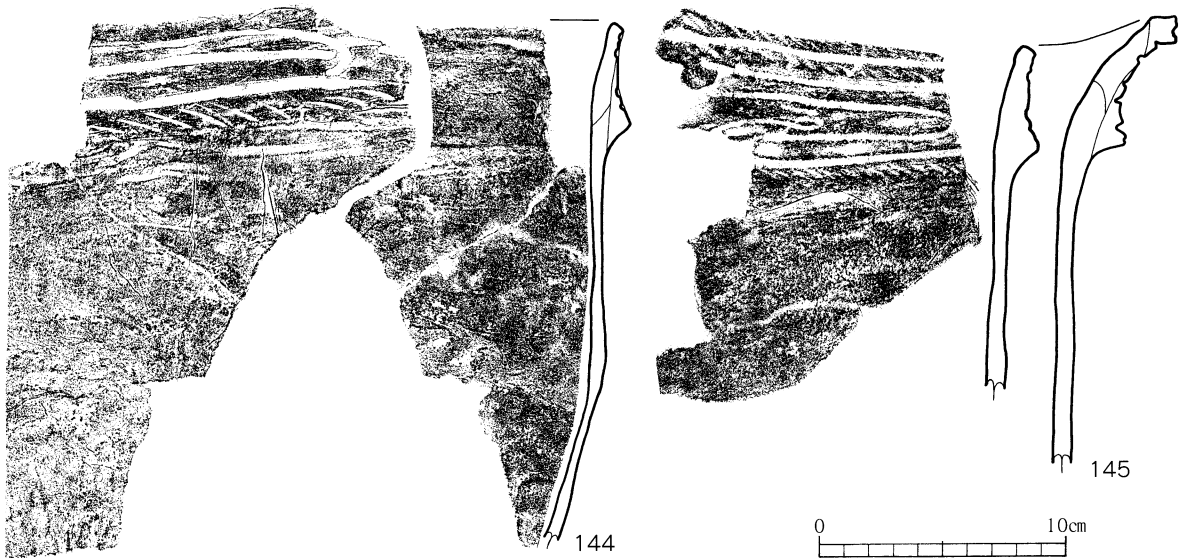
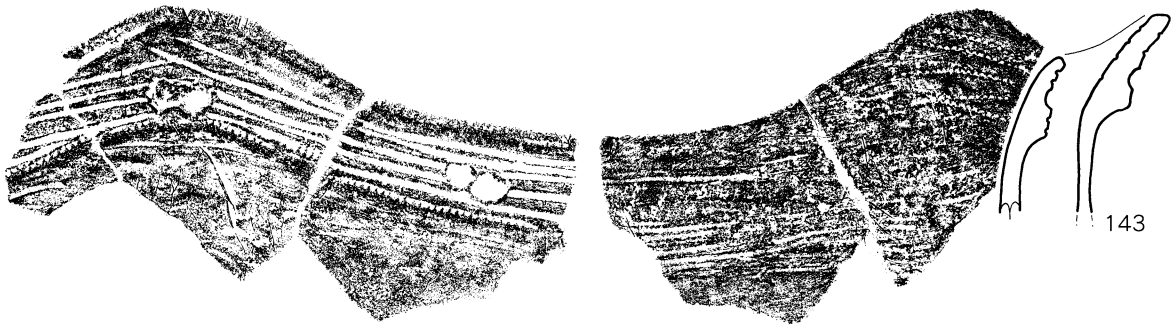
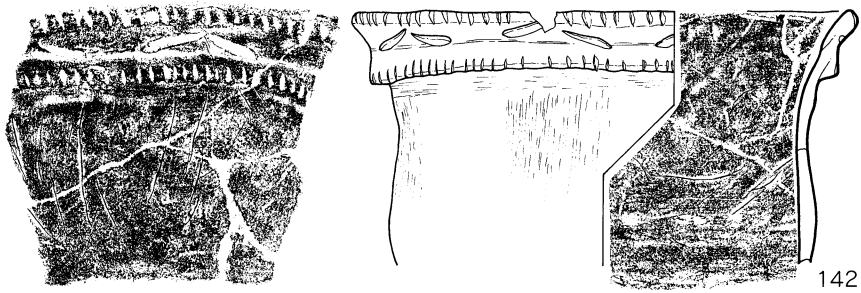
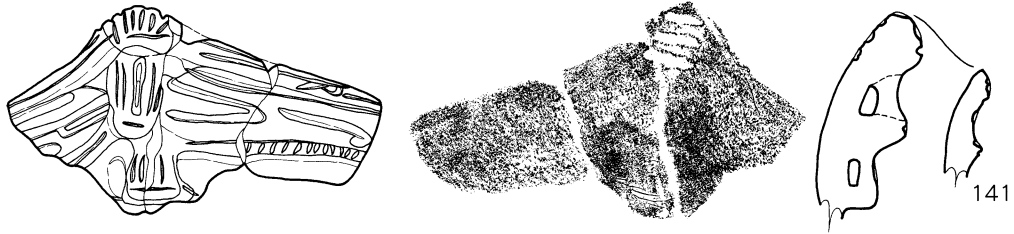
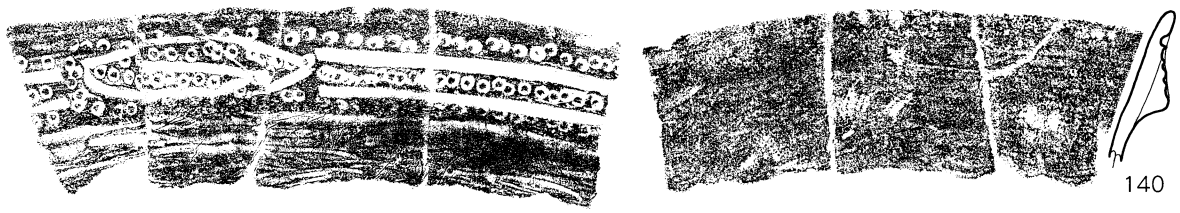


第19図 繩文土器 IIb-2類(2)

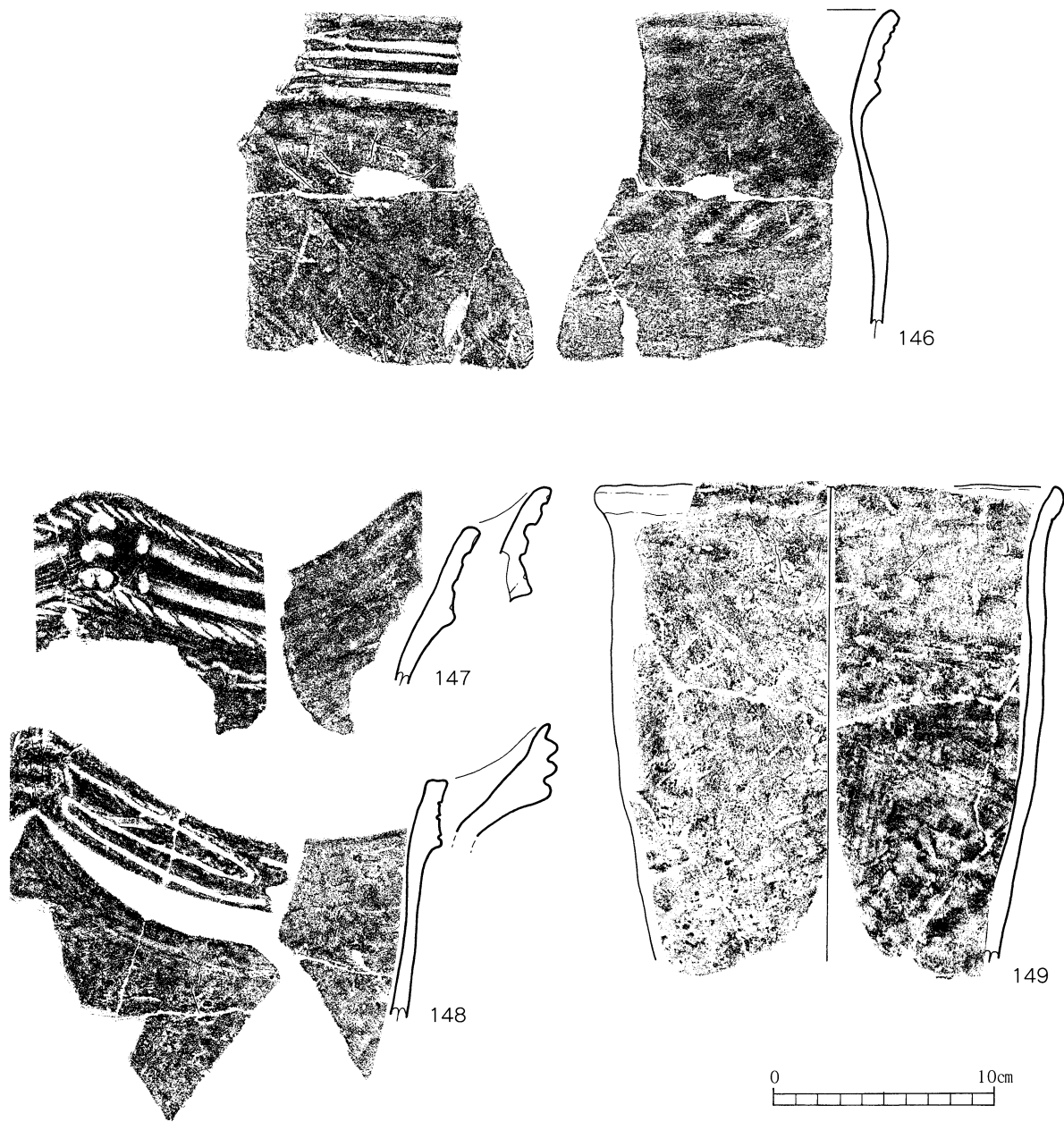


第20図 縄文土器 II b - 2類 (3)





第21図 縄文土器 IIb-2類(4)



第22図 縄文土器 II b-2類(5)・X類(1)

4条の沈線文が施され、胴部は張る。

147は波状口縁を呈し、波頂部には縦位に三つの円形の刺突文をそれぞれ2つ組み合わせて文様を描き、2条の沈線文と文様帯上下端に刺突文が施される。148は波状口縁を呈し、上部から見ると方形を呈するような形となる。沈線文がS字状に施される。また頂部には張り出しがあり、削って段をなしている。

**II c類 (第23図 150~165)**

口縁部の断面が、三角形あるいは「く」字状を呈さず、方形に近い形態を呈するもので、

口唇部が平坦になるものが多い。

150・151は口縁部断面形態が小さな方形を呈するものである。150は浅い刺突文が施され、151は口唇部と口縁部に刺突文が施されている。152は文様帯をはっきりせず、数条の沈線文が施されている。153は波状口縁を呈し、数条の沈線文とその上下に刺突文が施される。154は口縁部上端に刺突文を、その下に2条の沈線文が施されている。155は斜位の貝殻刺突文が施される。

156は4条の沈線文とその上下に刺突文が施され、157～159は数条の沈線文が施される。160・161は沈線文が施され、また160は波状口縁を呈する。162・163は貝殻刺突文が施され、162は若干波状口縁を呈する。163・164・165は口縁部が断面方形を呈しながら丸身を帯びるもので、164は2条の沈線が施され、165は浅い貝殻刺突文が施されている。

## II d類 (第24～25図 166～203)

II a～II c類と器形・形状は類似するものの、どの類にもあてはまらないもの、あるいは特殊なものを一括して取り上げる。

166は口縁部が肥厚し、1条の沈線文とその上に斜位の刺突文が施される。167・168は口縁部が肥厚し、また丸みを帯び、貝殻刺突文が施される。168は内面に貝殻条痕が残り、上部は横位に、下部は斜位に調整が行われている。169は口縁部が外反し、断面三角形を呈さないもので、文様は細く、数条の沈線文とその上下に斜位の刺突文が施される。170は口縁部下部がわずかに肥厚し、沈線文が施されている。171は数条の貝殻刺突文が施され、172は2条の沈線文とその上下に連点文が施される。

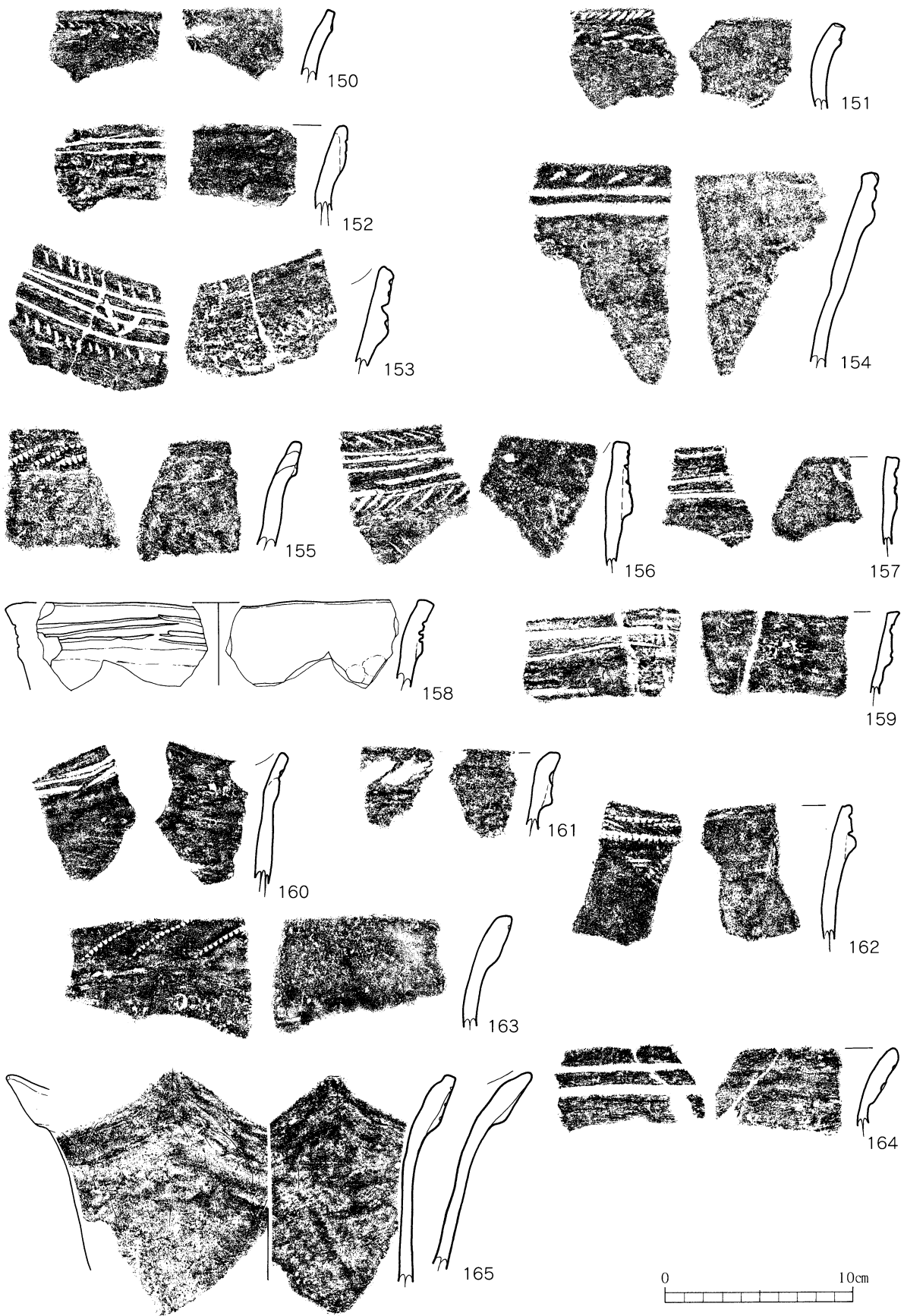
173・174は口縁部が肥厚し、断面が方形に近い形態を呈する。173は波状口縁を呈し、2条の沈線文と口縁部上端に刺突文が施される。174は口縁部がやや内湾し、文様は板状工具で円のような文様が施されている。175は口縁部内面に段があり、外面には2条の沈線文とその上に刺突文が施される。

176は波状口縁となり、頂部には内外面に沈線文が施されており、外面には貝殻刺突文を組み合わせる。また内面には曲線的な文様を描く。比較的新しい段階に入るものと思われる。177は口縁部の肥厚が弱く、沈線文と口縁部上端に刺突文が施される。178は数条の浅い沈線文が、そして口唇部には刺突文が施されている。179は僅かに肥厚し、間延びした形状を呈するもので、沈線文と刺突文を交互に組み合わせて文様が施される。

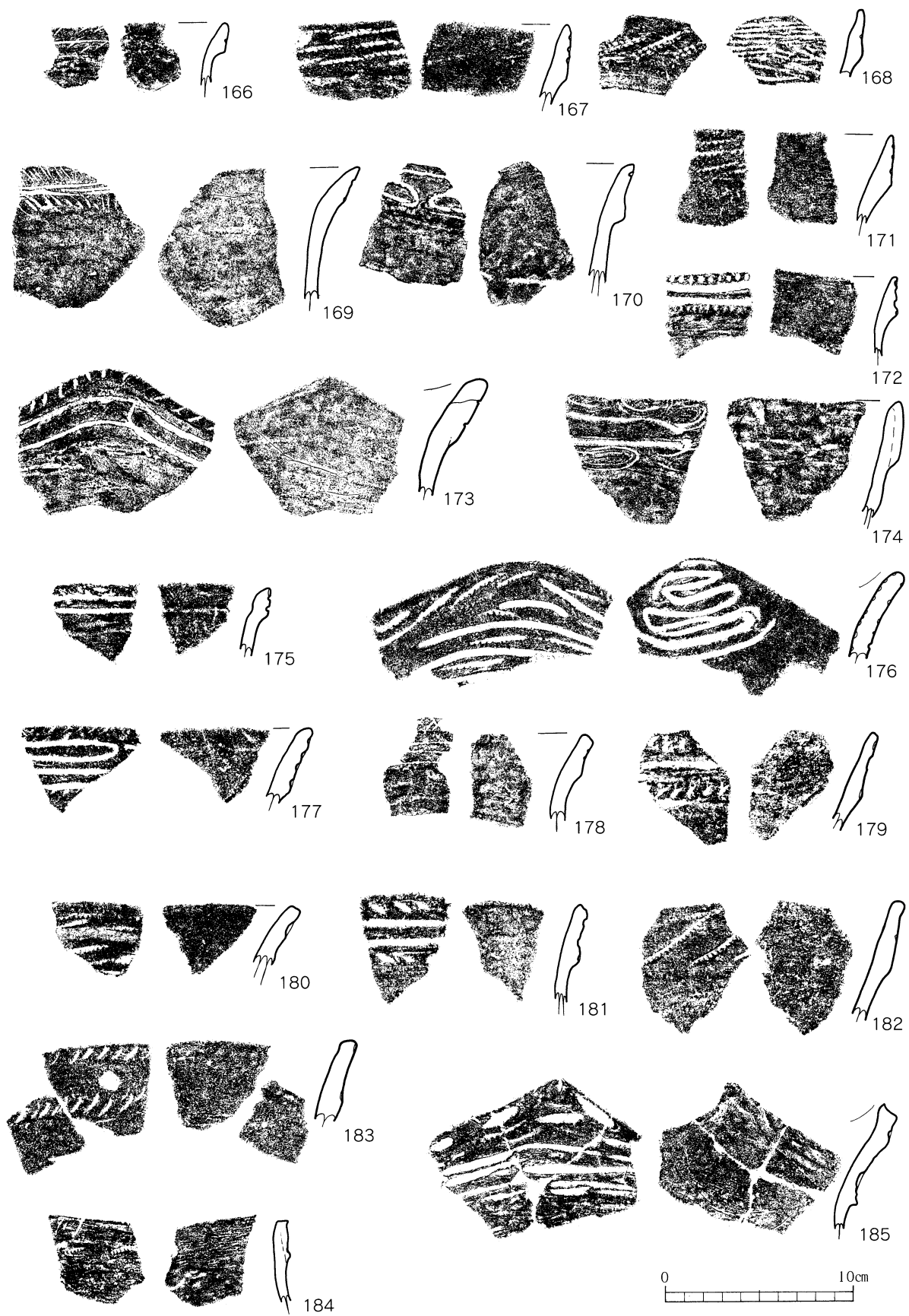
180・182・184は貝殻刺突文が施される。181は2条の沈線文があり、その上下に刺突文が施される。183は文様帯上下端に刺突文が施される。なお、口縁部に円形の空洞部分があるが、人為的なものではないと考えられる。

185は波状口縁を呈するものである。また特異な口縁部形態のもので、僅かに肥厚し、やや内湾する。文様は波状口縁に沿って短沈線文が施され、その他に数条の沈線文と貝殻刺突文が施される。

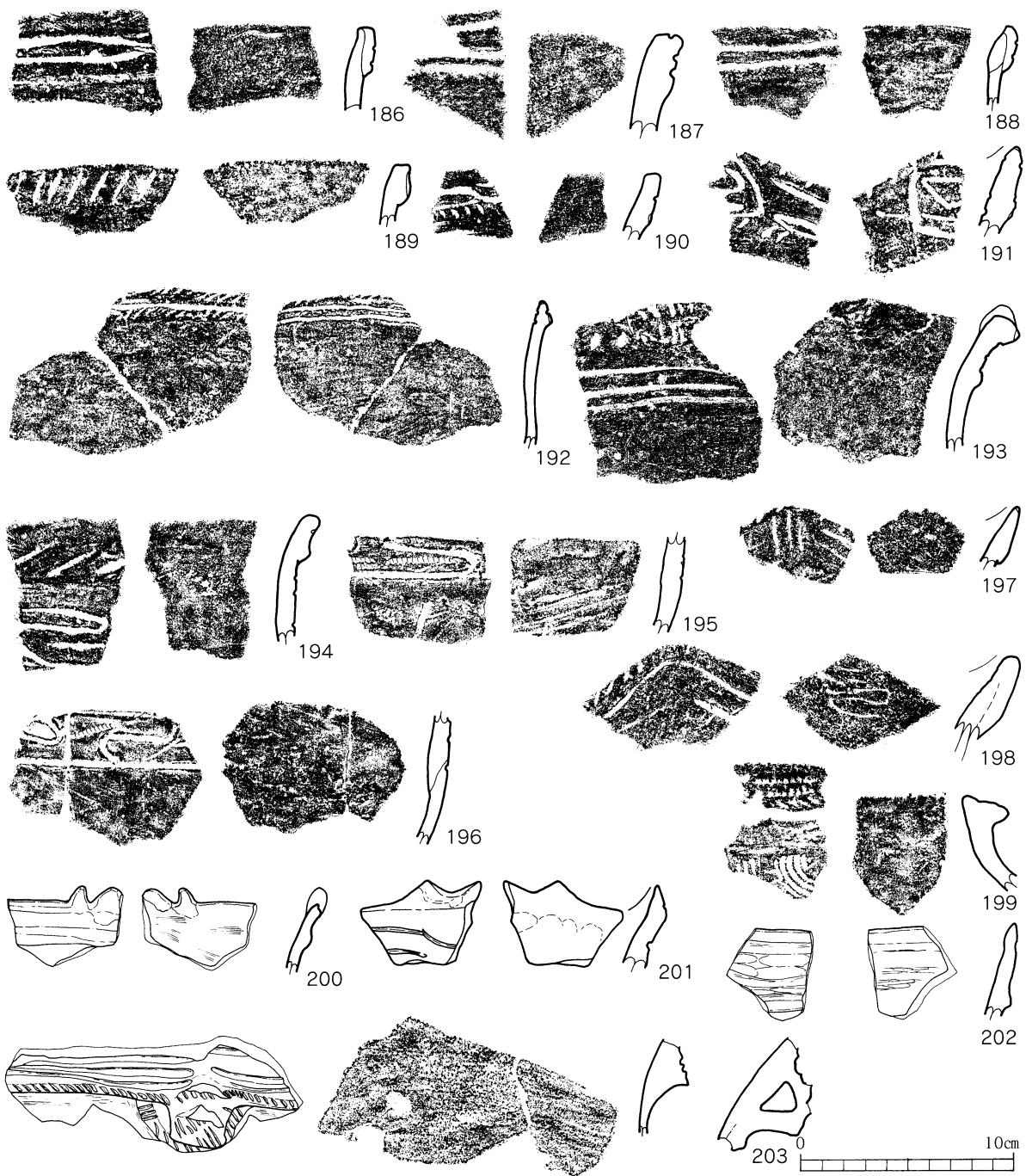
186・187は口縁部断面が方形に近い形を呈する。186～188は沈線文が施され、また187は口唇部にも沈線文が施される。189は刺突文が施される。190・191は口縁部が僅か



第23図 縄文土器 II c類



第24図 縄文土器 II d類 (1)



第25図 縄文土器 II d類 (2)

に肥厚し、沈線文と刺突文が施される。191は内外面に幾何学的な沈線文が施され、また外面の文様帯下端と口唇部に刺突文を施す。

192は口縁部文様帯の幅が狭く、断面三角形を呈する口縁部から胴部へまっすぐのび、II a類に類似するものである。内外面共に文様をもち、外面は1条の沈線文とその上下に刺突文が施され、内面には2条の沈線文と口縁部上端に刺突文が施される。内面にナデ調整痕が

認められる。

193は口縁部上端に粘土紐を貼り付けた突起状のものをもつ。文様は数条の沈線文が施され、口縁上端部には円形の刺突文が施される。また粘土紐を貼り付けそこに2段の刺突文が施されている。

194～196は胴部にまで文様が及ぶものである。195・196は文様の構成から指宿式土器とも考えられるが、市来式土器の器形を呈する194が、195・196と類似する文様を持つことから、市来式土器の可能性があるとここで取り上げた。194は口縁部に斜位の刺突文が施され、胴部には曲線的な沈線文が施されている。195・196は胴部片であるが、曲線的な沈線文とその内側に貝殻刺突文が施されている。

197・198は波状口縁を呈し、沈線文と口縁部上端に刺突文が施される。また、198は内面にもS字状の沈線文が施されている。199は口縁部が断面三角形に近い形を呈しつつ、口縁部から胴部へと強く外反している。口唇部に貝殻刺突文が施され、胴部には貝殻腹縁部によって、半円状に文様が施される。

200・201はともに口縁部に山形突起をもつものである。200は粘土紐を貼り付け、2か所の突起部を作る。201は口縁部に沈線文が施され、内面には指頭圧痕が残る。

202は内外面にミガキのような痕跡を残すものである。

203は橋状把手部である。刺突文と沈線文を組み合わせ文様が施されている。

### Ⅲ類 (第26図 204～221)

口縁部が弱く肥厚し、口縁部が丸みを帯びるか平坦面をもつものである。

204は口唇部に1条の沈線文が施される。205～207は口唇部に円形の刺突文が施され、206・207は内外面に貝殻条痕が残る。208・209は口唇部が平坦面をもち、若干丸みを帯びるもので、208は口縁部上端に、209は口唇部にそれぞれ刺突文が施される。

210は口唇部に刺突文をもち、口縁部断面が若干三角形を呈している。211は口唇部に数条の沈線文が施され、また口縁部は肥厚して丸みを帯びる。212は口唇部に貝殻刺突文が施される。

213は口縁部が肥厚し、口唇部に1条の沈線文が施される。214は口唇部が平坦となり、そこに斜位の刺突文が施される。

215・216は口唇部にそれぞれ2条の沈線文が施される。216～219は口縁部が肥厚し、丸みを帯びる。217は斜位の刺突文が施される。218は口唇部に1条の沈線文があり、口縁部上端には斜位の刺突文が施される。219は胴部が張る器形で、口唇部に斜位の刺突文が施される。

220は口唇部が平坦になり、2条の貝殻刺突文が施される。221は口縁部が肥厚し、斜位の貝殻刺突文が施される。

### Ⅳ類 (第27図 222)

胴部1点のみの出土であるが、本遺跡出土の磨消縄文系土器の中で最も古く位置づけられると思われるものである。太めの沈線文と磨消縄文が施されている。1点のみの出土で



第26図 縄文土器 Ⅲ類

あり、しかも胴部片ということで断定はできないが、小池原上層式土器と位置づけて良いものであろう。

**V類 (第27図 223)**

口縁部から胴部にかけて直行するもので、口唇部に1条の沈線文が施され、外面には間隔を開けて2条の刺突文が施されている。

**VI類 (第27・28図 224~250)**

口縁部が肥厚し、頸部で強く外反し胴部が張り出すものである。口縁部・頸部・胴部に文様が



施され、磨消縄文と刺突文・沈線文などが施される。器面は内外面ともにミガキ調整が行われている。

224は口唇部に刺突文があり、胴部には磨消縄文が施され鉤状に描くものである。橋状把手をもち、上部に窪みをもつ。橋状把手にS字状の沈線文が施されており、これは鐘崎式土器の古い段階にみられるものである。

225～233は口唇部に1条ないし2条の沈線文と刺突文を組み合わせている。そして、頸部から胴部にかけて磨消縄文が施されている。225～227が頸部への外反が強いものであるのに対し、228～233は緩やかに胴部へと続き、口縁部の肥厚も弱い。

234～238は胴部片である。234・237はS字状に沈線文が施されており、237には欠損しているものの把手が付いていたことが分かる。

239～241も口縁部から緩やかに胴部へと続く器形であるが、磨消縄文は施されず、沈線文のみによって文様が構成されている。

242は橋状把手がついており、口縁部から把手にかけてS字状の沈線文が施されている。また胴部に描かれた文様は次の段階の北久根山式土器で見られるようになる文様であることから、この土器は鐘崎式土器から北久根山式土器への過渡期に位置づけられると思われる。

243～246は鐘崎式土器に伴う把手あるいは突起部分である。鐘崎式土器は橋状把手と突起部がそれぞれ2つずつあり、それらがそれぞれお互いに向き合う形で配置され、そして口縁部文様もその4か所を中心に展開していると考えられる。

243は口唇部に斜位の刺突文が施され、1条の沈線文が橋状把手部では2条に分かれ1条は曲線的に描かれる。胴部には2条の沈線文が施される。244～246は穿孔が施されるものである。244は口唇部に刺突文があり、胴部に沈線文が施される。245・246は口唇部に縦位の沈線文と曲線的な沈線文が施され、類似した文様構成をもつものである。

247～249は浅鉢形土器である。247は口唇部及び頸部にそれぞれ沈線文が施される。249は橋状把手をもち、文様が橋状把手を中心に展開している。口唇部は把手部付近に刺突文が施される。胴部では橋状把手部下にS字状が沈線文を施される。248は無文のものである。250は底部であり、1点のみの出土である。

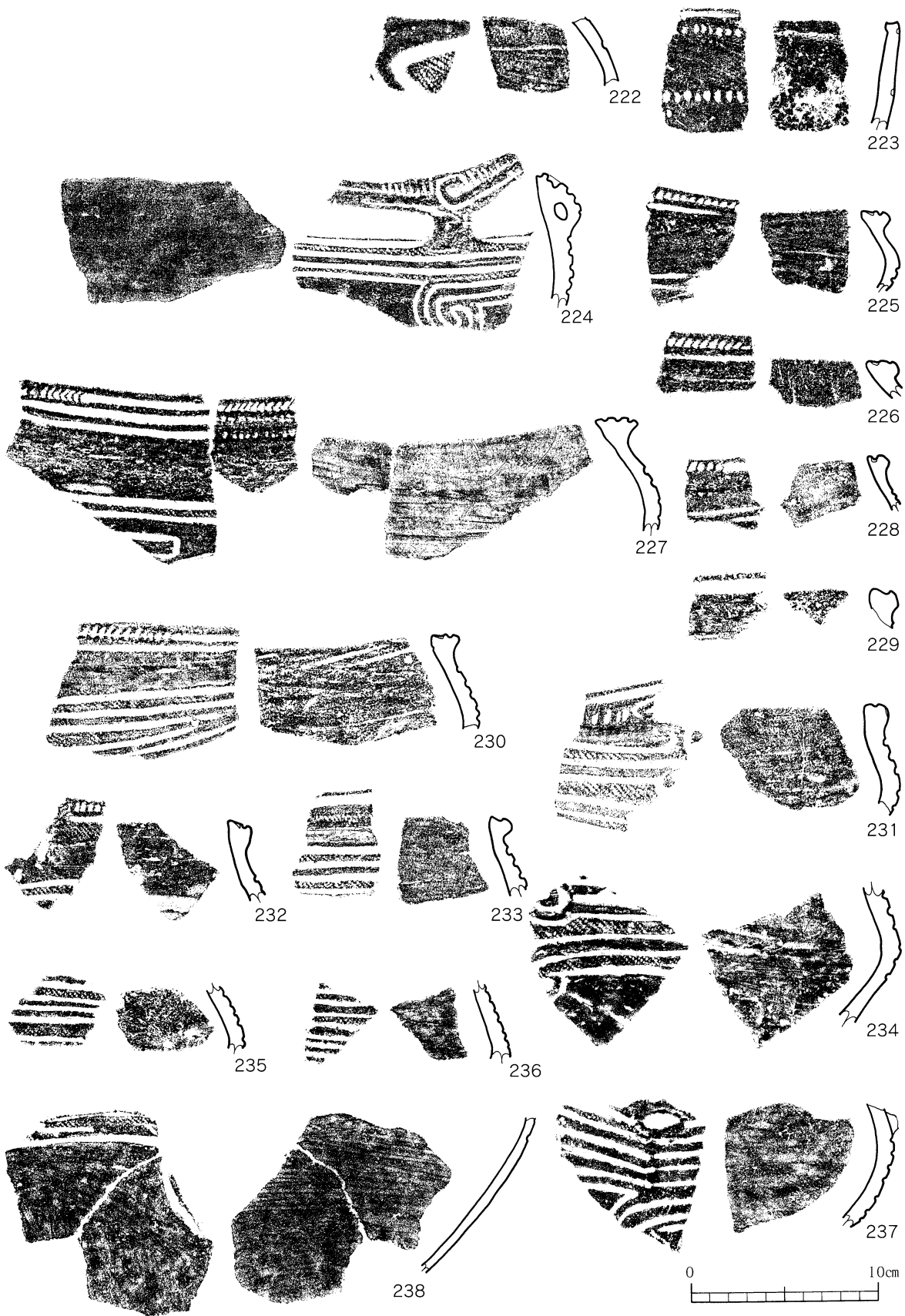
## VII類 (第29図 251～262)

VI類に器形・文様などが類似するものである。しかし、VI類に比べて口縁部が間延びし、文様帯の幅が広がる。また文様にも特徴的なものがあるため、ここでは類を別にして取り上げる。

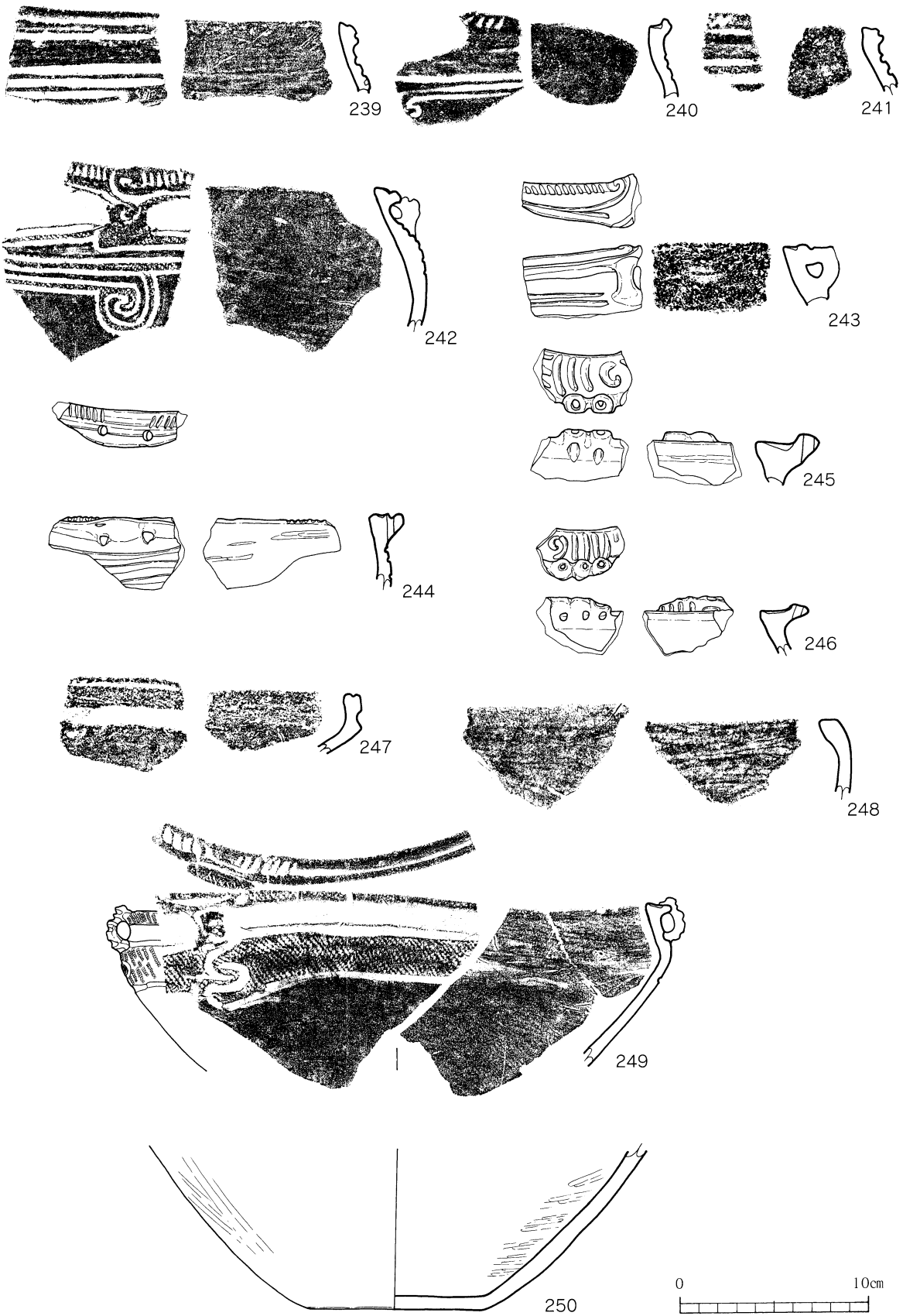
251は、口縁部の橋状把手が付く部分である。橋状把手の上端部が欠損しているが、この部分が膨らみをもち、瘤状のものがついていたのではないかと思われる。この橋状把手を中心に文様は展開し、橋状把手部分には沈線文と磨消縄文によって構成され、また沈線端には円形の刺突文が施されている。そして橋状把手から離れるにつれて、口唇部には刺突文が施され、口縁部には磨消縄文が施されている。

252は胴部片であるが、沈線文のみによって構成され、渦巻状の文様が施されている。

253～255は口縁部がやや外反しており、沈線文と磨消縄文が施されている。253は4条の



第27図 縄文土器 IV類・V類(2)・VI類(1)



第28図 縄文土器 VI類 (2)



第29図 縄文土器 VII類

沈線文と磨消縄文が、254は2条の沈線文と磨消縄文がそれぞれ口縁部に施されている。255は口縁部と頸部に沈線文と磨消縄文が施されている。

256・257は内外面共に文様が施されたものである。256は口縁部内面に粘土紐を貼り付け、その上面に穿孔が施されている。頸部には3条の沈線文が施され、内面には縦位に7条の沈線文が施されている。内面の沈線端と沈線間に円形の刺突文がある。257は口縁部が「く」字状になり、やや内側に入る。内外面に文様をもち、内面には縦位の沈線文とその下端には円形の刺突文が施される。口唇部には刺突文があり、胴部外面に磨消縄文が施

される。

258は口縁部が肥厚し、口唇部に粘土紐を貼り付け、そこに刺突文が施される。

259～261は胴部片である。259・260は沈線文と磨消縄文が施され、沈線端に円形の刺突文が施される。261は沈線文と磨消縄文で幾何学的な文様が施されている。

262は浅鉢形であり、口縁部に方形に沈線文を描き、その中に貝殻刺突文が施され擬似縄文と思われる。

#### VIII類 (第30図 263～271)

口縁部が肥厚し、胴部が張るものである。

263は器壁が厚く、頸部で強く外反し胴部へいたる。口縁部に粘土紐を貼り付け、そこにM字状の沈線文が施されていたと思われる。口縁部上端に斜位の刺突文と、その下に数条の沈線文が施される。

264・266・267は斜位の刺突文が施され、265は刺突文下に2条の沈線文が施される。267は口縁部が弱い断面三角形を呈し、若干内湾する。

268は波状口縁となり、頂部と考えられる箇所に粘土紐を貼り付け、M字状の沈線文が施される。頂部以外には斜位の沈線文が施されている。269は若干波状口縁を呈し、M字状に粘土を貼り付け、そこに沈線文が施されている。口縁部内面に沈線文が、口唇部に刺突文が施される。また橋状把手をもつ。

270・271は口縁部が断面三角形を呈し、やや内湾する。270は波状口縁となり、頂部に縦位の沈線文を、その横には沈線文が楕円形状に施され、その間に円形の刺突文が施されている。271は2条の沈線文とその上下に刺突文が施されている。

#### IX類 (第30図 272～274)

口縁部が断面三角形を呈して内湾し、胴部へ直行するものである。

272は口縁部に数条の沈線文が施される。274はこの類に属すると考えられる浅鉢の底部であり、やや上げ底気味になる。

#### X類 (第22・31図 149・275～296)

無文土器である。

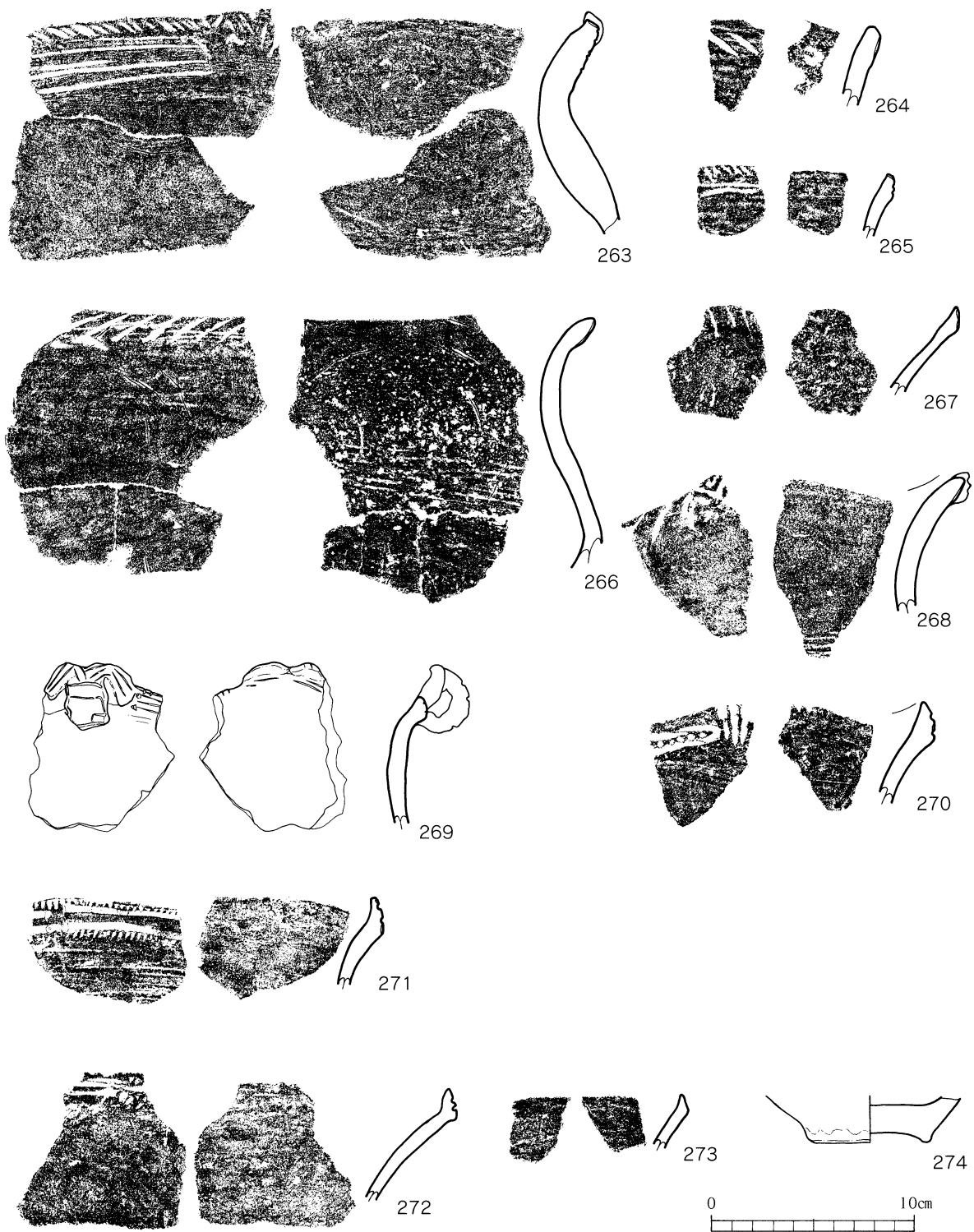
149・275～285は口縁部が断面三角形を呈していることから、市来式の無文土器である可能性が考えられる。149の口径は22cmである。278は内面に、280は外面にそれぞれは貝殻条痕が認められる。

286・287は口唇部に平坦面をもち、胴部に向かって直行している。287は、内面にミガキのような調整痕がみられる。288は口縁部先端がすぼまり、289も同様の器形が考えられる。290は口縁部が外反する。

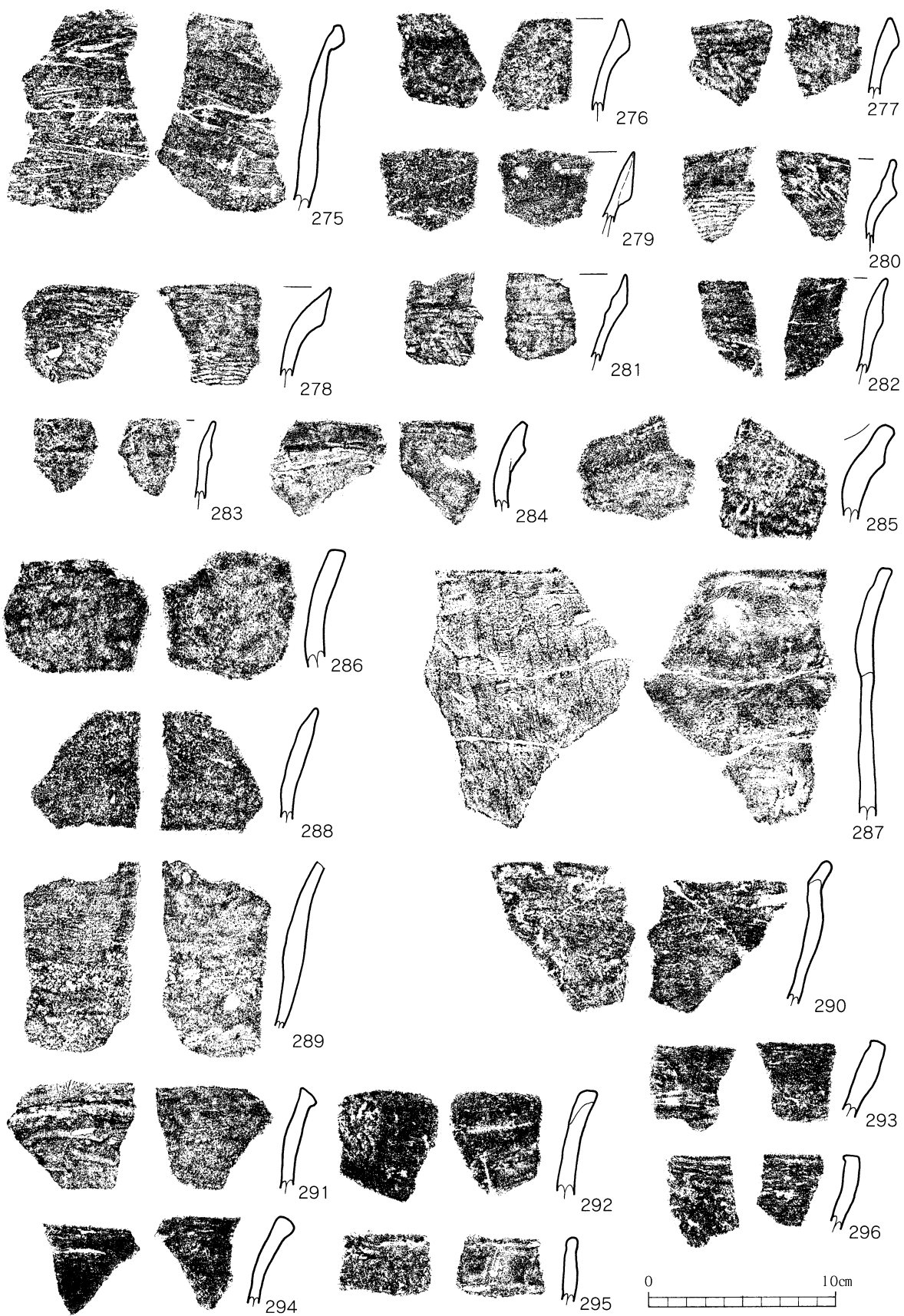
291は口縁部が断面三角形に近い形をしており、また292～296は口唇部に平坦面をもち、口縁部が直行する。291～296は草野式の無文土器の可能性はある。

#### XI類 (第32図 297～303)

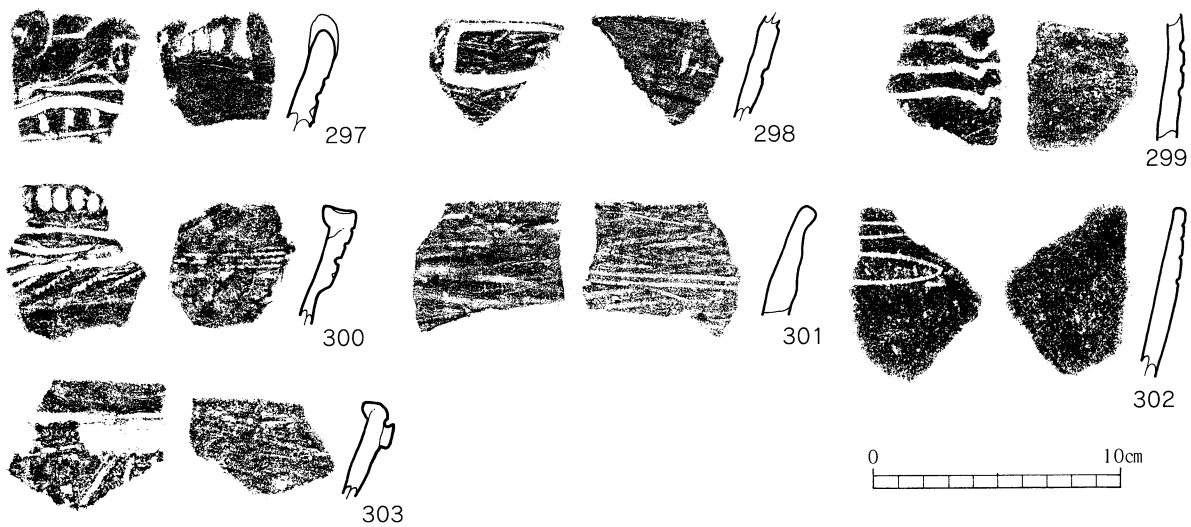
297は沈線間に列点文が施され、擬似縄文を描いている。口唇部には粘土紐をねじり込みながら貼り付けている。これらの手法は後期前半にみられるものである。



第30図 縄文土器 VIII類・IX類



第31図 縄文土器 X類



第32図 縄文土器 XI類

298は半裁竹管状の工具で逆「コ」字状に描くものであり、おそらく草花形文様の指宿式土器であると考えられる。299は3条の沈線文が施されるもので、後期前半のものと考えられる。300は口縁部を肥厚させ、斜位の貝殻刺突文を施す。口唇部はさらに内側へ断面三角形に肥厚させ、その上面に凹点が施されている。類例がなく確実な位置づけは難しいが、貝殻刺突文が市来式土器に類似すること、そして口縁部及び口唇部の肥厚が九州西海岸側の土器にみられることから、その両者の折衷形とも考えられる。

301は内外面に貝殻条痕が残り、無文の土器である。

302は口縁部が直行し、曲線的な沈線文がみられる。

303は口唇部が内面に張り出し、口縁部には粘土紐を貼り付け、その粘土紐直上に1条の沈線文が施される。なお、貼り付けた部分が一部剥離している。

#### 底部

平底あるいはやや上げ底気味になるものをI類とし、脚台状のあるものをII類とした。

#### I類 (第33図 304~315)

304・309は内外面にヘラナデ調整痕がみられる。305・306は底部の中央部分が凹んでいるものであり、306は内外面にヘラナデ調整痕が残る。307は上げ底気味になり、外面にはナデ調整痕が残る。308も上げ底気味になり、内外面にヘラナデ調整痕が残る。

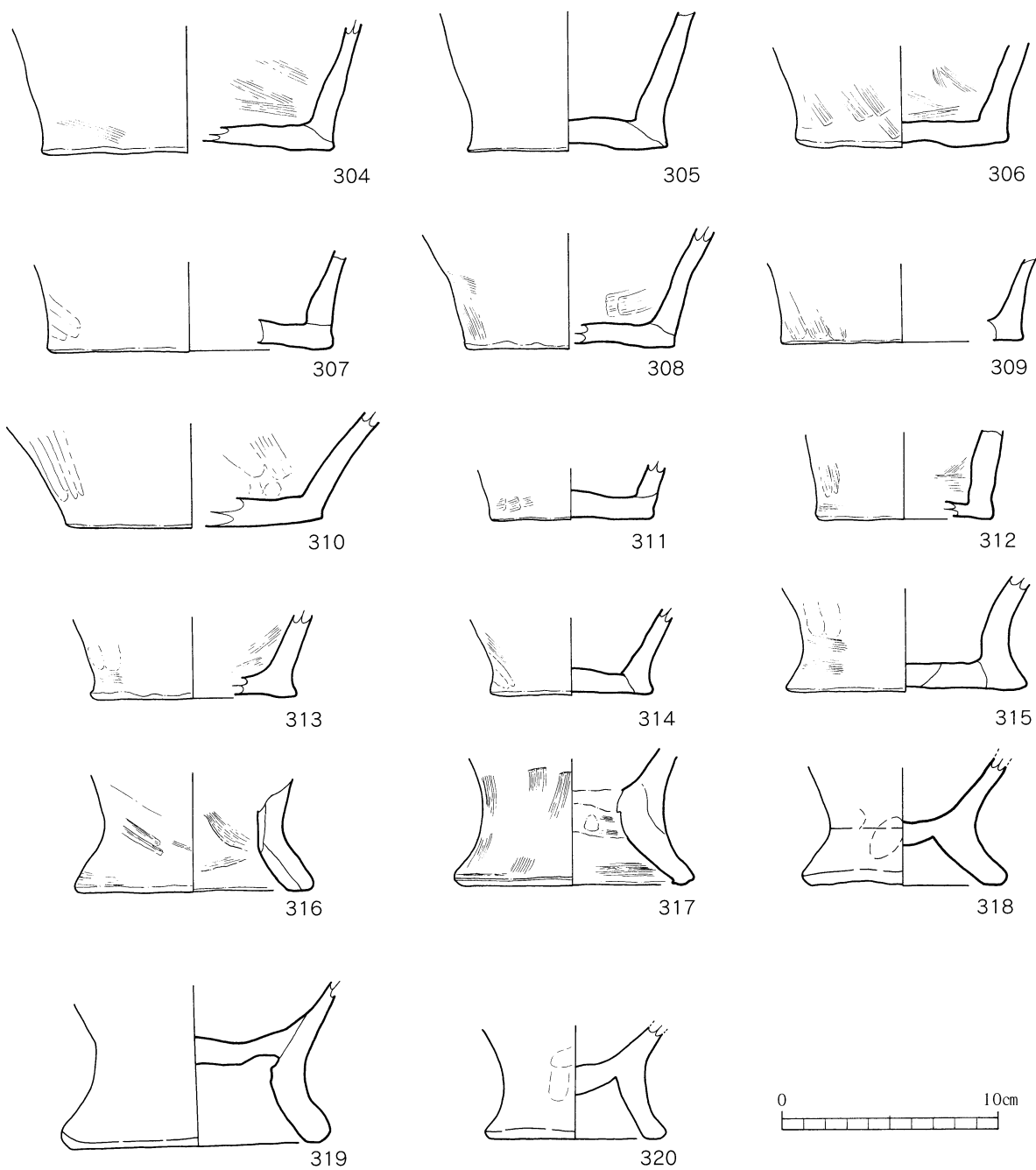
310・311は底部内面の中央部へしだいに器壁が厚くなるもので、310は外へ大きく開きながら胴部へといたる。内面にはヘラナデ調整痕、内底面部には指頭圧痕、外面にはナデ調整痕が残る。312は底面は比較的薄く、胴部は厚みを持ち、内外面にナデ調整痕が残る。

313・314・315は張り出し部をもつものである。

#### II類 (第33図 316~320)

脚台である。316・317は内外面に調整痕が残る。318・319・320は脚台内面天井部が残る。

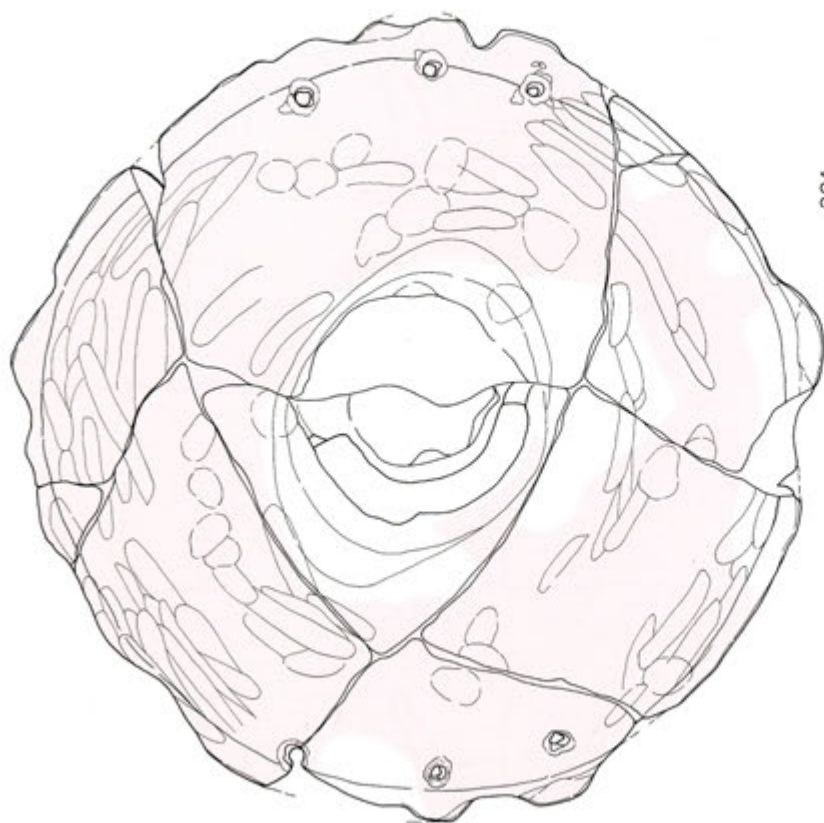




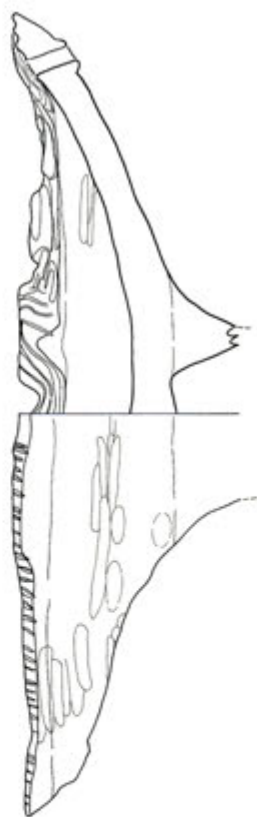
第33図 縄文土器 底部Ⅰ・Ⅱ類

台付皿形土器(第34～36図 321～328)

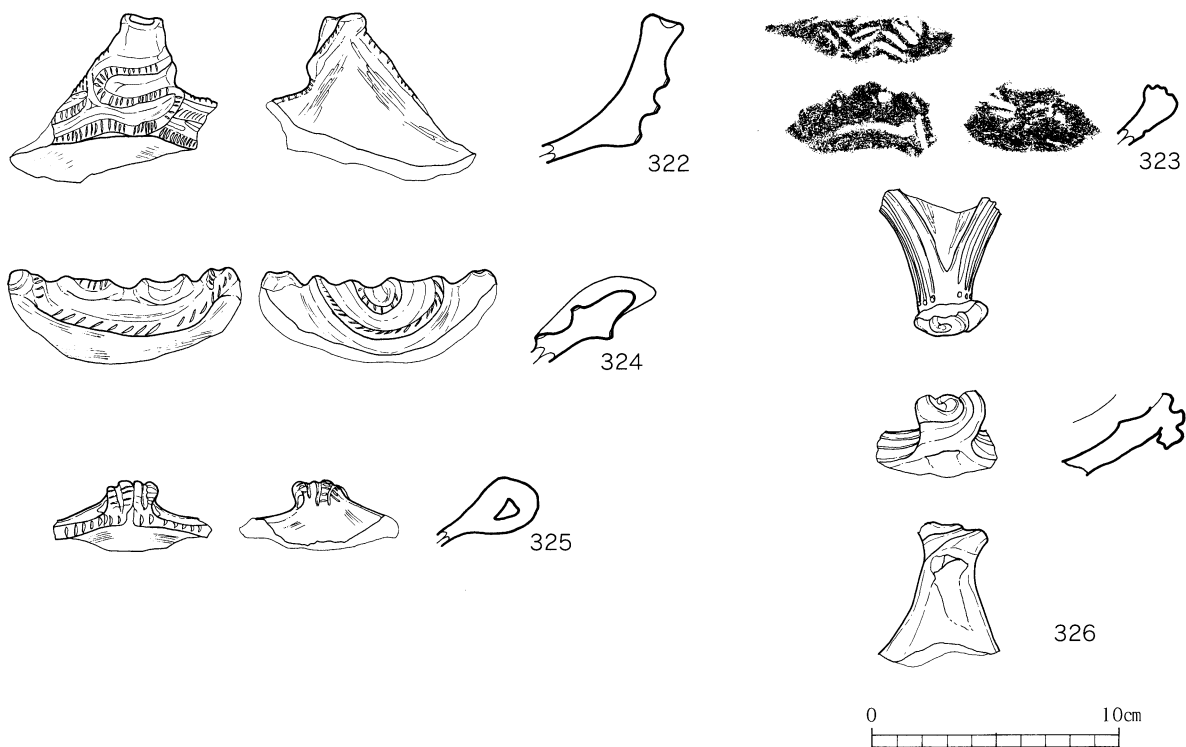
321は脚部が欠損しているものの、直径24cmの皿部がほぼ完形になるものである。内外面共に丹が塗られており、ほぼ全面に塗布されていたと思われる。内面は縁に刺突文を施し、文様帯部分は4か所の粘土紐の貼付け部を中心に文様が展開している。相対する2か所にそれぞれ3つの穿孔が施され、それと直交する2か所にはM字状の粘土紐貼付けがある。文様は沈線文によって構成され、S字状の文様が展開する。内外面共にヘラナデ調整痕が残り、



321



第34図 縄文土器 台付皿形土器 (1)



第35図 縄文土器 台付皿形土器（2）

脚部外面付近には指頭圧痕も多く見られる。

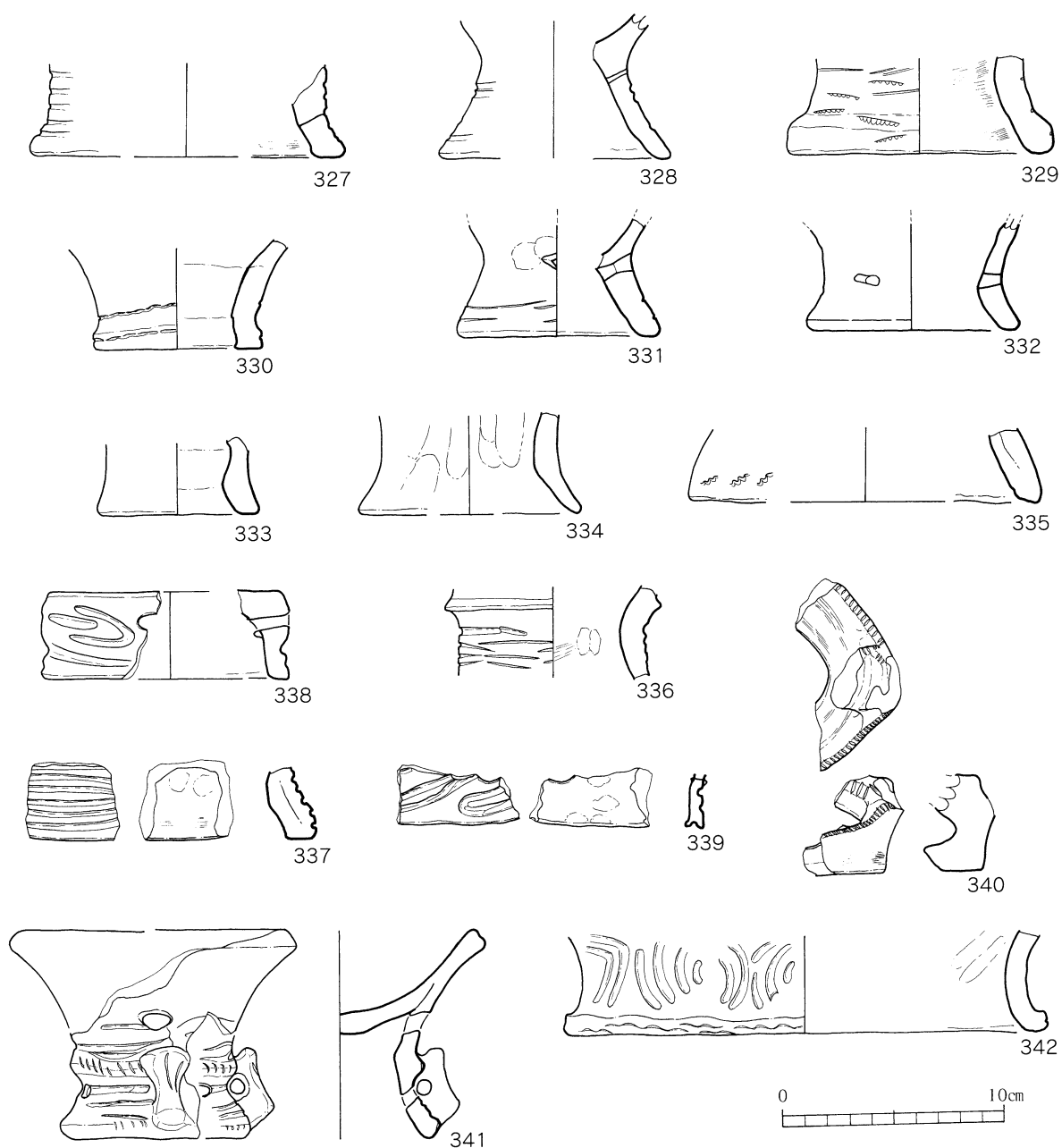
322は突起部分と思われ、頂部には窪みが作られている。内面に文様はなく、辺縁部に刺突文が施されるのみである。外面には粘土紐をS字状に貼り付け、そこに刺突文が施されている。323は外面に1条の沈線文、内面及び口唇部には沈線文がM字状に施されている。作りは粗雑なものである。324は外面から内面へ粘土紐を貼り付け、2か所に山形の突起部を作る。文様は粘土紐に刺突文が施される。

325・326は磨消縄文系土器の台付皿形土器と考えられる。325は橋状把手状になり、そこに刺突文が施されている。326は形状が広がらず皿部が小さくなると考えられる。沈線文と沈線端に円形の刺突文が施されており、この文様については猪の肩甲骨を模倣したものでないかと思われる。

**脚部（第36図 327～342）**

ここでは、脚部を一括して取り上げた。沈線文や穿孔などの文様をもつ脚部であるが、台付皿形土器の脚部とみなした。ただ、同時期の深鉢などの脚部にも簡素ではあるが、施文されるものがあるため、深鉢等の脚部である可能性もありうる。

327・328は横位の沈線文が施される。329・330・335は貝殻刺突文が施されるものである。331・332は穿孔が認められる。いずれも穿孔は相対する位置にもう一つ穿孔があった可能性が強い。



第36図 縄文土器 台付皿形土器脚部

333~334は、深鉢の可能性も強いが、ここでは台付皿形土器に伴うものとして取り上げた。  
 336・337は脚の一部と思われ、数条の沈線文が施されている。338・339は太い沈線文  
 によって曲線的な文様が施されているものである。338は欠損しているものの穿孔がみられ、  
 339は器壁が薄い。

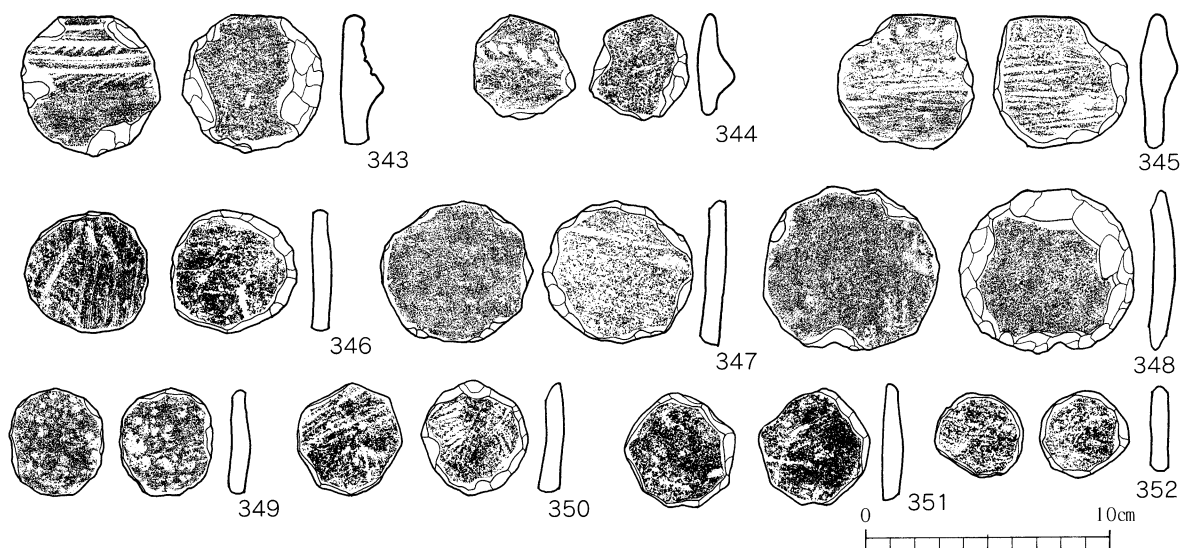
340は脚部上端に刻目が施される。ドーナツ状の底になり、その底部から橋状につくられ  
 た部分がある。

341は脚部及び皿部が一部残存している。脚部に橋状把手がつき、縦位の刺突文が施されている。脚部は脚部下端および、皿部への移行部分に刺突文が施され、その間に沈線文が施されている。皿部には文様が施されず、穿孔がある。

342は底部として考えると径が比較的大きくなることから、口縁部の可能性もあるが、作りが粗雑であるためここで取り上げた。沈線文を曲線状に描き、貝殻刺突文が施される。

### 円盤形土製品 (第37図)

全部で10点の円盤形土製品が出土した。いずれも破損した土器の破片を利用したものであり、周縁を細かく打ち欠くことによりほぼ円形に仕上げている。343～345は口縁部破片を使用したもので、いずれも市来式土器の特徴である断面三角形の文様帯をもつ。他の7点も器面調整が市来式土器に類似していることから縄文時代後期中半に該当する。大きさは3.2～7.2cmに、重さは11～47gにおさまる。



第37図 縄文土器 円盤形土製品

第3表 円盤形土製品

図番号	番号	出土区	層位	取上番号	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g
37	343	A20	Ⅱa		5.68	5.80	1.60	39.65
37	344	A27	I c		4.15	4.20	1.27	19.94
37	345	B30	Ⅱa		5.47	5.58	1.50	40.03
37	346	AB28, 29	I	自然流路 3	4.98	5.04	0.88	25.48
37	347	AB17, 18, 19		自然流路 6	5.80	6.23	0.94	38.61
37	348	A29	Ⅱa		6.50	7.20	0.86	46.93
37	349	A16A17	I	溝状遺構 4	4.40	3.90	0.66	14.59
37	350	AB28AB29	I	自然流路 3	4.60	4.30	0.80	16.58
37	351	B26		炉跡 2	4.70	4.50	0.90	19.51
37	352	B26		土坑 3	3.45	3.20	0.87	11.39

第4表 縄文土器観察表

補図 番号	番号	出土地		器種	型式	部位	色調		調整		胎土				文様	
		区	層				内面	外面	内面	外面	焼成	石灰	角礫石	長石		その他
13	1	B-18・土器溜	IV	深鉢	松山式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○	○	白色	口縁部に斜位刺突文
13	2	B-16	IV	深鉢	松山式	口縁部	灰黄	にぶい黄橙	ナデ	条痕	良	○	○			口縁部に斜位沈線文
13	3	RI4		深鉢	松山式	口縁部	にぶい褐	にぶい褐		ナデ	良	○	○			口縁部に斜位貝殻刺突文
13	4	B-17	IV	深鉢	松山式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	条痕	条痕	良	○		○	白色	口縁部に貝殻刺突文と刺突文
13	5	A-17	IV	深鉢	松山式	口縁部	浅黄橙	橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に横位貝殻刺突文
13	6	B-17・土器溜	IV下	深鉢	松山式	口縁部	褐灰	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に斜位貝殻刺突文
13	7	A-17・土器溜	VII上	深鉢	松山式	口縁部	灰黄	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に斜位貝殻刺突文
13	8	B-17・土器溜	VII	深鉢	松山式	口縁部	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○	○	白色	口縁部に縦位刺突文
13	9	A-17・土器溜	VII上	深鉢	松山式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に縦位刺突文
13	10	B-17・土器溜	VII	深鉢	松山式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	貝殻条痕	良		○	○		口縁部に一条の沈線文
13	11	A26・SC2	I	深鉢	松山式	口縁部	浅黄橙	浅黄橙			良	○	○			口縁部に二条の沈線文
13	12	A-17	III	深鉢	松山式	口縁部	浅黄橙	にぶい橙		貝殻条痕	良			○	白色	口縁部に二条の沈線文
13	13	A-17・土器溜	VIII	深鉢	松山式	口縁部	灰黄	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良		○		白色	口縁部に一条の沈線文
13	14	A-17	IV	深鉢	松山式	口縁部	にぶい黄橙	灰黄褐	貝殻条痕	貝殻条痕	良	○	○			口縁部に一条の沈線文と下に斜位貝殻刺突文
13	15	A-17	IV	深鉢	松山式	口縁部	にぶい黄褐	にぶい褐		条痕	良	○			白色	口縁部に一条の沈線文と上下に刺突文
13	16	A-17	IV	深鉢	松山式	口縁部	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に一条沈線文と上下に横位・斜位の貝殻刺突文
13	17	RI4		深鉢	松山式	口縁部	灰黄褐	黄灰	ミガキ?	ミガキ?	良	○	○		白色	口縁部に二条の沈線文と刺突文
13	18	B-17	III	深鉢	松山式	口縁部	にぶい黄橙	灰褐		ナデ	良	○	○		白色	口縁部に二条の沈線文と円形刺突文
13	19	B-18	IV	深鉢	松山式	口縁部	にぶい黄橙	灰白		ナデ	良	○	○		白色	口縁部に二条の沈線文と刺突文
13	20	B-17	IV	深鉢	松山式	口縁部	にぶい橙	橙	貝殻条痕	貝殻条痕	良	○	○	○		口縁部に貝殻刺突文と刺突文
13	21	A-17	IV	深鉢	松山式	口縁部	灰黄	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に二条の横位貝殻刺突文と上下に沈線文
13	22	RI4		深鉢	松山式	口縁部	褐灰	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に縦位沈線と貝殻刺突文
13	23	A-17	IV	深鉢	松山式	口縁部	橙	にぶい黄橙		ナデ	良	○	○		白色	口縁部に縦位沈線文と横位・斜位の貝殻刺突文
13	24	B-18・土器溜	VII	深鉢	松山式	口縁部	浅黄	にぶい黄橙	条痕	ナデ	良	○	○	○		口縁部に縦位・横位の三条の沈線文
13	25	B-17・土器溜	VII	深鉢	松山式	口縁部	橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	良		○		白色	口縁部に斜位の刺突文/内面に三条の沈線文
14	26	B-17・土器溜	IV	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	にぶい黄橙	条痕	条痕	良	○	○		白色	口縁部に斜位刺突文
14	27	B-17	IV	深鉢	市来式	口縁部	灰白	灰白	ナデ	ナデ	良	○				口縁部に刺突文
14	28	A-25・26	IIa	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に斜位刺突文
14	29	RI4		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐			良				白色	口縁部に縦位刺突文
14	30	B-17・土器溜	IV下	深鉢	市来式	口縁部	黄灰	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良		○	○		口縁部に刺突文
14	31	A-17	VII	深鉢	市来式	口縁部	灰褐	にぶい黄橙	貝殻条痕	貝殻条痕	良				黒雲母	口縁部に縦位刺突文
14	32	A-22・23 SD1		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ		良	○	○		白色	口縁部に円形刺突文
14	33	B-18・土器溜	VII	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○		○		口縁部に斜位貝殻刺突文
14	34	B-17	VII	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に斜位貝殻刺突文
14	35	A-17	XIV	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に斜位貝殻刺突文と沈線文
14	36	A-17	VII	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に刺突文
14	37	RI4		深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	にぶい褐			良		○	○	白色	口縁部に縦位刺突文
14	38	A26・SC2	I	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	普	○		○		口縁部に縦位刺突文
14	39	A-29	IIa	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に横位二条の貝殻刺突文
14	40	B-17・土器溜	IV	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	貝殻条痕	良	○			白色	口縁部に縦位貝殻刺突文
14	41	RI4		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻条痕		良	○	○			口縁部に斜位貝殻刺突文
14	42	B-18	VII	深鉢	市来式	口縁部	灰白	にぶい黄橙	ナデ	条痕	良	○			白色	口縁部に斜位刺突文
14	43	B-17・土器溜	VII	深鉢	市来式	口縁部	灰白	にぶい褐	条痕	条痕	良	○	○			口縁部に縦位刺突文
14	44	RI4		深鉢	市来式	口縁部	黄灰	黄褐	条痕	条痕	良	○				無文
15	45	A-17・土器溜	IV	深鉢	市来式	口縁部	橙	橙	貝殻条痕	ナデ	良			○	白色	口縁部に斜位貝殻刺突文
15	46	A-17	VII	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐			良	○			白色	口縁部に横位貝殻刺突文
15	47	B-17,	III	深鉢	市来式	口縁部	灰黄	にぶい黄橙	貝殻条痕	ナデ	良	○	○			口縁部に沈線文と貝殻刺突文
15	48	A26・SC2	I	深鉢	市来式	口縁部	灰黄	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	普	○	○			口縁部に沈線文と下に刺突文

項目 番号	番号	出土地		器種	型式	部位	色調		調整		胎土					文様		
		区	所				内面	外面	内面	外面	塊成	石更	角四石	長石	その他			
15	49	RI4		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	条痕	良	○	○		口縁部に二条の貝殻刺突文			
15	50	B-17・土器溜		IV	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	にぶい褐				良	○	○	○	白色	口縁部に二条の沈線文と間に縦位刺突文
15	51	RI4		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	褐灰	貝殻条痕	貝殻条痕	良	○	○		口縁部に沈線文数条			
15	52	AB-17・18・19 RI1		I	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	黒褐	ナデ			良	○	○		白色	口縁部に縦位刺突文
15	53	RI8		I	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		普	○			黒雲母	口縁部に三条の沈線文と沈線下に刺突文・竹管文
15	54	AB-28・29 RI1		II	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		良	○	○		白色	口縁部に横位貝殻刺突文と二条の沈線文
15	55	AB28・29 RI1		I	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	灰褐	ナデ	ナデ		良	○	○			口縁部に二条沈線文
16	56	B-17		IV	深鉢	市来式	口縁部	黄灰	灰白	ナデ	ナデ		良	○			白色	口縁部に斜位刺突文
16	57	B-16		IV	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		良		○		黒雲母	口縁部に斜位刺突文
16	58	A-17		VII	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	にぶい黄橙				良		○	○	白色	口縁部に横位貝殻刺突文と沈線文
16	59	A-17・土器溜		IV下	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	灰黄褐				良	○	○		白色	口唇部に横位貝殻刺突文と沈線文
16	60	RI4		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ			良	○	○			口縁部に斜位貝殻刺突文
16	61	B-18		VII上	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙				良	○	○		白色	口縁部に斜位貝殻刺突文
16	62	RI4		深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ			良	○	○	○	白色	口縁部に円形刺突文と沈線文
16	63	RI4		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻条痕				良		○			口縁部に斜位貝殻刺突文と上下に沈線文
16	64	A-17		XIV	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ		良	○		○		口縁部に斜位貝殻刺突文
16	65	A-17		IV	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ			良				黒雲母	口縁部に斜位貝殻刺突文と上下に刺突文
16	66	RI4		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰白	ナデ	ナデ			良	○	○			口縁部に二条の横位貝殻刺突文
16	67	AB-17・18・19 RI3		深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ			良	○	○			口縁部に斜位刺突文
16	68	B-18		VII	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	貝殻条痕		良	○			白色	口縁部に縦位刺突文
16	69	B-17・土器溜		VII	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	貝殻条痕		良	○			白色	口縁部に斜位貝殻刺突文
16	70	B-17		IV	深鉢	市来式	口縁部	灰黄	にぶい橙				良	○	○	○	白色	口縁部に上下斜位刺突文
16	71	RI4		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	ナデ	ナデ			良	○	○			口縁部に数条貝殻刺突文
16	72	B-17・土器溜		IV下	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	褐灰	ナデ	ナデ		良				白色	口縁部に浅い沈線文と下に斜位刺突文
16	73	RI4		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ			良	○	○			口縁部に斜位刺突文
16	74	A-17・土器溜		VII上	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	橙	ナデ	ナデ		良	○	○		白色	口縁部に斜位貝殻刺突文と上下に横位貝殻刺突文
16	75	A-22 RI8		I	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		良	○	○			口縁部に二条の沈線文と上下に刺突文
16	76	B-18		IV	深鉢	市来式	口縁部	黒	褐灰	ナデ	ナデ		良				白色	口縁部に貝殻刺突文
16	77	B-17		IV下	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ	ナデ		良	○			白色	口縁部に横位・斜位貝殻刺突文
16	78	B-17・土器溜		VII	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙		ナデ		良		○	○	白色	口縁部に横位・斜位貝殻刺突文
16	79	SD1		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ				良	○	○			口縁部に沈線文と斜位刺突文
16	80	B-18		II	深鉢	市来式	口縁部	褐灰	褐灰	貝殻条痕	貝殻条痕		良	○				口縁部に刺突文と沈線文
17	81	B-18		IV	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ		良	○	○		白色	口縁部に斜位刺突文
17	82	AB-17・18・19 RI3		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐					良	○	○			口縁部に一条沈線文と上下に刺突文
17	83	B-17		VII上	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		良	○	○		白色	口縁部に斜位貝殻刺突文と上下に沈線文
17	84	A26・SC2		I	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	褐	板ナデ			良	○		○		口縁部に横位貝殻刺突文と沈線文
17	85	RI4		深鉢	市来式	口縁部	褐灰	にぶい黄褐	ナデ	ナデ			良	○	○			口縁部に一条沈線文と上下貝殻刺突文
17	86	B-18・土器溜		VII	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	明褐灰	ナデ	ナデ		良	○	○		白色	口縁部に斜位貝殻刺突文
17	87	RI4		深鉢	市来式	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐		ナデ			普	○	○		白色	口縁部に沈線文
17	88	RI4		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ			良	○	○			口縁部に浅い沈線文と円形刺突文
17	89	A-17・土器溜		VII上	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		良		○		白色	口縁部に円形刺突文
17	90	RI4		深鉢	市来式	口縁部	明褐	灰黄褐		ナデ			良	○	○			口縁部に斜位貝殻刺突文と縦位刺突文
17	91	RI8		I	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐黄褐	灰黄褐	貝殻条痕	貝殻条痕		良	○	○			口縁部に刺突文
17	92	RI1		I	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	灰黄	ナデ	ナデ		良	○	○		白色	口縁部に横位貝殻刺突文
17	93	AB28・29 RI1		I	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ		良	○	○	○	白色	口縁部に浅い刺突文
17	94	RI4		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ			良	○				口縁部内外面に貝殻刺突文
18	95	A-17・土器溜		VII	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	灰白	貝殻条痕	ナデ		良		○		白色	口縁部に斜位貝殻刺突文と上下に刺突文
18	96	A26・SC・		I	深鉢	市来式	口縁部	灰黄	にぶい橙	ナデ	ナデ		良	○	○	○	白色	口縁部に斜位刺突文
18	97	B-17		VII上	深鉢	市来式	口縁部	黄灰	にぶい黄橙	条痕	ナデ		良		○		白色	口縁部に沈線文と上下に刺突文

挿入番号	番号	出土地		器種	型式	部位	色調		調整		胎土					文様
		区	層				内面	外面	内面	外面	焼成	石英	角閃石	長石	その他	
18	98	A-17	IV	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○	白色	口縁部に二条の沈線文と上下に縦位刺突文	
18	99	B-18	IV	深鉢	市来式	口縁部	黄灰	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○		口縁部に四条の沈線文と上下に斜位刺突文	
18	100	A26・SC2	I	深鉢	市来式	口縁部	橙	橙	ナデ	条痕	良		○	白色	口縁部に斜位刺突文と沈線文	
18	101	AB28・29 R11	I	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○		白色	口縁部に沈線文と上下に刺突文	
18	102	B-18・土器溜	VII	深鉢	市来式	口縁部	橙	にぶい橙	条痕	ナデ	良	○	○	白色	口縁部に二条の沈線文と上下に横位貝殻刺突文	
18	103	A-22 R18		深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	普	○	○	白色	口縁部に数条貝殻刺突文と円形刺突文	
18	104	A-16	IV	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	褐灰	ナデ	ナデ	良	○	○	白色	口縁部に斜位刺突文	
18	105	B-18・土器溜	VII	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい黄褐		ナデ	良	○	○	白色	口縁部に三条の沈線文と刺突文	
18	106	A27・SD5	II	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良		○	○	白色	口縁部内外面に沈線文/口唇部に刺突文
18	107	A-17・土器溜	VII	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙			良			白色	口縁部に縦位沈線文	
18	108	B-29	I c	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○	白色	口縁部に貝殻刺突文・沈線文・円形刺突文	
18	109	R11	I	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○	白色	口縁部に円形刺突文	
19	110	B-17・土器溜	VII	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○		口縁部に斜位貝殻刺突文	
19	111	B-18	VII上	深鉢	市来式	口縁部	灰黄	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○		白色	口縁部に浅い沈線文	
19	112	B-18・土器溜	VII	深鉢	市来式	口縁部	褐灰	灰黄褐	条痕		良		○	白色	口縁部に一条横位貝殻刺突文	
19	113	R14		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄褐	褐灰	ナデ	ナデ	良		○		口縁部に浅い沈線文	
19	114	B-17	III	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	橙	条痕	条痕	良		○	○	茶白	口縁部に数条の沈線文
19	115	R14		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	良			○		口縁部に沈線文と上下に横位貝殻刺突文
19	116	B-17	IV	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	褐灰		ナデ	良	○	○	白色	口縁部に縦位刺突文	
19	117	B-17・土器溜	VII	深鉢	市来式	口縁部	浅黄橙	にぶい橙	条痕		良	○	○	白色	口縁部に沈線文と上下に横位貝殻刺突文	
19	118	A-17・土器溜	IV	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	橙		ナデ	良	○	○	白色	口縁部に沈線文と上下に斜位貝殻刺突文	
19	119	B-17	VII	深鉢	市来式	口縁部	浅黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良		○	茶白	口縁部に数条の沈線文	
19	120	B-18	IV	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	条痕	ナデ	良	○	○		口縁部に沈線文と横位貝殻刺突文/口唇部に貝殻刺突文	
19	121	A-17	III	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	褐灰	ナデ	ナデ	良	○	○	白色	口縁部に数条の沈線文と上下に刺突文/口唇部に刺突文	
19	122	B-17	III	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	灰褐	ナデ	ナデ	良		○	白色	口縁部に数条の沈線文と斜位刺突文	
19	123	R14		深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○		口縁部に刺突文	
20	124	R14		深鉢	市来式	口縁部	褐灰	褐灰	ナデ	条痕	良	○	○		口縁部に沈線文と刺突文/口唇部に刺突文	
20	125	A-18	II	深鉢	市来式	口縁部	褐灰	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○		口縁部に二条の沈線文と上下に刺突文	
20	126	AB28・29 R11	I	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻条痕	ナデ	良	○	○	白色	口縁部に斜位貝殻刺突文	
20	127	A27・SD5	II	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	ナデ		良	○	○	白色	口縁部に凹線文と刺突文	
20	128	B-17	VII	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	良	○	○	白色	口縁部に斜位刺突文	
20	129	A27・SD5	II	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○		口縁部に沈線文と刺突文	
20	130	R11	I	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	良	○	○		口縁部に沈線文と上下に刺突文	
20	131	A-17	IV	深鉢	市来式	口縁部	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○			口縁部に浅い斜位貝殻刺突文	
20	132	A16・17・SD4	II	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	普	○	○		口縁部に貝殻刺突文	
20	133	B-17	VII	深鉢	市来式	口縁部	灰白	灰黄	ナデ	ナデ	良		○	白色	口縁部に数条沈線文と上下に斜位の貝殻刺突文	
20	134	A-22・23 SD1		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	にぶい黄褐	貝殻条痕	ナデ	良	○	○	白色	口縁部に横位の貝殻刺突文と沈線文	
20	135	A-17・土器溜	VII	深鉢	市来式	口縁部	褐灰	灰褐	ナデ	ナデ	良	○	○	茶白	口縁部に斜位貝殻刺突文	
20	136	B-18・土器溜	VII	深鉢	市来式	口縁部	浅黄橙	灰白	ナデ	条痕	良		○	白色	口縁部に貝殻刺突文	
20	137	A-17・土器溜	VII	深鉢	市来式	口縁部	黄灰	黄灰	ナデ	ナデ	良	○		白色	口縁部に斜位刺突文	
20	138	A-17	IV	深鉢	市来式	口縁部	灰白	灰黄褐		ナデ	良		○	白色	口縁部に沈線文と上下に斜位刺突文	
20	139	R14		深鉢	市来式	口縁部	褐灰	褐灰	貝殻条痕	貝殻条痕	良	○	○		口縁部に横位、斜位貝殻刺突文	
21	140	B-17・土器溜	VII	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	貝殻条痕	良	○	○	○	白色	口縁部に沈線文と竹管文
21	141	B-18	IV	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○	○	白色	口縁部に沈線文と刺突文/内面に沈線文/橋状把手
21	142	B-18・土器溜	VII	深鉢	市来式	口縁部	黒褐	にぶい赤褐	条痕	条痕	良	○	○	白色	口縁部に沈線文と上下に刺突文	
21	143	R14		深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	灰黄褐	貝殻条痕	板ナデ	良	○	○	白色	口縁部に沈線文と横位貝殻刺突文と円形刺突文/内面に貝殻刺突文	
21	144	B-18	VII上	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	褐灰	ナデ	ナデ	良	○	○	白色	口縁部に数条沈線文と下に斜位刺突文	
21	145	B-17・土器溜	VII上	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	褐灰	ナデ	ナデ	良	○	○	白色	口縁部及び口唇部に数条沈線文と上下に斜位刺突文	
22	146	A-17・泥炭層	VII	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	灰褐	ナデ	ナデ	良		○		口縁部に四条の沈線文	



挿入番号	番号	出土地		器種	型式	部位	色調		調整		胎土					文様
		区	層				内面	外面	内面	外面	焼成	石灰	角閃石	長石	その他	
22	147	R14		深鉢	市来式	口縁部			ナデ	ナデ	良	○	○		口縁部に二条の沈線文と上下に斜位貝殻刺突文・凹形刺突文	
22	148	A-17		深鉢	市来式	口縁部	灰白	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○		白色	口縁部にS字状の沈線文	
22	149	B-17・土器溜		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	明褐	条痕	条痕	良		○	○	白色	無文
23	150	A-29		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○		口縁部に浅い刺突文	
23	151	R18		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	暗灰黄	ナデ	ナデ	良	○	○		黒色	口縁部上端に刺突文
23	152	B-17		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に数条の沈線文
23	153	B-18・土器溜		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に数条の沈線と上下に斜位刺突文
23	154	B-17		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	灰黄褐			良	○			白色	口縁部に二条の沈線文と上端に斜位刺突文
23	155	A16・17・SD4		深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	褐灰	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に斜位貝殻刺突文
23	156	A-17・土器溜		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐		ナデ	良	○	○			口縁部に四条の沈線と上下に斜位刺突文
23	157	B-17		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	褐灰	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に四条の沈線文
23	158	R11		深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○	○	白色	口縁部に数条の沈線文
23	159	B-17・土器溜		深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	褐灰	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に数条の沈線文
23	160	A-17・土器溜		深鉢	市来式	口縁部	黄灰	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に沈線文
23	161	B-17		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄褐	黄灰	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に縦位沈線分
23	162	A-17・土器溜		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ		良		○		白色	口縁部に横位貝殻刺突文
23	163	A-16		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○		○	白色	口縁部に斜位貝殻刺突文
23	164	A-17・土器溜		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙	条痕	ナデ	良	○			白色	口縁部に二条の沈線文
23	165	B-18・土器溜		深鉢	市来式	口縁部	褐灰	褐灰	ナデ	ナデ	良		○		白色	口縁部に浅い貝殻刺突文
24	166	B-18・土器溜		深鉢	市来式	口縁部	黄灰	灰黄褐		ナデ	良	○	○			口縁部に一条の沈線文と上下に斜位の刺突文
24	167	A-17		深鉢	市来式	口縁部	褐灰	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○	○	白色	口縁部に縦位貝殻刺突文
24	168	R14		深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	灰黄褐	貝殻条痕	ナデ	良	○	○			口縁部に斜位貝殻刺突文
24	169	A-17・土器溜		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に二条の沈線文と上下に斜位刺突文
24	170	B-17		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	黄灰	ナデ	ナデ	良	○				口縁部に沈線文
24	171	A-17		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	灰黄	ナデ		良	○			白色	口縁部に数条横位貝殻刺突文
24	172	B-18・土器溜		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	灰白	ナデ	条痕	良	○			白色	口縁部に二条の沈線と上下に連点文
24	173	A16・17・SD4		深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に二条の沈線文/口唇部に刺突文
24	174	A-17・土器溜		深鉢	市来式	口縁部	灰白	灰白		ナデ	良	○				口縁部に沈線文
24	175	A-17・土器溜		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	黄灰	ナデ	ナデ	良		○	○	白色	口縁部に二条の沈線文と刺突文
24	176	A-17		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	黄灰		ナデ	良	○	○			口縁部に沈線文と斜位貝殻刺突文/内面に沈線文
24	177	B-17		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄褐	黄灰			良			○	白色	口縁部に沈線文と上下に斜位刺突文
24	178	A-17・土器溜		深鉢	市来式	口縁部	黄灰	褐灰		ナデ	良	○				口縁部に数条の浅い刺突文と横位沈線文
24	179	A-26・SC2		深鉢	市来式	口縁部	明褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に刺突文と沈線文
24	180	A-17		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄褐	灰黄褐	ナデ		良				白色	口縁部に横位貝殻刺突文
24	181	B-18		深鉢	市来式	口縁部	褐灰	灰黄褐		ナデ	良	○			白色	口縁部に二条の沈線文と上下に斜位刺突文
24	182	A26・SC2		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	普	○	○			口縁部に貝殻刺突文
24	183	AB28・29 R11		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	灰黄褐			普	○	○		白色	口縁部に刺突文
24	184	B-17		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に斜位貝殻刺突文
24	185	B-16		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に短い沈線文と貝殻刺突文/口唇部に刺突文
25	186	A-17		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に二条の沈線文
25	187	AB28・29 R11		深鉢	市来式	口縁部	褐灰色	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口唇部と口縁部に沈線文
25	188	B-18		深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	褐灰	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に二条の浅い沈線文
25	189	A-17		深鉢	市来式	口縁部	灰黄	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に斜位刺突文
25	190	A-17・土器溜		深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良		○		白色	口縁部に沈線文と下に刺突文
25	191	A-27		深鉢	市来式	口縁部	赤褐	赤褐			良	○	○			口縁部内外面に沈線文と刺突文
25	192	B-18・土器溜		深鉢	市来式	口縁部	黄灰	にぶい橙	条痕	ナデ	良	○			白色	口縁部に沈線文と上下に斜位刺突文/内面に二条沈線文
25	193	R14		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に浅い沈線文と凹形刺突文
25	194	B-17		深鉢	市来式	口縁部	灰黄	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に斜位貝殻刺突文/胴部に沈線文
25	195	A-17		深鉢	市来式	胴部	灰黄褐	にぶい黄橙	条痕	ナデ	良	○	○			胴部に貝殻刺突文と沈線文

項目 番号	番号	出土地		器種	型式	部位	色調		調整		胎土					文様
		区	層				内面	外面	内面	外面	焼成	石灰	角閃石	長石	その他	
25	196	A-17	XIV	深鉢	市来式	胴部	灰黄褐色	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○	白色	胴部に貝殻刺突文と沈線文	
25	197	A27・SD5	II	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	良	○	○	白色	口縁部に沈線文/口唇部に刺突文	
25	198	B-17	IV	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色			普				口縁部に沈線文と上下刺突文/内面に沈線文	
25	199	A-17	XIII	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	良	○	○		口唇部に横位貝殻刺突文/胴部に貝殻による沈線文	
25	200	B-17・土器溜	VII	深鉢	市来式	口縁部	黄灰	灰黄褐色	ナデ	ナデ	良	○	○			
25	201	AB28・29 R11	I	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	良	○	○	白色	口縁部に沈線文	
25	202	B-17・土器溜	IV	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐色	褐色	ミガキ?	ミガキ?	良		○	白色		
25	203	A28・29 R1	I	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐色	褐色	ナデ	ナデ	良	○	○		沈線文と斜位刺突文/橋状把手	
26	204	A-17・土器溜	VII上	深鉢	草野式	口縁部	橙	灰黄	ナデ	ナデ	良	○	○		口唇部に一条沈線文	
26	205	A-17・土器溜	IV下	深鉢	草野式	口縁部	灰白	灰白	ナデ	ナデ	良		○		口唇部に円形刺突文	
26	206	A-17	VII上	深鉢	草野式	口縁部	黄灰	にぶい褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	良	○		白色	口唇部に円形刺突文	
26	207	B-17	VII	深鉢	草野式	口縁部	灰白	浅黄褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	良	○		黒雲母	口唇部に円形刺突文	
26	208	B-17	VII	深鉢	草野式	口縁部	にぶい黄褐色	灰黄	ナデ	ナデ	良	○	○		口縁部上端に斜位刺突文	
26	209	B-10		深鉢	草野式	口縁部	橙	灰黄褐色	ナデ	条痕	良	○	○	白色	口唇部に斜位刺突文	
26	210	R14		深鉢	草野式	口縁部	灰黄褐色	灰黄褐色	貝殻条痕	ナデ	良		○		口唇部に刺突文	
26	211	B-17	III	深鉢	草野式	口縁部	橙	橙			良	○	○	白色	口唇部に数条の沈線文	
26	212	B-17・土器溜	VII	深鉢	草野式	口縁部	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	良		○		口唇部に斜位貝殻刺突文	
26	213	B-16	IV	深鉢	草野式	口縁部	灰黄	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	良	○	○	白色	口唇部に一条の沈線文	
26	214	AB28・29 R11	I	深鉢	草野式	口縁部	黒褐色	黒褐色	条痕	条痕	普	○	○	白色	口唇部に斜位刺突文	
26	215	A-16	IV	深鉢	草野式	口縁部	灰黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	良	○	○		口唇部に二条の沈線文	
26	216	A-17・土器溜	VII上	深鉢	草野式	口縁部	灰黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	良	○	○	白色	口唇部に二条の沈線文	
26	217	A-22・23 SD1		深鉢	草野式	口縁部	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	良	○	○		口唇部に斜位刺突文	
26	218	A-17	IV	深鉢	草野式	口縁部	にぶい黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	良	○	○	白色	口唇部に一条の沈線文と斜位貝殻刺突文	
26	219	B-16	IV	深鉢	草野式	口縁部	灰黄褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	良	○	○	白色	口唇部に斜位刺突文	
26	220	A-17・土器溜	VII上	深鉢	草野式	口縁部	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	条痕	良	○	○		口唇部に二条貝殻刺突文	
26	221	B-18	IV	深鉢	草野式	口縁部	黄灰	灰黄褐色	ナデ	ナデ	良	○	○		口縁部に斜位貝殻刺突文	
27	222	A-17	VII	鉢	小池原上層式	胴部	黄灰	灰白	ミガキ		良		○	黒雲母	磨消縄文/沈線文	
27	223	A-17・土器溜	VII上	深鉢	御手洗A式	口縁部	灰黄	灰白	ナデ	ナデ	普	○	○		口縁部に刺突文/口唇部に一条の沈線文/外面二重刺突文	
27	224	A-16	IV	鉢	鐘崎式	口～胴部	灰黄	灰黄	ミガキ	ミガキ	良			黒雲母	口唇部に刺突文/磨消縄文/橋状把手/S字状沈線文	
27	225	AB-17・18・19・R13		鉢	鐘崎式	口縁部	黄灰	にぶい黄褐色	ミガキ		良		○	白色	口唇部に沈線文と刺突文/磨消縄文	
27	226	AB28・29 R11	I	鉢	鐘崎式	口縁部	灰黄	浅黄	ナデ		良		○	白色	口唇部に沈線文と刺突文	
27	227	B-18・土器溜	VII	鉢	鐘崎式	口縁部	褐色	褐色	ミガキ	ミガキ	良		○	白色	口唇部に沈線文と刺突文/磨消縄文	
27	228	R14		鉢	鐘崎式	口縁部	灰黄	灰黄	ミガキ	ミガキ	良		○		沈線文と口唇部沈線文内に刺突文	
27	229	B-18・土器溜	VII	鉢	鐘崎式	口縁部	灰白	灰白	ミガキ	ミガキ	良		○	白色	口唇部に沈線文	
27	230	AB-17・18・19・R13	VII	鉢	鐘崎式	口縁部	にぶい黄褐色	灰黄褐色	ミガキ	ミガキ	良	○		白色	磨消縄文/口唇部に刺突文と沈線文	
27	231	AB-17・18・19・R13		鉢	鐘崎式	口縁部	灰	灰	ミガキ	ミガキ	良		○	白色	磨消縄文/口唇部に沈線文	
27	232	AB28・29 R11	I	鉢	鐘崎式	口縁部	黒褐色	灰黄褐色	ミガキ	ミガキ	良		○	白色	口唇部に三条の沈線文と刺突文/磨消縄文	
27	233	A-28	Ic	鉢	鐘崎式	口縁部	にぶい褐色	にぶい褐色	ミガキ	ミガキ	良		○		磨消縄文/口唇部に一条の沈線文	
27	234	R14		鉢	鐘崎式	胴部	黄灰	灰	ミガキ	ミガキ	良	○	○	白色	磨消縄文/口唇部に沈線文	
27	235	R14		鉢	鐘崎式	胴部	黄灰	黄灰			良		○	白色	磨消縄文/S字状沈線文	
27	236	A-17・土器溜	VII	鉢	鐘崎式	胴部	黒褐色	黒褐色	ミガキ		良		○		磨消縄文	
27	237	A-16	IV	鉢	鐘崎式	口～胴部	灰黄褐色	灰黄褐色			良	○	○	白色	磨消縄文/S字状沈線文	
27	238	B-18・土器溜	VII	鉢	鐘崎式	胴部	褐色	にぶい褐色	ミガキ	ミガキ	良		○	白色	磨消縄文	
28	239	R14		鉢	鐘崎式	口縁部	にぶい黄褐色	灰	ミガキ		良		○	白色	口縁部に沈線文	
28	240	A-17	IV	鉢	鐘崎式	口～胴部	黄灰	灰黄	ナデ	ナデ	良	○	○	白色	口縁部に沈線文と口唇部に刺突文	
28	241	A-17・土器溜	VII上	鉢	鐘崎式	口縁部	にぶい褐色	橙			良		○	白色	口縁部に沈線文	
28	242	R14		鉢	鐘崎式	口～胴部	黄灰	灰黄褐色	ミガキ	ミガキ	良		○	黒雲母	磨消縄文/口唇部に沈線文/橋状把手/S字状沈線文	
28	243	A-28	Ic	鉢	鐘崎式	口縁部	灰黄	灰黄	ナデ		良		○	白色	口唇部に沈線文と斜位刺突文/橋状把手/胴部に二条沈線文	
28	244	B-17	III	鉢	鐘崎式	口縁部	灰黄	黄灰			良	○	○	白色	磨消縄文/口唇部に刺突文と穿孔、突起/胴部に沈線文	

押図 番号	番号	出土地		器種	型式	部位	色調		調整		胎土					文様
		区	層				内面	外面	内面	外面	焼成	石灰	角閃石	長石	その他	
28	245	A-17・土器溜	IV	鉢	鐘崎式	口縁部	黄灰	黄灰	ミガキ		良	○	○		白色	沈線文/口唇部に刺突文と穿孔、突起/継位沈線文
28	246	A28・29 R1	I	鉢	鐘崎式	口縁部	灰白	灰白	ミガキ	ミガキ	良	○	○			口唇部に沈線文/突起に3つの穿孔/継位沈線文
28	247	A-17・土器溜	VII上	浅鉢	鐘崎式	口縁部	にぶい黄橙	浅黄橙			良		○	○	白色	沈線文
28	248	A-17・土器溜	VII	浅鉢	鐘崎式	口縁部	にぶい黄橙	黄灰	ミガキ	ミガキ	良		○	○	白色	無文
28	249	A-17・泥炭層	VIII	浅鉢	鐘崎式	口縁部	褐灰	灰黄褐	ミガキ	ミガキ	良				白色	橋状把手/磨消縄文/口唇部に刺突文と一条沈線文
28	250	B-17・土器溜	VII	鉢	鐘崎式	胴～底部	黄灰	灰黄	ミガキ	ミガキ	良	○	○		白色	
29	251	A-26・SC2	I	深鉢	白浜・浜ノ須	口縁部	灰	暗灰黄	ミガキ	ミガキ	良		○		白色	橋状把手/磨消縄文/口唇部に刺突文
29	252	A-22・R18	II	鉢	白浜・浜ノ須	胴部	黄灰	黄灰	ミガキ		良				白色	胴部に沈線文
29	253	A-26	II上	鉢	白浜・浜ノ須	口縁部	黄灰	灰黄	ミガキ	ミガキ	良		○		白色	磨消縄文/四条沈線文
29	254	AB28・29 R11	I	鉢	白浜・浜ノ須	口縁部	褐灰	褐灰	ミガキ	ミガキ	良		○		白色	磨消縄文/二条沈線文
29	255	A-17	IV	鉢	白浜・浜ノ須	口縁部	黄灰	灰黄	ミガキ	ミガキ	良	○	○		輝石	磨消縄文/沈線文
29	256	AB28・29 R11	I	鉢	白浜・浜ノ須	口縁部	灰	にぶい黄			良		○		白色	口縁部内外面に三条沈線文/口縁部上面に穿孔
29	257	A-30	IIa	鉢	白浜・浜ノ須	口縁部	暗灰黄	黄灰	ミガキ	ミガキ	良				茶白	磨消縄文/刺突文・円形刺突文
29	258	B-17・土器溜	VII	鉢	白浜・浜ノ須	口縁部	灰黄褐	褐灰	ミガキ	ミガキ	良		○	○	黒雲母	継位刺突文
29	259	A28・29 R11	I	鉢	白浜・浜ノ須	胴部	灰黄	黄灰		ミガキ	良		○		白色	磨消縄文・円形刺突文
29	260	A-17	IV	鉢	白浜・浜ノ須	口縁部	黒褐	黒褐			良				白色	胴部に沈線文・円形刺突文
29	261	A-28	Ic	鉢	白浜・浜ノ須	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ		良		○		白色	磨消縄文・沈線文
29	262	A-25・SK-1		浅鉢	白浜・浜ノ須	口縁部	灰黄	灰黄	ナデ	ミガキ	良		○		白色	口縁部に沈線文と貝殻刺突文による擬似縄文
30	263	B-26 SC3		深鉢	北久根山式	口～胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○	○		口唇部に斜位刺突文/口縁部に沈線文
30	264	A-17・土器溜	IV	深鉢	北久根山式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐			良		○	○	白色	口縁部に斜位刺突文
30	265	A-17	IV	深鉢	北久根山式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に二条の沈線文/口唇部に刺突文
30	266	B-26 SC3		深鉢	北久根山式	口～胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	条痕	条痕	良		○	○	黒雲母	口縁部上端に斜位刺突文
30	267	A-17・土器溜	IV	深鉢	北久根山式	口縁部	浅黄橙	灰白	ナデ	ナデ	良			○		口唇部に斜位刺突文
30	268	A-26	II	深鉢	北久根山式	口縁部	灰白	明褐灰			良				黒雲母	口縁部波状部に斜位沈線分と斜位刺突文
30	269	A-25 SK1	I	深鉢	北久根山式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に沈線文/橋状把手/刺突文
30	270	B-17・土器溜	VII	深鉢	北久根山式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	条痕	条痕	良	○	○			口縁部に沈線文・円形刺突文
30	271	R14		鉢	北久根山式	口縁部	灰黄褐	黄灰	ナデ	条痕	良	○	○			口縁部に二条の沈線文と上下に刺突文
30	272	A-26	Ic	鉢	西平式	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○	○	白色	口唇部に沈線文
30	273	A-17・土器溜	VII上	鉢	西平式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良		○	○		無文
30	274	A-17・土器溜	VII上	深鉢	西平式	底部	黄褐	にぶい橙		ナデ	良		○	○	白色	
31	275	B-18	III	深鉢	市来式	口～胴部	灰黄褐	黄灰	条痕	条痕	良	○	○		白色	無文
31	276	A-17・土器溜	IV下	深鉢	市来式	口縁部	灰	灰白			良				白色	無文
31	277	B-17	IV	深鉢	市来式	口縁部	灰黄	にぶい橙		貝殻条痕	良	○	○	○	白色	無文
31	278	A-17・土器溜	VII上	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻条痕	ナデ	良	○	○			無文
31	279	A-17	XIV	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	にぶい橙			良	○	○	○	白色	無文
31	280	A-17	XIV	深鉢	市来式	口縁部	灰黄	灰黄褐	貝殻条痕	貝殻条痕	良	○				無文
31	281	B-17	VII	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	条痕	良	○			白色	無文
31	282	B-17	VII	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	にぶい橙	条痕	条痕	良	○	○		茶白	無文
31	283	B-17	III	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	無文
31	284	R14		深鉢	市来式	口縁部	褐灰	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	良	○	○			無文
31	285	R18	I	深鉢	不明	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	無文
31	286	R14		深鉢	不明	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙		ナデ	良	○	○		茶白	無文
31	287	B-17・土器溜	VII	深鉢	不明	口縁部	にぶい黄橙	にぶい褐	ナデ	ミガキ?	良	○	○	○	白色	無文
31	288	SD1		深鉢	不明	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	無文
31	289	SD1		深鉢	不明	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙			良	○	○	○	白色	無文
31	290	A16・17・SD4		深鉢	不明	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	普	○	○			無文
31	291	R14		深鉢	草野式	口縁部	灰黄褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	無文
31	292	B-18・土器溜	VII	深鉢	草野式	口縁部	灰黄褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	無文
31	293	A-26・SC2	I	深鉢	草野式	口縁部	橙	にぶい黄橙	条痕	条痕	良	○	○			無文

種別 番号	番号	出土地		器種	型式	部位	色調				調整				胎土				文様	
		区	層				内面		外面		亀裂	石突	角隅石	駄石	その他					
							内面	外面	内面	外面						良	○	○		○
31	294	AB28・29	R1	I	深鉢	草野式	口縁部	にぶい橙	灰褐	ナデ	ナデ	良		○	○			無文		
31	295	A16・17・SD4			深鉢	草野式	口縁部	褐灰	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○			白色	無文		
31	296	B-17		VII	深鉢	草野式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良		○	○		黒雲母	無文		
32	297	B-17		III	深鉢	不明	口～胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ		良	○	○			白色	擬似縄文		
32	298	A-17・土器溜		VII上	深鉢	指宿式	胴部	灰白	橙	ナデ	ナデ	良	○	○				胴部に沈線文		
32	299	A-16・17			深鉢	不明	胴部	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○				胴部に三条沈線文		
32	300	B-17・土器溜		VII	深鉢	不明	口縁部	灰白	にぶい黄橙	貝殻条痕	ナデ	良			○			口縁部に沈線と斜位貝殻刺突文		
32	301	B-17		IV	深鉢	不明	口～胴部	にぶい橙	にぶい橙	貝殻条痕	条痕	良	○	○			茶白	無文		
32	302	B-17・土器溜		VII	深鉢	不明	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙			良		○	○		白色	口縁部に沈線文		
32	303	R14			深鉢	不明	口縁部	にぶい橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	良		○	○		白色	口縁に一条沈線文		
33	304	A-17・土器溜		VII上	深鉢	不明	底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良		○	○		白色			
33	305	A-17・土器溜		VII	深鉢	不明	底部	橙	灰黄	ナデ	ナデ	良	○	○			茶色			
33	306	A-17・土器溜		VII上	深鉢	不明	底部	褐灰	にぶい橙	条痕	条痕	良	○	○			白色			
33	307	A-17		VII	深鉢	不明	底部	灰黄	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○			白色			
33	308	A-16		IV	深鉢	不明	底部	にぶい黄橙	褐灰	条痕	ナデ	良	○	○			白色			
33	309	A-25 SC1		I	深鉢	不明	底部	にぶい赤褐	明赤褐	ナデ	条痕	良	○	○			黒雲母			
33	310	B-18		VII	深鉢	鐘崎式	底部	にぶい黄橙	灰黄褐	ヘラナデ	ナデ	良	○	○			白色			
33	311	A-17		XIV	深鉢	不明	底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○						
33	312	B-17		VII	深鉢	不明	底部	にぶい黄橙	灰白	ナデ	ナデ	良		○			白色			
33	313	A-17・土器溜		VI	深鉢	不明	底部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○						
33	314	A-17		VII	深鉢	不明	底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○			白色			
33	315	A-17		VII	深鉢	不明	底部	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○	○					
33	316	B-18・土器溜		VII	深鉢	不明	底部	にぶい橙	黄灰	ナデ	条痕	普	○	○			白色			
33	317	A-17		VII	深鉢	不明	底部	にぶい褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	普	○	○			白色			
33	318	B-17		VII	深鉢	不明	底部	黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	普	○	○			白色			
33	319	A-17		III	深鉢	不明	底部	灰黄	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○						
33	320	A-17・土器溜		VII	深鉢	不明	底部	にぶい橙	にぶい橙		ナデ	良	○							
34	321				台付皿	不明	皿部			ナデ	ナデ	良	○	○	○			沈線文と刺突文/3つ一組の穿孔が2か所/施朱		
35	322	R14			台付皿	不明	皿部	にぶい赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	良	○	○				刺突文		
35	323	B-18・土器溜		VII	台付皿	不明	皿部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○				白色	一条沈線文/S字状沈線文		
35	324	A28・29 R1		I	台付皿	不明	皿部	にぶい黄橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○				内外面に斜位連続刺突文		
35	325	B-24 R18		I	台付皿	不明	皿部	にぶい褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○			白色	沈線文縦位刺突文		
35	326	A-17		XIII	台付皿	不明	皿部	にぶい黄橙	灰黄褐	ミガキ	ミガキ	良	○	○			白色	沈線文/円状刺突文		
36	327	B-17・土器溜		VII	台付皿	不明	脚部	黒褐	にぶい黄橙	ナデ		良	○	○			白色	脚部に沈線文		
36	328	A-29		Ic	台付皿	不明	脚部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○				脚部に沈線文		
36	329	B-17		III	台付皿	不明	脚部	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○			白色	脚部に貝殻刺突文		
36	330	A-26		Ic	台付皿	不明	脚部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○				脚部に斜位貝殻刺突文		
36	331	B-18		VII上	台付皿	不明	脚部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○			白色	脚部に沈線文/穿孔		
36	332	A-18・土器溜		VII	台付皿	不明	脚部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ		良		○	○			穿孔		
36	333	A-17・土器溜		VII上	台付皿	不明	脚部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○			白色			
36	334	B-18		IV	台付皿	不明	脚部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○			白色			
36	335	A-17		XIV	台付皿	不明	脚部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良		○	○		白色	脚部に貝殻刺突文		
36	336	A-28		Ic	台付皿	不明	脚部	にぶい橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○			白色	脚部に沈線文		
36	337	B-17		III	台付皿	不明	脚部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ		良	○	○			白色	脚部に沈線文		
36	338	A-26		Ic	台付皿	不明	脚部	橙	橙	ナデ	ナデ	良		○			白色	脚部に沈線文		
36	339	B-18		III	台付皿	不明	脚部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○			白色	脚部に沈線文		
36	340	B17・18・19 R13			台付皿	不明	脚部	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○			白色	脚部に刺突文		
36	341	B-17・土器溜		VII	台付皿	不明	皿～脚部	黄灰	橙	ナデ	ナデ	良	○	○	○		白色	脚部に沈線文と刺突文/桶状把手/脚部に皿部に穿孔		
36	342	A-25 SC1		I	台付皿	不明	脚部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○				脚部に貝殻刺突文と沈線文		

**縄文時代早期後半土器（第38図 353～356）**

353・354は外面に楕円押型文、内面及び口唇部に山形押型文を施文する。外面の楕円は7×5mm程度の粒をつくり出す。内面の山形押型文は大振りでシャープなものであり、口縁部内面に幅4cmで横位に施される。同一個体と考えられ、手向山式土器に該当するのではなからうか。355は外反する口縁部をもち、口唇部は尖り気味に丸く収める。内外面にLR単節の縄文を施すのが特徴である。南九州の縄文時代早期に縄文あるいは燃糸文が施される例は、平椀式土器・塞ノ神A式土器と五十市式土器がある。それと、寺師見國氏が紹介している永山式土器がある。この永山式土器は類例がほとんどなく、型式概念も明確でないが、内面にも縄文を施文することから、本遺跡出土土器も永山式土器との関係を指摘しておきたい。なお、宮之城町甫立原遺跡でも押型文土器に伴って、同様の縄文施文の土器が出土しているので、押型文土器の時期に併行するものと考えられる。

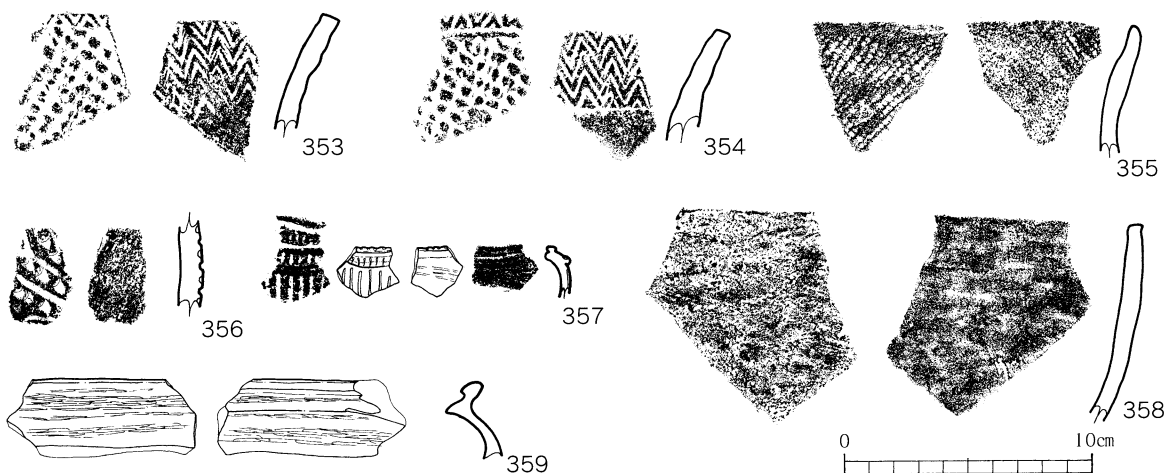
356は、沈線と連点を交互に繰り返す文様を描くものである。連点は半截竹管状の工具をやや斜めにして刺突するもので、このような施文方法は平椀式土器と考えられる。

**縄文時代中期土器（第38図 357）**

357は、春日式土器である。口縁部を大きく内湾させ、端部に2条の隆帯を貼り付け、その上にさらに刻目を施す。隆帯以下は縦位の沈線で埋めており、このような春日式土器は中期前半に位置付けられる前谷段階に該当すると考えられる。

**縄文時代晩期後半土器（第38図 358・359）**

358は深鉢形土器の口縁部である。ほぼ直口するもので、胴部上半でわずかに屈曲するタイプと考えられる。359は浅鉢形土器で、内外面とも丁寧に研磨されている。大きく内湾する胴部から、急に屈曲する短い口縁部に至る。口縁内面には1条の沈線が施されるが、口縁部と一体化している。以上の土器は、深鉢の口縁端部が肥厚しない点と、浅鉢の胴部が丸みをもち口縁部の屈曲が強いことから、黒川式土器の中でも古い段階のものであると考えられる。



第38図 縄文土器（早期～晩期）

以上、楠元遺跡出土の後期以外の縄文土器は出土点数もわずかであり、しかも同一個体と考えられるものがあることから、それぞれの時期に主体的な集落は営まれなかったことが窺える。土器自体に磨耗が見られないことから、上流からの流れ込みとは考えられず、少人数・短期間の生活が早期後半・中期前半・晩期後半にあったと思われる。これらは楠元遺跡が立地する環境と、出土した土器の時期の生活環境が一致することを示していると考えられる。逆に、それ以外の時期には生活環境が一致していなかったか、もしくは水位が上がって人が住める環境ではなかったことが窺える。楠元遺跡の環境がどのように変遷していったか明らかにするためには、楠元遺跡における各時期の地層堆積状況を調べるとともに、他の遺跡を含めた各時期の立地条件を追及することが今後の課題である。

## (2) 石器

楠元遺跡から出土した石器は総数338点であり、そのうち図示するのが可能な石器267点について掲載した。楠元遺跡で主に石器を使用した年代を考えると、縄文時代後期と弥生時代終末から古墳時代初頭に該当したと想定される。各石器一点一点についてどの時期に位置付けられるか断定することは不可能である。したがって、明らかに縄文時代の石器であると判断される石器であっても、弥生時代終末から古墳時代初頭の遺構内から出土した石器については、そちらの頁で扱うこととする。なお、磨製石鏃1点については、弥生時代のもと考えられることから頁を改めて扱う。

### 石鏃 (第39図 360~390)

基部の抉りが深いタイプ (360~367)、基部の抉りが浅いタイプ (368~376)、基部が水平になるタイプ (377~379)、基部がわずかに膨らむタイプ (380~383) が見られる。376は五角形となるもので、晩期によく見られる。384・386~390は、石鏃を製作する途中で欠損したために放棄した未製品であると考えられる。黒曜石を中心にハリ質安山岩・チャート・鉄石英が使われている。385は石鏃としたが、半月形をした異形石器の可能性もある。

### 石錐 (第40図 391~397)

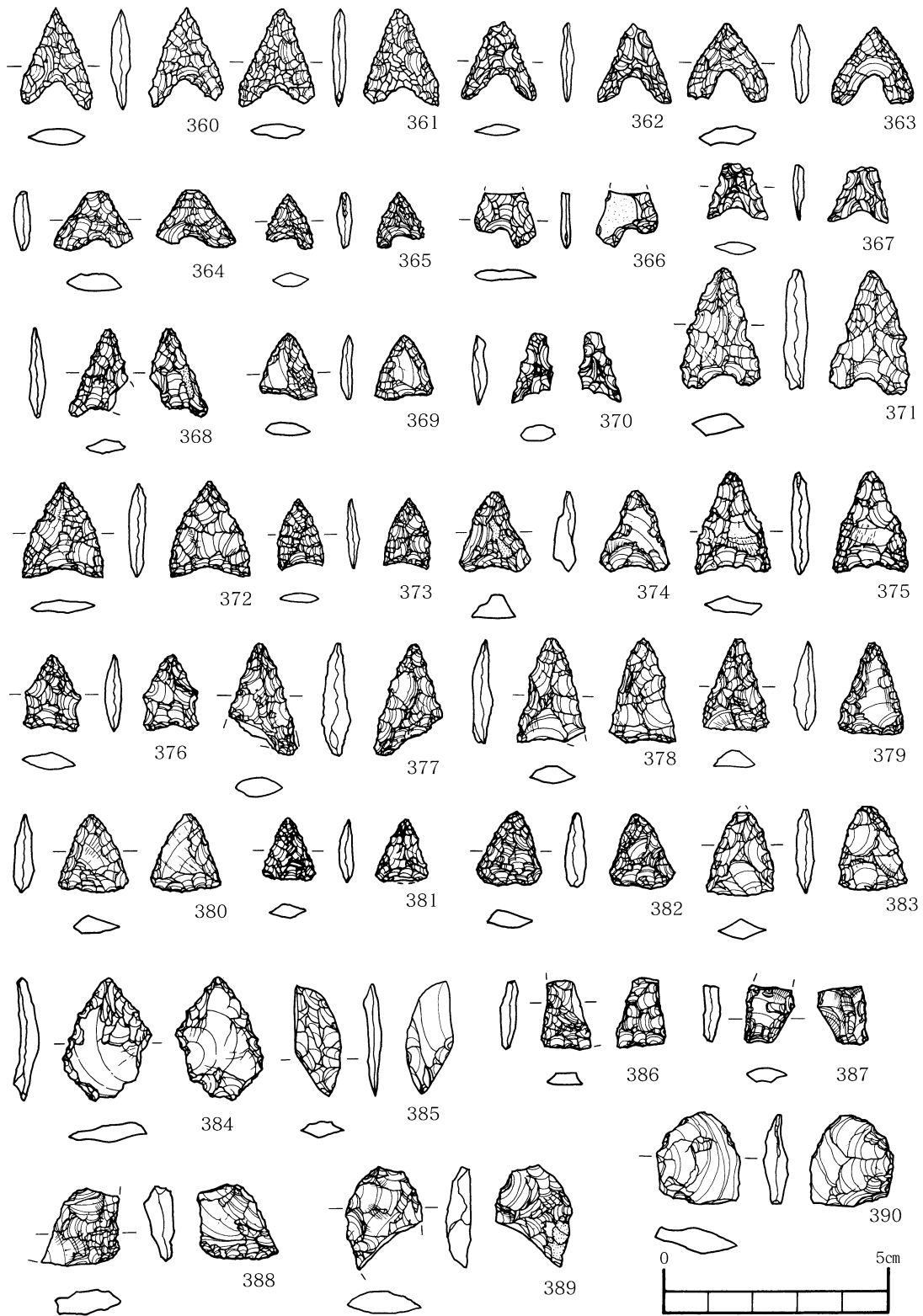
先端部をつくり出したものや剥片の一端を利用したものが見られる。錐部をつくり出したものは、柄部との境がはっきりするが、柄部の形状は一様でない。395の両側には微細な剥離が見られ、スクレイパーとしても使われている。なお、391・392・396は形状は石錐に似ているけれども、錐部の2次加工や錐としての使用痕が無いことから、錐ではない可能性もある。

### 抉入石器 (第40図 398~400)

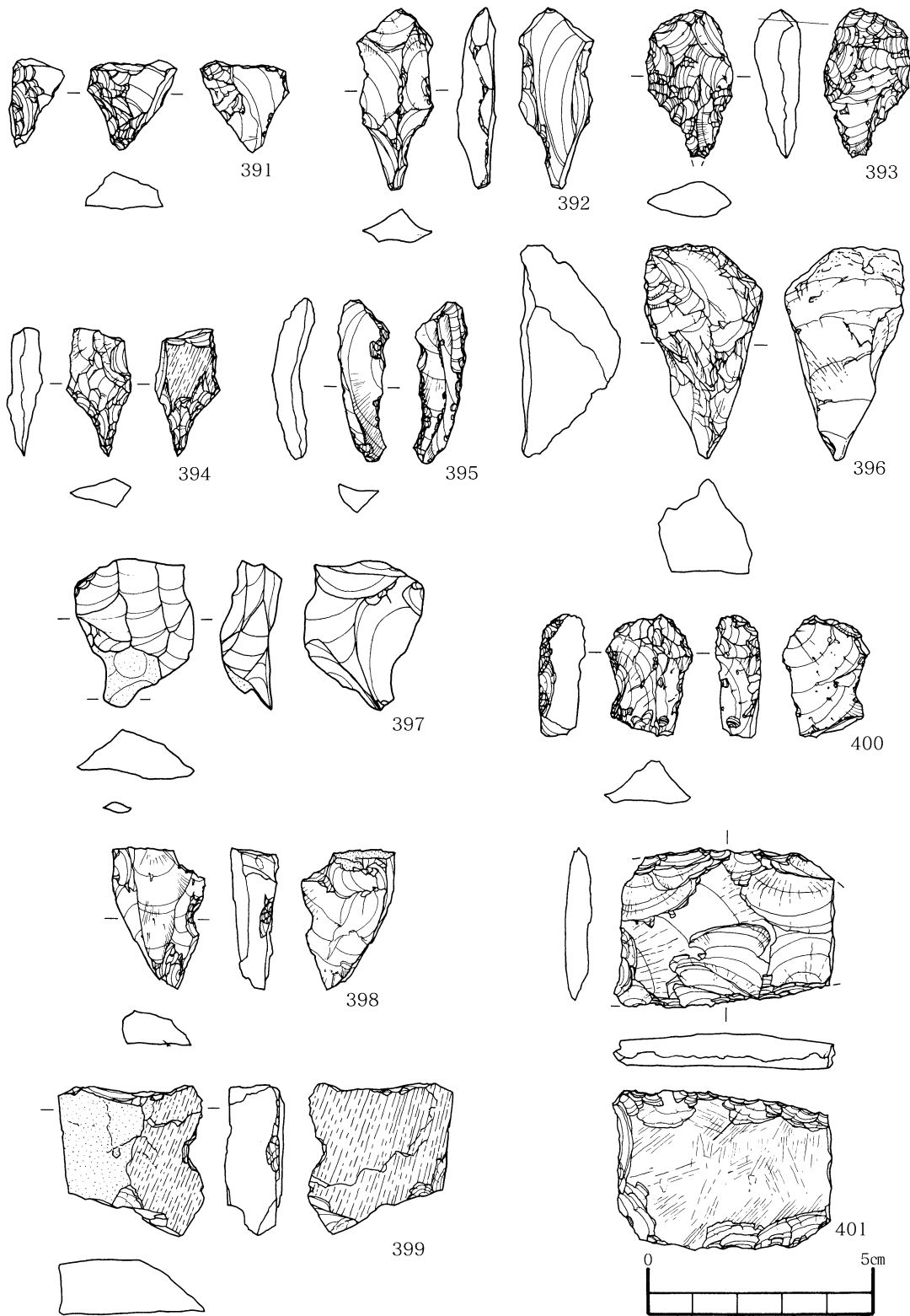
剥片の一部にノッチ状の剥離が見られるものである。いずれも厚みのある素材を利用している。剥離は一方向のみに見られ、棒状の対象物を削る場合、この面と反対側が前面となったと考えられる。刃部の幅は1cmに満たない点から、直径2cm以内の細い棒状のものを対象としていたと想定される。

### 石鎌 (第40図401)

両端が欠けていて、形状は明らかではない。主要剥離面が滑らかであることと、細かな擦痕が観察されることから、こちらの面に対象物が当たったと考えられる。石鎌となっているが、現在の鉄鎌の様に引いて切るのではなく、穂摘み具としての機能が想定される。時期的にも縄文時代としているが、断定はできない。



第39图 出土石器 1



第40图 出土石器 2



### スクレイパー (第41~44図 402~433)

剥片の一部にやや細かな剥離を加えて刃部としている。石材も厚み・形状とも様々で定形化していない。419は刃部に両面剥離を加え、水平に仕上げている。両側面下部にも押圧剥離を加えていることから、石匙の未製品の可能性もある。423は良質なサヌカイトの剥片に、両面剥離が加えられている。

### 石匙 (第44図 434)

両端が欠損していて形状は明らかではないが、丁寧な2次加工が施されている点から、石匙の一部であると考えられる。特に下面の方が細かな剥離が加えられている。

### 楔形石器 (第44図 435~440)

両極から打撃された痕跡が見られるものであり、石核を利用したものと角錐状の剥片を利用したものがある。440の水晶以外は黒曜石を素材とする。

### 石核 (第45・46図 441~459)

石材は表皮を残す小ぶりの黒曜石がほとんどである。剥片を剥ぎ取る方向もまちまちであり、剥ぎ取り易い部分から打撃を加えたと考えられる。

### 鑿形石斧 (第47図 460・461)

460は蛇紋岩を素材とし、擦切技法で製作している。側面を両側から擦り切り、厚さ3mmになったところで切断している。他の例では切断面を残したままのものも見られるが、本例は丁寧に研磨している。刃部は図の右面が滑らかな曲線を描くのにに対し、左面は砥ぎ直しされており、こちら側が対象面に当たったと想定される。擦切に使用した石器は475と考えられ、この場所で石斧が製作されたと想定される。461は刃部が欠けて断定はできないが、大きさや形状から同様な石器と考えられる。

### 磨製石斧 (第47・48図 462~471)

462は打撃による剥離で薄く形を整えた後、刃部のみを研磨して砥いでいる。刃部は緩やかに湾曲していて、横斧と考えられる。残りは全て肉厚で、両刃と考えられる縦斧である。入念な敲打の後、研磨して仕上げている。欠損品がほとんどであることから、近くで木の伐採あるいは木材の加工を行ったことが窺える。463は刃部が潰れており、最終的には敲打具として使われたと考えられる。464は図の左面右側の刃部の磨耗が著しく、こちら側が木に当たる回数が多かったと考えられるので、民具の事例から、右利きの場合こちら側が外側になっていたと想定される。472は安山岩製で研磨した部分も見られないので、礫器としておきたい。

### 楔 (第49図 473)

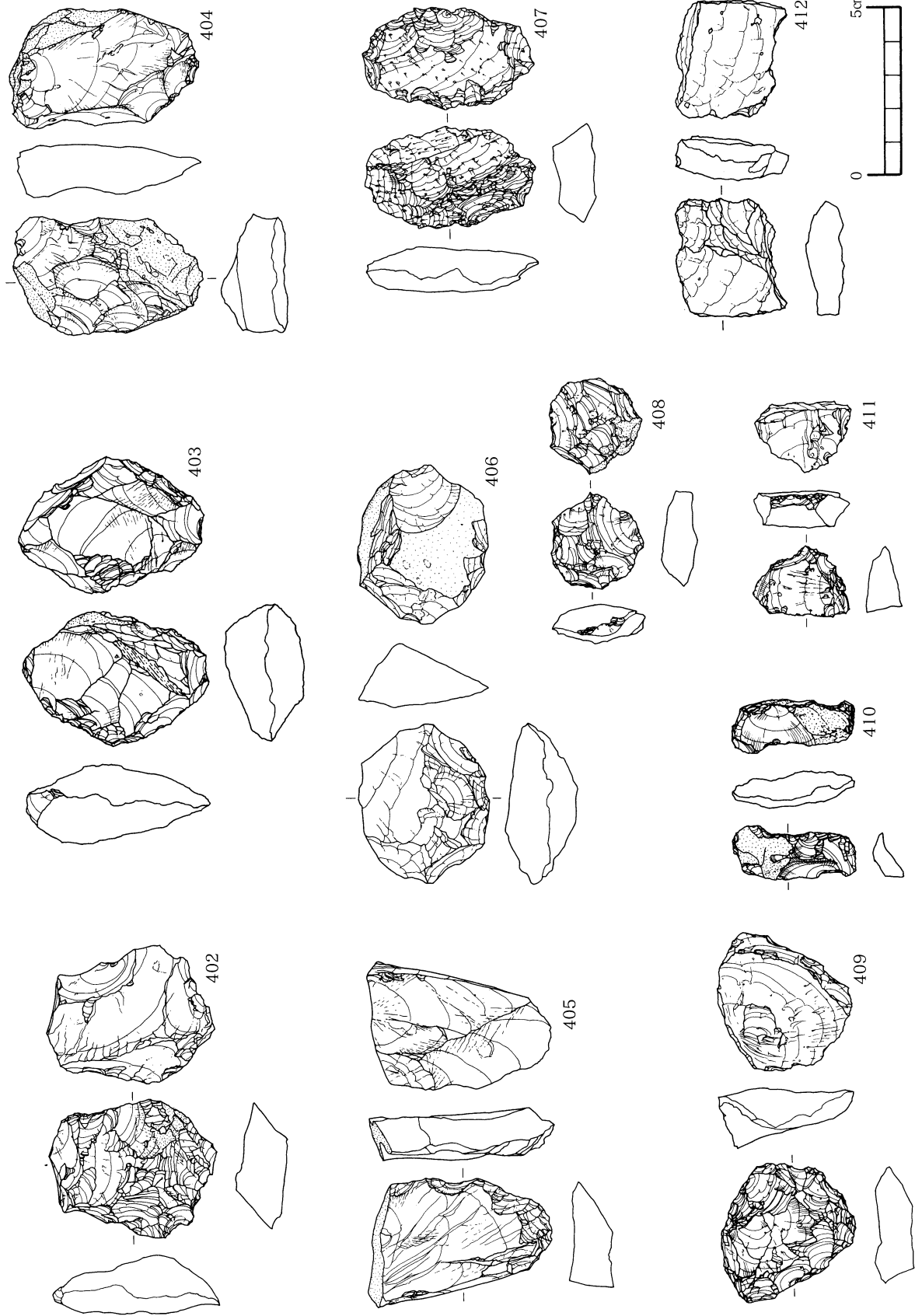
大型の安山岩礫を素材とし、上下端が薄くなった部分を利用している。特に下面は水平になり、細かな剥離が両面に見られる。木材の加工に利用したものと考えられる。

### 砥石 (第49図 474)

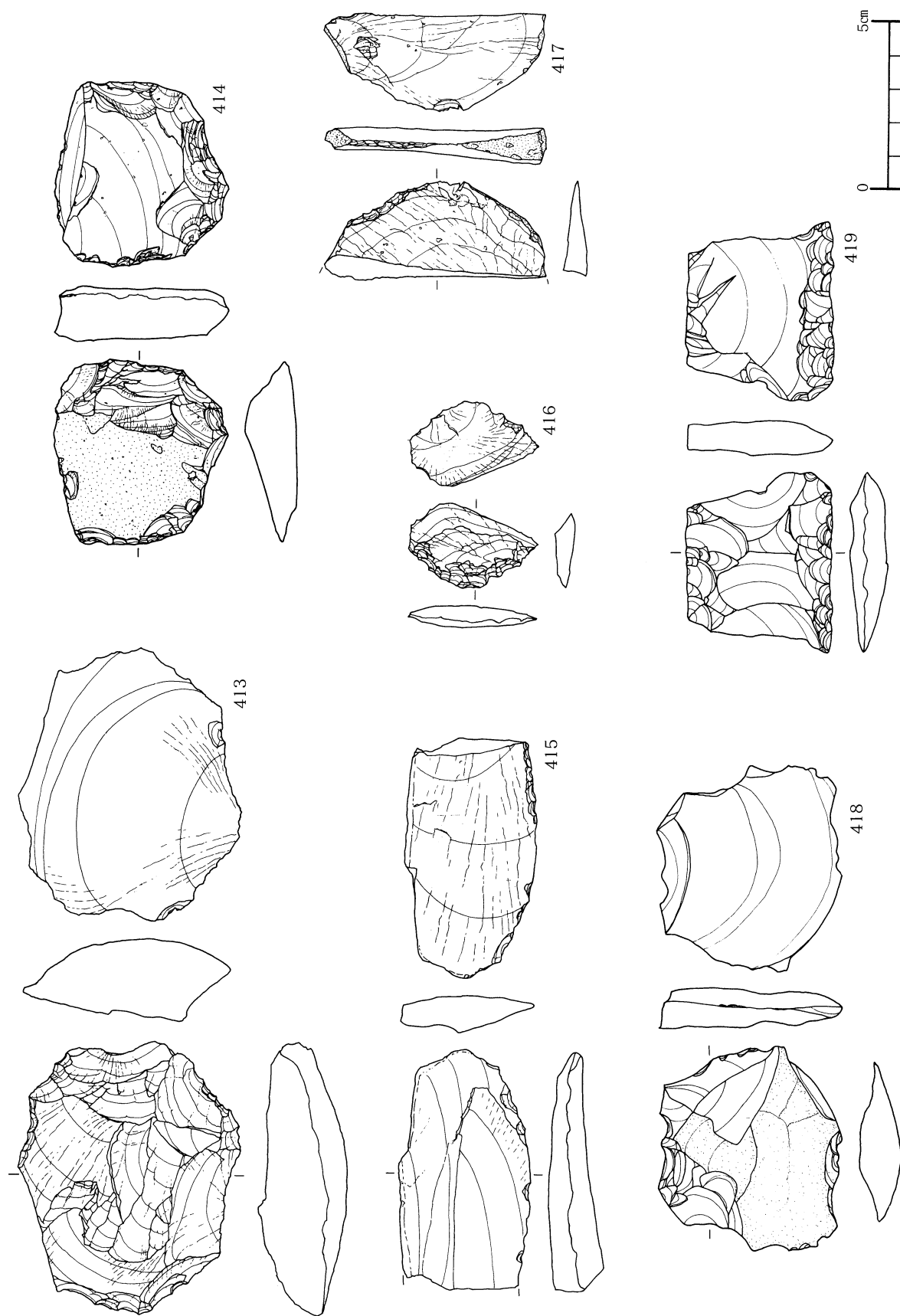
全体的に滑らかな石材であり、特に一部分だけを砥石として使用しているかどうかは断定できない。上面の湾曲部分が自然的でなかったことから注意を促すために砥石として取り上げた。

### 擦切具 (第49図 475)

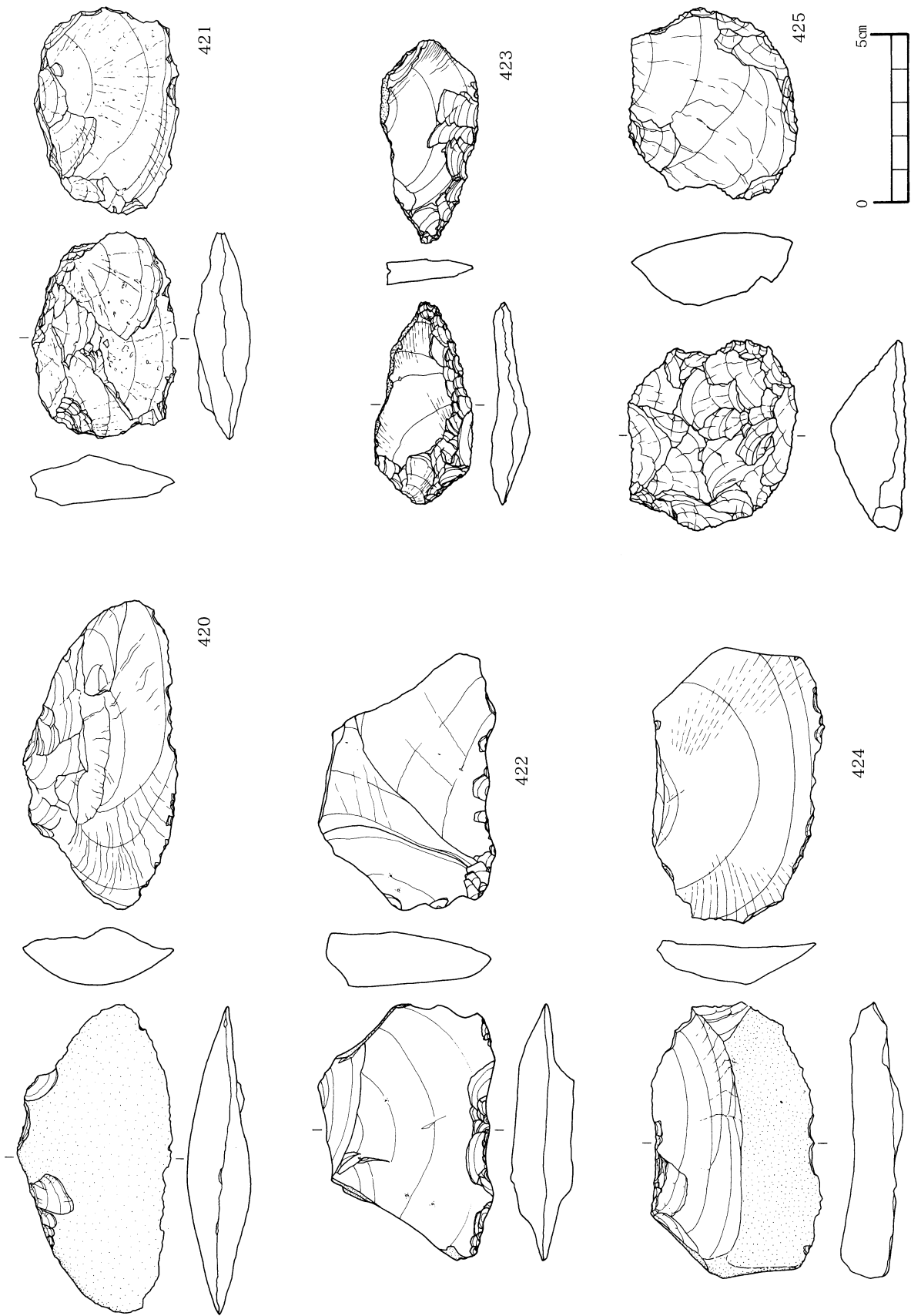
扁平な砂岩を利用し、下面が両刃状に擦り減っている。擦痕は横方向に観察され、前後に動かして使用したと考えられる。460の鑿形石器の側面に残る擦切痕と475の刃部の角度が



第41图 出土石器 3



第42図 出土石器 4



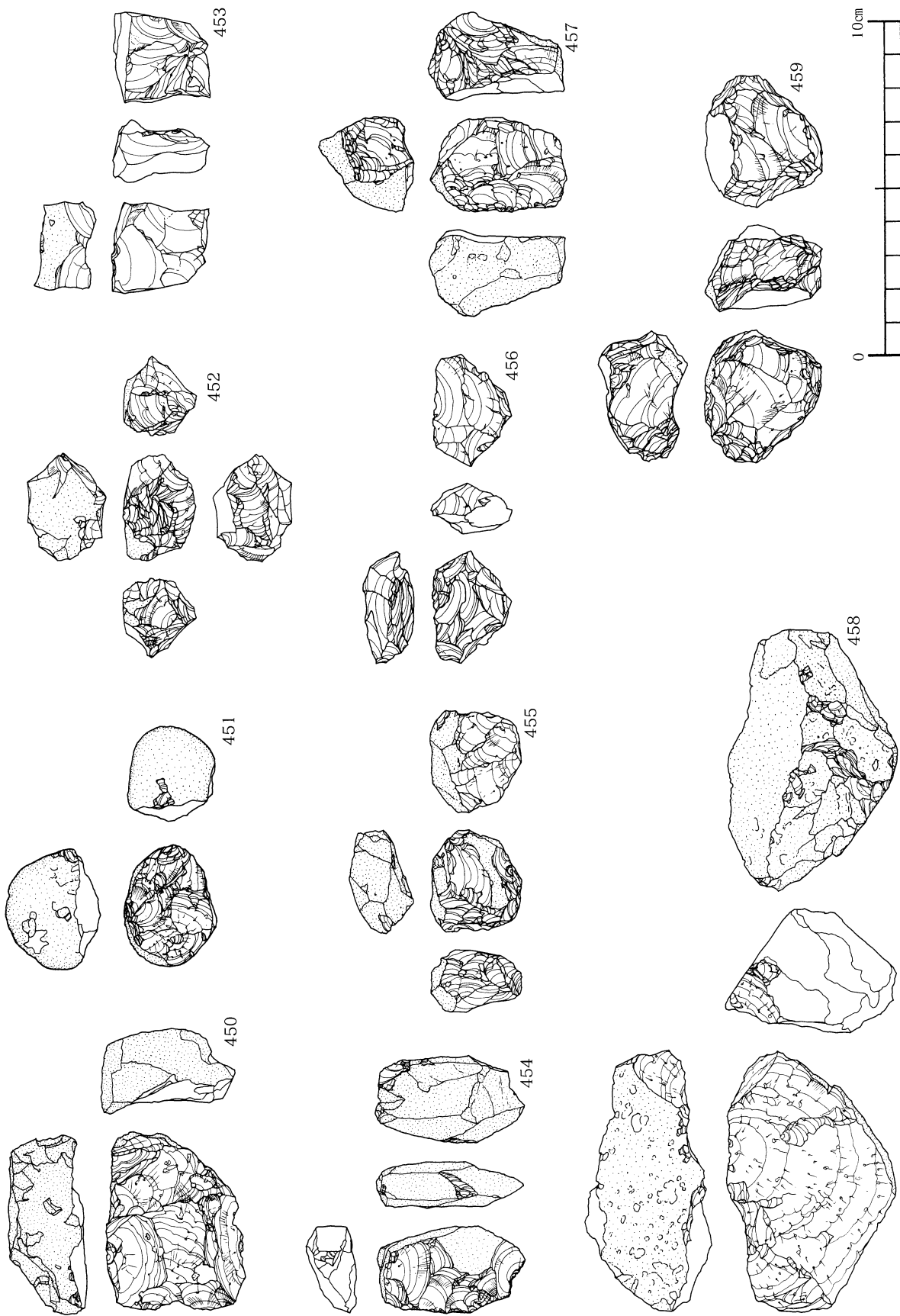
第43图 出土石器 5



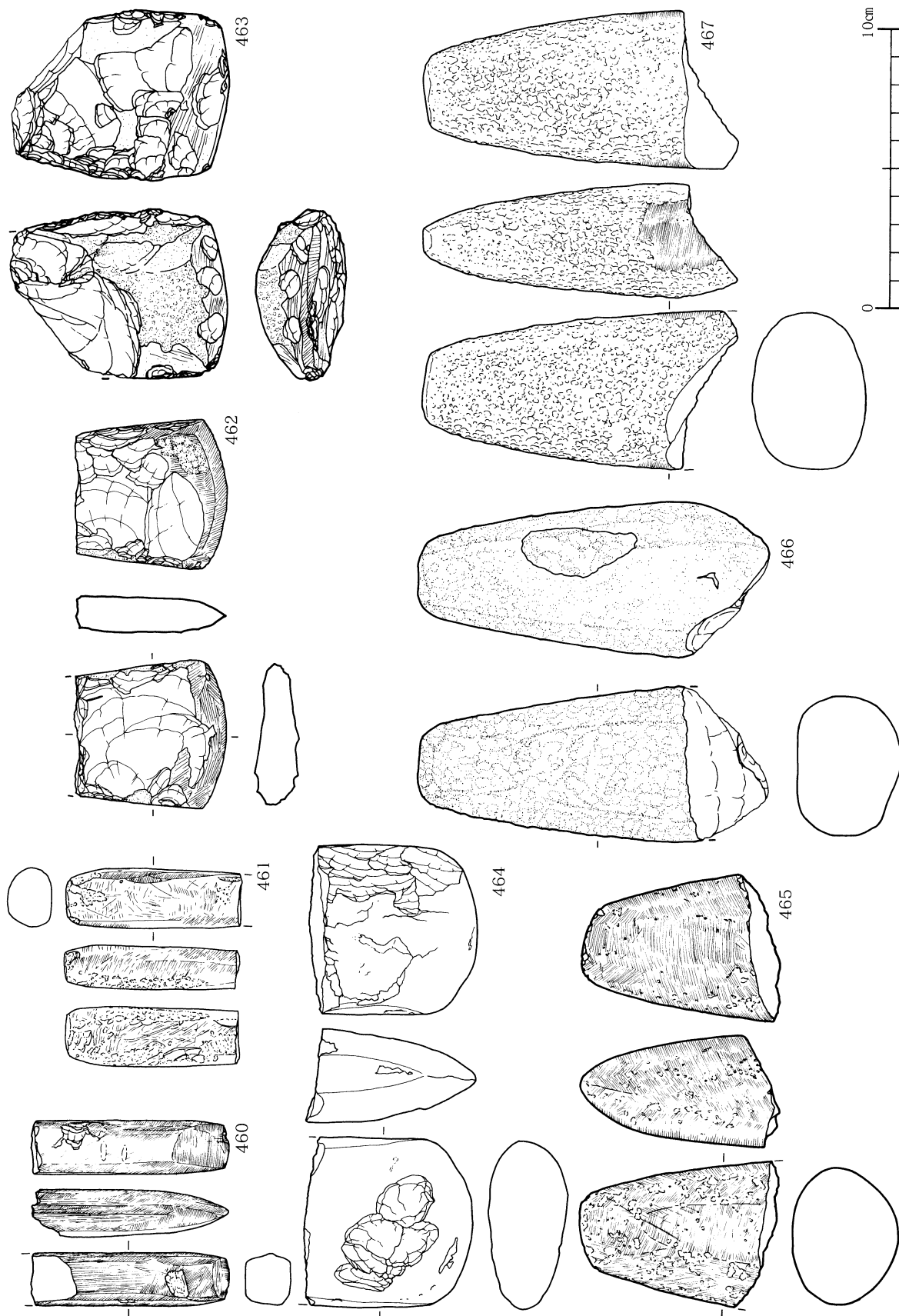
第44图 出土石器 6



第45图 出土石器 7

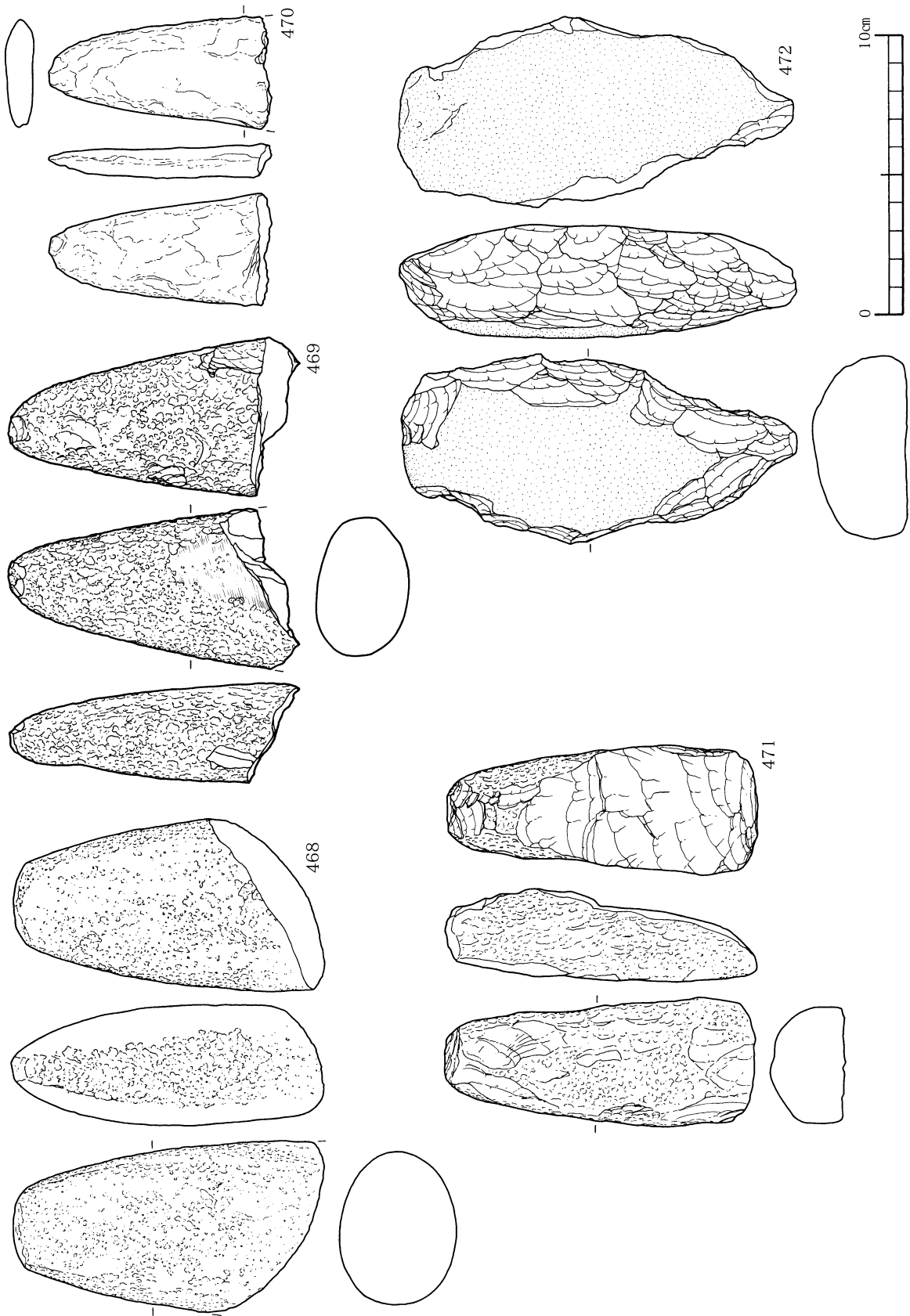


第46図 出土石器 8

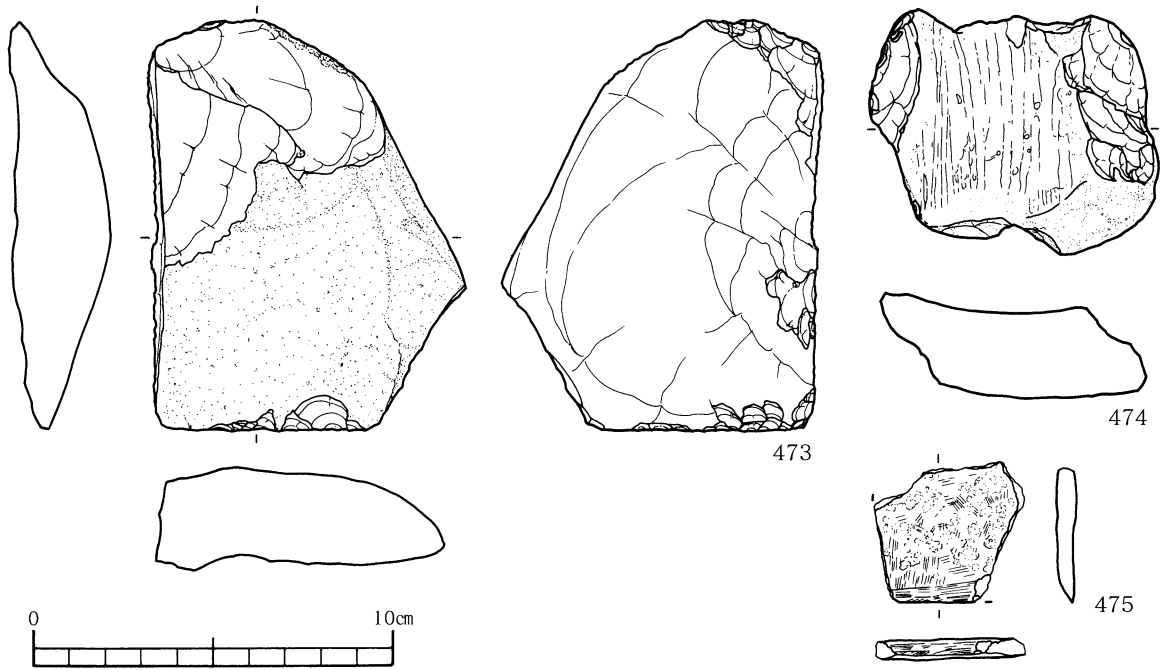


第47图 出土石器 9





第48图 出土石器 10



第49図 出土石器 11

似ている。この様な擦切具が鑿形石器の製作に使用されたということは、河口貞徳氏や山崎純男氏によって指摘されている。

#### 礫器 (第50図 476~478)

礫皮面を大きく残しながらも、部分的に剥離して使用している。476は棒状のもので、両端の側面に剥離が見られる。477は安山岩礫を3方向から打撃を加え剥離している。残りの1方向は元々窪んでいる。錘として利用された可能性もある。

#### 磨石 (第51・52図 479~492)

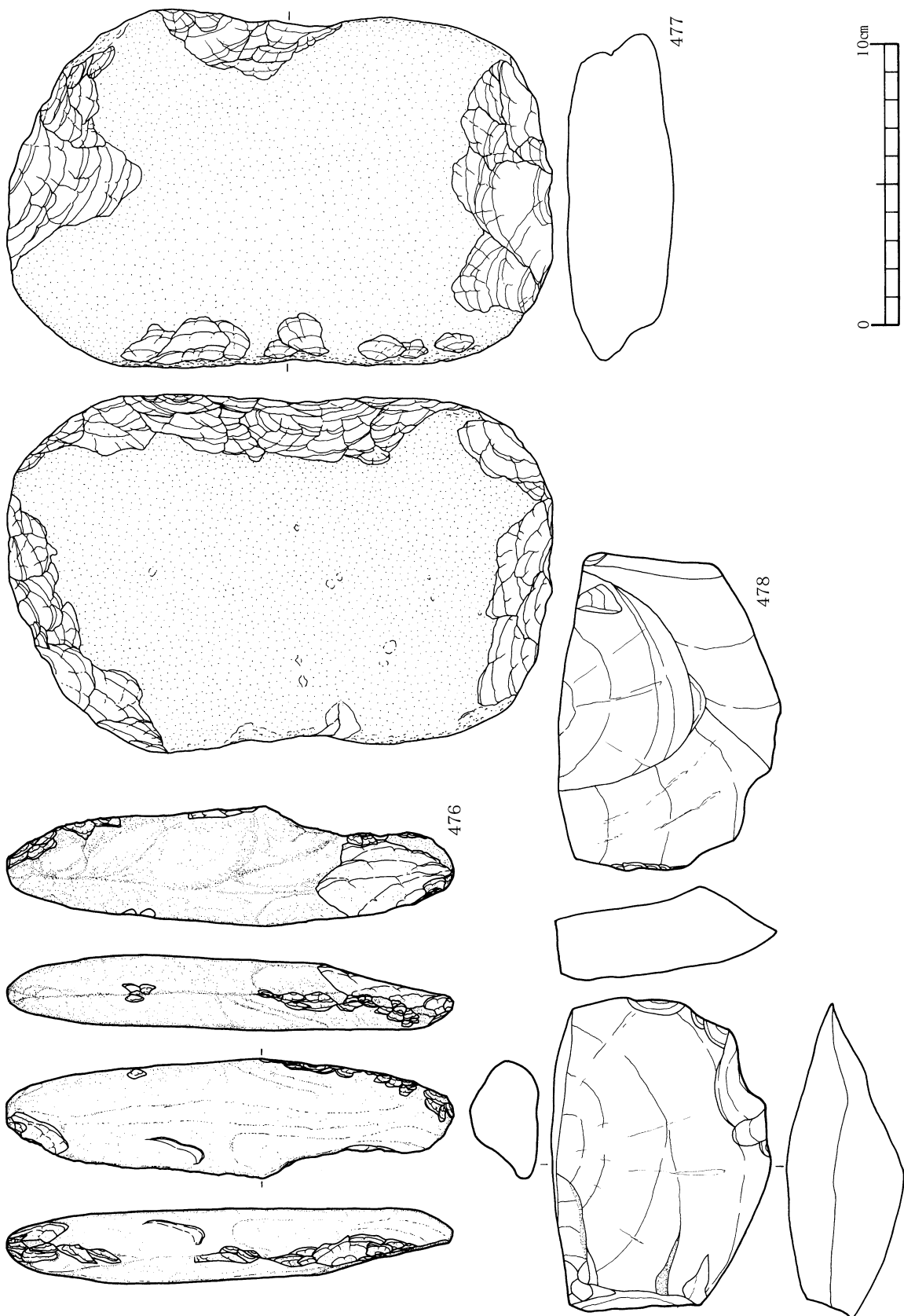
479~484は小型の磨石である。風化が著しいが全体的に磨られている。479・482・483は一面が平坦となる特徴があり、縄文時代晩期に見られるもう少し扁平な小型の磨石とは目的の違いがうかがえる。485~491は大型の磨石である。掌を広げて握るほどの大きさであり、表裏ともよく使い込まれている。492は球形状の礫の下面のみを主に使用したためか、この部分のみ器面が細かく緩やかな曲面をもつ。

#### 敲石 (第52・53図 493~501)

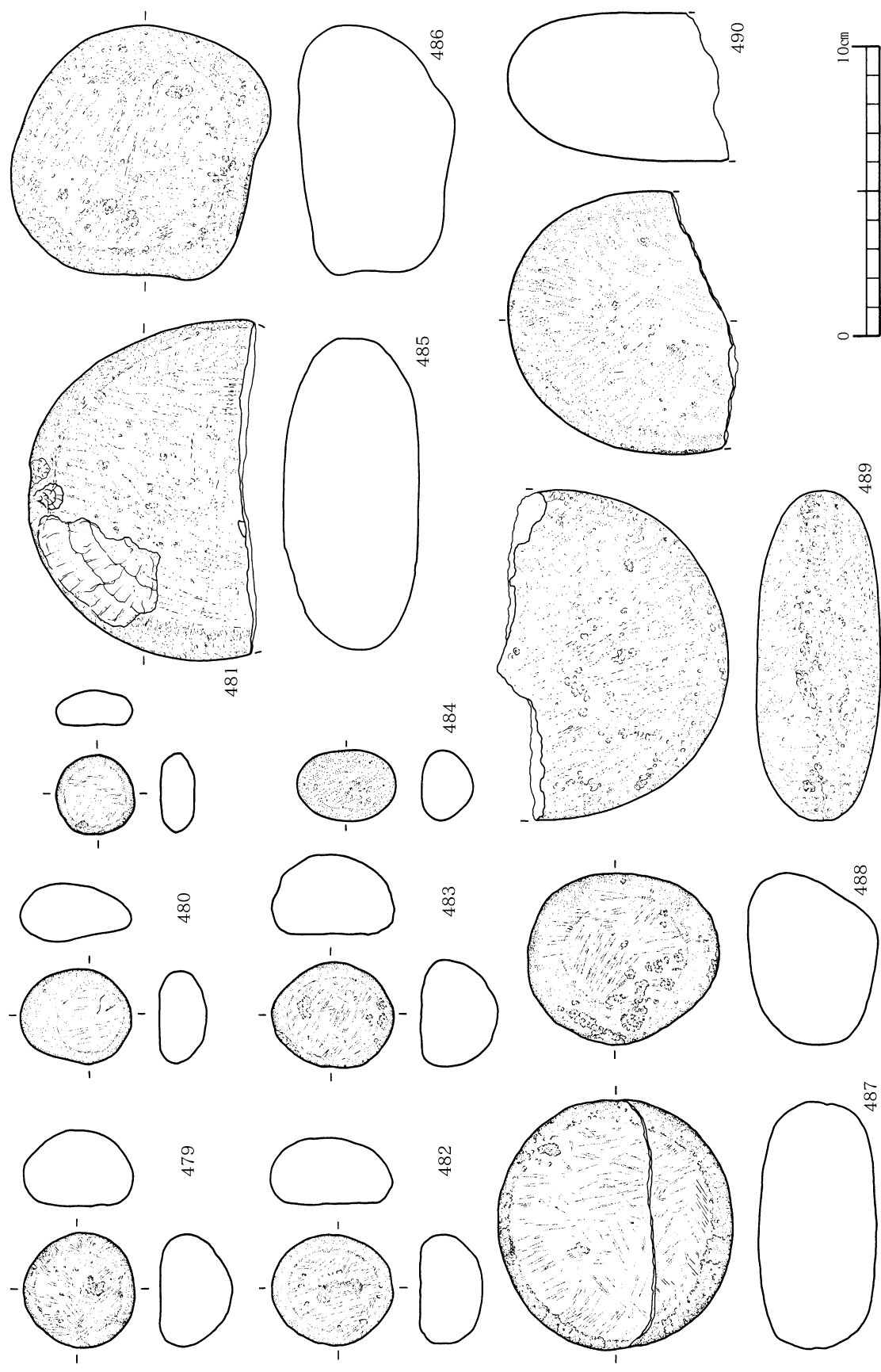
礫の一部に打撃痕が認められ、敲打具として利用していたことがうかがえる。493は上下両端を使用している。494は棒状の礫の先端に細かな敲打痕がみられる。495は断面が長方形をした大型の礫で、一方は折れているが、もう一方の面は使用による潰れが著しい。499は片手で握るには少し大きな球状の安山岩礫であり、下面に打撃痕が見られる。

#### 砥石 (第53図 502~507)

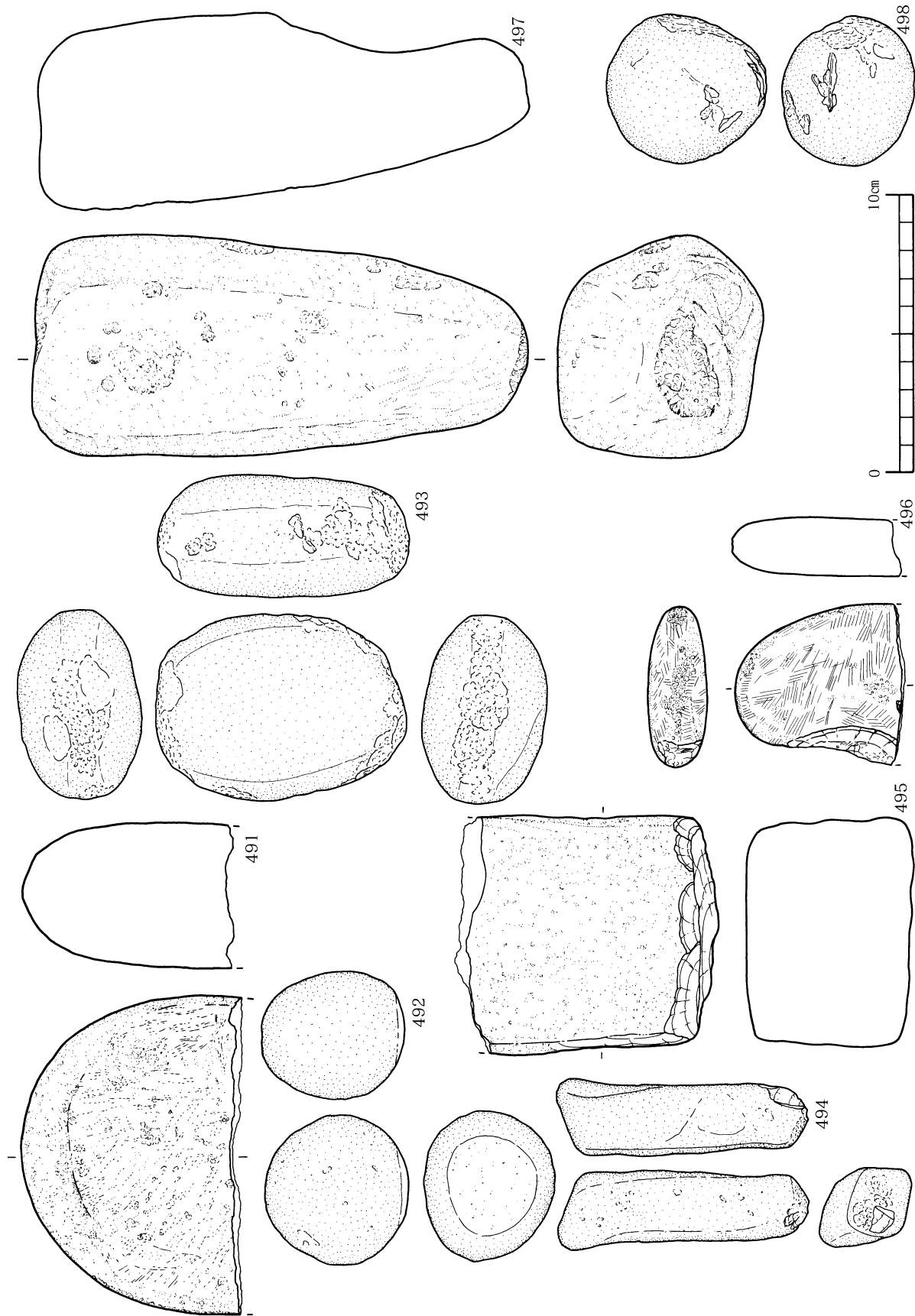
両面とも平坦に近い礫を利用し、片面あるいは両面を使用している。504は一面を使用し、わずかな凹凸はあるがほぼ平坦である。505は両面を使用し、一面は角度が付いているもののほぼ水平な面を持っている。擦痕が明瞭で金属を研いだ可能性もあり、縄文時代に限定しなくても良



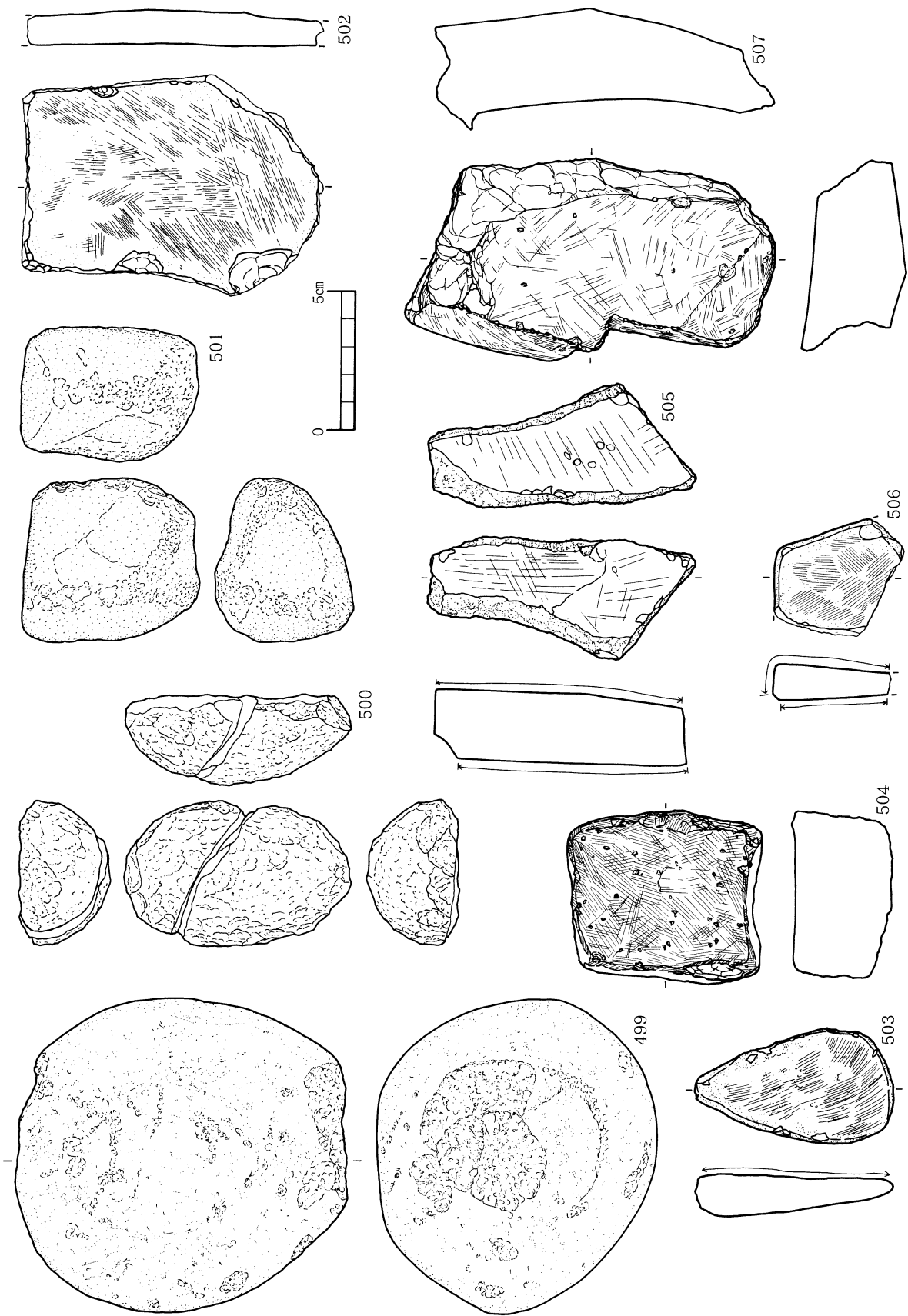
第50图 出土石器 12



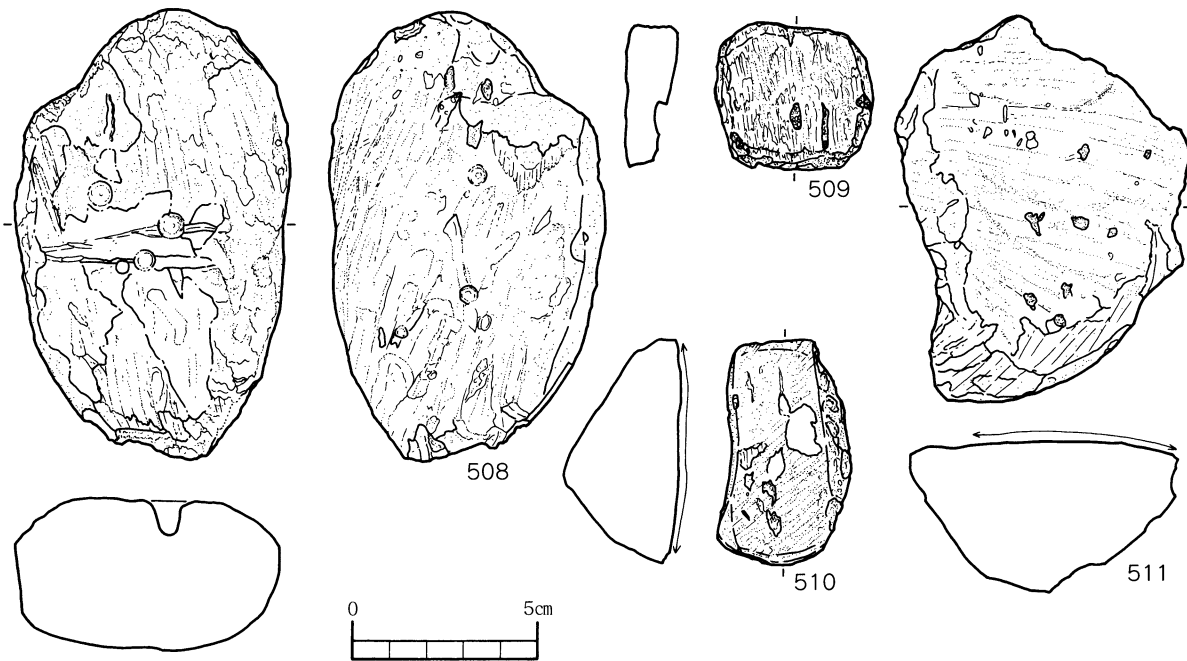
第51図 出土石器 13



第52図 出土石器 14



第53图 出土石器 15



第54図 出土石器 16

さそうである。506は扁平な砂岩を利用し、両面が使われている。一面はわずかに湾曲している。

#### 軽石製品 (第54図 508~511)

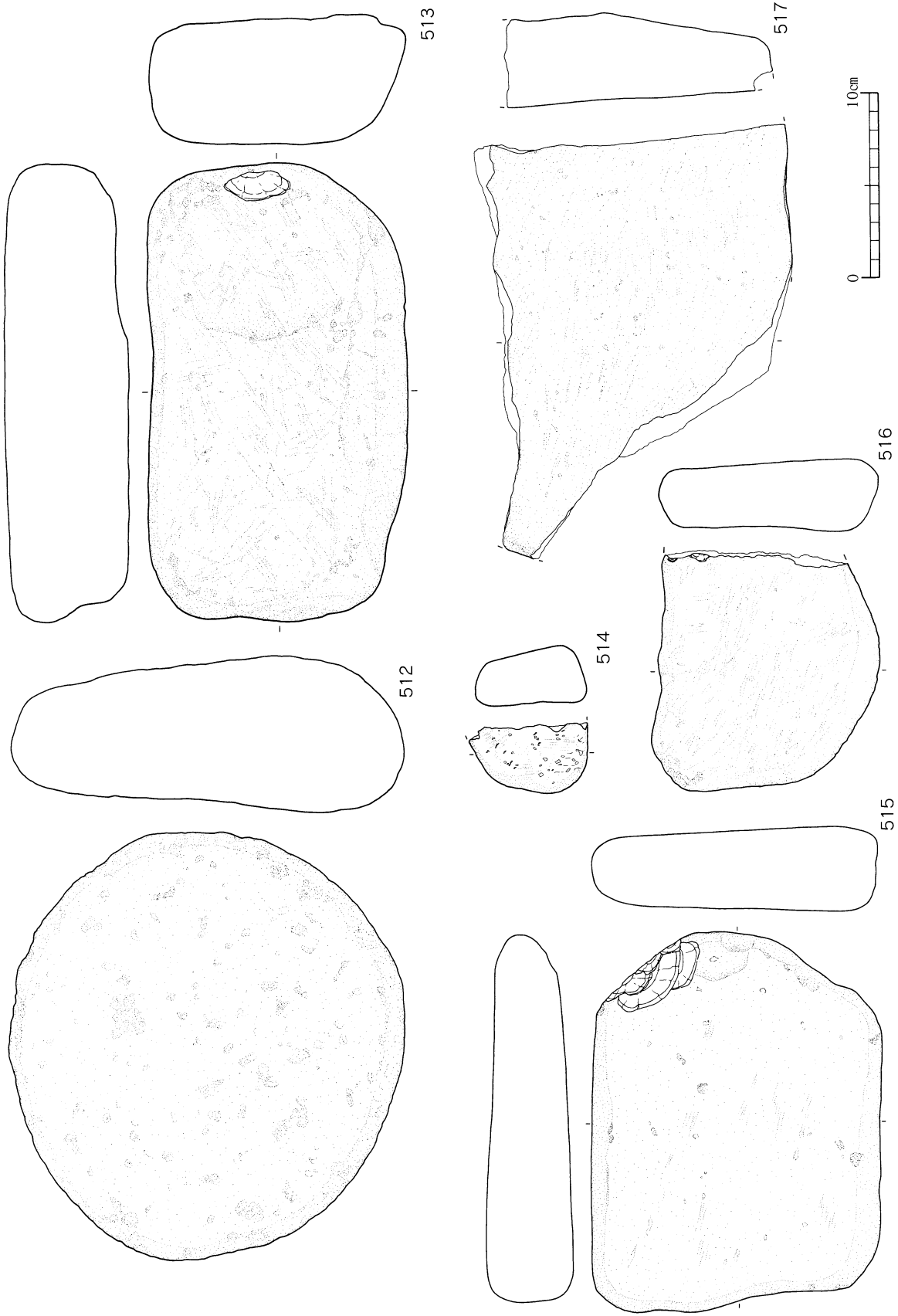
508は直径5~7mmの穴が3ヶ所に見られる。貫通はせず、深いもので9mmの深さをもつ。この面は黒く焼けている。大根占町道ノ迫遺跡でも市来式土器が使われた時期に同様な軽石製品が出土している。穴をあける行為に意味があるのではないかと考えられる。509は二面の平坦面があり、何かを磨くのに使われたと考えられる。510・511は一部に擦った痕跡があり、軽石製品そのものを作ることを目的としたというより、何かの対象物に対して、軽石を使用したことによってこの様な形の石器になったと考えられる。

#### 台石 (第55・57図 512・529)

円形の安定した礫を利用し、遺構の床面に置かれた状態で出土した。様々な作業を行うための台であったと考えられる。512は中央部がわずかに窪み、かすかな擦り面がみられることから石皿としても使用されていたことがうかがえる。

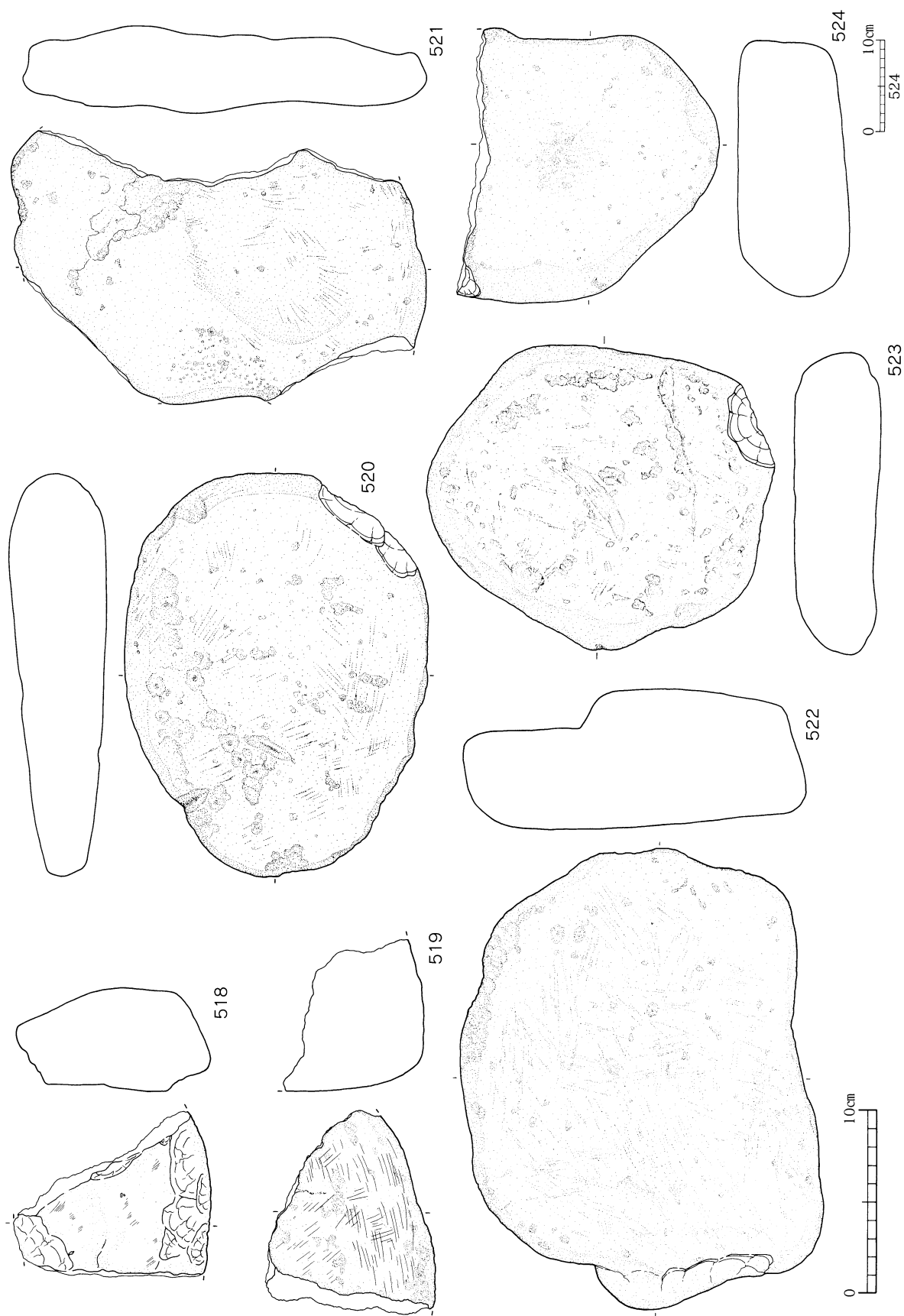
#### 石皿 (第55~57図 513~528)

定形化した石皿ではなく、平坦な面を利用している。窪むほど使われてはいない。514は一面は平坦であり、もう一面は浅い窪みをもっている。515・528は扁平な安山岩の両面を使用している。524は大きな安山岩の両面を使用している。526は断面「U」字形となっており、手に持って使用したことも考えられる。

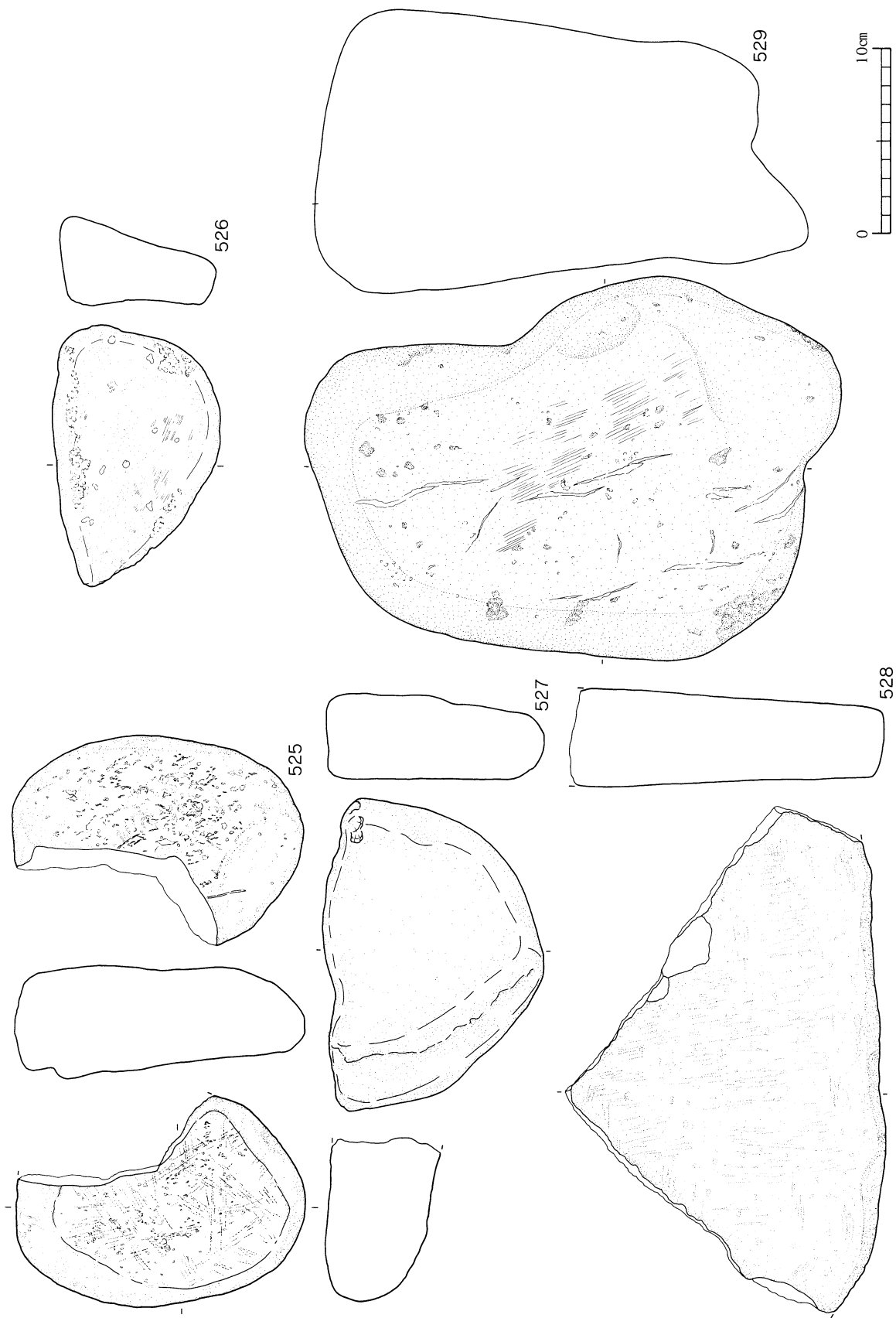


第55図 出土石器 17





第56図 出土石器 18



第57図 出土石器 19

第5表 石器観察表

図番号	番号	出土区	層位	取上番号	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石材	備考
39	360		表探	-	石鏃	2.20	1.70	0.37	0.83	黒曜石(針尾系)	
39	361	1地点北	表探	-	石鏃	2.30	1.62	0.32	0.77	黒曜石(針尾系)	
39	362	B25 住1	北I	-	石鏃	1.80	1.65	0.30	0.52	安山岩	
39	363	B17	IV	-	石鏃	1.70	1.80	0.40	0.79	黒曜石(上牛鼻)	
39	364	B16.17	IV	-	石鏃	1.30	1.70	0.35	0.54	黒曜石(針尾系)	
39	365	A25	IIa	-	石鏃	1.20	1.00	0.30	0.26	黒曜石(針尾系)	
39	366	A26	IIa	-	石鏃	(1.28)	1.30	0.24	0.32	黒曜石(腰岳系)	
39	367	A26	Ic	-	石鏃	(1.20)	1.38	0.34	0.36	安山岩	
39	368	A28	III	836	石鏃	2.00	(1.30)	0.40	0.53	黒曜石(桑ノ木津留)	
39	369	B13	III	-	石鏃	1.45	1.20	0.23	0.37	玉髄	
39	370	B25	IIa	-	石鏃	(1.50)	(0.45)	0.42	0.38	黒曜石(腰岳系)	
39	371	A17	IV	-	石鏃	2.70	1.80	0.50	1.95	安山岩	
39	372	A28	II	955	石鏃	2.10	1.80	0.40	1.12	ハリ質安山岩	
39	373	B13	IIa	-	石鏃	1.50	1.00	0.30	0.27	黒曜石(桑ノ木津留)	
39	374	A26	IIa	-	石鏃	1.80	1.60	0.50	0.86	黒曜石(上牛鼻)	
39	375	B28 溝状遺構5	II	-	石鏃	2.20	1.70	0.40	1.47	鉄石英	
39	376	A27	Ic	-	石鏃	1.70	1.25	0.40	0.67	ハリ質安山岩	
39	377	B17	III	-	石鏃	2.50	1.50	0.65	1.43	黒曜石	
39	378	A17	IV	-	石鏃	2.20	1.45	0.40	1.01	ハリ質安山岩	
39	379	A25	IIa	-	石鏃	2.05	1.50	0.50	0.85	黒曜石(腰岳系)	
39	380	B28	Ic	-	石鏃	1.70	1.50	0.45	0.92	ハリ質安山岩	
39	381	A29 自然流路3	I	-	石鏃	1.40	1.20	0.35	0.43	黒曜石(上牛鼻)	
39	382	A17	III	-	石鏃	1.60	1.45	0.50	0.90	黒曜石	
39	383	A26	IIa	-	石鏃	1.90	1.50	0.40	0.91	ハリ質安山岩	
39	384	A17	IV	-	石鏃	2.70	1.80	0.40	204.00	鉄石英	
39	385	B28 溝状遺構5	II	-	石鏃?	2.58	1.05	0.40	1.06	安山岩	半月形石器の可能性あり
39	386	A26	IIa	-	石鏃未製品	1.50	1.10	0.30	0.51	黒曜石(腰岳系)	
39	387	A26	IIa	-	石鏃未製品	1.30	1.10	0.40	0.52	黒曜石(腰岳系)	
39	388	B17	IV	-	石鏃未製品	0.70	1.70	0.70	1.57	黒曜石(腰岳系)	
39	389	A27?	Ic?	-	石鏃未製品	2.20	1.70	0.50	1.74	黒曜石(針尾系)	
39	390	B17	VII	-	石鏃未製品	2.00	1.95	0.55	1.77	チャート	
40	391	A25	Ic	-	石錐	2.00	2.00	1.10	3.36	鉄石英	
40	392	B26	IIa	-	フレーク	4.10	1.65	0.90	3.48	珪質頁岩	
40	393	A26	Ic	-	石錐	2.30	1.95	1.00	5.12	黒曜石(上牛鼻)	
40	394	A26	V	-	石錐	2.90	5.00	0.80	2.24	タンパク石	
40	395	A27	Ic	-	石錐	3.60	1.20	0.60	2.32	黒曜石(腰岳系)	
40	396	A13	II	-	石錐	4.60	2.60	2.20	21.80	鉄石英	
40	397	A16	III	-	石錐?	3.20	2.65	1.18	8.05	黒曜石(針尾系)	
40	398	A27	Ib	-	抉入石器	2.70	1.90	1.10	4.48	黒曜石(腰岳系)	
40	399	B17	IV	-	抉入石器	3.25	2.10	1.10	6.30	ハリ質安山岩	
40	400	A25	Ib	-	抉入石器	3.30	3.30	1.30	16.37	玉髄	
40	401	A26	IIa	-	石鏃	4.72	3.58	0.73	17.70	頁岩	
41	402	A17	IV	-	スクレイパー	5.00	4.12	1.75	32.02	タンパクセキ	
41	403	B27	Ic	-	スクレイパー	5.58	4.10	2.45	200.00	安山岩	
41	404	A29	IIa	-	スクレイパー	5.55	3.45	2.15	38.67	ハリ質安山岩	
41	405	A27	Ib	-	スクレイパー	5.40	3.70	1.50	29.72	安山岩	
41	406	A26	Ic	-	スクレイパー	3.90	4.80	2.20	39.81	安山岩	
41	407	A17	VII	-	スクレイパー	5.15	3.05	1.32	20.25	黒曜石	
41	408	A26	Ic	-	スクレイパー	2.85	2.95	1.20	8.29	黒曜石(腰岳系)	
41	409	A17	IV	-	スクレイパー	4.09	4.22	1.62	20.62	黒曜石(上牛鼻)	
41	410	溝状遺構5	II	-	スクレイパー	3.70	1.65	1.00	4.55	黒曜石(腰岳系)	
41	411	A25	Ib	-	スクレイパー	2.85	2.18	1.19	5.96	黒曜石(上牛鼻)	
41	412	A25	Ib	-	2次加工のある別片	3.40	3.60	1.25	16.29	石英	
42	413	A26	Ic	-	スクレイパー	6.60	8.20	2.68	147.10	安山岩	
42	414	A28	Ic	-	スクレイパー	5.35	5.50	1.70	52.87	安山岩	黒色土
42	415	自然流路3	II	-	スクレイパー	3.95	7.25	1.65	38.72	?	

図番号	番号	出土区	層位	取上番号	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石材	備考
42	416	A26	II a	-	スクレイパー	3.80	2.52	0.65	5.68	頁岩	
42	417	A17	XIV	-	スクレイパー	6.50	2.92	1.00	17.65	安山岩	
42	418	1地点北	VI	665	スクレイパー	5.64	6.60	1.19	42.36	頁岩	
42	419	A27	I c	-	スクレイパー	4.30	5.45	0.80	25.20	安山岩	
43	420	A26	II 上面	-	スクレイパー	4.59	9.20	1.80	58.65	頁岩	
43	421	A11	I b	-	スクレイパー	4.30	6.19	1.65	40.02	安山岩	
43	422	自然流路3	I	-	スクレイパー	5.18	7.60	1.80	63.84	安山岩(サヌカイト)	
43	423	A27	I b	-	スクレイパー	2.90	6.50	1.13	16.81	安山岩(サヌカイト)	
43	424	A26	I c	110	スクレイパー	5.10	8.37	1.50	62.84	安山岩	
43	425	1地点	VI	769	スクレイパー	5.00	5.30	2.10	54.00	安山岩(サヌカイト)	
44	426	A17	VII	-	スクレイパー	2.10	3.30	0.85	4.43	ハリ質安山岩	
44	427	A26	I c	-	スクレイパー	2.55	3.85	1.20	13.13	安山岩	
44	428	A23	II	-	スクレイパー	2.80	3.80	0.65	8.65	黒曜石	
44	429	A25	II a	-	スクレイパー	3.18	2.45	1.32	8.94	安山岩	
44	430	B19	V	-	スクレイパー	3.50	2.15	0.50	40.20	石英	
44	431	A26	I c	-	スクレイパー	3.20	1.92	1.00	4.87	ハリ質安山岩	
44	432	B27	I c	-	スクレイパー	4.08	3.00	1.05	12.26	玉髄	
44	433	A27	I b	-	ノッチドスクレイパー	4.10	3.00	1.70	17.00	黒曜石(上半鼻)	
44	434	B28	I c	-	石匙	1.50	1.50	0.80	2.32	チャート	
44	435	A25	I c	-	楔形石器	2.20	3.10	1.00	6.14	黒曜石(上半鼻)	
44	436	B25	II a	-	楔形石器	2.00	0.70	0.40	0.54	黒曜石(上半鼻)	
44	437	B29	I c	-	楔形石器	2.50	2.00	1.20	5.67	黒曜石	
44	438	A17	III	-	楔形石器	2.28	2.33	1.10	5.17	黒曜石(上半鼻)	
44	439	A25	II a	-	楔形石器	2.85	2.20	1.10	7.05	黒曜石(上半鼻)	
44	440	A23	II	1016	楔形石器	1.75	0.80	0.70	1.14	水晶	
45	441	B28	I c	-	石核	2.50	4.30	1.25	9.93	黒曜石(針尾系)	
45	442	A26	I c	-	石核	2.53	4.25	2.29	32.73	黄褐色の頁岩	
45	443	A29, 30	II a	-	石核	3.10	4.85	2.40	30.07	チャート	
45	444	A29	II a	-	石核	2.30	2.85	2.48	17.29	黒曜石(上半鼻)	
45	445	A28	III	-	石核	1.70	2.50	1.50	5.01	黒曜石(腰岳系)	
45	446	A17	IV	-	石核	3.10	4.90	2.17	34.67	安山岩(サヌカイト)	
45	447	A29	I b	-	石核	2.00	2.50	1.40	9.37	黒曜石(上半鼻)	
45	448	A26	I c	-	石核	4.90	5.20	5.20	180.93	鉄石英	
45	449	B27	I c	-	石核	4.90	4.30	3.30	70.06	ハリ質安山岩	
46	450	溝状遺構3	II	-	石核	4.10	5.40	2.80	55.67	黒曜石(上半鼻)	
46	451	A17	I b	-	石核	2.80	3.70	2.80	31.09	黒曜石	
46	452	A17	VI	-	石核	2.30	3.20	2.20	14.81	黒曜石(上半鼻)	
46	453	B25	II a	-	石核	2.90	2.70	1.60	10.97	頁岩	
46	454	溝状遺構5	II	-	石核	4.40	2.60	1.35	16.07	黒曜石(腰岳系)	
46	455	B29	II a	-	石核	2.70	3.00	1.80	15.88	黒曜石(上半鼻)	
46	456	B17	IV	-	石核	2.45	3.30	1.60	10.57	黒曜石?	
46	457	B17	IV	-	石核	4.12	2.91	2.52	28.38	黒曜石	
46	458	A27	I c	-	石核	5.10	7.70	3.70	111.38	黒曜石(日東系)	
46	459	B18	IV	-	石核	3.40	3.90	3.10	35.57	ハリ質安山岩	
47	460	B28	I c	-	鑿形石斧	(7.10)	1.95	1.75	40.54	蛇紋岩	
47	461	A26	I c	-	鑿形石斧	(6.30)	2.20	1.60	42.59	ホルンフェルス	
47	462	B17	III	-	石斧	5.50	5.40	1.50	66.87	ホルンフェルス	1地点北
47	463	AB28 自然流路5	-	-	石斧片	7.75	6.00	3.20	189.96	頁岩	
47	464	自然流路3	II	-	石斧	(6.00)	6.10	3.40	169.04	ホルンフェルス	
47	465	自然流路3	I	-	石斧	(7.10)	5.10	4.00	176.72	ホルンフェルス	
47	466	自然流路5	-	-	石斧片	12.65	5.60	5.60	364.00	ホルンフェルス	
47	467	B30	II a	-	石斧	(11.30)	5.60	4.10	326.96	ホルンフェルス	
48	468	自然流路6	-	-	石斧	(11.20)	6.10	4.30	400.00	ホルンフェルス	
48	469	自然流路4	-	-	石斧	(10.90)	5.70	3.50	227.62	ホルンフェルス	1地点南
48	470	B28	I c	-	石斧	(8.00)	4.00	1.15	50.17	ホルンフェルス	
48	471	A20	III	-	石斧	11.20	4.80	3.30	198.96	頁岩	2地点
48	472	出土地不明	表採	-	石斧	14.20	7.68	4.30	475.00	安山岩	

図番号	番号	出土区	層位	取上番号	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石材	備考
49	473	溝状遺構3	II	-	楔	11.40	8.70	2.70	336.00	安山岩	
49	474	溝状遺構3	II	-	砥石	6.70	7.70	1.50	166.00	凝灰岩	
49	475	自然流路5	-	-	擦切具	3.75	4.20	0.55	12.00	砂岩	
50	476	A25	Ic	-	石鏃	1.50	1.25	0.30	0.37	頁岩	
50	477	PあるいはR18	I	52	礫器	19.30	12.60	3.90	1388.00	安山岩	
50	478	A18	-	-	礫器	7.92	11.30	2.82	35.90	凝灰岩	暗キヨ
51	479	B26	IIa	-	小型磨石	4.10	4.00	2.70	50.00	安山岩	
51	480	A17	IV	-	小型磨石	4.10	3.25	2.00	35.43	頁岩	
51	481	A26	II	-	小型磨石	2.75	2.90	1.25	14.59	安山岩	
51	482	A17	VII	-	小型磨石	4.50	3.80	2.30	44.00	安山岩	
51	483	A27	Ib	-	小型磨石	4.44	3.65	2.78	47.24	安山岩	
51	484	溝状遺構5	II	-	小型磨石	4.60	3.50	1.90	21.00	?	
51	485	B14	VII	-	磨石	8.60	11.80	5.10	726.00	凝灰岩	1地点北
51	486	B17土器溜	VII	-	磨石	9.70	8.80	5.80	720.00	安山岩	
51	487	A25	II上面	-	磨石	8.70	8.70	4.30	486.00	砂岩	
51	488	B17	IV	-	磨石	7.10	6.00	5.80	272.00	安山岩	
51	489	1地点北	VI	704	磨石	8.60	11.40	4.60	628.00	安山岩	
51	490	溝状遺構6	-	-	磨石	8.20	9.20	5.20	566.00	安山岩	
52	491	溝状遺構3	II	-	磨石	7.70	11.60	5.25	792.00	安山岩	
52	492	自然流路1	I	-	磨石の可能性あり	5.30	5.50	4.70	141.60	安山岩	
52	493	溝状遺構6	-	-	蔽石	9.10	6.80	4.50	390.00	安山岩	
52	494	B26	Ib	-	蔽石	8.90	3.10	2.95	102.00	安山岩	
52	495	B17土器溜	VII	-	磨石特殊	9.30	8.70	5.90	1000.00	安山岩	
52	496	溝状遺構3	II	-	不明	(6.10)	5.80	2.10	121.00	頁岩	
52	497	B28 石組	-	3	蔽石	17.00	8.00	6.41	1440.00	安山岩	
52	498	A27	Ib	-	蔽石	5.70	5.30	4.62	145.16	安山岩	
53	499	A17土器溜	IV	-	蔽石	12.00	11.40	10.10	1900.00	安山岩	
53	500	2地点A20	IV	-	蔽石	5.30	8.10	3.40	165.13	安山岩	表面がロボロのため可能性があるにどめる
53	501	A26	Ic	138	蔽石	6.30	6.10	4.82	251.00	安山岩	
53	502	AB29 RI	I	-	砥石	11.00	8.20	1.35	166.00	凝灰岩	
53	503	B17土器溜	VII	-	砥石	7.15	4.15	1.55	51.00	安山岩	
53	504	溝状遺構6	I	-	砥石	6.90	5.70	3.65	248.00	凝灰岩	
53	505	A17	VIII	-	砥石	9.20	4.15	2.85	126.25	凝灰岩	泥炭層
53	506	B17	IV	-	砥石	5.10	4.20	1.30	30.00	砂岩	
53	507	溝状遺構6	I	-	砥石	13.20	7.30	3.80	438.00	凝灰岩	
54	508	B17土器溜	VII	-	軽石製品	12.20	7.50	4.10	128.58	軽石	
54	509	B18土器溜	VII	-	軽石製品	3.90	4.25	1.45	9.48	軽石	
54	510	B18土器溜	VII	-	軽石製品	5.95	3.30	3.10	19.06	軽石	
54	511	自然流路6	I	-	軽石製品	10.52	8.20	4.20	84.00	軽石	
55	512	A17	IV	-	台石	23.14	21.65	8.50	3400.00	安山岩	
55	513	B28 石組	-	4	石皿A	24.83	14.14	7.00	4600.00	安山岩	
55	514	溝状遺構3	II	-	小型石皿A	6.50	3.70	3.40	106.00	安山岩	
55	515	A22	泥炭	-	石皿A	20.60	15.95	4.75	2900.00	安山岩	
55	516	A25	IIa	-	石皿A	12.50	13.04	4.00	1100.00	安山岩	
55	517	A25	II直面	-	石皿A	23.40	17.35	5.70	2900.00	凝灰岩	
56	518	A17土器溜	VII	-	石皿A	9.00	10.58	5.50	702.00	安山岩	
56	519	A25	II直面	-	石皿A	11.10	9.34	10.10	1200.00	安山岩	
56	520	B28 石組	-	6	石皿	22.00	16.75	5.80	1900.00	安山岩	
56	521	B18土器溜	VII?	-	石皿A	22.95	14.90	4.90	2000.00	安山岩	
56	522	A25	II直面	-	石皿A	25.25	20.03	8.00	5600.00	安山岩	
56	523	B28石組	-	5	礫	19.15	16.65	4.95	2000.00	安山岩	
56	524	B18石組	-	1	石皿A	28.80	30.00	13.00	18300.00	安山岩	
57	525	溝状遺構6	I	-	石皿B・台石	15.90	10.80	6.30	1300.00	安山岩	
57	526	A17	IV	-	石皿B	14.20	8.60	5.40	892.00	安山岩	
57	527	B17土器溜	V?	-	石皿B	16.90	11.30	4.60	1500.00	安山岩	
57	528	B28 石組	-	3	石皿B	27.30	17.50	5.30	3400.00	安山岩	
57	529	B29 石組	-	2	台石(擦痕有)	29.20	20.75	16.30	12200.00	安山岩	

## 2 弥生時代終末から古墳時代初頭の調査成果

弥生時代終末から古墳時代初頭の遺構は3地点南側から2地点北部（A・B-22区～26区）で検出された（第58図）。3地点は2地点よりも、地表面で約20cm、弥生時代の遺構検出面（3地点のII層と2地点のIV層）で約40cm高い。

微高地となる3地点から竪穴住居跡2軒・炉跡10基・溝状遺構1条・土抗10基が検出され、低地部となる2地点では杭列を伴う溝状遺構と自然流路が1条ずつ検出された。溝状遺構と自然流路からは多くの木製品が出土した。

3地点ではIc層からII層上面にかけて縄文時代後期から中世にかけての土器、石器が多量に出土した。弥生時代の遺物包含層は中世（Ic層堆積時）に攪乱されているために残存していなかった。遺構、遺物共にA・B-25・26区に集中して検出された。それより以北は中世の自然流路や耕地整理の際に削平されたと思われる。遺構検出面であるII層上面の地形は南から北側へわずかに傾斜しているが、肉眼で識別できる程ではなくほとんど平坦に近い地形である。

2地点は本来IV層及びV層上面が遺構検出面であるが、溝状遺構2・自然流路1を検出できたのはVII層の泥炭層上面であった。調査時に遺構の存在を想定していなかったために、複雑な土層の層序を把握せず掘り下げたことが原因となった。

### （1）弥生土器の分類の説明

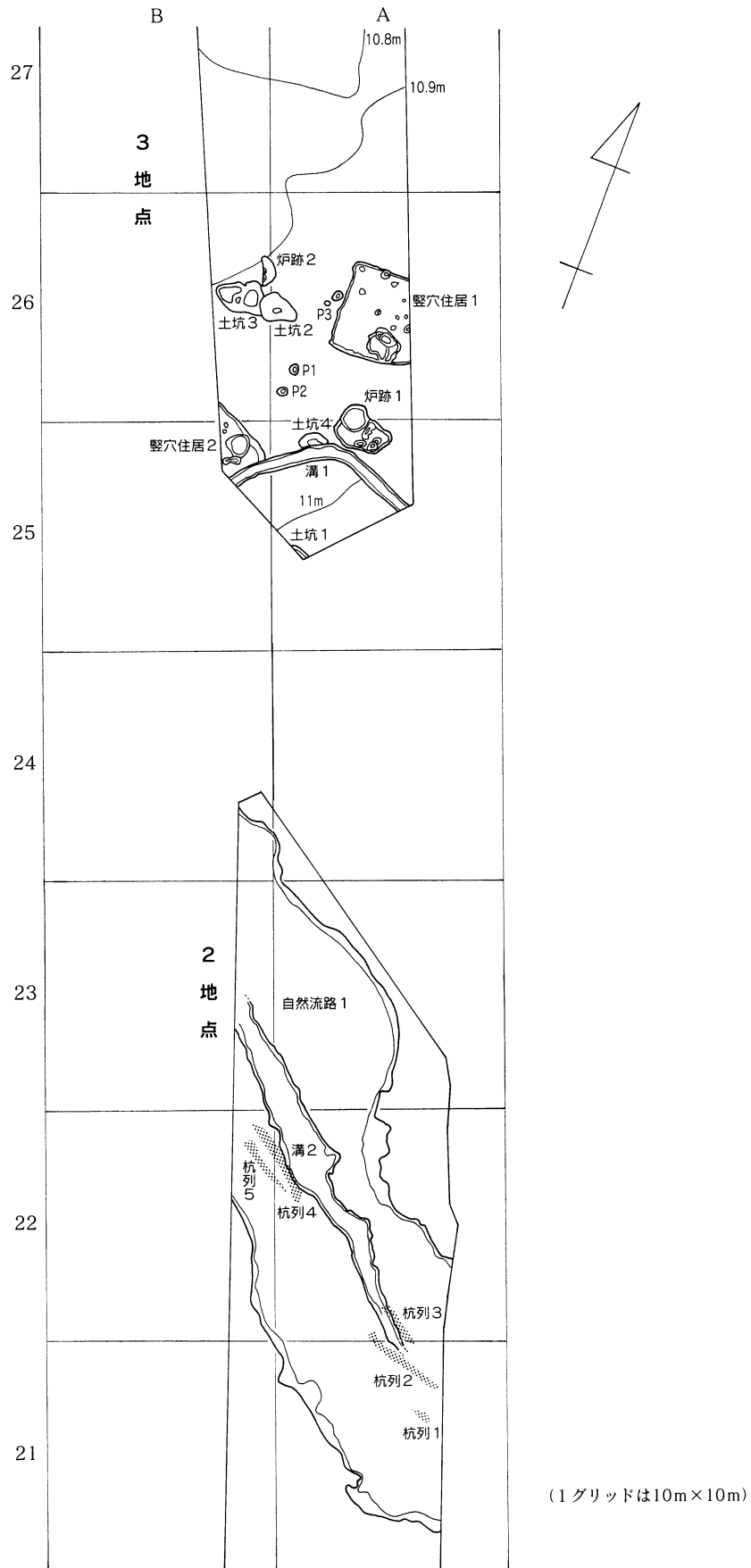
遺構から出土している土器の一部はこれまで中津野式土器と呼ばれてきた一群に該当し、南九州では弥生時代終末から古墳時代初頭に位置づけられている。甕形土器（以下甕と略す）、壺形土器（以下壺と略す）を中心に型式分類を行った。分類の概念については第59・60図に示している。各遺構出土の弥生土器については分類をもとに説明を行う。

### （2）石器の説明について

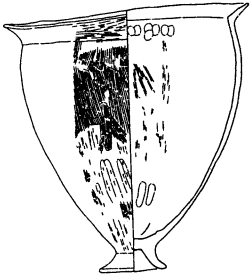
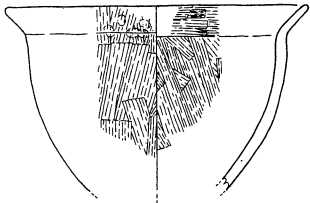
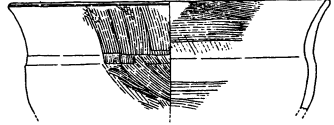
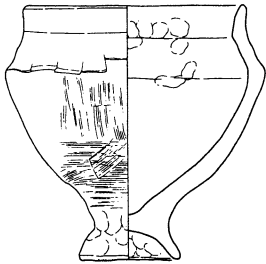
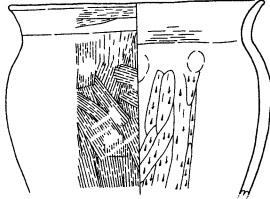
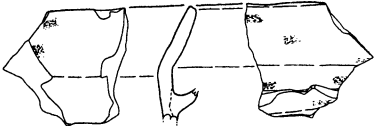
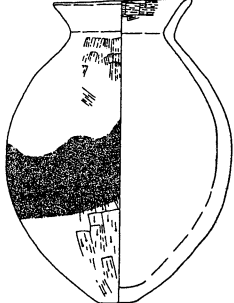
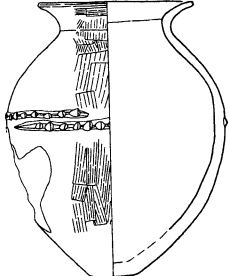
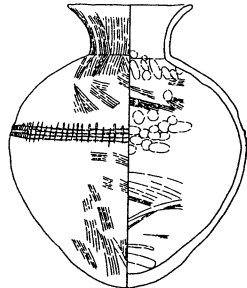
遺構からは弥生時代と縄文時代の石器が混在して出土しているため、遺構ごとにまとめて説明を行う。

### （3）木製品の説明について

楠元遺跡では、総数331点の木製品が出土した。その多くは、杭や製材片の一部である。杭には芯持材を利用した丸杭と、割材を利用した割杭・角杭の2種類がある。後者の多くは伐採した原木を木口面で放射方向に分割して原材を得る「みかん割り」と呼ばれる方法によって獲得された断面三角形の割杭で、中には建築材を再利用したものもある。木製品の分類及び細部については、奈良国立文化財研究所『木器集成図録－近畿原始篇－』1993に従い、個々の木製品の計測値については観察表に掲載した。木製品の加工痕については、宮原晋一「石斧、鉄斧のどちらで加工したか－弥生時代の木製品について－」『弥生文化の研究10 研究の歩み』1988を参考に分類した。具体的には、鉄器の加工によるA種刃先痕（写真1）と石器の加工によるB種刃先痕の可能性のある工具痕（写真2）の確認を行った。その他に加工幅、刃こぼれ痕、加工痕の湾曲を観察し記載した。鍬や容器などは摩耗や腐食のために



第58図 弥生時代終末～古墳時代初頭遺構配置図

甕 Ia 類	甕 Ib 類	甕 Ic 類
		
<p>口縁：断面三角形を呈し、「く」字状に外反する。屈曲が強いために内面に稜が付く。          胴部：あまり張らず、底部に向かってすぼまる。          底部：小さめで、脚高が低い。</p>	<p>口縁：「く」字状に外反する。Ia類に比べ屈曲が弱い。          胴部：張らずに底部に向かってすぼまる。          調整：内外面丁寧なハケ目調整が施される。</p>	<p>口縁：Ia・b類に比べ傾きが弱く直立する。          胴部：張らずに底部に向かってすぼまる。          底部：口縁部に縦方向のハケ目が施され、胴部との境に段を持つ。</p>
甕 II 類	甕 III 類	甕 IV 類
		
<p>口縁：直立気味である。          胴部：上胴部で屈曲し、底部に向かってすぼまる。上胴部には稜が付く。</p>	<p>口縁：緩やかに外反する。          胴部：最大径は上胴部にあり、丸みを帯びる。口径よりも胴径が大きい。          調整：外面は丁寧なハケ目、内面はケズリ調整である。</p>	<p>大甕          口縁：直線的に外傾し、上胴部に上方に湾曲する断面三角形の突帯が付く。          調整：丁寧なナデ調整が施される。</p>
壺 Ia 類	壺 Ib 類	壺 II 類
		
<p>口縁：「く」字状に外反する。          胴部：やや張り気味で倒卵形を呈す。          底部：平底。</p>	<p>口縁：「く」字状に外反する。口唇部は平坦である。          胴部：最大径は上胴部付近にあり、断面三角形の刻目突帯が廻る。          底部：平底。          調整：ハケ目調整が施される。</p>	<p>口縁：頸部から直線的に立ち上がり、上方で大きく開く。          胴部：最大径が胴部中央にあり、球形に近い。          底部：丸底。          調整：ハケ目調整が施される。</p>

第59図 弥生土器分類模式図 1




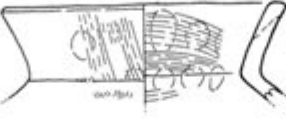
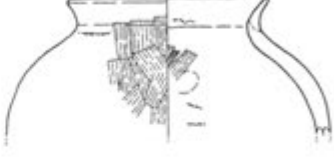

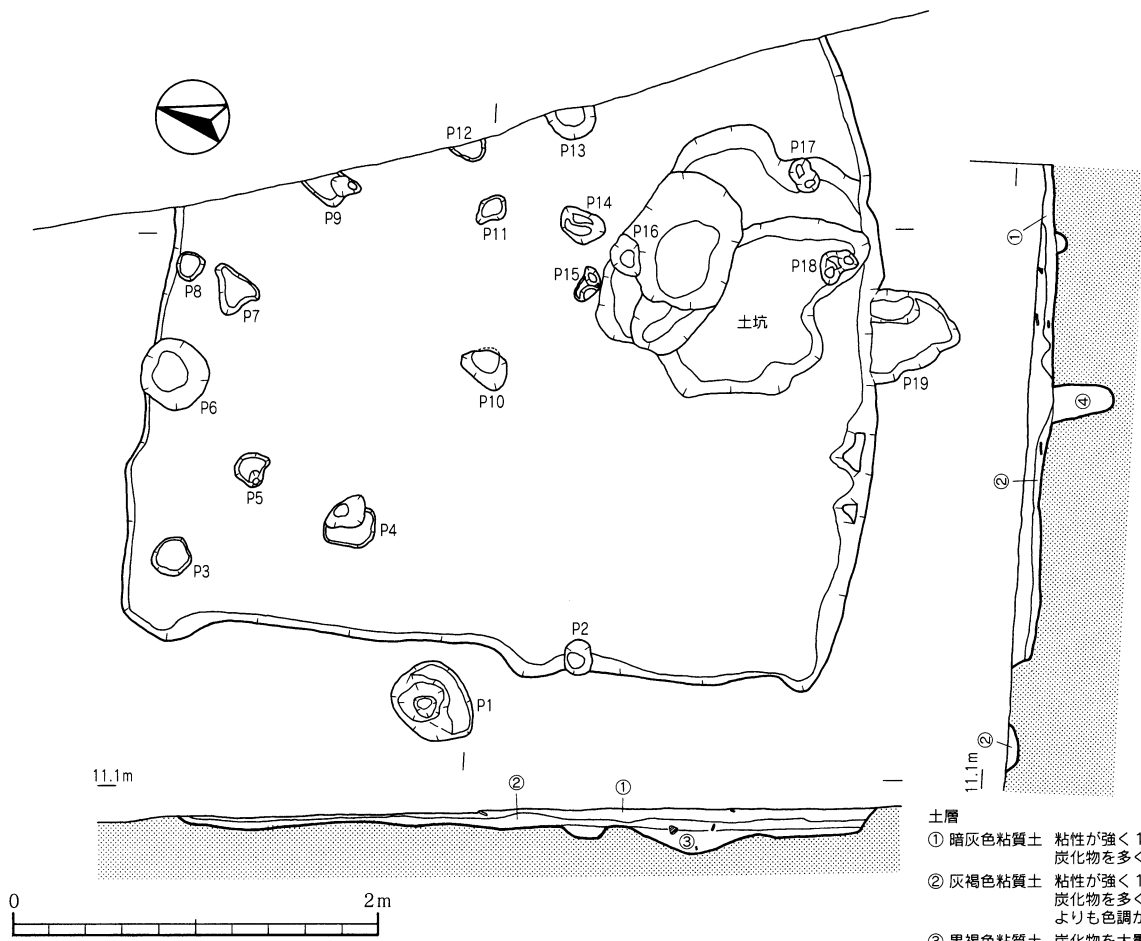
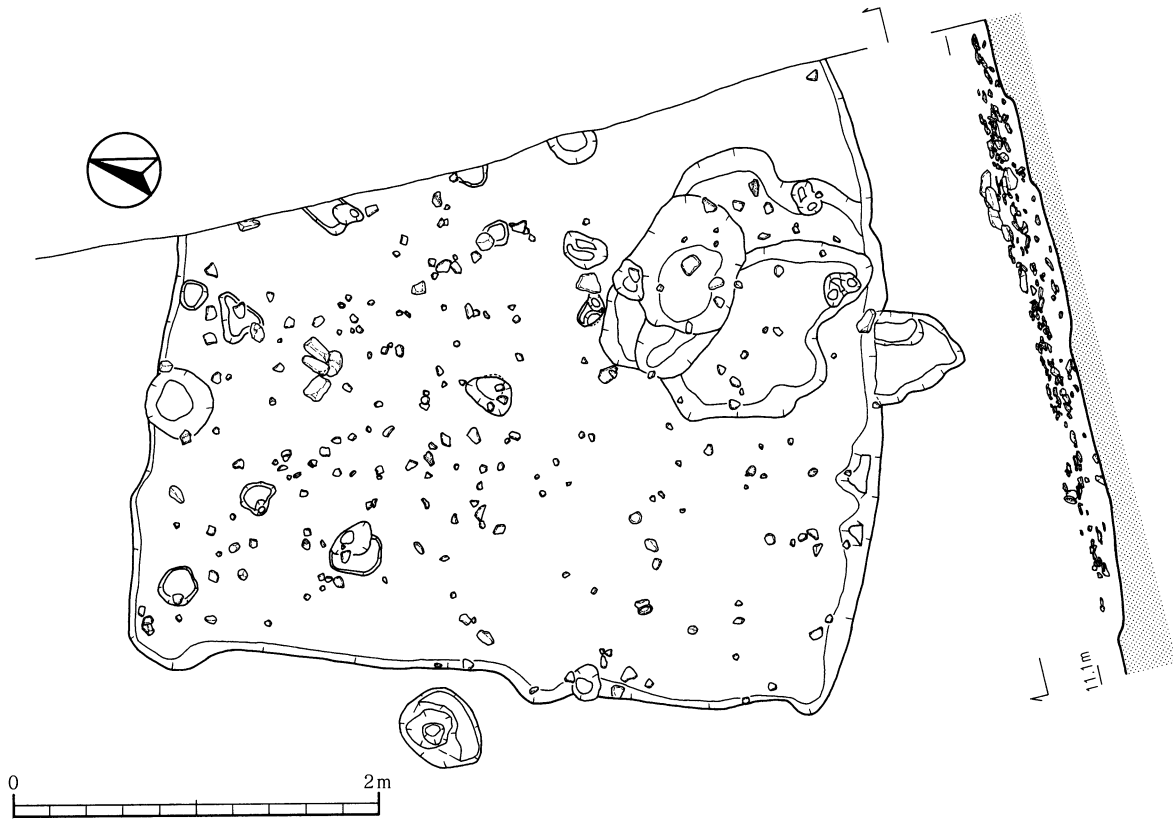
壺 III 類	壺 IVa 類	壺 IVb 類
		
<p>口縁：「く」字状に大きく外傾し、端部は横に開く。          胴部：削りだしの多重突帯がつく。          調整：緻密なミガキ調整が施される。          その他：黒色で焼成は堅緻である。</p>	<p>口縁：短く直線的に外傾する。          調整：ハケ目後ナデ調整である。</p>	<p>口縁：短く外反し、先細りする。          胴部：張りが強く、丸みを帯びる。          調整：ハケ目が施される。          その他：焼成は堅緻である。</p>
<p>壺 V 類</p>	<p>第60図 弥生土器分類模式図 2</p>	
		
<p>免田式（長頸壺）          ヘラによる浅い下向き重弧文が施される。</p>		



写真1 A種刃先痕と凸状刃こぼれ痕



写真2 B種刃先痕の可能性ある加工痕



- 土層
- ① 暗灰色粘質土 粘性が強く1~3mm大の炭化物を多く含む。
  - ② 灰褐色粘質土 粘性が強く1~3mm大の炭化物を多く含む。①層よりも色調が明るい。
  - ③ 黒褐色粘質土 炭化物を大量に含む。土坑の埋土。
  - ④ 暗褐色粘質土 3mm大の炭化物を少量含む。ピットの埋土。

第61図 1号竪穴住居跡

加工の種類を特定することはできず、加工痕が比較的よく残っている杭の先端部を対象とする結果となった。

#### (4) 1号竪穴住居跡 (第61図)

A-26区で検出された。住居の東側が未調査なので全長を知ることはできないが、検出された大きさは南北4m、東西2.8mで竪穴の長さから推測すれば1辺が4m程の方形住居になると考えられる。削平のために検出時の深さは6~10cm程で、特に北壁は残りが悪く壁の立ち上がりが明確でなかった。住居の床面に硬化面は形成されていない。南側の壁際に平面形が1.26×1.5m、深さ5~12cmの浅い土坑が検出された。土坑の平面形は不定形であり、床面の深さも様でないことから複数の土坑が切り合っていると考えられる (第62図下)。土坑は埋土に多量の炭化物を含んでおり地床炉と思われる。住居に伴う柱穴は19基検出された。その多くは住居内の北側で検出され、規則的な配置ではない。P1、P2、P6、P10、P13は他の柱穴に比べ深いことから支柱穴の可能性が考えられる。柱穴の底面に硬化面は形成されていない。住居跡からは弥生時代終末の土器462点、石器19点が出土した。遺物は、埋土全体からまんべんなく出土しており床面直上からの出土はみられなかった (第62図上)。弥生土器は細片が多く接合資料は少ない。

第6表 1号竪穴住居跡柱穴計測表

遺構名	幅 (cm)	深さ (cm)	調査時の遺構番号	備考	遺構名	幅 (cm)	深さ (cm)	調査時の遺構番号	備考
P1	47 × 38	18	P1	2段掘り 支柱穴	P11	20 × 14	4	P7	
P2	19 × 15	17	P2	支柱穴	P12	18 × 10	5	P2	
P3	21 × 20	5	P3		P13	25 × 21	26	P8	
P4	30 × 26	9	P5		P14	24 × 16	9	P13	
P5	20 × 18	11	P4	2段掘り	P15	24 × 11	11	P16	
P6	38 × 37	23	P12	支柱穴	P16	23 × 26	7	P15	
P7	25 × 22	6	P11		P17	19 × 11	5	ナシ	
P8	16 × 15	8	P10		P18	20 × 13	9	P14	
P9	19 × 18	12	P9		P19	45 × 44	8	P17	
P10	26 × 18	32	P6	支柱穴					

#### 出土遺物

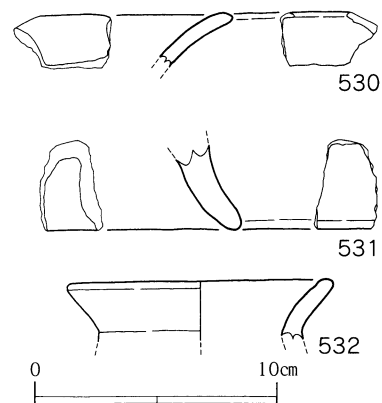
弥生土器3点、石器8点を図化した。

#### 甕 (第62図 530・531)

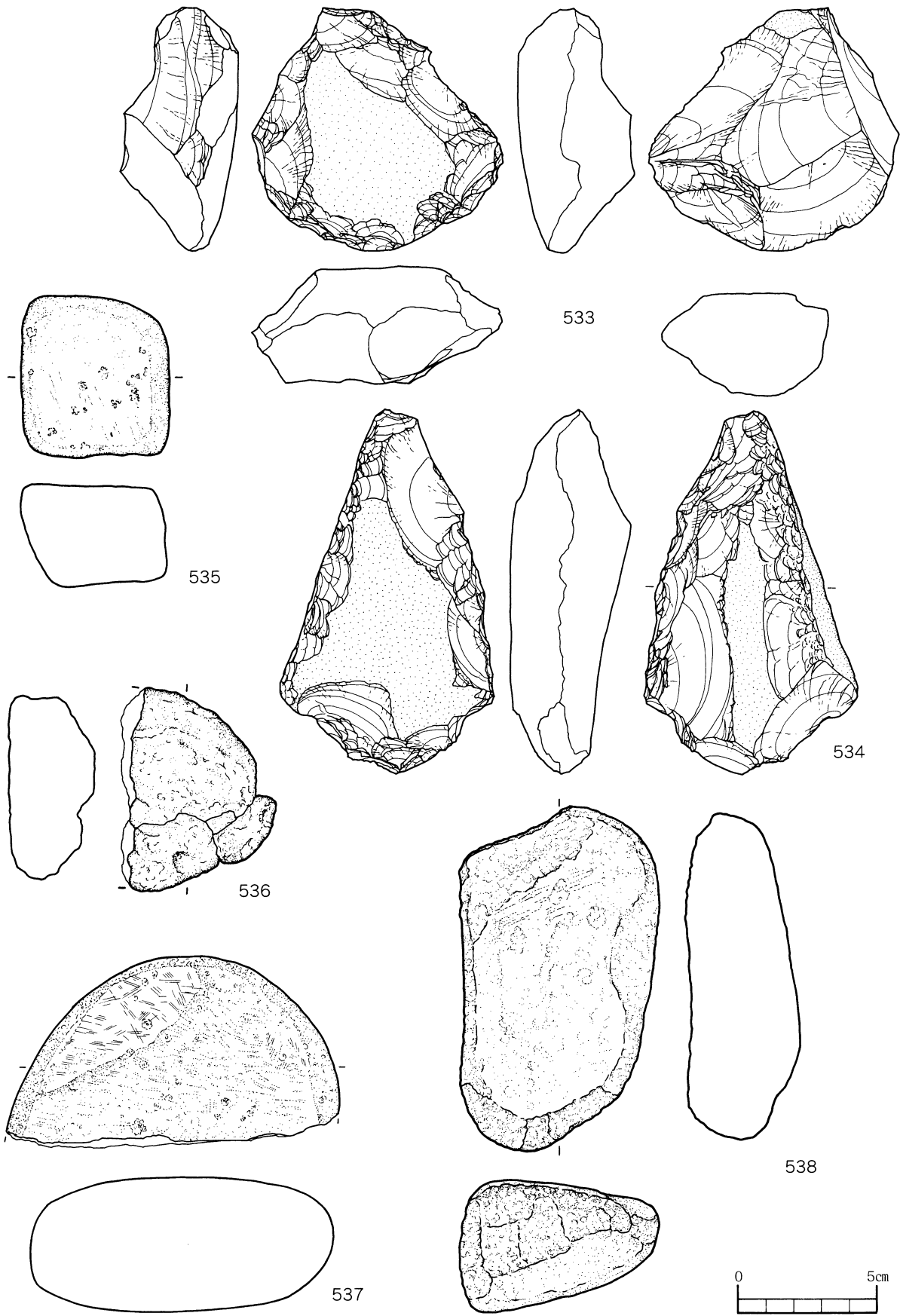
530は口縁部が外反し、口唇部はナデ調整により先細りしている。531は甕の底部である。調整は摩滅のため不明。色調は橙色を呈す。

#### 壺 (第62図 532)

口縁部は短く、端部は丸くおさまる。器面調整は横ナデである。



第62図 1号竪穴住居跡出土土器



第63图 1号竖穴住居跡出土石器(1)

### 礫器 (第63図 533・534)

533は全方向から打撃を加えて剥離している。534は自然礫を二等辺三角形形状に加工することを目的に大振りの剥離を加え、さらに細かく調整した様な痕跡が窺える。その上で、下面から打撃が加えられているので、磨製石斧の再利用か、磨製石斧を目的とした石材の再利用と考えられる。

### 磨石 (第63図 535~537)

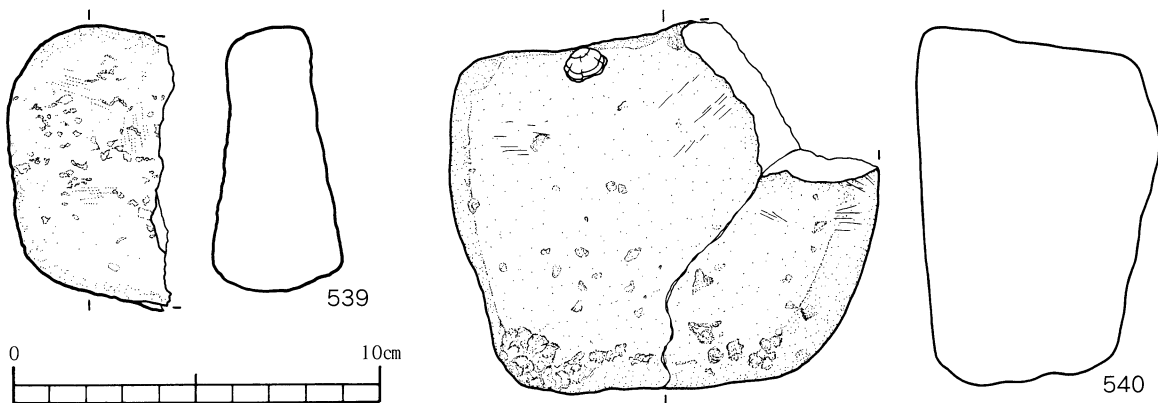
535は直方体状の安山岩小礫の1面を利用し、平坦面になっている。掌に収まる礫である。536は風化が著しいが、1面が平坦になるまで使い込まれている。537は両面が磨石として利用され、側面は敲石の機能を備えている。磨り面は特に側面との境あたりが磨滅が著しく、ここに一番力が加わったことが窺える。

### 敲石 (第63図 538)

安山岩礫の端部を使用している。

### 石皿 (第64図 539・540)

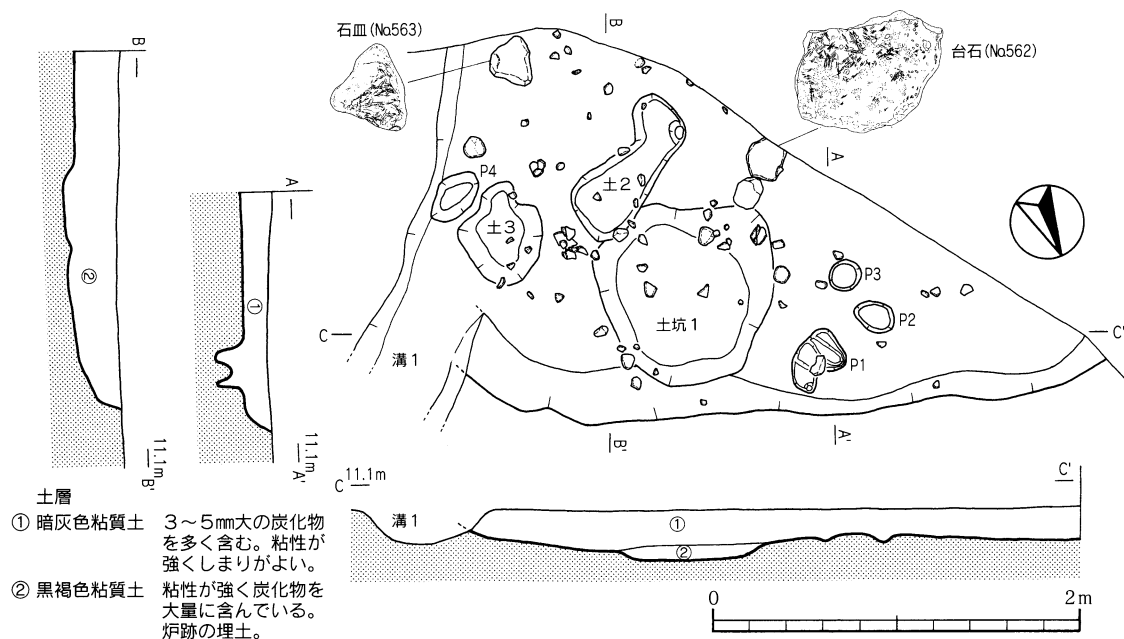
539は小型の安山岩礫の一部に磨滅した部分が見られる。540は平坦面をもつ安山岩礫の1面が使用されている。



第64図 1号竪穴住居跡出土石器 (2)

### (5) 2号竪穴住居跡 (第65図)

B-25・26区の壁際で検出された。西側が調査区外に延び、南側を溝状遺構1に切られているために全長は不明であるが、1辺が3m程の方形住居であると推測される。検出された住居跡の大きさは南北3.45m、東西2m、検出面からの深さは24cmで比較的残りがよかった。床面に硬化面は形成されていない。住居内に3基の土坑と4基の柱穴が検出された。壁面に接して掘り込まれた土坑1は、埋土に多量の炭化物を含んでおり地床炉と考えられる。壁に隣接するという点は1号竪穴住居跡と共通しており、住居の構造を知る上で注目される。土坑2・3は平面形が不定形で浅く、深さは20cm以下である。住居内の埋土を水洗選別した結果、稲の種実が3点検出された。(分析結果は第2章に掲載)。住居内からは弥生時代終末の土器288点、石器24点が出土した。遺物の多くは埋土中からの出土であるが、調査区の壁際で台石と石皿が床面に据えられた状態で出土した。



第65図 2号竪穴住居跡

第7表 2号竪穴住居柱穴計測表

遺構名	幅 (cm)	深さ (cm)	調査時の遺構番号	備考	遺構名	幅 (cm)	深さ (cm)	調査時の遺構番号	備考
P 1	33 × 23	17	ナシ	2段掘り	P 3	18 × 16	7	ナシ	
P 2	23 × 16	8	ナシ		P 4	31 × 20	14	ナシ	

### 出土遺物

弥生土器13点，石器10点を図化した。

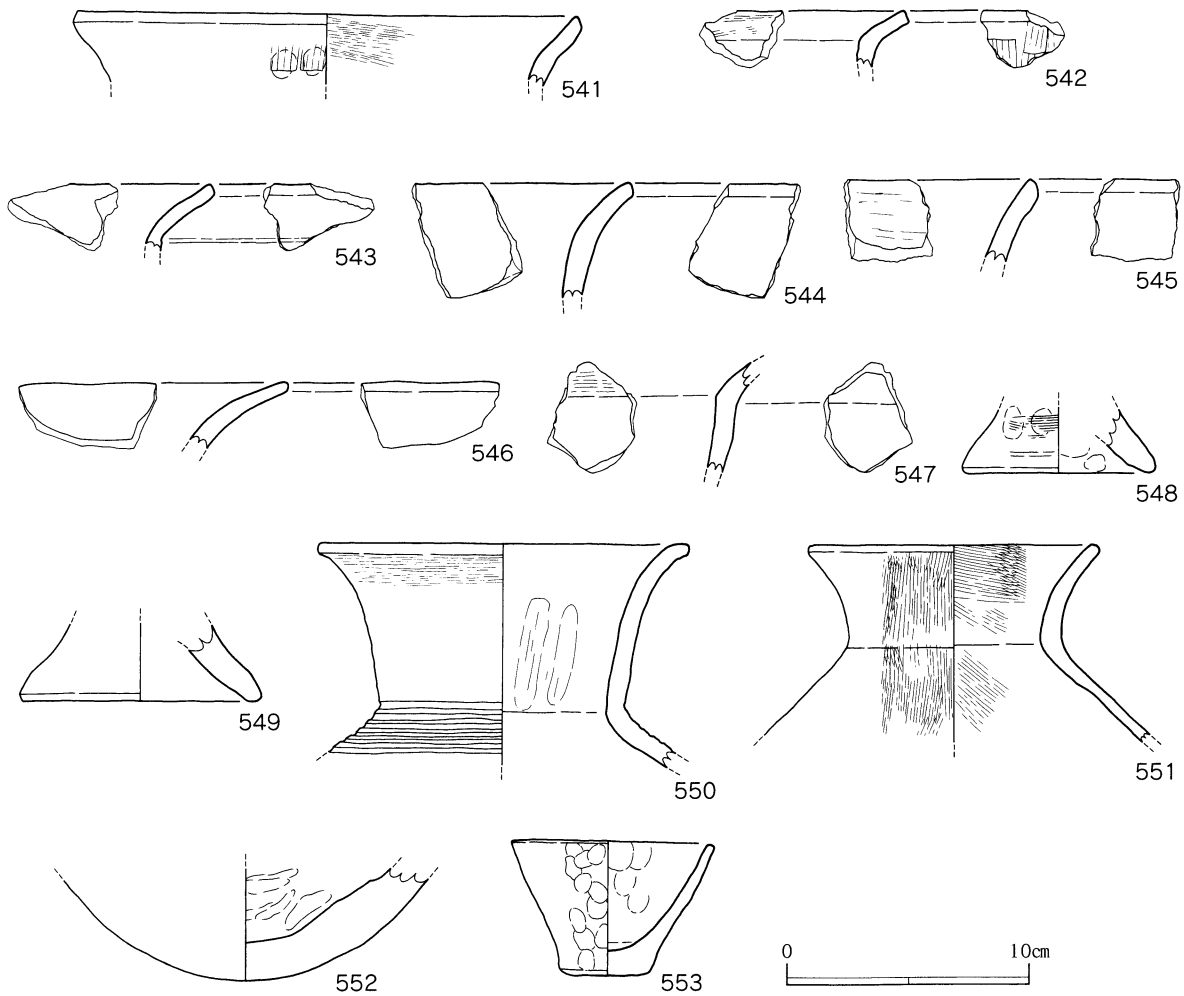
#### 甕 (第66図 541~549)

541~544は口縁が緩やかに外反し，端部が平坦になるものである。541は口唇部が先細りし，指で押さえたために口縁部外面がわずかに窪んでいる。542の口縁部は短く，他のものに比べ屈曲が強い。543は頸部を工具によって押さえているために，胴部との境に段をもつ。544は内外面ナデ調整である。545は口唇部に厚みがあり丸みを帯びる。546は外反する口縁部の先端が細くなっている。内外面の調整は摩滅のため不明である。547は口縁部先端が欠損している。屈曲が強く，内面にはあいまいな稜が見られる。

548・549は甕の底部である。548の外面はハケ目後ナデ，内面はナデ調整で，指頭圧痕が残る。549は前者に比べ厚みがあり，内外面横ナデが施される。

#### 壺 (第66図 550~552)

550は外傾する長い頸部から口縁部が弱く外反する。上胴部には2~3mm幅の浅いヘラ描き沈線が6条残る。内面は強いナデ調整が施され，指頭圧痕が縦方向に残る。551はI類である。口縁部が薄く，外反が弱い。胴部の内外面に丁寧なハケ目調整が施されている。



第66図 2号竪穴住居跡出土土器

552は底部である。丸底を呈しており、内面は強いナデ調整が施されているために器面に凹凸が残る。外面の調整は摩滅のため不明である。

**ミニチュア土器(第66図 553)**

口径8.4 cm, 器高5.5 cm, 底径3.2 cmの小型の鉢形土器である。胴部は器壁が薄く直線的に開き、底部は平底で厚みがある。内外面ナデ調整が施され、指頭圧痕が多く残る。

**石鎌 (第67図 554)**

ハリ質安山岩を素材とし、側縁に段をつけて五角形鎌状に仕上げる。基部は浅い抉りをもつ。

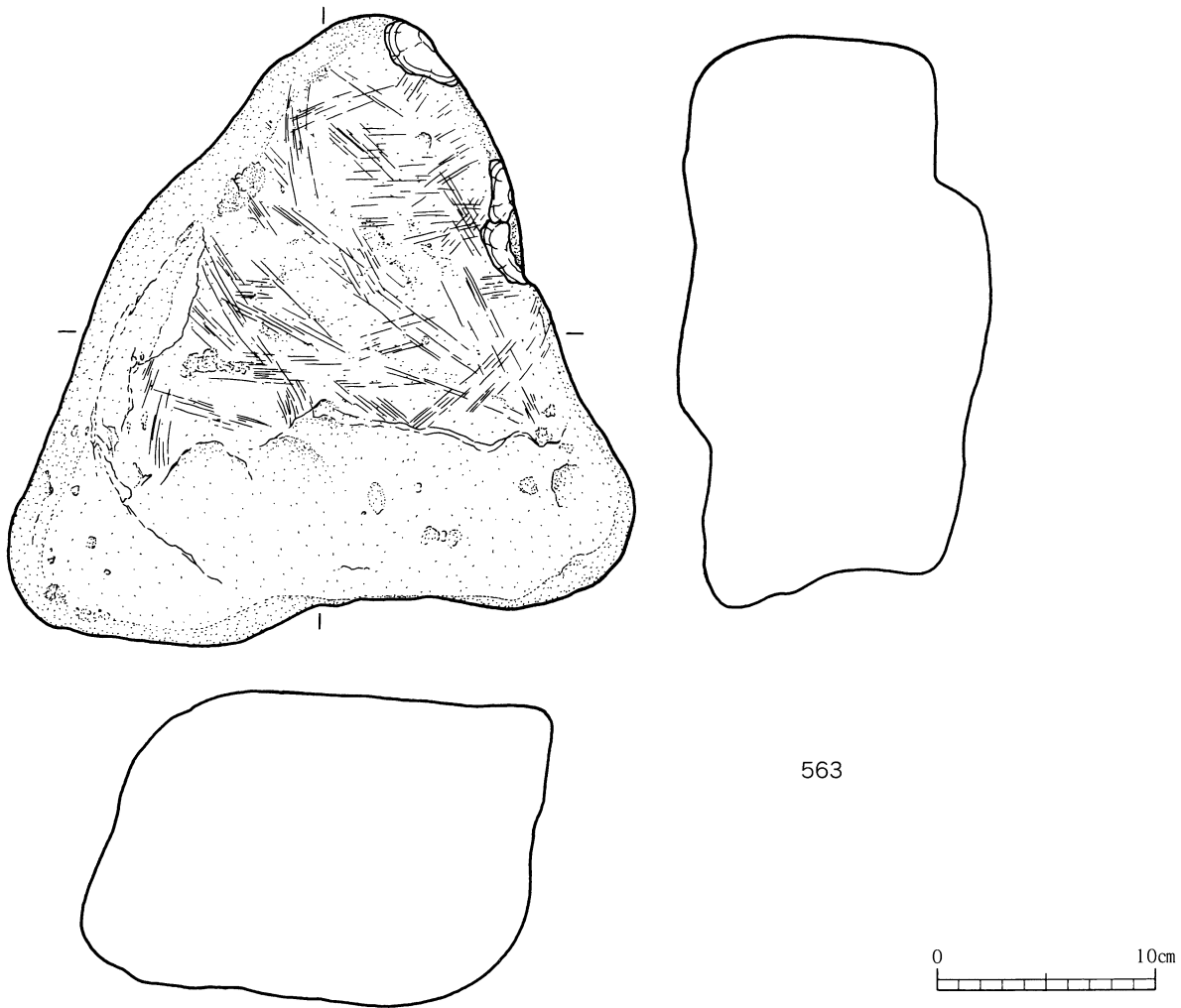
**砥石 (第67図 555)**

安山岩の小円礫を利用している。



第67图 2号竖穴住居跡出土石器(1)





第68図 2号竪穴住居跡出土石器(2)

敲石(第67図 556~559)

すべて安山岩礫が使われる。556は小円礫を利用し、一部に敲打痕が認められる。558は棒状になった部分の端部を利用している。溝状遺構1から出土した敲石と使用面が類似し、播粉木のような使用が考えられる。

第8表 1号竪穴住居跡出土土器観察表 ( )は復元径

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
62	530	弥生 土器	甕	I		内:浅黄色2.5Y7/3 外:灰黄色2.5Y7/2	横ナデ	横ナデ	-	-	-	石英・角閃石を含む	良好	良好
62	531	弥生 土器	甕			内:橙色5YR6/5 外:橙色5YR7/6	不明	不明	-	-	-	石英・小石を含む	良好	良好
62	532	弥生 土器	壺			内:黄灰色2.5Y6/1 外:暗灰黄色2.5Y5/2	横ナデ	横ナデ	(10.9)	-	-	石英・角閃石を含む	良好	良好

石皿（第67・68図 560・561・563）

いずれも安山岩製である。563は台状の石を利用している。

台石（第67図 562）

扁平な安山岩を利用している。一面は平に磨り減っており、石皿としての機能も考えられる。

第9表 2号竪穴住居跡出土土器観察表 ( ) は復元径

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量 (cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
66	541	弥生 土器	甕			内:にぶい黄橙色7.5YR6/4 外:にぶい橙色7.5YR5/4	横ナデ ハケ目	横ナデ	(20.6)	-	-	石英・白い小石を含む	良好	
66	542	弥生 土器	甕	床直		内:にぶい黄橙色10YR7/2 外:にぶい橙色7.5YR6/4	ナデ ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	-	-	-	石英・角閃石・長石を含む。白 い小石を所々に含む。	良好	
66	543	弥生 土器	甕	床直		内:にぶい黄橙色10YR7/2 外:にぶい黄色2.5Y6/3	横ナデ	横ナデ	-	-	-	石英・角閃石を多く含む。	良好	
66	544	弥生 土器	甕			内:灰黄褐色10YR6/2 外:灰黄色2.5Y6/2	横ナデ	横ナデ	-	-	-	石英・角閃石を所々に含む。白 い小石を多く含む。	良好	
66	545	弥生 土器	甕			内:灰黄褐色10YR5/2 外:灰褐色7.5YR5/2	ナデ	ナデ	-	-	-	石英を含む	良好	
66	546	弥生 土器	甕	床直		内:にぶい黄橙色10YR7/3 外:浅黄褐色10YR8/3	磨滅	磨滅	-	-	-	石英を含む	良好	
66	547	弥生 土器	甕			内:浅黄色2.5Y7/3 外:にぶい黄褐色10YR7/3	ナデ・磨滅・ ハケ目	ナデ・磨滅	-	-	-	石英・角閃石を所々に含む。	良好	
66	548	弥生 土器	甕	床直		内:にぶい黄褐色10YR7/4 外:橙色7.5YR7/6	ハケ目・ナデ	ナデ	-	(7.4)	-	石英を含む	良好	
66	549	弥生 土器	甕			内:灰黄褐色10YR6/2 外:にぶい黄褐色10YR7/14	ナデ	ナデ	-	(9.0)	-	石英・角閃石を所々に含む	良好	
66	550	弥生 土器	壺			内:灰白色10YR7/4 外:にぶい黄褐色7.5YR7/4	ナデ	ハケ目・ナデ	11.4	-	-	石英・角閃石を所々に含む	良好	
66	551	弥生 土器	壺			内:にぶい黄褐色10YR7/4 外:にぶい黄褐色10YR6/4	ハケ目・磨滅	ハケ目・磨滅	14.8	-	-	角閃石・長石を所々に含む	良好	
66	552	弥生 土器	壺			内:浅黄褐色7.5YR8/4 外:浅黄褐色10YR8/3	磨滅	ナデ	-	-	-	石英を含む	良好	
66	553	弥生 土器	ミニ チュア 土器			内:浅黄褐色7.5YR8/4 外:橙色7.5YR7/5	ナデ	ナデ	8.4	3.2	5.5	石英・角閃石を含む	良好	

第10表 1号竪穴住居跡出土石器観察表

図番号	番号	出土区	層位	取上番号	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石材	備考
63	533	A26 1号竪穴住居跡	-	123	礫器	8.80	10.00	4.40	350.00	凝灰岩	
63	534	A26 1号竪穴住居跡	-	-	礫器	13.00	7.80	4.40	388.00	頁岩	
63	535	1号竪穴住居跡	I	-	磨石	5.90	5.35	3.90	2.07	安山岩	
63	536	1号竪穴住居跡	-	70	磨石	5.30	7.40	3.40	160.00		
63	537	A26 1号竪穴住居跡	-	-	磨石	6.80	11.90	4.80	579.00	安山岩	
63	538	1号竪穴住居跡	-	18	蔽石	11.90	7.20	4.70	524.00	安山岩	
64	539	A26 1号竪穴住居跡	-	157	小型石皿A	4.50	7.70	4.10	173.00	安山岩	
64	540	1号竪穴住居跡	I	-	石皿B	11.68	10.10	6.60	1.20	安山岩	

第11表 2号竪穴住居跡出土石器観察表

図番号	番号	出土区	層位	取上番号	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石材	備考
67	554	B26 2号竪穴住居跡	I	119	石鎌未製品	2.25	1.50	0.35	1.10	安山岩 (サヌカイト)	
67	555	B26 2号竪穴住居跡	-	13	砥石	6.40	5.70	3.80	155.00	安山岩	
67	556	B26 2号竪穴住居跡	-	30	蔽石	4.50	5.20	2.75	76.00	安山岩	
67	557	2号竪穴住居跡	-	18	蔽石	4.70	4.80	3.70	83.00	安山岩	
67	558	B26 2号竪穴住居跡	-	31	蔽石	7.80	3.90	3.30	112.00	安山岩	
67	559	B26 2号竪穴住居跡	-	322	蔽石	8.70	5.00	4.90	222.00	安山岩	
67	560	B26 2号竪穴住居跡	-	7	石皿B	10.30	9.00	4.50	579.00	安山岩	
67	561	B26 2号竪穴住居跡	-	304	石皿B	18.00	13.82	6.83	2200.00	安山岩	
67	562	B26 2号竪穴住居跡	-	305	台石	32.00	22.50	6.80	5300.00	安山岩	
68	563	B26 2号竪穴住居跡	-	-	石皿B	28.70	28.60	14.40	15.20	安山岩	

## (6) 炉跡 1 (第69図)

平面形が不定形で、埋土に炭化物の層が形成されている土坑を炉跡とした。当初、削平のために竪穴住居内の地床炉のみが残った可能性を考えた。しかし、竪穴住居内に検出されている地床炉に比べ規模が大きいことや、地床炉にはみられない厚さ2cm程の炭化物の層が形成されていることから、地床炉よりも火の使用頻度が高く、用途が違うことが想定され炉跡とした。遺構の性格としては、調理場などが想定される。

A-25・26区で検出された炉跡は、大きさが南北1.6m、東西2.38mで平面形は不定形である。炉跡内の西側で検出された直径1.68m程の円形を呈する土坑4は炉跡に切られていることから、炉跡以前に掘られたものである。炉跡内には、炭化物の層が3か所形成され、地点と層を変えて火を使用している。(第69図上)。最も古いものは土層断面図①の炭化層で床面直上に形成され、その直下には焼土が確認された。炉跡内の東西2か所にみられる土層断面図②③の炭化層は厚さ3~4cm程でII層上面に形成されている。特に②の炭化層の断面は浅く凹み、その直上に壺2点、甕1点が出土している。その中でもNo578の壺は炭化層の上面から横転した状態で出土した。楠元遺跡出土の壺の中には煤が付着したものがあり、このような壺の用途を知る上で重要な発見となった。平面形が不定形で、床面に浅い土坑があることは火床の移動に伴う作り替えによる結果と思われる。また、炉跡の周辺には6基のピットが検出され、上屋の存在が考えられる(第69図下)。遺物の多くはI層の上部から出土した。炉跡からは弥生終末の土器425点、石器11点が出土した。

### 出土遺物

弥生土器22点、石器7点を図化した。遺物番号20、31、32の弥生土器は炭化層の直上から出土したものである。

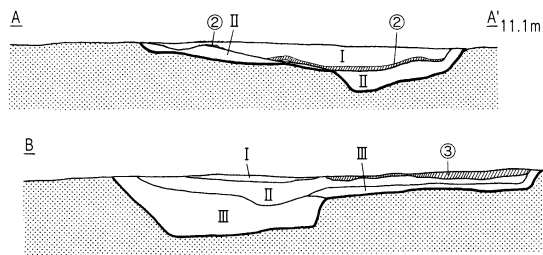
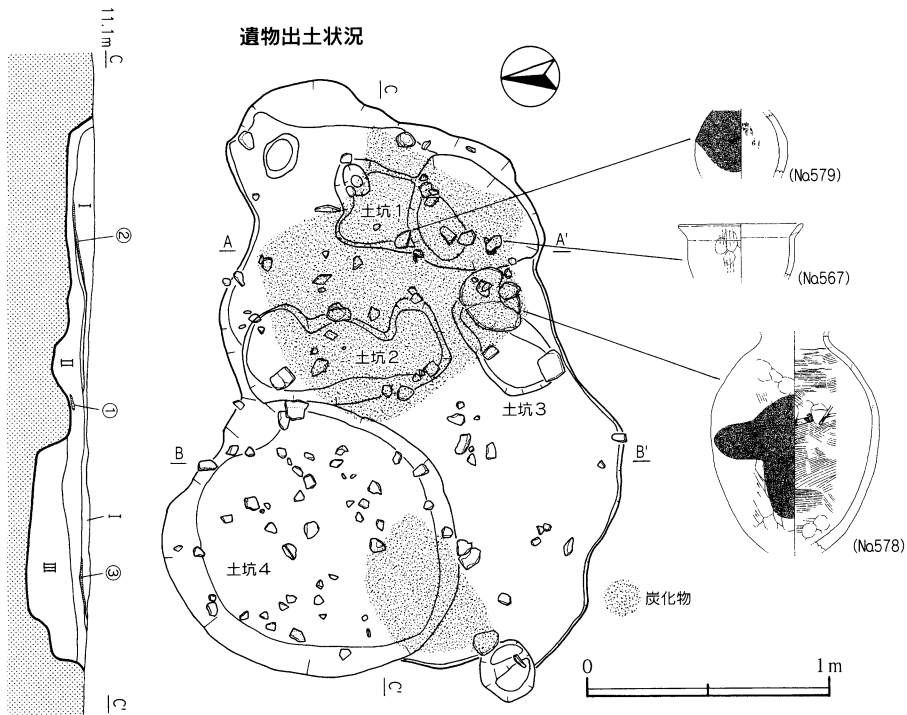
### 甕 (第70図 564~574)

564~567はIb類に分類され、口縁は弱く外反し、胴部は膨らまずに底部へとすぼまる特徴を持つ。564の口唇部は平坦である。頸部から口縁に向かってハケ目調整が施されている。内面には煤が付着している。565~567の口唇部は丸く、内外面ナデ調整が施され、上胴部には指頭圧痕が並んで残る。568は内面の屈曲部に稜が形成される。569は頸部に工具痕が残るために、わずかに段を持つ。570は内外面ナデ調整である。

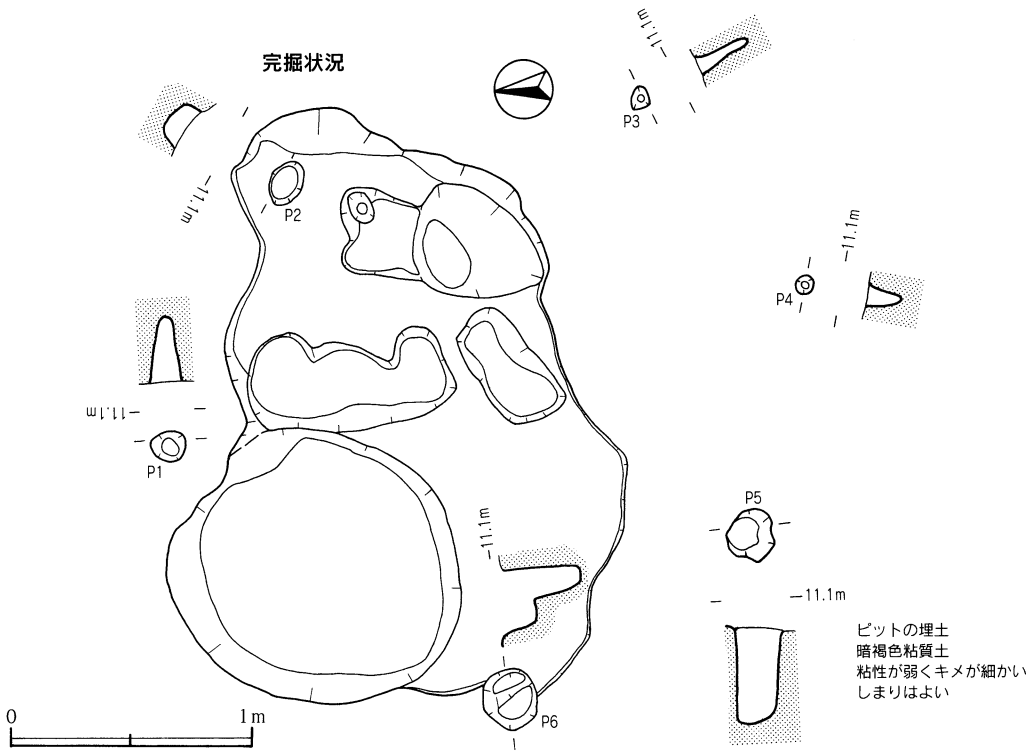
571~574は底部である。571は脚部の広がり弱く、外面にハケ目がわずかに残る。572は直線的に開き、脚高が低い。内外面ナデ調整が施され、指頭圧痕が多く残る。573は直線的に開き脚端部は面取りされている。器壁は薄く、内面には連続的にハケ目調整が施されている。574は外面に板状工具による調整痕が明瞭に残り、器面に凹凸が見られる。内面には煤が付着している。

### 壺 (第70図 575~580)

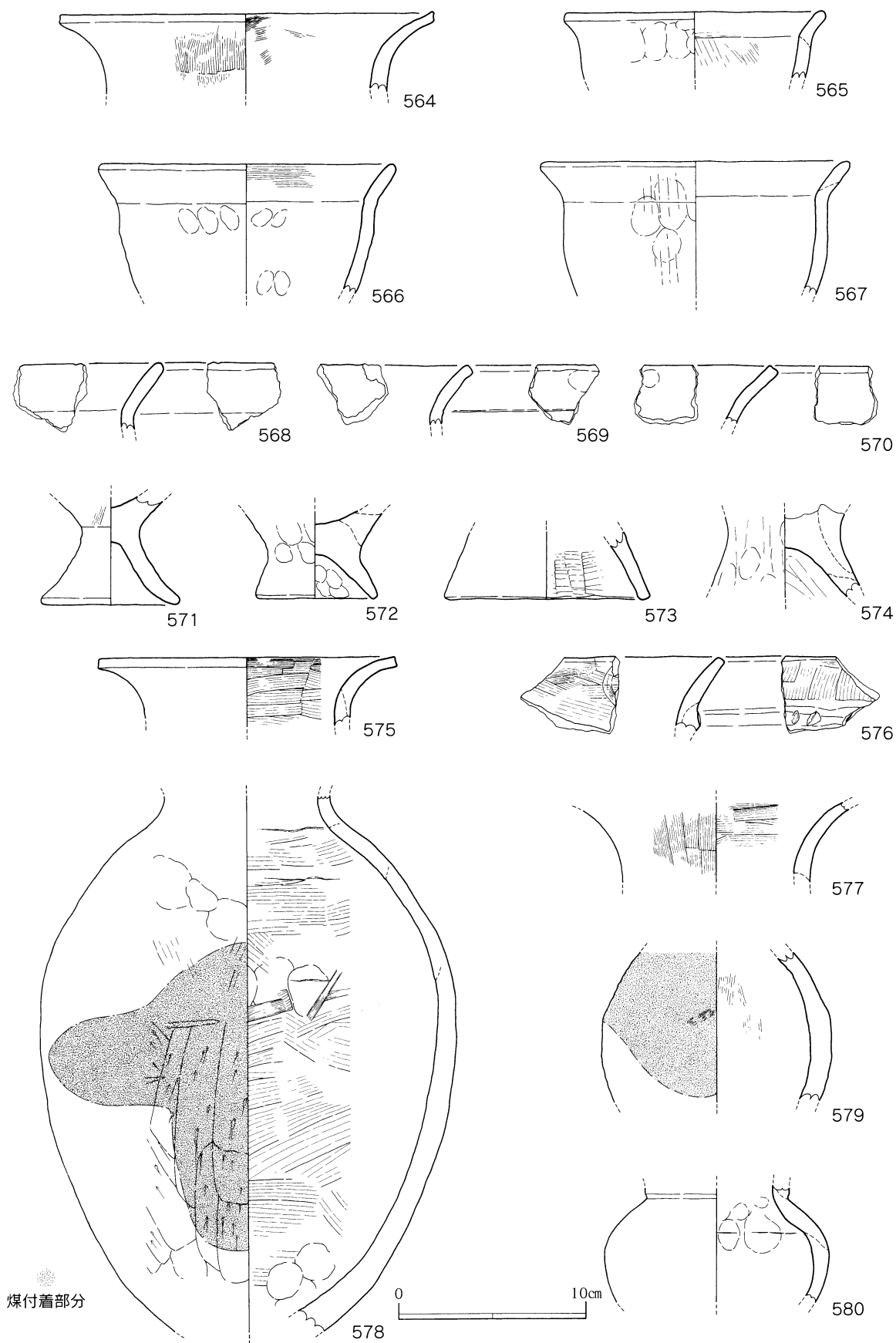
575は外反した口縁の端部がわずかに窪んでいる。内面は丁寧なハケ目調整が施されている。576の頸部には断面形が山形を呈する刻目突帯が施されている。内外面ハケ目後ナデ調整が施されている。577は頸部で内外面細かいハケ目調整が施されている。578は胴部で長



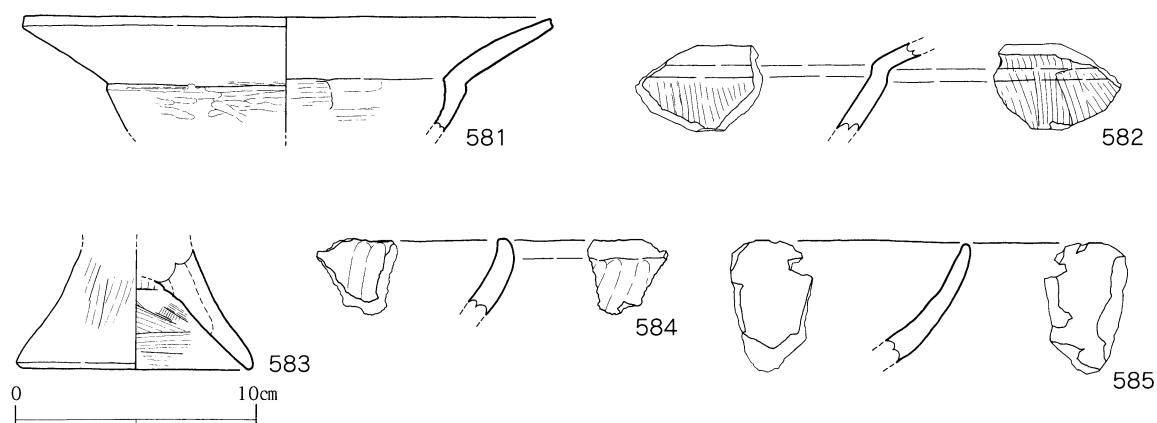
- 土層  
 I 暗褐色粘質土 粘性が弱く5mm大の炭化物を多く含む。  
 II 灰黄色砂質土 地山のIIa層の土である。  
 III 暗褐色粘質土 粘性が強くしまりがよい。5mm大の炭化物を少量含む。
- ① 最も古い炭化物の層。厚さ1cm  
 ② 土坑の北側に広がる炭化物の層。厚さ3cm。  
 ③ 土坑の南側に広がる炭化物の層。厚さ3cm。



第69図 炉跡1



第70图 炉跡1出土土器(1)



第71図 炉跡1出土土器(2)

胴形をなす。外面は、下胴部から上方にケズリ調整が施され、内面はハケ目後ナデ調整が施されている。二次焼成を受けており、外面に煤が付着していることから煮炊き具として使用されていたと考えられる。579は外面全体が二次焼成のために剥落し、煤が付着している。わずかにハケ目が残るが器面が荒れているために不鮮明である。580は小型の壺と思われる。胴部は球形をなし、頸部との境に浅いヘラ描き沈線が施される。外面は丁寧なナデ調整が施され、内面は指頭圧痕が残る。

#### 高坏 (第71図 581~583)

581は直線的な口縁が外方に開き、口唇部は平坦で中央がわずかに窪む。外面は体部との境が屈曲し工具痕が多く残るために、低い段を持つ。内面は口縁部と体部の境に強い稜が見られる。口縁部は丁寧なナデ、胴部はハケ目後ナデ調整が施されている。582は内外面には丁寧なハケ目調整が施されている。583の脚部は裾広がり弱い。内面はハケ目調整で、外面は磨滅が著しく、ハケ目がわずかに残る。

#### 鉢 (第71図 584・585)

584は口縁端部が内湾し、口唇部が先細りする。内外面に指頭圧痕が明瞭に残る。585の胴部は丸みを帯びて立ち上がる。丁寧なつくりで精製された胎土を使用し、焼成は硬質である。内外面の調整は磨滅のため不明である。

#### 石鏃未製品 (第72図 586)

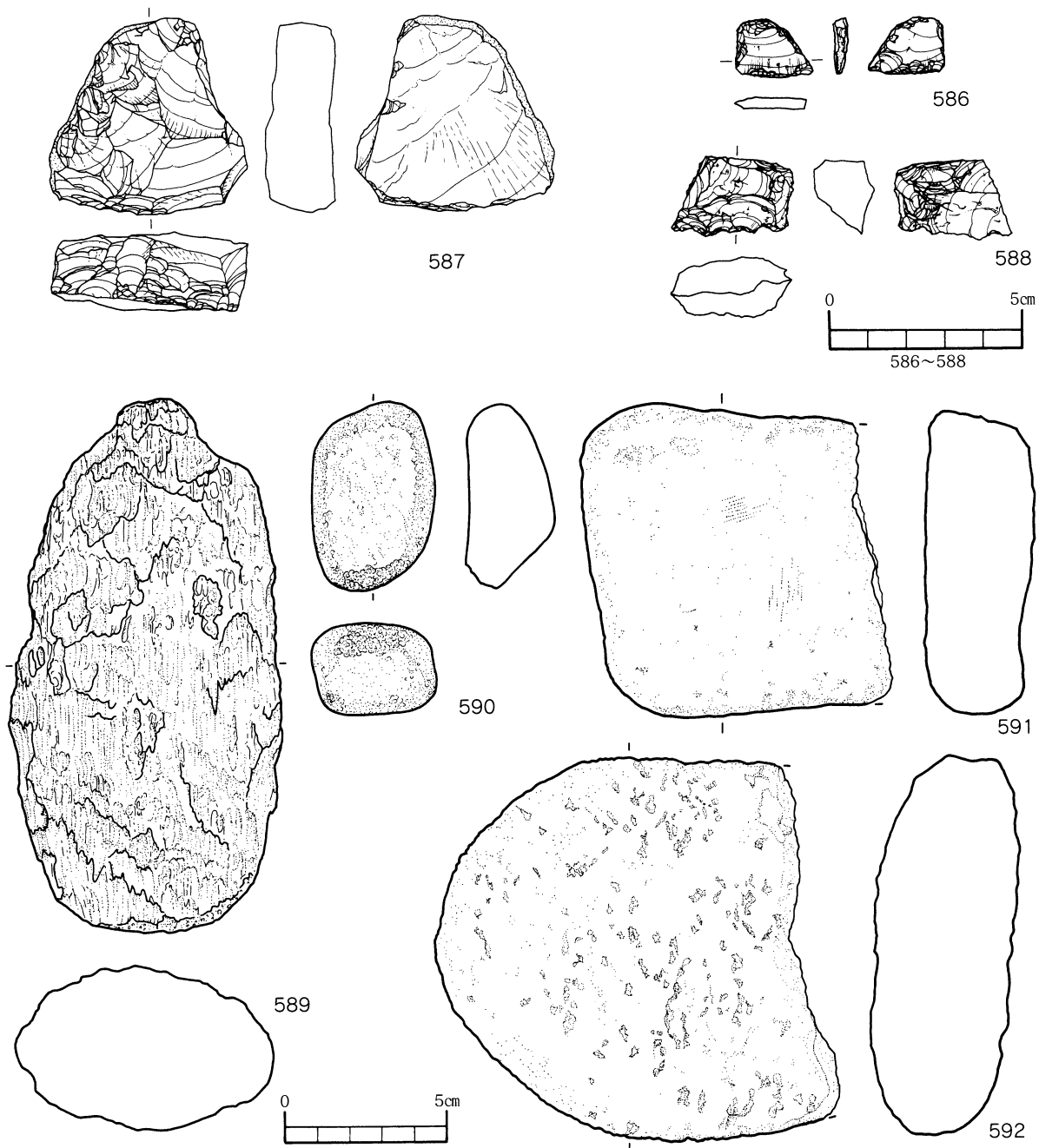
黒曜石剥片の縁辺に押圧剥離を加え、1辺を仕上げた後、全体の形を加工するところで放棄している。

#### スクレイパー (第72図 587・588)

587は玉髓を素材とし、一方向から打撃を加えて搔器状に仕上げている。588は肉厚の黒曜石製剥片の一方向から大振りの剥離を加えている。

#### 軽石製品 (第72図 589)

表面の風化が著しく、加工痕は明確ではないが、シンメトリーな形をしている。用途は不



第72図 炉跡1出土石器

明である。

**敲石 (第72図 590)**

安山岩小礫の一端に潰れが観察される。

**石皿 (第72図 591・592)**

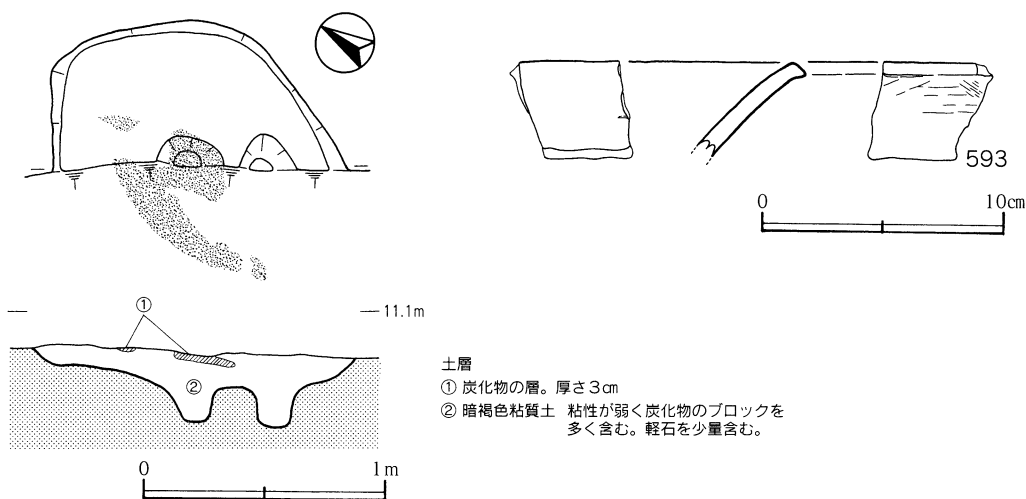
591は安山岩礫の平坦な面を利用している。特に中央付近の器面が細かく磨滅し、使用頻度が高かったことが窺える。しかし、窪むことなく凸レンズ状になっている。

(7) 炉跡2 (第73図)

B-26区で検出され、西側は確認トレンチにより削平されているために平面形が半円形を呈している。炉跡の大きさは南北1.3m、東西0.6m、深さ14cmで、床面に2基のピットが並んで検出された。厚さ3cm程の炭化物の層は、埋土の上面で検出され、炉跡の中央部に不定形に広がっている。炉跡の周辺からピットは検出されなかった。埋土中から弥生終末の土器1点が出土した。

出土遺物

593は甕の口縁部である。緩やかに外反し、端部は平坦を呈する。口唇部は2mm程突出する。内外面ハケ目後ナデ調整である。



第73図 炉跡2及び出土遺物

第12表 炉跡1出土土器観察表 ( )は復元径

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
70	564	弥生土器	甕	III		内:浅黄色2.5Y7/4 外:にぶい黄橙色10YR7/3	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	(19.8)	-	-	石英、角閃石を微量に含む	良好	
70	565	弥生土器	甕	I		内:黄褐色2.5Y5/3 外:浅黄色2.5Y7/4	磨滅	ナデ・ハケ目	(13.5)	-	-	石英を多く含む	良好	
70	566	弥生土器	甕			内:にぶい橙色7.5YR6/4 外:にぶい橙色7.5YR5/4	磨滅	ハケ目	(15.7)	-	-	石英、角閃石を所々に含む	良好	
70	567	弥生土器	甕			内:にぶい橙色10YR8/4 外:橙色7.5YR7/6	磨滅	磨滅	(16.3)	-	-	石英、角閃石を含む	良好	
70	568	弥生土器	甕	I		内:にぶい黄橙色10Y7/3 外:にぶい黄橙色10YR6/4	ナデ	ナデ	-	-	-	石英、白い小石を所々に含む	良好	



挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量 (cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
70	569	弥生土器	甕	I		内:にぶい 橙色7.5YR7/4 外:浅黄褐色7.5YR8/4	ナデ	ナデ	-	-	-	石英を所々に含む	良好	
70	570	弥生土器	甕	I		内:灰白色7.5YR8/2 外:にぶい黄褐色10YR7/4	ナデ	ナデ	-	-	-	石英、角閃石を含む	良好	
70	571	弥生土器	甕			内:にぶい黄褐色10YR7/3 外:浅黄色2.5Y7/3	ハケ目・ナデ	ナデ	-	(6.9)	-	石英を微量に含む	良好	
70	572	弥生土器	甕	I		内:にぶい黄褐色10YR7/3 外:浅黄色2.5Y7/2	ナデ	ナデ	-	(6.0)	-	石英を所々に含む	良好	
70	573	弥生土器	甕	I		内:にぶい黄褐色10YR6/4 外:浅黄褐色10YR8/3	磨滅	ハケ目	-	(10.2)	-	石英を所々に含む	良好	
70	574	弥生土器	甕	I		内:灰白色2.5Y6/2 外:にぶい黄褐色10YR6/4	板ナデ	ナデ	-	-	-	石英、角閃石を所々に含む	良好	煤付着
70	575	弥生土器	壺	I		内:橙色7.5YR7/4 外:にぶい 橙色7.5YR6/4	口縁:磨滅 胴:ナデ	ハケ目	(15.9)	-	-	石英を多く含む	良好	
70	576	弥生土器	壺	I		内:浅黄色2.5Y7/3 外:にぶい黄褐色10YR6/4	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	-	-	-	石英を所々に含む	良好	
70	577	弥生土器	壺			内:黄褐色10YR8/6 外:にぶい黄褐色10YR5/4	ナデ・磨滅・ 削り・ハケ目	ハケ目・ナデ	-	-	-	石英を所々に含む	良好	煤付着
70	578	弥生土器	壺			内:にぶい黄褐色10YR7/3 外:灰白色10YR7/1	ハケ目・削り	ハケ目・ナデ	-	-	-	石英を所々に含む	良好	
70	579	弥生土器	壺	III		内:浅黄色2.5Y7/3 外:にぶい黄色2.5Y6/3	ハケ目	磨滅	-	-	-	石英、角閃石、金雲母を含む	良好	煤付着
70	580	弥生土器	壺	I		内:にぶい黄褐色10YR7/3 外:浅黄色2.5Y7/3	ナデ	ナデ	-	-	-	石英、角閃石を所々に含む	良好	
71	581	弥生土器	高杯	I		内:にぶい黄褐色10YR7/2 外:にぶい黄褐色10YR6/4	ナデ	ナデ	(21.8)	-	-	石英、角閃石を微量に含む。赤色の小石を含む	良好	
71	582	弥生土器	高杯	I		内:浅黄色2.5Y8/3 外:にぶい黄褐色10YR7/2	ハケ目	ハケ目	-	-	-	石英を所々に含む	良好	
71	583	弥生土器	高杯	I		内:にぶい黄褐色10YR6/3 外:浅黄褐色10YR8/3	磨滅	ハケ目	-	(9.3)	-	石英、角閃石を所々に含む	良好	
71	584	弥生土器	鉢	I		内:にぶい黄褐色10YR5/3 外:にぶい黄褐色10YR7/3	ナデ	ナデ	-	-	-	石英、角閃石を所々に含む	良好	
71	585	弥生土器	鉢			内:にぶい黄褐色10YR5/3 外:明黄褐色10YR7/6	磨滅	磨滅	-	-	-	精製された胎土	良好	

第13表 炉跡1出土石器観察表

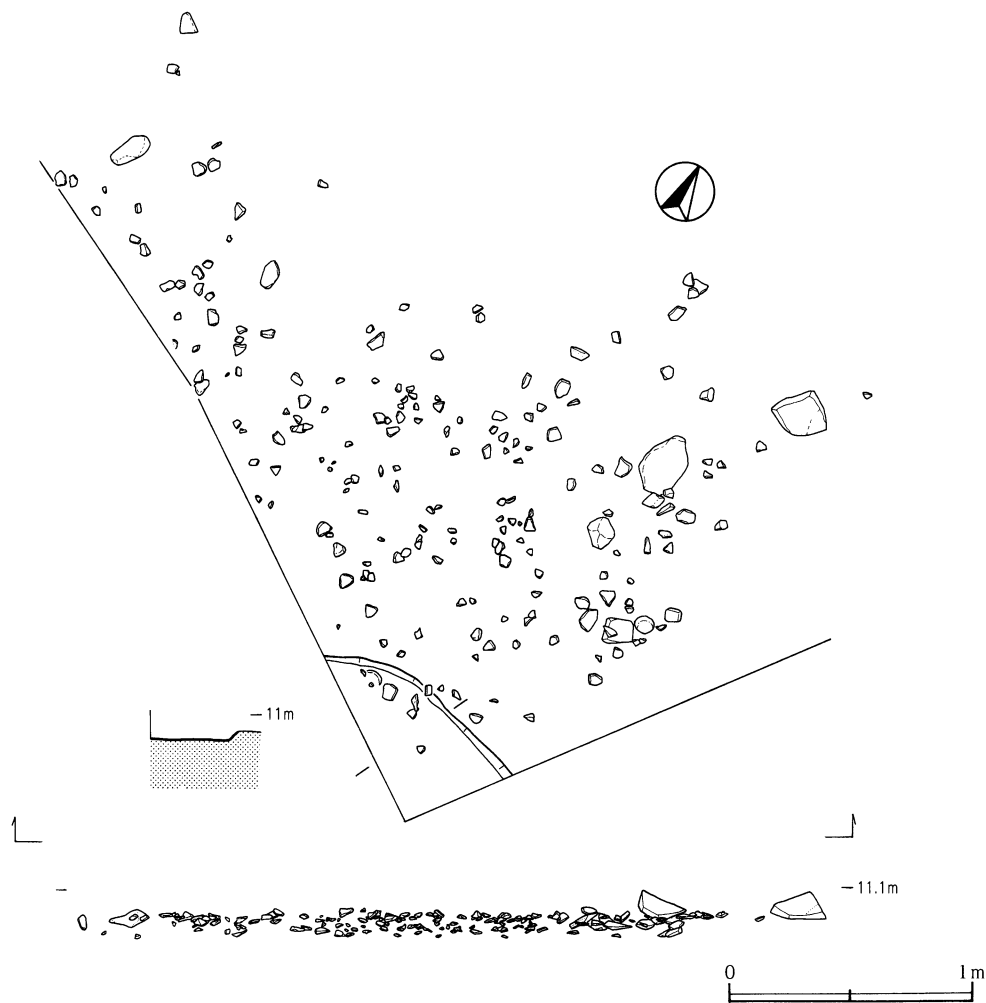
図番号	番号	出土区	層位	取上番号	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石材	備考
72	586	炉跡1	I	-	石鏃未製品	5.20	5.20	2.10	60.00	黒曜石(上牛鼻)	
72	587	A25 炉跡1	I	-	スクレイパー	1.40	2.00	0.40	63.40	玉髓	
72	588	炉跡1	I	248	スクレイパー	2.10	3.10	1.55	8.00	黒曜石(上牛鼻)	
72	589	A25 炉跡1	-	-	軽石製品	16.75	8.60	5.15	193.00	軽石	
72	590	炉跡1	-	-	蔽石	5.80	3.90	2.90	88.00	安山岩	
72	591	A25 炉跡1	-	83	石皿B	8.90	9.60	3.50	548.00	安山岩	
72	592	炉跡1	-	342	石皿B	11.10	12.00	4.60	704.00	安山岩	

第14表 炉跡2出土土器観察表 ( )は復元径

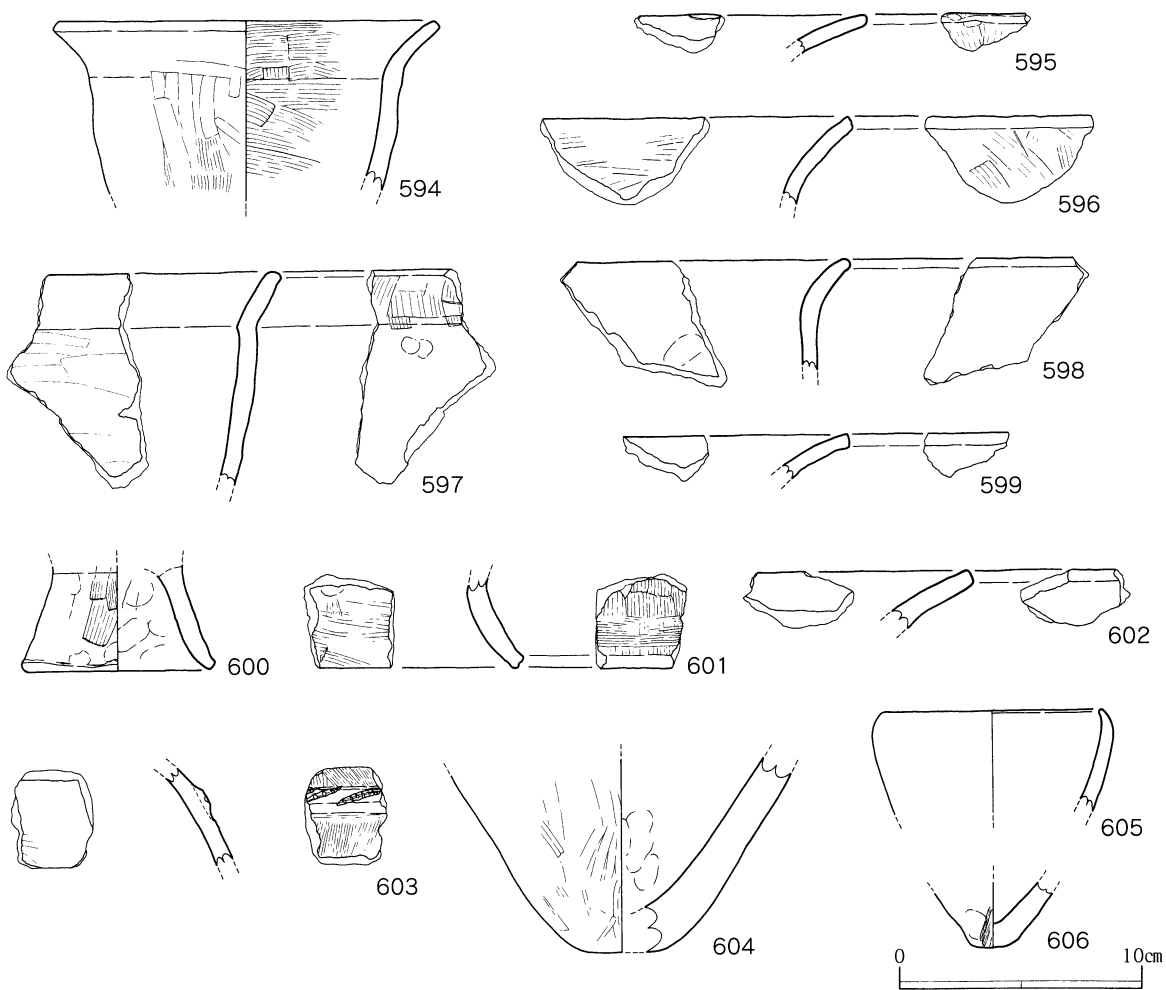
挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整文様		法量 (cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
73	593	弥生土器	甕			外:にぶい黄褐色10YR7/3 内:灰白 2.5Y7/1	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ				1mm大の白い小石を多く含む	良好	

### (8) 土坑 1 (第74図)

A-25区の壁際で検出された。II層上面近くで南北2.5m、東西3mの範囲に多くの遺物が集中して出土したため、遺物の見透し図を作成しながら遺構検出を繰り返し行った。結果的に、検出することができたのは、調査区南隅の浅い土坑であった。しかし土坑周辺の遺物集中区からは大型の石皿や磨石が出土し、さらに遺物の垂直分布図から幅3m以上、深さ20cmの遺構の掘り込みが推定されることから、これらの遺物は検出することができなかった竪穴住居跡に伴う可能性がある。検出された土坑の大きさは、南北0.76m、東西0.46m、深さ3cmである。部分的な検出であったので、先述した竪穴住居跡に伴うものなのか単独で存在するものなのか明らかにすることができなかった。以上のことから遺物の説明については、土坑内のものと遺物集中区出土のものをまとめて行う。遺物集中区からは、弥生土器145点、石器5点が出土した。



第74図 土坑 1 遺物出土状況



第75図 土坑1出土土器

#### 出土遺物

弥生土器18点，石器4点を図化した。

#### 甕（第75図 594～600）

594はI b類に該当する。口縁は緩やかに外反し，胴部は膨らみをもたず底部へと至る。内面はハケ目，外面はナデ調整が施されている。595の外面調整はナデ調整で，わずかにハケ目が残る。596は口縁部が緩やかに外反し口唇部は平坦である。内外面ハケ目後ナデ調整が施されている。597は口縁部が直線的で，頸部から口縁にかけてハケ目が施されているために，胴部との境に工具痕が残り低い段をもつ。内面はハケ目後ナデ調整が施され，口縁部と胴部の境には稜が形成される。598は口縁が緩やかに外反し，内外面ナデ調整が施されている。599は外面の口縁直下がわずかに窪んでおり，口唇部は平坦である。内外面ナデ調整である。

600・601は，底部である。600は器面が一部剥離している。内外面ナデ調整が施され，外面にハケ目がわずかに残る。601は脚端部が平坦で中央がわずかに窪む。内外面ハケ目調

整が施されている。

### 壺 (第75図 602~604)

602は口縁部片である。口唇部は平坦で内外面ナデ調整が施されている。603は上胴部片で、刻目突帯が施されている。刻み目は斜方にやや長く柾目が残っており木製工具で施されたと考えられる。

604の底部は小さな平底から直線的に外傾して立ち上がっている。外面には工具痕が多く残る。

### 鉢 (第75図 605, 606)

605は口縁端部が内湾し、先細りする形態である。内面は横ナデが施されている。外面は器面が荒れている。

606は底部である。丸みを帯びた平底を呈し、内外面ナデ調整が施されている。外面には工具痕が明瞭に残る。

### 敲石 (第76図 607・608)

607は片手で握れるほどの太さと重さの安山岩礫を利用しており、端部に敲打痕が認められる。608は敲石と磨石を兼ね備えている。

### 石皿 (第76図 609)

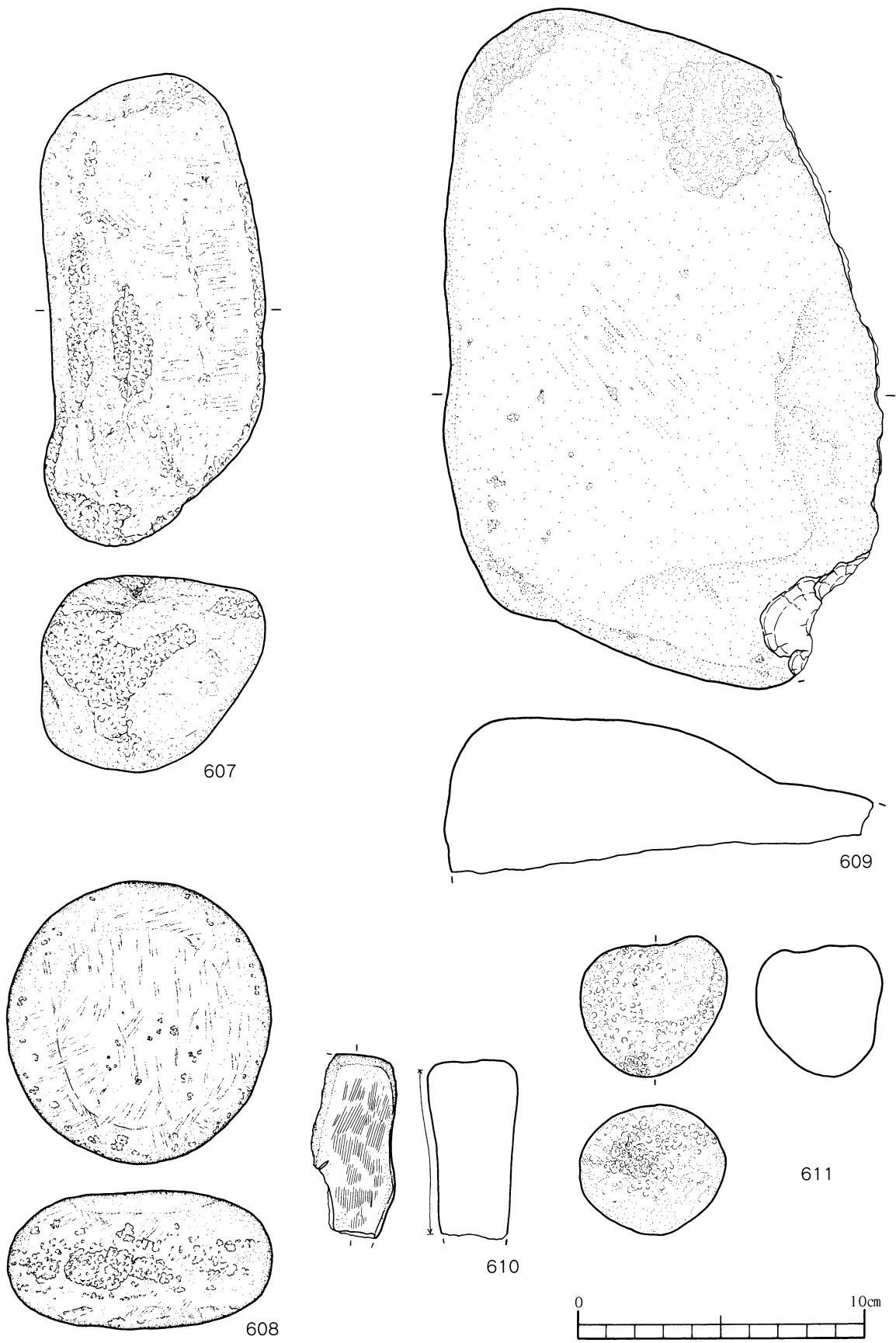
安山岩礫を使用している。

### 砥石 (第76図 610)

角柱状の礫を用いている。全体的に表面が滑らかである。

第15表 土坑1出土土器観察表 ( )は復元径

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
75	594	弥生 土器	甕			内:にぶい 褐色7.5YR7/4 外:褐色7.5YR6/5	口縁:横ナデ 胴部:板ナデ、ハケ目	ハケ目	(15.4)	-	-	石英、角閃石を所々に含む	良好	
75	595	弥生 土器	甕	I		内:灰白色2.5YR8/2 外:灰白色10YR8/2	ナデ、ハケ目後ナデ	横ナデ	-	-	-	石英を所々に含む	良好	
75	596	弥生 土器	甕			内:浅黄褐色10YR7/4 外:にぶい黄褐色10YR7/4	ハケ目後、横ナデ	ハケ目後ナデ	-	-	-	石英、小石を所々に含む	良好	
75	597	弥生 土器	甕	I		内:灰黄色2.5Y7/2 外:黄褐色10YR5/4	口縁:板ナデ 胴部:ナデ	口縁:横ナデ 胴部:板ナデ、 横ナデ	-	-	-	石英、角閃石を含む	良好	
75	598	弥生 土器	甕			内:にぶい黄褐色10YR6/4 外:にぶい黄褐色10YR5/3	横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-	-	石英を含む	良好	
75	599	弥生 土器	甕	I		内:淡黄色2.5Y8/4 外:浅黄褐色10YR8/4	横ナデ	ナデ	-	-	-	石英、角閃石を含む	良好	
75	600	弥生 土器	甕			内:にぶい黄褐色10YR5/3 外:にぶい褐色7.5YR6/3	板ナデ、ハケ目	ナデ	-	(7.6)	-	石英、角閃石を含む	良好	
75	601	弥生 土器	壺	I		内:褐色7.5YR7/6 外:浅黄褐色7.5YR8/6	ハケ目、横ナデ	ハケ目、横ナデ	-	-	-	石英を所々に含む	良好	
75	602	弥生 土器	壺	I		内:にぶい褐色7.5YR6/4 外:褐色7.5YR7/6	ナデ	横ナデ	-	-	-	石英、角閃石を含む	良好	
75	603	弥生 土器	壺	I		内:浅黄褐色10YR8/3 外:にぶい黄褐色10YR7/3	ハケ目 貼付突帯文 の後刻み目	ハケ目後ナデ	-	-	-	石英を多く含む	良好	
75	604	弥生 土器	壺	I		内:黄灰色2.5Y6/1 外:浅黄褐色7.5YR8/4	ナデ、板ナデ	磨滅	-	(3.0)	-	石英、白い小石を所々に含む	良好	
75	605	弥生 土器	鉢	I		内:褐色7.5YR7/6 外:にぶい黄褐色10YR7/3	口縁:横ナデ 胴部:ナデ	横ナデ	(9.0)	-	-	角閃石を微量に含む	良好	
75	606	弥生 土器	鉢	I		内:浅黄褐色10YR8/3 外:にぶい褐色7.5YR7/4	ナデ	ナデ	-	1.5	-	石英を多く含む	良好	



第76图 土坑1·土坑7出土石器

## (9) 土坑

### 土坑2・3 (第77図)

A・B-26区で検出され、土坑3が土坑2を切っている。土坑3の大きさは、南北1.3m、東西1.72m、深さ50cmである。平面形は不定形で東側は掘り込みの途中に小さなテラス部分を持ち、底の方に向かって面積が狭くなる。土坑2は平面形が不定形で、掘り込みの西側は平坦面を2段形成し、平坦な床面に至る。土坑の大きさは南北1.5m、東西1.84m、深さ1mで土坑の中では最も規模が大きい。土坑2・3からは弥生土器146点が出土したが図化できるものはなかった。

### 土坑4 (第77図)

A-25区で検出され、南側を溝状遺構1によって切られている。平面形は楕円形に近いと思われ、床面に凹凸が見られる。検出された大きさは南北1.18m、東西0.58m、深さ18cmである。土坑からは1点の弥生土器片が出土した。

### 土坑5 (第77図)

A-26区で検出された。平面形は楕円形で床面の東側は浅く落ち込む。断面形は皿状を呈し、深さは6cmと浅い。土坑の大きさは南北0.48m、東西0.38m。遺物の出土なし。

### 土坑6 (第77図)

A-26区で検出された。平面形は楕円形で床面の北側には浅い落ち込みがみられる。深さは6～8cmと浅く、床面は平坦である。土坑の大きさは南北0.4m、東西0.53m。遺物の出土なし。

### 土坑7 (第77図)

A-26区で検出され、平面形は不定形である。深さは12cm程で2段掘りとなっている。土坑の大きさは南北0.32m、東西0.3m。土坑からは石器が1点出土した。

### 敲石 (第76図 611)

安山岩小礫の側縁に敲打痕が認められる。

### 土坑8 (第77図)

A-30区で検出された。東側を確認トレンチにより削平されている。土坑の大きさは南北0.43m、東西0.56mである。土坑からは22点の弥生土器片が出土した。

### 土坑9 (第77図)

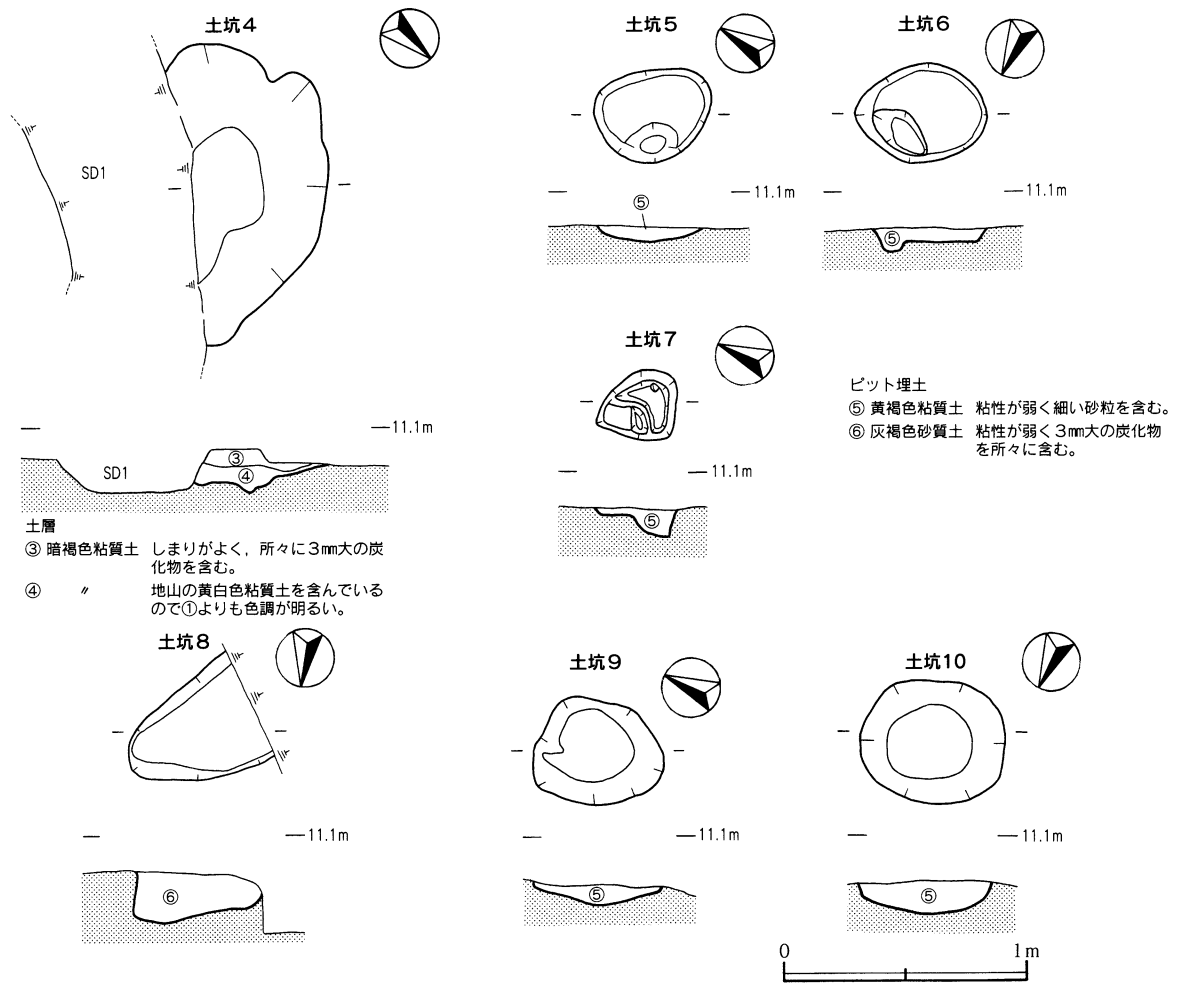
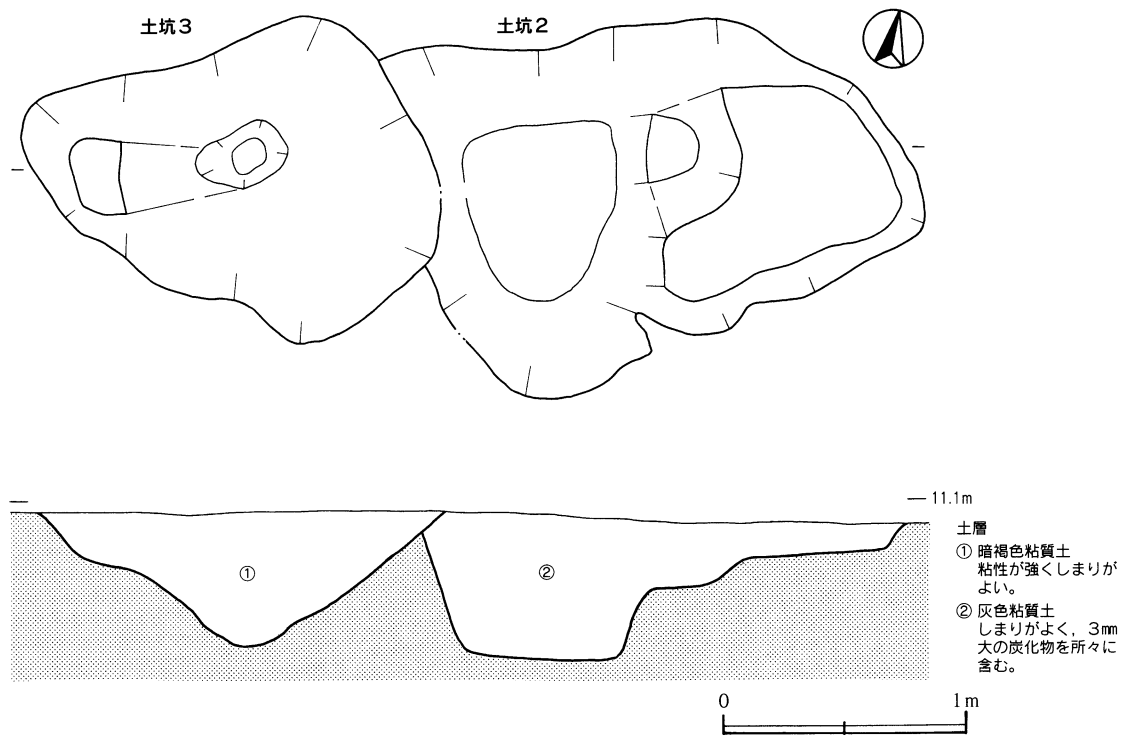
B-26区で検出され、平面形は楕円形である。深さは8cmで床面は中央部に向かって深くなっている。土坑の大きさは南北0.51m、東西0.44m、深さ8cmである。

### 土坑10 (第77図)

A-26区で検出された。平面形は円形で、土坑の大きさは南北0.5m、東西0.58m、深さ14cmである。土坑からは遺物の出土なし。

## (10) 溝状遺構1

AB-25区で検出され、緩やかに弧を描きながら調査区を東西に横断している。検出された大きさは長さ7.5m、幅0.5mである。深さは10cm程で断面形は台形状を呈し、床面は丸みを帯びる。弥生土器18点、石器2点が出土した。



第77図 土坑2～10

## 出土遺物

### 弥生土器（第78図）

弥生土器2点を図化した。612は甕の口縁部である。口縁部はわずかに器壁が厚くなり、口唇部が浅く凹んでいる。613は緩やかに外反する高杯の口縁部である。全体的に器壁が薄い。摩滅が著しく、調整は不明である。

### 石皿（第125図 1006）

扁平な安山岩を用い、一面を使用している。

### 敲石（第125図 1007）

折れてはいるが、棒状の礫の先端に細かな敲打痕が認められる。下から見たとき、楕円形の長径方向の擦り減り方が激しい。敲くと同時に搗り潰す動作もあり、搗粉木のような用途が考えられる。

第16表 土抗出土石器観察表

図番号	番号	出土区	層位	取上番号	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石材	備考
76	607	A26 土坑1	-	23	敲石	16.30	7.60	6.90	1200.00	安山岩	
76	608	土坑1	-	100	磨石・敲石	9.90	9.30	4.80	666.00	砂岩	
76	609	土坑1	I	15	石皿B	23.70	15.30	5.70	2600.00	安山岩	
76	610	土坑1	I	80	砥石	6.40	2.80	3.10	68.00	凝灰岩	
76	611	土坑7	-	8	敲石	4.60	5.10	4.50	129.00	安山岩	

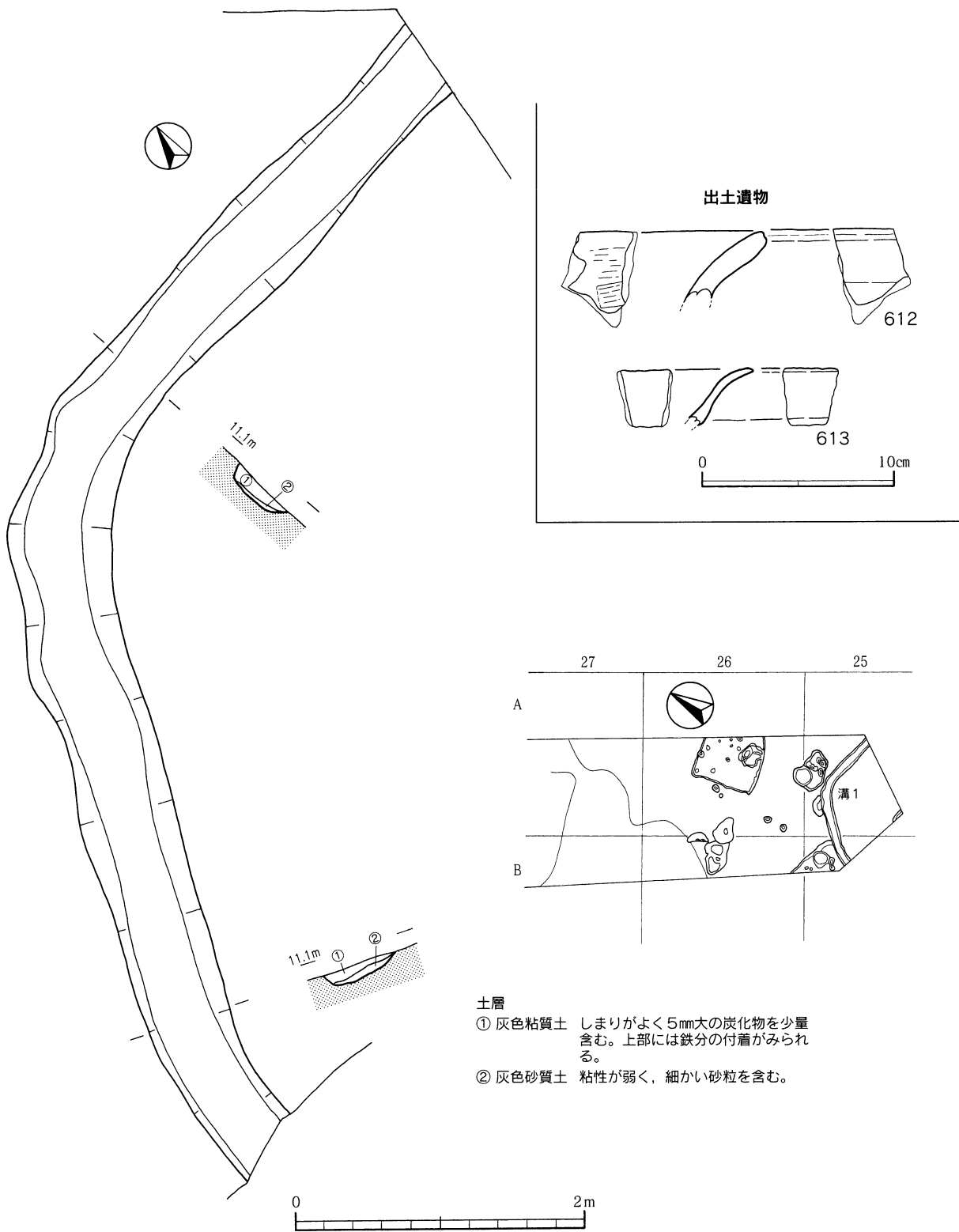
第17表 溝状遺構1 出土土器観察表

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様				胎土	焼成	備考	
							外面	内面	口径	底径				器高
78	612	弥生土器	甕	II		外: ぶい黄橙 10YR8/1 内: 灰白10YR8/1	口縁: ナデ 頸部: 横ナデ	ハケ目後ナデ	-	-	-	角閃石, 雲母, 石英を含む	良好	
78	613	弥生土器	高杯	II		外: 浅黄橙 10YR8/4 内: 灰白10YR8/2	摩滅	摩滅	-	-	-	砂粒を含まない精製された胎土	良好	

### (11) 自然流路1（第79図・巻頭カラー1）

2地点北部のA・B-21~24区にかけて検出された。本来は溝状遺構2と共にV層上面で検出すべきであったが、実際に検出することができたのはVII層上面であった。そのために、河床に近い砂土が堆積した下層部の調査を中心に行った。砂土の上位には粘質土が厚さ0.56m堆積している。検出された長さは17.2m、幅11.8m、深さは0.3cmであるが、本来の川幅は17.5m、深さ0.7m程である。河床の等高線から南側が上流、北側が下流である。自然流路の下層からは弥生土器1898点、石器137点、木製品233点が出土し、ハンノキ・イチイガシ・クスノキ・ヒョウタン・サルノコシカケなどの種実遺体も多く検出された。遺物を取り上げると5列の杭列を検出した（第79図下）。杭列は河床から20cm上の砂質土から打ち込





第78図 溝状遺構1及び出土遺物

まれており河床の砂礫層で止まっているために杭の先端部がつぶれているものが多い。杭列は、芯持材を用いた丸杭と割材を用いた角杭によって構成されている。東側の杭列1～3は3列平行して並び、西側の杭列4・5も2列平行して打ち込まれている。各杭の間隔は狭く、杭列1では板材を渡している部分が1か所みられ、杭列4・5は間に丸太材が乗り、杭は横倒しになった状態で検出された。杭列は土層断面の観察から自然流路が砂土によって埋没し、水量がそれほど多くない段階で打ち込まれており、使用されている杭も小型のものが主体を占める。杭列が検出された砂土の上層には粘質土が堆積しており、自然流路が埋没する過程で沼沢地となったことが推察される。当初、杭列の性格については杭列の東側に木製品や、農具の未製品が集中して出土したことから木材の貯蔵施設の可能性を考えたが、規模が大きすぎることに問題がある。1つの可能性として、自然流路跡を利用した小規模な水田跡に伴う施設ではないかと思われる。

## 出土遺物

弥生土器108点、石器43点、木製品129点を図化した。

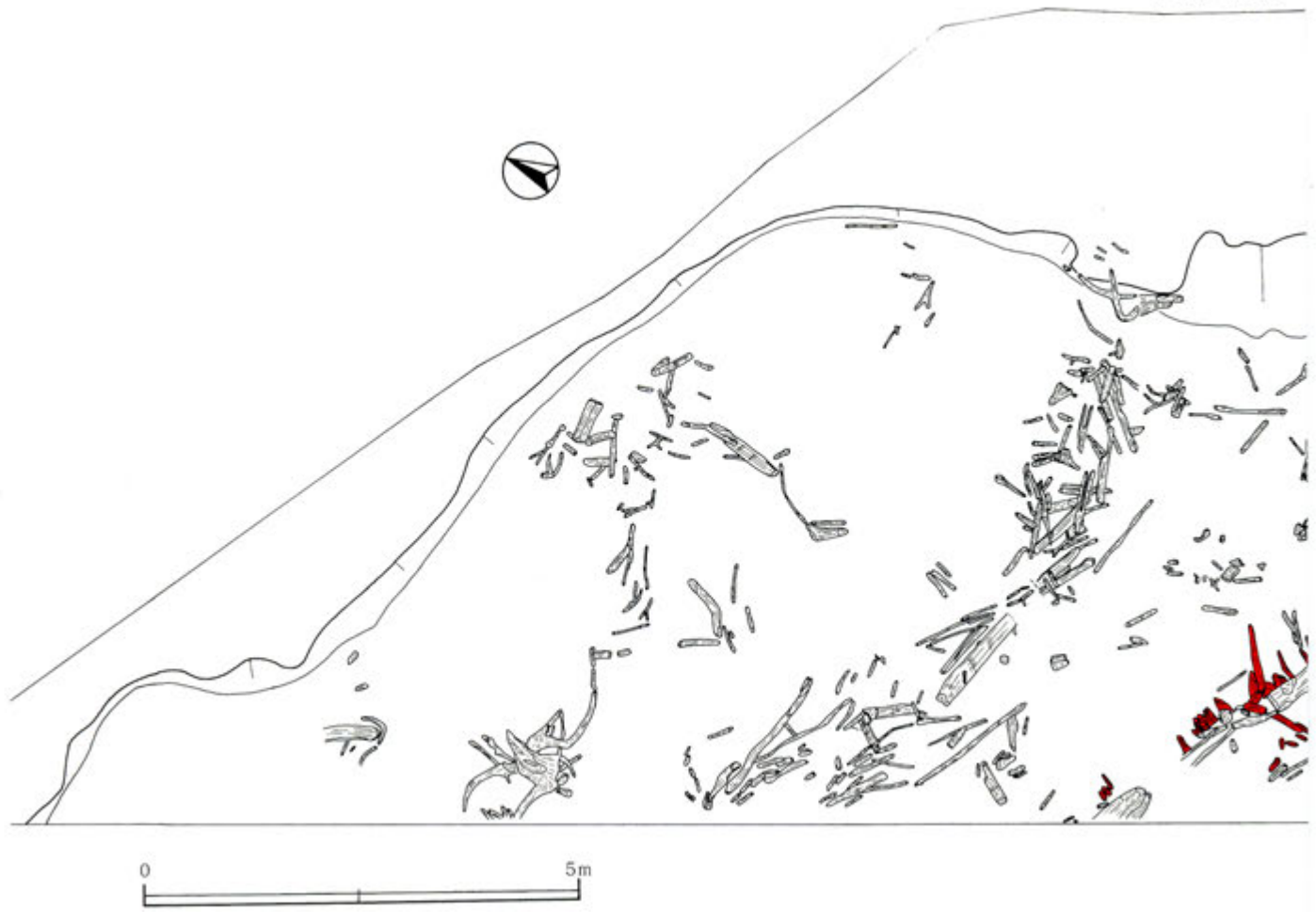
### 甕

#### I a類 (第80図 614～620)

614は口径33cm、器高35.8cm、底径8.6cmのほぼ完形品である。口縁部は歪みが大きく、断面三角形をなし、胴部との境は屈折するために強い稜が見られる。胴部はわずかに膨らみ、小さな脚部に至る。全体的に器壁が薄く、脚部の端は二次焼成のため赤褐色を呈している。外面の調整は口縁部が横方向の強いナデ、上胴部が丁寧なハケ目、下胴部はケズリ後ハケ目調整である。内面は口縁部がナデ、胴部はハケ目後ナデ調整が施されている。615は口縁が「く」字状に外反し、張り気味の胴部は器壁が薄い。外面はハケ目後ナデ、内面はナデ調整が施されている。616の口縁部は直線的で、内面に強い稜がつく。胴部は張りが弱い。外面はハケ目後ナデ、内面はナデ調整が施され工具痕が残る。内外面共に口縁部には指頭圧痕が多く見られる。617・618は口縁部が「く」字状に外反し、胴部はやや膨らみをもつ。外面はハケ目調整、内面は口縁部がハケ目、胴部はナデ調整が施されている。617は胴部に工具痕が多く残る。619は口縁内面と胴部との境の屈曲が強く、胴部は丸みを帯びる。外面はハケ目後ナデ、内面はナデ調整が施され指頭圧痕が多く残る。精製された胎土を使用しており、鉢の可能性もある。620の口縁部は直線的で、端部は丸くおさまる。内面の屈曲は強く稜をもつ。内外面ハケ目後ナデ調整で、外面には指頭圧痕が残る。

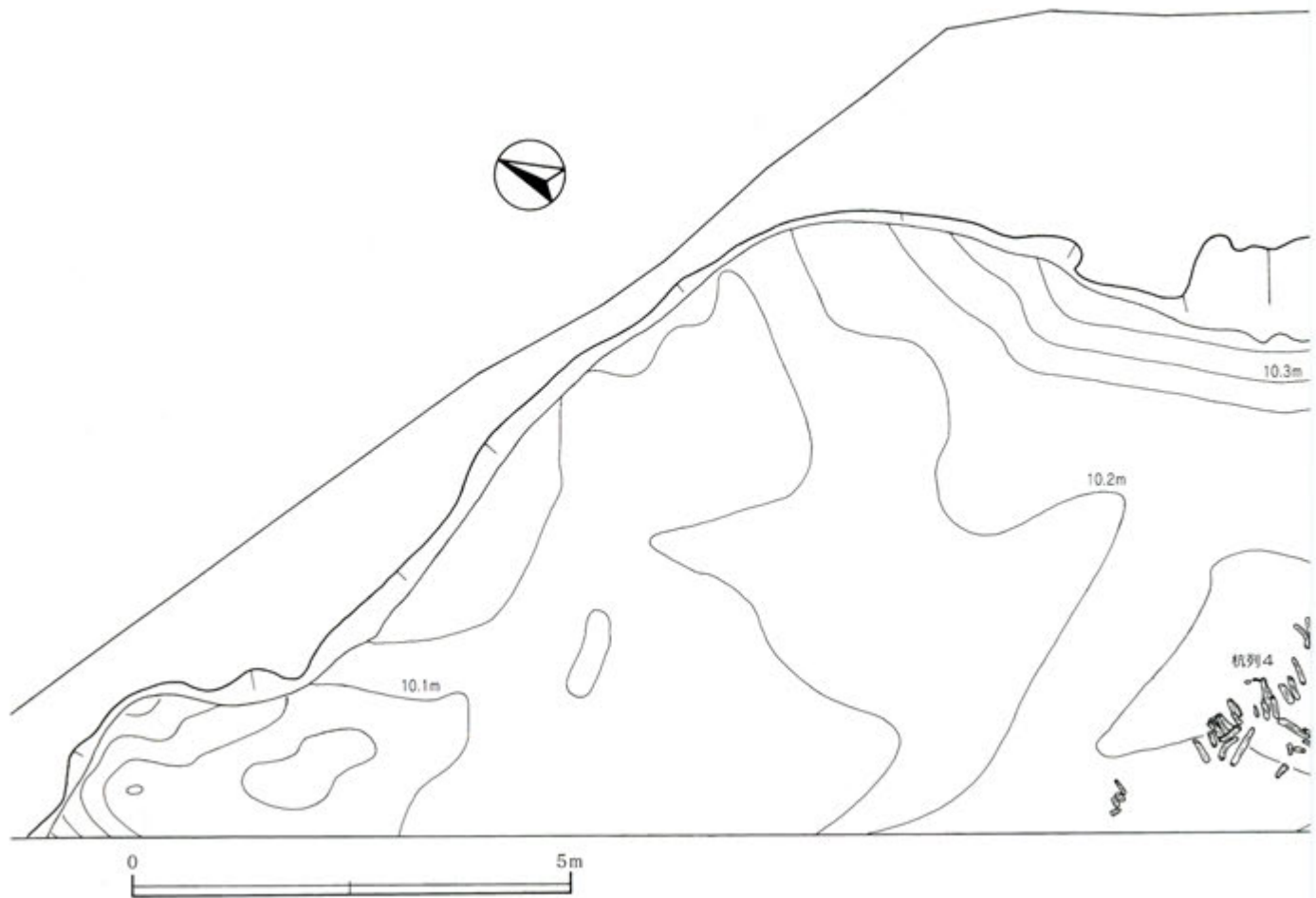
#### I b類 (第81～83図 621～647)

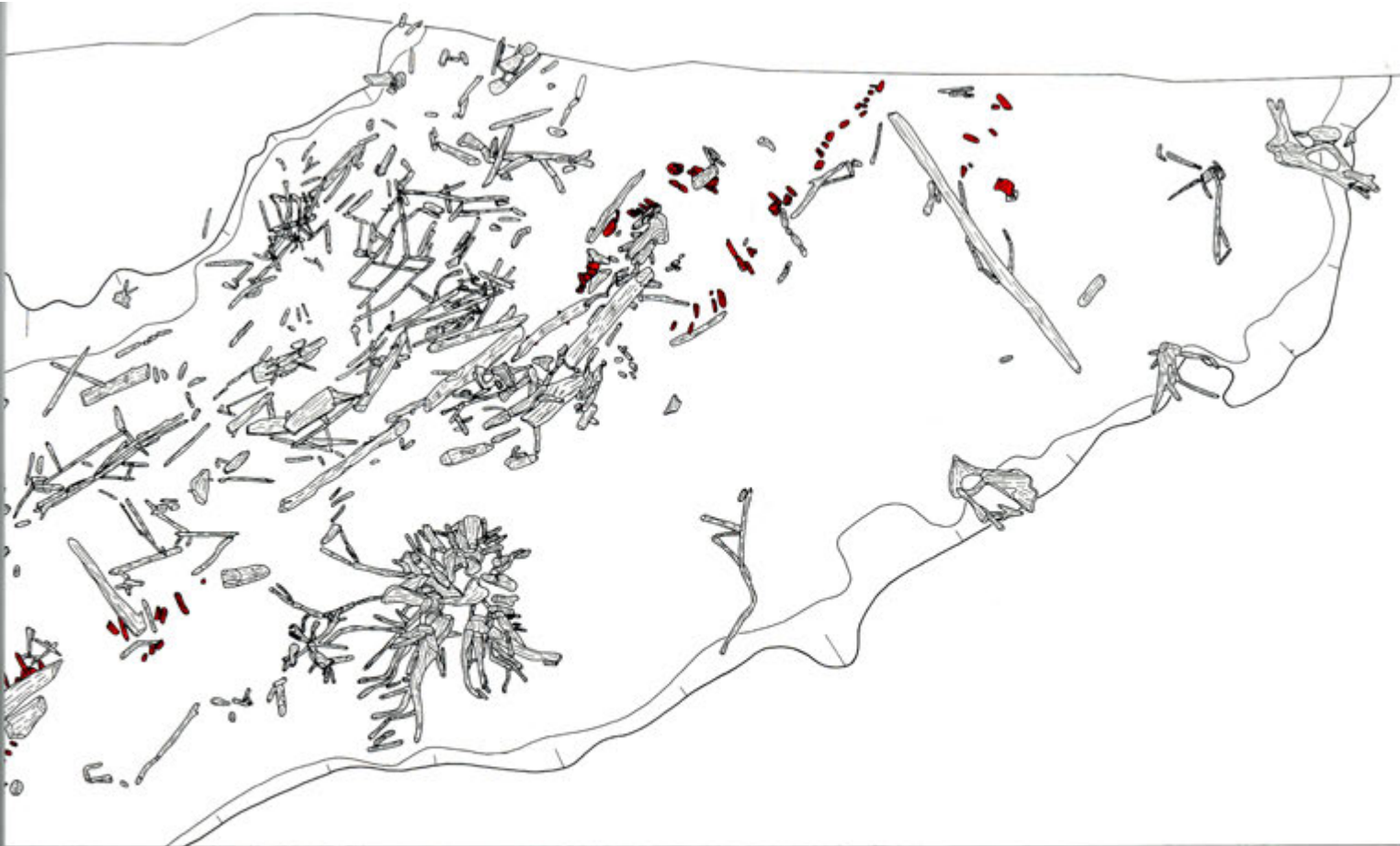
I b類は口縁部の外反が弱く、胴部は張らずに底部に向かってすぼまるものである。内外面にハケ目調整が施されるものが多い。621、622は口縁端部が平坦で中央がわずかに窪む。621は上胴部に最大径があり、そこから底部に向かってすぼまる。全体的に器壁が薄く、外面には煤が付着している。外面胴部下半部は二次焼成のために器面が荒れ、黄橙色を呈している。内外面共にハケ目調整が丁寧に施される。622の胴部は膨らみをわずかにもつ。内外面ハケ目調整が施され、部分的に強くナデられているために指頭圧痕が残る。623は胴部が張り丸



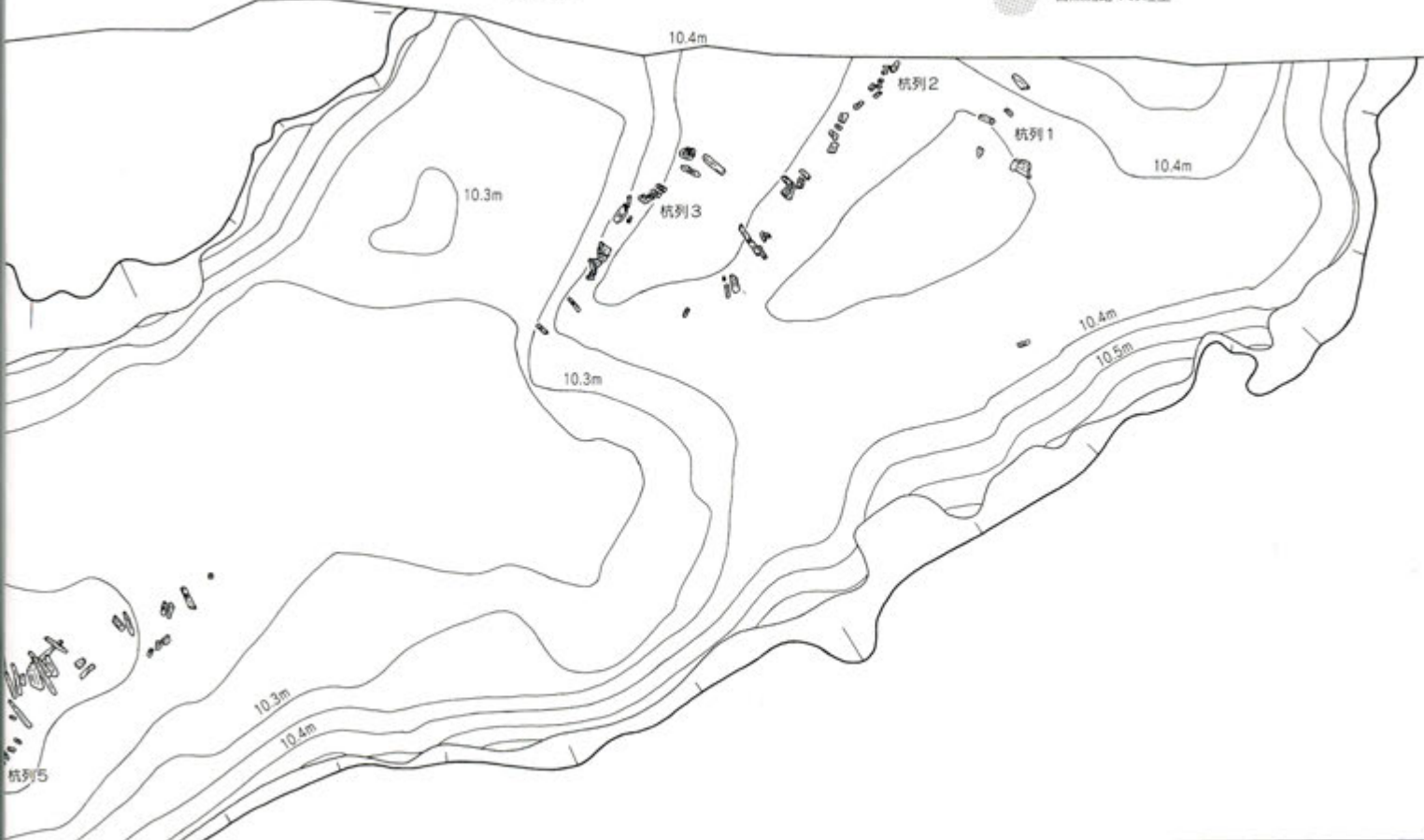
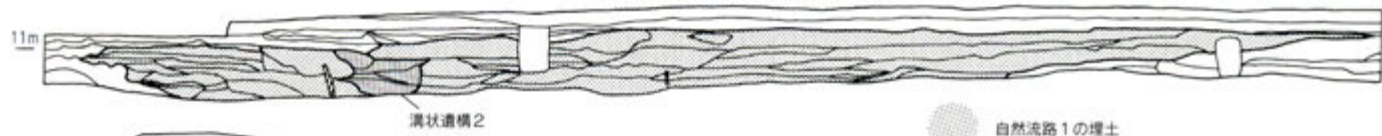
第79図 自然流路1 (1/80)

完掘状況





自然流路1土層断面図 (調査区東壁より)



みを帯びる。内外面ハケ目調整である。624は口縁部が緩やかに外反する。外面は頸部から上胴部にハケ目調整が施され、内面はハケ目後ナデ調整である。625・626は他に比べ口縁部の傾きが大きい。胴部はあまり張らず、底部へとすぼまる。内外面ハケ目後ナデ調整である。626は内面胴部にケズリ調整が施されている。627の口縁部は直線的で、胴部は膨らみをもたない。外面はハケ目、内面口縁部はナデ、胴部は幅広のハケ目調整が施されている。628は口縁部の器壁が薄く、胴部はわずかに張り底部に向かってすぼまる。外面はハケ目後ナデ、内面はハケ目調整である。629の口縁は緩やかに外反し、口縁部が先細りとなる。外面は頸部がハケ目、胴部はハケ目後ナデ、内面は口縁部がナデ、頸部から胴部はハケ目調整が施されている。630は口縁部が弱く外反する。外面は口縁部がナデ、胴部はハケ目調整で内面はハケ目後ナデ調整が施されている。631は厚みのある口縁部が緩やかに外反する。外面と内面口縁部には丁寧なハケ目が施されている。632は口縁部の外反が弱く、胴部は脹らみをもたない。内外面の口縁部は強い横ナデ、胴部はハケ目調整で、外面下胴部はケズリ調整が施されている。633の口唇部は平坦に形成され胴部は丸みを帯びる。調整は内外面はハケ目後ナデ調整である。634は他に比べ小型のものである。口縁部は外反し、胴部は底部に向かってすぼまる。内外面ハケ目後ナデ調整が施されている。635は口縁部が直線的で端部は平坦である。胴部はわずかに脹らみ、器壁が薄い。内外面ハケ目後ナデ調整が施されている。636は口縁部が外反し、胴部は底部に向かってすぼまる。内外面ハケ目調整が施されている。637は口唇部が丸くおさまり、胴部は緩やかに膨らむ。内外面共に口縁部がナデ、胴部はハケ目後ナデ調整である。638は口唇部が平坦で中央がわずかに窪む。頸部には接合痕が明瞭に残る。内外面ハケ目後ナデ調整が施される。639は口縁部が長く、器壁が薄い。頸部には工具痕が残りわずかに段がつく。内外面ハケ目後ナデ調整である。640は口縁部の先端に厚みがあり、端部は平坦で中央が窪む。外面はナデ、内面はハケ目後ナデ調整である。641・642は内面にケズリ調整が施されている。641は口縁部が緩やかに外反し、胴部はわずかに内傾する。外面はハケ目後ナデ、内面は口縁部がナデ、胴部はケズリ調整である。内面口縁部には3条の沈線が残る。642は口縁部が欠損している。外面はハケ目が丁寧に施され、内面は口縁部にハケ目、胴部はケズリ調整が施されている。643～647は口縁部が短く、外反が強いものである。胴部は張らずに底部へとすぼまる。内外面ハケ目後ナデ調整が施されている。647は上胴部に接合痕がみられる。644は下胴部に工具痕が残る。645・646は内面の下胴部にケズリ調整が施されている。647は内面にケズリ調整が施され、上胴部には「Ⅱ」と描かれた線刻が残る（写真1）。

### Ⅲ類（第83図 648, 649）

648は口縁部が弱く外傾し、肩が張るために最大径が上胴部にある口径より胴部最大径が大きくⅠ・Ⅱ類に比べて胴部は丸みを帯びる。外面は丁寧なハケ目、内面は口縁部がハケ目後ナデ、胴部はケズリ調整が施される。649は口縁部に厚みがあり、端部が丸くおさまる。口縁部片の傾きから胴部は脹らみをもつ形態であると思われる。



No647の線刻

#### IV類 (第84図 650～657)

IV類は大甕に該当する。

650～653の口縁部片は、直線的に外傾し平坦な口唇部はわずかに窪む。650は他と比べると厚みがあり、内面の屈曲が強く明瞭に稜が残る。内外面ハケ目が丁寧に施されている。651・652は外面が丁寧にナデられ、内面はハケ目後ナデ調整である。653は内外面ハケ目後ナデ調整で、内面は強くなでられ指頭圧痕が残る。654～657は上胴部に上方に湾曲した断面三角形の突帯がつく。654は口縁部の屈曲が弱く、内面の屈曲部に弱い稜がみられる。内外面丁寧なナデ調整が施される。655～657は口縁部が欠損している。655は内外面ハケ目後ナデ調整である。内面は強くナデられているために指頭圧痕が多く残る。656は内外面丁寧なナデ調整が施されている。657は胴部最大径が 推定26.4cmで内外面丁寧なナデ調整が施される。

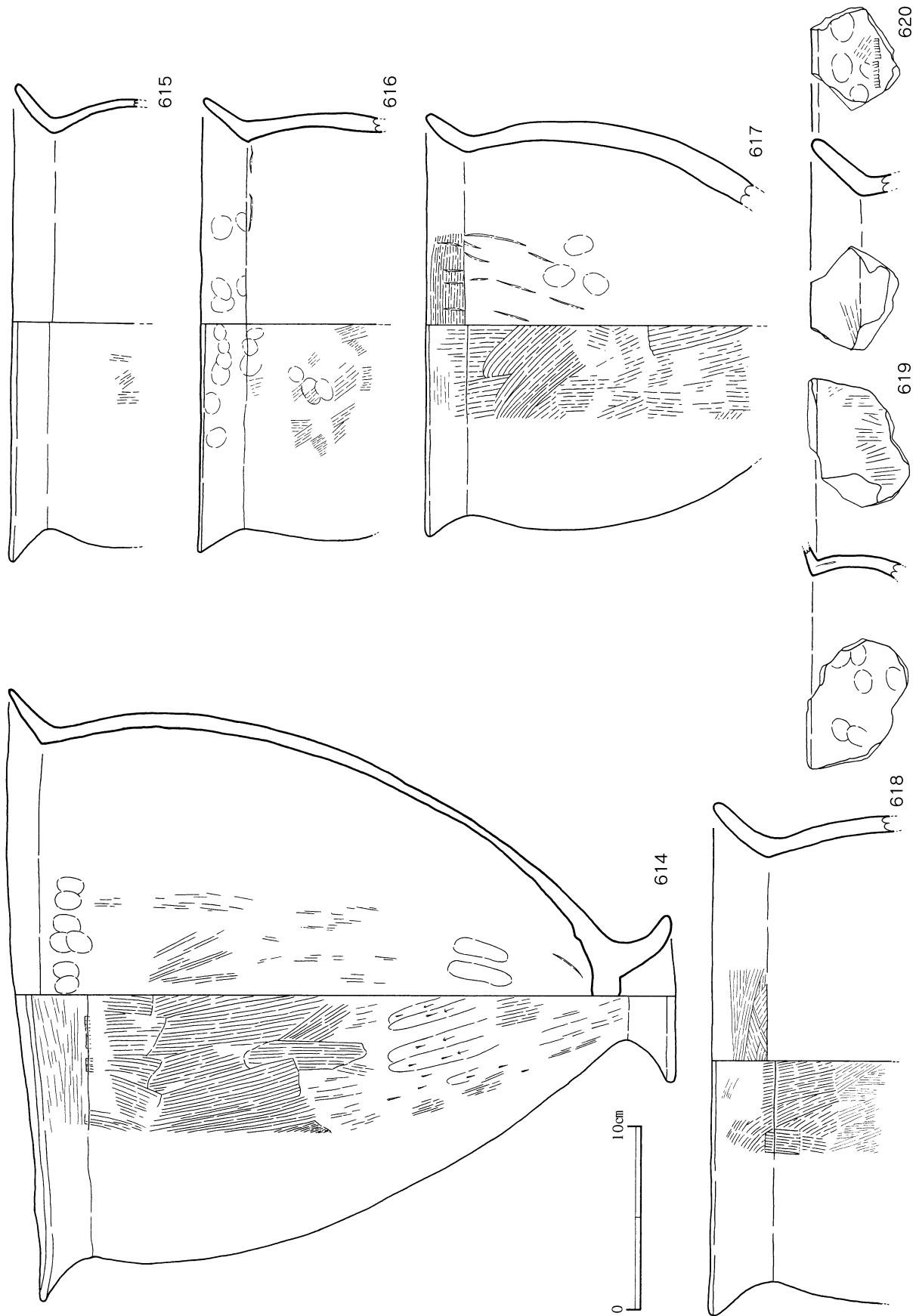
#### 底部 (第85図 658～677)

658～669は弱く外反しながら開き、脚高が低いものである。658・659は外面がハケ目後ナデ、内面はナデ調整が施され指頭圧痕が多く残る。内面には煤が付着している。660は内外面に細かいハケ目調整が施されている。661は内外面にハケ目後ナデ調整が施され、内面には工具痕が多く残る。662は外面に指頭圧痕が多く残る。外面はハケ目後ナデ、内面はナデ調整である。663は脚高が低い。外面はハケ目後ナデ調整で工具痕が残る。内面は強くナデられ指頭圧痕が多く残る。脚部内面には煤が付着している。664は脚部内面の天井部が凸状を呈している。外面はナデ、内面はハケ目調整である。665・666は外面にハケ目を施している。666は全体的に磨滅している。667は端部がナデにより面取りされている。調整は内外面ナデ調整。668は指頭圧痕が多く残る。670は接地面付近で弱く外反する。外面は磨滅しており、部分的にハケ目が残っている。671は外面にハケ目が施されるが多くはナデ消されている。672～677は直線的に開き、脚高が高いものである。多くは外面に縦方向のハケ目が施される。672は内外面ナデ調整が施され、下胴部は上方から下方に強くナデているため器面に凹凸ができています。673は外面がハケ目後ナデ、脚部内面には幅の広いハケ目が連続的に施されている。674は外面に丁寧なハケ目が施され、端部付近はナデ消されている。内面はハケ目後ナデ調整で工具痕が残る。胴部との境には接合痕がみられる。675は内外面ハケ目調整が施されている。677は器壁が薄く端部は面取りされている。外面がハケ目、内面はナデ調整が施されている。

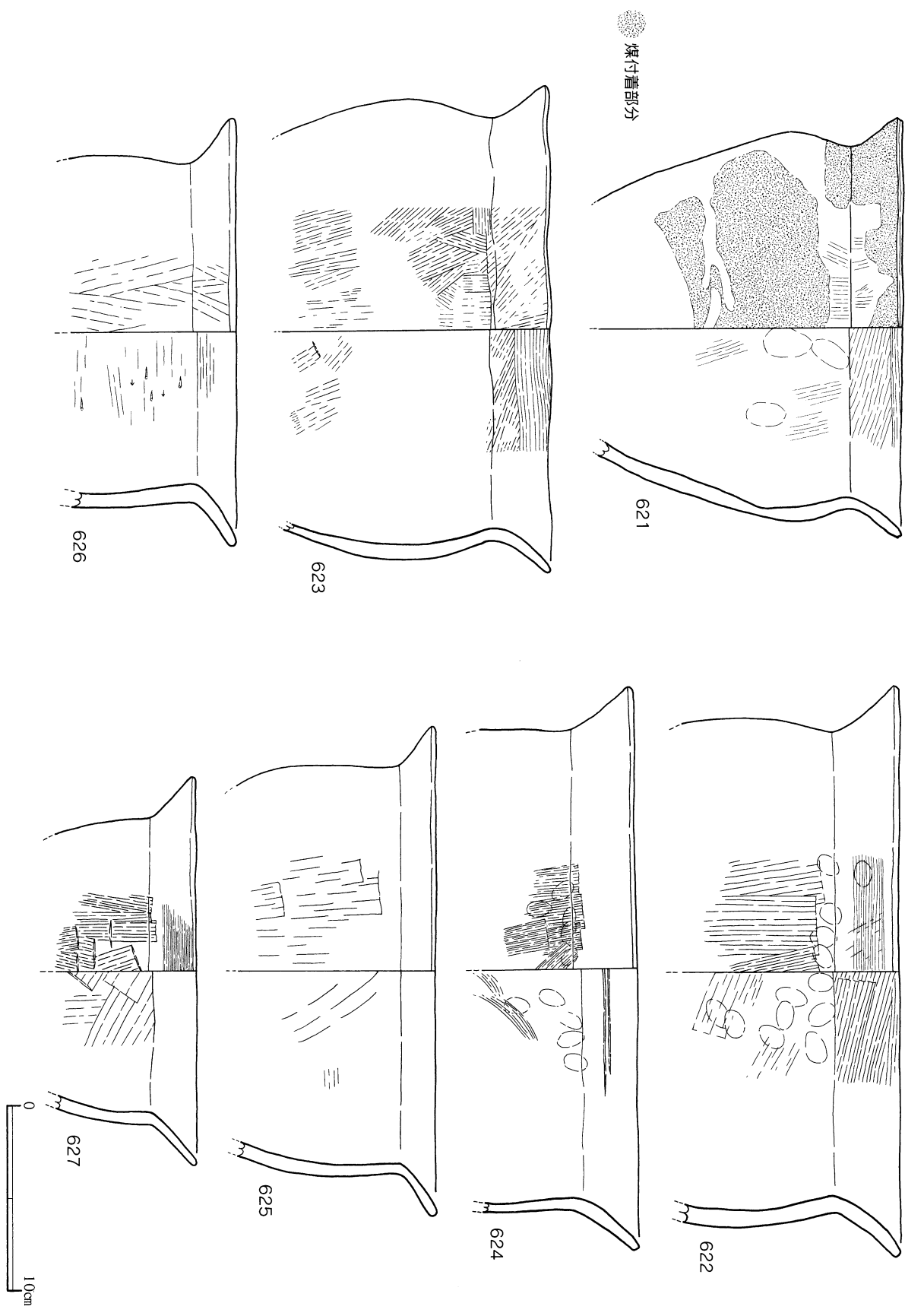
#### 壺

##### I a類 (第86図 678～682)

678は口縁部が「く」字状に外反し、胴部は倒卵形を呈している。底部は小さな平底である。胴部の中央には煤が付着しており、煮炊き具として使用されている。外面は口縁部がナデ、胴部はハケ目後ナデ、下胴部はケズリ調整が施される。内面は口縁部がハケ目後ナデ、内面はナデ調整である。679は弱く外反する口縁部の端部がわずかに下方に屈曲している。外面は口縁部がナデ、胴部はハケ目後ナデ、内面はナデ調整である。680は口縁

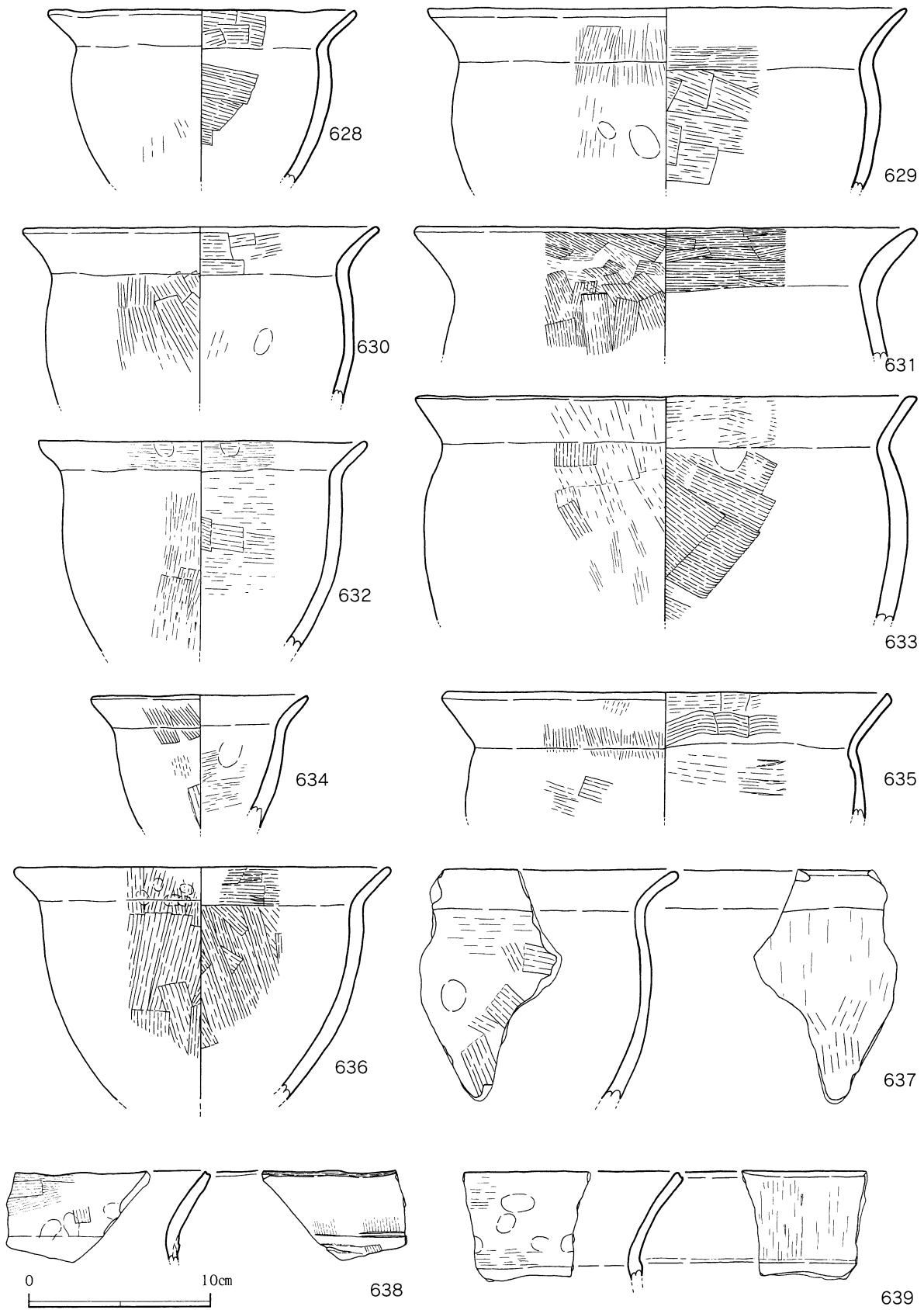


第80图 自然流路1出土土器(1)

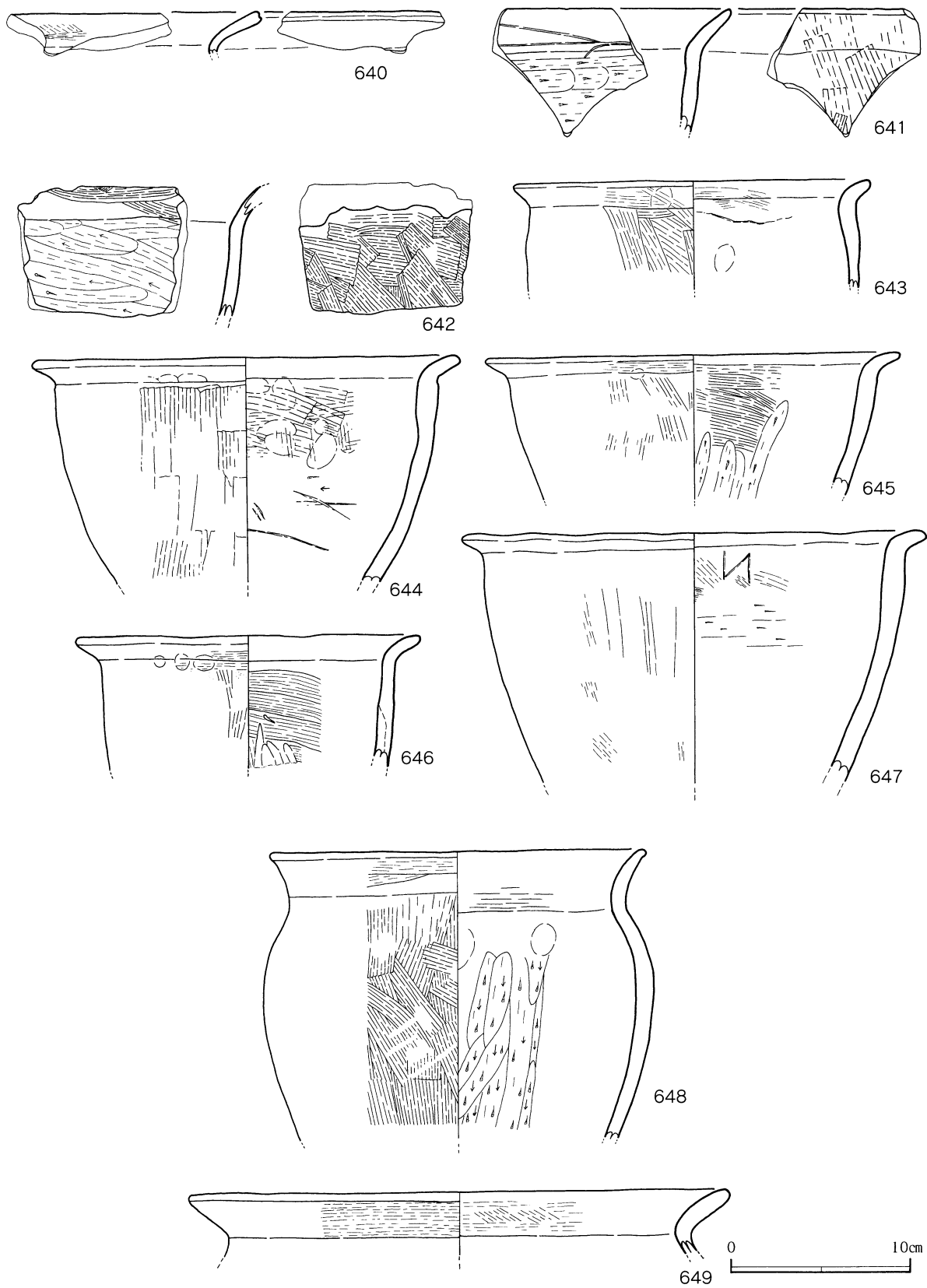


第81图 自然流路 1 出土土器 (2)

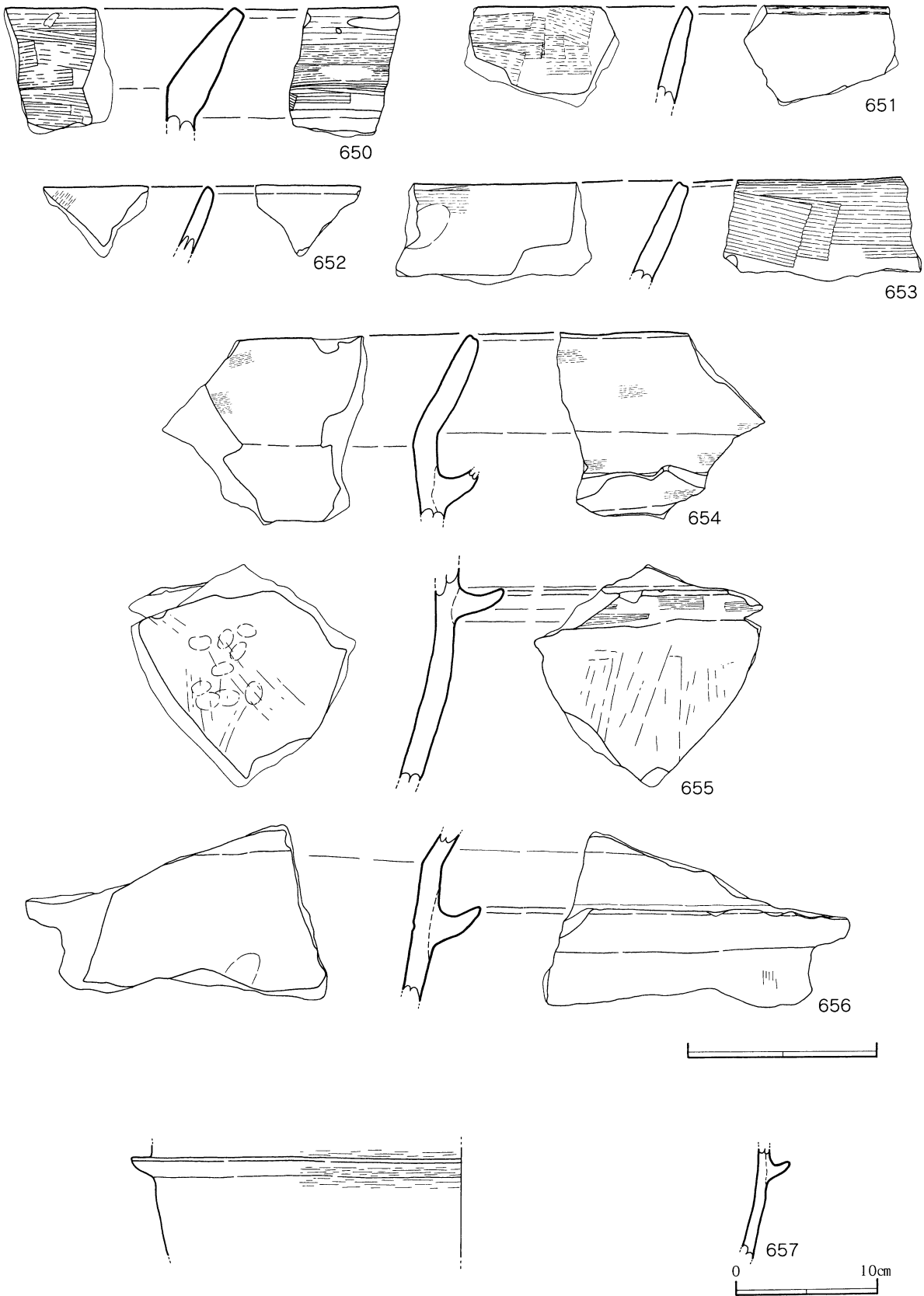




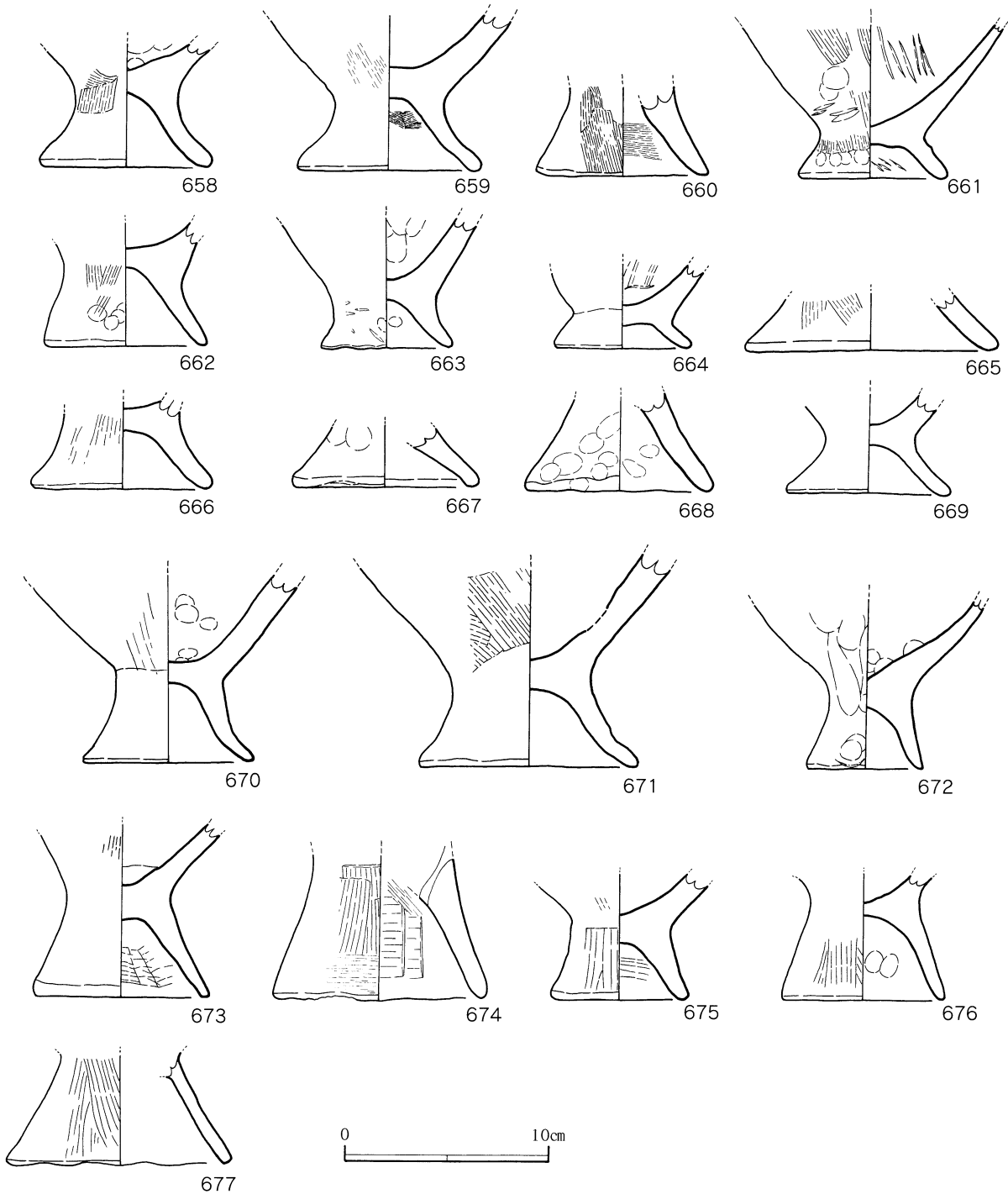
第82図 自然流路1出土土器(3)



第83図 自然流路1出土土器(4)



第84图 自然流路1出土土器(5)



第85図 自然流路1出土土器(6)

部が欠損している。外面の調整は磨滅のため不明。内面はナデが施され指頭圧痕が多く残る。681は口縁部が短く外反し、上胴部は撫で肩となる口縁部の器壁は胴部に比べ薄い。内外面ハケ目後ナデ調整で、内面上胴部には指頭圧痕が多く残る。682は短い口縁部が直線的に立ち上がり、端部が丸くおさまる。上胴部は撫で肩で内外面ナデ調整が施されている。

#### I b類 (第86図 683~686)

683は口縁部が「く」字状に弱く外反し、上胴部付近に最大径をもつ。口唇部は浅く窪み、底部は小さな平底である。胴部中央には1条の刻目突帯文が施されている。刻目は柾目が確認されることから板状の木製工具で施したと考えられる。下胴部には破裂痕が残る。外面はハケ目、内面はナデ調整が施されている。684は胴部中央に2条の刻目突帯を施している。外面は丁寧なハケ目、内面は外面よりも細かいハケ目が施されている。685は外反する口縁部の内面がわずかに窪んでいる。口唇部は平坦で中央が浅く窪む。内外面丁寧なナデ調整が施される。686は口縁部の外反が強く、内面の屈曲部に稜がみられる。口唇部は平坦である。内外面ハケ目後ナデ調整を施している。

#### I類 (第87図 687~695)

687・688口縁部が緩やかに外反し、口唇部は平坦で中央がわずかに窪んでいる。687の外面はハケ目後ナデ、内面はナデ調整が施される。688は外面がハケ目後ナデ、内面は細かいハケ目調整が丁寧に施され頸部に指頭圧痕が並んで残る。689~691は口縁部が緩やかに外反し、端部が丸くおさまる。外面はハケ目後ナデ、内面はナデ調整である。689は外面に工具痕が残る。690は頸部の径が他のものより小さい。692は口縁部が緩やかに外反して開く。外面は口縁部がナデ、胴部がハケ目、内面にはハケ目調整が施されている。693は口縁部が短く外反する。内外面ハケ目後ナデ調整である。694・695は同一個体と考えられる。694は口縁部が外反し、胴部との境に断面三角形の突帯が1条施されている。外面は丁寧な細かいハケ目調整、内面はハケ目後ナデ調整が施される。内面は口縁の屈曲部から胴部にかけて器面の大部分が剥落している。695はしっかりした平底から直線的に大きく開いて立ち上がる。外面はケズリ調整が施され、内面は器面の剥落が著しい。

#### III類 (第87図 696・697)

III類は上胴部に削りだしによる多重突帯文が施され、内外面に緻密なミガキが施されている。焼成も堅緻で、内外面黒色を呈し他の壺とは様相が異なる。

696は外傾する口縁部の端部が小さく横に開く。口縁部と胴部の境には削りだしによる突帯が1条廻る。外面と内面口縁部には幅2mmの丁寧な磨きが施されている。外面口縁部付近と胴部内面は横ナデが施される。697は削りだしによる粗雑なつくりの突帯文が13条残る。外面はミガキ調整、内面はナデ調整で指頭圧痕が多く残る。

#### IV a類 (第88図 698・699)

IV a類は短く直線的な口縁が、外傾するものである。

698は内面の屈曲部に稜をもち、口唇部は平坦となる。内外面ハケ目後、ナデ調整である。699は口唇部が丸みを帯びている。外面はナデ調整、内面はハケ目後ナデ調整で工具痕が残

る。

#### IV b類 (第88図 700)

口縁部は短く先細りし、胴部は張りが強く丸みを帯びる。頸部の接合痕は浅い沈線状となる。外面は口縁部がナデ、胴部はハケ目、内面はハケ目後ナデ調整が施されている。焼成は硬質で丁寧なつくりである。

#### V類 (第88図 701)

免田式の壺の胴部片である。下胴部は強く屈曲しヘラによって描かれた浅く幅の広い下向きの重弧文が描かれ、弥生後期前半から中頃の特徴を残している。胎土は精製されたものを使用している。外面はミガキ、内面はナデ調整が施されている。

#### その他 (第88図 702~711)

702は口縁部が弱く外反し、口唇部は平坦である。頸部には突帯文が1条施される。内外面ナデ調整である。703は口唇部が平坦で中央がわずかに窪む。内外面ナデ調整である。704は内外面ナデ調整である。精製された胎土を使用し、色調は橙色を呈している。705は内面の屈曲が強い。調整は磨滅のため不明である。

706は長頸壺の口縁部である。頸部から口縁部にかけてほぼ直立しており、口唇部には1条の沈線文が施されている。器壁が薄く、内外面ケズリ調整が施されている。

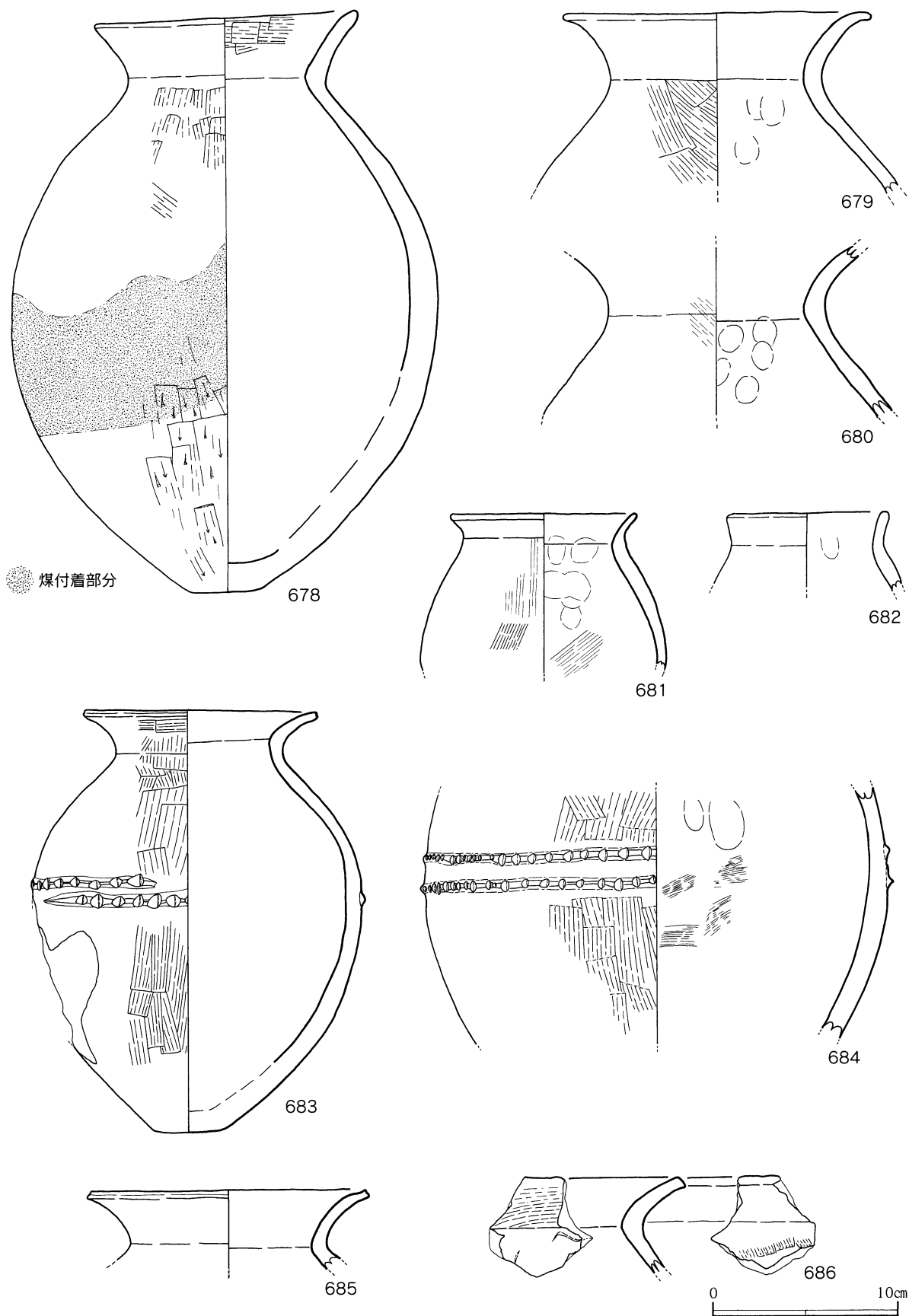
707~710は偏球形の胴部に多重の突帯文を施している。全て丁寧なつくりで、706の長頸壺の胴部である可能性がある。707は上胴部に7条の突帯文が施される。突帯文は削り出すことによってつくった可能性がある。下胴部には丁寧なハケ目が施される。708は上胴部に貼付突帯文を1条施す。外面にミガキ、内面はハケ目調整である。710は3条の貼付突帯文が残っている。

#### 底部 (第89図 712~716)

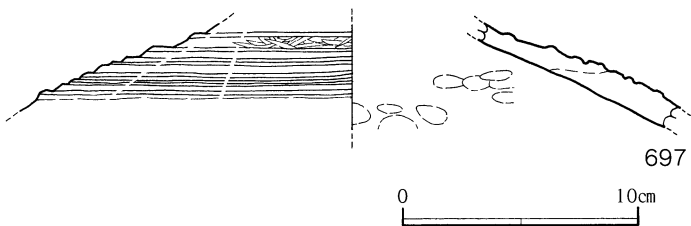
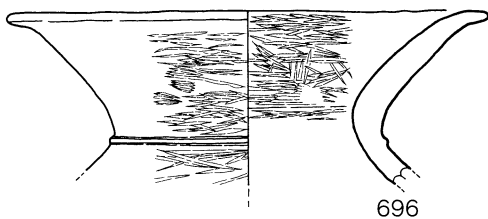
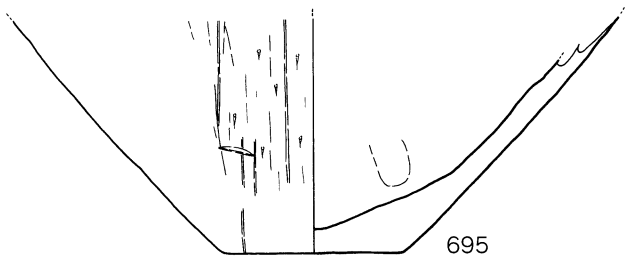
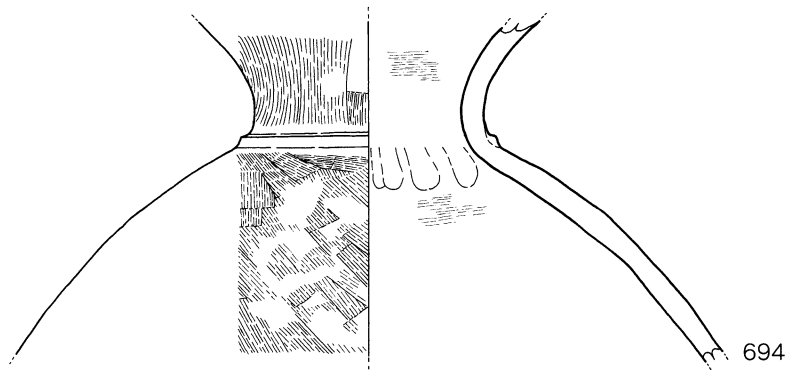
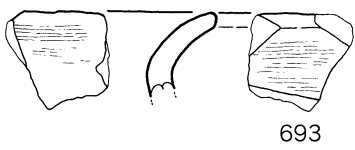
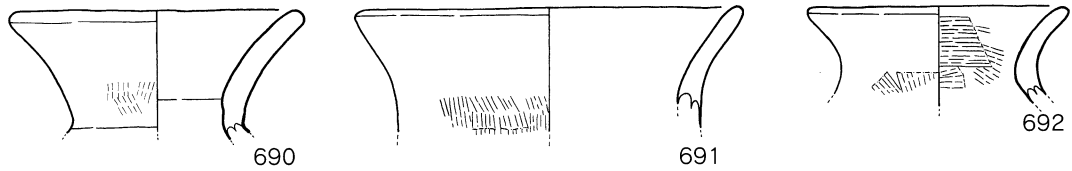
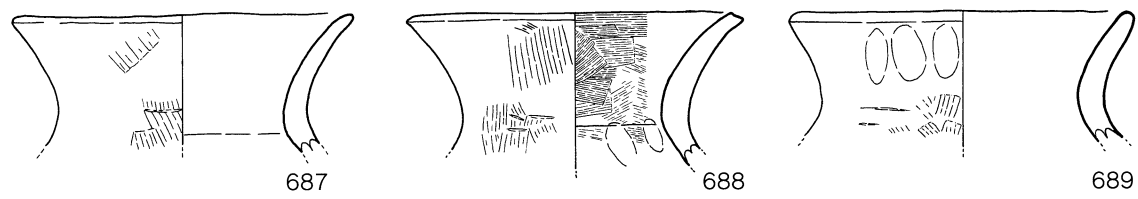
712~714は、平底から緩やかに曲線を描いて立ち上がる。712は底部内面が盛り上がり、内外面ハケ目調整が施されている。714は他に比べ底径が小さい。内面調整は胴部がタタキを意識した粗いハケ目、底は強いナデによって掻き取られている。715は砂粒を多く含み、外面はケズリ調整である。716は尖り気味の丸底で外面に煤が付着している。外面は板ナデが施され、内面はナデ調整で底部は掻きナデている。

#### 鉢 (第89図 717~723)

717は平底から直線的に体部が開く。内外面のハケ目は細かく、下胴部から底部はナデ調整である。718は丸底で、口縁部は直立し体部は丸みを帯びる。内外面ナデ調整である。719は口唇部が指頭圧痕のために歪んでいる。内外面に指頭圧痕が多く残る。720は口縁部が直立気味で、胴部は丸みを帯びる。口縁部はナデ、胴部はハケ目調整である。721の胴部は丸みを帯び、器壁が厚い。底部には脚台が付くと考えられる。外面はハケ目、内面胴部にはケズリ、下部はミガキ調整が施されている。全体的に粗雑なつくりである。722は口縁部が内湾している。外面には細かいハケ目が施され、内面はナデ調整で口縁部には工具痕が多く見られる。723は小型の鉢の底部と思われる。内外面ナデ調整で、内面には指頭圧痕が残る。

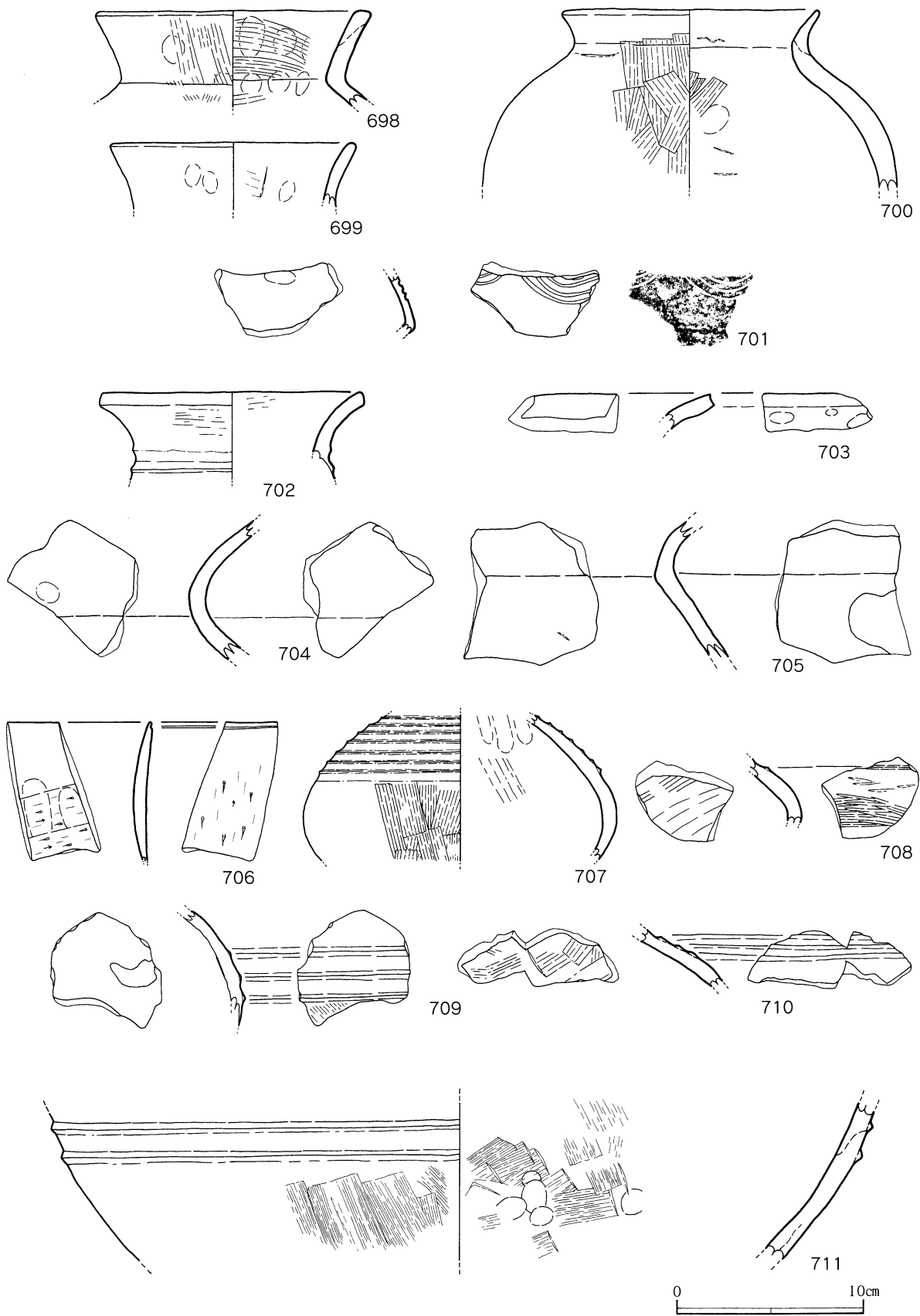


第86図 自然流路1出土土器(7)

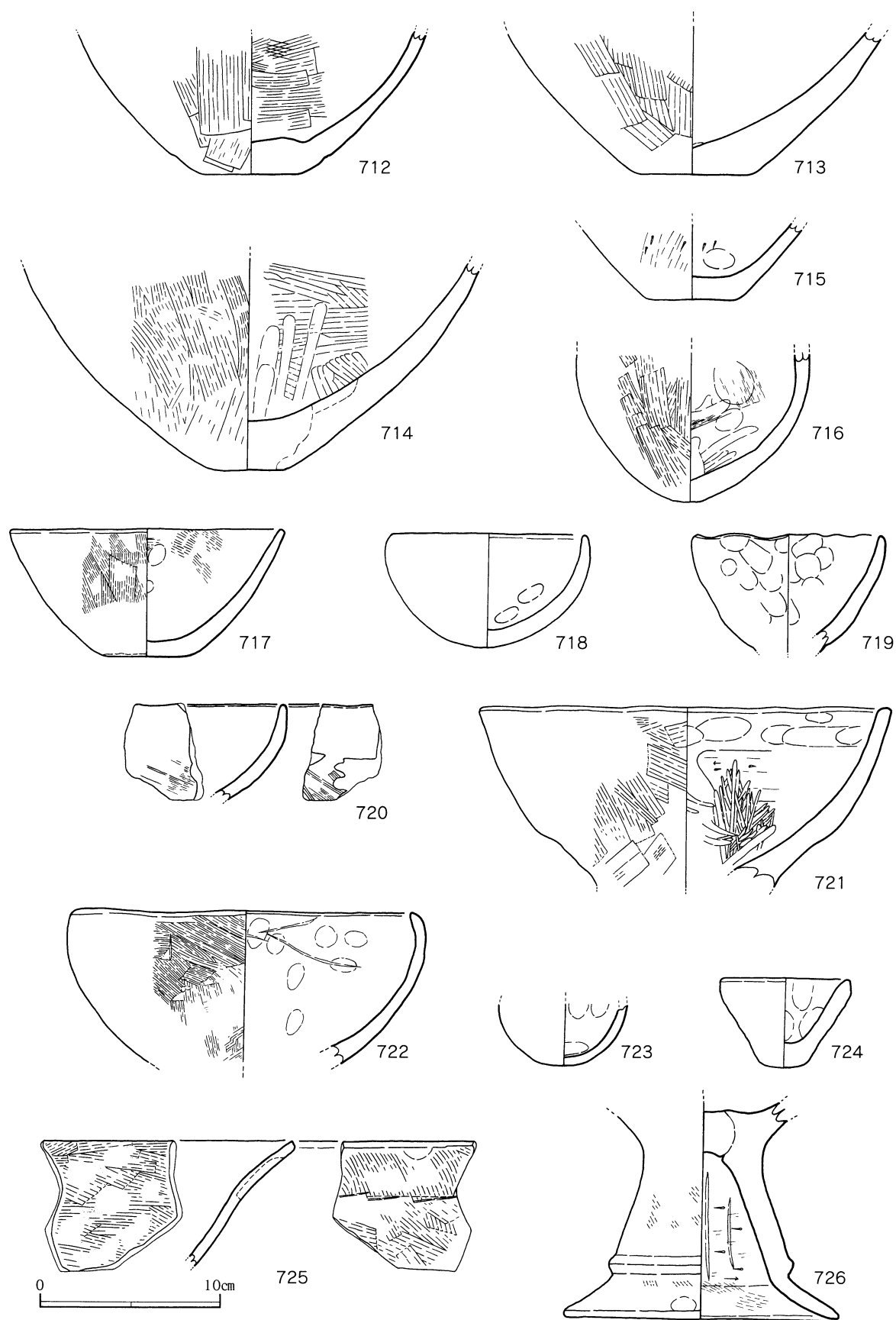


第87图 自然流路1出土土器(8)

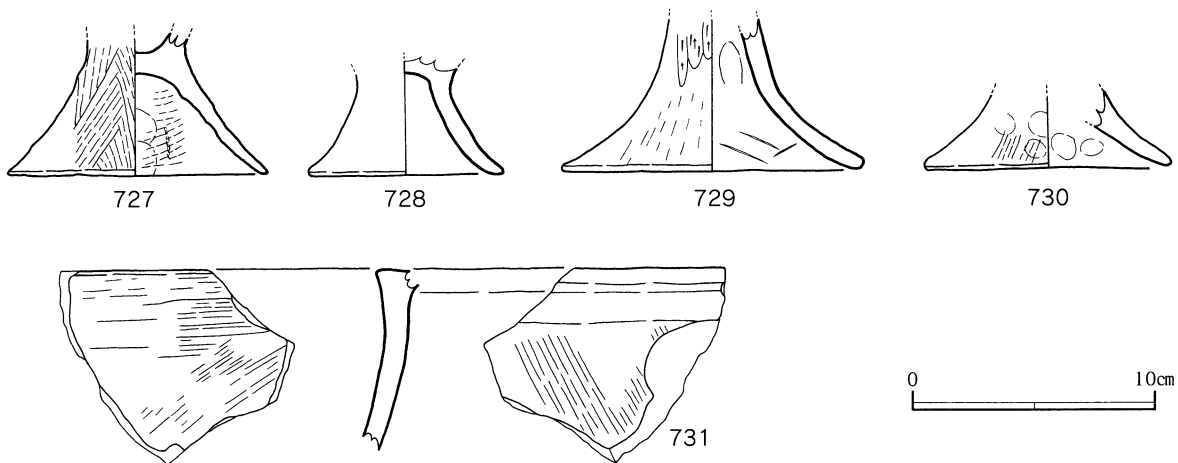




第88图 自然流路1出土土器(9)



第89図 自然流路1出土土器(10)



第90図 自然流路1出土土器(11)

#### ミニチュア土器(第89図 724)

胴部は平底から直線的に開き、口唇部は丸くおさまる。内外面ナデ調整で内面には指頭圧痕が多く残る。

#### 高坏(第89・90図 725~730)

725は体部である。口縁部は弱く外反し端部は平坦となる。口縁外面は上方へハケ目調整が施されるために体部との境に工具痕が並んで残る。内面はハケ目後ナデ調整である。器壁が薄く丁寧な作りである。726~730は脚部である。726は脚部下部分が屈折した後大きく外傾して開き、屈折部分に突帯文を廻らす。外面はハケ目後丁寧なナデ調整、内面は脚注部にケズリ調整が施されている。他に比べ丁寧な造りである。727・728は脚部の開きが弱いものである。727は内外面ハケ目調整が施され、内面天井部はナデられている。728は内外面ナデ調整である。精製された胎土を使用し、丁寧な作りである。729は脚部が大きく開く。2次焼成を受けている可能性があり、羽口への転用も考えられ注意を要する。なお、楠元遺跡とほぼ同時期である鹿児島市武遺跡では古墳初頭頃の高坏を転用した羽口が出土している。730は外面がハケ目後ナデ調整である。

#### 甕(第90図 731)

弥生時代中期初頭頃の入来式土器である。突帯は欠損している。

#### 石鏃(第91図 732・733)

732はハリ質安山岩、733は黒曜石を素材とする凹脚鏃である。

#### スクレイパー(第91図 734・737)

大型の剥片を利用したもので、縁辺を刃部としている。

#### 石核(第91図 735)

表皮が残る黒曜石を素材とし、各方向から剥離している。

### 楔形石器（第91図 736）

黒曜石を素材としており、一辺を平らにして使っている。

### 砥石（第91図 738・739）

738は安山岩製で両面が使用されている。739は細かな目をもつ砂岩を素材とし、両面が近接するほど窪むまで使い込まれている。

### 軽石製品（第91・93図 740・752・753）

740は直径1 cmの棒状の対象物を研磨してできたと考えられる溝が4条ある。752は軽石両面の中央部に何度か突き刺した様な痕跡がみられる。両面とも途中でやめていることから、中央部に突き刺すという行為そのものに意味があったのかもしれない。753は風化が著しく元来の形状や目的は解らない。

### 石斧（第92図 741～745）

741と745は肉厚な石斧で、敲打と研磨によって入念に仕上げられている。刃部が潰れるほど敲打痕が見られるので、石斧としての機能がなくなった後も敲打具として再利用している。742は蛇紋岩製の両刃の石斧である。743は刃部と側面の研磨面の色調が元の面と異なり、再研磨した様子が窺える。744は砂岩を素材とする両刃の石斧である。

### 磨石（第92・93図 746～751）

746は三面がやや平坦面となるものである。747は球形の礫を使用している。748はやや扁平な円礫を用い、両面は磨石として、側面は敲石として利用している。両面の中央部にはわずかな窪みもあり凹石としての機能もある。749は焼けて黒く焦げている。751は球形に近く、側面の敲打が著しい。

### 凹石（第94図 754）

砂岩製で両面がほぼ均等に窪んでいる。窪み周辺の磨滅も著しく、磨石としての機能も備えている。

### 敲石（第94図755～758）

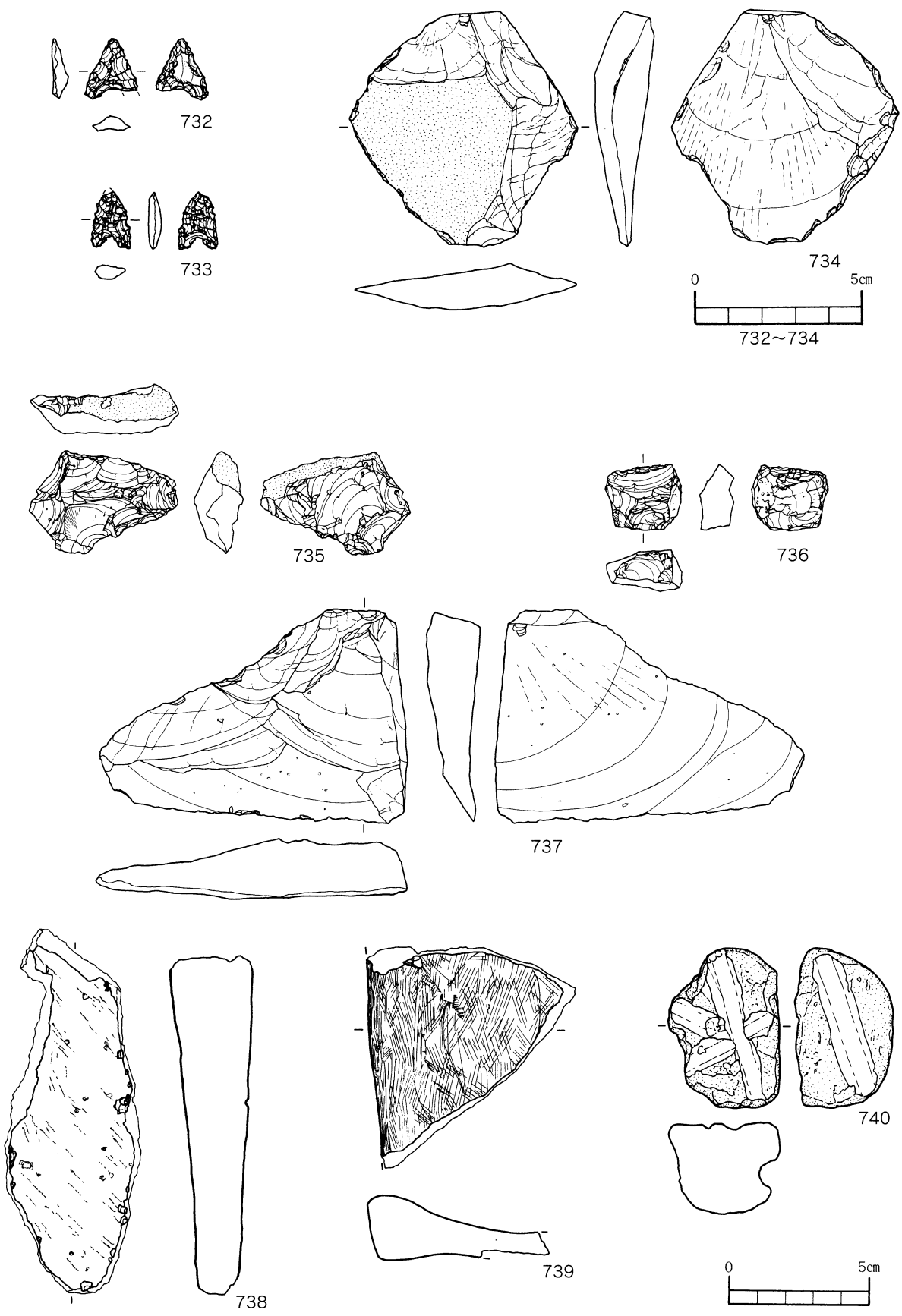
いずれも安山岩の小礫を素材としており、一端に粗い打撃痕が残っている。

### 礫器（第95図761・762）

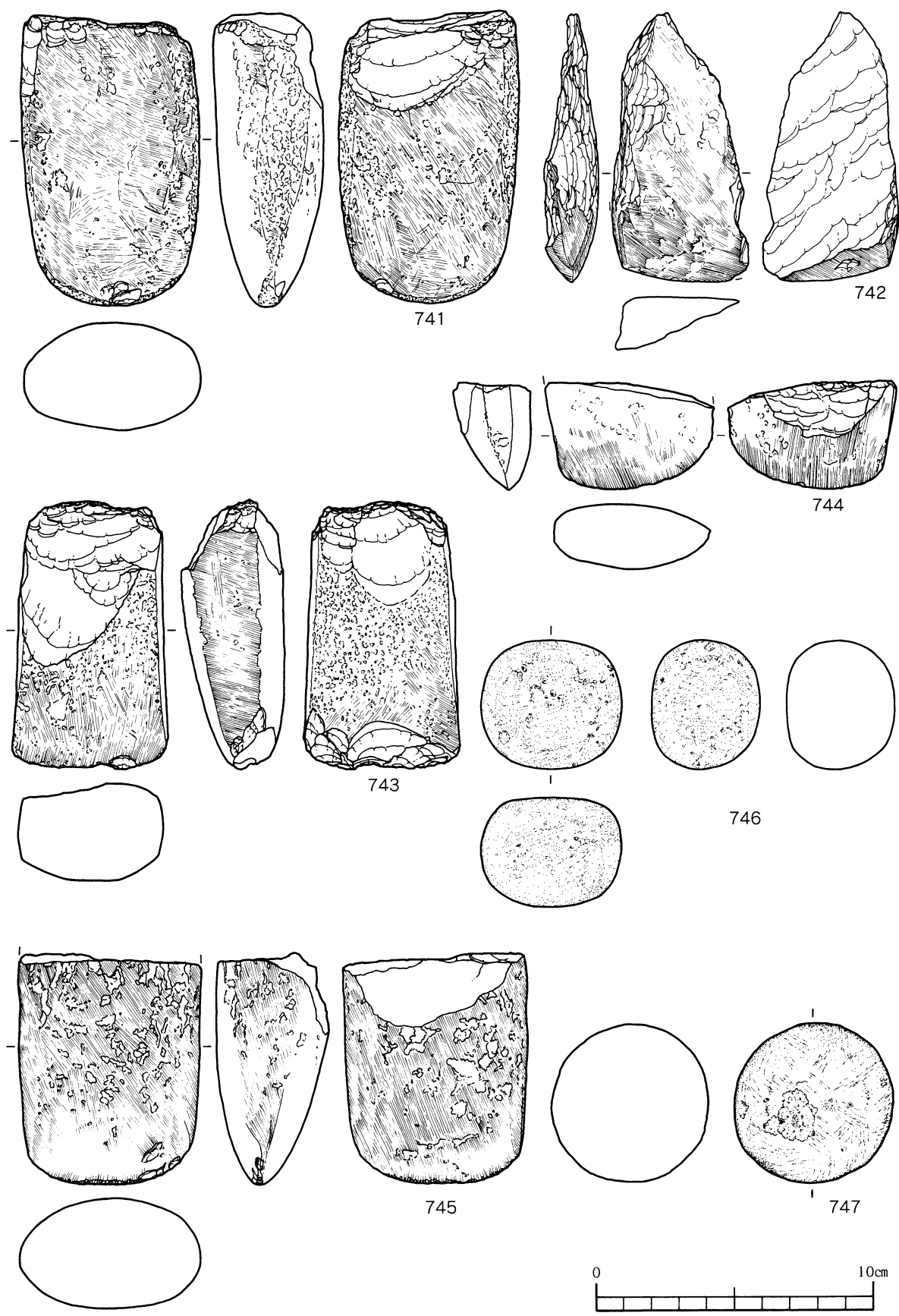
761は安山岩の主要剥離面は残し、裏面を各方向から剥離している。762は安山岩の剥片を利用し、縁辺に剥離を加えて刃部としている。

### 石皿（第94・第96～98図 760・763～775）

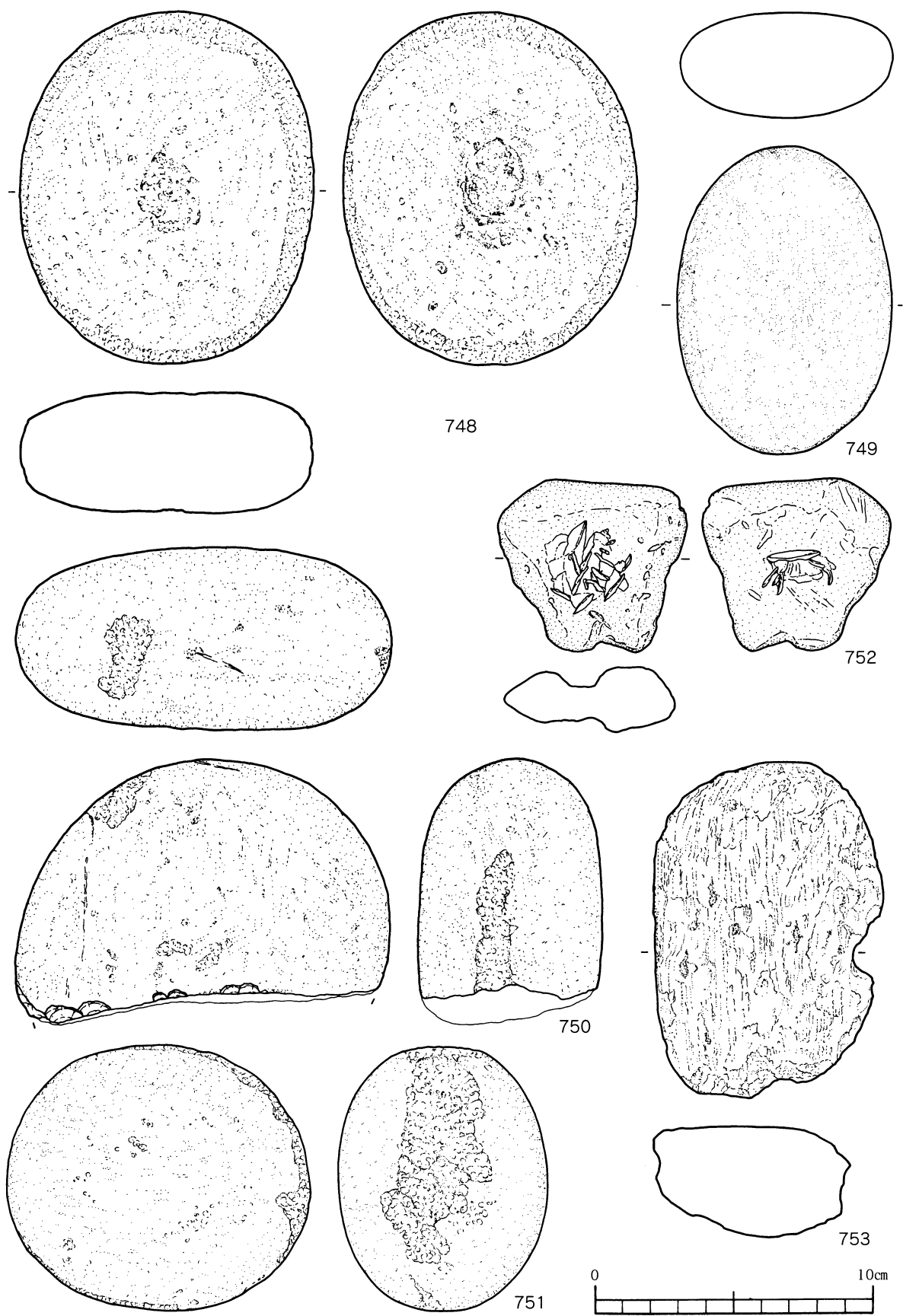
763・764は両方の平坦面を使用している。765は一コーナー部分の欠損品であるが、方形をした定形の石皿と考えられる。中央部が浅く窪んでいる。766は自然の窪んだ部分を利用したものである。767は楕円形をした定形の石皿の一部である。中央部はかなり使い込まれており、窪みも深い。768は目の細かな砂岩を素材とし、三面を使用している。三面とも凹レンズ状に窪んでいる。772は平坦な両面を使用している。片面はわずかに湾曲している。773は上面平坦部を使用しており、磨滅痕が著しい。774は安定感のある大きな安山岩を利用しており、使用面はほぼ平である。775・770・771も安山岩を素材とし、自然に窪んだ面を使用している。中央付近の磨滅が著しい。



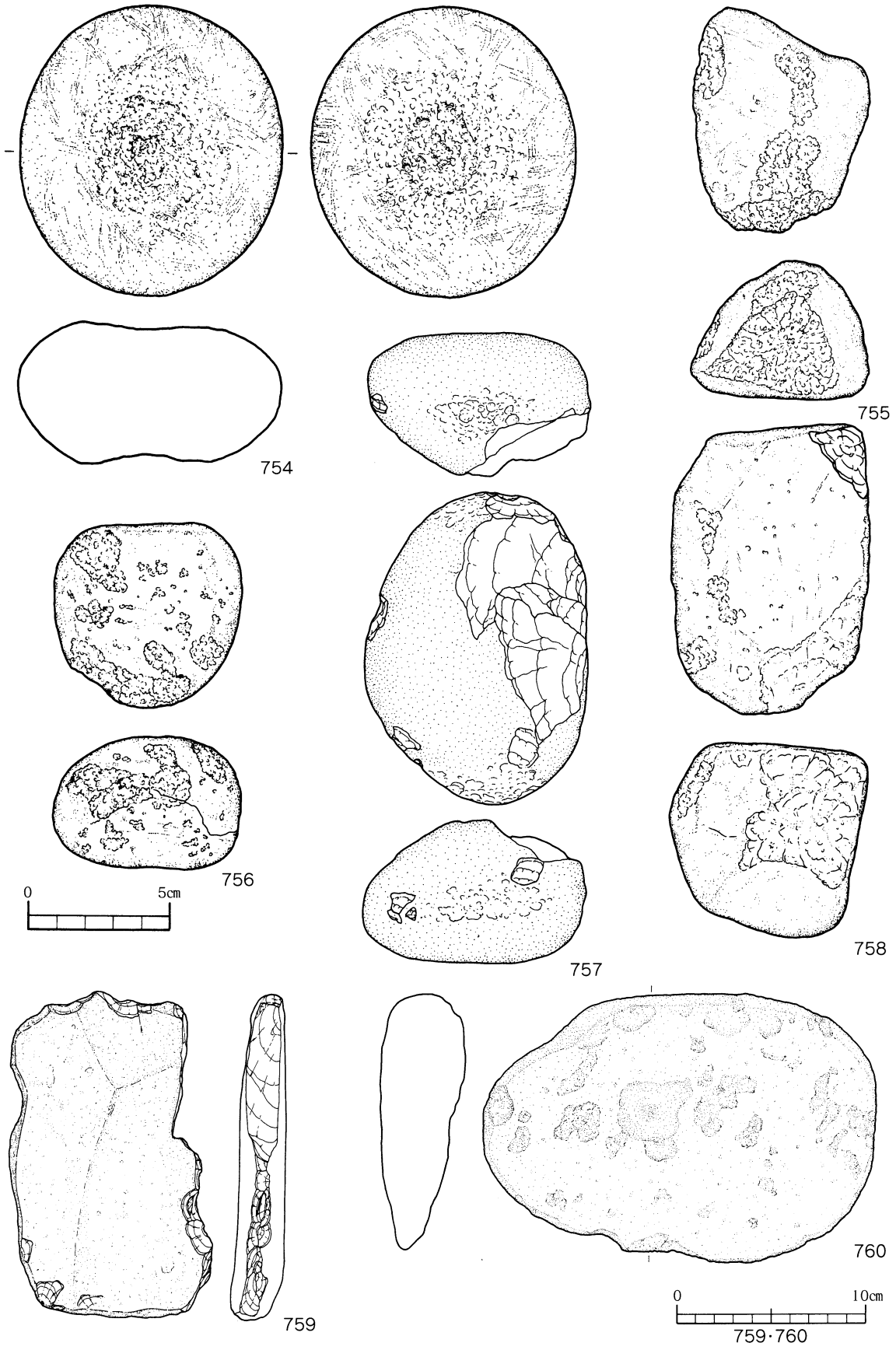
第91図 自然流路1出土石器(1)



第92図 自然流路1出土石器(2)

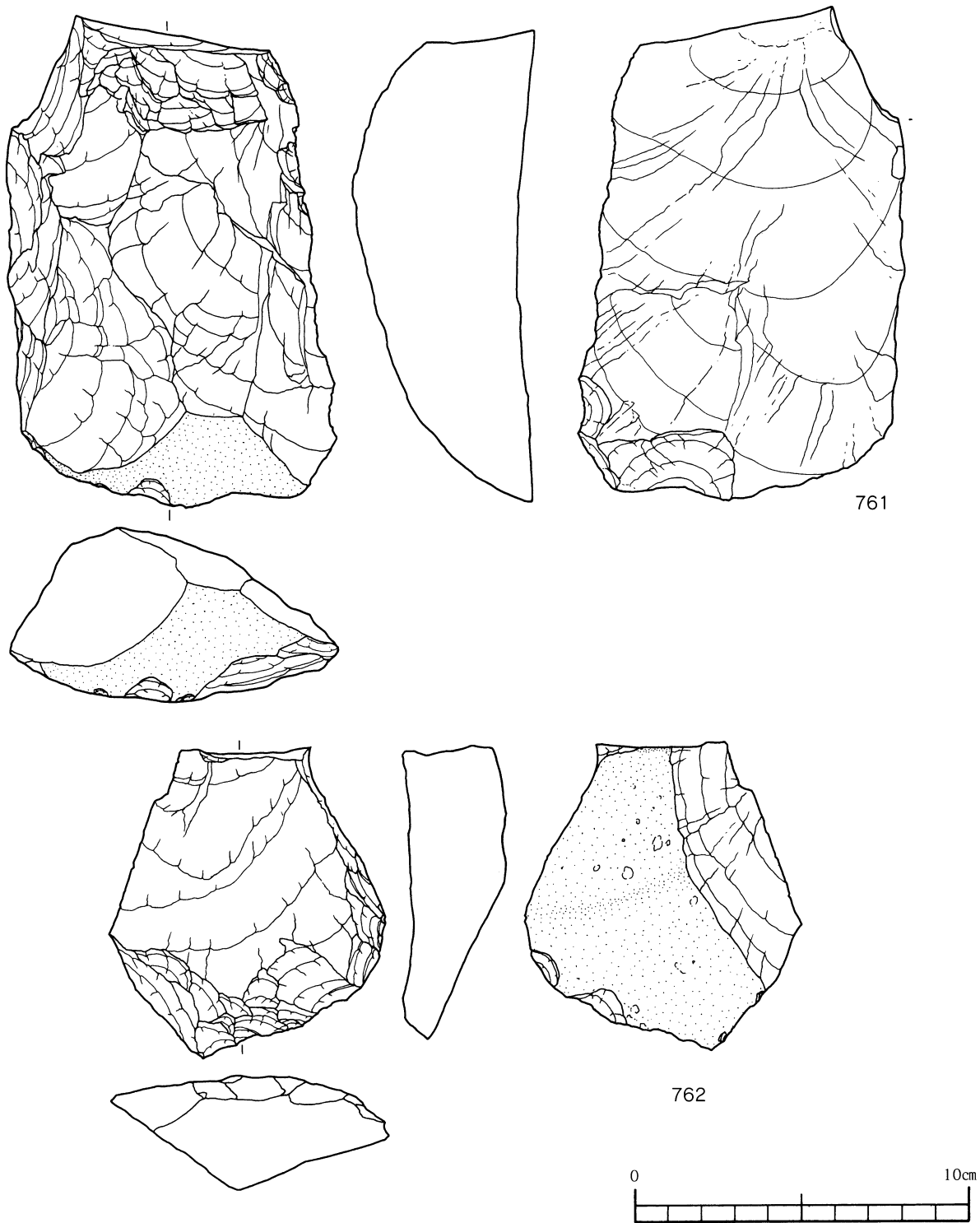


第93図 自然流路1出土石器(3)



第94図 自然流路1出土石器(4)





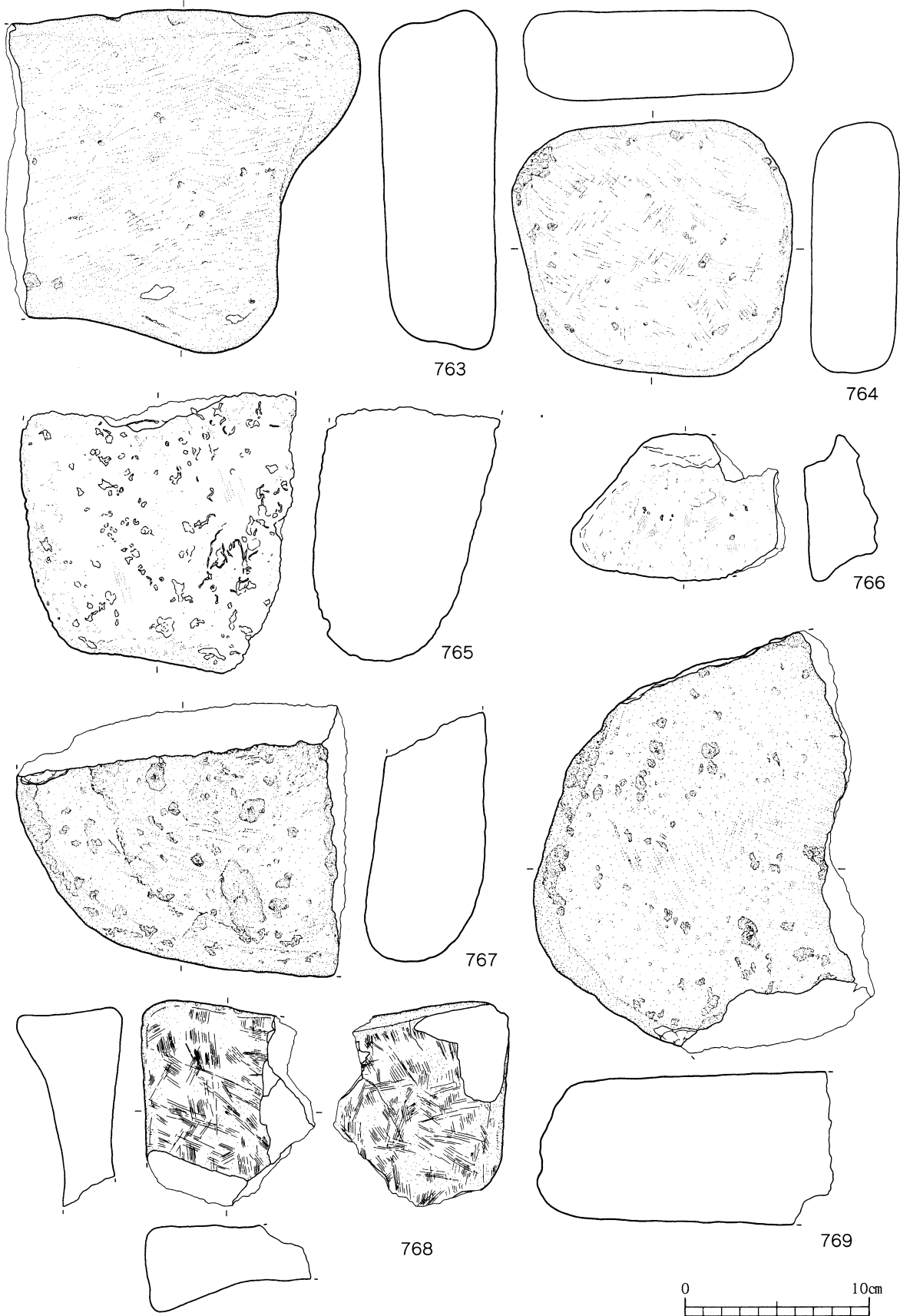
第95図 自然流路1 出土石器 (5)

**木製品**

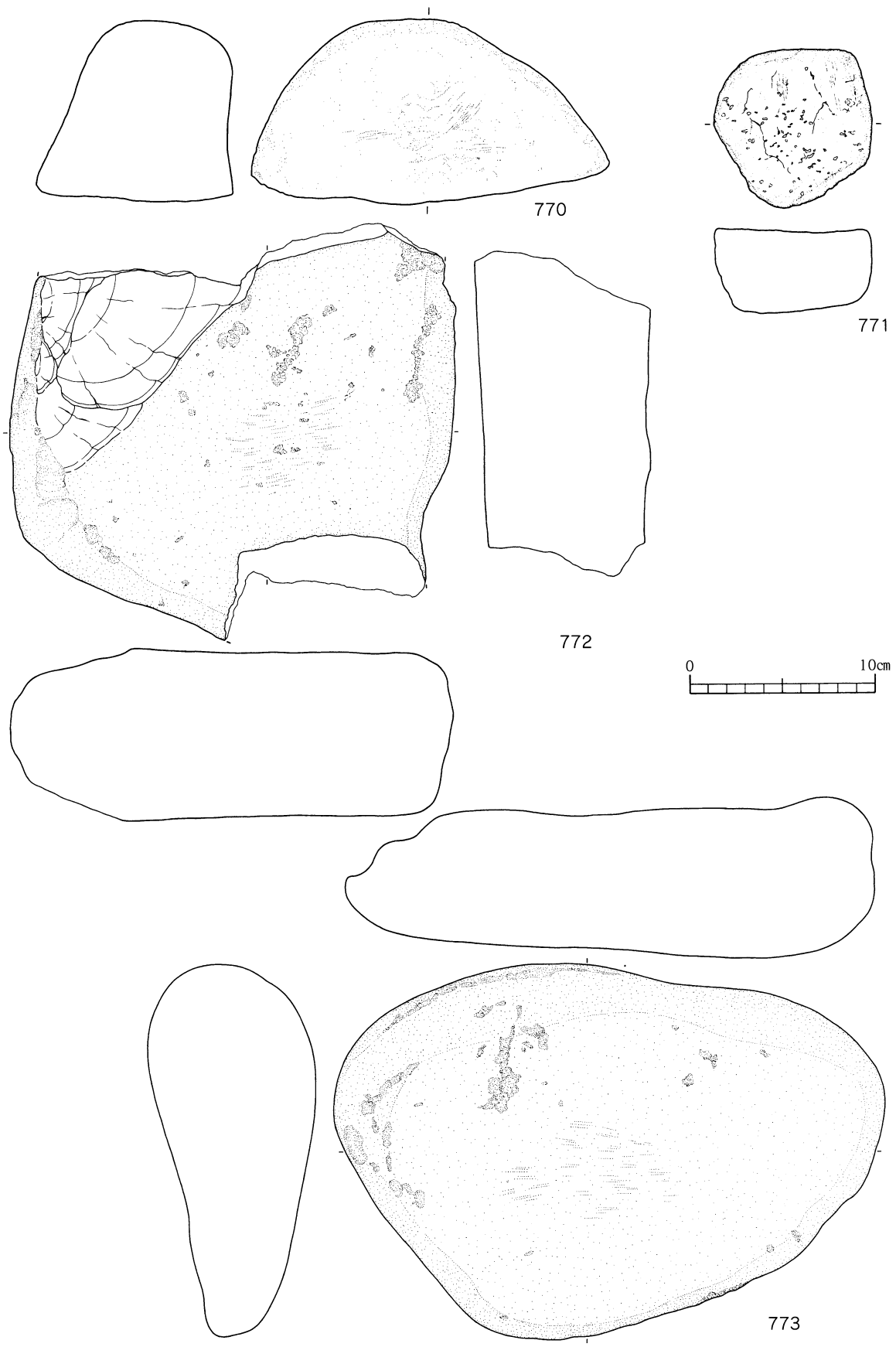
**杭列1 (第99図)**

出土した杭3本を全て図化した。

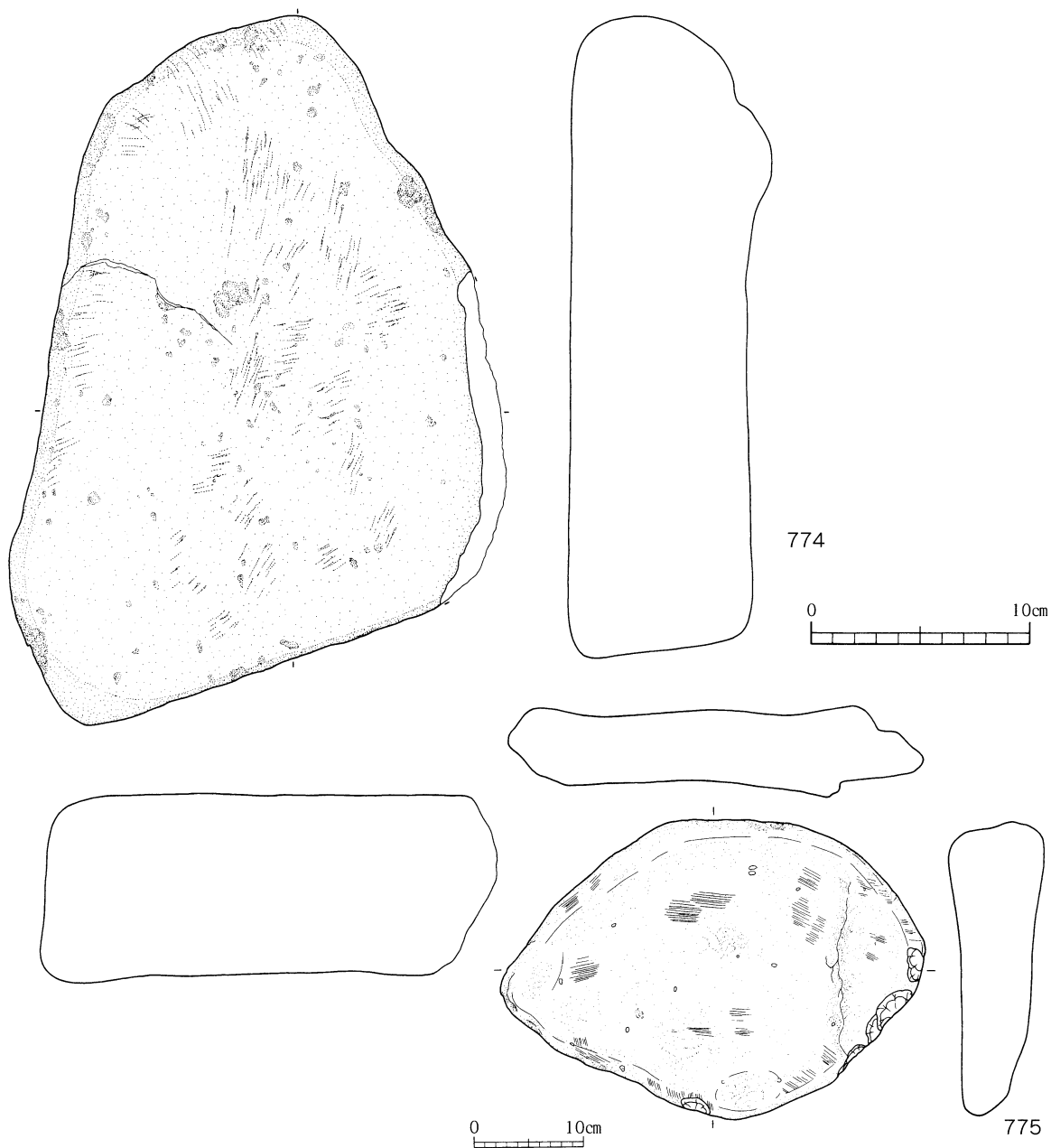
776はみかん割状の割杭で先端は多方面から加工されている。右側面には7.5cm×6c



第96図 自然流路1出土石器(6)



第97図 自然流路1出土石器(7)



第98図 自然流路1出土石器(8)

mの範囲に圧痕が残っている。777は厚みのある板状の柁目材を利用した角杭である。先端の加工は右側面からのみ施されている。778は断面が三角形を呈する割材である。先端には砂粒が付着しており、側面は丁寧に削られている。776~778は、先端の摩耗が著しく加工痕の種類については不明である。

**杭列2 (第99・100図)**

出土した杭24本を全て図化した。割杭と角杭によって構成され、杭列1・4に比べ小型の杭が多い。腐食が進んでいるためにほとんどが加工痕の種類を特定できない。

779～786は板状を呈する割杭及び角杭である。779・780は樹皮に近い部分を利用した板目材を利用している。779は片側のみ先端を加工している。780は上部が欠損しているがほぼ完形品である。783～786は板状の柾目材を利用している。先端の加工は、1面のみのために杭先の尖りが鈍い。784の先端は側面のみから加工されている。785は先端に加工が施されず分割材をそのまま杭としている。先端部は折れ曲がり右側面下部には、樹皮が残る。786は長さ21.6 cmの断面三角形を呈し、先端から離れるにしたがって薄くなる。

787～800はみかん割り材を利用した割杭である。787の先端は1面のみで加工で凸状刃こぼれ痕が残っている。787・789の先端は1面のみで加工でほとんど尖っていない。790は杭列2の中でも大型に属する。先端は1面のみで加工で摩耗のために加工単位を明確に観察することが出来ない。放射方向の2面は加工され、それ以外は無加工のために樹皮が残っている。791は先端に加工が施されていない。全体的に加工が粗雑で一部自然面が残る。794は欠損した杭の一部である可能性がある。796は右側面上部に長さ3 cm、幅2 mm程の工具痕が残っている。先端は潰れている。797の先端部は加工が施されていない。799の先端は摩耗し、左側面に樹皮が残る。800の先端はつぶれて砂粒が付着している。

801は芯持材を半裁し、杭としている。802は断面が方形状を呈する割杭である。先端は無加工で潰れている。

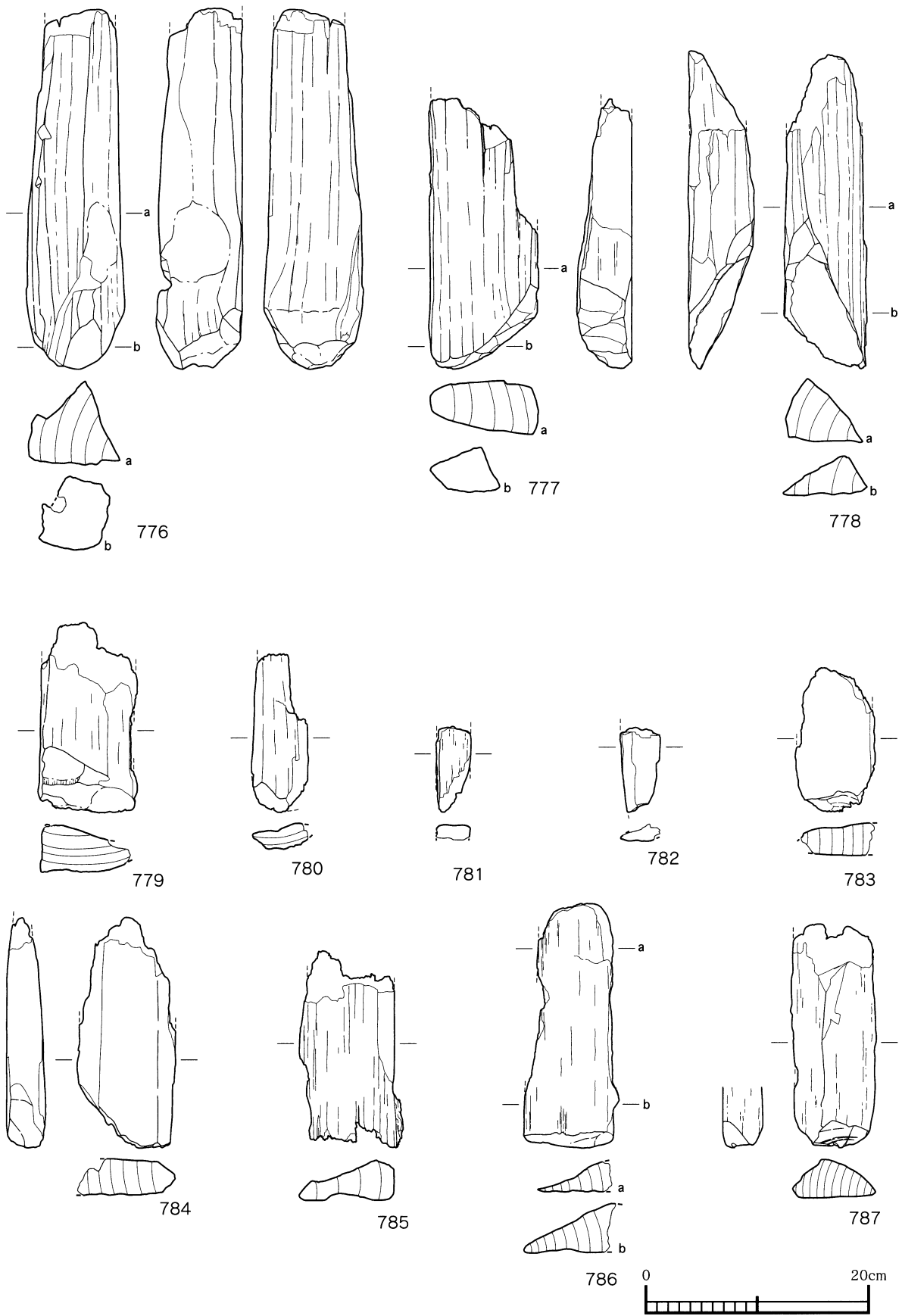
### 杭列3 (第101・102図)

出土した杭28点中、27点を図化した。杭列3は小型の角材と丸杭によって構成されている。

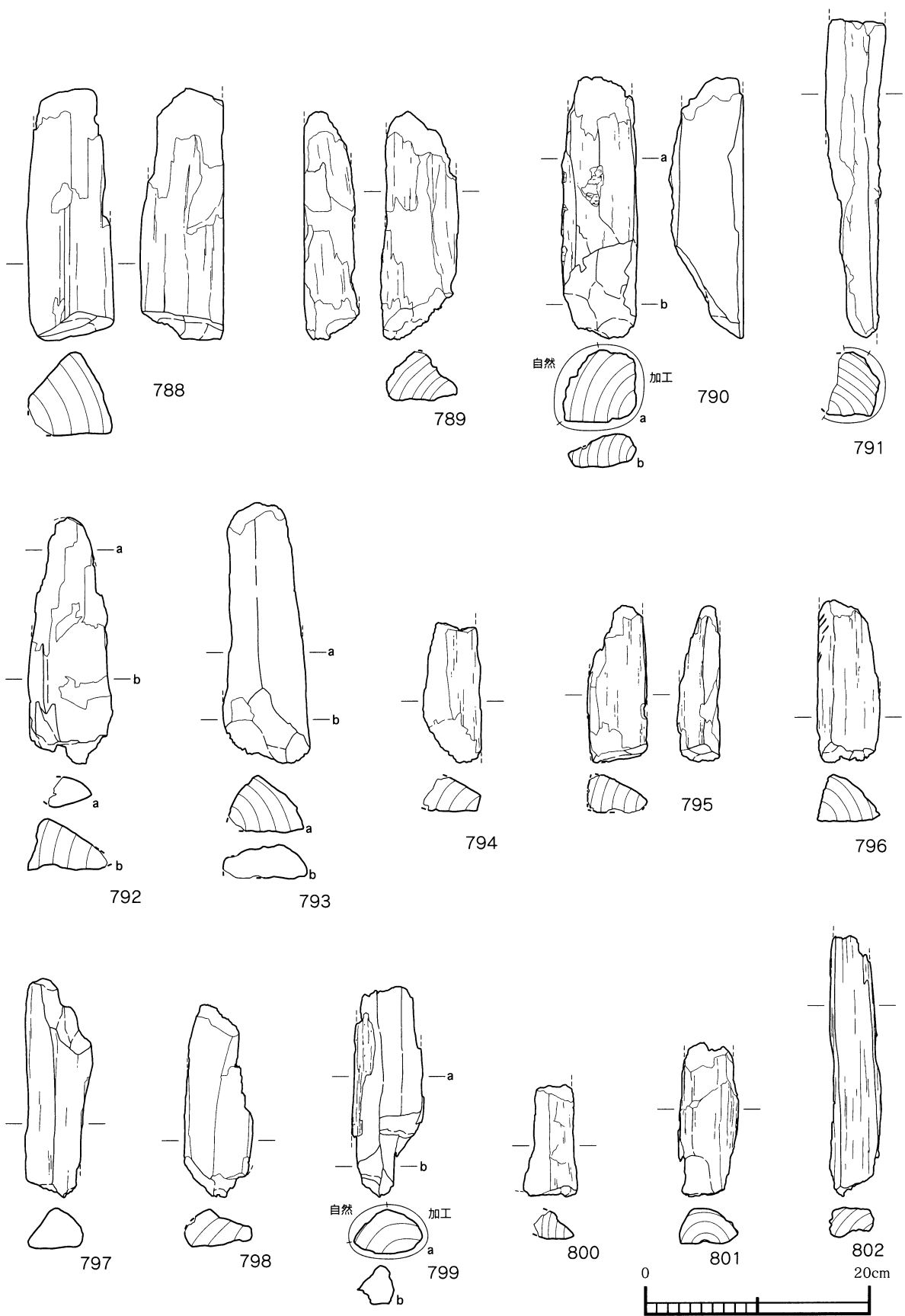
803～808は板状に加工された杭である。803は板目材を使用し、先端に加工は施されていない。804～808は柾目材を使用している。804は上端を一部欠損しているがほぼ完形に近い。杭の上部は側面が三角形を呈している。先端は側面一面のみの加工で、刃線痕が木端に覆われていることから加工の種類はA種刃線痕と考えられる。加工部には凸状刃こぼれ痕が残っている。806は厚さが1.8 cmと薄く押圧による浅い凹みが左側面付近に残っている。先端は潰れ、折れ曲がっている。

809～815は芯持材を利用した丸杭である。加工の種類は809～813がA種刃線痕、814はB種刃線痕の可能性がある。809の先端は一面の加工で、加工部の上部には工具痕が残る、先端は潰れている。813の先端は3面に加工され、凸状刃こぼれ痕がみられる。814の先端は一面のみ加工されている。加工部は摩耗しているために細かな区画稜線は残っていないが、加工痕幅が1.5 cmと狭く断面形が湾曲しない点や、刃線痕が木端に覆われずに段差となって残っていることからB種刃線痕の可能性が高いと考えられる。

816～829は断面が三角形に近いみかん割り状の割杭及び断面方形の角杭である。腐食が進んでいるために加工痕の残りは悪い。816は先端を2面に加工している。先端は潰れており加工の種類は不明。818・819は欠損した杭の一部と思われる。820の先端は無加工で、潰れて折れ曲がっている。821は長さ45.3 cm、幅6.9 cmの割杭で、杭列3の中



第99图 杭列 2 (1)



第100图 杭列2 (2)

では大型の部類に属する。先端は多方面から加工されているが摩滅のために加工痕の種類は不明。822は長さ39.6 cm、幅4.1 cmの断面方形を呈する角杭である。右側面付近には削り痕が残り、先端は右半分が欠損している。823は幅18.7 cm、厚さ9.4 cmと厚みのある角杭である。断面方形に加工された杭の上部に加工痕がみられ、樹皮が残っている。先端は磨耗している。824は割杭で中央部から上部にかけて幅4 cm、長さ6 cmの圧痕が残っている。827は断面が方形をする角杭である。先端は欠損しており、杭の中央部には圧痕が残る。丁寧に成形されていることから建築部材を転用した可能性がある。

#### 杭列4 (第103・104図)

32点中27点を図化した。丸杭、割杭、角杭によって構成され、杭列の中で最も出土数が多く大型の杭を含んでいる。また、杭ではないものの板状の木製品も含まれており本来は杭と組み合わさって遺構を構成していた部材の可能性がある。

830～832は板状に加工された杭である。830・831は樹皮付近を利用した板目材に近い材を利用した杭である。830の先端は片側のみから加工され、尖りは鈍い。831は先端に加工が施されていない。832は桁目材を利用した杭で、先端が潰れている。

833～836は芯持材の先端を加工した丸杭である。加工痕の種類は833～835がA種刃線痕で836がB種刃線痕の可能性がある。833は先端を2面に加工し、加工部には凸状刃こぼれ痕が残る。834の先端は2面から加工され杭全体を樹皮が覆う。836は先端を2面に加工している。刃線痕が木端に覆われず、加工単位の断面形も湾曲していないことから、B種刃線痕の可能性がある。加工部に細かな工具痕が残る。

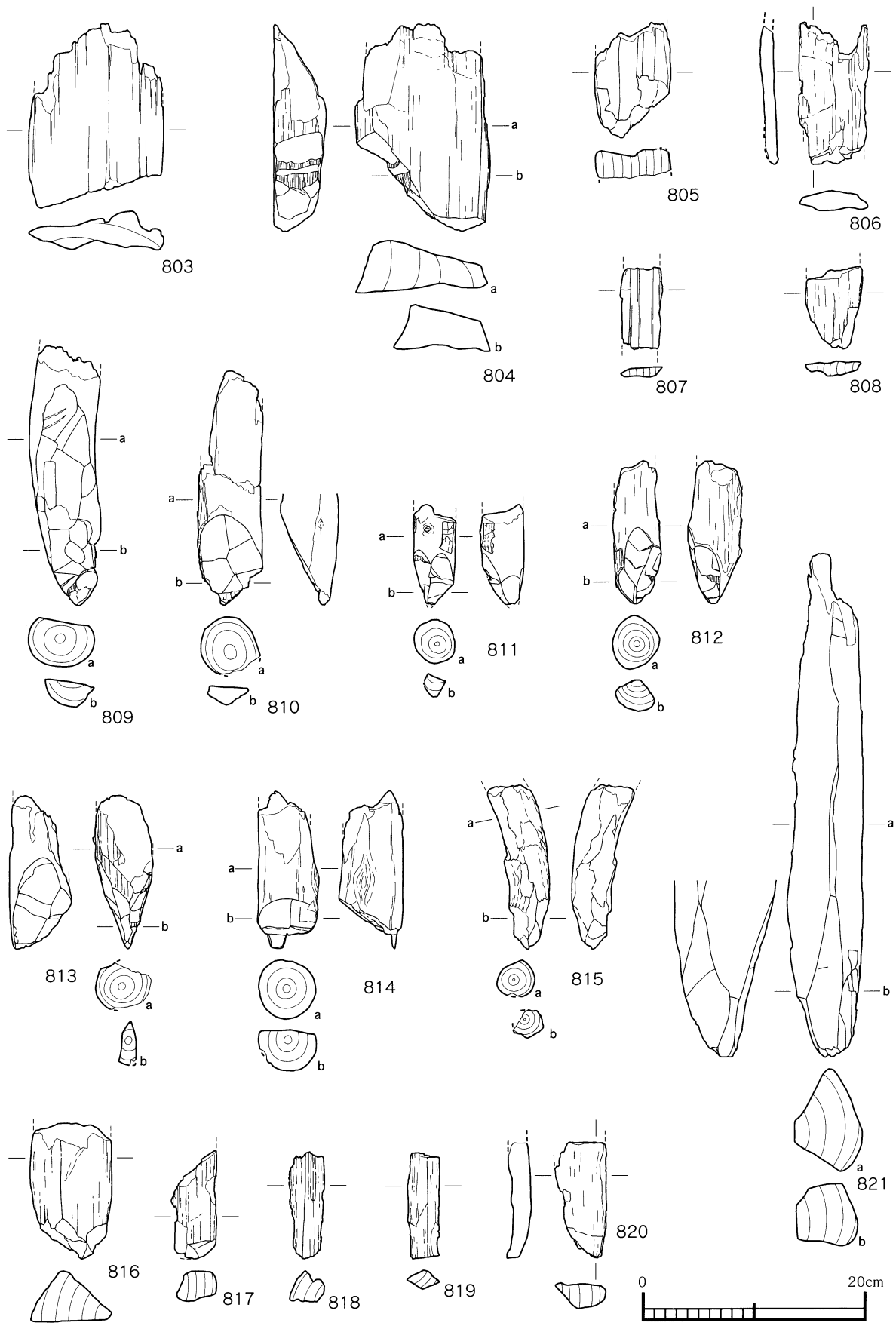
837～852までは、割杭及び角杭である。837は断面形が三角形状を呈する大型の割杭である。先端部の加工は1面で幅2.2 cmの刃線痕が多数重複している。磨耗のために加工単位は明らかでないが、刃線痕の幅が狭く木端に覆われていないことから加工の種類はB種刃線痕であると思われる。838は杭先が多方面から加工され、先端は潰れている。加工単位が複雑に重複し、加工の特徴が837と同様であるためにB種刃線痕であると考えられる。839は杭全体に樹皮を残している。加工の種類はA種刃線痕である。841の先端は平坦で、製材段階の切断面をそのまま杭先に利用したと思われる。842はみかん割り状の割杭である。杭は先端部から離れるに従って細くなり下部には圧痕が残されている。843・844の先端は1面のみ加工である。845は断面方向形の角杭で、先端は無加工である。849・850も断面が方形を呈する角杭である。849の先端は、4面から短く加工している。850は先端に加工が施されていない。851・852は断面が三角形状を呈するみかん割り状の割杭で、共に先端は無加工である。853・854は欠損した杭の一部と思われる。腐食が著しい。855・856は断面形が扇状で板状を呈する。厚みがなく先端部に加工が施されていないために杭ではないと思われる。共に、上端近く程厚みがなくなる。残存長は855が38 cm、856が59.3 cmである。

#### 杭列5 (第105図)

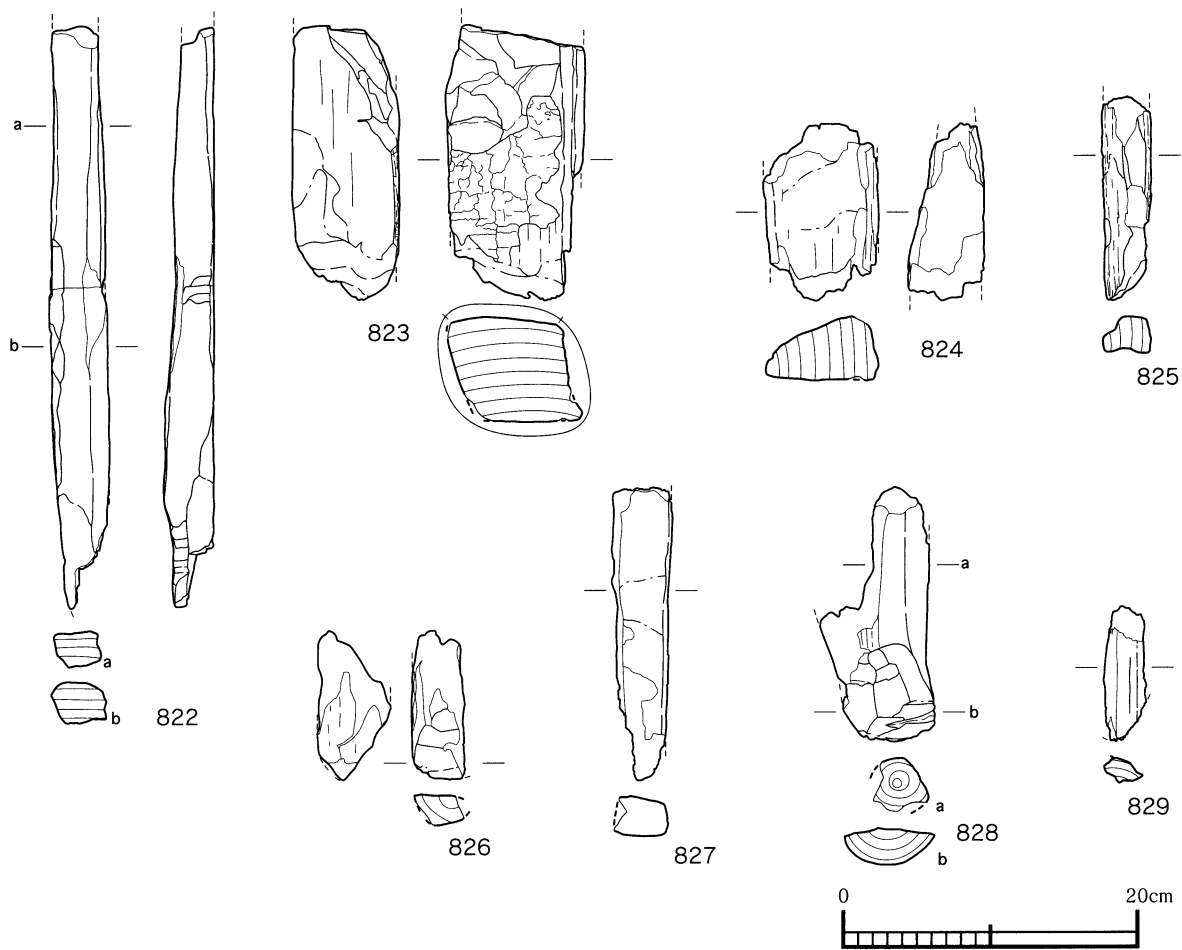
出土した6点中全てを図化した。

857はみかん割り状の割杭で、先端は3面に加工されている。無加工の部分には樹皮が残





第101图 杭列3 (1)



第102図 杭列3 (2)

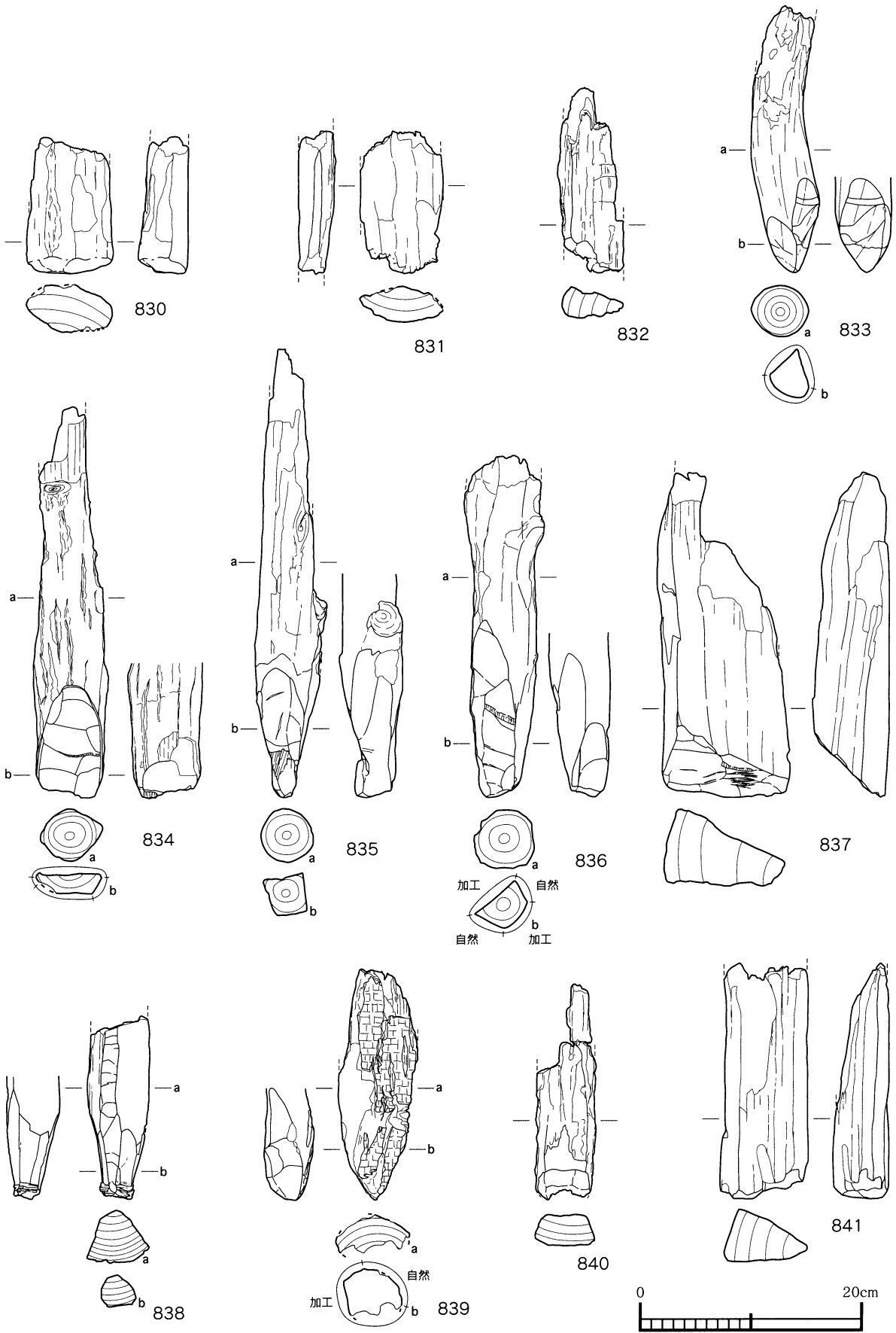
る。858～859は先端の加工がほとんど施されていない。862は全長52 cm、幅7 cm、厚さ1.4 cmの板目板である。欠損しているため、杭として使用されたかは不明である。丁寧に成形されているため、建築部材の転用品と思われる。

#### 自然流路1出土木製品

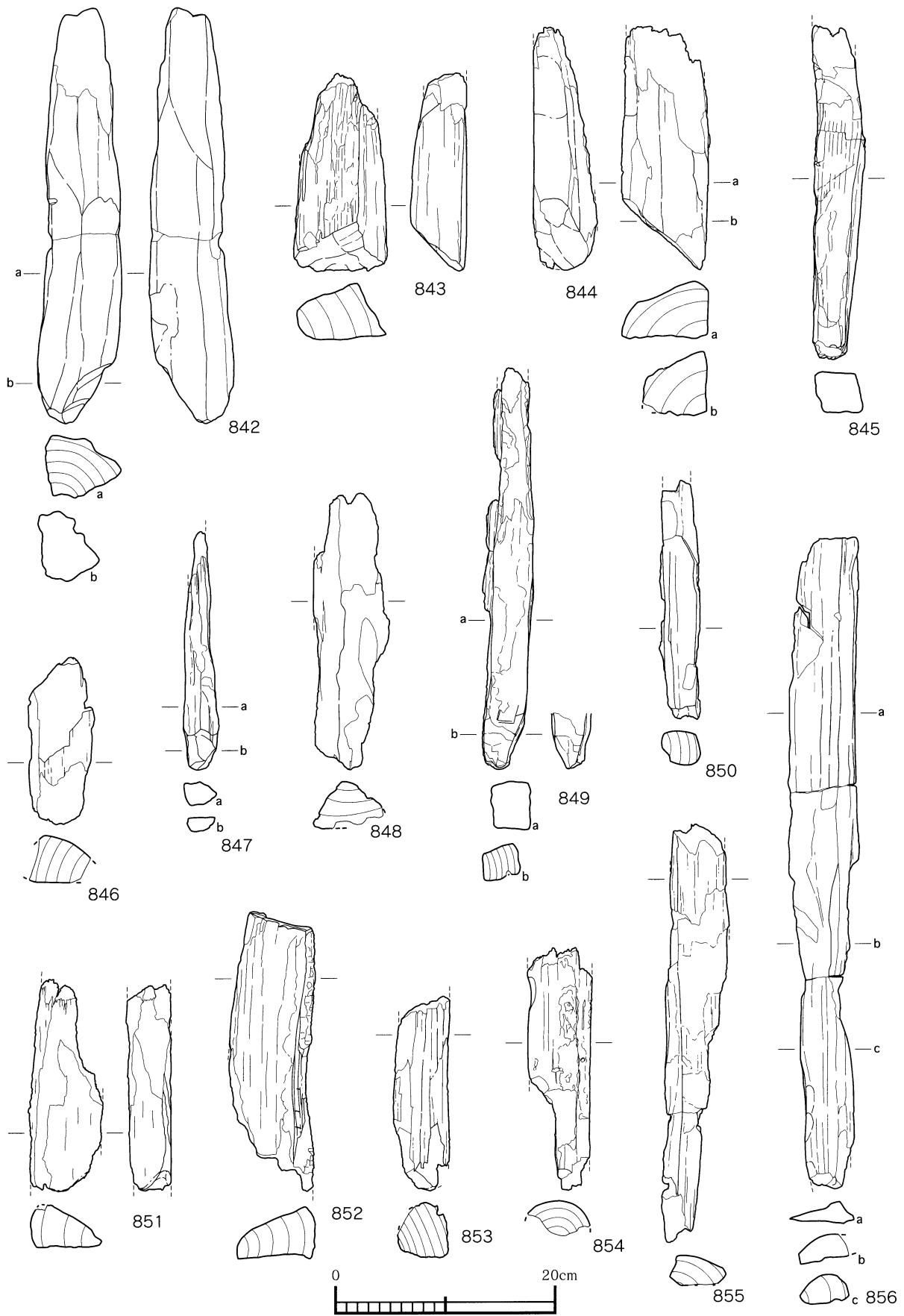
総数233点の木製品が出土した。木製品の大半は杭と製材片である。その中から用途が特定できるものと建築材の可能性のあるもの42点を図化した。

#### 鍬 (第106図 863・865～867)

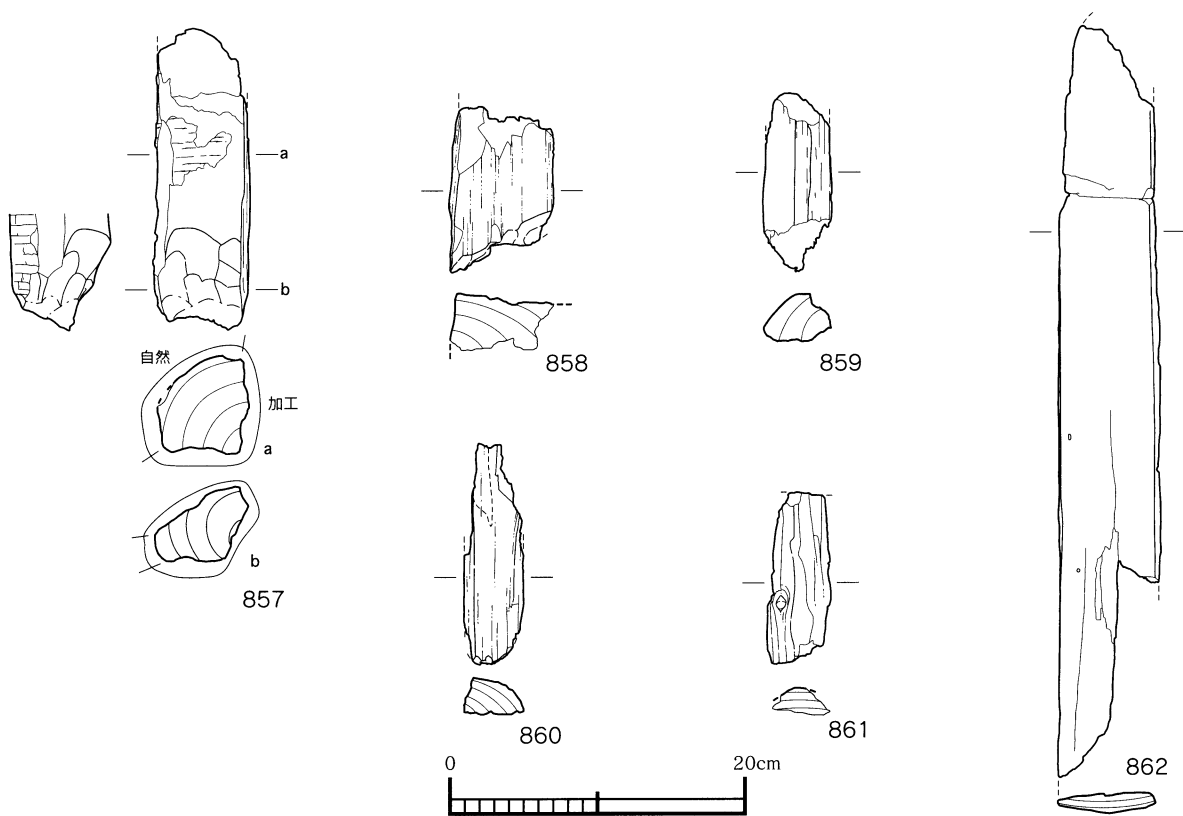
863は曲柄又鍬で、刃部の右側を欠損している。三又鍬で本来は刃部が三齒となるものである。全長は51.4 cmで軸部長5.5 cm、刃部長45.9 cmである。軸部は短く断面形が“かまぼこ”形となり、軸頭は上端から5 mm程削り残すことによって作られている。軸部と刃部の境は平面形、厚み共に明瞭に段を持ち、刃部の両側はほぼ平行して長く伸びると考えられる。刃部は断面形がかまぼこ形に近く、先端は使用による磨耗のために丸みを帯びている。注目されるのは、鍬身の中心に沿って軸部と刃部の2か所に浅い溝が掘られている。前者は



第103图 杭列4 (1)



第104图 杭列4 (2)



第105図 杭列5

長さ6.5cm、幅5cm、深さ3mmの断面V字状を呈し、後者は長さ8.1cm、幅6mm、深さ2mm程である。刃部の中でも軸部に近い部分には長さ5.7cm、幅1.3cm程の加工痕が残っている。865は曲鋤の刃先部分である。先端が磨耗しており、863と同一のものである可能性がある。866、867は又鋤の刃部である。断面形は片面が平坦で、もう一方の面が凸レンズ状に中央部が膨らみ、外側の縁辺部に向かって薄くなる。共に腐食が著しく加工痕は観察することができない。

#### 組み合わせ鋤（第106図 864）

864は組み合わせ鋤と呼ばれる木製品の身である。半欠した身は先端に向かって緩やかに広がり、上部には縦5.5cm、横1.8cm以上の孔が開けられている。刃部先端の縁辺部には、長さ11cm、幅1cmに渡って削られており鉄製の方形板刃先を装着した痕跡と思われる。断面形は両面とも平坦で縁辺部が薄くなり、刃部の先端は摩耗している。身に一对の孔を開けるものは鹿児島市鹿児島大学構内遺跡、都城市坂元A遺跡、川内市京田遺跡で出土しており、本製品も同様の形態であると思われる。

#### 鋤の柄（第106図 868）

868は枝分かれ部分を利用してつくられた膝柄である。幹を鋤身装着のための鋤台、枝を握りに仕上げている。残存している鋤台の装着面の大きさは長さ10.2cm、幅3.6cm、握りの直径は2.7cmである。

### 農具未製品 (第107~109図)

869は曲柄又鍬の未製品と思われる。軸部と刃部は別々の地点から出土しているが、同一の可能性はある。軸部は残存長19.6cm、刃部の残存長は75.6cmである。軸部は上端近くで両側に小さく張り出し、刃部に向かって緩やかに広がる。欠損、腐食が著しい。刃部は左端の刃先が欠損している。軸部との境から緩やかに外側に広がり、刃部の両側は平行して長く伸びると考えられる。ホーク状になる刃部の長さは不揃いで、先端は粗く切断されている。断面形は両面とも平坦で不定形であることや、加工痕が863に比べ粗雑であることも製作途中であるためと思われる。870~873は羽子板状に加工された農具未製品である。全て柾目板である。870・871は板材の上部を「ハ」の字状に加工している。断面形は片面が平坦でもう一方の面が凸レンズ状に丸みを帯びる。側面は870の右側面を除き垂直に切断されている。幅2.4cm、長さ5.4cm程の加工痕が残っている。870は残存長83cm、最大幅17.4cm、厚さ3cmで871は残存長84.6cm、最大幅22.8cm、厚さ3.7cmである。872は右側面が上端から外側へ開き、そこから両側面が平行して下端へと伸びていく。断面形は、右側面側が薄くなるために三角形状を呈し、左側面が平坦となる。腐食のために加工痕は不明である。残存長67.4cm、最大幅23.4cm、厚さ4.8cmである。873は接合しないが、隣接して出土したことから本来同一のものと思われる。上部は両側から加工され幅が狭くなっている。断面形は両面が凸レンズ状に膨らみ、両側面に向かって薄くなる。欠損や腐食が著しい。上部の破片の残存長は30.2cm、最大幅15.2cm、厚さ3.5cmである。下部の破片は残存長13.8cm、最大幅12.6cm、厚さ3.8cmである。

### 横鍬 (第110図 874)

874は横鍬である。刃部は平刃となり、柄穴より上端は欠損している。右側面の加工痕は、2次加工の可能性はある。柄穴の最大直径は3.6cmで、その周囲はわずかに隆起している。柄は刃部に対して直角に差し込まれたのではなく、55°程中心側に傾いて差し込まれたと思われる。着柄角度は左側を後面とした鈍角の場合で113°前後である。

### 丸木弓 (第110図 875)

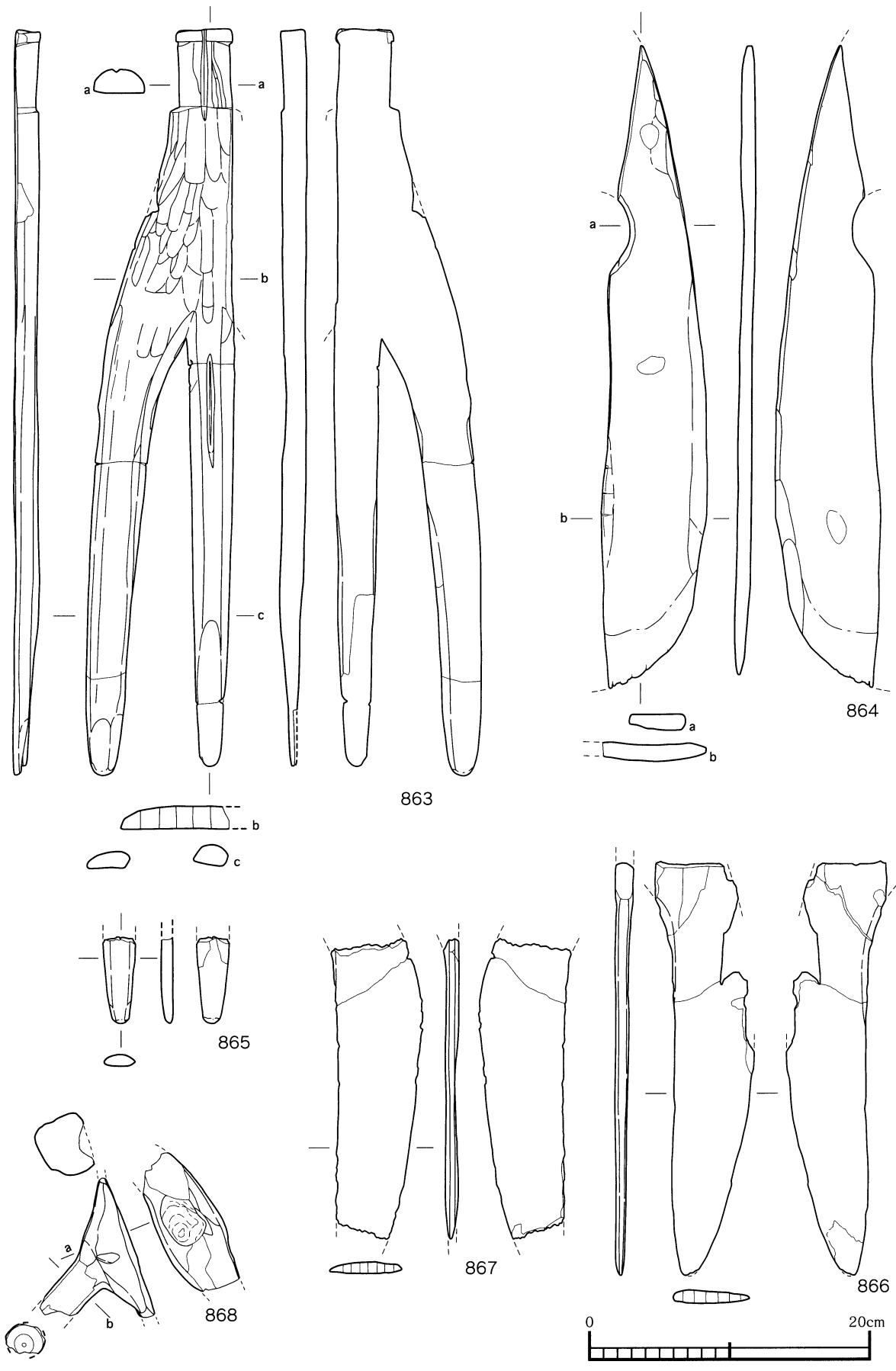
875は弓幹両端が欠損した丸木弓である。弓幹の周囲を丁寧に削った後、内彎面を幅1.1cm程平坦に削っている。弓幹の大部分は炭化している。残存長50.2cm、最大幅2.6cm。

### 柄 (第110図 876・877)

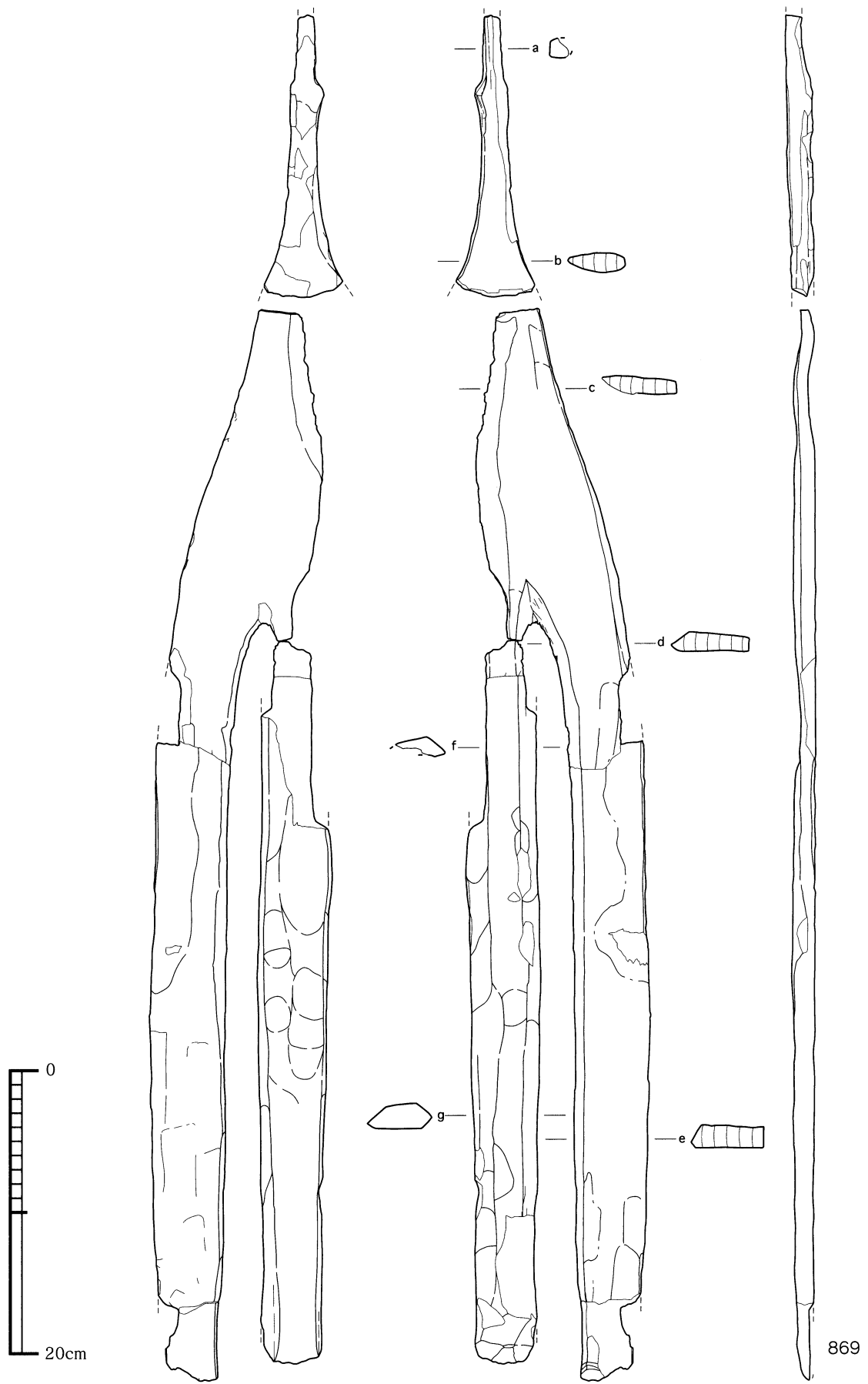
876は割杭を利用した柄である。断面形は円形で身に近い部分は幅が広くなり厚さが薄くなる。上面は丁寧に加工され、身に近い部分は炭化している。掘り棒の可能性が考えられる。877は芯持材を利用している。断面は円形で上面を丁寧に加工している。全体的に丁寧な加工は施されていない。

### 掘り棒 (第111図 878)

878は平面形が楕円形で、踏み込むための肩が発達していないことから、掘り棒の身であると思われる。厚みは1.4cmで断面形は片方が平坦に近く、もう片方が凸レンズ状に丸みを帯びる。先端は使用のため摩耗している。



第106図 自然流路1出土木製品(1)

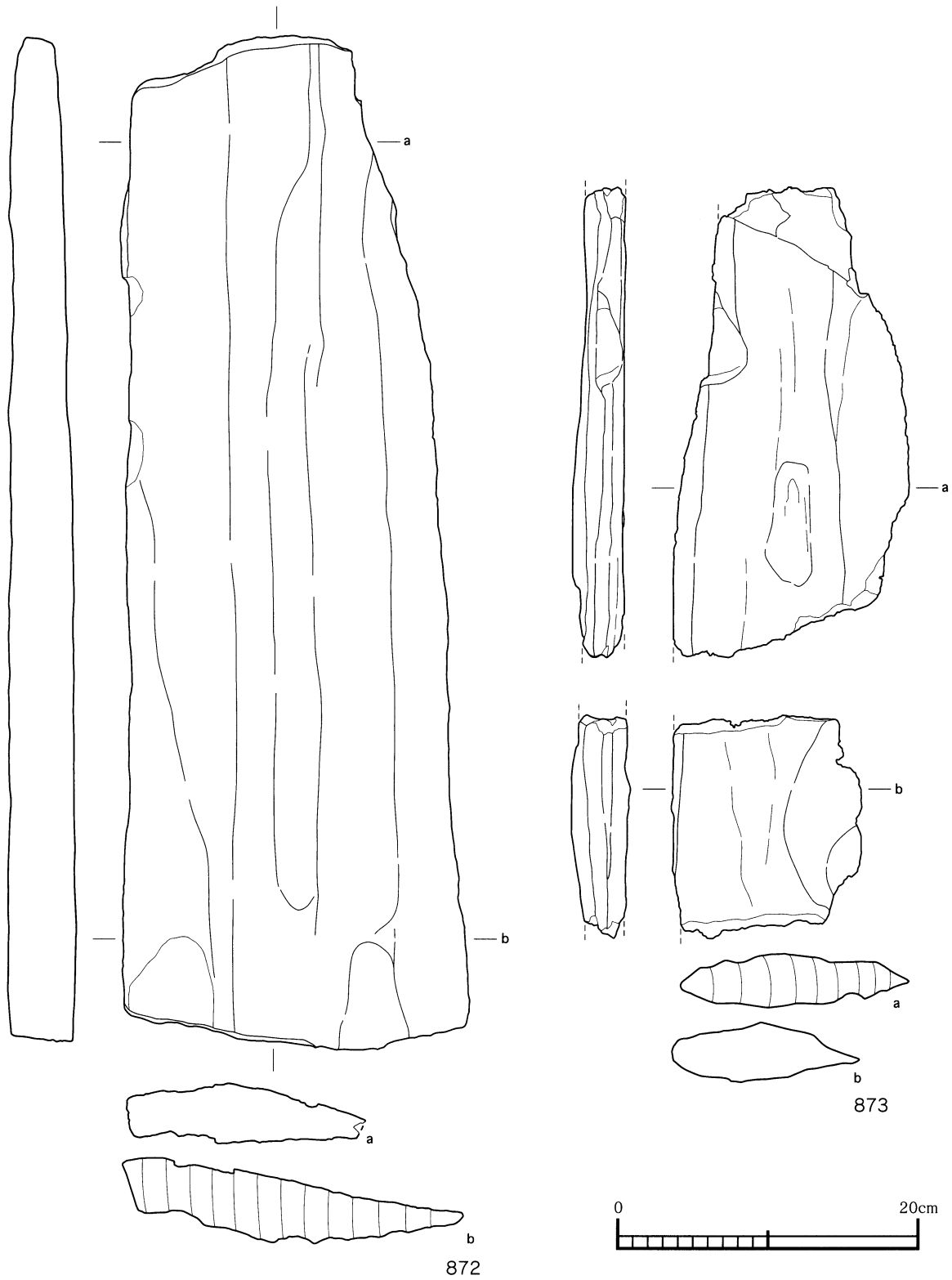


第107図 自然流路1出土木製品(2)





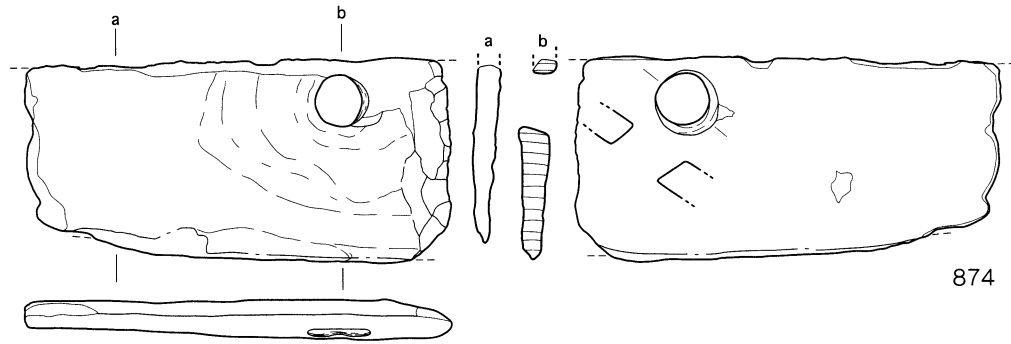
第108図 自然流路1 出土木製品 (3)



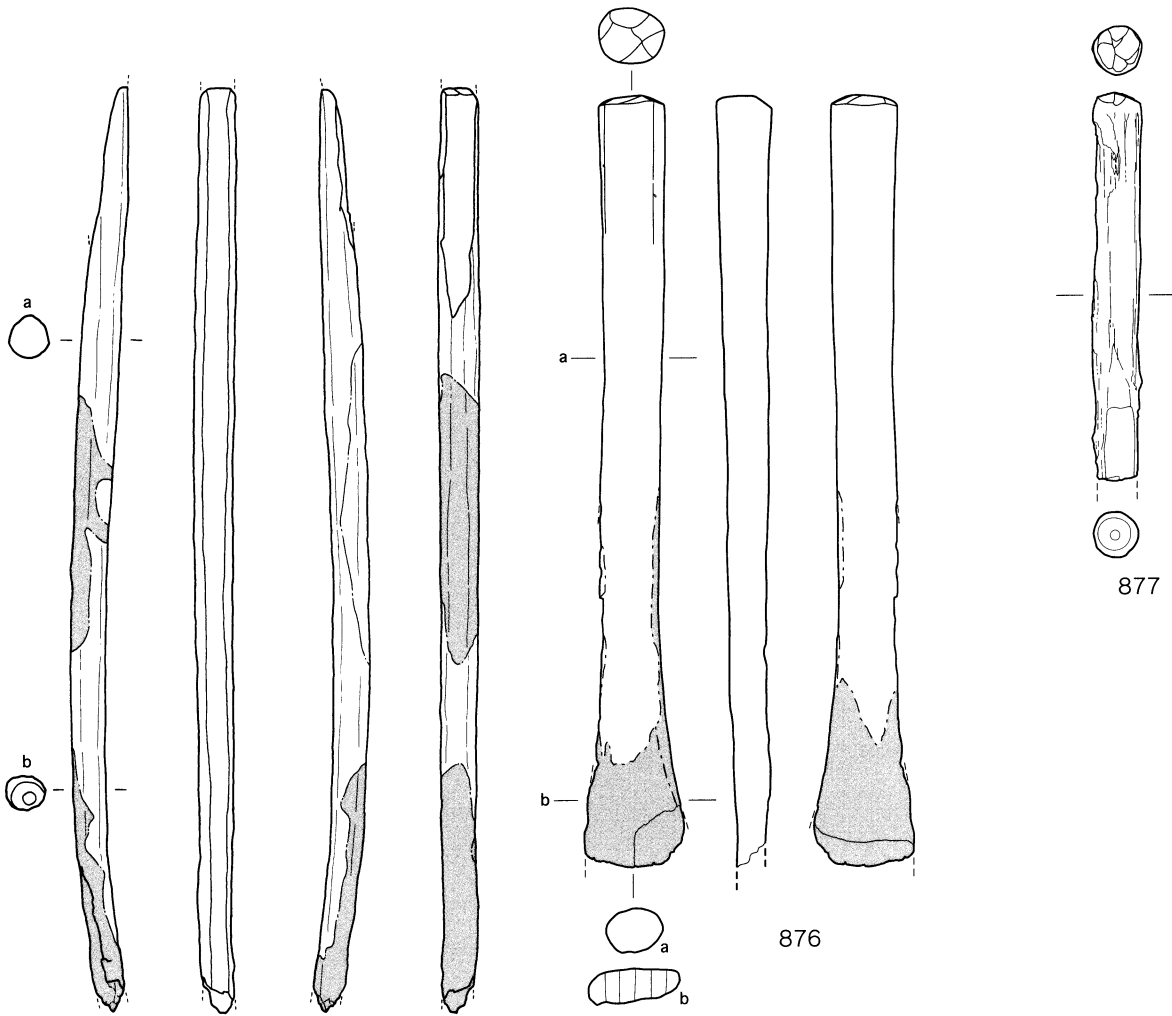
第109図 自然流路1 出土木製品（4）

**その他の木製品（第111図879～881）**

879は芯持材を半裁しているが、加工と欠損のどちらであるかは不明。平面形は上端から下端に向かって幅が広がり、上面には幅2cm程の突起がつく。880は厚さ3mmの薄い板材である。上部は折れ曲がっている。881は上下両端から中央にかけて浅く湾曲している。



874



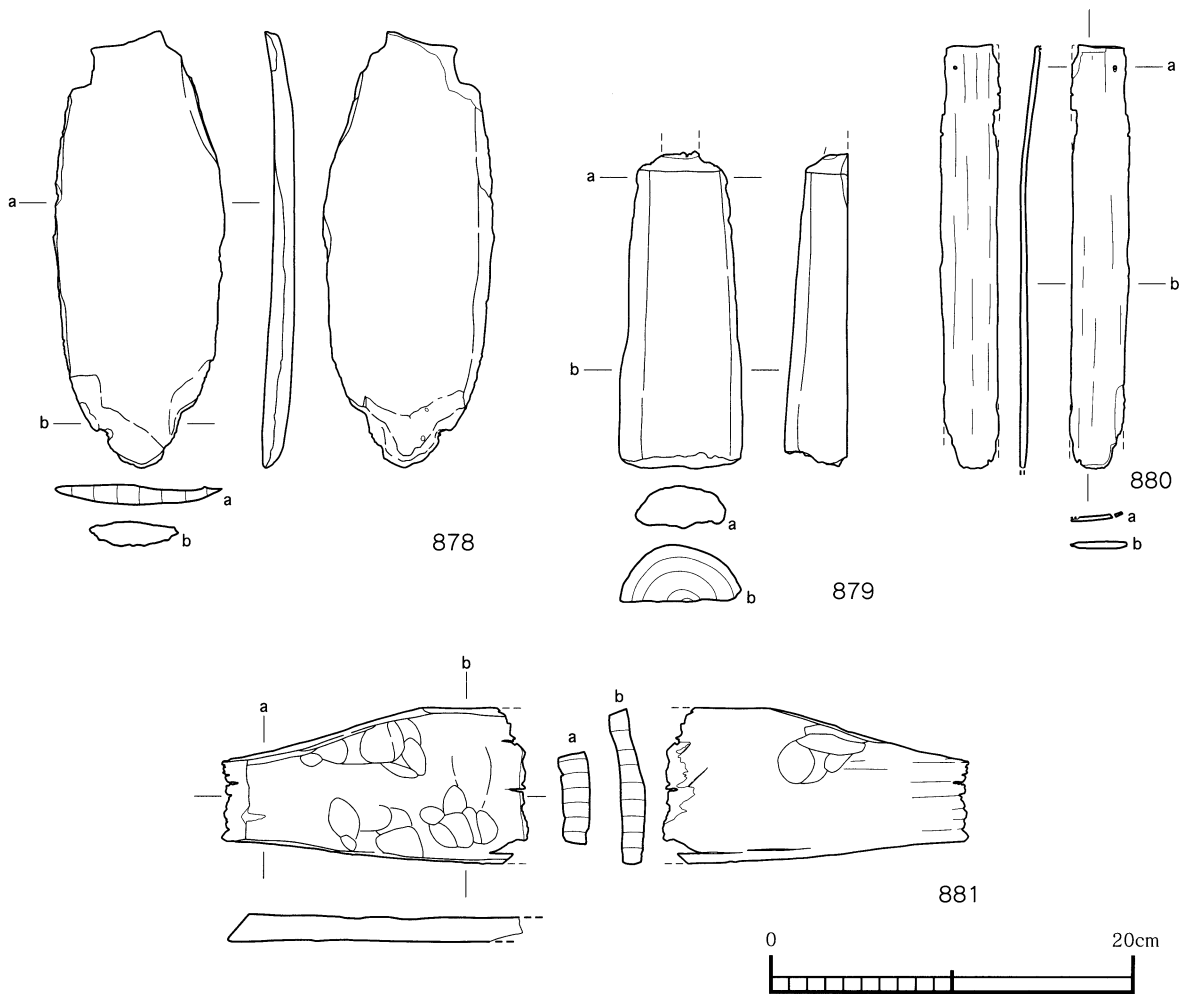
875

876

877



第110図 自然流路1出土木製品（5）



第111図 自然流路1出土木製品（6）

織機の一部である腰当ての可能性が考えられる。

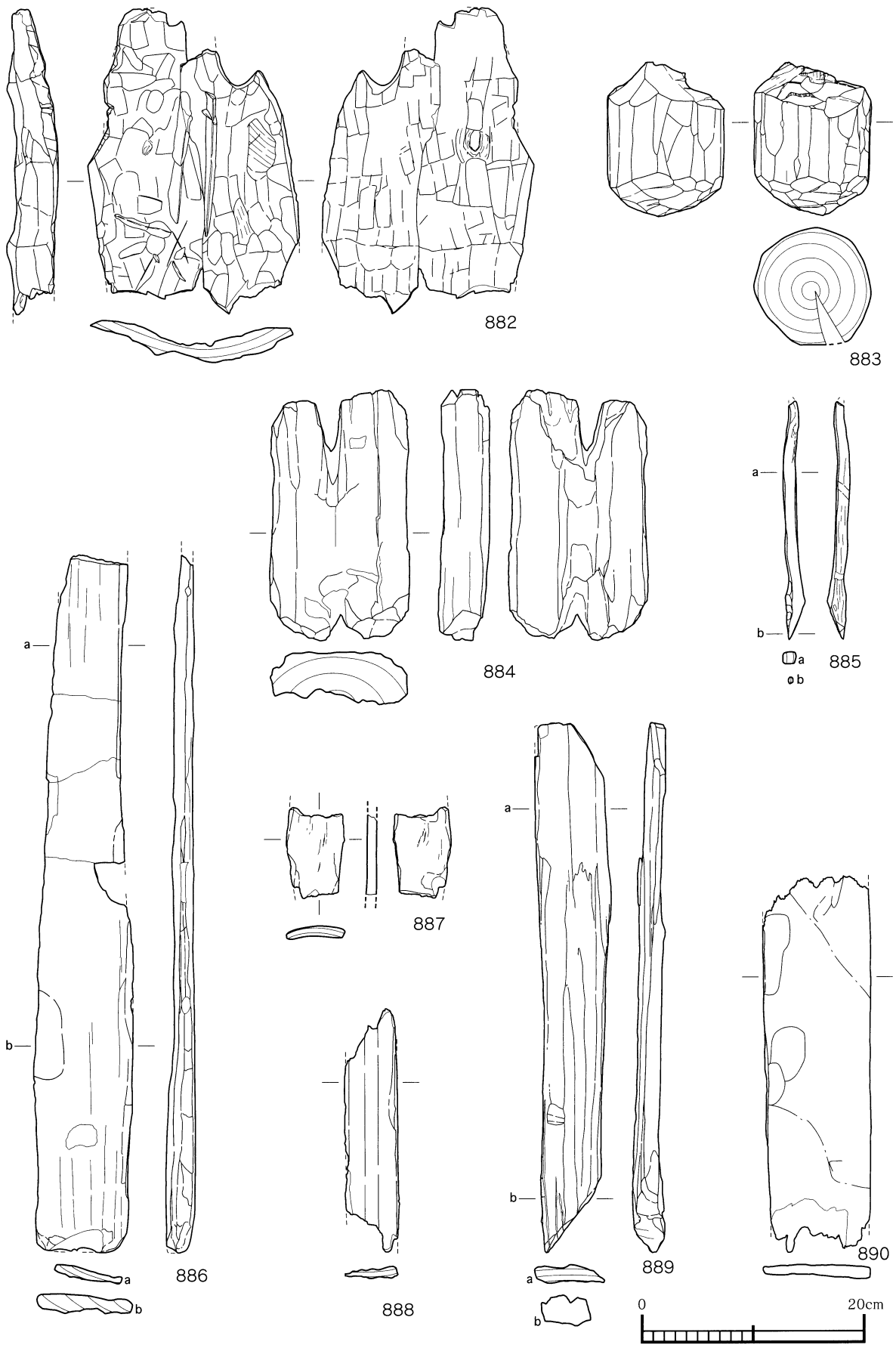
#### 不明木製品（第112図 882～885）

882は板目材を利用している。平面形は不定形で断面は浅い皿形を呈している。両面に加工痕が多く残り側面は切断されている。883は直径10.5 cmの円柱状を呈し、多方面から縦方向に加工されている。両端は切断されており、A種刃線痕が残っている。884同様木錘の可能性が考えられる。884は平面形が長方形を呈し、その両端は「V」字状の抉りが施されている。抉りの長さは上端が7.4 cm、下端が2.2 cmである。裏面は両面の抉りに対応するように浅く凹んでいる。885は棒状の先端が加工され尖っている。断面は方形で全面に丁寧な加工が施されている。

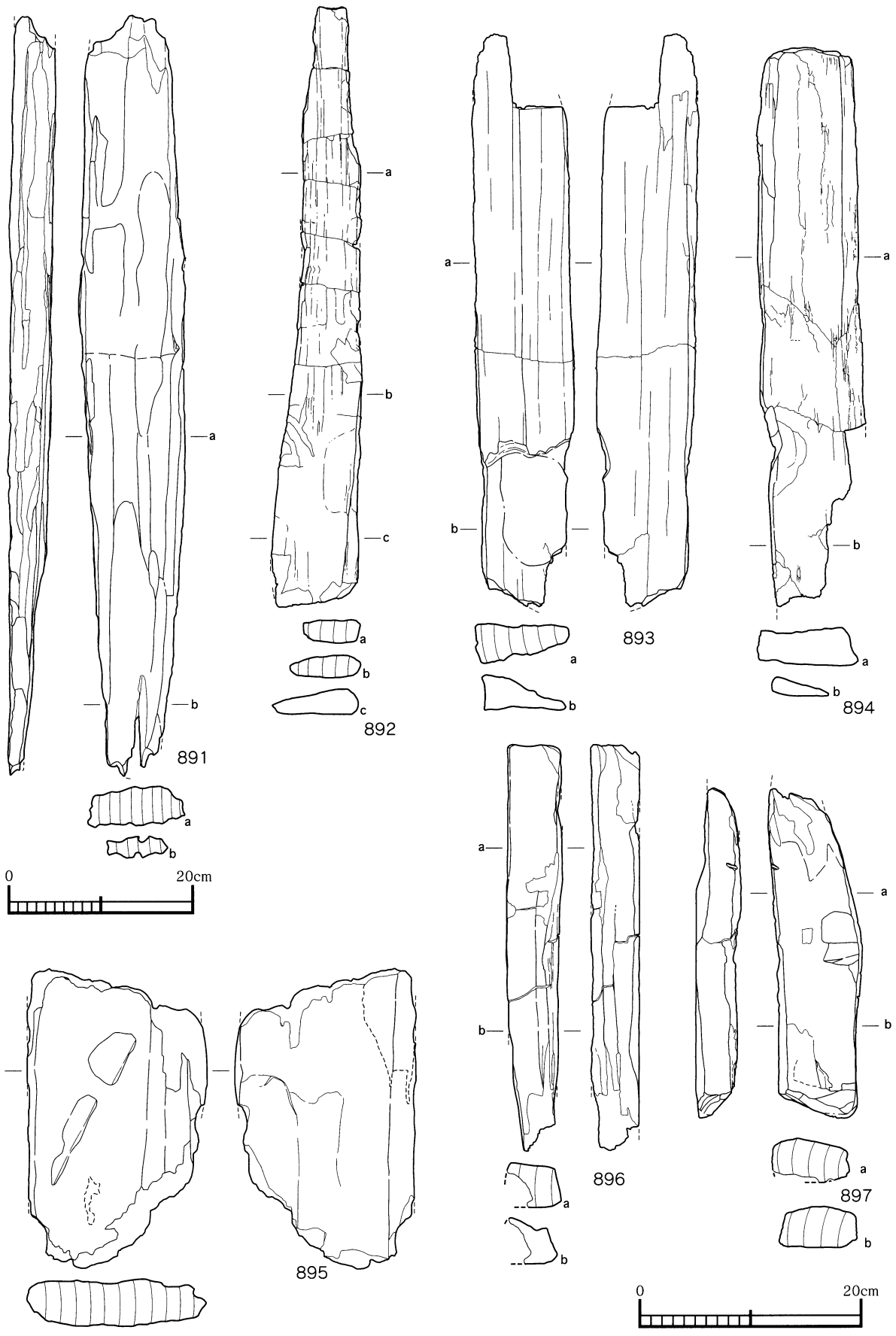
#### 建築材の可能性のある木製品

##### 板状木製品（第112・113図 886～895）

886～889は板目材である。886の先端は摩耗しており、杭として利用されている。左側面近くに圧痕がみられる。889の先端は右側面側から加工され杭として利用されている。上



第112図 自然流路1 出土木製品 (7)



第113図 自然流路1 出土木製品 (8)



第114図 自然流路1 出土木製品(9)

端にも加工痕が残る。891～895は柾目材である。全体的に丁寧に成形されていることから建築材の転用と思われる。890は板材の中央部に圧痕が残っている。厚さが均一で全体的に丁寧な加工が施されている。893は上端から13cmの部分が加工によって幅が狭く、厚さも薄くなり、その部分に圧痕がみられる。894は右側面下部に加工痕が残っている。895は厚み均一で丁寧に成形されている。表面は2か所炭化している部分があり、板材の中央付近には加工痕も残っている。腐食が著しい。

### 角材 (第113・114図896～900・902・903)

断面方形の角材である。896の上端は垂直に切断され下部は欠損している。898は芯持材を方形に加工している。表面には工具痕が多く残る。899は割材を利用した大型の角材である。最大長51.2cm、最大幅11.9cm、厚さ7.7cm。900は先端を右側面から加工して杭

第18表 自然流路1出土土器観察表 ( )は復元径

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
80	614	弥生土器	甕	I	Ia	内:灰黄褐色10YR6/2 外:胴部～口縁 10YR1.7/1 底部:にぶい黄褐色 10YR5/3	口縁:横ナデ 上胴部:ハケ目 下胴部:削り後ハケ目 底部:ナデ	口縁:ナデ 胴部:ハケ後丁寧な ナデ消し	33	8.6	35.8	石英,角閃石を多く含む	良好	
80	615	弥生土器	甕	I	Ia	内:にぶい黄褐色 10YR7/2 外:灰黄色2.5Y7/2	口縁:ナデ 胴部:ハケ目の後ナデ	口縁:横ナデ 胴部:ナデ	(25.2)	-	-	角閃石	良好	煤付着
80	616	弥生土器	甕	I	Ia	内:にぶい黄褐色 10YR7/3 外:灰褐色10YR6/2	口縁:横ナデ 胴部:ナデ	口縁:横ナデ 胴部:ハケ目の後ナデ 消し	(24.6)	-	-	角閃石,石英(1mm大)を多く含む	良好	
80	617	弥生土器	甕	I	Ia	内:灰色5Y6/ 外:にぶい黄褐色10Y7/2 1	口縁:ナデ 胴部:ハケ目	口縁:ハケ目 胴部:ハケ後ナデ消し	(23)	-	-	石英,角閃石所々に含む	良好	煤付着
80	618	弥生土器	甕	I	Ia	内外:浅黄褐色10YR8/4	口縁:ハケ目 胴部:ハケ目	口縁:ハケ目 胴部:ナデ	(27.6)	-	-	石英(1mm2mm大)を多く含む	良好	
80	619	弥生土器	甕	I	Ia	内外:にぶい黄褐色 10YR7/4	口縁:ナデ 胴部:ハケ目	ナデ	-	-	-	角閃石,石英を少量含む精製された胎土	良好	
80	620	弥生土器	甕	I	Ia	内:褐灰色10YR6/1 外:黒褐色5YR2/1	口縁:横ナデ 胴部:ナデ	口縁:横ナデ 胴部:ハケ目	-	-	-	石英を多く含む	良好	
81	621	弥生土器	甕	I	Ib	内:にぶい黄褐色 10YR6/3 外:黒褐色10YR3/1	ハケ目	口縁:ハケ目 胴部:ハケ目後ナデ	22.1	-	-	1mm大の石英,角閃石を含む 2mm大の小石を微量に含む	良好	
81	622	弥生土器	甕	I	Ib	内:にぶい黄褐色 10YR7/4 外:灰白色10YR8/2	口縁:ハケ目後ナデ 胴部:ハケ目	口縁上部:ナデ 口縁下部:ハケ目 胴部:ハケ目後ナデ	(30.6)	-	-	2～3mm大の石英,長石,角閃石が多く含まれている	良好	
81	623	弥生土器	甕	I	Ib	内:にぶい黄褐色 10YR7/2 外口縁胴部:黒褐色 2.5Y3/1 頸部:にぶい黄褐色 10YR6/3	口縁:ハケ目 胴部:ハケ目後ナデ	口縁:ハケ目 胴部:ナデハケ目	(25.8)	-	-	角閃石,石英を少々含む	良好	煤付着
81	624	弥生土器	甕	I	Ib	内:にぶい黄褐色10YR7/2 外:明黄褐色10YR6/6	口縁:ナデハケ目 胴部:ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	(30.2)	-	-	石英,雲母,角閃石を含む	良好	煤付着
81	625	弥生土器	甕	I	Ib	内口縁:灰黄褐色 10YR5/2 内胴部:にぶい黄褐色 10YR7/3 外:灰黄褐色10YR6/2	口縁:ナデ 胴部:ハケ目後ナデ	口縁:横ナデ 胴部:ハケ目後ナデ	(26.8)	-	-	角閃石,長石を含む	良好	煤付着
81	626	弥生土器	甕	I	Ib	内:にぶい黄褐色 10YR6/3 外:にぶい黄褐色 10YR7/3	口縁:ナデ 胴部:ハケ目後ナデ	口縁:ナデ 胴部:削り後ナデ	(22.5)	-	-	1～2mm大の長石,角閃石を含む 1mm大の小石を微量に含む	良好	
81	627	弥生土器	甕	I	Ib	内:暗灰黄色2.5Y5/2 外:灰黄色2.5Y7/2	ハケ目後ナデ	口縁:ナデ 胴部:ハケ目ナデ	(20.6)	-	-	角閃石,石英を少量含む	良好	
82	628	弥生土器	甕	I	Ib	内:にぶい黄褐色 10YR7/3 外:にぶい黄褐色 10YR6/3	口縁:ナデ 胴部:ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	(16.6)	-	-	角閃石,1～2mm大の長石を少量含む	良好	



挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
82	629	弥生 土器	甕	I	I b	内:暗灰黄色2.5YR5/2 外:灰黄色2.5Y6/2	口縁:ナデ 胴部:ハケ目後ナ デ	口縁:ナデ 胴部:ハケ目後ナ デ	(25.6)	-	-	角閃石, 雲母を含む	良好	
82	630	弥生 土器	甕	I	I b	内:灰黄色2.5Y7/2 外:にぶい黄橙色 10YR6/3	口縁:ナデ 胴部:ハケ目	口縁:ナデハケ目 胴部:ハケ目後ナ デ	(19.2)	-	-	長石, 角閃石	良好	
82	631	弥生 土器	甕	I	I b	内:にぶい黄橙色 10YR7/4 外:にぶい黄橙色 10YR6/3.5	ハケ, 目ナデ	ハケ目, ナデ	(26.8)	-	-	石英, 角閃石を少量 含む	良好	
82	632	弥生 土器	甕	I	I b	内:にぶい黄橙色 10YR7/3 外:にぶい黄橙色 10YR5/3	口縁:ハケ目 胴部:ナデハケ目 下胴部:削り	ハケ目, ナデ	17.2	-	-	石英, 角閃石を少量含む 1mm大の小石を微量に 含む	良好	
82	633	弥生 土器	甕	I	I b	内:灰白色2.5Y8/1.5 外:灰白色10YR8/2	ハケ目, ナデ	ハケ目, ナデ	(27.2)	-	-	2~3mm大の石英を 微量に含む 角閃石を含む	良好	煤付着
82	634	弥生 土器	甕	I	I b	内:にぶい黄橙色 10YR6/3 外:黄灰色2.5Y6/1	口縁:ナデ 胴部:ハケ目後ナ デ	口縁:ナデ 胴部:ハケ目	(11.6)	-	-	石英, 雲母を含む	良好	
82	635	弥生 土器	甕	I	I b	内:灰黄色2.5Y6/2 外:にぶい黄橙色 10YR6/4	ハケ目後ナデ 胴部:ハケ目	ハケ目後ナデ	(23.8)	-	-	雲母, 角閃石を少量 含む	良好	
82	636	弥生 土器	甕	I	I b	内:にぶい黄橙色 10YR6/3 外:黒色2.5Y2/1	ハケ目	ハケ目	(20.4)	-	-	石英, 角閃石を少量 含む	良好	煤付着
82	637	弥生 土器	甕	I	I b	内:黄灰色2.5Y6/1 外:灰白色10YR8/2	ナデハケ目	ナデ, ハケ目, 横ナデ	-	-	-	角閃石, 雲母を含む 1mm大の小石を含む	良好	
82	638	弥生 土器	甕	II	I b	内:灰黄色2.5Y6/2 外:灰黄褐色10YR5/3	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	-	-	-	石英, 角閃石, 雲母 を含む	良好	
82	639	弥生 土器	甕	I	I b	内外:にぶい黄橙色 10YR7/2	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	-	-	-	石英, 角閃石を含む 1mm大の小石を微量 に含む	良好	
83	640	弥生 土器	甕	II	I b	内:灰黄褐色10YR5/2 外:黒色2.5Y2/1	ナデ	ハケ目後ナデ	-	-	-	石英, 雲母を少量含 む	良好	
83	641	弥生 土器	甕	I	I b	内:黄灰色2.5Y5.5/1 外:にぶい黄橙色 10YR7/3	ハケ目後ナデ	ナデ, ヘラ削り	-	-	-	石英, 角閃石を少量 含む	良好	
83	642	弥生 土器	甕	I	I b	内:灰黄褐色10YR5/2 外:灰褐色10YR6/1.5	ナデ, ハケ目	ハケ目, ナデ, 削り	-	-	-	長石, 角閃石, 雲母を含む 1~3mm大の小石を微量に 含む	良好	
83	643	弥生 土器	甕	I	I b	内:にぶい黄橙色 10YR6/4 外:黒色N2/	ハケ目	口縁:ハケ目 胴部:ナデ	(19.6)	-	-	石英, 角閃石を含む	良好	煤付着
83	644	弥生 土器	甕		I b	内:灰白色10YR8/2 外:にぶい黄褐色10YR5/3	ハケ目	削り後ナデ	(22.7)	(12.4)	-	石英, 角閃石(1mm 大)を多く含む	良好	煤付着
83	645	弥生 土器	甕	I	I b	内外:にぶい黄橙色 10YR7/3	口縁:ナデ 胴部:ハケ目後ナ デ消し	口縁:ナデ 胴部:ハケ目, 縦方 向の削り	(11.5)	-	-	1mm大の石英, 角閃 石, 砂粒が多くみら れる	良好	
83	646	弥生 土器	甕	I	I b	内外:灰褐色7.5YR5/2	口縁:ナデ 胴部:ハケ目	口縁:ナデ 胴部:ハケ目	(19.2)	-	-	石英, 角閃石を所々 に含む	良好	
83	647	弥生 土器	甕	I	I b	内外:にぶい黄橙色 10YR6/3	口縁:ナデ 胴部:ハケ目後ナ デ消し	口縁:ナデ 胴部:ハケ目削り後 ナデ	(25.4)	-	-	石英, 角閃石(1mm 大)を多く含む	良好	線刻
83	648	弥生 土器	甕		III	内:にぶい黄橙色 10YR6/3 外:にぶい黄褐色 10YR7/3	ハケ目, ナデ	ハケ目後ナデ, ヘラ 削り	(20.2)	-	-	角閃石, 長石, 雲 母, 1mm大の小石を 少量含む	良好	
83	649	弥生 土器	甕	I	III	内:にぶい黄褐色 10YR6/3 外:にぶい黄褐色 10YR7/2	ナデ	ナデ, 部分的にハケ 目が残る	(29.6)	-	-	長石, 雲母, 角閃石 を含む	良好	
84	650	弥生 土器	甕	I	IV	内:黄灰色2.5Y6/1 外:にぶい黄褐色 10YR7/2	ハケ目, ナデ	ハケ目	-	-	-	石英, 角閃石を含む	良好	
84	651	弥生 土器	甕		IV	内:にぶい黄褐色 10YR7/3 外:橙色7.5YR7/6	ナデ	ハケ目後ナデ	-	-	-	1mm大の石英を微量 に角閃石と雲母を含 む	良好	
84	652	弥生 土器	甕		IV	内:橙色7.5YR7/5 外:にぶい黄褐色 10YR7/3	ナデ	ナデ, 部分的にハケ 目後ナデ	-	-	-	石英, 角閃石, 長石 を含む	良好	
84	653	弥生 土器	甕	I	IV	内外:にぶい黄褐色 10YR7/3	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	-	-	-	2mm大の石英を多 く含む	良好	
84	654	弥生 土器	甕	II	IV	内:灰白色10YR8/2 外:にぶい黄褐色 10YR7/3	ナデ	ナデ	-	-	-	石英, 角閃石を含む	良好	

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量 (cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
84	655	弥生 土器	甕	I	IV	内: にぶい黄橙色 10YR6/3 外: 黄灰色2.5Y6/1	横ナデ, ハケ目 ナデ	ハケ目, ナデ	-	-	-	石英を多く含む	良好	
84	656	弥生 土器	甕	II	IV	内: にぶい黄橙色 10YR6/3 外: 橙色7.5YR7/5	ハケ目後ナデ	ナデ	-	-	-	石英, 角閃石を含む 褐色の小石を微量 に含む	良好	
84	657	弥生 土器	甕	I	IV	内: にぶい黄橙色 10YR6/3 外: 橙色7.5YR7/6	横ナデ, ナデ	ナデ	-	-	-	2mm大の石英, 長 石, 角閃石を含む	良好	
85	658	弥生 土器	甕	I		内: 黒色 外: にぶい黄橙色 10YR5/3	胴部: ハケ目 底部: ナデ	横ナデ	-	8.4	-	1mm大の石英, 角閃 石を多く含む	良好	煤付着
85	659	弥生 土器	甕	I		内: 黒色10YR2/1 外: 褐灰色5YR6/1	底部: 横ナデ 胴部: ハケ目	ハケ目後ナデ消し	-	(8.8)	-	石英(3mm大)角閃石 (1mm大)を所々に含 む	良好	煤付着
85	660	弥生 土器	甕	I II III		内: 暗灰黄色2.5Y5/2 外: 灰黄色2.5Y6/2	ハケ目	ナデ(部分的にハケ 目が残る)	-	8.4	-	石英, 角閃石, 2ミ リ大の砂粒を含む	良好	
85	661	弥生 土器	甕	I		内外: にぶい黄褐色 10YR5/3	胴部: ハケ目 底部: ナデ	ナデ(部分的にハケ 目が残る)	-	7.2	-	カンラン石, 角閃石 を所々に含む	良好	
85	662	弥生 土器	甕			内外: にぶい黄橙色 10YR7/2	底部: ハケ目後ナ デ	ナデ	-	8.0	-	角閃石, 石英, 白色 砂粒(1mm大)を多く 含む	良好	
85	663	弥生 土器	甕	I		内外: にぶい黄橙色 10YR6/3	ハケ目後ナデ	ナデ	-	6.0	-	長石, 角閃石, 石英, 砂粒を多く含む	良好	煤付着
85	664	弥生 土器	甕			内: 黒褐色7.5YR3/1 外: 明褐色7.5YR5/6	胴部: ハケ目 底部: ナデ	板ナデ後ナデ消し	-	7.6	-	長石, 石英, 角閃石 を所々に含む 1mm大の砂粒を所々 に含む	良好	
85	665	弥生 土器	甕	I		内外: 灰白色10YR8/1	ハケ目	ナデ	-	12.2	-	角閃石, 石英を所々 に含む	良好	
85	666	弥生 土器	甕	I		内外: にぶい黄褐色 10YR5/4 頭部内面: 黒色 10YR1.7/1	ハケ目, 磨滅	横ナデ	-	8.9	-	1mm大の石英, カンラ ン石, 角閃石を多く含 む 3mm大の小石を所々に 含む	良好	
85	667	弥生 土器	甕	I		内外: 灰黄色2.5Y7/2	横ナデ	横ナデ	-	9.0	-	角閃石, カンラン 石, 石英を所々に含 む	良好	
85	668	弥生 土器	甕	I		内外: にぶい黄褐色 10YR6/3	ナデ	ナデ	-	9.2	-	カンラン石, 石英, 角閃石, 輝石を所々 に含む	良好	
85	669	弥生 土器	甕	II		内外: にぶい橙色 7.5YR7/4	ナデ	ナデ	-	(8.0)	-	角閃石, 石英(1mm 大)を多く含む 長石を所々に含む	良好	
85	670	弥生 土器	甕	I		内: 暗灰黄色2.5Y4/2 外: にぶい黄褐色 7.5YR6/4	ハケ目, ナデ 底部: ナデ	ナデ	-	8.2	-	角閃石, 石英を多く 含む	良好	
85	671	弥生 土器	甕	I		内: 黒色10YR2/1 外: 黄褐色10YR5/3	胴部: ハケ目 底部: 横ナデ	ナデ	-	10.6	-	1mm大の石英, カン ラン石, 角閃石を 所々に含む	良好	煤付着
85	672	弥生 土器	甕	I		内: オリーブ黒5Y3/1 外: にぶい黄褐色 10YR7/2	ナデ	ナデ	-	5.5	-	角閃石, カンラン石を 所々に含む 砂粒を多く含む	良好	
85	673	弥生 土器	甕	I		内外: にぶい黄褐色 10YR7/2	胴部: ハケ目 底部: 横ナデ	胴部: 横ナデ 底部: ハケ目	-	8.6	-	石英, 角閃石を所々 に含む	良好	
85	674	弥生 土器	甕	I		内外: 灰黄褐色10YR6/2	胴部: ハケ目 底部: 横ナデ	ナデ後ナデ消し	-	10.2	-	角閃石, 石英, 黒雲 母を所々に含む 白粒を多く含む	良好	
85	675	弥生 土器	甕	I		内外: 灰黄褐色10YR6/2	ハケ目	ナデ, ハケ目	-	6.6	-	角閃石, 長石を少量 含む 1mm大の砂粒を含む	良好	
85	676	弥生 土器	甕	I		内: 灰色2.5Y7/1 外: にぶい黄色2.5Y6/4	ハケ目	ナデ	-	8.0	-	角閃石, 石英を多く 含む	良好	
85	677	弥生 土器	甕	I		内外: 灰黄褐色10YR6/2	ハケ目	ナデ	-	(11.0)	-	角閃石, 石英を所々 に含む	良好	
86	678	弥生 土器	壺	I	Ia	内外: にぶい黄褐色 10YR7/3	ハケ目, ナデ削り	ハケ目, ナデ	13.3	3.6	31.0	角閃石, 石英を多く 含む	良好	煤付着
86	679	弥生 土器	壺	I	Ia	内: 灰白色10YR8/2 外: にぶい黄褐色 10YR6/3	ハケ目, ナデ	ナデ	(16.0)	-	-	石英, 角閃石を多く 含む	良好	

種図 番号	遺物 番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
86	680	弥生 土器	壺	I	I a	内:灰黄色2.5YR7/2 外:にぶい黄橙色 10YR6/3	口縁:横ナデ、 胴部:ナデ	口縁:横ナデ、 胴部:ナデ	-	-	-	石英、角閃石を多く 含む	良好	
86	681	弥生 土器	壺	I	I a	内:にぶい黄橙色10 YR7/4 外:にぶい黄橙色 10YR7/3	口縁:横ナデ、 胴部:ハケ目後ナデ	口縁:横ナデ、 胴部:ハケ目後横ナ デ	(10.0)	-	-	石英、角閃石の粒子 を少量含む	良好	
86	682	弥生 土器	壺	I	I a	内:にぶい黄橙色10 YR6/4 外:にぶい褐色7.5YR5/4	横ナデ	ナデ	(8.6)	-	-	角閃石、長石、石英を 所々に含む	良好	
86	683	弥生 土器	壺	I	I b	内:にぶい黄橙色10 YR7/4 外:にぶい黄橙色 10YR6/3	ハケ目、ナデ	横ナデ	12.4	3.7	22.5	角閃石、長石を多く 含む	良好	
86	684	弥生 土器	壺	I	I b	内:にぶい黄橙色10 YR6/4 外:灰黄褐色10YR4/2	ハケ目、ナデ	ハケ目、ナデ	-	-	-	石英、角閃石を多く 含む	良好	
86	685	弥生 土器	壺	I	I b	内外:灰白色10YR8/2	横ナデ	横ナデ	(14.6)	-	-	石英、角閃石を多く 含む	良好	
86	686	弥生 土器	壺	I	I b	内:灰褐色7.5YR5/2 外:にぶい褐色7.5YR5/3	口縁:横ナデ 胴部:ハケ目後ナ デ	ハケ目後ナデ	-	-	-	石英、長石、角閃石 を所々に含む	良好	
87	687	弥生 土器	壺	I	I	内:灰白色10YR8/2 外:にぶい黄橙色10 YR7/3	ハケ目後ナデ	ナデ	(14.0)	-	-	石英、角閃石を少量 含む	良好	
87	688	弥生 土器	壺	I	I	内外:にぶい黄褐色10 YR5/3	ハケ目後横ナデ	ハケ目後ナデ	(13.1)	-	-	石英を多く角閃石を 所々に含む	良好	
87	689	弥生 土器	壺	I	I	内:灰白2.5Y7/1 外:にぶい黄橙色 10YR7/2	ハケ目後ナデ	横ナデ	(14.0)	-	-	石英、角閃石が多く 見られる	良好	
87	690	弥生 土器	壺	I	I	内:にぶい黄褐色10 YR6/3 外:灰黄褐色10YR5/2	ハケ目、横ナデ	ナデ	(14.4)	-	-	角閃石を多く長石、 石英を少量含む	良好	
87	691	弥生 土器	壺	I	I	内外:にぶい黄褐色10 YR7/2	ハケ目	横ナデ	(15.6)	-	-	石英を少々含み角 閃石を多く含む	良好	
87	692	弥生 土器	壺	I	I	内:にぶい黄褐色7YR/4 外:褐灰色10YR4/1	ハケ目、ナデ	ハケ目、ナデ	(11.0)	-	-	角閃石、石英を含む	良好	
87	693	弥生 土器	壺	I	I	内:にぶい黄褐色 10YR5/3 外:褐灰色10YR4/1	ハケ目後横ナデ	ハケ目後横ナデ	-	-	-	石英、角閃石を含む	良好	
87	694	弥生 土器	壺	I	I	内:にぶい黄褐色 10YR4/6 外:灰黄褐色10YR2/5	ハケ目	ハケ目後ナデ	-	-	-	1~2mm大の角閃石、 石英があり	良好	
87	695	弥生 土器	壺	I	I	内外:浅黄褐色10YR8/3	ハケ目後ナデ、削り	ナデ	-	7.6	-	長石、石英、特に角 閃石が多く含まれる	良好	
87	696	弥生 土器	壺	I	III	内:にぶい黄褐色 10YR6/3 外:灰黄褐色10YR5/2	頸部に削り その下にヘラミガキ 口縁部横ナデ	ミガキ、横ナデ	(20.2)	-	-	石英、微細石を所々 に含むが精製された 胎土	良好	
87	697	弥生 土器	壺	I	III	内外:灰黄褐色10YR6/2	ミガキ	ナデ	-	-	-	1~2mm大の砂粒を わずかに含むが精 製された胎土	良好	
88	698	弥生 土器	壺	I	IVa	内外:灰黄褐色10YR6/2	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	(14.6)	-	-	石英、角閃石を所々 に含む	良好	
88	699	弥生 土器	壺	I	IVa	内外:にぶい黄褐色10 YR7/1	ナデ	ハケ目後ナデ	(11.6)	-	-	角閃石、石英を多く 含む 2mm大の赤色 の小石を含む	良好	
88	700	弥生 土器	壺	II	IVb	内:にぶい黄褐色 10YR7/3 外:にぶい黄褐色 10YR5/3	ハケ目、ナデ	ハケ目、板ナデ	(13.3)	-	-	角閃石	良好	
88	701	弥生 土器	壺	I	V	内外:褐灰色10YR4/1	ナデ、ミガキ	ナデ	-	-	-	砂粒を含まない精製 された胎土	良好	
88	702	弥生 土器	壺	I		内:褐灰色10YR4/1 外:褐灰色10YR5/1	ハケ目、横ナデ	ハケ目、ナデ	(14.0)	-	-	角閃石、石英を所々 に含む	良好	
88	703	弥生 土器	壺	I		内:にぶい黄褐色 10YR7/2 外:にぶい黄褐色 10YR6/3	ナデ	ナデ	-	-	-	砂粒を含まない精製 された胎土	良好	
88	704	弥生 土器	壺	I		内:にぶい黄褐色10YR6/6 外:橙7.5YR6/6	横ナデ	摩滅	-	-	-	小石を含まない精製 された胎土	良好	
88	705	弥生 土器	壺			内外:灰白色2.5Y7/1	磨耗のため不明	磨耗のため不明	-	-	-	1mm大の角閃石、カン ラン石、砂粒を含む	良好	

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
88	706	弥生 土器	壺	I		内:灰白色2.5Y8/1 外:灰白色5Y7/1	ナデ、削り	ナデ、ケズリ	-	-	-	石英、角閃石を含む	良好	
88	707	弥生 土器	壺	II		内:黒色N3/0.5 外:灰白色10YR7/2	ハケ目後ナデ	ハケ目、ナデ	-	-	-	1, 2mm大の角閃石、 石英がかなり見られ 3mm大の小石が所々 に見られる	良好	
88	708	弥生 土器	壺	I		内:黒褐色2.5Y3/1 外:灰白色10YR7/1	ミガキ、ナデ	ミガキ、ハケ目	-	-	-	2mm前後の長石が 時々と、1mmの角閃 石がみられる	良好	
88	709	弥生 土器	壺	I		内:灰色10YR7/ 外:褐灰色10YR6/	ナデ	剥落	-	-	-	石英を所々に含む	良好	
88	710	弥生 土器	壺	I		内:灰黄色2.5Y6/2 外:黒褐色2.5Y3/1	ハケ目	ナデ	-	-	-	石英を含む精製され た胎土	良好	
88	711	弥生 土器	壺	II		内:黄褐色2.5Y5/3 外:黄灰色2.5Y6/1	ハケ目、横ナデ	ハケ目	-	-	-	長石、黒雲母、角閃 石、1~2mm大の砂 粒を含む	良好	
89	712	弥生 土器	壺	I		内:にぶい黄褐色 10YR7/2 外:灰黄褐色10YR7/2	ハケ目	ハケ目、ナデ	-	5.0	-	角閃石、長石、石英を 含む	良好	
89	713	弥生 土器	壺	I		内:にぶい黄褐色 10YR6/4 外:にぶい黄褐色 10YR6/3	ハケ目	ナデ	-	(6.3)	-	石英、角閃石、1mmの 小石を多く含む	良好	
89	714	弥生 土器	壺	I		内:灰褐色7.5YR4/2 褐 灰色7.5Y5/1 外:明褐色7.5YR7/1	ハケ目	ハケ目、ナデ	-	(4.0)	-	角閃石、石英を多く 含む	良好	
89	715	弥生 土器	壺	I		内:にぶい黄褐色 10YR7/2.5 外:灰黄褐色10YR4/2	板ナデ、削り	ナデ	-	4.3	-	石英、角閃石、白色粒 を多く含む	良好	
89	716	弥生 土器	壺	I		内:にぶい黄褐色 10YR6/3 外:にぶい黄褐色 10YR7/4	ハケ目、板ナデ	ナデ	-	1.5	-	角閃石、雲母、1mm大 の小石を少量含む	良好	
89	717	弥生 土器	鉢	I		内外:にぶい黄褐色 10YR7/2	ハケ目、ナデ	ハケ目、ナデ	-	(6.2)	-	角閃石、石英を多く 含む	良好	
89	718	弥生 土器	鉢	I		内:にぶい黄褐色 10YR6/3 外:にぶい黄褐色 10YR6/4	ナデ	ナデ	(10.6)	-	-	砂粒を含まない精製 された胎土、角閃石、 石英を微量に含む	良好	
89	719	弥生 土器	鉢	I		内:灰黄褐色10YR5.5/2 外:にぶい黄褐色 10YR5/3	ナデ	横ナデ	(10.6)	-	-	石英、角閃石を多く 含む	良好	
89	720	弥生 土器	鉢	I		内:にぶい黄褐色 10YR6/4 外:にぶい黄褐色 10YR7/4	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	-	-	-	角閃石、石英を含む	良好	
89	721	弥生 土器	鉢	I		内:にぶい黄褐色 10YR5/3 外:黒褐色10YR4/1	ハケ目	ケズリ、ミガキ	(22.4)	-	-	石英、角閃石を所々 に含む	良好	
89	722	弥生 土器	鉢			内外:にぶい黄褐色 10YR6/4	ハケ目	ナデ	(20.0)	-	-	石英、角閃石を含む	良好	
89	723	弥生 土器	鉢	I		内:にぶい黄褐色 10YR6/4 外:明褐色7.5YR5/4	ナデ	ナデ	-	1.4	3.4	1mm大の石英を含む	良好	
89	724	弥生 土器	ミニ チュア 土器	I		内:明褐色7.5YR5/6 外:にぶい黄褐色 10YR6/4	ナデ	ナデ	(7.0)	2.4	4.9	石英、角閃石を含む	良好	
89	725	弥生 土器	高杯			内:にぶい黄褐色 10YR7/3 外:にぶい黄褐色 10YR7/2	ハケ目	ハケ目後ナデ	-	-	-	1~2mm大の角閃石 がみられる	良好	
89	726	弥生 土器	高杯			内:にぶい黄褐色 10YR7/3 外:浅黄褐色10YR8/3	ハケ目後ナデ	横ナデ、削り	-	14.8	-	石英、角閃石を多く 含む	良好	
90	727	弥生 土器	高杯	I		内:灰色5Y6/1 外:浅黄褐色10YR8/3	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	-	(10.6)	-	砂粒を含まない精製 された胎土	良好	
90	728	弥生 土器	高杯	II		内外:にぶい黄褐色 10YR6/3	ナデ	ナデ	-	8.0	-	砂粒をほとんど含ま ない精製された胎土	良好	
90	729	弥生 土器	高杯	I		内外:灰白色2.5Y7/1	ハケ目、削り後ナデ	ナデ	-	11.8	-	石英、角閃石を少量含む 1mm以上の小石を多く 含む	良好	
90	730	弥生 土器	高杯	I		内外:にぶい黄褐色 10YR6/4	ハケ目後ナデ	ナデ	-	(10.0)	-	石英、角閃石を多く 含む	良好	
90	731	弥生 土器	甕	I		内:灰白色2.5Y8/1 外:灰白色2.5Y7/1	ハケ目、ナデ	ナデ	-	-	-	石英、角閃石を含む 1mm大の小石を少量 含む	良好	

第19表 自然流路1 出土石器観察表

図番号	番号	出土区	層位	取上番号	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石材	備考
91	732	自然流路1	-	27	石鏃	1.50	1.55	0.50	0.95	ハリ質安山岩	2地点北
91	733	自然流路1	-	46	石鏃	1.70	1.20	0.40	0.61	黒曜石	2地点
91	734	自然流路1	-	95	スクレイパー	7.15	6.82	1.88	60.00	頁岩	
91	735	自然流路1	I	-	石核	3.10	4.50	1.60	11.00	黒曜石(上牛鼻)	
91	736	自然流路1	II	-	楔形石器	1.93	1.72	1.01	6.51	黒曜石(上牛鼻)	
91	737	自然流路1	-	109	スクレイパー	6.45	9.30	1.82	91.00	安山岩	
91	738	自然流路1	II	58	砥石	13.20	5.00	3.30	200.00	安山岩	
91	739	自然流路1	I	100	砥石	8.00	7.50	2.40	116.00	砂岩	
91	740	自然流路1	I	465	軽石製品	5.70	4.10	3.60	16.00	軽石	
92	741	自然流路1	I	-	石斧	10.78	6.54	3.80	429.00	頁岩	
92	742	自然流路1	I	64	石斧	9.80	5.00	1.80	82.00	蛇紋岩	
92	743	自然流路1 溝状遺構2	I	150	石斧	(9.80)	5.70	3.70	320.00	ホルンフェルス	
92	744	自然流路1	I	-	石斧	(3.90)	6.10	2.70	73.00	砂岩	
92	745	自然流路1	II	73	石斧	8.30	6.70	4.20	347.00	砂岩	
92	746	自然流路1	I	7	磨石	5.10	4.70	3.90	153.00	安山岩	
92	747	自然流路1	I	81	石球	5.80	5.80	5.70	268.00	安山岩	
93	748	自然流路1	I	-	磨石・敲石	12.80	10.70	4.40	978.00	安山岩	
93	749	自然流路1	I	197	磨石	11.10	7.80	3.80	502.00	砂岩	
93	750	自然流路1	I	30	磨石・敲石	8.80	13.50	6.60	1200.00	砂岩	
93	751	自然流路1	I	194	磨石・敲石	11.10	9.60	7.60	1200.00	安山岩	
93	752	自然流路1	-	84	軽石製品	6.25	6.80	2.91	21.31	軽石	
93	753	自然流路1	I	99	軽石製品	12.10	8.30	4.00	10.90	軽石	
94	754	自然流路1	I	116?	凹石・磨石	10.40	9.40	5.00	746.00	砂岩	
94	755	自然流路1	I	495	敲石	7.90	6.30	4.90	266.00	安山岩	
94	756	自然流路1	II	106	敲石	6.60	6.75	4.70	264.00	安山岩	
94	757	自然流路1	I	65	敲石	11.00	7.80	5.20	452.00	安山岩	
94	758	自然流路1	I	-	敲石	10.20	7.00	6.80	770.00	安山岩	
94	759	自然流路1	I	96	不明	17.10	10.40	2.70	608.00	安山岩	
94	760	自然流路1	I	71	石皿B	20.73	14.24	4.65	1400.00	安山岩	
95	761	自然流路1	I	99	礫器	14.70	10.00	5.20	814.00	安山岩	
95	762	自然流路1	-	813	礫器	9.30	8.50	3.40	214.00	安山岩	
96	763	自然流路1	I	41	石皿B	19.25	18.50	6.70	3600.00	安山岩	
96	764	自然流路1	I	172?	石皿A	15.30	13.90	4.90	1800.00	安山岩	
96	765	自然流路1	II	210	石皿B	14.00	15.00	9.20	2500.00	安山岩	
96	766	自然流路1	I	-	石皿B	7.90	11.60	4.30	447.00	安山岩	
96	767	自然流路1	I	170	石皿A	18.00	14.75	7.10	2100.00	安山岩	
96	768	自然流路1	I	202	石皿A	10.70	9.20	5.80	728.00	砂岩	
96	769	自然流路1	I	28	石皿A	22.75	18.55	9.00	5100.00	安山岩	
97	770	自然流路1	I	115	石皿A	19.30	10.00	10.90	2800.00	安山岩	
97	771	自然流路1	I	6	石皿A	8.50	8.50	4.60	386.00	安山岩	
97	772	自然流路1	I	-	石皿A	24.10	22.20	9.50	7600.00	安山岩	
97	773	自然流路1	I	40	石皿A	29.68	20.05	9.20	7000.00	安山岩	
98	774	自然流路1	I	91	石皿A	31.00	21.50	9.00	10750.00	安山岩	
98	775	自然流路1	I	-	石皿B	38.00	27.00	8.00	11600.00	安山岩	
123	990	A22・23 溝状遺構2	-	187	石鏃	1.60	1.40	0.30	0.38	黒曜石(上牛鼻)	
123	991	A22・23 溝状遺構2	-	-	スクレイパー	3.90	4.70	2.30	10.00	ハリ質安山岩	
123	992	A22・23 溝状遺構2	-	217	スクレイパー	5.15	6.18	1.48	30.00	安山岩	
123	993	A22・23 溝状遺構2	-	124	石斧	10.50	6.20	3.40	218.00	頁岩	
123	994	溝状遺構2	-	-	軽石製品	7.20	4.80	3.10	22.00	軽石	2地点北
123	995	溝状遺構2	-	19	磨石	8.00	11.40	5.10	716.00	安山岩	
123	996	溝状遺構2	-	266	石皿A	11.40	8.10	3.30	514.00	安山岩	
123	997	溝状遺構2	-	-	石皿B	10.10	9.40	6.20	770.00	安山岩	
123	998	溝状遺構2	-	265	軽石製品	16.90	8.80	5.30	204.00	軽石	
124	999	溝状遺構2	-	-	石皿A	14.10	10.10	5.00	1100.00	安山岩	
124	1000	溝状遺構2	-	67	石皿A	26.30	13.65	16.10	6800.00	安山岩	
124	1001	溝状遺構2	-	238	石皿B	19.57	11.75	5.70	1400.00	安山岩	
124	1002	溝状遺構2	-	263	石皿B	33.60	17.30	10.10	5700.00	安山岩	
124	1003	溝状遺構2	-	29	台石	42.36	20.20	19.30	19.60	安山岩	
125	1004	溝状遺構2	-	271	石皿A	26.80	26.20	12.90	13800.00	安山岩	
125	1005	溝状遺構2	-	151	石皿B	28.60	26.60	14.20	13500.00	安山岩	
125	1006	溝状遺構1	I	-	石皿A	10.70	11.40	3.60	616.00	安山岩	
125	1007	溝状遺構1	II	-	敲石	4.20	3.55	1.80	37.00	砂岩	
125	1008	A27 溝状遺構3	II	-	スクレイパー	5.70	3.60	1.95	38.67	黒曜石(上牛鼻)	

第20表 自然流路1 出土木製品観察表

杭列1 ()は残存部の法量

挿図番号	遺物番号	器種	層	法量 (cm)			加工痕の種類	工具幅 (cm)	樹種	先端の加工	備考
				長さ	幅	厚さ					
99	776	杭		(32.3)	A:8.3 B:6.2	A:7.5 B:6.5	不明	2.8		磨耗のために加工の状況不明	圧痕あり
99	777	杭		(24.3)	A:9.5 B:6.2	A:4.8 B:4.0	不明	3.0		右側面のみ加工	
99	778	杭		(27.5)	A:6.9 B:7.5	A:5.7 B:3.5	不明	2.1		正面側のみ加工。先端に砂粒が付着	

杭列2 ()は残存部の法量

挿図番号	遺物番号	器種	層	法量 (cm)			加工痕の種類	工具幅 (cm)	樹種	先端の加工	備考
				長さ	幅	厚さ					
99	779	割杭		(17.1)	(8.6)	4.2	不明	不明		つぶれ	
99	780	割杭		(14.3)	(5.1)	2.3	不明	不明		磨耗	
99	781	割杭		(7.7)	3.1	(1.3)	不明	不明		磨耗	
99	782	割杭		(7.6)	(3.5)	(1.5)	不明	不明		欠損	
99	783	割杭		(12.9)	(7.2)	2.9	不明	不明		つぶれ	
99	784	割杭		(20.2)	(8.8)	3.4	不明	不明		一面に加工。先端つぶれ	
99	785	割杭		(17.6) (16.7)	9.3 8.5	3.6	不明	不明		加工施なし	
99	786	割杭		21.6	A:8.1 B:6.7	A:(4.4) B:(2.7)	不明	不明		一面に加工	先端磨耗
99	787	割杭		(20.0)	7.7	3.5	A種、湾曲	不明		凸状刃こぼれ痕が残る	
100	788	割杭		(23.5) (22.3)	7.9	7.4	不明	不明		一面に加工。ほとんど尖っていない	
100	789	割杭		(20.3)	6.9	4.4	不明	不明		一面に加工	腐食が著しい
100	790	割杭		(23.4)	A:6.5 B:6.0	A:6.5 B:3.0	不明	不明		一面に加工。磨耗	樹皮が残る
100	791	割杭		(28.8)	(5.4)	5.7	不明	不明		加工なし	樹皮が残る
100	792	割杭		(21.6)	A:3.9 B:7.1	A:2.7 B:4.6	不明	不明		つぶれ	
100	793	割杭		(23.1)	A:6.6 B:7.5	A:5.0 B:2.9	不明	不明		つぶれ	
100	794	割杭		(12.5)	(5.2)	(3.0)	不明	不明			欠損した杭の一部の可能性
100	795	割杭		(14.0)	5.3	3.4	不明	不明		一面に加工され、尖っていない	先端の磨耗
100	796	割杭		(14.4)	5.6	4.2	不明	不明		つぶれ	右側面に工具痕あり
100	797	割杭		(18.4)	6.0	3.6	不明	不明		加工なし	
100	798	割杭		(17.2)	6.1	3.3	不明	不明		つぶれ	
100	799	割杭		(18.7)	A:6.1 B:3.3	A:3.9 B:3.4	不明	不明		磨耗	樹皮が残る
100	800	割杭		(23.2)	4.6	2.6	不明	不明		つぶれ、砂粒が付着	
100	801	割杭		(13.7)	5.4	3.1	不明	不明		つぶれ	芯持材を半裁し使用
100	802	割杭		(10.0)	(4.8)	(2.5)	不明			加工なし	

杭列3 ()は残存部の法量

挿図番号	遺物番号	器種	層	法量 (cm)			加工痕の種類	工具幅 (cm)	樹種	先端の加工	備考
				長さ	幅	厚さ					
101	803	板杭		(14.9)	12.2	3.5	不明	不明		加工なし	板目材を使用
101	804	板杭		17.5	A:11.8 B:8.7	A:4.7 B:4.2	A種、湾曲	3		一面に加工される	ほぼ完形品
101	805	板杭		(9.5)	6.8	(7.6) (2.6)	不明	不明		つぶれ	
101	806	板杭		(12.8)	6.3	1.8	不明	不明		つぶれ、折れ曲がる	圧痕あり
101	807	杭?		(7.4)	3.8	0.9	不明	不明			杭の一部か?
101	808	板杭		(7.4)	5.2	1.3	不明	不明		磨耗	
101	809	丸杭		(22.5)	A:5.9 B:4.4	A:4.4 B:2.5	A種、湾曲	3		一面に加工	
101	810	丸杭		(21.1)	A:5.5 B:3.3	A:5.1 B:1.7	A種、湾曲	2.8		一面に加工	樹皮残る
101	811	丸杭		(9.0)	A:3.7 B:1.9	A:3.9 B:2.1	A種、湾曲	2.5		3~4面に加工	樹皮残る

挿図番号	遺物番号	器種	層	法量 (cm)			加工痕の種類	工具幅 (cm)	樹種	先端の加工	備考
				長さ	幅	厚さ					
101	812	丸杭		(12.9)	A:4.3 B:3.5	A:4.8 B:2.8	A種、湾曲	2.2		2面に加工	樹皮残る
101	805	板杭		(9.5)	6.8	(7.6) (2.6)	不明	不明		つぶれ	
101	806	板杭		(12.8)	6.3	1.8	不明	不明		つぶれ、折れ曲がる	圧痕あり
101	807	杭?		(7.4)	3.8	0.9	不明	不明			杭の一部か?
101	808	板杭		(7.4)	5.2	1.3	不明	不明		磨耗	
101	809	丸杭		(22.5)	A:5.9 B:4.4	A:4.4 B:2.5	A種、湾曲	3		一面に加工	
101	810	丸杭		(21.1)	A:5.5 B:3.3	A:5.1 B:1.7	A種、湾曲	2.8		一面に加工	樹皮残る
101	811	丸杭		(9.0)	A:3.7 B:1.9	A:3.9 B:2.1	A種、湾曲	2.5		3~4面に加工	樹皮残る
101	812	丸杭		(12.9)	A:4.3 B:3.5	A:4.8 B:2.8	A種、湾曲	2.2		2面に加工	樹皮残る
101	813	丸杭		(13.6)	A:5.0 B:1.8	A:(4.2) B:4.0	A種、湾曲	3		3面に加工	凸状刃こぼれ痕残る
101	814	丸杭		(14.2)	A:5.2 B:5.3	A:5.4 B:3.6	B種、湾曲無	1.5		1面に加工	先端磨耗
101	815	丸杭		(14.6)	A:3.8 B:2.7	A:3.3 B:2.4	不明	不明		腐食	
101	816	割杭		(12.2)	7.4	4.6	不明	不明		2面に加工か?腐食	
101	817	角杭		(8.5)	4.1	2.7	不明	不明		全体的に腐食	
101	818	杭の1部?		(9.6)	3.2	2.8	不明	不明			
101	819	杭の1部?		(9.5)	2.9	1.7	不明	不明			
101	820	割杭		(10.4)	4.7	2.3	不明	不明		加工が施されず、つぶれている	
101	821	割杭		(45.3)	A:6.1 B:5.5	A:9.2 B:5.5	不明	不明		多面に加工。磨耗している	
102	822	角杭		(39.6)	A:3.3 B:3.9	A:2.5 B:2.8	不明	不明		右半分欠損、加工痕あり	右側面近くに削痕あり
102	823	角杭		(17.5)	18.7	9.4	不明	不明		つぶれ・磨耗	樹皮残る
102	824	割杭		(12.0)	7.7	4.3	不明	不明		つぶれ	圧痕あり
102	825	割杭		(13.8)	3.4	2.5	不明	不明		磨耗	
102	826	丸杭		(10.1)	(3.6)	2.1	不明	2.8		2面に加工	腐食が著しい
102	827	角杭		(19.9)	4.1	2.7	不明	不明		欠損	全体的に丁寧な加工
102	828	丸杭		(17.2)	A:3.7 B:6.1	A:(3.6) B:2.4	不明	不明		1面に加工	樹皮残る
102	829	杭?		(9.2)	(2.9)	1.7	不明	不明		磨耗	

杭列4 ()は残存部の法量

挿図番号	遺物番号	器種	層	法量 (cm)			加工痕の種類	工具幅 (cm)	樹種	先端の加工	備考
				長さ	幅	厚さ					
103	830	割杭		(12.4)	7.8	4.3	不明	不明		一面に加工され、尖っていない 磨耗している	板状
103	831	割杭		(12.9)	7.4	4.1	不明	不明		加工なし、つぶれている	板状
103	832	割杭		(16.7)	6.0	2.7	不明	不明		つぶれ	板状
103	833	丸杭		(23.5)	A:5.1 B:3.5	A:4.6 B:4.3	A種、湾曲	2.8		凸状刃こぼれ痕あり 2面に加工	
103	834	丸杭		(35.4)	A:5.7 B:6.0	A:4.7 B:1.8	A種、湾曲	3.2		2面に加工	樹皮が残る
103	835	丸杭		(40.5)	A:4.7 B:4.0	A:4.8 B:3.4	A種、湾曲	2.8		4面に加工。磨耗している	
103	836	丸杭		(30.7)	A:5.4 B:4.6	A:5.2 B:4.2	B種、湾曲無	3		2面に加工	
103	837	割杭		(29.3)	12.0	6.9	B種、湾曲	2.2		1面に加工	
103	838	割杭		(16.5)	A:5.6 B:3.1	A:4.6 B:2.7	B種、湾曲	2.2		多方面から加工・つぶれている	加工単位が重複
103	839	割杭		(20.9)	A:6.6 B:5.2	A:(2.7) B:(4.0)	A種、湾曲	2.5		一部欠損	樹皮が残る
103	840	割杭		(19.4)	5.5	2.8	不明	不明		1面に加工・つぶれ	
103	841	割杭		(21.3)	7.9	4.7	不明	不明		加工は施されず平坦・つぶれ	

挿図番号	遺物番号	器種	層	法量 (cm)			加工痕の種類	工具幅 (cm)	樹種	先端の加工	備考
				長さ	幅	厚さ					
104	842	割杭		37.8	A:6.9 B:5.4	A:5.7 B:6.1	不明	不明		磨耗	圧痕あり
104	843	割杭		(18.0)	8.5	5.1	不明	不明		1面に加工・つぶれ	
104	844	割杭		(19.7)	A:7.9 B:5.8	A:5.2 B:5.5	不明	不明	クリ	1面に加工・つぶれ	BP 2,050±30
104	845	角杭		(30.5)	4.7	3.6	不明	不明		加工なし	
104	846	杭?		(15.0)	(6.0)	4.2	不明	不明		欠損	
104	847	割杭		(21.5)	A:2.9 B:2.6	A:2.0 B:1.2	不明	不明		1面に加工	
104	848	割杭		(25.1)	7.1	(4.3)	不明	不明		欠損	
104	849	角杭		(36.6)	A:3.6 B:3.5	A:4.3 B:2.9	不明	不明		短く4面に加工・磨耗	
104	850	角杭		(21.7)	3.7	3.0	不明	不明		加工なし	
104	851	割杭		(19.3)	6.9	3.8	不明	不明		無加工・つぶれ	
104	852	割杭		(24.0)	7.7	4.5	不明	不明		無加工	腐食が著しい
104	853	杭?		(17.7)	5.1	5.0	不明	不明		欠損	腐食が著しい杭の一部か?
104	854	杭?		(22.0)	5.9	(3.1)	不明	不明		欠損	腐食が著しい杭の一部か?
104	855	板材		(38.0)	5.0	2.7	不明	不明			上下欠損
104	856	板材		(59.3)	A:6.0 B:4.6 C:4.5	A:2.0 B:2.0 C:2.6	不明				上下欠損

杭列5 ()は残存部の法量

挿図番号	遺物番号	器種	層	法量 (cm)			加工痕の種類	工具幅 (cm)	樹種	先端の加工	備考
				長さ	幅	厚さ					
105	857	割杭		(19.5)	A:6.2 B:6.4	A:6.7 B:4.7	不明	不明		3面に加工	樹皮が残る
105	858	角杭		(11.3)	(7.1)	(3.8)	不明	不明		つぶれ	
105	859	杭?		(12.2)	4.7	3.2	不明	不明		欠損	杭の一部か?
105	860	割杭		(15.0)	4.0	2.45	不明	不明		つぶれ	上部は炭化している
105	861	杭?		(11.7)	4.3	1.85	不明	不明		欠損	杭の一部か?
105	862	板材		(52.0)	7.0	1.4	不明	不明		加工痕は残っていないが、丁寧に成形されている	建築材の可能性

出土遺物 ()は残存部の法量

挿図番号	遺物番号	器種	層	法量 (cm)			加工痕の種類	工具幅 (cm)	樹種	先端の加工	備考
				長さ	幅	厚さ					
106	863	曲柄又鋏		51.4 軸部 長5.5 刃部 長45.9	A:3.5 B:7.6 C:3.0	A:1.7 B:1.6 C:1.1	不明	1.3		幅1.3cm, 長さ5.7cmの加工痕が残る。丁寧な加工	浅い溝が2か所みられる
106	864	組合せ鋏		(46.0)	A:3.9 B:7.5	A:1.1 B:1.1	不明	1		幅1cmの加工が先端に近い部分にみられる。	方形板刃先を装着した痕跡が残る
106	865	又鋏		(6.2)	鋏台 3.6 握り 2.7	0.8	不明	不明			先端磨耗
106	866	又鋏		29.1	5.6	1.0	不明	不明		腐食のために不明	
106	867	又鋏		(21.4)	6.5	0.8	不明	不明			腐食が著しい
106	868	曲柄		鋏台 (10.2) 握り (4.5)	鋏台 3.6 握り 2.7	鋏台 3.7	不明	不明			
107	869	曲柄又鋏		軸部 (19.6) 刃部 (75.6)	A:1.3 B:4.2 C:5.0 D:5.5 E:6.2 F:3.5 G:4.5	A:1.3 B:1.4 C:1.4 D:1.4 E:1.6 F:(1.3) G:1.8	不明	2.2		刃部に幅2.2cm, 長さ3.5cmの加工痕あり	軸部と刃部は同一ものである可能性
108	870	農具木製品		83	A:9.9 B:17.5	A:2.6 B:3.0	不明	2.4		幅2.4cm, 長さ5.4cmの加工痕が残る	



出土木製品 ( ) は残存部の法量

挿図 番号	遺物 番号	器種	層	法量 (cm)			加工痕の種類	工具幅 (cm)	樹種	先端の加工	備考
				長さ	幅	厚さ					
108	871	農具 木製品		84.6	A:15.8 B:22.8	A:2.8 B:3.7	不明	不明		不明	
109	872	農具 木製品		67.4	A:15.8 B:22.7	A:4.0 B:4.8	不明	不明		腐食のため不明	
109	873	農具 木製品		下 (13.8) 上 (30.2)	A:15.4 B:12.5	A:3.5 B:3.8	不明	不明		腐食のため不明	
110	874	直柄 横鋏		23.1	A:10.9 B:9.8	A:2.0 B:1.5	不明	不明		右側面を加工(2次加工の可能性)	
110	875	丸木 弓		(50.2)	A:2.0 B:1.8	A:2.2 B:1.8	不明	不明		全体的に丁寧成形	両端は欠損し 炭化している
110	876	柄		(41.9)	A:3.1 B:5.4	A:2.4 B:1.8	不明	不明		腐食のため不明	炭化している部分あり
110	877	柄		(21.1)	2.8	2.5	不明	不明		腐食のため不明	
111	878	掘り棒		(23.7)	A:9.3 B:4.7	A:1.1 B:1.3	不明	不明		摩耗のため不明	先端は磨耗
111	879	不明 品		(17.2)	A:4.8 B:6.7	A:2.3 B:3.1	不明	不明		腐食のため不明	
111	880	不明 品		(23)	A:2.9 B:3.2	A:0.3 B:0.4	不明	不明			緩やかに折れ曲がる
111	881	不明 品		(16.7)	A:4.9 B:8.5	A:1.5 B:1.7	不明	2.2		幅2.2cm×2.4cm程の加工痕が残る	腰あての可能性
112	882	不明 品		27.5	18.9	2.1	不明	1.5		1.5×3.7cm程の加工痕が全面に残る	工具
112	883	不明 品		13.8	10.4	10.5	A種、湾曲	2.6		多方面から加工	柱材の可能性
112	884	不明 品		22.5	12.5	4.8	不明	不明		両端に抉りあり	裏側浅く凹む
112	885	不明 品		21.4	A:1.1 B:0.4	A:1.1 B:0.6	不明	不明		全面を丁寧に削る	先端は光る
112	886	板材		(62.6)	A:6.1 B:8.7	A:1.0 B:1.8	不明	不明		右側面に削り痕あり	圧痕あり
112	887	板材		(8.1)	(5.2)	1.2	不明	不明			板目材を使用
112	888	板材		(21.8)	4.9	1.1	不明	不明			板目材を使用
112	889	板杭		(47.6)	A:6.3 B:4.4	A:1.6 B:2.7	不明	不明		1面に加工	建築材の可能性
112	890	板材		(33.4)	9.6	1.1	不明	不明		丁寧に成形される	建築材の可能性
113	891	板材		(82.2)	A:10.5 B:6.5	A:4.4 B:2.3	不明	不明			建築材の可能性
113	892	板材		(54.2)	A:5.2 B:6.4 C:7.7	A:2.1 B:2.0 C:2.3	不明	不明			厚さが均一である
113	893	板材		(51.6)	A:7.6 B:8.4	A:3.2 B:3.5	不明	不明		下部を一段細く加工する	圧痕あり
113	894	板材		(50.0)	A:9.1 B:5.0	A:3.4 B:1.7	不明	不明		両側面の一部に加工痕残る	
113	895	板材		(27.0)	16.4	4.3	不明	1.5		板状に丁寧に削りだされている	炭化している
113	896	角材		(36.6)	A:4.4 B:(2.3)	A:4.0 B:4.1	不明			上面は平坦に加工 下部欠損	
113	897	角杭		(29.7)	A:6.9 B:7.0	A:3.7 B:3.9	不明			つぶれている。3.2×2.9cmの加工痕あり	
114	898	角杭		50.1	A:(7.4) B:(8.7)	A:5.9 B:7.1	不明			表面に工具痕が多く残る	建築材の転用品
114	899	角材		51.2	A:10.4 B:10.0	A:5.9 B:7.7	不明	不明		摩耗のため不明	建築材の可能性
114	900	割杭		(43.7)	A:12.0 B:5.5	A:4.9 B:3.1	B種?	2		側面を一面に加工。 加工単位が複雑に切り合う。	建築材の可能性
114	901	割杭		(39.0)	7.0	3.2	不明	2.5		3~4面に加工	
114	902	角材		24.0	10.9	8.9	不明	不明		全体に炭化しているため不明	柱材?
114	903	割材		38.4	A:6.3 B:5.4	A:4.4 B:3.2	不明	不明			正面、側面、裏面に 圧痕が残る
114	904	丸杭		39.3	4.8	A:4.9 B:4.1	A種、湾曲	2		4面に加工	上端も加工される

としている。902は割材を利用した角材で、全面が炭化している。上端は欠損し、下端は丸みを帯びている。903はみかん割り状の割材である。正面、側面、裏面に圧痕が残っている。901は割杭、904は丸杭である。

## (12) 溝状遺構 2 (第115図)

AB-21・22区で検出され、自然流路1が完全に埋没した後に、自然流路の中央部に沿って掘削されている(第79図断面図)。自然流路1同様、検出することができたのは下層部の⑤層部分の砂利層のみである(第115図土層断面図)。検出された溝状遺構の大きさは長さ16.3m、幅0.5~2m、深さ15cm程で、床面には平面形が不定形である3基の土坑が検出された。溝は、土層断面の観察から、幅1.3m、深さ0.6m程で断面形は台形であったことがわかる。溝状遺構の下層には鉄分を多く含む砂利層(⑤層)が堆積しており、水路として使用されていたことがうかがえる。遺構には総数63本の杭が伴っている。杭は東側から5つのグループに分けることができる。A~C地点では北側の壁面沿いに検出され、各地点の距離は4m程である。特にB・C地点の壁沿いの杭は南側へ傾き、遺構内の杭は垂直に打ち込まれている。さらに、杭列付近は溝状遺構が外側へ張り出している。D・E地点では溝状遺構全体に杭列が広がり、B・C地点の杭列と同様に北壁沿いの杭が南側へと傾いている。溝状遺構と同時期と推定される周囲の土壌のプラントオパール分析・花粉分析から溝状遺構と3地点の間に水田跡が存在したことが指摘されている。溝状遺構が水路であるとすれば、A~C地点の杭列は溝状遺構と微高地の間に存在した水田跡の取水口に伴う施設と考えられる。さらに、D・E地点の杭は水路全体の水量を調節する井堰などの遺構に関わる可能性が考えられる(第115図下)。杭の中には上端を加工しているものがあり、他の部材と組み合わせり上部構造をもつ可能性がある。各地点の杭列は丸杭、割杭、角杭が、規則的に配置されるのではなく混在している。杭と土器や木製品の出土状況について特筆すべき箇所は見あたらなかった。

弥生土器2820点、石器45点、木製品86点が遺構内全体から出土した。遺物は⑤層の上面から集中して出土し、レベル差がないことから短期間で廃棄されたと思われる。また、No943の壺の埋土からムギ類と同定された種子が1点検出された。

### 出土遺物

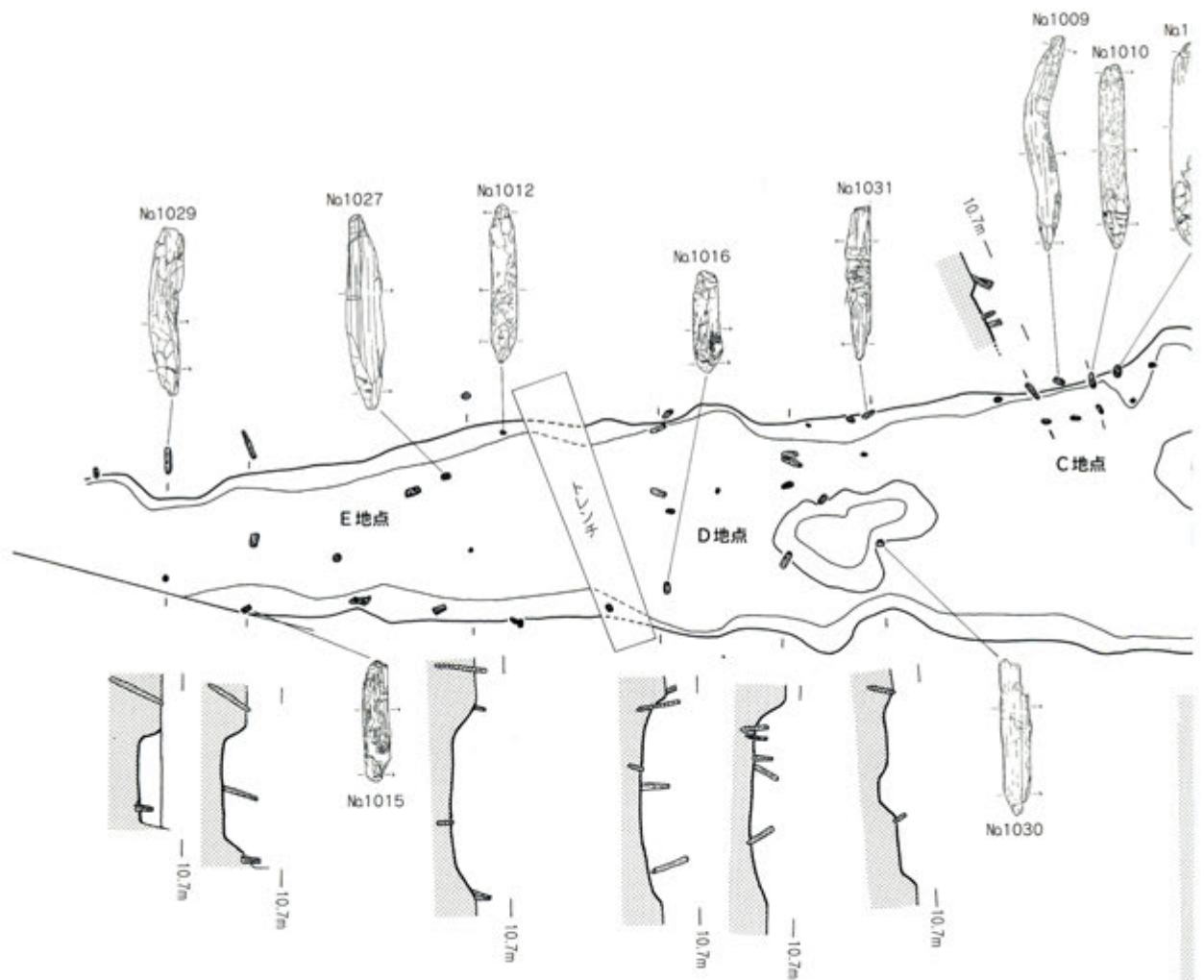
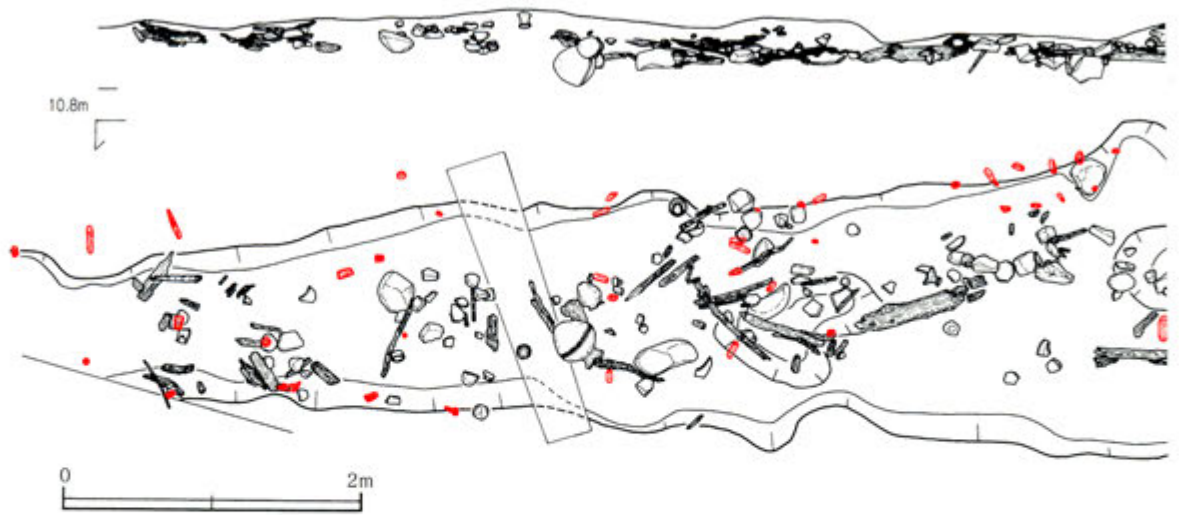
弥生土器184点、石器19点、木製品49点を図化した。

### 甕

溝状遺構2は、自然流路1では見られなかった型式であるIc類が主体を占める。

#### Ib類 (第116図 905~907)

905は口縁部が短く外反し胴部は張らずに底部に向かってすぼまる。外面胴部にはタタキのような粗いハケ目が施され、内面胴部はハケ目、口縁部はナデ調整が施され指頭圧痕が並んで残る。906は口縁部外反して開き、口縁部の器壁が胴部に比べ薄い。内外面ハケ目後ナデ調整が施されている。907は口縁部が外反し、口唇部は平坦である。胴部はわずかに膨らみ低部に向かってすぼまる。外面はハケ目が施され、部分的に強くナデられている。内面は口縁部がハケ目、胴部はケズリ調整である。



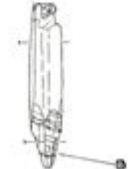
遺物出土状況



完掘状況 (杭の図面は上部に加工があるもの)



No.1028

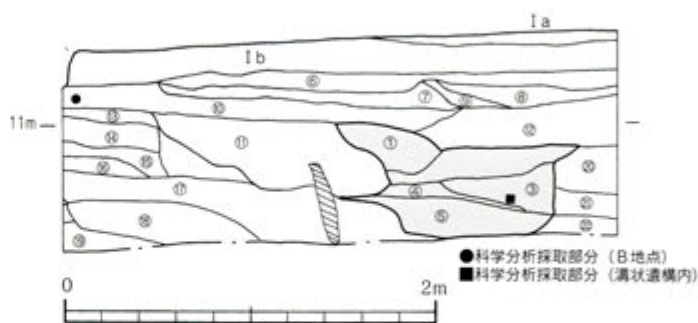


A地点

トレンチ

B地点

土層断面図(1/40)



● 科学分析採取部分 (B地点)  
■ 科学分析採取部分 (溝状遺構内)

- 土層
- ① 褐灰色粘質土 しまりがよく5mm大の軽石を所々に含む。
  - ② 黒褐色粘質土 木片、炭化物を多く含む。
  - ③ 黒褐色粘質土 灰白色細砂を多く含む。
  - ④ 黄灰色砂土 キメが細かくしまりがよい。
  - ⑤ 明赤褐色砂レキ土 1mm大の粗砂土に2~5cm大の丸みを帯びた小石が多く混入。
  - ⑥ 黒褐色砂質土
  - ⑦ 灰黄色粘質土
  - ⑧ 黒褐色砂質土
  - ⑨ 明オリブ褐色粘質土
  - ⑩ 灰黄褐色粘質土
  - ⑪ 褐色砂質土
- 溝状遺構1埋土
- ① 褐灰色粘質土
  - ② 黒褐色粘質土
  - ③ 灰黄褐色砂質土
  - ④ 黒褐色粘質土
  - ⑤ 灰黄色褐色粗砂
  - ⑥ ⑦にふい黄褐色砂質土
  - ⑧ 灰白色粗砂土
  - ⑨ 褐色粘質土
  - ⑩ 暗褐色粘質土
  - ⑪ 明赤褐色粗砂土
  - ⑫ 黒褐色砂質土
- 自然流路1埋土
- ① 褐灰色粘質土
  - ② 黒褐色粘質土
  - ③ 灰黄褐色砂質土
  - ④ 黒褐色粘質土
  - ⑤ 灰黄色褐色粗砂
  - ⑥ ⑦にふい黄褐色砂質土
  - ⑧ 灰白色粗砂土
  - ⑨ 褐色粘質土
  - ⑩ 暗褐色粘質土
  - ⑪ 明赤褐色粗砂土
  - ⑫ 黒褐色砂質土

### I c類 (第116・117図 908~923)

I b類に比べ口縁部が直立に近く、器壁が薄い。施文方法はいわゆる「かきあげ口縁」と呼ばれる技法を使用している。また、溝状遺構2において主流となる型式である。

908・909は口縁部が長く緩やかに外反する。頸部から上方へ縦方向のハケ目が明瞭に残り、胴部との境に段を持つ。908は全体的に器壁が薄く、胴部は張らない。909は口縁部にハケ目が二重に施され、胴部との境に段が2つ付く。910は口縁部が「く」字に外反する。頸部で屈折し胴部は外傾して開く。内外面ハケ目後ナデ調整が施されている。911は口縁部が直線的に外傾し、口唇部は平坦で中央に窪みをもつ。胴部は内傾している。外面口縁部から上胴部には煤が厚く付着しており、口縁部と胴部の境には工具痕が強く残る。内面はハケ目後ナデ調整が施され、頸部に指頭圧痕が残る。912~914は口縁部が直線的に外傾し、端部は平坦で中央が窪む。912は内外面ハケ目後ナデ調整が施され、内面には工具痕が多く残る。913は器壁が薄い。外面はハケ目後ナデ、内面はナデ調整である。914は胴部が下方で屈曲し、器高が低くなると思われ、鉢である可能性がある。外面はハケ目、内面はナデ調整が施される。915は口縁部が「く」字に外反し、端部が平坦である。内外面ハケ目調整である。916は口縁部が外反し、器壁が薄い。内外面ハケ目後ナデられている。917は直線的に外反している。内外面ハケ目後ナデられ、外面は部分的に強くナデ



No918の線刻

ているために器面が凹み、指頭圧痕が残る。918~920は直線的に外反し、端部は平坦である。919・920は内外面丁寧にハケ目が施されている。918は外面に「≡」と描かれた線刻が残る。921は口縁部が直線的に外反し、口唇部には1条の沈線が施されている。胴部はややふくらむ。外面は器面が荒い。922は口縁部が緩やかに外反して開く。内外面ナデ調整が施される。923は緩やかに外反し、端部が平坦である。外面はハケ目後ナデ、内面はナデ調整が施されている。

### II類 (第117図 924・925)

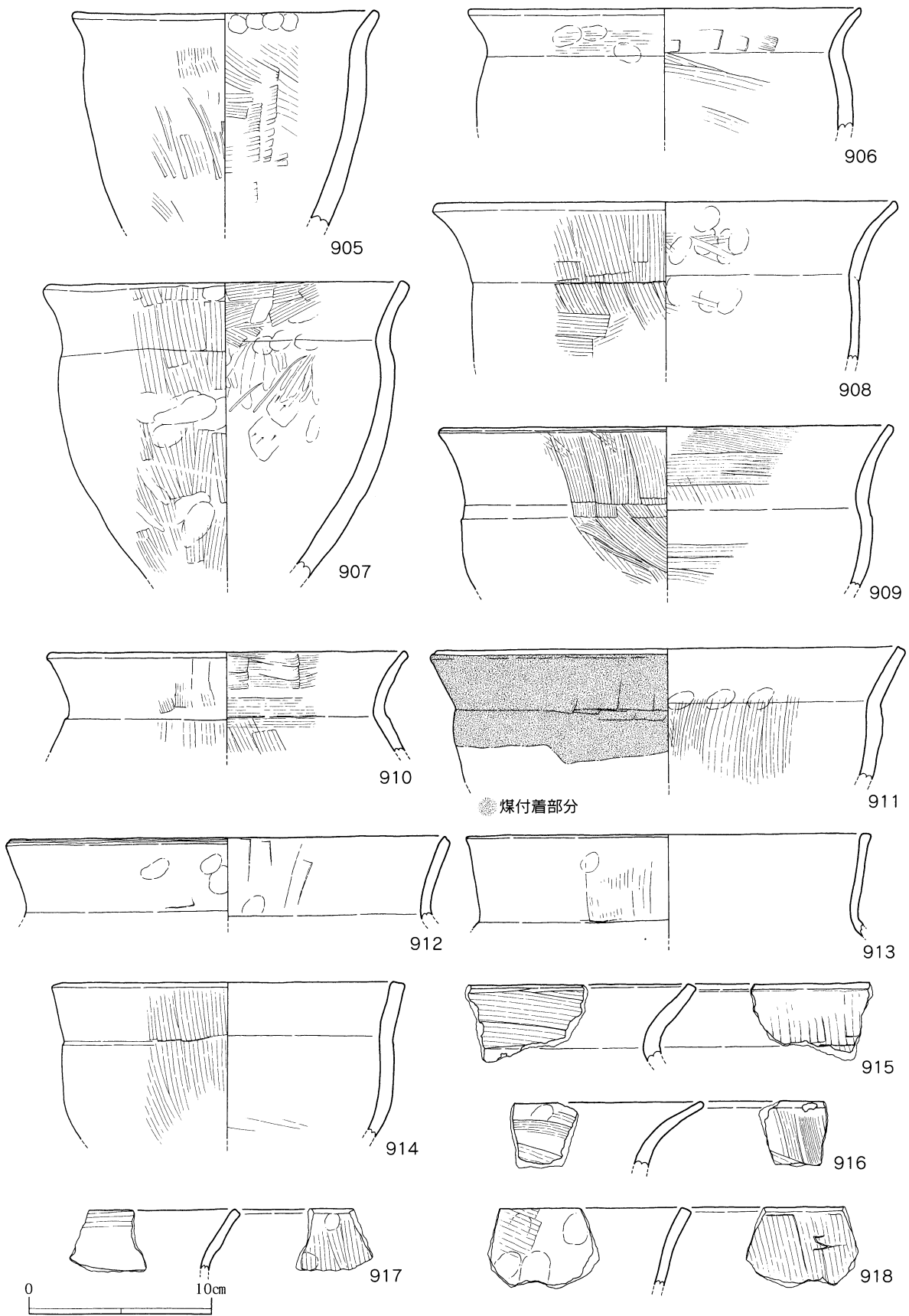
924は屈曲した上胴部から内傾して立ち上がり、口縁部は直立している。胴部は底部に向かってすぼまり、低く小さい底部は弧状に開く。口縁部はナデ、上胴部は板ナデ後ナデ、胴部は強くナデられている。脚部はナデで指頭圧痕が多く残る。内面は丁寧にナデ調整が施され、鉄分が付着しているため黄褐色をしている。925は口縁部が長く直線的に外傾する。肩が張り、上胴部には稜が付く。胴部は二次焼成のために荒れており、調整は不鮮明である。外面口縁部と内面はハケ目、下胴部にはケズリ調整が施されている。

### III類 (第117図 926・927)

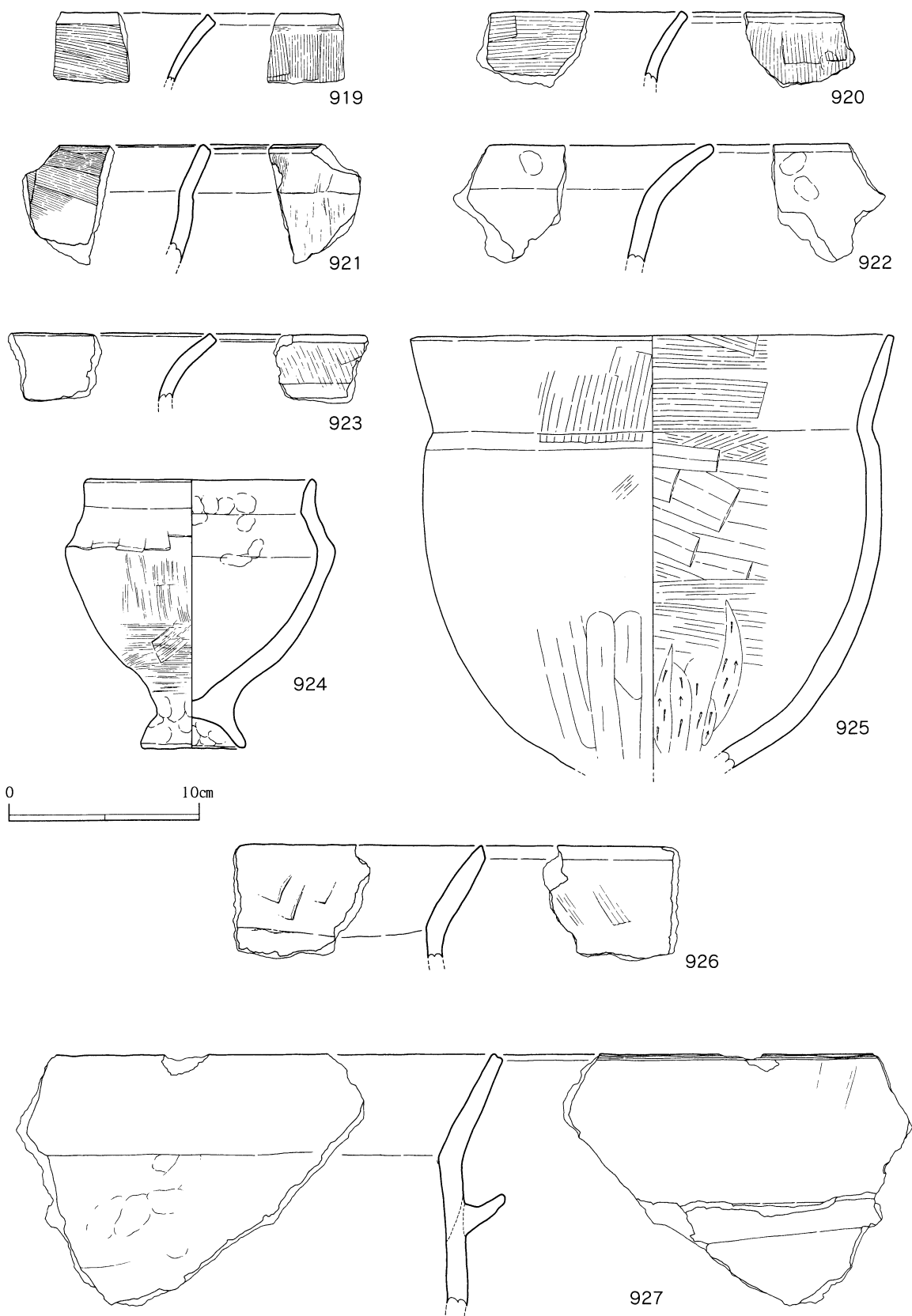
926・927は「く」字状に外反する直線的な口縁で、端部は平坦である。屈曲がやや強く、内面に稜がつく。926は内外面ハケ目後ナデ調整が施されており、工具痕がわずかに残る。927は上胴部に上方に湾曲した断面三角形の突帯が付く。内外面丁寧にナデ調整が施されている。

### 底部 (第118図 928~942)

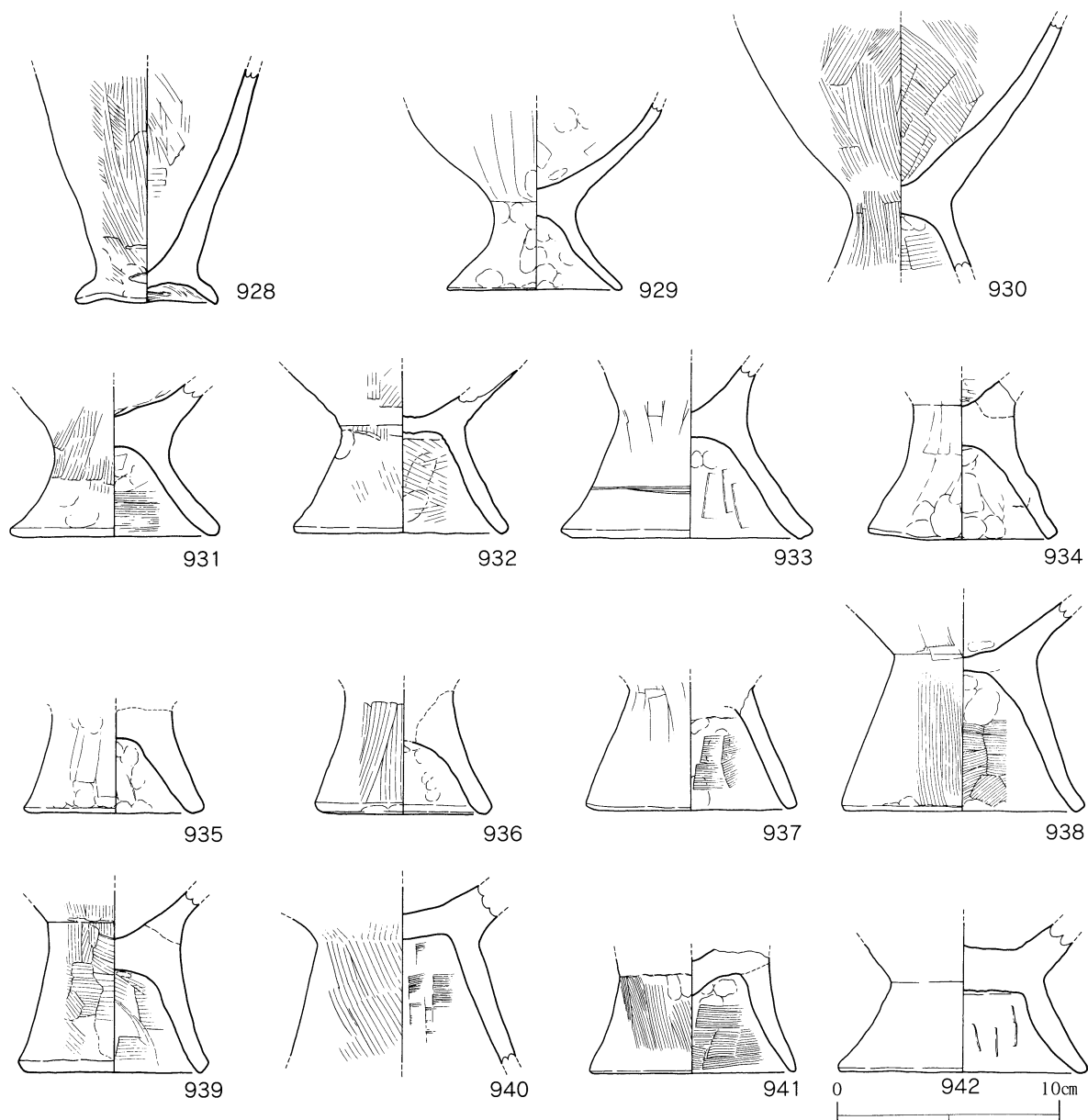
928は弧状に開く低い底部から直線的に胴部へと外傾して立ち上がる。胴部は内外面丁寧にハケ目、底部はナデ調整を施している。929は丸みを帯びた下胴部がすぼまり底部へ至る。内外面



第116図 溝状遺構 2 出土土器 (1)



第117図 溝状遺構2出土土器(2)



第118図 溝状遺構2出土土器(3)

共に板ナデ後ナデ調整を施している。脚部はナデられ指頭圧痕が多く残り、器面に凹凸が残る。930は直線的に外傾した脚部から胴部が広がって立ち上がる。内外面ハケ目が丁寧に施されている。931～933は緩やかに湾曲して広がる。933は外面に1～2mm幅の沈線が1条廻っている。内外面板ナデ後ナデを施している。器壁はやや厚くしっかりとしたつくりになっている。934・935は直線的に開く。外面は板ナデ後ナデ、内面はナデ調整である。934は端部が面取りされている。強く板ナデを施しているために器面に凹凸があり、粗いつくりになっている。936は緩やかに外側に湾曲して開く。外面は丁寧なハケ目、内面はナデ調整である。937～940は直線的に開き、端部が面取りされている。937は器壁が薄い。外面は板ナデ後ナデ、内面は細かいハケ目



が施されている。938・939は内外面ハケ目が丁寧に施されている。940は端部が欠損している。外面は丁寧なハケ目、内面は細かいハケ目が連続的に施された後にナデられている。941はわずかに外反しながら開き、底部内面の天井部は脚部との境を強くナデているために凸状を呈している。942は胴部と脚部の境が屈曲して台形状をなし、肥後地方特有の形態である。内面天井部は平坦にナデられている。

## 壺

### I b類 (第119図 943・944)

943は口縁部が「く」字に外反し、端部は丸くおさまる。胴部は少し張り気味で、平底である底部へすぼまるように至る。内外面共にハケ目調整が施してあり、外面にはケズリ調整を施した跡がわずかに残る。944は胴部が張らず、底部は丸底である。外面はハケ目後ナデ、内面はケズリ調整が施されている。

### II類 (第119図 945)

945は口縁部が頸部から直線的に立ち上がり、上部で大きくひらき、端部は丸くおさまる。頸部から張り出した胴部には、断面方形を呈した2条の突帯が廻り、工具により2本同時に1mm幅の刻目が施されている。底部は尖り気味の丸底を呈している。外面はハケ目、内面はハケ目後ナデ調整が施され、指頭圧痕が多く残る。

### 口縁部 (第119・120図 946~950)

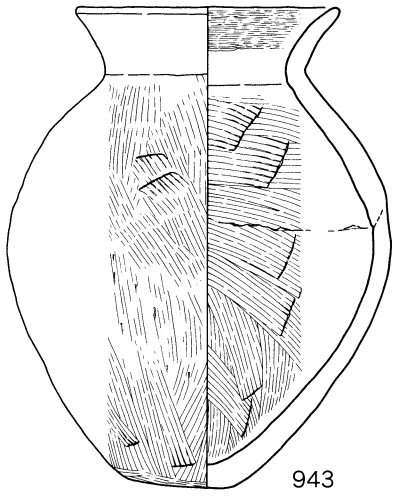
946は直線的に外傾し、端部は平坦である。内外面ハケ目後ナデ調整である。947は大きく外反する。948は口縁部が直線的に外反している。外面はハケ目が施され上方には強い横ナデが施される。949は大きく外反し、口唇部は平坦で中央がわずかに窪む。外面はハケ目後ナデ、内面はナデ調整である。950は直線的に外傾し、器壁が薄い。内外面ナデ調整が施され、指頭圧痕が明瞭に残る。

### 底部 (第120図 951~955)

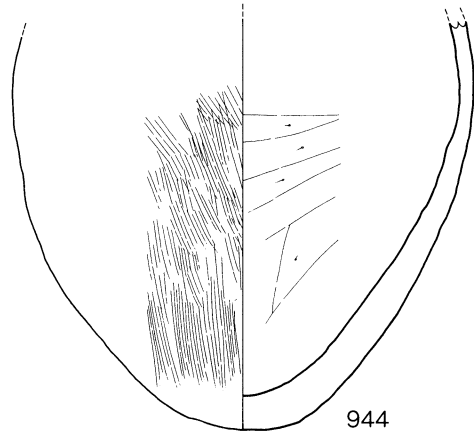
951・953は丸みを帯びた平底である。953は外面にハケ目調整が施されているが、調整は粗く器面に凹凸が残る。952は平底で底部から直線的に開きながら胴部へ立ち上がる。外面はハケ目が丁寧に施されている。954は丸底である。内外面ハケ目後ナデ調整を施し、内面には工具痕がわずかに残る。955は器壁が薄く丸みを帯びた平底である。内面にはケズリ調整が施されている。

### 小型丸底壺 (第120図 956~962)

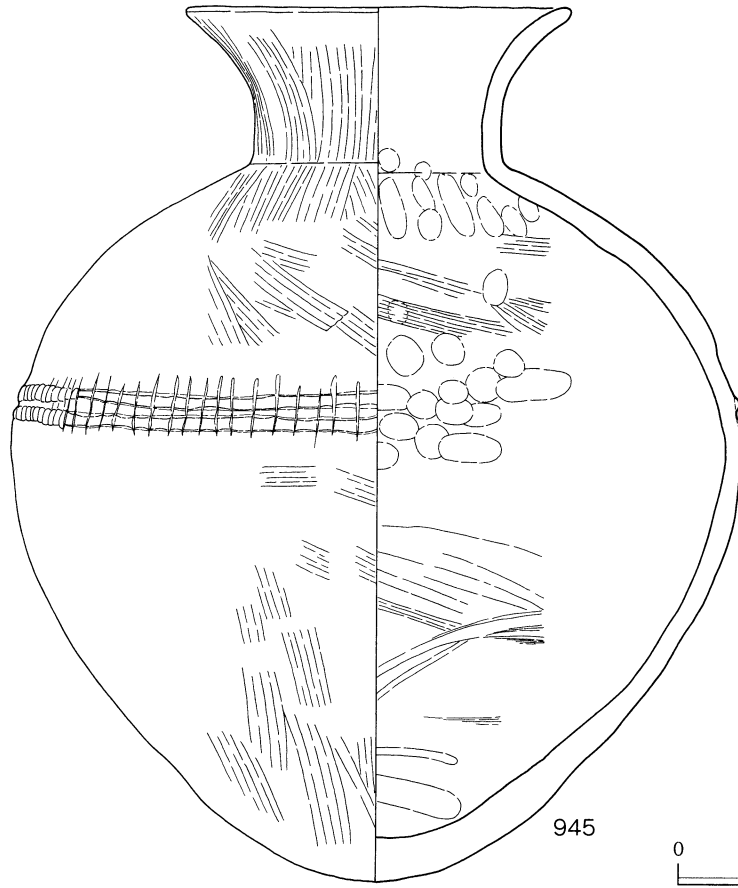
956は口縁部が外反して開き、頸部は内傾する。頸部にはハケ目が丁寧に施され、胴部はケズリが施されている。957は口縁部が外傾して開く。頸部はしまり、胴部は丸みを帯びて尖り気味の底部に至る。外面口縁部はハケ目後ナデ、胴部と内面はナデ調整である。958は口唇部と底部が欠損している。口縁部は緩やかに外反し、頸部は内傾している。胴部との境には1条の沈線を持ち、段が付く。胴部は丸味を帯びる。外面口縁部はハケ目が丁寧に施され、胴部はナデである。内面は板ナデが粗く施されている。959は外反して広がる。口縁部付近には浅い沈線が1条施されている。外面はハケ目後丁寧なナデ、内面は幅広のハケ目調整である。960~962は口縁部が短く、直線的に外傾する。頸部で締まり、胴部は丸く内湾する。外面は丁寧にナデ調整が施される。961は板ナデ後調整が施され、内面胴部には工具痕が残る。225と227は同一個体である。



943

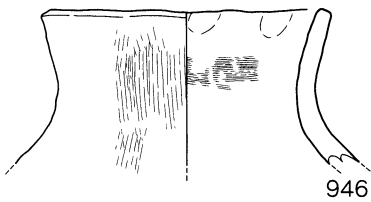


944

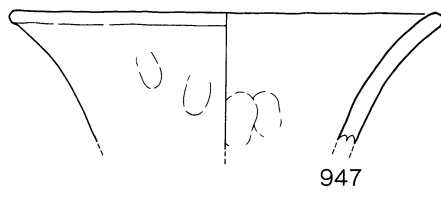


945

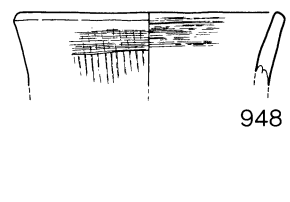
0 10cm



946

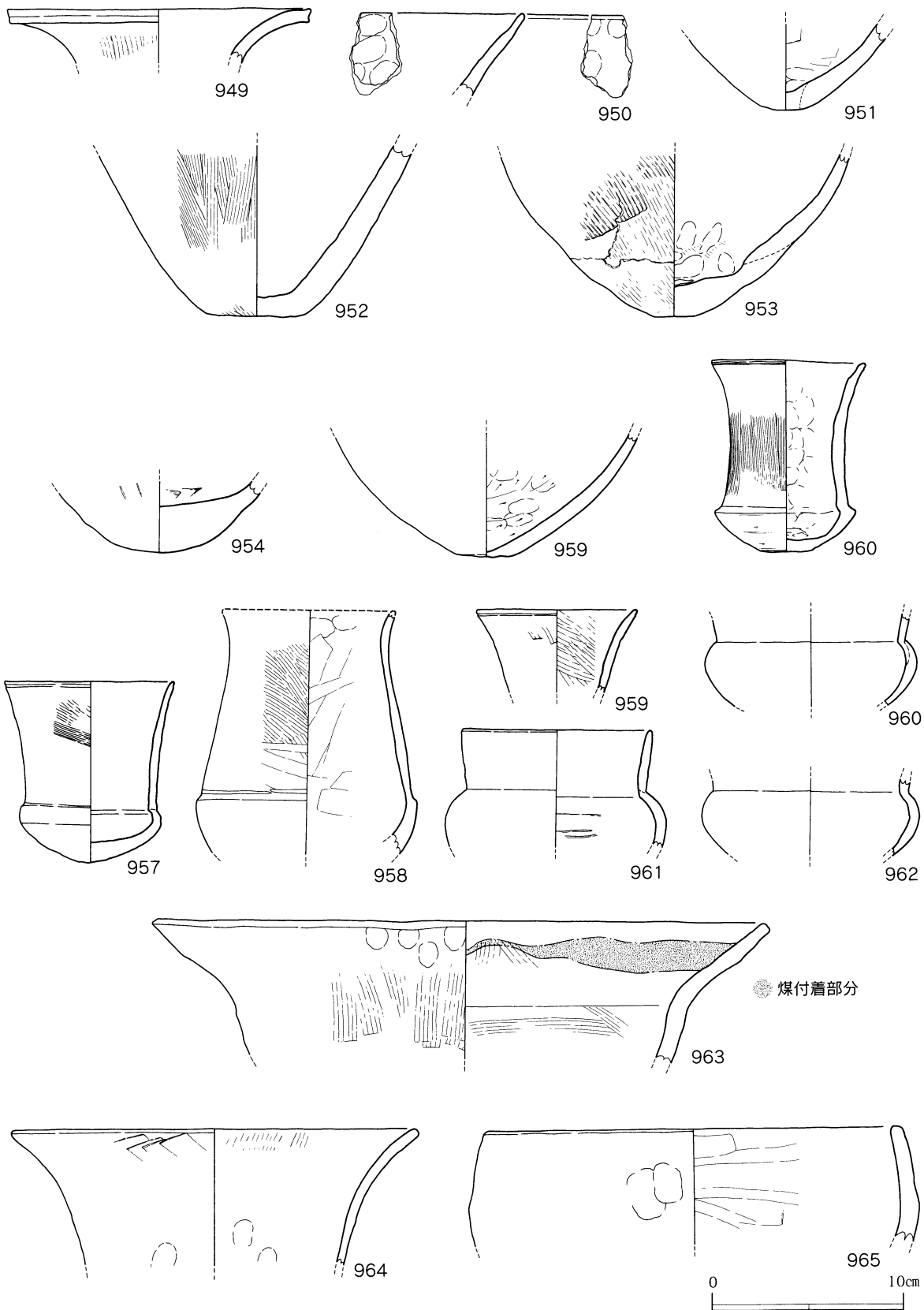


947

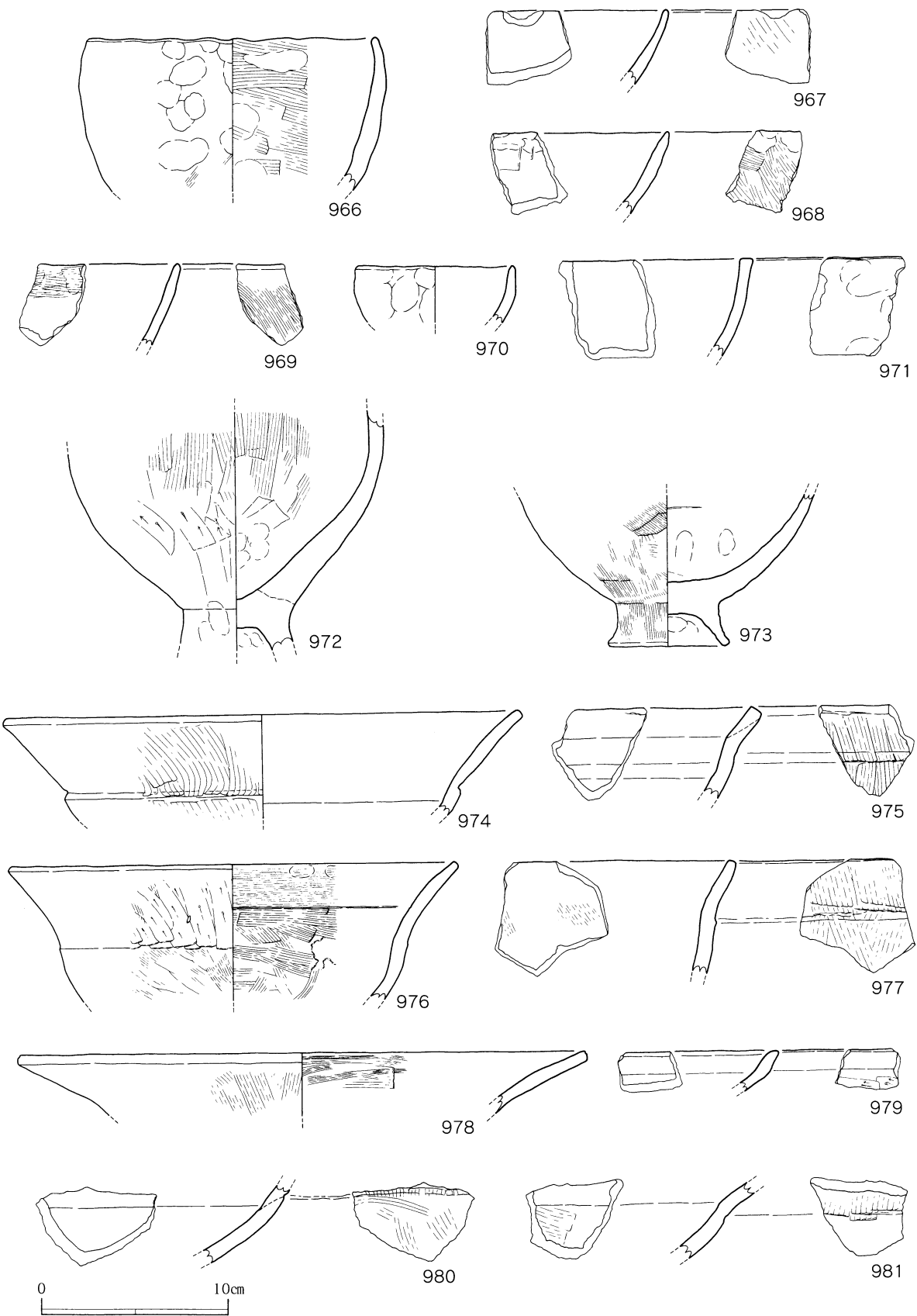


948

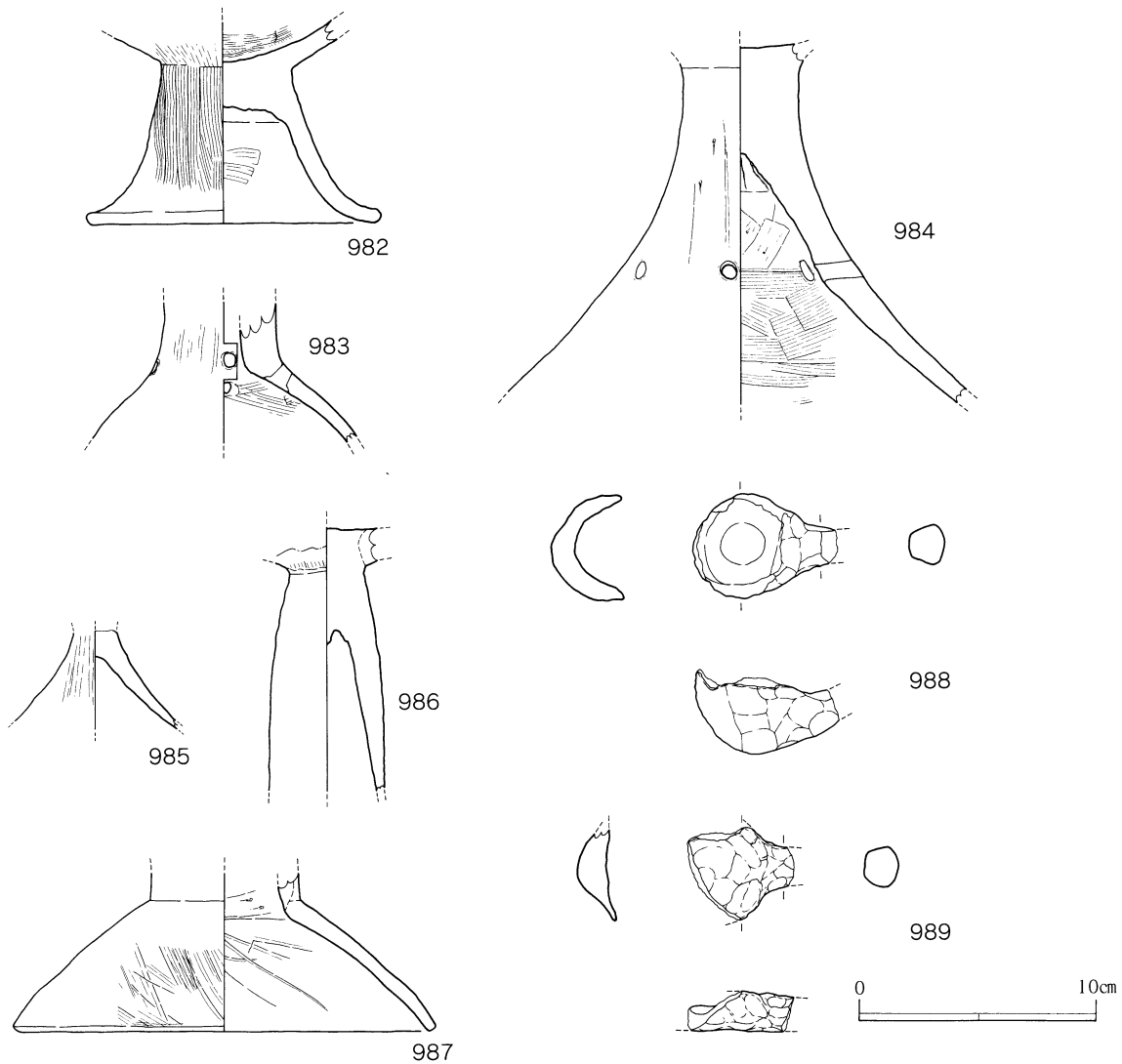
第119図 溝状遺構 2 出土土器 (4)



第120図 溝状遺構2出土土器(5)



第121図 溝状遺構2出土土器(6)



第122図 溝状遺構2出土土器(7)

**鉢 (第120・121図 963~973)**

963・964は口縁部が大きく外反して開くものである。963は口縁端部が平坦で器面が粗い。内面には煤が付着している。964は器壁がとても薄い。外面は板ナデ後ナデられており工具痕が多く残る。内面はハケ目後ナデ調整である。965~967は口縁部が内湾している。965は外面がナデ、内面は板ナデ後ナデ調整である。966は外面がナデ、内面はハケ目後部分的に強くナデ調整をしている。965, 966は外面を強くナデているため器面に指頭圧痕が残り凹凸がある。967は胎土が精製されている。外面は薄くハケ目が残る。968は外傾して広がり、先細りする。外面はハケ目、内面はハケ目後ナデ調整で工具痕が残る。969は緩やかに外傾している。内外面はハケ目後ナデ調整である。970は口縁部が湾曲した胴部から直立している。内外面ナデ調整で、指頭圧痕が多く残る。971は口縁部がわずかに内湾し、口唇部が平坦である。器面が粗い。972は胴部がすぼまるように直線的に開く脚部に至る。外面下胴部はケズリ後ナデ調整が施され、破裂痕が残る。973は胴部が丸く、脚部は緩やかに開く。外面は細かいハケ目調整が施され、内面のナデ調整は丁寧である。

### 高坏 (第121・122図 974~987)

974は口縁部が直線的に外反し、頸部は屈折し、稜が強く付く。調整は丁寧に施され、外面はハケ目、内面はナデである。975・977は口縁部が外反する。外面には丁寧なハケ目調整が施れ、胴部との境には段が付く。976は、外面口縁部にケズリ調整が見られ、その形状から鉢である可能性がある。978は口縁部が大きく外傾する。979は口縁部が直立気味で、胴部にはケズリ調整が施されている。980・981は頸部から胴部の破片である。頸部で屈折しており、稜が残る。

982~987は脚部である。982は緩やかに外傾し、裾部で大きく開く。外面には丁寧なハケ目調整が施されている。983は直立する脚柱部から弧状に裾部が開く。裾部上方には円形透孔が4孔施されている。984は裾広がりに大きく開く。脚部中央に円形透孔が6孔施されている。985は緩やかに外反してひろく。内外面ナデ調整である。986は円筒状の脚柱部で、上端部にハケ目調整が施されている。987は柱状の脚部から屈折をもって弧状に広がる裾部である。端部は面取りされている。内面脚柱部にはケズリ調整が施されている。

### 匙状土製品 (第122図 988・989)

988・989は手づくねの土製品である。988はやや深めの頭部から斜め上方に柄が付く。989は皿状の頭部から直行して柄が付いている。器面全体には指頭圧痕が多く残る。

第21表 分類別弥生土器出土一覧表

分類	甕					壺					小型丸底壺	高坏			
	I	II	III	IV	不明	I	II	III	IV	V		不明	口縁	脚部	
														透孔有り	透孔無し
1号竪穴住居跡					1						1				
2号竪穴住居跡	5				2	1					1				
炉跡1	6				1	1					5	2			
土坑1	4			2							2				
自然流路1	34		2	8		9	2	3	1	10		1		5	
溝状遺構2	19	2		2		2	1				5	7	8	2	4

### 石鏃 (第123図 990)

良質な黒曜石を素材とし、正三角形の端正な形に仕上げている。基部の抉りも深く、脚部先端も鋭利に形づく。

### スクレイパー (第123図 991・992)

991は気泡を多く含むハリ質安山岩の剥片を利用し、一方向から大ぶりの剥離を行って刃としている。992は安山岩の薄い剥片縁辺に連続した剥離を加えている。

### 石斧 (第123図 993)

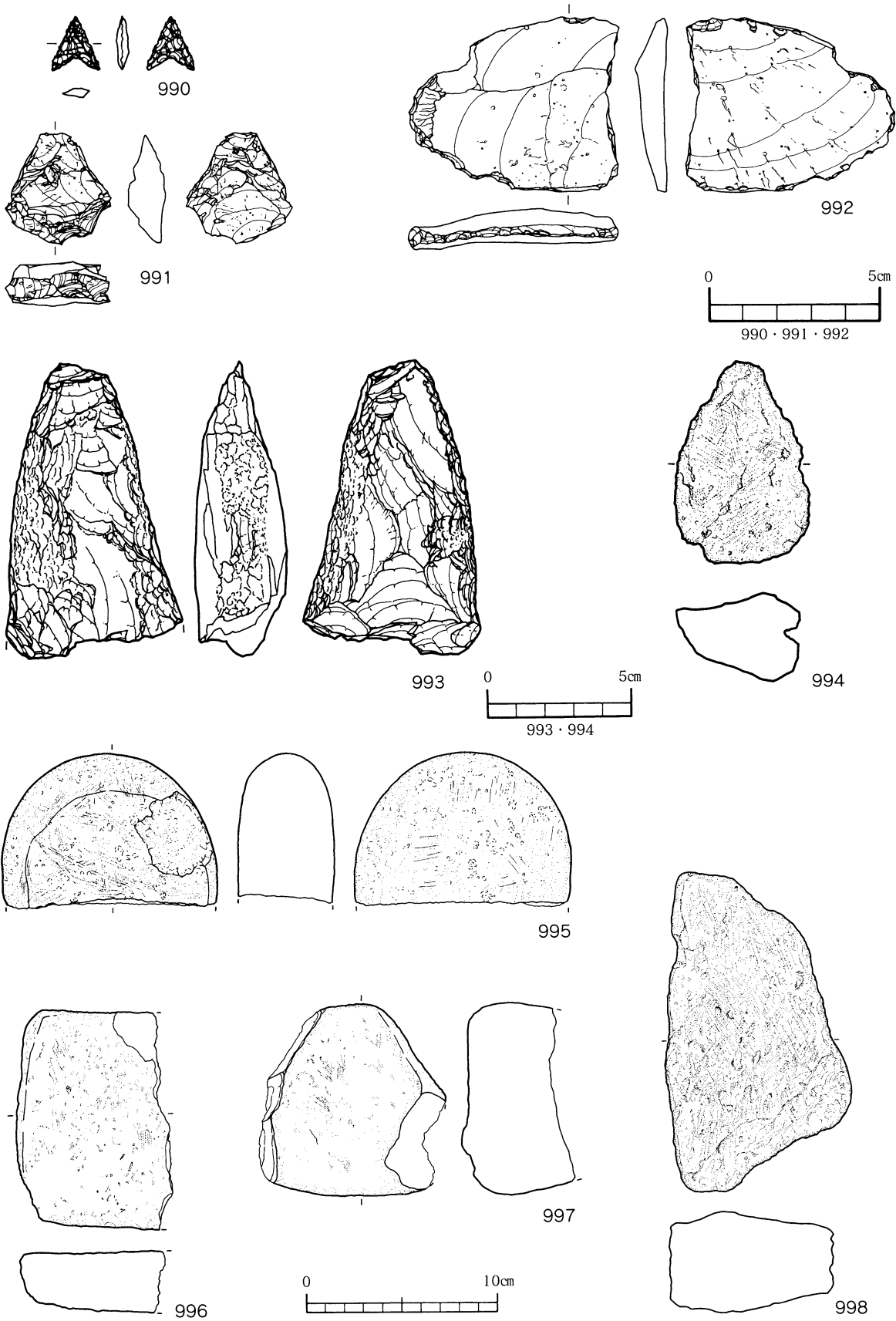
剥離を加えて大まかに形をつくった後、入念に敲打している。敲打面よりも剥離面の方が広いことから、製作途中で折れた可能性もある。

### 軽石製品 (第123図 994・998)

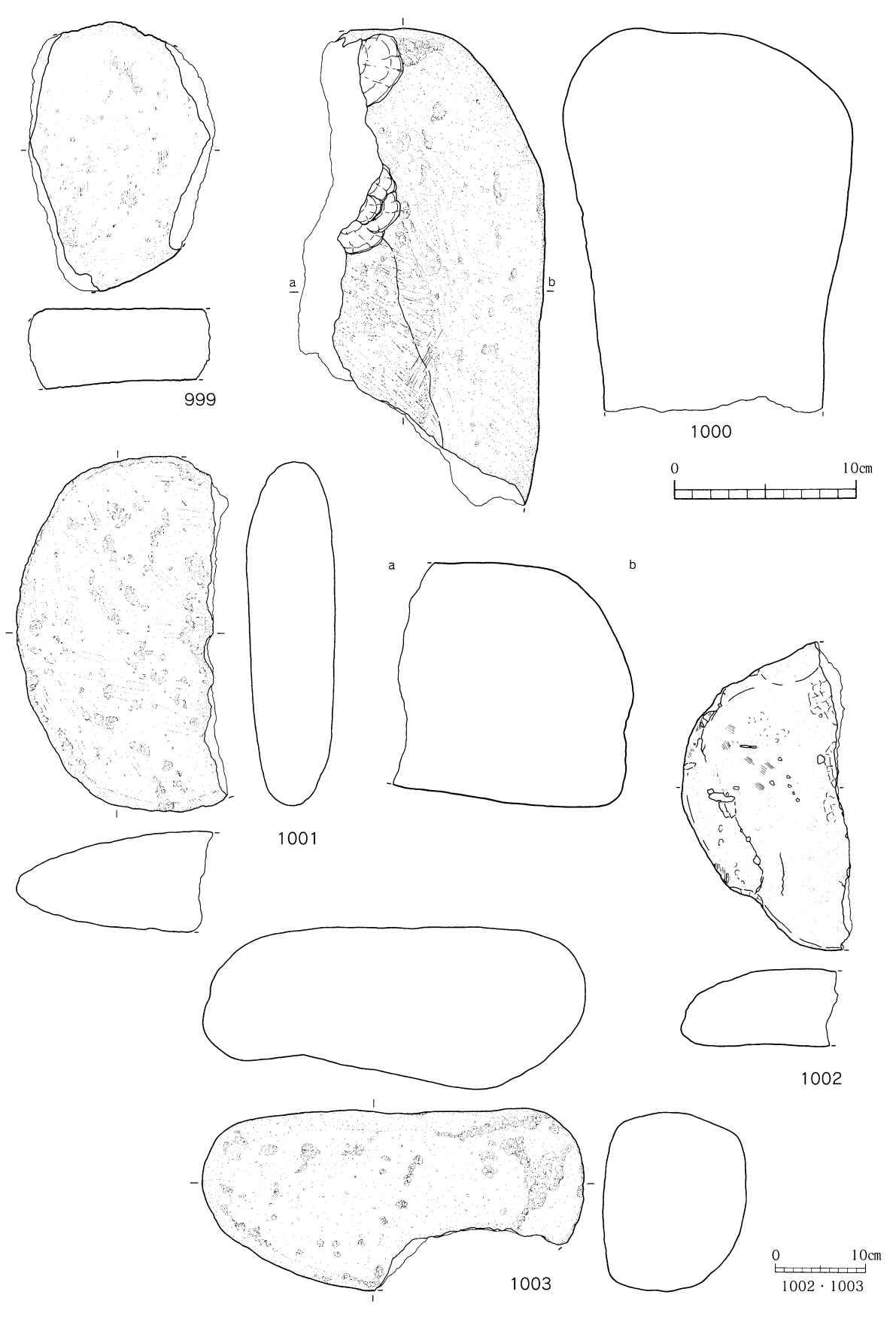
形状も擦痕もはっきりせず、用途は不明である。

### 磨石 (第123図 995)

花崗岩を素材とするもので、全体的に磨られている。

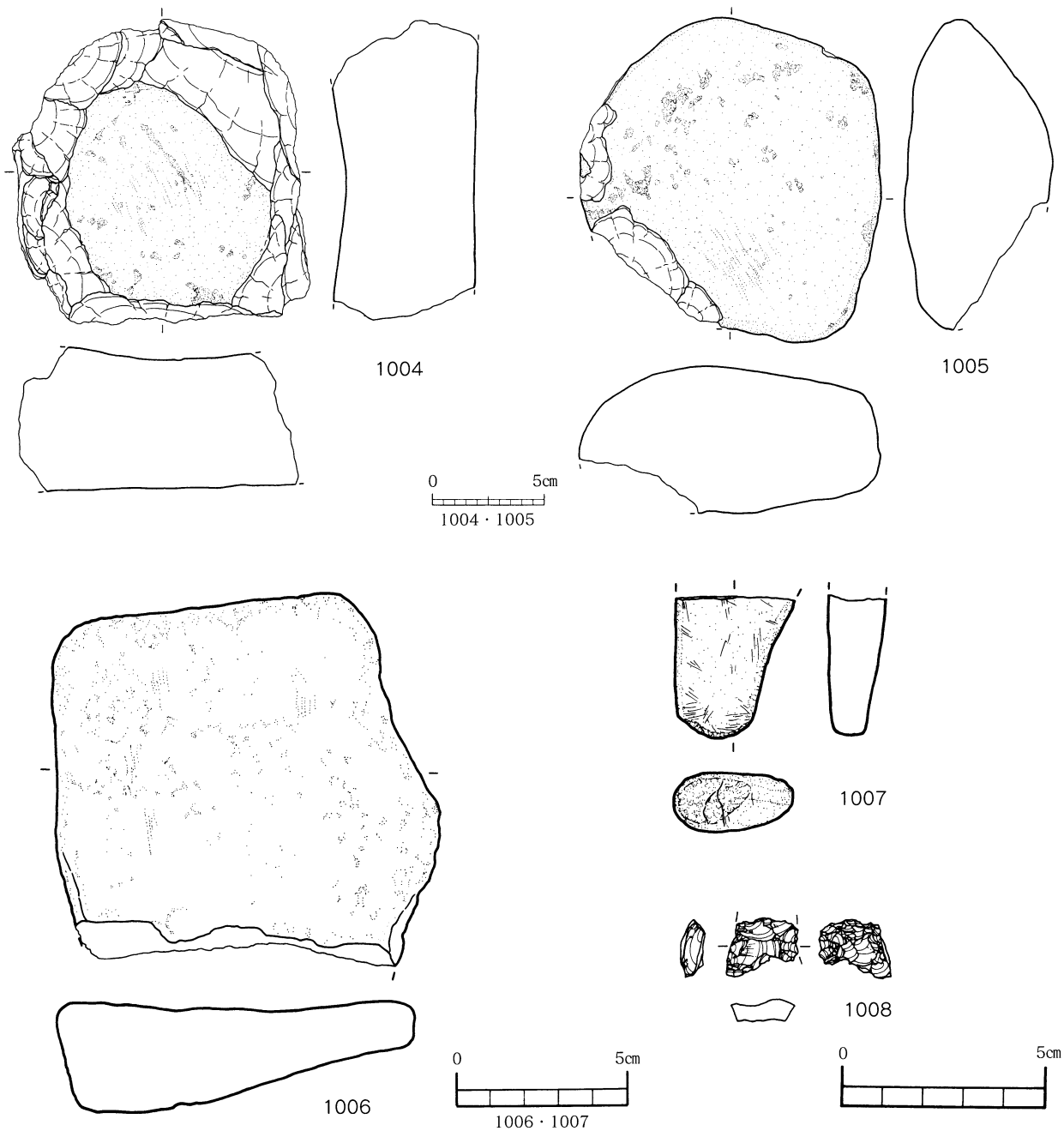


第123図 溝状遺構 2 出土石器 (1)



第124図 溝状遺構 2 出土石器 (2)





第125図 溝状遺構2出土石器(3)

**石皿(第123~125図 996・997・999~1002・1004・1005)**

996は手の平にのる方形の安山岩礫の平坦面を使用している。997は自然の凹凸面の一部に使用痕が観察できる。この部分はやや黒味を帯びる。1004は周縁が風化しており形がはっきりしないが、定形的な石皿と考えられる。皿面は湾曲し、使用による磨滅も著しい。1005は皿状とは逆に凸レンズ状にふくらみをもつものである。水辺で皮や衣類をもみ洗いするための石としても考える必要がある。

**溝状遺構内出土杭列(第127~130図)**

63本中39点を図化した。杭列は大型の丸杭, 角杭, 割杭によって構成され, 杭の多くは

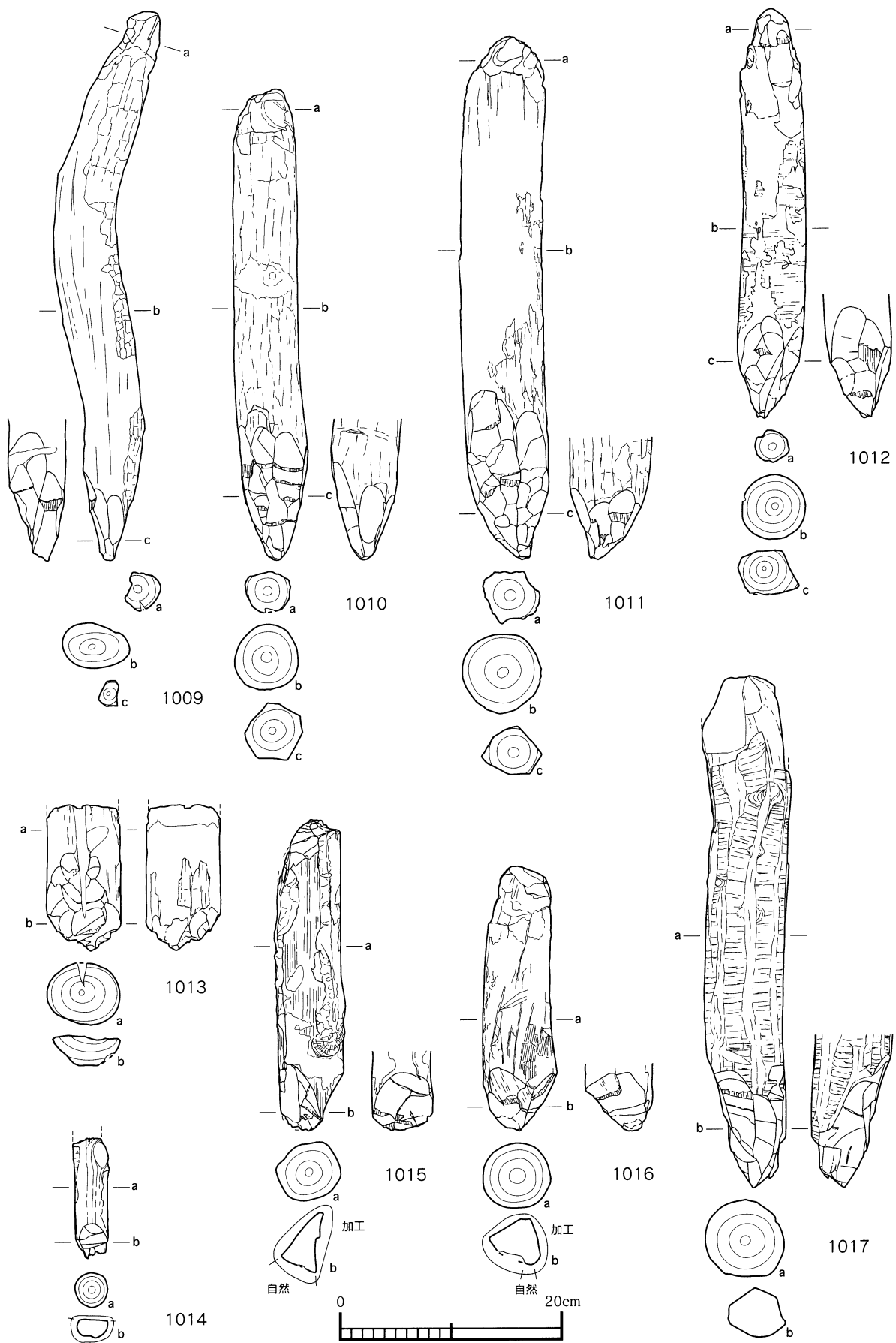
先端の加工が複数の方向から行われるために鋭く尖っている。加工痕の種類はほとんどがA種刃線痕である。

#### 丸杭

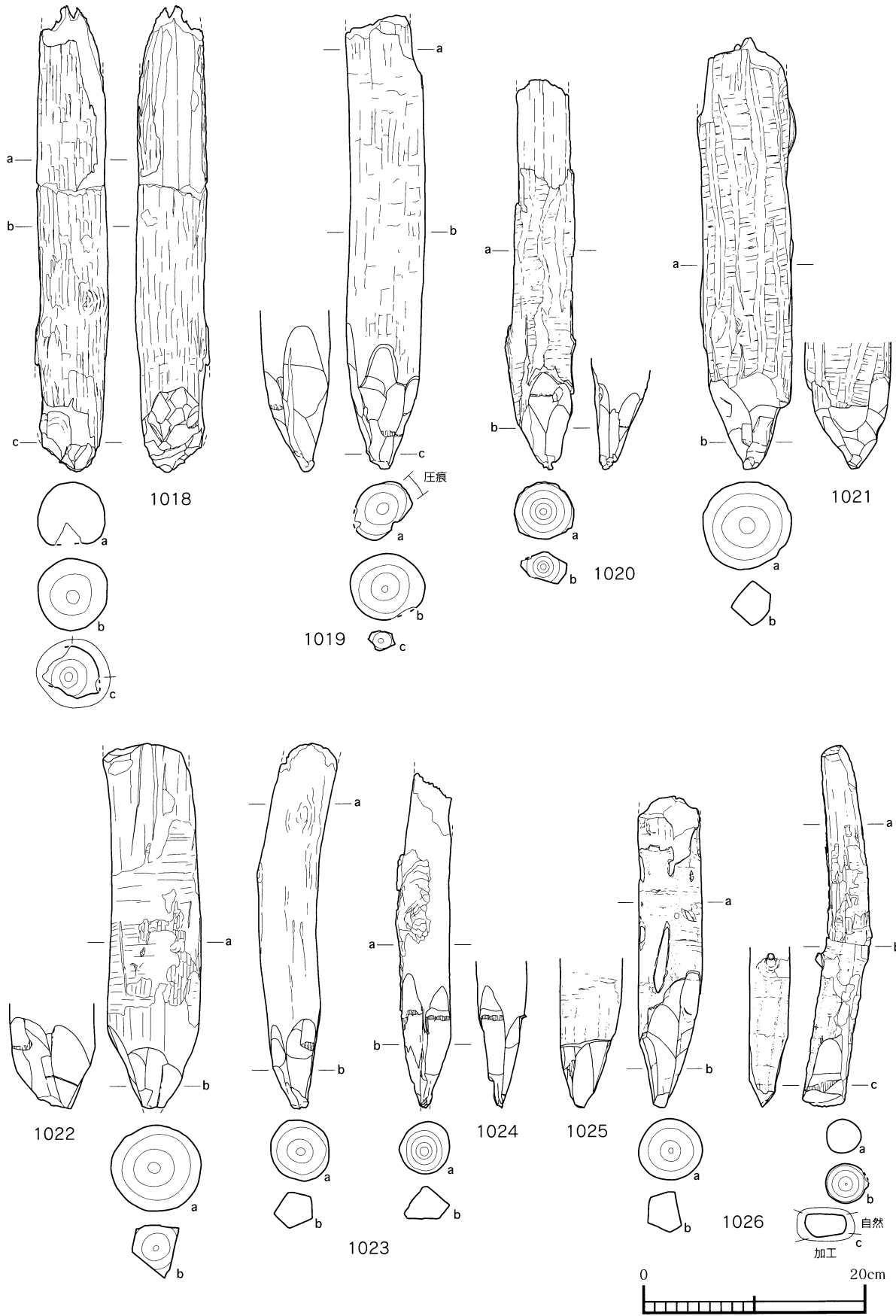
1009～1026は芯持材を利用した丸杭で、全て表面には樹皮が残っている。1009～1012は杭の上端を細く削り出しており、他の部材と組み合わせて使用していた可能性がある。1009は杭の先端を5面に加工し、加工部には凸状刃こぼれ痕が残っている。削り出された杭の上端にも加工痕が残る。1010の杭の上面は打ち込まれた際に平坦になったと思われる。先端は多面から加工され、凸状刃こぼれ痕が顕著にみられる。1011の上部は加工のために先細りする形態である。先端は加工単位が複雑に切りあい、凸状刃こぼれ痕、刃端痕が確認できる。1012の上部は加工によって上端が細くなっている。摩耗のために上端の加工単位は不明である。先端は4面に加工されている。1013の先端は2面、1014の先端は片側1面の加工である。1015・1016の上部は削り出されている可能性がある。共に先端の加工部には、刃端痕、凸状刃こぼれ痕が残る。1018の先端は多方面から加工されているために加工単位が複雑に切りあっている。1019は上部の右側面に圧痕が残り先端は5面に加工されている。1021は先端を5面に加工している。加工幅が3.5 cmと大きく加工部には刃端痕が残る。1022は最大直径8.2 cmの大型の丸杭である。先端部は4面に加工され、刃端痕が残っている。1026の先端は2面に加工され、加工部の両側面には樹皮が残っている。

#### 角杭・割杭

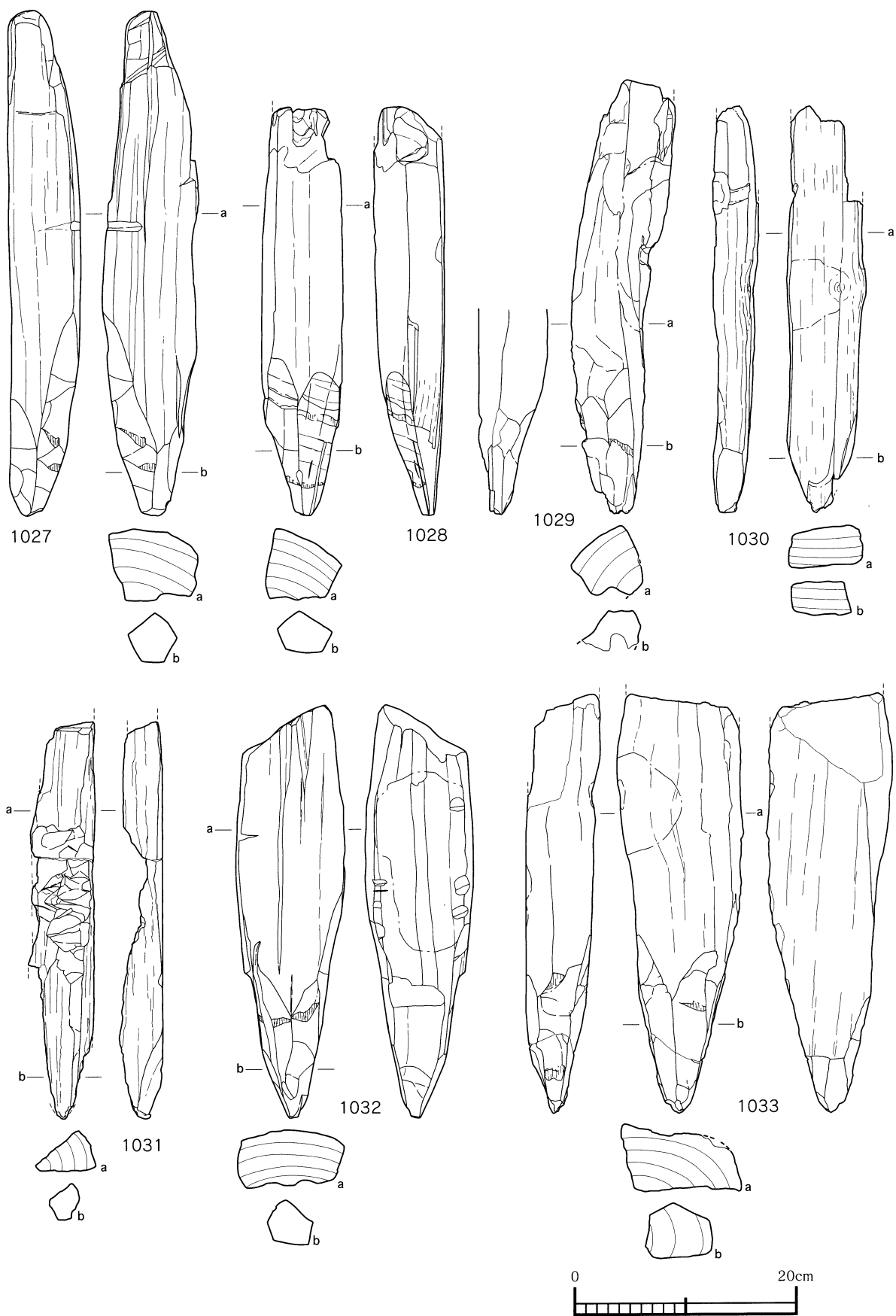
1027～1047は角杭及び割杭で、建築材を転用したものも含まれている。1027～1033は杭に加工や、圧痕が残っているものである。1027は長さ45.6 cm、最大幅8.1 cmの角杭である。上端から約6 cmは断面方形に一段細く削り出されている。先端部は4面に加工されている。建築部材の転用品と思われ、杭上部の加工が転用される以前、以後のどちらのものであるかは不明である。1028は杭の正面と側面の上部2か所に略方形に近い穴が開けられている。穴は貫通せず、内面は丸みを帯び、面を整えて成形していない。大きさは正面の穴が横2 cm×縦3.4 cm、深さ1.5 cm、側面の穴が横2.8 cm、縦4.7 cm、深さ1.7 cmである。先端は加工単位が明瞭でなく、木端に覆われていない刃線痕が多く残ることから加工の種類はB種刃線痕と思われる。1029はみかん割り状の割杭で右側面中央に幅1.5 cmの方形を呈する穿孔が施され、その周囲は押圧によって浅く凹んでいる。1030は断面方形の板目材を利用した角杭である。左側面には幅1.1 cmの穿孔が施され正面中央に圧痕が見られる。丁寧に加工された角材であることから建築材の転用品と思われる。1031はみかん割り状の割杭である。杭の中央部を縦方向に14 cm程削り込んでいる。加工部には、複雑に加工単位が切り合っており、刃線痕も多く残る。1032・1033は建築材を利用した大型の角杭で、共に圧痕が残っている。1032は板目材を利用した角杭で杭の中央部に16 cm×8 cmの圧痕が残っている。先端は5面に加工され、刃端痕が残っている。1033は杭の上部に9 cm×5.5 cmの範囲で圧痕が残っている。1034～1039は板状を呈し、先端の加工が他の杭に比べ施されていないものである。1034はみかん割り状の木材を利用し、先端は潰れている。1036・1037は桁目材を利用したものである。1038・1039は樹皮付近を利用した板目材を使用している。



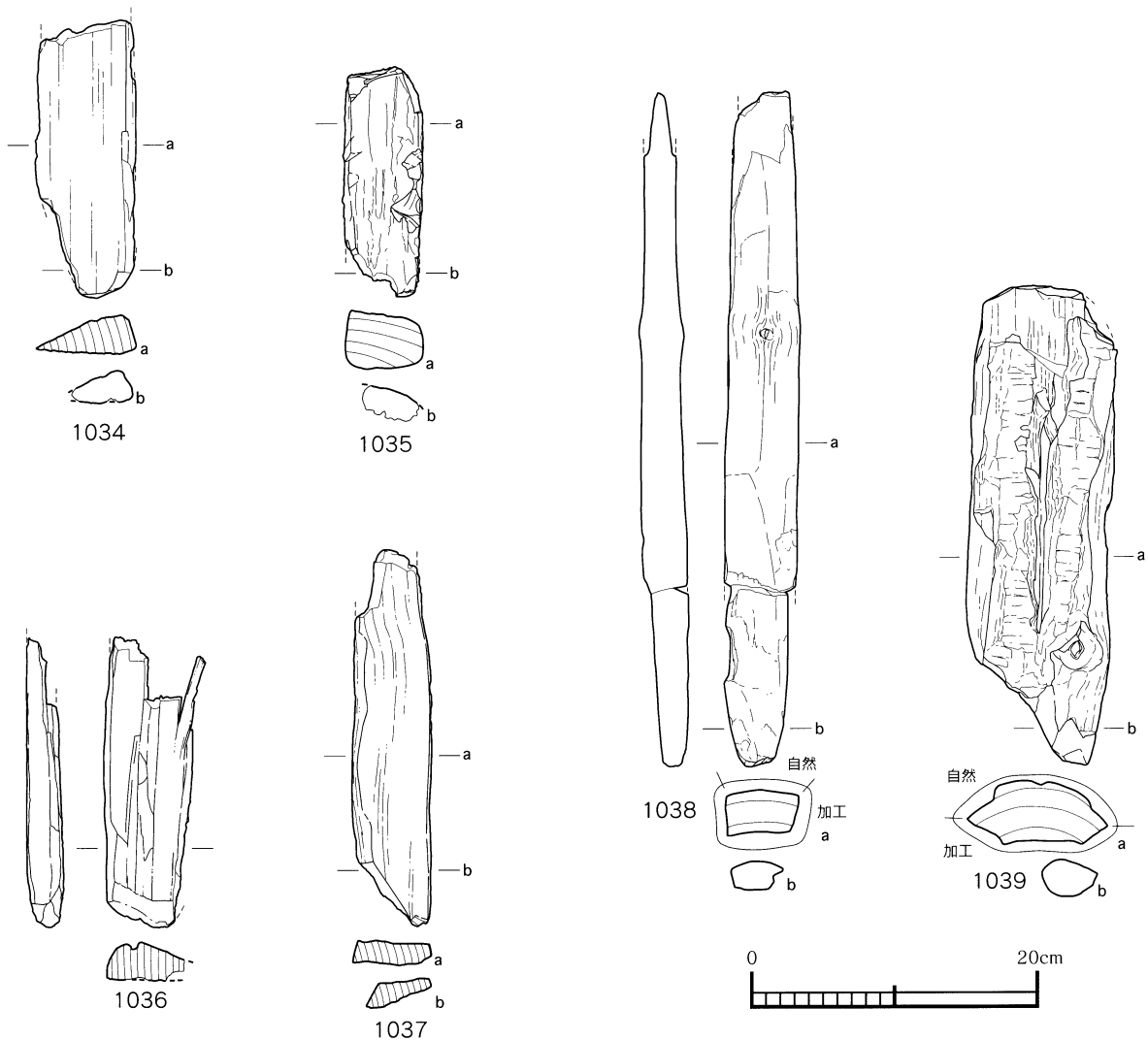
第126図 溝状遺構 2 内杭 (1)



第127图 沟状遗构2内杭(2)

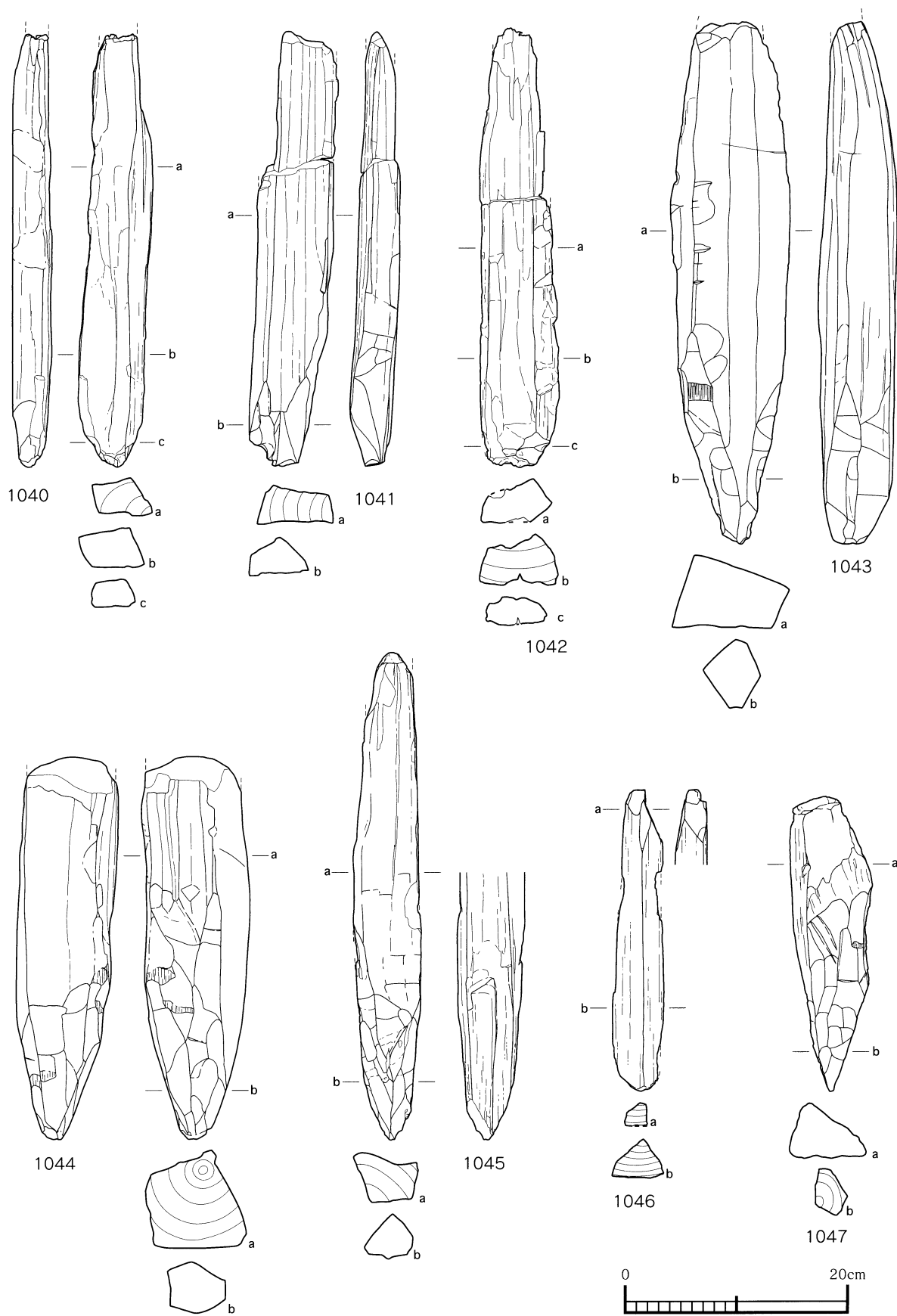


第128図 溝状遺構2内杭(3)

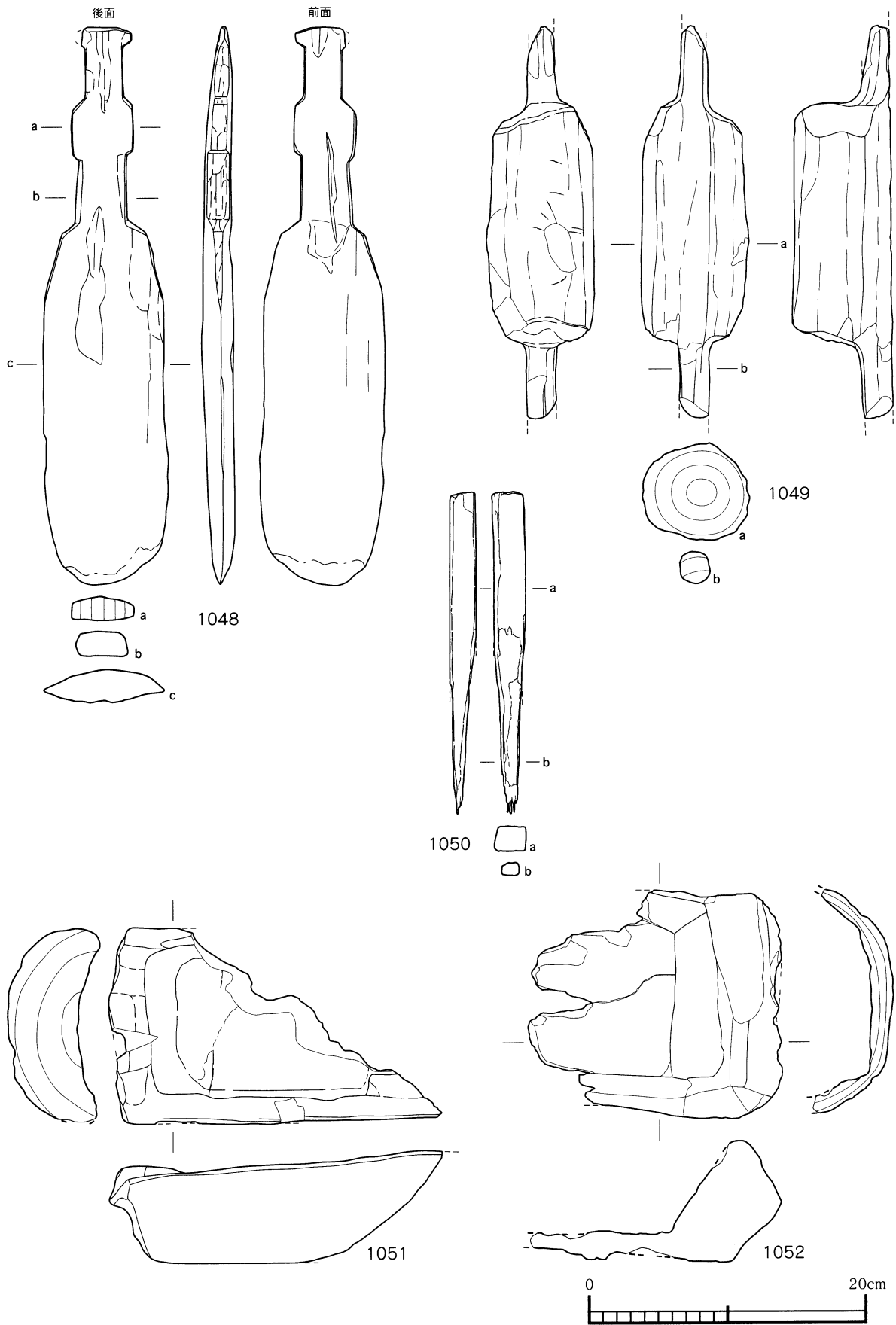


第129図 溝状遺構 2内杭（4）

1039の上端には切断の際の加工痕が残っている。先端は1面のみの簡単な加工が施されている。1040～1047は割杭及び角杭である。1040は右側面に2か所圧痕が残っている。先端の加工は粗雑である。1041は断面方形の角杭である。先端は2面に加工され、刃端痕が残っている。1043は残存長47.4 cm、最大幅10.8 cmの大型の角杭である。杭の上部は先端に比べ厚さが薄く上端には加工痕がみられる。全体を丁寧に削りだしていることから建築材の転用品と思われる。1044は芯持材を利用した大型の角杭で、建築材の転用品と思われる。最大厚は9.3 cmで、右側面に圧痕が2か所残っている。1046は断面が三角形を呈するみかん割り状の割杭である。先端は未加工で潰れている。上端は3面に加工されている。1047の先端は、縦方向に短い加工単位が複雑に切りあい、数回に渡り加工されている。加工幅は2.5 cmで、断面がかなり湾曲している。刃線痕が木端に覆われていないことからB種刃線痕と思われる。杭の上端は平坦となっている。

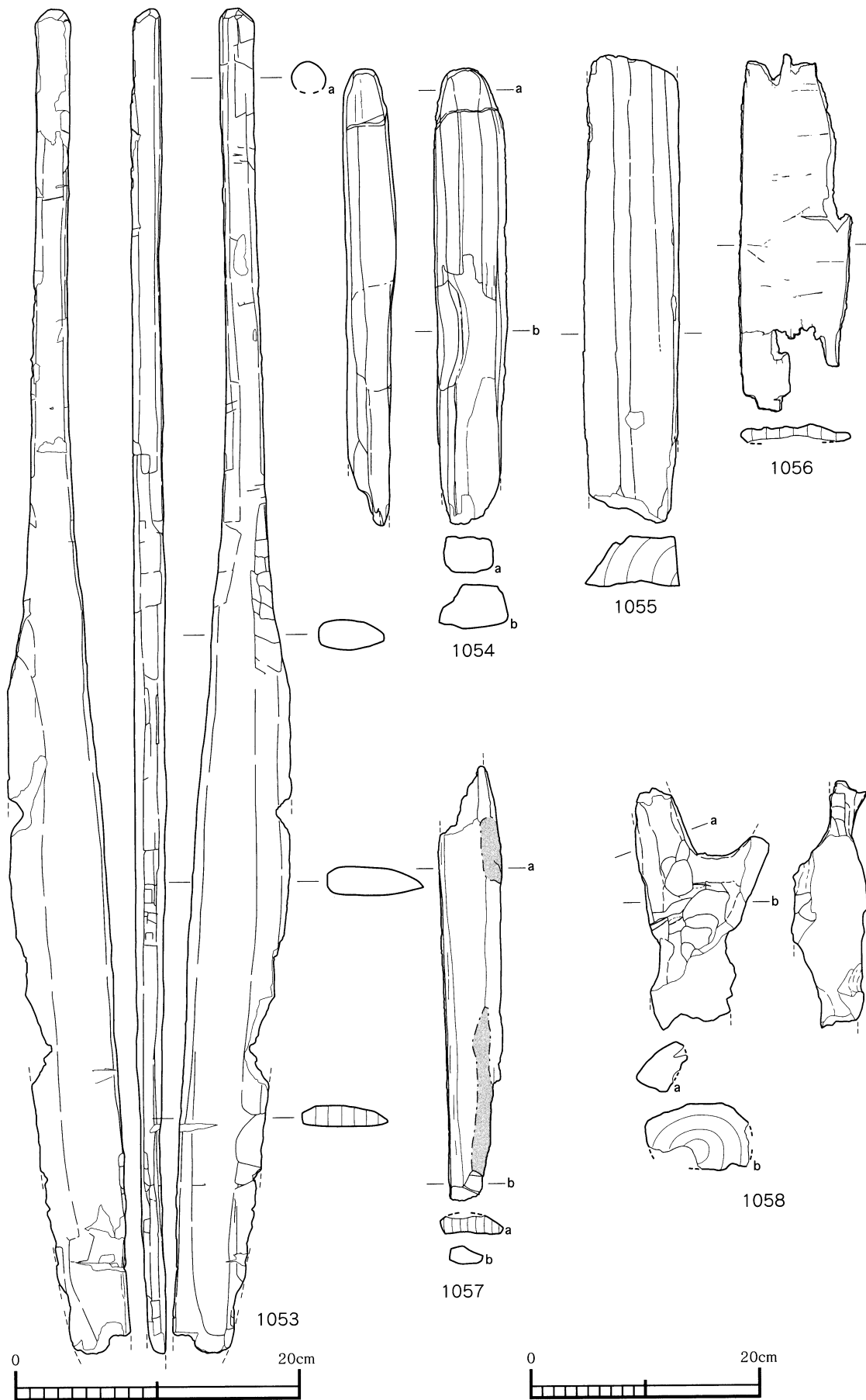


第130図 溝状遺構2内杭(5)



第131図 溝状遺構 2 出土木製品 (1)





第132図 溝状遺構 2 出土木製品 (2)

## 溝状遺構 2 出土木製品

総数23点の木製品が出土した。大半は製材片や用途不明の木材片であった。その中から農具や容器など12点を選び図化した。

### 曲柄平鍬 (第131図 1048)

軸部長13.7cm, 刃部長26.1cm, 全長は39.8cmである。軸頭は幅1cm程両側へ張り出し外側に向かって薄くなる。軸部の中央両端は長さ4cm, 幅1cm程外側へ張り出している。軸部の断面形は後面が丸みを帯び、前面は平坦で両側面は垂直に加工されている。刃部との境には小さな肩をもち、明瞭に区画され、そこから刃部両側が平行に伸びる。後面には鍬身の中心に沿って軸部と刃部の2か所に浅い凹みがみられる。前者が長さ7.5cm, 幅1cm, 深さ3mm, 後者が長さ6.5cm, 幅1.2cm, 深さ2mmである。また、軸部の前面にも長さ8.2cm, 幅5mm, 深さ2mmの溝状の凹みが残っている。さらに、刃部と軸部の境は浅く凹んでおり、鍬台に装着した際の圧痕と考えられる。刃部の先端は後面の左側が特に摩耗しており、左利きの人が使用したと思われる。

### 容器 (第131図 1051,1052)

1051・1052は芯持材を半割して削り抜き製作している。1051は左側の短辺に厚さ1cm

第22表 溝状遺構 2 出土土器観察表 ( ) は復元径

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量 (cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
116	905	弥生土器	甕		Ia	内: 浅黄色2.5Y7/3 外: にぶい黄橙色 10YR7/4	口縁: 横ナデ 胴部: ハケ目後横ナデ	ハケ目後横ナデ	(16.1)	-	-	石英, 角閃石を多く含む	良好	
116	906	弥生土器	甕		Ia	内: にぶい黄橙色 10YR7/2 外: にぶい黄橙色 10YR6/3	ハケ目, 横ナデ	ハケ目, ナデ	(21.3)	-	(6.4)	角閃石, 石英を含む	良好	煤付着
116	907	弥生土器	甕		Ia	内: 黒色10YR2/1 外: 灰白色10YR8/2	ハケ目後ナデ	ハケ目, ナデ, 削り, ミガキ	(19.0)	-	-	石英を多く含む	良好	煤付着
116	908	弥生土器	甕		Ic	内: 淡黄色2.5Y8/3 外: 灰黄色2.5Y7/2	ハケ目後ナデ	ナデ	(24.9)	-	-	石英を所々に含む	良好	煤付着
116	909	弥生土器	甕		Ic	内: 灰黄褐色10YR6/2 外: 灰黄褐色10YR5/2	ハケ目後板ナデ	ハケ目, 横ナデ	(24.2)	-	-	石英を多く含む	良好	煤付着
116	910	弥生土器	甕		Ic	内: にぶい黄橙色 7.5YR7/4 外: 浅黄褐色10YR8/4	口縁: 横ナデ 胴部: ハケ目後横ナデ	ハケ目後ナデ	(19.2)	-	-	石英, 角閃石を含む	良好	
116	911	弥生土器	甕		Ic	内: 灰白色2.5Y7/1 外: 黄灰色2.5Y4/1	板ナデ	口縁: 横ナデ 胴部: ハケ目	(25.1)	-	-	石英, 角閃石を所々に含む	良好	煤付着
116	912	弥生土器	甕		Ic	内: にぶい黄橙色 10YR7/2 外: にぶい黄褐色 10YR7/3	ハケ目, ナデ, 板ナデ	ハケ目, 板ナデ	(23.7)	-	(4.2)	石英を多く含む	良好	
116	913	弥生土器	甕		Ic	内: 灰黄褐色10YR6/2 外: 灰白色10YR7/1	ハケ目後板ナデ	横ナデ, ナデ	(21.4)	-	-	石英を含む	良好	
116	914	弥生土器	甕	II	Ic	内: 灰黄色2.5Y7/2 外: にぶい黄褐色 10YR7/3	ハケ目	ナデ	(17.9)	-	-	石英, 角閃石を所々に含む	良好	
116	915	弥生土器	甕		Ic	内: 灰白色10YR8/2 外: 浅黄色2.5Y7/3	ハケ目	ハケ目, 横ナデ	-	-	-	石英を多く含む	良好	
116	916	弥生土器	甕		Ic	内: 褐灰色10YR5/1 外: にぶい黄褐色 10YR6/3	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	-	-	-	石英を多く含む角閃石を 所々に含む	良好	
116	917	弥生土器	甕		Ic	内: 灰黄褐色10YR6/2 外: 褐灰色10YR6/1	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	-	-	-	石英, 角閃石を含む	良好	
116	918	弥生土器	甕		Ic	内: 灰白色10YR7/1 外: 褐灰色10YR6/1	ハケ目	ハケ目	-	-	-	石英を所々に含む	良好	
117	919	弥生土器	甕		Ic	内: 灰白色2.5Y8/2 外: 浅黄色2.5Y7/3	ハケ目	ハケ目	-	-	-	石英を微量含む	良好	
117	920	弥生土器	甕		Ic	内: 灰黄褐色10YR6/2 外: 灰白色10YR8/2	ハケ目	ハケ目	-	-	-	石英を多く含む	良好	
117	921	弥生土器	甕		Ic	内: にぶい黄色2.5Y6/3 外: 浅黄色2.5Y7/3	板ナデ	ハケ目	-	-	-	石英を多く含む	良好	
117	922	弥生土器	甕		Ic	内: 浅黄色2.5Y7/3 外: 灰黄色2.5Y7/3	ナデ	ナデ	-	-	-	石英, 角閃石を所々に含む	良好	
117	923	弥生土器	甕		Ic	内: 灰白色2.5Y7/1 外: 黄灰色2.5Y6/1	ハケ後横ナデ	ナデ	-	-	-	石英, 角閃石を含む	良好	

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量 (cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
117	924	弥生土器	甕	I	III	内:灰黄褐色10YR6/2 外:褐灰色10YR6/1	口縁:横ナデ 胴部:工具ナデ, ナデ	横ナデ	(11.7)	5.1	14.0	石英, 角閃石を多く含む	良好	
117	925	弥生土器	甕	I	III	内:明褐色7.5YR5/8 外:口縁部 黒色2.5Y2/1 胴部:にぶい黄橙色 10YR6/3	ハケ目	ハケ目 胴部下部:ヘラ削り	(24.9)	-	-	石英, 角閃石, 1mm大の 小石を含む	良好	
117	926	弥生土器	甕		IV	内:にぶい黄橙色 10YR7/2 外:浅黄褐色10YR8/4	ハケ目後ナデ	ハケ目後板ナデ, ナデ	-	-	-	石英を微量含む	良好	
117	927	弥生土器	甕	II	IV	内:灰黄褐色10YR6/2 外:にぶい黄橙色 10YR7/3	横ナデ, ナデ	ナデ	-	-	-	石英, 角閃石を含む	良好	
118	928	弥生土器	甕			内:灰黄色2.5Y7/2 外:灰黄色2.5Y7/2	ハケ目, ナデ	ハケ目後ナデ, ナデ	-	(6.2)	-	石英, 角閃石を所々に含 む	良好	
118	929	弥生土器	甕			内:灰白色2.5Y8/2 外:灰白色5Y8/2	工具ナデ, 横ナデ	工具ナデ後ナデ	-	(7.7)	-	石英, 角閃石, 長石を含 む	良好	
118	930	弥生土器	甕			内:灰白色10YR7/1 外:にぶい黄橙色 10YR7/4	ハケ目, ハケ後ナデ	ハケ目	-	-	-	石英, 角閃石を含む 白い小石を多く含む	良好	
118	931	弥生土器	甕			内:にぶい黄橙色 10YR7/3 外:にぶい黄橙色 10YR6/3	ハケ目, 横ナデ	ハケ目	-	8.9	-	石英, 角閃石を含む 白い小石を多く含む	良好	
118	932	弥生土器	甕			内:にぶい黄褐色 7.5YR7/3 外:灰白色7.5YR8/2	ハケ目後ナデ	板ナデ, ハケ目	-	9.2	-	石英を所々に含む	良好	
118	933	弥生土器	甕			内:にぶい黄褐色 10YR5/3 外:にぶい黄褐色 10YR6/4	工具ナデ	ナデ, 工具ナデ	-	10.2	-	石英, 角閃石を多く含む		
118	934	弥生土器	甕			内:灰黄色2.5YR7/2 外:灰白色10YR8/2	板ナデ後ナデ	ナデ	-	8.0	-	石英, 角閃石を所々に含 む	良好	
118	935	弥生土器	甕			内:灰白色10YR7/1 外:にぶい黄褐色 10YR7/2	板ナデ後ナデ	ナデ	-	7.1	-	石英を多く含む	良好	
118	936	弥生土器	甕			内:褐灰色10YR5/1 外:灰白色10YR8/2	ハケ目, ナデ	ナデ	-	7.2	-	石英, 角閃石を所々に含 む	良好	
118	937	弥生土器	甕			内:浅黄褐色10YR8/3 外:灰白色2.5Y8/2	板ナデ後ナデ	ハケ目	-	8.8	-	石英を所々に含む	良好	
118	938	弥生土器	甕			内:にぶい黄褐色 10YR6/4 外:にぶい黄褐色 10YR6/3	ハケ目, ナデ	ハケ目, ナデ	-	10.2	-	石英を多く含む	良好	
118	939	弥生土器	甕			内:にぶい黄褐色 10YR7/2 外:灰白色10YR7/1	ハケ目, ハケ後ナデ	ハケ目, ナデ	-	7.9	-	石英を微量に含む	良好	
118	940	弥生土器	甕			内:灰黄褐色10YR6/2 外:にぶい黄褐色 10YR7/2	ハケ目	ハケ目後ナデ	-	-	-	石英を含む	良好	
118	941	弥生土器	壺		I a	内:にぶい黄褐色 10YR7/3 外:灰黄褐色10YR6/2	ナデ, ハケ目, ハケ後ナ デ	ハケ目	-	8.9	-	石英を所々に含む 白い砂粒を微量に含む	良好	
118	942	弥生土器	壺		I a	内:灰白色10YR8/2 外:灰黄褐色10YR6/2	ナデ, 横ナデ	板ナデ後ナデ	-	10.8	-	石英を多く含む	良好	
119	943	弥生土器	壺		II	内:にぶい黄褐色 10YR7/3 外:浅黄褐色10YR8/4	口縁:横ナデ 胴部:ハケ目, 削り後ハ ケ目	ハケ目	10.7	4.5	19.8	石英, 角閃石を含む	良好	
119	944	弥生土器	壺			内:灰白色10YR8/2 外:灰白色2.5Y8/2	ハケ目後1部ナデ, ナデ	ヘラ削り, ナデ	-	4.7	-	精製された胎土	良好	
119	945	弥生土器	壺			内:灰黄色2.5Y7/2 外:灰白色2.5Y8/2	ハケ目, ナデ	ハケ目後ナデ	(16.0)	-	35.9	角閃石, 石英を含む		
119	946	弥生土器	壺			内:にぶい黄褐色 10YR7/3 外:にぶい黄褐色 10YR7/4	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	11.2	-	-	精製された胎土	良好	
119	947	弥生土器	壺			内:灰白色2.5Y7/1 外:灰黄色2.5Y7/2	横ナデ, ナデ	ナデ	(17.5)	-	-	石英, 角閃石を含む	良好	
119	948	弥生土器	壺			内:灰黄褐色10YR6/2 外:にぶい黄褐色 10YR7/3	ハケ目後横ナデ, ハケ目	横ナデ, ナデ	(11.6)	-	-	石英, 角閃石を多く含む	良好	
120	949	弥生土器	壺			内:にぶい黄褐色 10YR7/4 外:にぶい黄褐色 10YR7/3	ハケ目後ナデ	横ナデ	(15.8)	-	-	石英を多く含む 角閃石 を微量含む	良好	
120	950	弥生土器	壺			内:にぶい黄褐色 10YR6/3 外:灰白色10YR8/2	ナデ	ナデ	-	-	-	石英, 角閃石を含む	良好	
120	951	弥生土器	壺			内:にぶい黄褐色 10YR7/2 外:灰白色10YR8/2	ナデ	板ナデ後ナデ	-	2.7	-	石英, 角閃石を所々含 む	良好	
120	952	弥生土器	壺			内:にぶい黄褐色 10YR7/2 外:にぶい黄褐色 10YR7/3	ハケ目, ハケ後ナデ	ナデ	-	4.0	-	石英, 角閃石を所々含 む	良好	
120	953	弥生土器	壺			内:灰黄色2.5Y7/1 外:にぶい黄褐色 10YR7/2	ハケ目, ヘラ削り後ナ デ, 板ナデ	ハケ目, ナデ	-	-	-	石英, 角閃石, 長石を 所々含む	良好	
120	954	弥生土器	壺			内:灰黄色2.5Y7/1 外:灰白色2.5Y7/1	ハケ目後ナデ	ハケ目板ナデ, ナデ	-	-	-	石英を多く含む	良好	
120	955	弥生土器	壺			内:にぶい黄褐色 10YR7/3 外:にぶい黄褐色 10YR7/4	ナデ	ナデ, ヘラ削り	-	3.0	-	石英, 角閃石を所々含 む	良好	

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量 (cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
120	956	弥生土器	小型丸底壺			内:淡黄色2.5Y8/3 外:灰黄色2.5Y7/2	口縁:横ナデ 胴部:ハケ目,ハケ後横 ナデ,削り後ナデ	口縁:横ナデ 胴部:横ナデ	7.9	2.5	10.0		良好	
120	957	弥生土器	小型丸底壺			内:明褐色7.5YR7/2 外:にぶい黄橙色 10YR7/3	ハケ目後ナデ,ナデ	ナデ	8.8	-	9.4	精製された胎土	良好	
120	958	弥生土器	小型丸底壺			内:褐色10YR4/1 外:黒褐色10YR3/1	ナデ,ハケ目 板ナデ	板ナデ,ナデ	-	-	-	精製された胎土	良好	
120	959	弥生土器	小型丸底壺			内:灰黄褐色10YR6/2 外:灰黄色2.5YR6/2	ハケ目後ナデ	ハケ目	(8.3)	-	-	精製された胎土	良好	
120	960	弥生土器	小型丸底壺			内:にぶい黄色2.5Y6/3 外:浅黄色2.5Y7/2	横ナデ	ナデ	-	-	-	精製された胎土	良好	
120	961	弥生土器	小型丸底壺			内:浅黄褐色10YR8/4 外:灰白色5Y8/2	横ナデ	横ナデ	(9.8)	-	-	精製された胎土	良好	
120	962	弥生土器	小型丸底壺			内:にぶい黄褐色 10YR7/2 外:灰白色10YR8/2	横ナデ	横ナデ	-	-	-	精製された胎土	良好	
120	963	弥生土器	鉢			内:にぶい黄褐色 10YR7/1 外:灰白色10YR7/1	ナデ ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	(31.8)	-	(8.8)	石英,角閃石を所々に含 む	良好	煤付着
120	964	弥生土器	鉢			内:にぶい黄褐色 10YR7/2 外:にぶい黄褐色 10YR6/3	板ナデ後ナデ	ハケ目後ナデ	(21.0)	-	-	石英,角閃石を含む	良好	
120	965	弥生土器	鉢			内:にぶい黄褐色 10YR6/3 外:灰黄褐色10YR6/2	板ナデ後ナデ	板ナデ	(21.2)	-	-	石英,角閃石を含む	良好	
121	966	弥生土器	鉢			内:浅黄色2.5Y7/3 外:にぶい黄褐色 10YR7/2	ナデ	ハケ目後ナデ	(15.2)	-	-	石英を多く含む	良好	
121	967	弥生土器	鉢			内:にぶい黄色2.5Y6/3 外:浅黄色2.5Y7/4	ハケ目後ナデ	ナデ	-	-	-	砂粒を含まない精製さ れた胎土	良好	
121	968	弥生土器	鉢			内:褐色10YR4/1 外:灰黄褐色10YR6/2	ハケ目	ハケ目後ナデ	-	-	-	長石を所々含む	良好	
121	969	弥生土器	鉢			内:にぶい黄褐色 10YR6/4 外:にぶい黄褐色 10YR6/3	ハケ目後ナデ	ハケ目横ナデ	-	-	-	石英,角閃石を多く含む	良好	
121	970	弥生土器	鉢			内:にぶい黄褐色 10YR7/3 外:灰黄褐色10YR6/2	ナデ	ナデ	(8.2)	-	-	石英,角閃石を所々含 む	良好	
121	971	弥生土器	鉢			内:にぶい黄褐色 10YR7/2 外:灰白色10YR8/1	ナデ	ナデ	-	-	-	1mm大の石英を多く含む	良好	
121	972	弥生土器	鉢			内:にぶい黄褐色 10YR7/2 外:にぶい黄褐色 10YR7/3	ハケ目,削り後ナデ	ハケ目,ナデ	-	-	-	石英を含む	良好	
121	973	弥生土器	鉢		II	内:灰黄色2.5Y7/2 外:灰白色2.5Y7/1	ハケ目後1部ナデ	ナデ	-	6.1	-	石英,角閃石を含む	良好	
121	974	弥生土器	高坏			内:灰黄褐色10YR6/2 外:橙色7.5YR6/6	ハケ目, ハケ後横ナデ	横ナデ	(27.2)	-	-	石英,角閃石を含む	良好	
121	975	弥生土器	高坏			内:浅黄色2.5Y7/3 外:灰黄褐色10YR6/2	ハケ目	ナデ	-	-	-	石英,角閃石を含む	良好	
121	976	弥生土器	高坏			内:にぶい黄褐色 10YR7/2 外:にぶい黄褐色 7.5YR7/3	口縁:削り,横ナデ 胴部:板ナデ,ハケ目	口縁:横ナデ 胴部:ハケ目	(23.5)	-	-	石英,角閃石を所々含 む	良好	
121	977	弥生土器	高坏			内:灰黄色2.5Y6/2 外:灰黄色2.5Y7/2	ハケ目	横ナデ, ハケ目後ナデ	(19.0)	-	(6.1)	石英を所々含む	良好	
121	978	弥生土器	高坏		II	内:灰黄褐色10YR5/4 外:にぶい黄褐色 10YR7/3	ハケ後横ナデ	ハケ目,横ナデ	(30.0)	-	-	石英,角閃石を多く含む	良好	
121	979	弥生土器	高坏			内:にぶい黄色2.5Y6/4 外:にぶい黄褐色 7.5YR6/4	ナデ,ヘラ削り後ナデ	ナデ	-	-	-	角閃石を含む	良好	
121	980	弥生土器	高坏			内:灰黄色2.5Y6/1 外:にぶい黄褐色 10YR6/4	ハケ目	横ナデ	-	-	-	石英,角閃石を多く含む	良好	
121	981	弥生土器	高坏			内:にぶい黄褐色 10YR7/2 外:黄灰色2.5Y5/1	ハケ目後ナデ,ナデ	ナデ,ハケ目後ナデ	-	-	-	石英を多く含む	良好	
122	982	弥生土器	高坏			内:灰黄褐色10YR6/2 外:灰白色2.5Y8/2	ハケ目,ナデ	板ナデ	-	12.0	-	石英,角閃石を所々含 む	良好	
122	983	弥生土器	高坏			内:淡黄色2.5Y8/3 外:灰白色10YR8/2	ヘラ削り後ナデ, 磨滅?	ヘラ削り,ハケ目	-	-	-	石英,角閃石,雲母を含 む	良好	
122	984	弥生土器	高坏			内:灰白色2.5Y7/2 外:灰白色2.5Y8/2	ナデ,ハケ後ナデ	ハケ目	-	-	-	精製された胎土	良好	
122	985	弥生土器	高坏			内:黒色7.5Y2/1 外:灰白色5Y8/2	ナデ,ヘラ削り後ナデ	ナデ	1.4	-	-	精製された胎土	良好	
122	986	弥生土器	高坏			内:にぶい黄褐色 10YR7/4 外:にぶい黄褐色 10YR7/3	横ナデ,ナデ	ナデ	-	-	-	石英を多く含む 角閃石 を所々含む	良好	
122	987	弥生土器	高坏			内:灰黄色2.5Y7/2 外:灰白色10YR8/2	ハケ後ナデ,ハケ目	ヘラ削り 板ナデ後ナデ	-	(17.4)	-	角閃石を所々に含む	良好	
122	988	弥生土器	匙状土製品			内:にぶい黄褐色 10YR7/2 外:灰黄褐色10YR6/2	ナデ	ナデ	長さ (6.1)	幅 (1.0)	厚さ (4.4)	石英,角閃石を含む	良好	

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
122	989	弥生土 器	匙状 土製 品			内:にぶい黄橙色 10YR7/4 外:浅黄色2.5Y7/4	ナデ	ナデ	長さ (4.5)	幅 (3.9)	高さ (1.3)	石英、角閃石を含む	良好	

第23表 溝状遺構出土石器観察表

図番号	番号	出土区	層位	取上番号	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石材	備考
123	990	A22・23 溝状遺構2	-	187	石鏃	1.60	1.40	0.30	0.38	黒曜石(上半鼻)	
123	991	A22・23 溝状遺構2	-	-	スクレイパー	3.90	4.70	2.30	10.00	ハリ質安山岩	
123	992	A22・23 溝状遺構2	-	217	スクレイパー	5.15	6.18	1.48	30.00	安山岩	
123	993	A22・23 溝状遺構2	-	124	石斧	10.50	6.20	3.40	218.00	頁岩	
123	994	溝状遺構2	-	-	軽石製品	7.20	4.80	3.10	22.00	軽石	2地点北
123	995	溝状遺構2	-	19	磨石	8.00	11.40	5.10	716.00	安山岩	
123	996	溝状遺構2	-	266	石皿A	11.40	8.10	3.30	514.00	安山岩	
123	997	溝状遺構2	-	-	石皿B	10.10	9.40	6.20	770.00	安山岩	
123	998	溝状遺構2	-	265	軽石製品	16.90	8.80	5.30	204.00	軽石	
124	999	溝状遺構2	-	-	石皿A	14.10	10.10	5.00	1100.00	安山岩	
124	1000	溝状遺構2	-	67	石皿A	26.30	13.65	16.10	6800.00	安山岩	
124	1001	溝状遺構2	-	238	石皿B	19.57	11.75	5.70	1400.00	安山岩	
124	1002	溝状遺構2	-	263	石皿B	33.60	17.30	10.10	5700.00	安山岩	
124	1003	溝状遺構2	-	29	台石	42.36	20.20	19.30	19.60	安山岩	
125	1004	溝状遺構2	-	271	石皿A	26.80	26.20	12.90	13800.00	安山岩	
125	1005	溝状遺構2	-	151	石皿B	28.60	26.60	14.20	13500.00	安山岩	
125	1006	溝状遺構1	I	-	石皿A	10.70	11.40	3.60	616.00	安山岩	
125	1007	溝状遺構1	II	-	蔽石	4.20	3.55	1.80	37.00	砂岩	
125	1008	A27 溝状遺構3	II	-	スクレイパー	5.70	3.60	1.95	38.67	黒曜石(上半鼻)	

m程の把手がみられる。全体的に摩耗が著しく加工痕は不明。深さが浅いことから未製品と思われる。1052は底部に比べ口縁短辺側の器壁が極端に厚い作りである。腐食が著しい。

#### 用途不明木製品(第131・132図)

1049は直径7.8cmの円柱状に加工された両側に、直径2cm、長さ5cmの断面円形の突起がつく。円柱部分の下面は平坦で工具痕が多く残る。1050は断面方形を呈する棒状の木製品である。全面を丁寧に成形しており、下部は腐食のため細くなっている。1053は断面円形の柄に、片刃の刃部をもつ。柄と刃部の境は不明瞭で柄から刃部にかけてわずかに反り返っている。全体的に丁寧に加工され、特に刃縁は鋭く作られている。残存長94.1cm

#### 建築材の可能性のある木製品(第132図1054~1058)

1054は断面方形の角材で上部は加工が施され厚み、幅共に細くなる。全体的に丁寧に成形され、左側面には圧痕が残っている。1055の両端は切断されている。1056・1057は柵目材を板状に加工したものである。1057は炭化した部分が2か所残っている。1058は枝分かれした部分を利用した支柱の頂部である。正面は幅2cmの加工が施されているが裏の面は無加工である。また、梁・桁を乗せる2又の部分は平坦になっている。

#### その他(第134図)

A・B-11~13区のⅣ・Ⅴ層、15・16区のⅢ・Ⅳ層からは多くの樹根が検出された。特にAB-11~12区で集中して出土し、中には長さ5mの大木もみられた(図版10上)。樹根の一部の樹種は、湿地林を形成するハンノキである。樹痕の時期は放射性炭素測定値や、共

第24表 溝状遺構 2 出土木製品観察表

杭列1 ( )は残存部の法量

挿図 番号	遺物 番号	器種	層	法量(cm)			加工痕の種類	工具幅 (cm)	樹種	先端の加工	備考
				長さ	幅	厚さ					
126	1009	丸杭		46.7	A:6.0 B:2.0 C:3.3	A:4.1 B:2.3 C:3.5	A種,湾曲	1.8		5面に加工されている杭の上端も加工	凸状刃はこぼれ痕あり
126	1010	丸杭		42.5	A:5.8 B:5.0 C:4.2	A:5.9 B:5.2 C:3.7	A種,湾曲	3		多面に加工される加工単位複雑 杭の上端も加工	凸状刃はこぼれ痕あり
126	1011	丸杭		47.2	A:7.2 B:5.3 C:5.1	A:7.1 B:4.4 C:4.7	A種,湾曲	2.7		多面に加工される加工単位複雑 杭の上端も加工	凸状刃はこぼれ痕あり
126	1012	丸杭		37.0	A:5.7 B:5.5 C:3.1	A:5.8 B:4.0 C:2.9	A種,湾曲	2.3		4面に加工される 杭の上端も加工	樹皮が残る
126	1013	丸杭		(13.3)	A:6.7 B:6.2	A:5.6 B:2.8	不明			1面に加工・つぶれ	
126	1014	丸杭		(10.9)	A:3.3 B:2.7	A:3.1 B:2.6	B種の可能性 湾曲無	2.4		1面に加工・磨耗	樹皮が残る
126	1015	丸杭		28.1	A:5.8 B:3.8	A:5.1 B:5.4	A種,湾曲	2.8		2面に加工	凸状刃はこぼれ痕 樹皮が残る。 上端は加工の可能性
126	1016	丸杭		23.9	A:6.2 B:4.5	A:5.8 B:4.2	A種,湾曲	3.5		3~4面に加工・刃端痕がみられる。	凸状刃こぼれ痕あり
126	1017	丸杭		(46.3)	A:7.3 B:5.1	A:6.9 B:4.4	A種,湾曲	3		4面に加工され、一部自然面が残る	樹皮に覆われている
127	1018	丸杭		(42.1)	A:6.2 B:5.1 C:6.1	A:6.5 B:4.7 C:6.3	A種,湾曲	1.6		3~4面に加工され 加工単位が複雑に切り合う	樹皮に覆われている
127	1019	丸杭		(40.8)	A:6.8 B:2.4 C:5.9	A:6.0 B:1.8 C:5.3	A種,湾曲	3.2		5面に加工される。先端つぶれ	樹皮に覆われている
127	1020	丸杭		(35.2)	A:5.3 B:4.1	A:5.1 B:2.5	A種,湾曲	2.2		4~5面に加工	樹皮に覆われている
127	1021	丸杭		(38.9)	A:8.0 B:3.5	A:7.9 B:4.0	A種,湾曲	3.5		5面に加工・刃端痕が残る	樹皮に覆われている
127	1022	丸杭		(32.9)	A:8.2 B:4.1	A:7.8 B:4.8	A種,湾曲無	3.5		4面に加工・刃端痕が残る	樹皮に覆われている
127	1023	丸杭		(32.9)	A:5.2 B:3.4	A:5.5 B:3.2	A種,湾曲	2.8		5面に加工・先端つぶれ	
127	1024	丸杭		(30.2)	A:4.7 B:4.0	A:4.7 B:2.8	A種,湾曲無	2.5		4面に加工	凸状刃こぼれ痕あり
127	1025	丸杭		(28.0)	A:5.8 B:3.0	A:5.5 B:3.6	A種,湾曲	2.5		5面に加工	凸状刃こぼれ痕あり
127	1026	丸杭		(32.5)	A:3.2 B:3.9 C:3.6	A:3.0 B:3.5 C:2.2	A種,湾曲無	2.5		2面に加工	
128	1027	角杭		45.6	A:8.1 B:4.3	A:6.5 B:4.4	不明,湾曲	2.8		4面に加工。杭の上部を一段細く加工	建築材の転用の可能性
128	1028	角杭		36.8	A:6.8 B:4.8	A:6.2 B:3.7	B種,湾曲無	3		5面に加工。杭の上部に2か所方形の穴 が開けられる。	建築材の転用の可能性
128	1029	割杭		(39.1)	A:6.4 B:5.3	A:6.2 B:3.6	不明,湾曲	2		4面に加工。右側面に穿孔あり。	押圧のために 折れ曲がる
128	1030	角杭		36.6	A:6.6 B:5.4	A:3.5 B:3.0	不明,湾曲無	不明		2面に加工。側面に穿孔あり。	丁寧に成形されている
128	1031	割杭		(35.5)	A:5.4 B:2.8	A:3.6 B:2.8	B種, ?	3		3~4面に加工 杭の中央部は削られ、浅く凹む。	杭の中央部の加工部には 加工痕が複雑に切り 合う
128	1032	角杭		(35.8)	A:9.6 B:4.0	A:5.0 B:3.9	A種,湾曲	3		5面に加工・刃端痕が残る	圧痕あり
128	1033	角杭		(37.2)	A:10.9 B:5.9	A:5.6 B:4.9	A種,湾曲	3		5面に加工	圧痕あり
129	1034	割杭		(19.5)	A:7.0 B:4.2	A:2.7 B:2.5	不明			つぶれ	
129	1035	角杭		(16.1)	A:5.6 B:3.8	A:3.9 B:(2.1)	不明	不明		磨耗している	上端が平坦となる
129	1036	割杭		(19.3)	A6.0	A2.6	不明	不明		つぶれ。加工はほとんど施されない。	板状を呈する
129	1037	割杭		(26.3)	A:5.5 B:4.5	A:1.7 B:1.7	不明	不明		1~2面の加工。磨耗している	板状を呈する

挿図 番号	遺物 番号	器種	層	法量(cm)			加工痕の種類	工具幅 (cm)	樹種	先端の加工	備考
				長さ	幅	厚さ					
129	1038	割杭		(47.2)	A:5.2 B:3.6	A:3.0 B:2.0	不明	不明		ほとんど施されず、磨耗している。	板目材
129	1039	割杭		(33.4)	A:9.7 B:3.8	A:4.4 B:2.6	不明	不明	クリ	1面に加工・磨耗している。	板目材、樹皮残る BP 1,880±3
130	1040	角杭		(39.3)	A:5.4 B:5.9 C:3.8	A:3.4 B:3.5 C:2.5	不明	不明		2～3面に加工	右側面に2か所圧痕あり
130	1041	角杭		(39.4)	A:6.7 B:5.3	A:3.3 B:3.2	不明,湾曲	1.5	クリ	4面に加工・刃端残る。	BP 1,980±30
130	1042	角杭		39.5	A:6.4 B:7.0 C:5.3	A:4.0 B:4.3 C:2.5	不明	1.5		磨耗	腐食が著しい
130	1043	角杭		(47.4)	A:10.8 B:5.0	A:6.4 B:6.1	A種,湾曲	3		6面に加工。先端に加工が施される。	建築材の転用の可能性
130	1044	角杭		(34.7)	A:9.3 B:5.1	A:8.9 B:4.6	A種,湾曲	2.5		5面に加工	建築材の転用の可能性
130	1045	角杭		(44.2)	A:5.8 B:4.4	A:4.5 B:4.1	不明	2		4面に加工	
130	1046	割杭		27.3	A:4.6 B:2.0	A:3.5 B:2.1	不明	不明		つぶれ、先端を加工している。	
130	1047	割杭		26.7	A:7.0 B:2.9	A:5.0 B:4.2	B種,湾曲	2.5		2面に加工。加工単位が複雑に切り合う。 刃端痕が残る。	先端は平坦となる。

内木製品 ( )は残存部の法量

挿図 番号	遺物 番号	器種	層	法量(cm)			加工痕の種類	工具幅 (cm)	樹種	先端の加工	備考
				長さ	幅	厚さ					
131	1048	曲柄 平鋸		軸部 13.7 刃部 26.1	A:4.5 B:3.7 C:8.6	A:1.7 B:1.8 C:2.1	不明	軸部0.5 刃部1.5		軸部には0.5×3cm程の加工痕が残る。 刃部には1.5×5cmほどの加工痕が残る。	先端磨耗
131	1049	用途 不明品		(28.2)	A:7.8 B:2.1	A:7.0 B:2.3	不明	1.7		1.7×3.6cmの加工痕がみられる。	工具痕が多く残る。 木錘か?
131	1050	棒状 木製品		(23.2)	A:2.4 B:1.7	A:1.8 B:0.9	不明	不明		丁寧に成形されている。	
131	1051	容器		(23.3)	14.2	5.1	不明	不明		腐食のために加工痕不明。	木製品の可能性
131	1052	容器		(18.1)	16.0	1.5	不明	不明		腐食のために加工痕不明。	木製品の可能性
132	1053	用途 不明品		94.1	A:2.3 B:4.7 C:6.8 D:6.0	A:(2.0) B:2.1 C:1.9 D:1.4	不明	1.5	コナラ属 アカガシ垂 属	柄と刃部の境に1.5×2cmの工具痕が残る。 柄の上にも丁寧に加工される。	刃部は鋭く作られる
132	1054	角材		39.8	A:4.3 B:6.0	A:3.1 B:3.8	不明	不明		上部は削りだされ、一段細くなる。	圧痕あり。 建築材の可能性
132	1055	角材		(39.7)	8.2	4.4	不明	不明		先端は切断される。	建築材の可能性
132	1056	板材		(30.3)	9.5	1.2	不明	不明		表面に工具痕が多く残る。	建築材の可能性
132	1057	角材		(37.9)	A:5.6 B:2.9	A:(1.5) B:1.5	不明				炭化している
132	1058	柱材		(21.0)	A:4.6 B:8.7	A:2.9 B:5.8	不明	2.3		2.3×3.2cmの工具痕が片面に多く残る。	柱の受部

A-12区 出土木製品 ( )は残存部の法量

挿図 番号	遺物 番号	器種	層	法量(cm)			加工痕の種類	工具幅 (cm)	樹種	先端の加工	備考
				長さ	幅	厚さ					
133	1060	板材		(39.4)	A:8.0 B:1.8	A:1.8 B:1.4	不明	不明		両側面から加工している。	腐食が著しい。
133	1061	板材		(32.3)	(4.7)	2.5	不明	不明		側面に加工痕残る。	
133	1062	割杭		(33.0)	A:7.5 B:7.3	A:5.6 B:2.9	不明	不明		1面に加工・磨耗している。	
133	1063	割杭		(32.0)	A:4.3 B:1.9	A:2.3 B:1.1	不明			1面に加工・磨耗している。	腐食が著しい。
133	1064	割材		23.6	A:6.0 B:3.8	A:4.4 B:2.4	不明	不明		下部欠損。先端磨耗	
133	1065	用途 不明品		20.0	A:1.3 B:1.9 C:1.6	A:0.9 B:0.9 C:0.6	不明	不明			両端は尖っているが 腐食のために加工 によるものか不明

伴する遺物から弥生時代終末から古墳時代にかけてのものである。

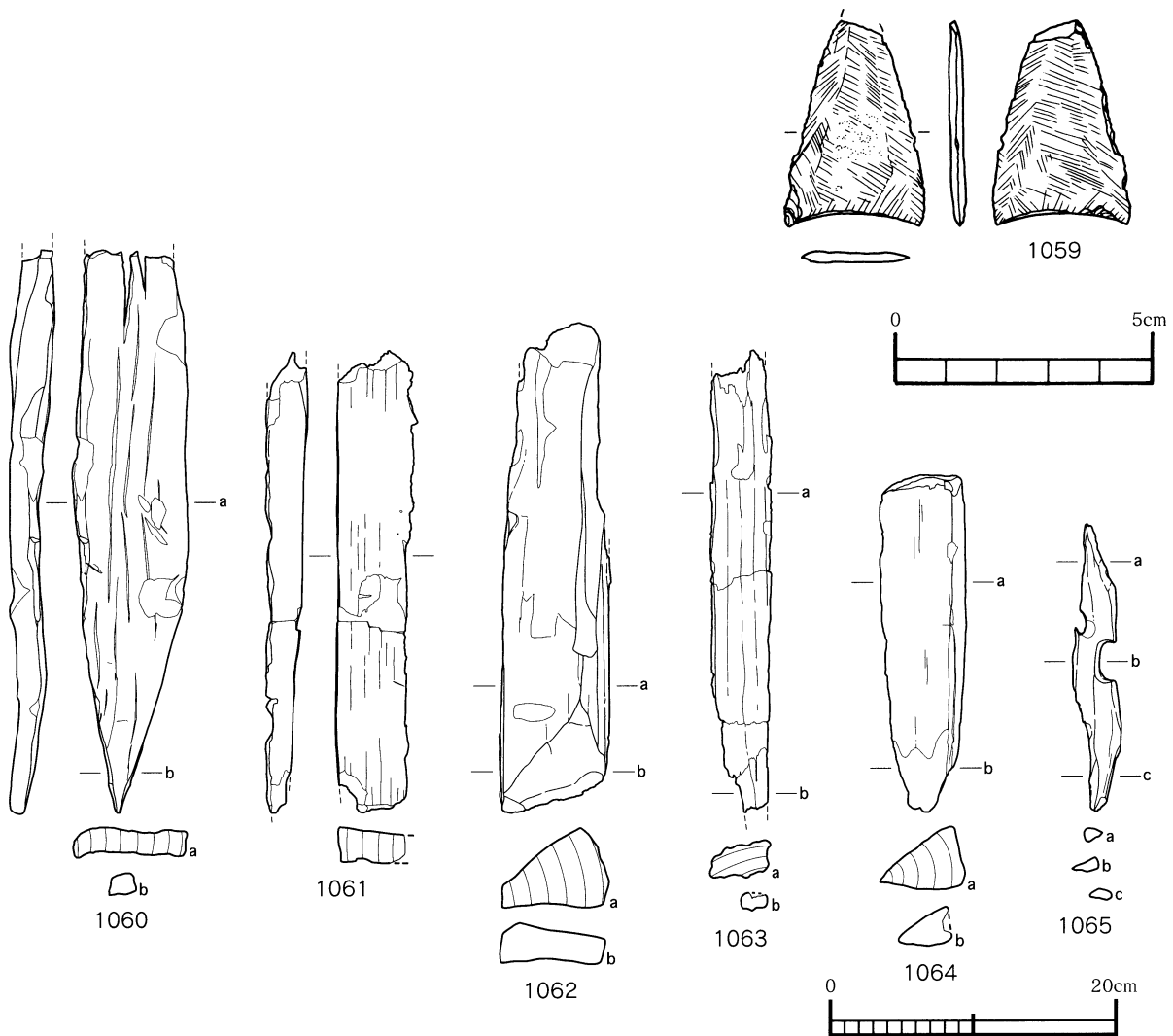
### A-12区出土遺物

#### 磨製石鏃 (第133図1059)

頁岩を素材とし、二等辺三角形に研磨して鋭利に仕上げられている。両側縁はわずかにふくらみを持ち、基部は平に面取りしながら凹レンズ状となる。先端は欠損しているが、残存部で長さ3.7cm・幅2.6cm・厚さ0.25cm・重さ3.3gを測る。A12区のIVb層から出土した。

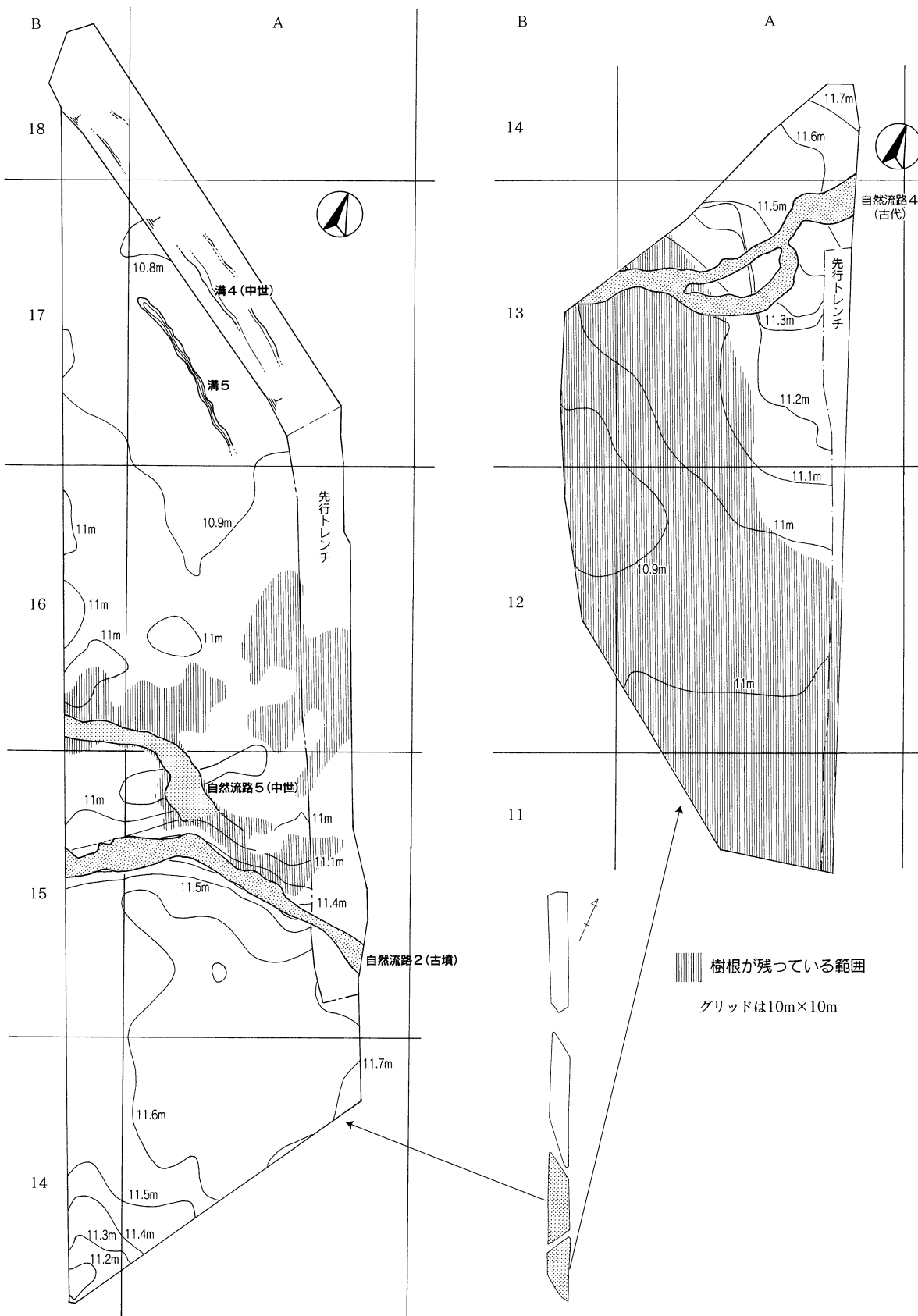
#### 木製品

IV・V層出土の木製品6点全てを図化した。1060は板状の柁目材の先端を両側から加工し、鋭く尖らしている。先端部はゆるやかに折れ曲がっている。1061は柁目材を板状に加工したもので右側面に加工痕が残る。1062はみかん割り状の割杭である。先端は一面のみ加工が施される。1064は割材で上端が磨耗している。1065は上下両端が尖っており中央右側に長さ2.5cm、幅1.2cmの方形の孔が開けられている。



第133図 A-12・13区出土石器・木製品





第134図 1 地点遺構配置図 (1:2000)

## 古墳時代の調査成果

自然流路が1条検出された

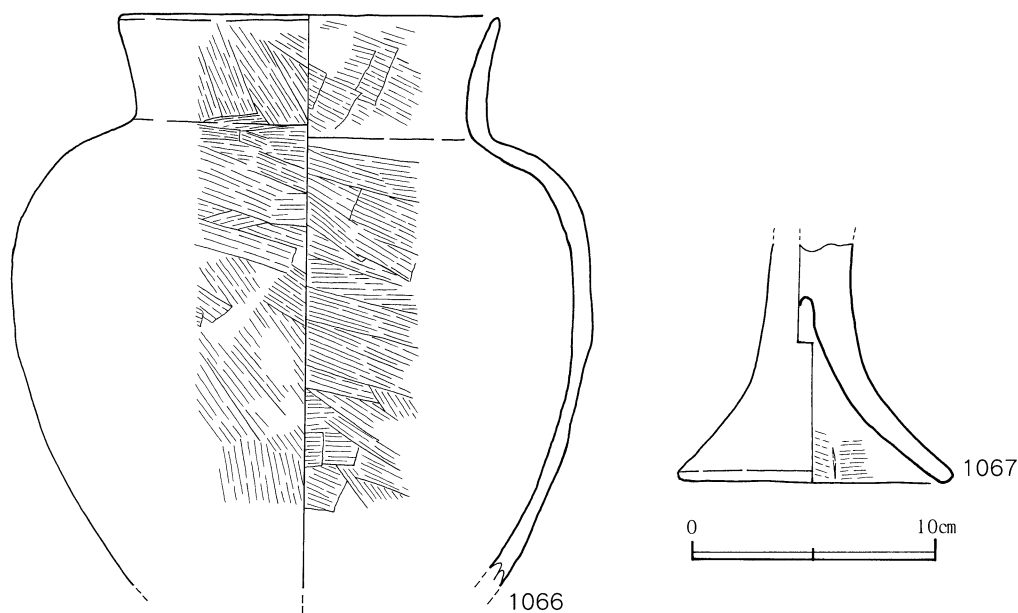
### (1) 自然流路2 (第134図)

古墳時代後期頃と思われる自然流路2がA・B-15区の微高地の落ち際に検出された。検出された長さ11m、幅1.2mで、調査区を東西に横断している。東側が上流で、西側が下流である。

### 出土遺物

2点を図化した。

1066の壺は口縁が弱く外反し、肩が張るために胴部最大径が上胴部にある。胴部中央から下胴部にかけて器壁が薄くなり、下胴部を除く内外面には粗いハケ目が密に施されている。精製された胎土を使用している。1067は高杯の脚部である。焼成は軟質で外面はにぶい赤褐色の丹塗りが施されている。1066・1067共に古墳時代後期頃のものである。



第135図 自然流路2 出土遺物

第25表 自然流路2 出土遺物観察表 ( ) は復元径

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	色調	法量(cm)			胎土	焼成	備考		
						外面	内面	口径				底径	器高
135	1066		壺		外:浅黄橙10YR8/3 内:橙7.5YR7/6	ハケ目	ハケ目	15.2	-	-	1mm大の白い小石を所々に含む	良好	
135	1067		高杯	I	外:にぶい赤褐色2.5YR4/3 内:灰黄10YR6/2	丹塗り	ナデ 裾部:ハケ目 後ナデ	-	10.5	-	砂粒を含まない精製された胎土	良好	赤色顔料 付着

## 古代の調査成果

自然流路2条，集石遺構が1基が検出されている。

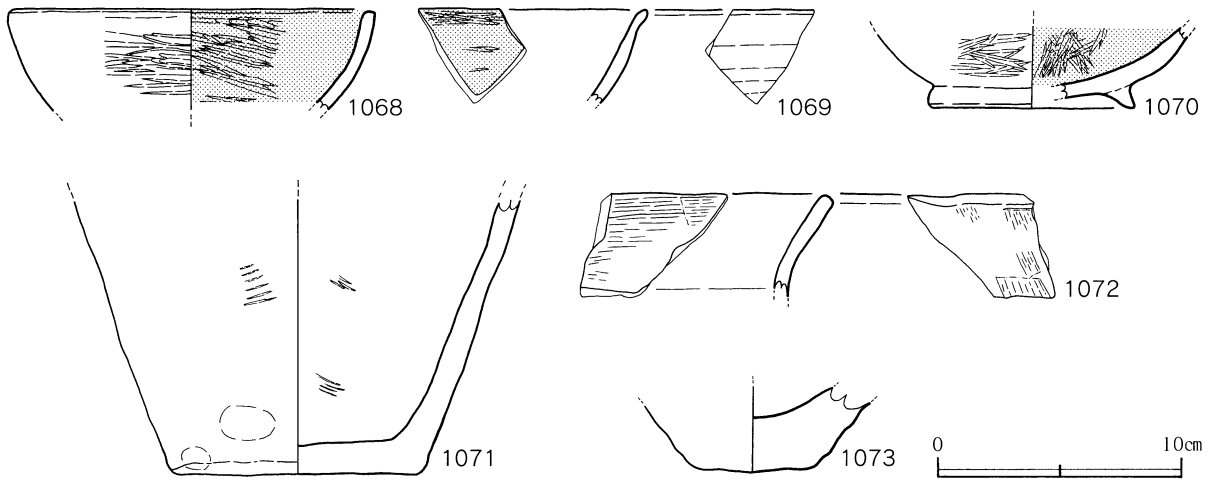
### (1) 自然流路3 (第138図)

A・B-28・29区で検出された。検出された長さ13m，幅9.8mで，東側が上流となる。流路の埋土は，下層に堆積した砂質土と上層に堆積した粘質土の大きく2つに分かれる。下層の砂土はふるいわけが悪く礫の方向（インプリケーション）も確認できないことや，河床の直上には，大きさが20cmを越える角礫が散在していることから，自然流路2は洪水によって形成されたと思われる。流路の南側には集石遺構1が隣接している。

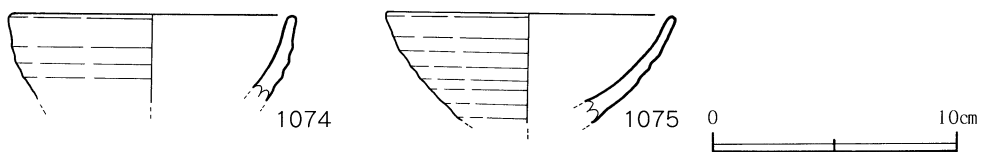
### 出土遺物

6点を図化した。

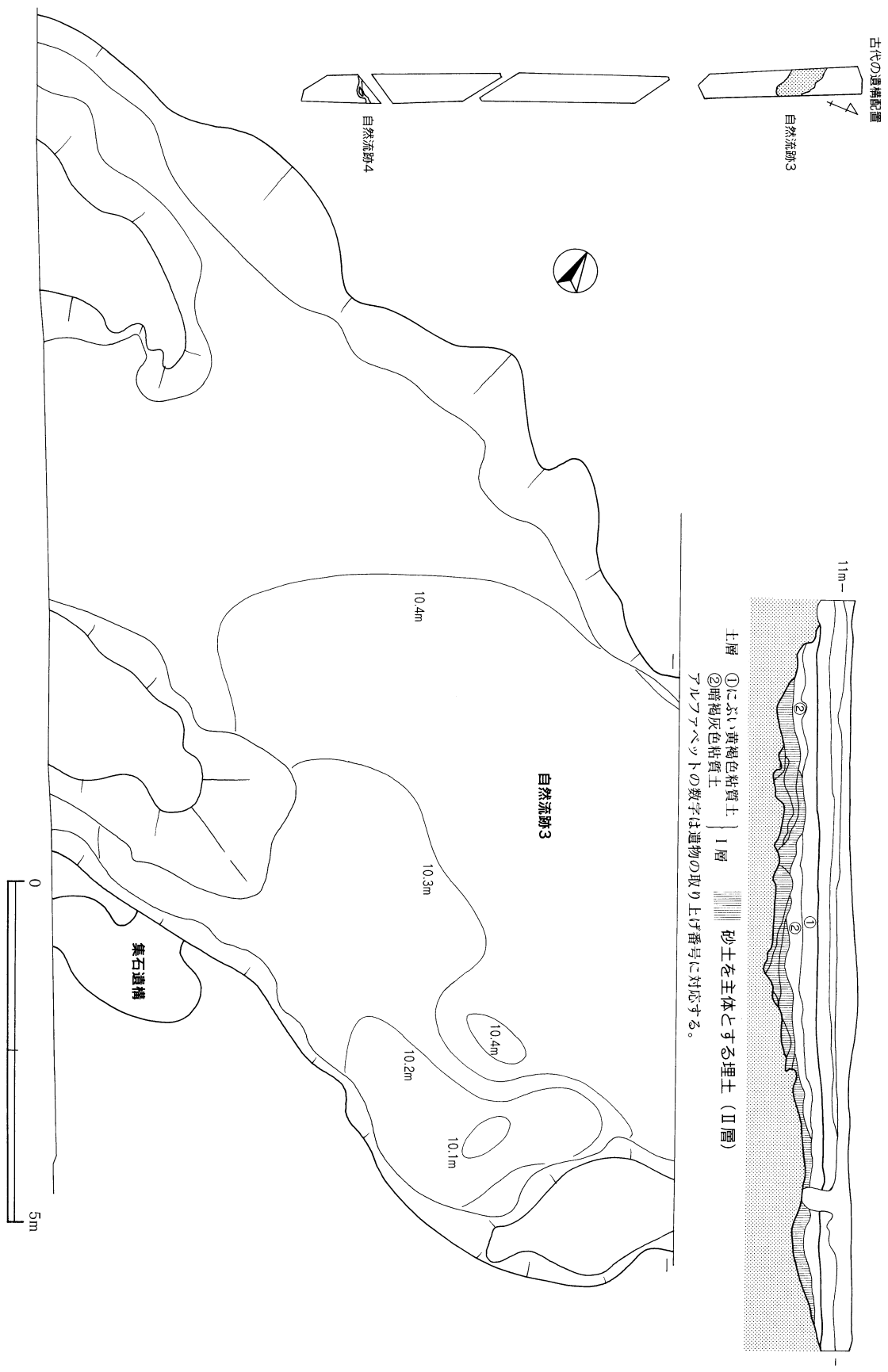
1068～1070は黒色土器A類の椀である。1068は復元口径15cmで，内外面に丁寧なミガキが施される。1069は口縁部が弱く外反している。1070は低い高台から，体部が丸みをもって立ち上がる。内外面丁寧なハケ目が施される。黒色土器は10世紀頃のものである。1071は土師質の壺の底部である。内外面はタタキ後ナデ調整で，指頭圧痕により器面に凹凸がみられる。摩滅が著しい。1072は甕の口縁で弥生時代終末から古墳時代初頭頃のものである。1073は弥生時代の壺の底部である。



第136図 自然流路3出土遺物



第137図 自然流路4出土遺物



第138図 自然流跡3・集石遺構

## (2) 集石遺構 (第139図)

B-28区で検出された。東西2.3m、南北1.1m、深さ0.32mの土坑内に多数の礫が囲うように配置されている。土坑は北側で、自然流路3とつながっており、埋土は自然流路1の下層に堆積した砂土と同じであることから2つの遺構は同時期と考えられる。石は自然流路3内にはみられない、角のとれた大きさ8cm~35cm程の円礫を使用し、中には石皿や敲石も確認された。石皿は磨面を上向きに設置しており、使用された可能性も十分に考えられる。埋土の土壌水洗を行ったが炭化物等は検出されなかった。遺構内からは土師器と思われる細片が3点出土している。

## (3) 自然流路4 (第134図)

A・B-13区で検出された。微高地の落ち際で検出され、東側が上流となる。検出された長さ9.5m、幅1.2mで調査区を東西に横断している。埋土は粗砂土で構成され、鉄分が多く付着している。

### 出土遺物

2点を図化した。

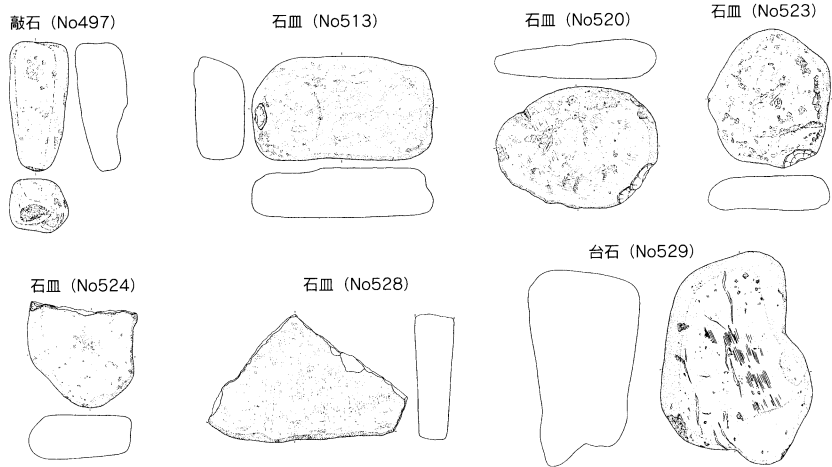
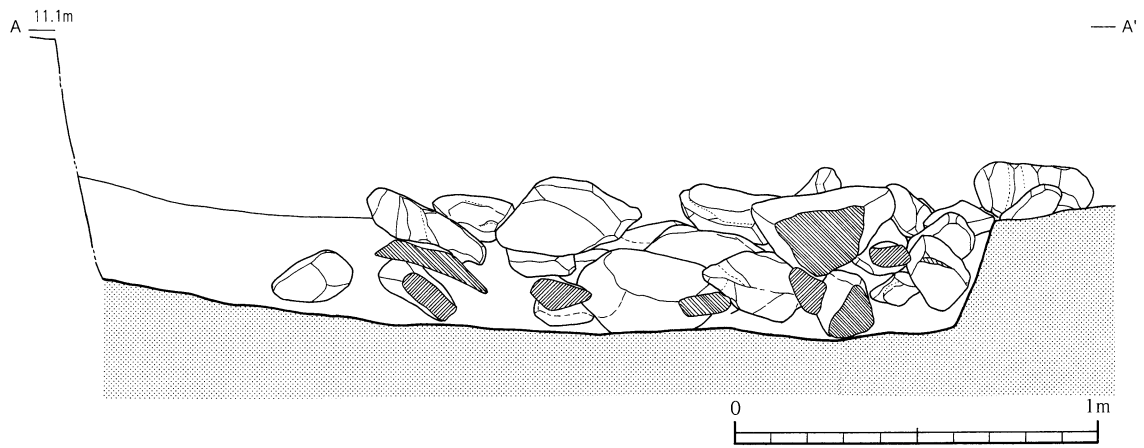
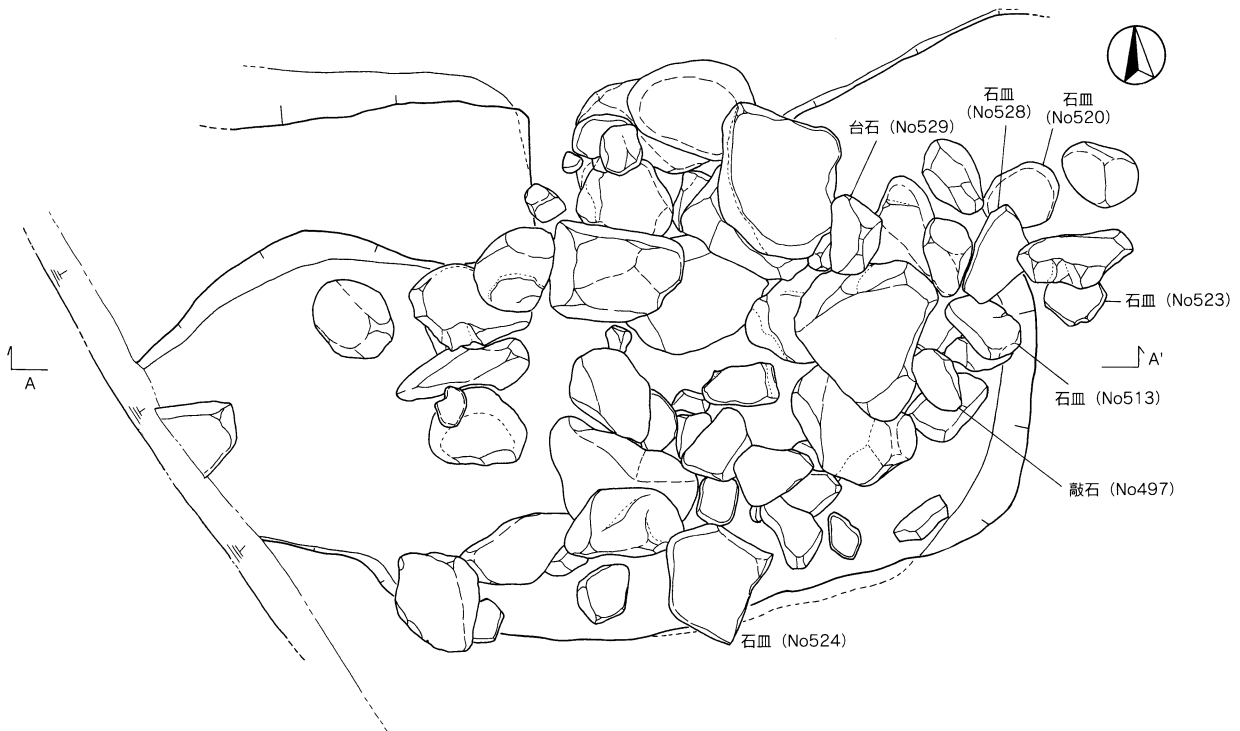
1066・1067は9~10世紀頃の土師器碗である。共に外面に横ナデの痕跡が明瞭に残っている。1066は復元口径11.2cm、1067は11.5cmである。

第26表 自然流路3出土遺物観察表 ( )は復元径

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
						外面	内面	口径	底径	器高			
137	1068	土師器	碗	I	外:灰黄色2.5Y7/2 内:暗灰色N3/0	ミガキ	ミガキ	(15)	-	-	砂粒を含まない精製された胎土	良好	
137	1069	弥生土器	碗	I	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:上部;黒N2/1 下部;黄灰2.5Y5/1	ナデ	ミガキ	-	-	-	砂粒を含まない精製された胎土	良好	
137	1070	弥生土器	碗	I	外:灰黄色2.5Y7/2 内:黒5Y2/1	ハケ目、ミガキ	ハケ目、横ナデ、ミガキ	-	(8)	-	精製された胎土	精良	
137	1071	土師器	壺	I	内外:灰白10TR8/2	タタキ後ナデ	タタキ後ナデ	-	9.8	-	赤色の小石(1mm大)を微量含む	良好	
137	1072	弥生土器	甕	I	外:にぶい橙10YR7/4 内:にぶい黄褐色10YR5/3	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	-	-	-	石英を多く含む	良好	
137	1073	弥生土器	壺	II	外:にぶい黄橙7.5YR7/4 内:浅黄橙7.5YR8/4	ナデ	ナデ	-	(4.8)	-	石英(1mm大)、角閃石を含む	良好	

第27表 自然流路4出土遺物観察表 ( )は復元径

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
						外面	内面	口径	底径	器高			
137	1074		碗		内外:灰白10YR8/2	横ナデ	横ナデ	-	(11.2)	-	石英、角閃石を所々に含む	良好	
137	1075		碗		外:浅黄橙10YR8/3 内:灰白10YR8/2	横ナデ	横ナデ	-	(11.5)	-	石英、角閃石を所々に含む	良好	



第139図 集石遺構

## 5 中世の調査成果

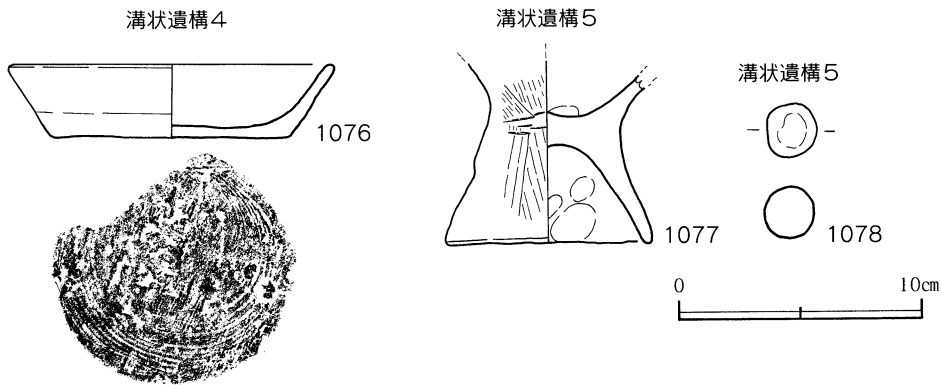
溝状遺構3条と自然流路1条を検出した。

### (1) 溝状遺構3 (第142図)

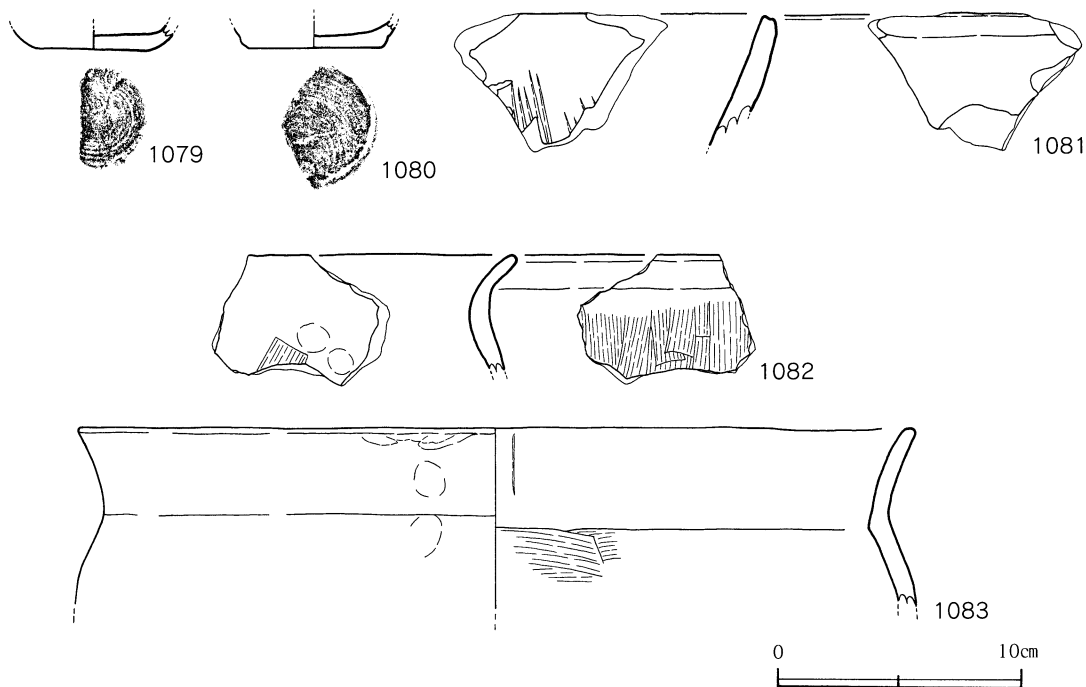
A・B-27・28区で検出された。検出された大きさは長さ12.3m、幅2.5m、深さ0.33mで、調査区を東西に横断している。遺構内の西側は2叉に分かれ、東側の南壁は階段状に段差をもつ。床面は緩やかに凹凸している。埋土は下層の灰色砂土と上層の暗灰色粘質土の2層に分かれる。遺構の磁器は出土した白器から13~14世紀頃と考えられる。

### 出土遺物 (第142図)

4点を図化した。1084は土師器の甕である。口縁は弱く外反し内外面にハケ目が施される。1085は黒色土器A類である。内外面摩滅している。1086は口禿の白磁皿である。推定口径11.4cm。1087は東播磨系の須恵器のこね鉢である。

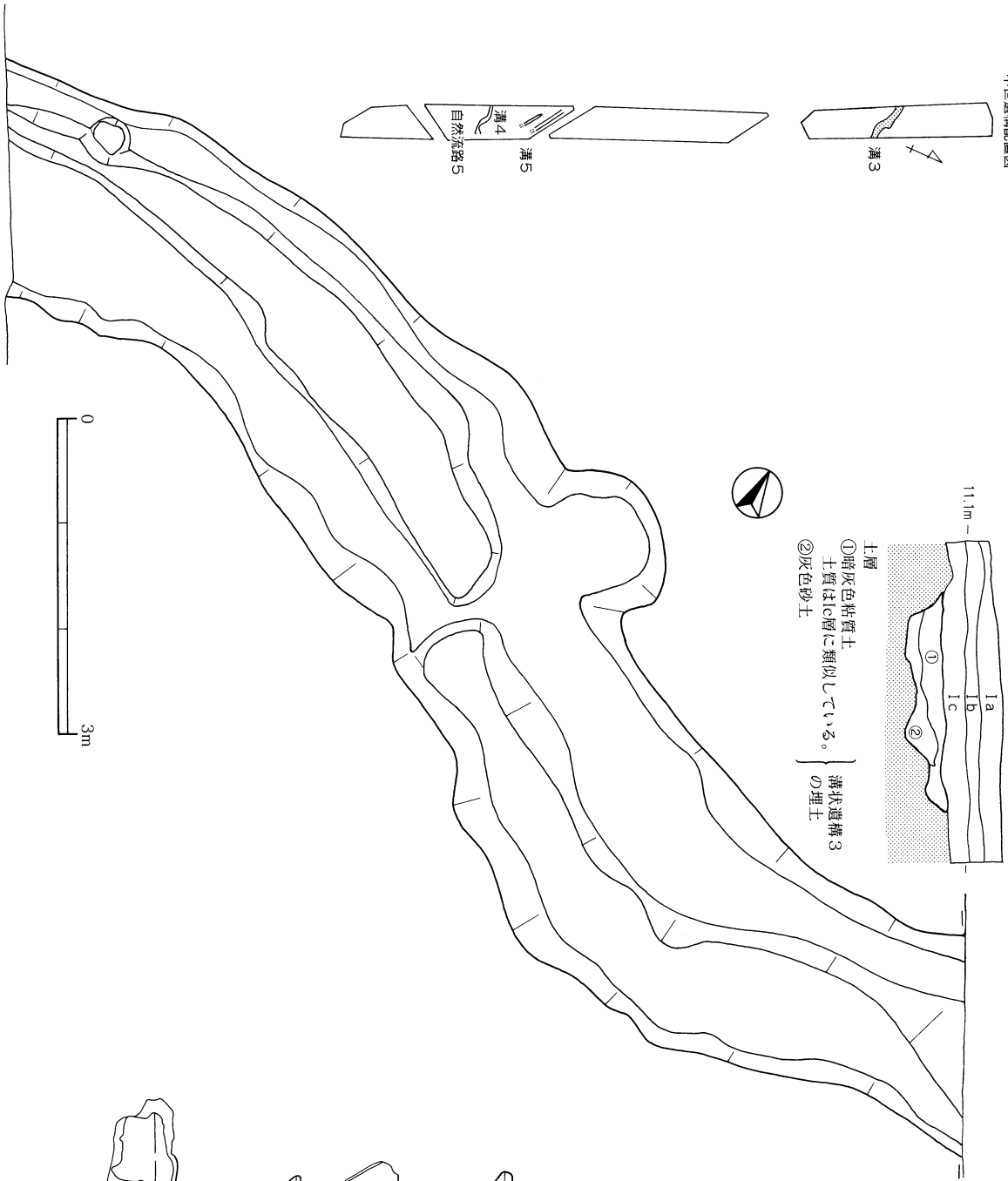


第140図 溝状遺構4・5出土遺物

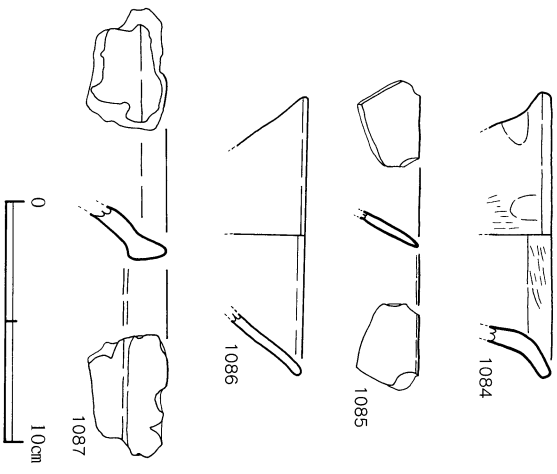


第141図 自然流路5出土遺物

中世遺構配置図



出土遺物



第142図 溝状遺構3及び出土遺物



## (2) 溝状遺構4 (第143図)

AB-17・18区の壁際で検出され、近年の攪乱によって大部分が破壊されている。溝状遺構は南北の2箇所に分断され、推定される大きさは長さは約11.2m、幅1m、深さ0.33mである。

### 出土遺物

1点を図化した。

1076は土師器の皿である。底部には糸切り痕が、内面には横ナデの痕跡が明瞭に残っている。復元口径13cm、底径9.6cm、器高3cm

## (3) 溝状遺構5

AB-17区で検出された。埋土から中世の遺構と思われる。平面形は多少の蛇行はあるもののほぼ直線的で、深さは2～5cmと浅い。検出された長さ6.1m、幅0.25m。

### 出土遺物

2点を図化した。

1077は甕の脚台で、外面にはハケ目が施されている。弥生時代終末から古墳初頭にかけてのものである。1078は直径2.2cmで、断面形が円形を呈する土製の小玉である。

第28表 溝状遺構3遺物観察表 ( )は復元径

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
						外面	内面	口径	底径	器高			
140	1076	土師器	皿	I	内外:灰白10YR8/2	横ナデ	横ナデ	(13)	9.6	3.0	砂粒を含まない精製された胎土	良好	
140	1077		甕		外:明黄褐10YR7/6 内:にぶい黄橙10YR6/3	ハケ目後ナデ	ナデ	-	8.0	-	石英、角閃石を含む	良好	
140	1078	土製品			にぶい橙7.5YR7/4	ナデ		幅:2.0 長さ:2.2		2.1	石英、角閃石を微量含む	良好	

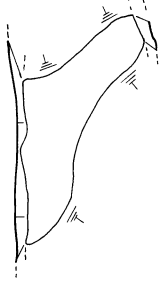
第29表 溝状遺構4・5観察表 ( )は復元径

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
						外面	内面	口径	底径	器高			
140	1076	土師器	皿	I	内外:灰白10YR8/2	横ナデ	横ナデ	(13)	9.6	3.0	砂粒を含まない精製された胎土	良好	
140	1077		甕		外:明黄褐10YR7/6 内:にぶい黄橙10YR6/3	ハケ目後ナデ	ナデ	-	8.0	-	石英、角閃石を含む	良好	
140	1078	土製品			にぶい橙7.5YR7/4	ナデ		幅:2.0 長さ:2.2		2.1	石英、角閃石を微量含む	良好	

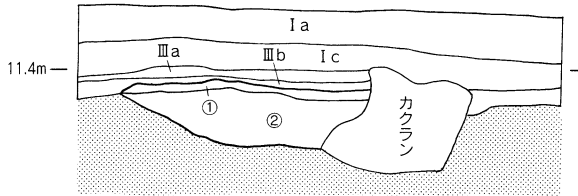
第30表 自然流路5出土遺物観察表 ( )は復元径

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
						外面	内面	口径	底径	器高			
141	1079	土師器	皿		内外:にぶい黄橙10YR7/2	横ナデ	回転横ナデ	-	(4.4)	-	砂粒を含まない精製された胎土	良好	
141	1080	土師器	皿		内外:にぶい黄橙10YR7/3	横ナデ	回転横ナデ	-	(5.4)	-	砂粒を含まない精製された胎土	良好	
141	1081		播鉢		外:黒N2/2 内:褐灰10YR3.5/1	横ナデ、ナデ	摩滅	-	-	-	砂粒を含まない精製された胎土	良好	
141	1082		甕		外:褐灰10YR4/1 内:にぶい黄橙10YR6/3	ハケ目、ナデ	ハケ目後ナデ	-	-	-	石英、角閃石を含む	良好	
141	1083		甕		外:にぶい黄橙10YR7/3 内:黄褐10YR5/8	ナデ	口縁:ナデ 胴部:ハケ目	(33.6)	-	-	石英を含む	良好	

溝状遺構4

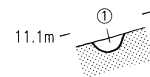
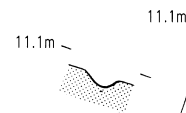
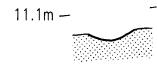
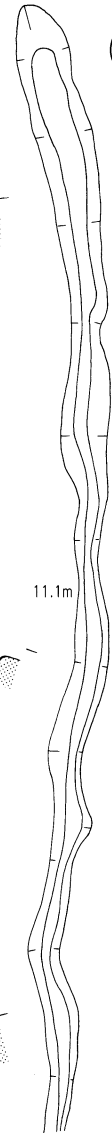


溝状遺構4 土層断面図 (調査区東壁より)

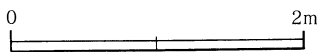
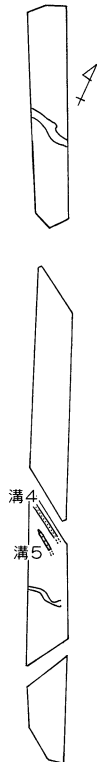
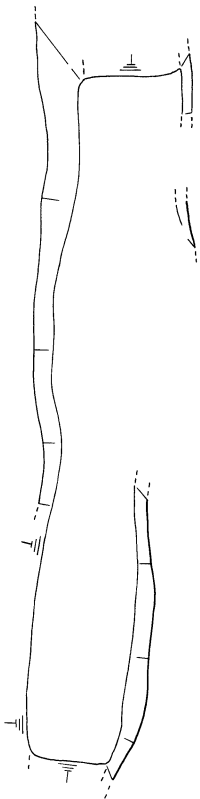


- 土層  
 ①暗褐色粘質土 白色の細砂がレンズ状に堆積  
 ②黒褐色粘質土 5mm大の軽石を少量含む

溝状遺構5



- 土層  
 ①黒褐色粘質土  
 下部に白色の細砂を多く含む



第143図 溝状遺構4 (1/50) ・ 5 (1/40)

#### (4) 自然流路5 (第134図)

AB-15~16区で微高地の落ち際に検出された。地形の高低から東側が上流である。上流は細かい砂粒が堆積しているのに対し、下流には3~7cm大の丸みを帯びた礫を多く含む。検出された長さ6m、幅1m。

#### 出土遺物 (第141図)

5点を図化した。

1079、1080は土師器の糸切り皿である。内外面に横ナデが施される。1081は播鉢である。口唇部は浅く窪み、内面は磨耗し摺目が残っている。1082・1083は弥生時代終末から古墳時代初頭頃の甕である。

## 6 近世の調査成果

AB-18~20区にかけて、18~19世紀頃の溝状遺構と自然流路が各1条ずつ検出された。自然流路は溝状遺構によって切られている。

#### (1) 自然流路6 (第146図)

検出された長さ20.4m、深さ0.3m、幅は57mである。東側の壁面は溝状遺構6によって切られているために検出できなかった。南側が上流で、埋土に南側程拳大の礫を多く含む。自然流路6は造成土によって埋められた後に、流路の東壁沿いを利用して溝状遺構6を掘削している。(第146図断面図参考)。造成土は自然流路の東側に広がっている。

#### 出土遺物 (第144図)

3点を図化した。1088は肥前系の碗である。内外面に貫入が発達し2次焼成を受けている。1089は注口をもつ鉢である。復元口径15cm。1090は薩摩焼の蓋である。苗代川系と思われる。18世紀後半頃のものである。

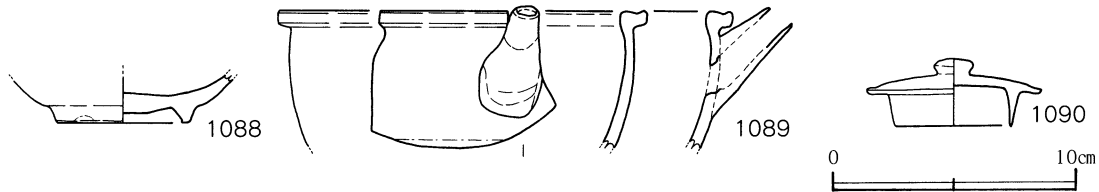
#### (2) 溝状遺構6 (第146図)

検出された長さ22m、幅2.4m、深さ0.5mで自然流路6の東端に沿って調査区を東西に横断している。自然流路の西側を造成土で埋め、東壁部分を利用して溝状遺構を掘削している。遺構内には総数102本の杭と石列が検出された。石列は溝の西壁近くに積まれ、残りの良いところでは2~3段に積まれている。石列には15cm~50cm程の安山岩の角礫が使われ、鑿痕が残っているものもあった。土層断面の④層は、粘性が強く石列の間にみられることから石列の補強のために詰め込んだ可能性がある。検出された杭は長さ80cm程で石列沿いと東壁沿いに2列平行して打ち込まれ、特に南側の石列近くに集中している。水路より西側には杭が検出され水田の存在が想定できることから、水田の基盤整備のために造成を行ったと考えられる。このことから、溝状遺構は水路として、石列は造成部分を水から守る機能が推定される。造成土は近年の耕地整理の際に削平を受けておりその上面で遺構を検出することはできなかった。造成を行う以前の周辺環境は、造成土直下のV層が粘性の強い粘質土であることから湿潤な場所であったことが予想される。

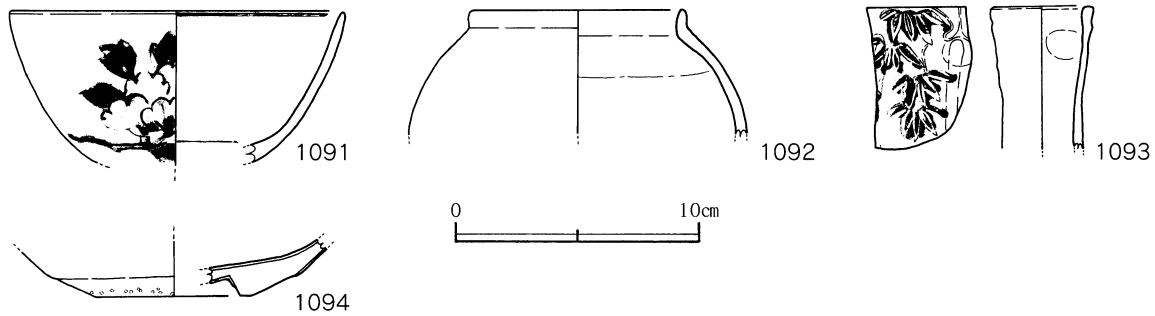
出土遺物（第145図）

4点を図化した。

1091は肥前系の鉢である。18～19世紀頃のものである。1092は土瓶で外面に鉄釉が施される。1094は肥前系の鉢である。底部は碁笥底である。1093は瓶である。外面には凹凸がみられる。



第144図 自然流路6 出土遺物



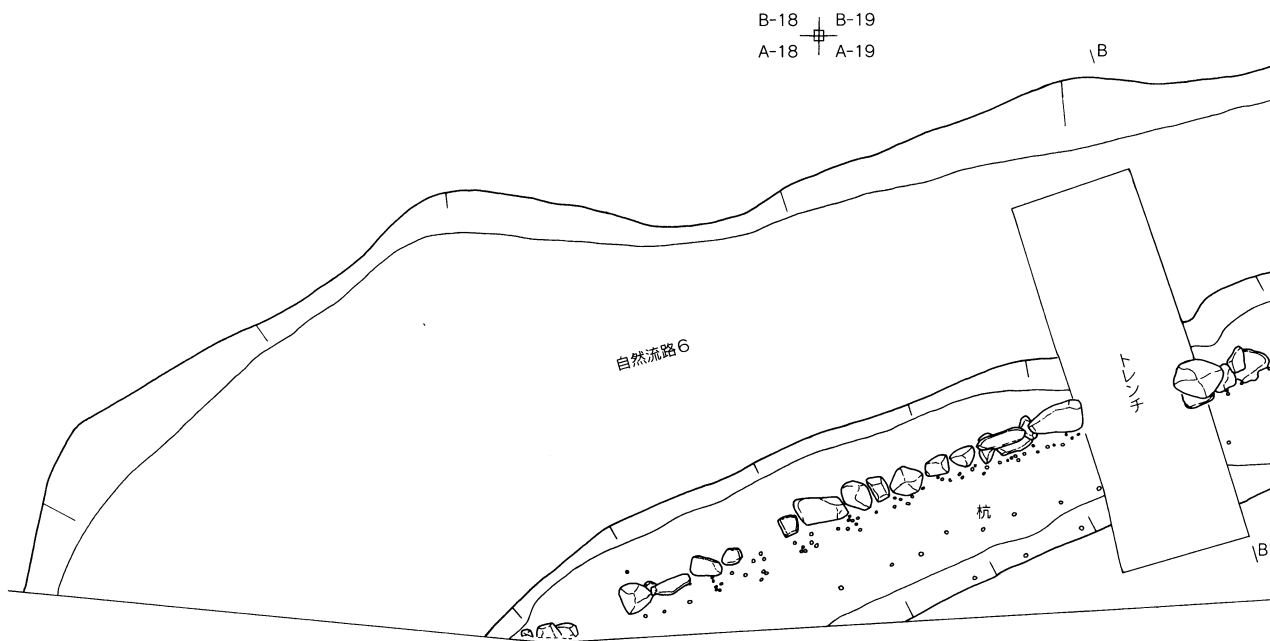
第145図 溝状遺構6 出土遺物

第31表 自然流路6 出土遺物観察表 ( )は復元径

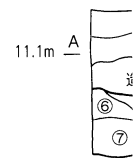
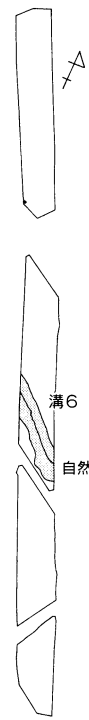
挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
						外面	内面	口径	底径	器高			
144	1088		皿		灰白5Y8/1.5			-	5.6	-	灰白5GY8/1	良好	
144	1089		鉢		外:黒褐10YR2/2 内:暗赤褐2.5YR3/2		ナデ	(15)	-	-	にぶい黄橙10YR3/2	良好	
144	1090		蓋		外:オリブ黒7.5Y2/2 内:明褐7.5YR5/6		回転横ナデ	7.2	-	2.6	1mm大の砂粒を含む	良好	薩摩焼

第32表 溝状遺構6 遺物観察表 ( )は復元径

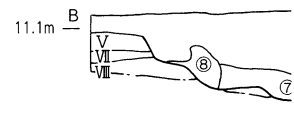
挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
						外面	内面	口径	底径	器高			
145	1091		鉢	1c		ぼたん文様		(13.6)	-	-	精製された胎土 灰白N8/0	良好	
145	1092		土瓶	1b	外:灰オリブ7.5Y4/2 内:上部:灰オリブ7.5Y4/2 下部:黒褐5YR3/1		回転横ナデ	(8.4)	-	-	明褐色	良好	
145	1093		瓶	1c		瀬戸美濃		(3.4)	-	-	精製された胎土 灰白7.5Y8/1	良好	
145	1094	青磁	皿	1c	明緑灰色10GY7/1	底部:回転横ナデ		-	(6.3)	-	精製された胎土 灰白N8/0	良好	



近世遺構配置図

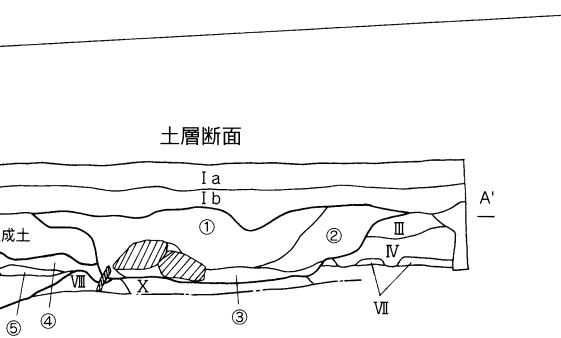
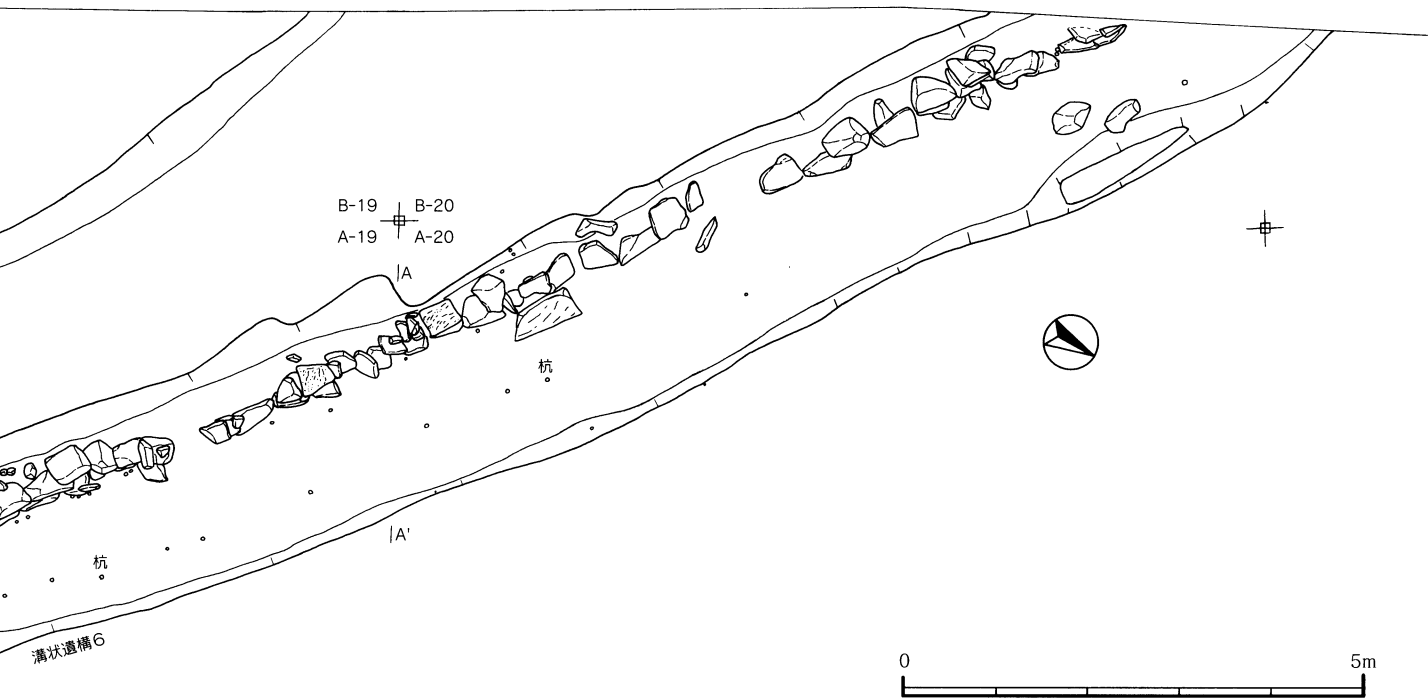


- 土層
- ① 灰
- ② 灰
- ③ 灰
- ④ 青



- 土層
- ⑧ 曜
- ⑨ 灰
- ⑩ 灰
- 造成

第146図 溝状遺構6・自然流

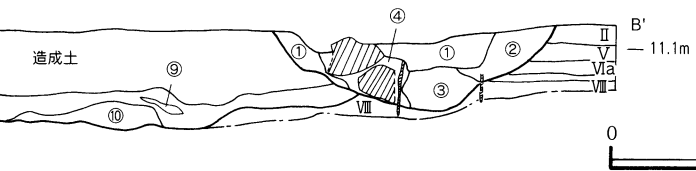


色粘質土 造成土が流れ込んだもの。鉄分の付着が多い。  
 色粘質土 ①よりも粘性が強く、鉄分の付着も少ない。  
 色砂土 1mm以下の細かい砂粒構成。  
 灰色粘質土

溝状遺構6の埋土

④暗灰色砂質土 キメが粗くしまりはよい。  
 ⑤褐色砂土 粗い砂粒で構成。  
 ⑥暗灰色粘質土 粗性が強い。  
 ⑦暗灰色粘質土 砂粒を多く含む。

自然流路6の埋土



褐色粘質土 1mm以下の砂粒を含む。  
 色砂土  
 色砂礫土 1mm~2mmの砂粒に、1~2cmの小礫を多く含む。  
 土 灰色粘質土 キメが粗くシラスを含んでいる可能性がある。  
 粘性が強く土器片をわずかに含む。

自然流路6の埋土

瓦路6 (平面図1/80, 断面図1/50)

## 第2章 同定・分析

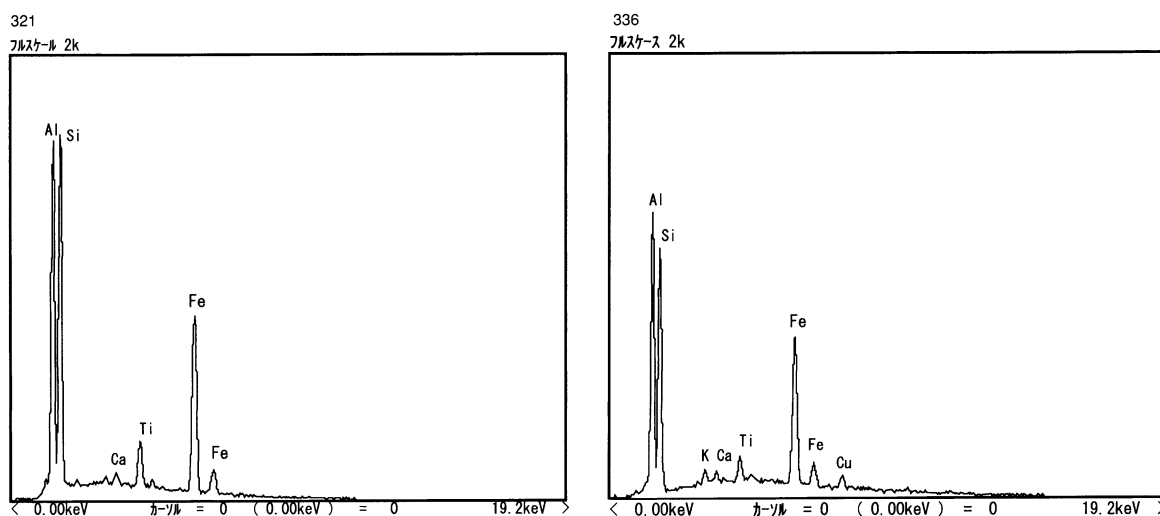
### 第1節 楠元遺跡出土土器に付着した赤色顔料について

永瀆功治（鹿児島県立埋蔵文化財センター）

楠元遺跡から出土した土器に付着した赤色顔料について実体顕微鏡，走査型電子顕微鏡による形状観察とエネルギー分散型X線分析装置(EDS)を用いたX線分析を行った。

顔料とは着色剤の一種で，水には溶けない微粒子である。赤色顔料はその主成分から「ベンガラ」，「朱」，「鉛丹」の3種類に分けられ，ベンガラは酸化第二鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )，水銀朱は硫化水銀 ( $\text{HgS}$ )，鉛丹は四酸化三鉛 ( $\text{Pb}_3\text{O}_4$ ) を主成分とする。ベンガラはさらに原料，製法に多様性が認められ，細分化される。赤色顔料の歴史は，古いもので1.5～2万年前に北海道，東北地方においてベンガラが付着した石器や顔料原石が出土した例があり，水銀朱は縄文時代後期から，鉛丹は古墳時代から使われてきた。これまでに鹿児島県内で出土した縄文時代の赤色顔料は，ほとんどがベンガラであり，水銀朱の検出は数例しかない。

楠元遺跡から出土した土器2点（No321台付皿とNo336。ともに縄文時代後期中葉）に付着した赤色顔料を観察したところ，No321は内外面とも赤色顔料が付着しており，特に皿の内面は広い範囲に残存している。No336の土器は外面の一部に顔料が残っている。走査型電子顕微鏡（日本電子製低真空SEM・JSM-5300LV）を用いて形状観察を行ってみたが，2点とも特徴的な粒子形状は認められなかった。エネルギー分散型X線分析装置（日本電子製EDS・JED-2001）を用い，加速電圧15.00kV，取り出し角度 $24.23^\circ$ ，作動距離20.00mm，有効時間100秒の条件下で分析したところ，2点ともFeの顕著なピークを検出した。Fe以外にもAl，Siを検出したがこれらは土壌などの汚染と考えられる。特徴的な粒子形状は見られなかったが，土器表面への付着状態やEDSの結果から，資料No321，336の土器に付着した赤色顔料は鉄を発色の由来としたベンガラと考えられる。



スペクトル図

## 第2節 楠元遺跡の自然科学分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

楠元遺跡（鹿児島県川内市百次町所在）が所在する地域では、川内川およびその支流の隈之城川・市比野川・入来川など多くが流れ、これらの河川流域に沖積平野が発達している（太田，1971）。本遺跡は、川内川の支流の一つである百次川がシラス台地を開析して形成された谷底平野に位置しており、弥生時代終末～古墳時代初頭の旧河道、杭列・住居跡・土坑などの遺構をはじめとして、中津野式・北久根山式・市来式土器や木製品などが検出されている。

本報告では、1) 弥生時代以前の扇状地性礫層直上に堆積する黒色土層の年代や古環境の検討する、2) 遺構の時代性等を確認する、3) 弥生時代末～古墳時代初頭における稲作も含めた古環境、4) 用材選択の検討する、以上の4点を目的として放射性炭素年代測定、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、種実遺体同定、樹種同定を実施する。

### 1. 層序と試料

土壌試料は、第2地点内に設けられたA・B・C地点および溝状遺構2から採取された。A地点・B地点とも下部に灰褐色を呈する砂・シルトによって埋積される自然流路1が認められる。自然流路1埋積物からは、弥生時代後期の遺物が出土するとされている。これを弥生時代末～古墳時代初頭の遺物包含層である褐色～暗褐色砂混じりシルトが覆い、この上位が現表土となる。C地点の層序は、下位より扇状地性礫層、黒色粘土、灰褐色砂、暗褐色砂混じりシルト、旧水田層である灰褐色砂、現表土となる。溝状遺構2は、B地点の脇で弥生時代末～古墳時代初頭の遺物包含層の下位で認められた溝跡である。溝覆土は、下部に砂礫が、その上位に砂・シルト・粘土が堆積し、また中部で材が検出される。

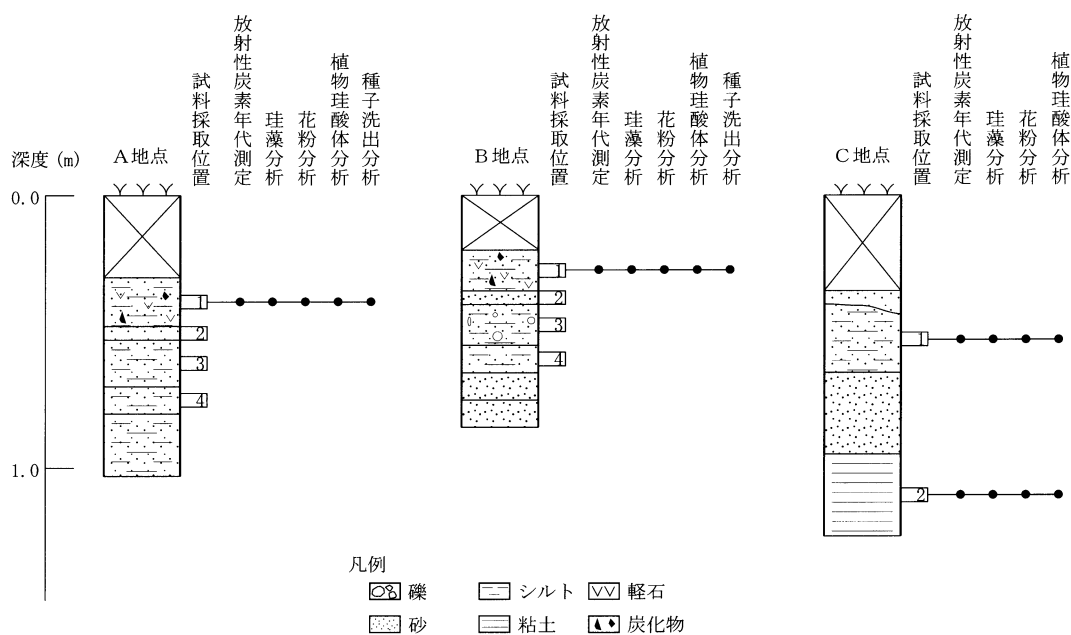
試料は、A地点・B地点ともに層位試料として土壌試料を4点、C地点が層位試料として土壌試料を2点、溝状遺構2が溝底部付近から土壌試料1点と覆土中位から出土する木材を採取した。この他に1地点および2地点から出土した木材や杭などの木製品も採取した。第33表に採取した試料の一覧を、また第147図にA地点・B地点・C地点の層序を模式柱状図で示す。

第33表 試料の一覧及び分析試料

調査区	採取地点	試料番号 試料名	分析項目					備考	
			14C	D	P	PO	S		W
1地点	南	材	○					○	
	南	根	○					○	
	北	A-16グリッド 1						○	
	北	B-16グリッド 2						○	
	北	A-16グリッド 3						○	
2地点	北	A-15グリッド 4						○	
	自然流路1	立木	○					○	
	自然流路1	杭北列	○					○	
	A-22グリッド	杭南列	○					○	覆土木製品
	溝状遺構2	図NO.869 杭						○	
3地点	A地点	1	○	○	○	○	○		
		2							
		3							
		4							
	B地点	1	○	○	○	○	○		
		2							
		3							
		4							
	C地点	1	○	○	○	○	○		
		2	○	○	○	○	○		
	溝状遺構2	1		○	○	○			
		材	○						○

凡例 14C：放射性炭素年代測定 D：珪藻分析 P：花粉分析  
PO：植物珪酸体分析 S：種実遺体同定 W：樹種同定





第147図 模式柱状図及び分析層位

## 2. 分析方法

### (1) 放射性炭素年代測定

前処理として土壌は、根などをピンセットで取り除く。乾燥後、水に入れて、浮上してきたものを除去する。次に塩酸溶液で煮沸する。室温まで冷却した後、塩酸溶液を傾斜法で除去する。水で塩酸を充分洗浄した後、乾燥、粉碎して蒸し焼き（無酸素状態で400℃に加熱）にする。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼し、発生した二酸化炭素を捕集して純粋な炭酸カルシウムとして回収する。一方、木材は水でよく洗浄して表面の異物を取り除く。乾燥、粉碎後水酸化ナトリウム溶液で煮沸する。室温まで冷却した後、水酸化ナトリウム溶液を傾斜法で除去する。この作業を除去した水酸化ナトリウム溶液の色が薄い褐色になるまで繰り返す。次に塩酸を加えて煮沸した。室温まで冷却した後、傾斜法により除去する。充分水で洗浄した後、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で400℃に加熱）にする。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させる。発生した二酸化炭素は捕集後、純粋な炭酸カルシウムとして回収する。ただし、試料が少量（試料表中で試料少量と記載がある試料）の場合は水酸化ナトリウム溶液による処理を省略する。

先の前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成する。最終的に得られた合成ベンゼン3ml（足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して3mlとする）にシンチレーターを含むベンゼン2mlを加えたものを測定試料とする。

測定は、1回の測定時間50分間を20回繰り返す計1,000分間行う。未知試料の他に、値が

知られているスタンダード試料と自然計数を測定するブランク試料と一緒に測定する。なお、放射性炭素の半減期としてLIBBYの半減期5,570年を使用する。

## (2) 珪藻分析

試料を湿重で7 g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査して、珪藻殻が半分以上残存するものを200個体以上同定・計数する。種の同定は、K.Krammer (1992), K.Krammer and Lange-Bertalot (1986,1988,1991a,1991b)などを用いる。

同定結果は、海水～汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度 (pH) ・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率3.0%以上の主要な種類について主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出した化石が現地性か異地性かを判断する目安として完形殻の出現率を求め考察の際に考慮する。堆積環境の解析にあたり淡水生種については安藤 (1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内 (1991)、汚濁耐性については Asai,K. & Watanabe,T. (1995)、生活型などについては VOS,P.C. & DE WOLF,H. (1993) の環境指標種を参考とする。

## (3) 花粉分析

試料を湿重で約10 g秤量し、水酸化カリウム処理、篩別、重液分離 (臭化亜鉛, 比重2.3), フッ化水素酸処理, アセトリシス処理 (無水酢酸:濃硫酸=9:1) の順に物理・化学的な処理を施して花粉・孢子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の各種類の出現率は木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類孢子が総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類をハイフオン (-) で結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。

## (4) 植物珪酸体分析

試料を湿重約5 g秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理 (70W, 250KHz, 1分間), 沈定法, 重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム, 比重2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈して、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入し、プレパラートを作製する。これを400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) を、近藤・佐瀬 (1986) の分類に基づい

て同定・計数する。

結果は、検出される種類とその個数の一覧表と植物珪酸体群集の変遷図で表示する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体とも各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

### (5) 種実遺体同定

試料約300gについて、数%の水酸化ナトリウム水溶液を加えて一昼夜放置し、試料を泥化させる。0.5mmの篩を通して水洗し、残渣を集める。残渣を双眼実体顕微鏡で観察し、その形態的特徴から種類を同定する。

### (6) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラル（抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは生物顕微鏡で観察・同定する。

## 3. 結果

第34表 放射性炭素年代分析結果

### (1) 放射性炭素年代測定

結果を第34表に示す。1地点・2地点から出土した立木や杭、A地点試料番号1・B地点試料番号1、溝状遺構2出土木材は、約1,500年前～2,300年前の年代値を示す。C地点は、試料番号1が約5,500年前、試料番号2が約13,000年前である。

調査区	採取地点	試料番号	試料名	年代値	誤差		PAL-No.	備考	
					+2σ	-2σ			
1地点	南		材	1,460	250	240	591	少量	
			根	2,190	210	210	592	中央黒色（腐蝕）	
2地点			立木	2,000	220	210	594	少量（腐蝕）	
			自然流路1	杭北列	1,950	510	480	595	少量（腐蝕）
			自然流路1	杭南列	2,090	260	250	596	
3地点	A地点	1		2,310	200	200	587	黒褐色壤土	
				1,960	210	210	588	暗褐色壤土	
				5,510	310	290	589	黒褐色埴壤土	
				13,080	360	350	590	黒色埴壤土	
				2,100	390	370	593	少量、中央黒色（腐蝕）	

注1) 年代値：1,950年を基点とした値。

注2) 誤差：測定誤差2σ（測定値の95%が入る範囲）を年代値に換算した値。

注3) PAL：パリン・サーヴェイ株式会社で測定。

注4) 土質：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性の判定に基づく。

壤土（粘土：0～15%、シルト：20～45%、砂：40～65%）

埴壤土（粘土：15～25%、シルト：20～45%、砂：30～65%）

重埴土（粘土：45～100%、シルト：0～55%、砂：0～55%）

### (2) 珪藻分析

結果を第35表・第148図に示す。珪藻化石は、各地点とも豊富に産出する。完形殻の出現率は、C地点を除き85%以上と高い。産出種の全ては淡水生種で占められ、産出分類群数は28属164種類である。以下、地点別に珪藻化石群集の特徴を述べる。

#### < A地点 >

貧塩不定性種（少量の塩分であれば耐えられる種）、真+好アルカリ性種（pH7.0以上のアルカリ性水域に生育する種）、流水不定性種（流水にも止水にも生育する種）と真+好止水性種（止水域に生育する種）が多産する。主な産出種は流水不定性で有機汚濁の進んだ富栄養水域に生育する好汚濁性種（Asai, K. and Watanabe, T., 1995）の *Sellaphora pupula*、偶来性浮遊性種（本来付着生活するが、波などの影響を受けて基物から剥離した後は浮遊生活を営むもの）で好汚濁性種の *Fragilaria construens* fo. *venter*、好止水性で貧栄養～富栄養種（Lange-Bertalot, H. unter Mitarbeit von A. Steindorf, 1995）の *Fragilaria exigua*、陸域から水域まで水分条件に対する適応性が幅広い陸生珪藻B群（伊藤・堀内, 1991）であり好汚濁性種でもある *Navicula confervacea* が産出する。この他、

第35表 珪藻分析結果

表2 珪藻分析結果 (1)

種 類	生 態 性			環 境 指標種	A地点 1	B地点 1	C地点		溝狀遺跡2
	塩分	pH	流水				1	2	
Fragilaria brevistriata Grunow	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	6	19	-	2	7
Gomphonema pseudoaugur Lange-Bertalot	Ogh-Meh	al-il	ind	S	-	-	-	-	1
Navicula capitata var. hungarica (Grun.) Ross	Ogh-Meh	al-il	r-ph	U	1	-	-	-	-
Nitzschia palea (Kuetz.) W. Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	-	-	-	-	1
Rhopalodia gibberula (Ehr.) O. Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	9	3	48	26	4
Achnanthes clevei Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	1	-	-	2
Achnanthes exigua Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	7	10	-	-	7
Achnanthes hungarica Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	1
Achnanthes lanceolata (Breb.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	1
Achnanthes lanceolata var. abbreviata Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K, T	6	5	-	23	28
Achnanthes lanceolata var. elliptica Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	4
Achnanthes marginulata Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K, T	1	1	-	-	2
Achnanthes minutissima Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	T	1	-	-	-	-
Achnanthes montana Krasske	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1	-	-	2
Achnanthes oblongella Ostrup	Ogh-ind	ind	ind	RI, T	-	1	-	-	4
Achnanthes peragalli Brun et Heribaud	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	1	3
Achnanthes rostrata Oestrup	Ogh-ind	ind	l-ph	U	1	-	-	-	1
Achnanthes subhudsonis Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	6	2	1	-	18
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	ind	r-ph	T	-	-	-	-	1
Amphora pediculus (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	1	-	1	4
Anomooneis brachysira (Breb.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	T	-	1	-	-	1
Anomooneis styriaca (Grun.) Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph	O, T	2	2	-	-	-
Aulacoseira ambigua (Grun.) Simonsen	Ogh-ind	ac-il	l-ph	U	-	2	-	-	-
Aulacoseira alpigena (Grun.) Krammer	Ogh-hob	al-il	l-bi	N, U	7	46	-	-	1
Aulacoseira crassipunctata Krammer	Ogh-hob	ac-il	l-bi	N, U	-	-	-	1	-
Aulacoseira italica (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	ac-il	l-ph	U	1	-	-	-	-
Aulacoseira italica var. valida (Grun.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	3	-	-	9	-
Aulacoseira laevissima (Grun.) Krammer	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	1	-	-	3	1
Aulacoseira pfaffiana (Reinsch) Krammer	Ogh-hob	ac-il	l-ph	U	6	-	-	-	-
Aulacoseira spp.	Ogh-hob	ac-il	l-ph	U	1	-	-	-	-
Caloneis acrophila Bock	Ogh-unk	unk	unk	U	1	-	-	-	-
Caloneis bacillum (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	RA	-	-	-	1	1
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	2	-	3	-
Caloneis silicula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	-	1	3	3	-
Caloneis silicula var. minuta (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	1
Caloneis tenuis (Greg.) Krammer	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	1	-
Caloneis spp.	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	1	-
Cocconeis disculus Schumann	Ogh-unk	unk	unk	U	-	-	1	-	-
Cocconeis neodiminita Krammer	Ogh-ind	al-il	l-bi	U	-	-	-	-	4
Cocconeis placentula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	3
Cocconeis placentula var. euglypta (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	1	1	-
Cocconeis pseudohumensis Reichardt	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	-	1
Craticula cuspidata (Kuetz.) J.D.G. Mann	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	1	1	-	-	6
Cymbella amphioxys (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	1	-	-	-
Cymbella naviculiformis Auerswald	Ogh-ind	ac-il	l-ph	U	2	1	-	-	1
Cymbella perpusilla A. Cleve	Ogh-ind	ind	ind	O	2	-	-	-	1
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-hob	ac-il	l-ph	U	6	4	1	-	3
Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	ind	ind	T	1	-	-	-	2
Cymbella spp.	Ogh-ind	ind	r-ph	K, T	1	-	-	-	-
Diatoma hyemale var. mesodon (Ehr.) Kirchner	Ogh-unk	unk	unk	U	-	-	2	-	-
Diploneis finnica (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-bi	K, T	-	-	-	1	-
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph	U	-	-	-	-	1
Diploneis parva Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	2	8	8	-
Diploneis yatakaensis Horikawa et Okuno	Ogh-ind	ind	ind	U	-	1	1	-	-
Diploneis spp.	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	-	-	4	6	1
Epithemia adnata (Kuetz.) Brebisson	Ogh-unk	unk	unk	U	-	-	3	-	-
Eunotia bilunaris (Ehr.) Mills	Ogh-ind	al-bi	ind	U	1	-	-	-	-
Eunotia duplicoraphis H. Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph	U	-	1	-	-	7
Eunotia exigua (Breb.) Grunow	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	P	-	-	-	1	1
Eunotia gracialis Meister	Ogh-hob	ind	l-bi	U	-	-	-	-	1
Eunotia incisa W. Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	1	2	-
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	2	3	3	2
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB, O, T	-	-	-	1	-
Eunotia praerupta var. bidens Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB, O	-	-	-	1	-
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk	U	-	-	-	1	1
Fragilaria capucina var. gracilis (Oestr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	2	1	-	-	1
Fragilaria construens (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	4	-	-	2
Fragilaria construens fo. venter (Ehr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	15	29	2	3	14
Fragilaria exigua Grunow	Ogh-ind	ind	l-ph	U	19	4	-	-	-
Fragilaria inflata (Heid.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	unk	U	-	-	-	1	-
Fragilaria parasitica (W. Smith) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	1	-	-	1
Fragilaria pinnata Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	3	1	-	-	2
Fragilaria pinnata var. lancetula (Schum.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	1	-	2	2	-
Fragilaria ulna (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	1	-	-
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.) Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K, T	-	1	-	1	1
Frustulia rhomboides var. saxonica (Rabh.) De Toni	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	1	-	1	1
Frustulia rhomboides var. saxonica fo. capitata (A. Mayer) Hustedt	Ogh-unk	unk	unk	RB	2	-	-	-	-
Frustulia vulgaris (Thwait.) De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	1
Gomphonema angustatum (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	1	-	-
Gomphonema angustatum var. linearis Hustedt	Ogh-ind	ac-il	unk	U	-	-	1	-	-
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O, U	1	1	-	-	1
Gomphonema grovei M. Schmidt	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	1	-	-
Gomphonema grovei var. linguatum (Hust.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	2	3	-	-	5
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	3	5	2	7	3
Gomphonema parvulum var. lagenula (Kuetzing) Frenguelli	Ogh-ind	ind	r-ph	S	1	-	-	-	-
Gomphonema productum (Grun.) Hange-B. & Reichardt	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	11	-
Gomphonema pseudosphaerophorum H. Kobayasi	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	1	-	-	-	-
Gomphonema subtile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1	-	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, U	1	-	2	1	-
Melosira solida Eulenstein	Ogh-unk	ind	l-ph	M, T	-	-	-	-	-
Melosira varians Agardh	Ogh-hil	al-bi	r-ph	K, U	1	-	-	-	1
Meridion circulae var. constrictum (Ralfs) V. Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K, T	3	-	-	5	-
Navicula arvensis Hustedt	Ogh-unk	unk	unk	U	2	-	-	-	-
Navicula bryophila Bøve-Petersen	Ogh-ind	al-il	ind	RI	-	-	-	-	1
Navicula confervacea (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB, S	17	21	2	-	12
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, T	-	-	-	2	-
Navicula contenta fo. biceps (Arnott) Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA, T	1	-	-	3	2
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	1
Navicula elginensis (Greg.) Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O, U	-	1	1	8	-
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.) Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	7	2	-	1	5

表2 珪藻分析結果 (2)

種 類	生 態 性			環 境 指 標 種	A地点	B地点	C地点	群 聚 種 2	
	塩分	pH	流水						
Navicula glomus Carter & Bailey-Watts	Ogh-unk	unk	unk	RI	-	-	-	1	
Navicula hambergii Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	2	-	
Navicula ignota Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	2	-	
Navicula ignota var. palustris (Hust.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	1	
Navicula mobiliensis var. minor Patrick	Ogh-ind	al-il	ind	RA, S	-	-	-	1	
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA, S	2	1	1	8 4	
Navicula plausibilis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	2	1	-	
Navicula pseudoscutiformis Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	-	1	-	-	-	
Navicula pusio Cleve	Ogh-hob	ind	ind	-	-	-	1	1	
Navicula schoenfeldii Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	RI	-	-	-	2	
Navicula stroemii Hustedt	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	1	
Navicula subnympharum Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	1	-	
Navicula subnympharum H. Kobayasi	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	-	-	1	-	
Navicula viridula (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K, U	3	-	-	-	
Navicula viridula var. rostellata (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	K, U	1	-	-	-	
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	2	3	
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	-	-	4	2	
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	-	1	1	2	1	
Neidium bisulcatum (Lagerst.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	RI	-	-	1	-	
Neidium iridis (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	-	1	-	-	
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	1	-	-	1	
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB, U	-	-	2	-	
Nitzschia fonticola Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1	-	1	
Nitzschia intermedia Hantzsch ex Cleve et Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	1	-	-	-	
Nitzschia nana Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB, S	-	2	1	-	
Nitzschia palustris Hustedt	Ogh-ind	ind	unk	-	-	-	-	1	
Nitzschia terrestris (Pet.)Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	1	-	
Nitzschia umbonata (Ehr.)Lange-B.	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	1	
Pinnularia acrosphaeria W. Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	1	1	1	1	
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	3	
Pinnularia braunii (Grun.)Cleve	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	-	6	3	1	-	
Pinnularia divergens W. Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	1	-	-	
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	3	-	-	-	
Pinnularia gibba var. linearis Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	-	1	-	-	-	
Pinnularia hemiptera (Kuetz.)Cleve	Ogh-hob	ind	l-ph	-	1	-	-	2	
Pinnularia krookii (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	
Pinnularia lenticuloides H. Kobayasi	Ogh-ind	ac-il	l-ph	-	1	-	-	-	
Pinnularia mesolepta (Ehr.)W. Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	1	-	-	-	
Pinnularia microstauron (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	1	-	-	3	
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	-	-	-	
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	2	
Pinnularia ornata H. Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	1	
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	1	
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	2	1	-	6	
Pinnularia schroederii (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	2	
Pinnularia similis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	1	-	1	-	
Pinnularia stomatophora (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph	-	1	-	-	-	
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB, S	2	1	1	5 1	
Pinnularia subnodosa Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	1	
Pinnularia subnodosa Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	1	-	-	-	
Pinnularia ueno Skvortzow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	1	-	-	-	
Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	-	2	1	6	
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	5	1	-	
Rhopalodia gibba (Ehr.)O. Muller	Ogh-ind	al-il	ind	-	1	-	-	-	
Rhopalodia quisingiana Skvortzow	Ogh-hil	al-il	ind	-	1	-	-	-	
Sellaphora bacillum (Ehr.)Mann	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	1	
Sellaphora laevissima (Kuetz.)Mann	Ogh-ind	ind	ind	-	4	-	-	1	
Sellaphora pseudopupa (Krasske)Lange-B.	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	1	
Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	12	10	1	2	
Stauroneis kriegeri Patrick	Ogh-ind	ind	unk	T	1	-	-	-	
Stauroneis laenburgiana Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	2	
Stauroneis laenburgiana fo. angulata Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	1	
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	1	
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	-	-	1	
Stauroneis phoenicenteron fo. hattorii Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	1	1	-	-	
Stauroneis smithii Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	1	-	5 2	
Stauroneis tenera Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	1	2 1	
Stauroneis thermicola (Petersen)Lund	Ogh-unk	unk	unk	RI	-	-	-	-	
Surirella ovata var. pinnata (W. Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	1	-	-	
Surirella robusta Ehrenberg	Ogh-hob	ind	l-bi	-	-	-	-	1	
Surirella tenera Gregory	Ogh-hob	ind	l-bi	-	-	-	-	1	
海水生種合計					0	0	0	0	0
海水～汽水生種合計					0	0	0	0	0
汽水生種合計					0	0	0	0	0
淡水～汽水生種合計					16	22	48	28	13
淡水生種合計					197	195	62	189	221
珪藻化石総数					213	217	110	217	234

## 凡例

H. R. : 塩分濃度に対する適応性

Ogh-Meh : 淡水-汽水生種

Ogh-hil : 貧塩好塩性種

Ogh-ind : 貧塩不定性種

Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種

Ogh-unk : 貧塩不明種

pH: 水素イオン濃度に対する適応性

al-bi : 真アルカリ性種

al-il : 好アルカリ性種

ind : pH不定性種

ac-il : 好酸性種

ac-bi : 真酸性種

unk : pH不明種

C. R. : 流水に対する適応性

l-bi : 真正水性種

l-ph : 好止水性種

ind : 流水不定性種

r-ph : 好流水性種

r-bi : 真流水性種

unk : 流水不明種

## 環境指標種群

K: 中～下流性河川指標種, M: 湖沼浮遊性種, N: 湖沼沼沢湿地指標種, O: 沼沢湿地付着生種,

P: 高層原指標種 (以上は安藤, 1990)

S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種 (以上は Asai, K. &amp; Watanabe, T., 1986)

R: 陸生珪藻 (RA: A 群, RB: B 群, RI 群, 伊藤・堀内, 1991)

好流水性の *Achnanthes lanceolata*, *Achnanthes rostrata*, *Navicula elginensis* var. *neglecta* を伴う。

### < B地点 >

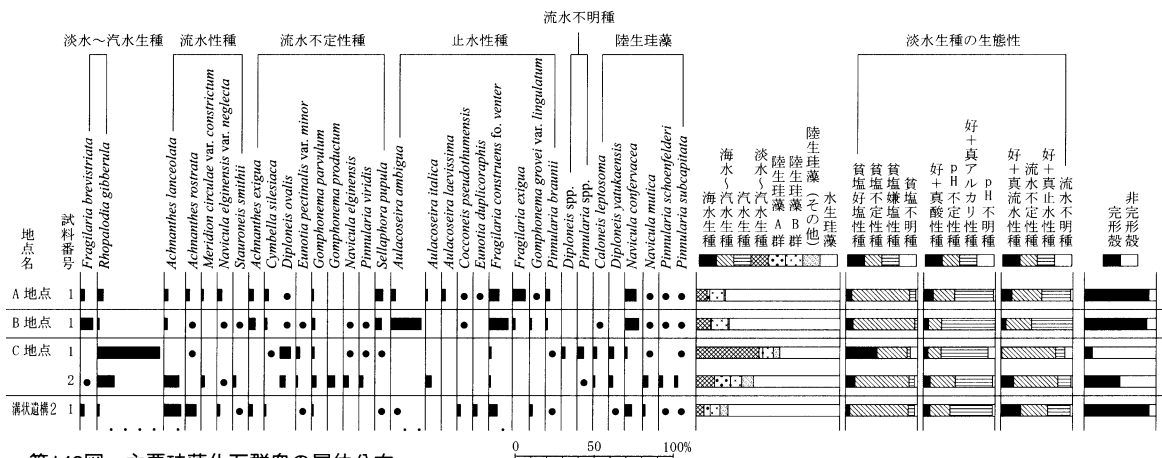
A地点と比較すると真+好アルカリ性種, 真+好止水性種が多い。主な産出種は, 淡水浮遊性で湖沼沼沢湿地指標種群 (安藤, 1990) の一種の *Aulacoseira ambigua* が20%と多産し, この他に *Fragilaria construens* fo. *venter*, *Navicula confervacea*, それに淡水~汽水域まで生育する塩分適応能の高い広域塩性種の *Fragilaria brevistriata* が約10%産出する。

### < C地点 >

化石の保存が悪く完形殻の出現率は, 試料番号2が約50%, 試料番号1が10%以下であり, 産出種のほとんどが壊れたり溶解している。試料番号2は, 貧塩不定性種, 真+好アルカリ性種, 流水不定性種が優占する。主な産出種は, 広域塩性種の *Rhopalodia gibberula*, 好流水性で中~下流性河川指標種群 (安藤, 1990) の一種の *Achnanthes lanceolata* が約10%検出され, 流水不定性の *Diploneis ovalis*, *Gomphonema parvulum*, *Navicula elginensis*などを伴う。この他に, *Navicula mutica*を始めとする陸生珪藻も多い。試料番号1は, *Rhopalodia gibberula* が40%以上と優占するが, 殻が丈夫なために選択的に残存した可能性がある。

### < 溝状遺構2 >

貧塩不定性種, 真+好アルカリ性種が優占する。流水に対しては, 真+好止水性種, 流水不定性種, 真+好止水性種がほぼ同じ割合で産出する。主な産出種は好流水性で中~下流性河川指標種群 (安藤, 1990) の一種の *Achnanthes lanceolata*, 好流水性の *Achnanthes rostrata* が産出し, *Fragilaria construens* fo. *venter*, *Navicula confervacea*などの好汚濁性種を伴う。



第148図 主要珪藻化石群衆の層位分布

汽水~淡水性種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水性種の生態性の比率は淡水性種の合計を基数として百分算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満の試料について検出した種類を示す。

### (3) 花粉分析

結果を第36表・第149図に示す。以下、地点別に花粉化石の産状を記す。

#### < A地点 >

木本花粉では、コナラ属アカガシ亜属およびクリ属-シイノキ属-マテバシイ属が多産し、マツ属（複維管束亜属を含む）・ヤマモモ属・ハンノキ属などを伴う。なお、総花粉・孢子数に対して木本花粉の占める割合は低い。

草本花粉ではイネ科が多産し、この他にオモダカ属・カヤツリグサ科・ミズアオイ属・マメ科などを伴う。

#### < B地点 >

木本花粉では、ハンノキ属・アカガシ亜属・クリ属-シイノキ属-マテバシイ属が多産し、マツ属（複維管束亜属を含む）・コナラ属コナラ亜属・ツツジ科などを僅かに伴う。総花粉・孢子数に対して木本花粉の占める割合も低い。

草本花粉ではイネ科が多産し、この他にガマ属・カヤツリグサ科・ミズアオイ属・ヨモギ属などが僅かに検出される。

#### < C地点 >

試料番号2では、木本花粉のクマシデ属-アサダ属・コナラ亜属・アカガシ亜属などが検出されるが、検出個体数が少ない。草本花粉は、イネ科・ヨモギ属が多く検出され、カヤツリグサ科・キク亜科なども検出される。試料番号1は、木本花粉、草本花粉、シダ類孢子とも全く検出されない。

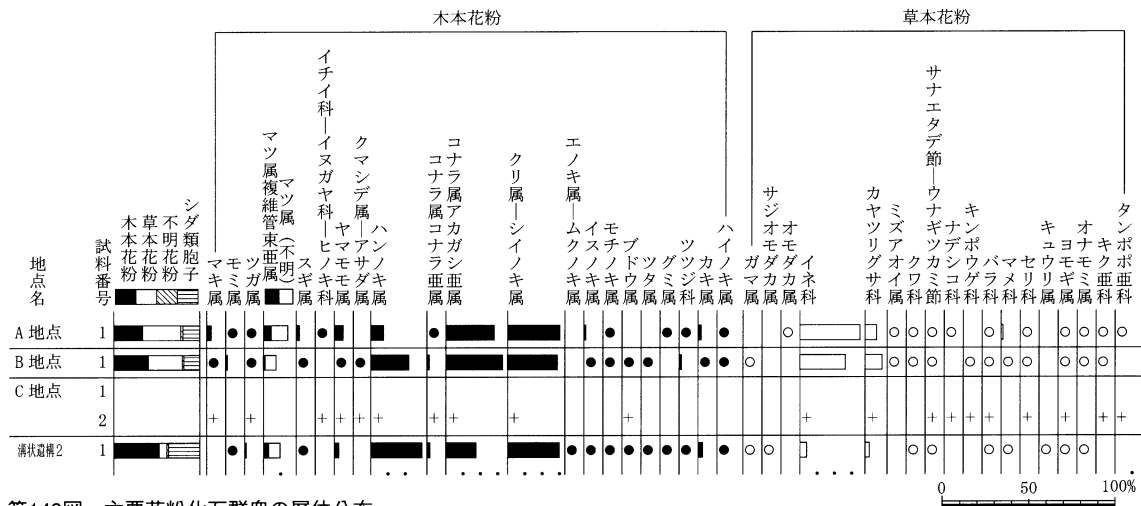
第36表 花粉分析結果

種類	試料番号		C地点		溝状遺跡2
	A地点	B地点	1	2	
木本花粉					
マキ属	7	1	-	1	-
モミ属	2	2	-	-	1
ツガ属	2	1	-	2	3
マツ属複維管束亜属	12	2	-	-	9
マツ属(不明)	26	13	-	-	20
スギ属	5	1	-	-	1
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1	-	-	1	-
ヤマモモ属	14	1	-	1	8
サワグルミ属	1	-	-	-	-
クルミ属	1	-	-	-	-
クマシデ属-アサダ属	-	1	-	4	-
ハンノキ属	20	46	-	1	90
コナラ属コナラ亜属	2	3	-	6	5
コナラ属アカガシ亜属	76	68	-	3	53
クリ属-シイノキ属	82	60	-	5	91
ニレ属-ケヤキ属	-	-	-	1	-
エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	-	1
ヤドリギ属	-	-	-	-	1
イスノキ属	3	1	-	-	1
カラスザンショウ属	-	-	-	-	1
ミカン科	1	-	-	-	-
アカメガシワ属	1	-	-	-	-
シラキ属	-	-	-	1	-
ウルシ属	1	-	-	-	-
モチノキ属	2	1	-	-	1
ニシキギ属	1	-	-	-	-
カエデ属	-	-	-	1	-
ブドウ属	-	1	-	1	1
ツタ属	-	1	-	-	2
ツバキ属	2	-	-	-	-
グミ属	1	-	-	-	1
ウコギ科	-	-	-	-	1
ツツジ科	2	3	-	-	2
カキ属	5	1	-	-	8
ハイノキ属	1	1	-	-	2
イボタノキ属	-	-	-	-	2
スイカズラ属	1	-	-	-	-
草本花粉					
ガマ属	-	1	-	-	1
サジオモダカ属	-	-	-	-	1
オモダカ属	1	-	-	-	-
イネ科	274	134	-	50	22
カヤツリグサ科	52	50	-	9	14
ミズアオイ属	3	2	-	-	-
ユリ科	-	1	-	-	-
クワ科	2	1	-	-	1
ギンギン属	-	1	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	1	4	-	2	1
タデ属	-	-	-	1	-
ナデシコ科	1	-	-	1	-
キンボウゲ科	-	1	-	2	-
タケニグサ属	-	-	-	4	-
アブラナ科	-	1	-	-	-
ユキノシタ科	-	1	-	-	-
ワレモコウ属	-	-	-	1	-
バラ科	5	1	-	1	2
マメ科	8	1	-	-	5
フウロソウ属	-	-	-	1	-
トウダイグサ科	-	1	-	-	-
ツリフネソウ属	-	-	-	1	-
セリ科	1	1	-	2	-
ネナシカズラ属	1	-	-	-	-
オミナエシ属	1	-	-	-	-
キュウリ属	-	-	-	-	1
ヨモギ属	6	2	-	72	2
オナモミ属	1	1	-	-	1
キク亜科	1	1	-	11	-
タンポポ亜科	1	-	-	1	-
不明花粉	21	10	-	-	12
シダ類孢子					
シダ類孢子	159	96	-	393	210
合計					
木本花粉	272	208	0	28	305
草本花粉	359	205	0	159	51
不明花粉	21	10	0	0	12
シダ類孢子	159	96	0	393	210
総計(不明を除く)	790	509	0	580	566

＜溝状遺構2＞

木本花粉では、ハンノキ属・クリ属－シイノキ属－マテバシイ属が多産し、次いでマツ属・アカガシ亜属が検出される。この他、ヤマモモ属、コナラ亜属、カキ属などを伴う。

草本花粉では、ガマ属・サジオモダカ属・イネ科・カヤツリグサ科・キュウリ属・オナモミ属などが検出される。ただし、全体的に草本花粉の出現率は低率であり、総花粉・孢子数に対して草本花粉が占める割合も極めて低率である。



第149図 主要花粉化石群衆の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。  
 なお、●○は1%未満の試料について検出した種類を示す。+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

(4) 植物珪酸体分析

結果を第37表と第150図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態の悪いものが多く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下、各地点別に産状を述べる。

＜A地点＞

タケ亜科、コブナグサ属・ススキ属を含むウシクサ族、種類を特定することができない不明珪酸体が多産し、ヨシ属を伴う。また、栽培植物のイネ属が短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体ともに検出される。特に機動細胞珪酸体は検出個体数が比較的多い。この他にイチゴツナギ亜科も検出される。

＜B地点＞

群集組成はA地点と類似しており、イネ属、タケ亜科、ウシクサ族が多産し、ヨシ属やイチゴツナギ亜科を伴う。

＜C地点＞

群集組成は、試料番号2と試料番号1で若干異なる。試料番号2では、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属などのウシクサ族の産出

第37表 植物珪酸体分析結果

種類	試料番号			
	A地点1	B地点1	C地点1	溝状遺構21
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	10	4	-	-
タケ亜科	47	25	31	11
ヨシ属	34	23	113	65
ウシクサ族コブナグサ属	12	11	6	2
ウシクサ族ススキ属	39	28	72	60
イチゴツナギ亜科	11	7	7	22
不明キビ型	134	79	146	89
不明ヒゲシク型	13	3	11	4
不明ダシク型	61	27	66	20
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属	15	30	1	-
タケ亜科	32	28	24	25
ヨシ属	6	7	12	47
ウシクサ族	25	30	46	26
不明	26	25	22	16
合計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	361	207	452	273
イネ科葉身機動細胞珪酸体	104	120	105	114
総計	465	327	557	387



が目立つ。しかし、試料番号1になると、ヨシ属機動細胞珪酸体の出現率が低下する。なお、イネ属機動細胞珪酸体が検出されるが、その出現率がわずかである。

### <溝状遺構2>

不明キビ型短細胞珪酸体の産出が目立ち、他地点と同様な種類が検出されるものの、概して検出個数が少ない。

### (5) 種実遺体同定

結果を、第38表に示す。以下に検出された種類の形態的特徴を示す。

- ・ハンノキ属 (*Alnus* sp.) カバノキ科

球果の破片が検出される。大きさは4mm程度で、一部が欠けている。楕円形で苞葉が螺旋状につく。苞葉は扇形で、先端部が反り返る。小型であるので、未熟果だと思われる。

- ・ヒサカキ (*Eurya japonica* Thunberg) ツバキ科ヒサカキ属

種子が検出される。黒色で大きさは1.5mm程度。不定形で側面に「へそ」があり、「へそ」中心に同心円状に丸い小孔が配列する。表面はやや堅くて光沢がある。

- ・タラノキ (*Aralia elata* (Miq) Seemann) ウコギ科

核が検出される。茶褐色で側面観は半円形、上面観は卵形。長さ2mm程度。核はやや厚く硬い。核の表面には不規則な瘤状突起がある。

- ・ニワトコ (*Sambucus rasemosa* L. subsp. *sieboldiana* (Miquel) Hara)

スイカズラ科ニワトコ属

種子が検出される。黒色。長楕円形で、大きさは2mm程度。下側に臍があり、表面には横軸に平行なしわ状の模様が存在する。

- ・ミクリ属 (*Sparganium* sp.) ミクリ科

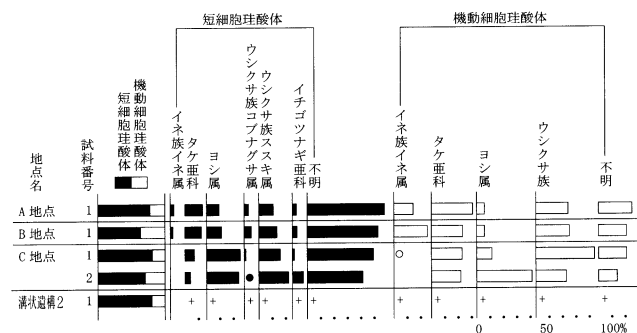
果実が検出される。大きさは3mm程度。側面観は紡錘形で、上面観は多角形状である。表面はざらつく。やや堅くて弾力があり、数本の筋が走る。先端部が鋭くとがっていたと思われるが、欠損している。

- ・オモダカ科 (*Alismataceae* sp.)

種子が検出される。U字形で大きさは2mm程度。淡褐色でわらかい。表面はざらつく。

- ・イネ科 (*Gramineae* sp.)

穎が検出される。淡褐色、楕円形で大きさ1mm程度。表面は柔らかくて薄く、弾力がある。



第150図 植物珪酸体群衆の層位分布

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の試料で検出された種類を示す。

第38表 種実同定結果

種 類	試料番号	
	A地点	B地点
木本類	1	1
ハンノキ属	-	1
ヒサカキ	2	3
タラノキ	1	-
ニワトコ	1	-
草本類		
ミクリ属	-	1
オモダカ科	3	3
イネ科	7	-
スゲ属	27	-
カヤツリグサ属近似種	25	20
ホタルイ属	42	14
カヤツリグサ科	8	12
イグサ属	2	-
イボクサ	1	-
ボントクタデ近似種	1	-
ケシ科	1	-
キジムシロ属-ヘビイチゴ	1	-
属-オランダイチゴ属	1	-
カタバミ属	1	-
コミカンソウ属	1	-
オトギリソウ属	1	-
オカトラノオ属	1	-
イヌコウジュ属	2	-
キランソウ属	12	1
ナス科	2	-
メロン類	-	1
キク科	2	-
合 計	144	56

・カヤツリグサ属近似種 (cf. *Cyperus* sp.)

果実が検出される。細長くて3稜があり、黒色。大きさは1mm程度。表面は薄くて堅く、弾力がある。

・ホタルイ属 (*Scirpus* sp.) カヤツリグサ科

果実が検出される。黒色。堅く光沢がある。大きさは2mm程度。扁平で背面が高く稜になっている。腹面は平らである。平凸レンズ状の広倒卵形。先端部はとがり、基部はせばまって「へそ」がある。表面には細かい凹凸があり、横軸方向に平行な横しわがあるように見える。

・スゲ属 (*Carex* sp.) カヤツリグサ科

果実が検出される。3稜があり、大きさは2mm程度。先端部は急に細くなり尖る。表面は褐色で薄くて柔らかく、弾力がある。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae sp.)

果実が検出される。広卵形で上面観は凸レンズ状。黒褐色で大きさは3mm程度。表面は薄くて堅く、弾力がある。

・イグサ属 (*Juncus* sp.) イグサ科

種子が検出される。長楕円形で大きさは0.5mm程度。種皮には網脈がある。表面は薄くて柔らかく、透き通る。

・イボクサ (*Aneilema Keisak* Hassk.) ツククサ科イボクサ属

種子が検出される。灰色、不定形で、大きさは1mm程度。種皮はやや柔らかい。くぼんだ発芽孔が存在し、その側面には一文字のくぼみがあり、それに直行するしわ模様が存在する。表面には円形の小孔が多数存在する。

・ボントクタデ近似種 (*Polygonum pubescens* Blume) タデ科タデ属

果実が検出される。3稜形で大きさは3mm程度。先端は尖る。表面は薄くて堅く、ざらつく。

・ケシ科 (Papaveraceae sp.)

種子が検出される。卵形で大きさは1mm程度。灰白色で堅い。表面は不規則で荒い網目状の模様がある。

・キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 (*Potentilla-Duchesnea-Fragaria*)

バラ科

種子が検出される。褐色。大きさは、2mm程度。半月形で、一端に「へそ」が存在する。表面全体はすじ状の模様があるが、不鮮明である。

・カタバミ属 (*Oxalis* sp.) カタバミ科

種子の破片が検出される。黒色、楕円形で大きさは約1.5mm。表面には横軸方向に平行に溝が数本走っている。

・ コミカンソウ属 (*Phyllanthus* sp.) トウダイグサ科

果実が検出される。淡褐色で大きさは1 mm程度。側面観は半月形で、上面観は三角形。果皮は薄くて柔らかくざらつく。表面には隆起した横しわがある。

・ オトギリソウ属 (*Hypericum* sp.) オトギリソウ科

種子が検出される。長楕円v形で大きさは1 mm程度。種皮は黒色で薄く、柔らかい。表面は亀甲状の模様がある。

・ オカトラノオ属 (*Lysimachia* sp.) サクラソウ科

果実が検出される。黒色で大きさは1 mm程度。側面観は半月形で、上面観は三角形。果皮は薄くてやや堅くざらつく。表面には微小な疣状の突起がある。

・ キランソウ属 (*Ajuga* sp.) シソ科

果実が検出される。灰白色、卵球状で大きさは2 mm程度。表面には荒く不規則な網目状隆起がみられる。下端に大きな「へそ」が存在する。

・ イヌコウジュ属 (*Mosla* sp.) シソ科

果実が検出される。褐色。大きさは1.5mm程度。いびつな球形で、先端に「へそ」が見られる。表面全体には、荒い亀甲状の網目模様がある。

・ ナス科 (*Solanaceae* sp.) ナス科

種子が検出される。腎臓形で、側面のくびれた部分に「へそ」があり、表面には「へそ」を中心として同心円状に網目模様が発達する。大きさは1 mm程度。褐色。表面は柔らかい。網目模様はやや細かく、畝は波うっている。

・ メロン類 (*Cucumis melo* L.) ウリ科キュウリ属

種子が検出される。大きさは6 mm程度。側面観は楕円形、上面観はやや偏平な楕円形。表面は比較的平滑。

・ キク科 (*Compositae* sp.)

果実が検出される。黒褐色。大きさは2 mm程度。楕円錐形で、上面観はひし形。

## (6) 樹種同定

樹種同定結果を第38表に示す。木材は、針葉樹1種類(マキ属)と広葉樹6種類(ハンノキ属ハンノキ亜属・ハンノキ属・コナラ属アカガシ亜属・クリ・ツブラジイ・ユズリハ属)に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・ マキ属 (*Podocarpus*) マキ科

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急～緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が<sup>3</sup>早材部および晩材部に散在する。

放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・ ハンノキ属ハンノキ亜属

第39表 試料表一覧及び分析試料

調査区	地点・層位など	試料名	用途など	樹種
1地点	南	材		マキ属
	南	根	自然木	ハンノキ属<根材>
	北 A-16グリッド	1		ハンノキ属<根材>
	北 B-16グリッド	2		ハンノキ属
	北 A-16グリッド	3		ハンノキ属<根材>
2地点	北 A-15グリッド	4		ハンノキ属
		立木	立木	ハンノキ属<根材>
		立木	立木	ハンノキ属<根材>
	自然流路1	杭北列	杭	ツブラジイ
	自然流路1	杭南列	杭	クリ
3地点	A-22グリッド	図NO.869	用途不明品	コナラ属アカガシ亜属
	溝状遺構2	杭	杭	クリ
3地点	溝状遺構2 覆土中位	材		ユズリハ属

(*Alnus* subgen. *Alnus*) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または2～4個が放射方向に複合して配列する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は列状に配列する。放射組織は同性、単列、1～30細胞高のものと集合放射組織とがある。

・ハンノキ属<根材> (*Alnus* <root wood>) カバノキ科

散孔材で、管孔の管壁は薄く、単独または放射方向に2～4個が複合して散在する。道管の分布密度は低い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1～30細胞高。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

試料は、放射組織の部分が多く、道管はあまり観察できない。年輪界で道管径の変化がほとんど認められないこと、接線方向に道管が分布していないこと等から放射孔材と判断できる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・ツブラジイ (*Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky) ブナ科シイノキ属

環孔材～放射孔材で孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、小道管には希に階段穿孔が認められ、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと集合～複合放射組織とがある。

・ユズリハ属 (*Daphniphyllum*) トウダイグサ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独および2～3個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性II型、1～2細胞幅、1～20細胞高で、時に上下に連結する。

## 4. 考察

### (1) 黒色粘土層に関する検討

黒色粘土層から検出される珪藻化石は殻の保存が悪い。群集組成は、流水不定性種を主体として、中～下流性河川指標種群を含む流水性種が比較的多く検出され、止水域の環境を示唆する止水性種、陸上の好気的環境に耐性のある陸生珪藻など、様々な種類が検出される。このような群集組成は混合群集と呼ばれ、攪乱の影響を受けた堆積物や洪水性堆積物で認められることが多いとされている(堀内ほか, 1996)。したがって、本層は、扇状地を含む後背地の陸上の乾いた場所や水域など様々な場所の土壌が流水の影響で運搬されて堆積したと考えられる。本層の堆積した年代は、約13,100年前の放射性炭素年代測定値が得られているが、上記の堆積環境を考慮すると13,100年前ないしそれ以降とみなした方が良いであろう。この当時の台地上の植生は木本花粉がほとんど検出されなかったため検討できない。た

だし、僅かに検出される木本花粉が周辺に生育する母植物に、またタケ亜科珪酸体が台地斜面などには生育していたものにそれぞれ由来している可能性がある。一方、低地には、ヨシ属・ススキ属などのイネ科、ヨモギ属、キク亜科などの草本類が生育していたと推定される。中でもヨシ属珪酸体の産出が目立つことから、周辺はヨシ属が生育する湿潤な場所となっていた可能性がある。

黒色粘土層上位の灰褐色砂層を挟んで堆積する暗褐色砂混じりシルト層は、放射性炭素年代測定の結果から約5,500年前、キーリ・武藤（1994）に基づく縄文時代前期に堆積したと考えられる。本層で検出される珪藻化石群集は *Rhopalodia gibberula* が多産するが、大部分の珪藻化石が壊れたり溶解しており、当時の環境を十分に反映していないと考えられる。おそらくは、殻が丈夫なために選択的に残存したものであろう。つまり、この群集組成は当時の環境を十分に反映していない可能性が高い。一方、周辺低地では黒色粘土層が堆積した時と比べると、ヨシ属が減少して、ススキ属を含むウシクサ族やタケ・ササ類などが増加したと考えられる。このような変化は直下に砂層が堆積していることから、地下水位が低下して比較的乾いた場所が広がったことを示している可能性がある。なお、本層ではイネ属機動細胞珪酸体が検出されているが、出現率が極めて低率であること、さらに本層直上が旧水田耕作土であることを考慮すると、後代の攪乱により上位から落ち込んできたものと考えられ、当時の稲作を示唆するものでないと思われる。

## (2) 堆積物の時代性

1地点・2地点から出土した木材、A地点・B地点の弥生時代末～古墳時代初頭の遺物包含層、および溝状遺構2の覆土中位から出土した木材は、およそ2,000年前前後の放射性炭素年代測定値が得られることから、発掘調査の所見通り、これらの層準は弥生時代～古墳時代にかけて堆積したと推定される。なお、1地点の出土木材が1,460年前と新しい年代値であり、またA地点試料番号1が2,310年前と古い年代値となっている。このことから、試料によっては時期が若干異なっていた可能性もある。

## (3) 溝状遺構2の埋積過程

溝状遺構2からは、中～下流性河川指標種群を含む流水性種が多産することが特徴である。また、珪藻化石の保存がよかったことから現地性を示していると考えられる。産出する流水性種の多くは、*Achnanthes lanceolata* など水質のきれいな場所に生育する好清水性種 (Asai, K. and Watanabe, T., 1995) である。以上のことから、好汚濁性種が多産するA地点・B地点と水質的に異なり、溝状遺構2内は比較的きれいな水が流れていたと考えられる。なお、遺構埋積物から検出される花粉化石や植物珪酸体は、溝およびその周辺の植生を反映しているとみられ、溝内にガマ属・サジオモダカ属などの水生植物が、また溝沿いの乾いた場所などにタケ亜科・ススキ属などのイネ科、カヤツリグサ科などが生育していたとみられる。

## (4) 弥生時代～古墳時代の古環境

A地点やB地点で多産した *Navicula confervacea* は、陸域にも水域にも生育する陸生珪藻B群とされるが、その他の陸生珪藻をあまり伴わないことからすると、水生珪藻として水域に生育した種と判断される。珪藻化石群集は、両地点とも完形殻の出現率が高いことから

産出種が現地性を示していると考えられ、有機汚濁の進んだ富栄養水域に一般的な好汚濁性種が種数割合とも多産し、沼沢湿地付着生種群などを伴うことが特徴である。このことから低地には、富栄養な沼沢地～湿地のような水域が存在していたと推定される。そこには、ミクリ属、オモダカ属、スゲ属、ホタルイ属、カヤツリグサ属、ミズアオイ属、イグサ属、イボクサ、ポントクタデなどが生育していたものと考えられる。ただし、A地点で流水性種を伴い、B地点で淡水浮遊性種が多く検出される傾向にあるなど地点により珪藻化石群集に差がみられる。これより、低地内では、場所あるいは時代により多少異なった環境であったと考えられる。すなわち、A地点が流水の影響を受けており、またB地点がより安定した水域であった可能性がある。

ところで、A地点・B地点ともにイネ属短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体ともに検出され、特に機動細胞珪酸体が多産する。よって、元来湿地であった場所で水稻栽培が行われていたと推定される。この点を考えると、富栄養な水質であった背景として施肥の影響とも考えられ、興味深い点である。また、キュウリ属などメロン類は、栽培のために渡来した種類が検出されている。これらの種類は虫媒花であるため、花粉生産量が少なくまた飛散能力も低い。花粉化石の検出は、遺跡近くで栽培されていた可能性を示していると思われる。このような耕作地周辺の開けた場所には、カタバミ属、キランソウ属、コムカンソウ属など、田畑や人家近くなど人里などに開けた草地を作る人里植物の仲間を含む草本類が生育していたと思われる。

一方、検出される木本花粉をみると、アカガシ亜属、クリ属－シイノキ属－マテバシイ属が多産する。アカガシ亜属、シイノキ属、マテバシイ属がとも暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）の主要構成要素である。この他にもマキ属、ヤマモモ属、イスノキ属、カキ属、ハイノキ属など暖温帯を中心に分布する分類群の種類数が多い。また、種実遺体や木材でも同様に照葉樹林を構成する分類群が検出されている。Hatanaka (1985) によると、九州地方では約8,000年前以降になると照葉樹林が発達するとされている。本地域でも同様に台地上ではシイ・カシ類を中心とした照葉樹林が成立していたと考えられる。また、林縁部には、ヒサカキ・タラノキ・ニワトコ・ツツジ科などの低木類やブドウ属・ツタ属などのツル性木本類が生育していたと推定される。なお、B地点や溝状遺構2ではハンノキ属が特徴的に検出されている。種実遺体でも未熟と思われる球果が、また自然木や杭材にもハンノキ属が検出されている。ハンノキ属の中には、湿地林や河畔林を形成する種類が含まれる。よって、河道周辺など付近の低地にハンノキ属が生育していたのであろう。ただ、花粉化石の出現率が極端に高率でないこと、総花粉・胞子に対して木本花粉の出現率が低率であることから、遺跡の近傍にハンノキ属からなる林分が形成されていたとは考えられない。おそらく、付近は開けた環境であったと推定される。

以上、微化石および大型植物遺体の産出から弥生時代～古墳時代の古環境について検討を加えた。その結果、低地は開けて様々な草本類が生育し、また稲作や畑作などが行われており、台地は照葉樹林が成立していたと推定された。しかし、稲作の開始時期やそこに至るまでの過程などについては検討課題として残されている。今後、微化石の変遷様式を明らかに

し、稲作も含めた低地の利用状況や環境変化等を明らかにしていく必要があるだろう。

### (5) 用材選択

試料は、杭と樺状木製品とがある。杭は、クリ2点、ツブラジイ1点であった。このうち、ツブラジイは、アカガシ亜属などと共に暖温帯常緑広葉樹林を構成する種類であり、花粉分析の結果から遺跡周辺に生育していたことが推定される。杭材は、これまで各地で行われた樹種同定結果（島地・伊東，1988；伊東，1990）で多くの種類が認められ、特定の種類が利用されていた様子は見られない。これらのことから、遺跡周辺に生育していた種類を利用していたことが推定される。また、クリやツブラジイが有用材であることを考慮すれば、木製品加工時の枝などの余材や廃材などが利用されていた可能性がある。

一方、樺状木製品はアカガシ亜属であった。樺にはこれまでも広葉樹のアカガシ亜属が多数認められており（島地・伊東，1988），今回の試料が樺としても矛盾しない。また、これまで樺に認められた種類を見ると、基本的には堅い材質を有する種類が多く、材質を考慮した用材選択が行われていたことが推定される。

### 引用文献

- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用・東北地理，42，p.73-88.
- Asai,K. and Watanabe,T.（1995）Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.
- K.Hatanaka（1985）PALYNOLOGICAL STUDIES ON THE VEGETATIONAL SUCCESSION SINCE THE WURM GLACIAL AGE IN KYUSHU AND ADJACENT AREAS. Journal of the Faculty of Literature, Kitakyushu University(Series B), 18, p.29-71.
- 堀内誠示・高橋 敦・橋本真紀夫（1996）珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について－混合群集の認定と堆積環境の解釈－. 日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集，p.62-63. 日本文化財科学会.
- 伊東隆夫（1990）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途II. 木材研究・資料，26，p.91-189，京都大学木材研究所.
- 伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌，6，p.23-45.
- キーリ・C. T. ・武藤康弘（1994）縄文時代の年代. 加藤晋平・小林達夫・藤本 強編「縄文文化の研究 1 縄文人とその環境」，p.246-275，雄山閣出版株式会社.
- 近藤錬三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用. 第四紀研究，25，p.31-64.
- Krammer,K.（1992）PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa.

## BIBLIOTHECA

DIATOMOLOGICA BAND 26, p.1-353., BERLIN·STUTTGART.

Krammer,K. and Lange-Bertalot,H. (1986) Bacillariophyceae,Teil 1,Naviculaceae.

Band 2/1 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer,K. and Lange-Bertalot,H. (1988) Bacillariophyceae,Teil 2,Epithemiaceae,

Bacillariaceae,Suirellaceae. Band 2/2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,

536p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer,K. and Lange-Bertalot,H. (1991a) Bacillariophyceae,Teil 3,Centrales,

Fragilariaceae,Eunotiaceae. Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer,K. and Lange-Bertalot,H. (1991b) Bacillariophyceae,Teil 4,Achnantheaceae,

Kritische Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae)und Gomphonema. Band 2/4 von:Die

Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.

Lange-Bertalot,H.unter Mitarbeit von A.Steindorf (1995) Rote Liste der Kieselalgen

(Bacillariophyceae) Deutschlands. Schr.-R.f.Vegetationskde.H.28 000-000 BfN, Bonn-Bad Godesberg p.1-31.

太田良平 (1971) 地域地質研究報告5万分の1 図幅「川内地域の地質」, 28p., 地質調査所.

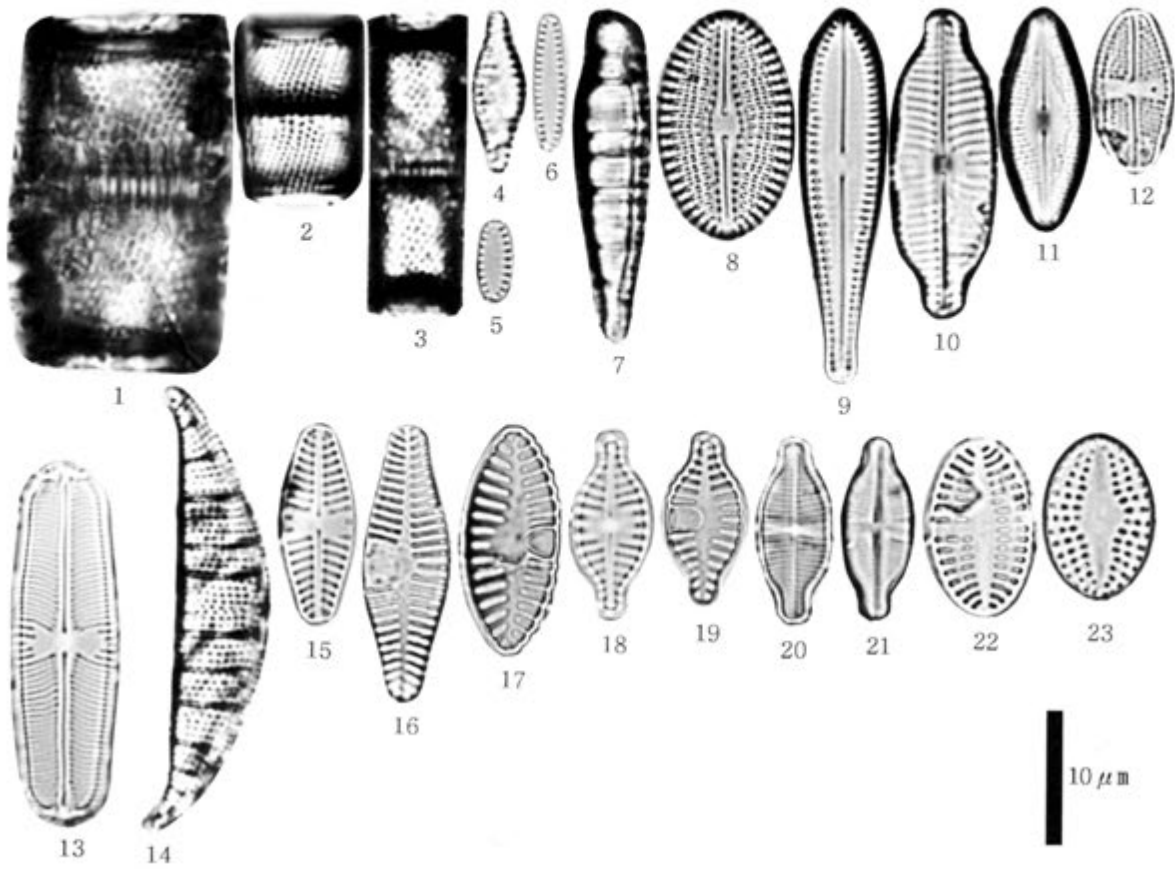
ペドロジスト懇談会編 (1984) 土壤調査ハンドブック, 156p., 博友社.

島地 謙・伊東隆夫編 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧. 296p, 雄山閣.

Vos,P.C. and H.de Wolf (1993) Reconstruction of sedimentary environments in Holocene costal deposits of the southwest Netherlands; the Poortvliet boring, a case study of palaeoenvironmental diatom research. Twelfth International Diatom Symposium, p.297-296.

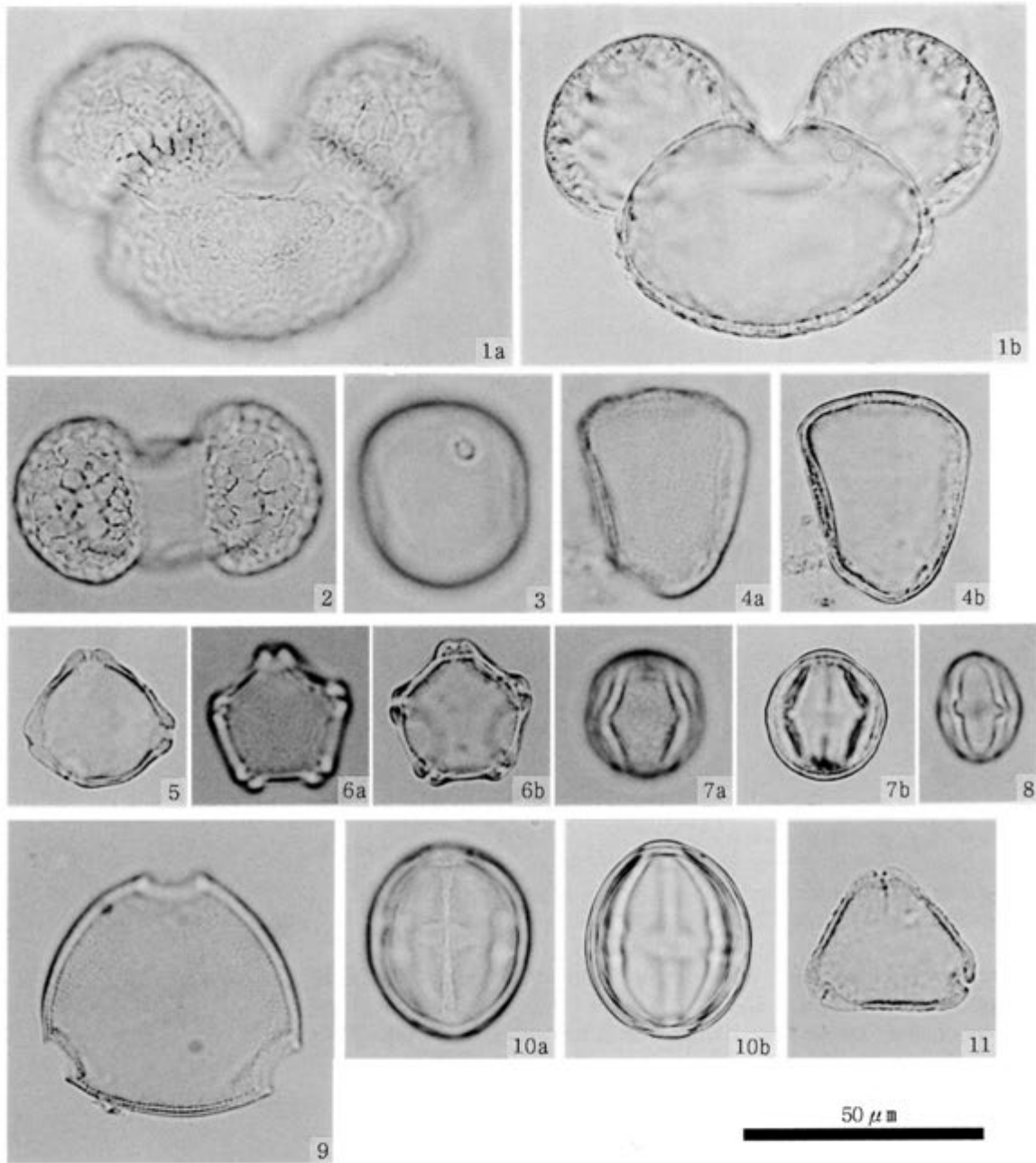


図版1 珪藻化石



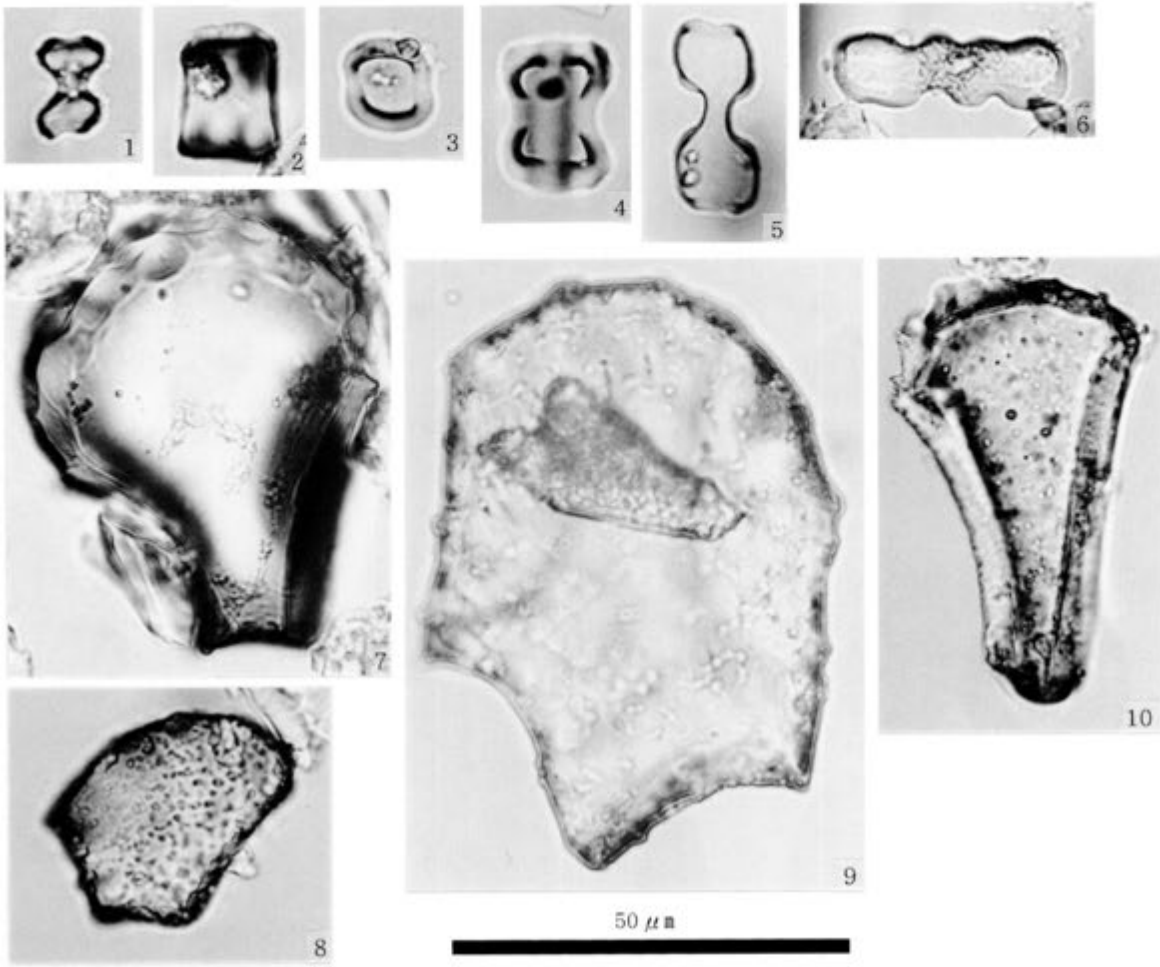
1. *Aulacoseira italica* var. *valida* (Grun.) Simonsen (C地点; 2)
2. *Aulacoseira ambigua* (Grun.) Simonsen (B地点; 1)
3. *Aulacoseira italica* (Ehr.) Simonsen (C地点; 2)
4. *Fragilaria construens* fo. *venter* (Ehr.) Hustedt (C地点; 2)
5. *Fragilaria brevistriata* Grunow (B地点; 1)
6. *Fragilaria brevistriata* Grunow (B地点; 1)
7. *Meridion circulae* var. *constrictum* (Ralfs) V.Heurck (C地点; 2)
8. *Diploneis ovalis* (Hilse) Cleve (B地点; 1)
9. *Gomphonema grovei* var. *lingulatum* (Hust.) Lange-Bertalot (溝状遺構2; 1)
10. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick (B地点; 1)
11. *Navicula confervacea* (Kuetz.) Grunow (B地点; 1)
12. *Navicula mutica* Kuetzing (C地点; 2)
13. *Sellaphora pupula* (Kuetz.) Mereschkowsky (B地点; 1)
14. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) O.Muller (B地点; 1)
15. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (溝状遺構2; 1)
16. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (溝状遺構2; 1)
17. *Achnanthes lanceolata* var. *abbreviata*. Grunow (溝状遺構2; 1)
18. *Achnanthes rostrata* Oestrup (溝状遺構2; 1)
19. *Achnanthes rostrata* Oestrup (溝状遺構2; 1)
20. *Achnanthes exigua* Grunow (A地点; 1)
21. *Achnanthes exigua* Grunow (A地点; 1)
22. *Cocconeis disculus* Schumann (溝状遺構2; 1)
23. *Cocconeis pseudothumensis* Reichardt (溝状遺構2; 1)

図版2 花粉化石



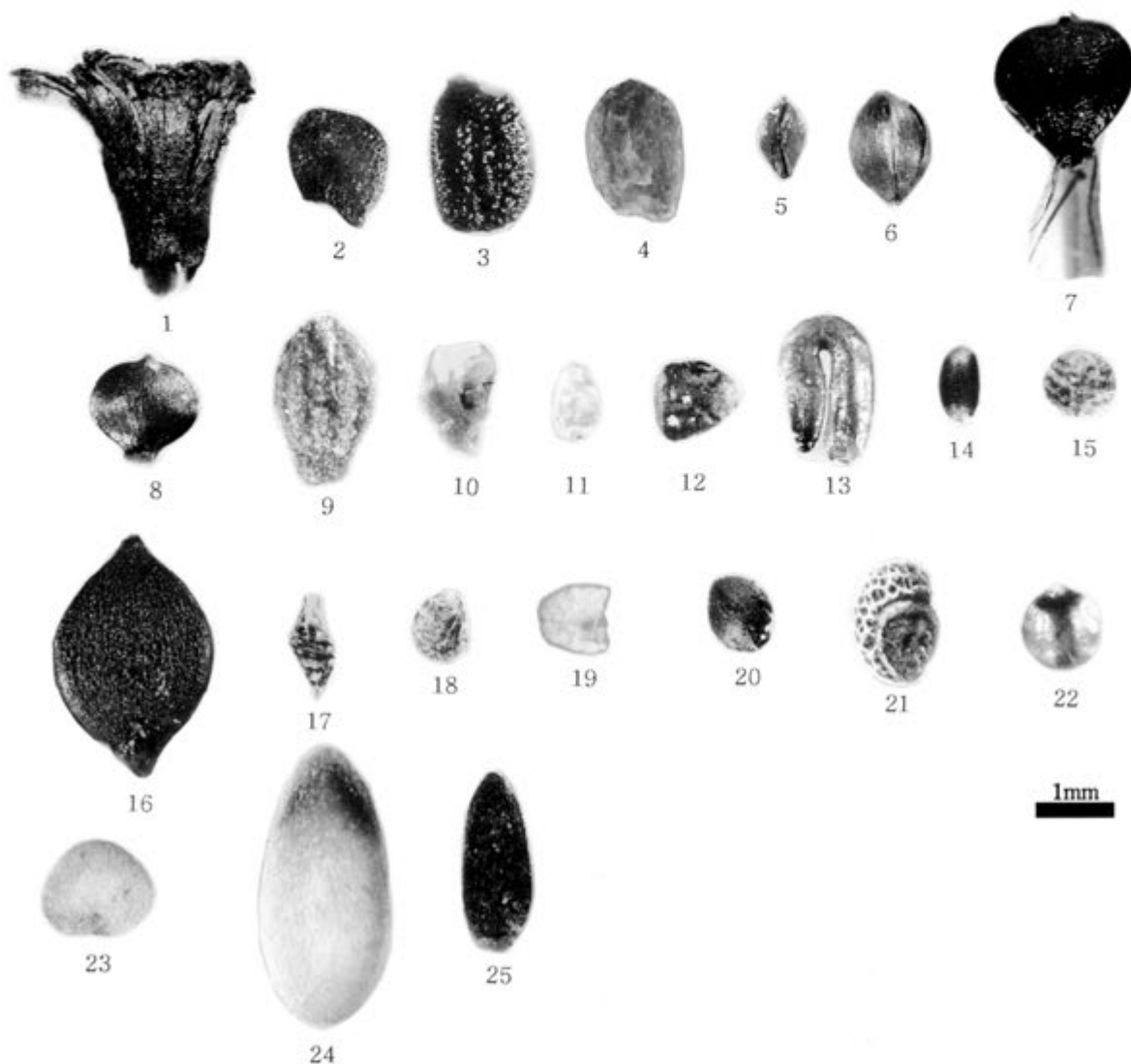
- |                        |                       |
|------------------------|-----------------------|
| 1. マツ属複維管束亜属 (A地点; 1)  | 2. マキ属 (A地点; 1)       |
| 3. イネ科 (A地点; 1)        | 4. カヤツリグサ科 (A地点; 1)   |
| 5. ヤマモモ属 (A地点; 1)      | 6. ハンノキ属 (A地点; 1)     |
| 7. コナラ属アカガシ亜属 (A地点; 1) | 8. クリ属-シイノキ属 (A地点; 1) |
| 9. キュウリ属 (溝状遺構2; 1)    | 10. カキ属 (A地点; 1)      |
| 11. ハイノキ属 (A地点; 1)     |                       |

図版3 植物珪酸体



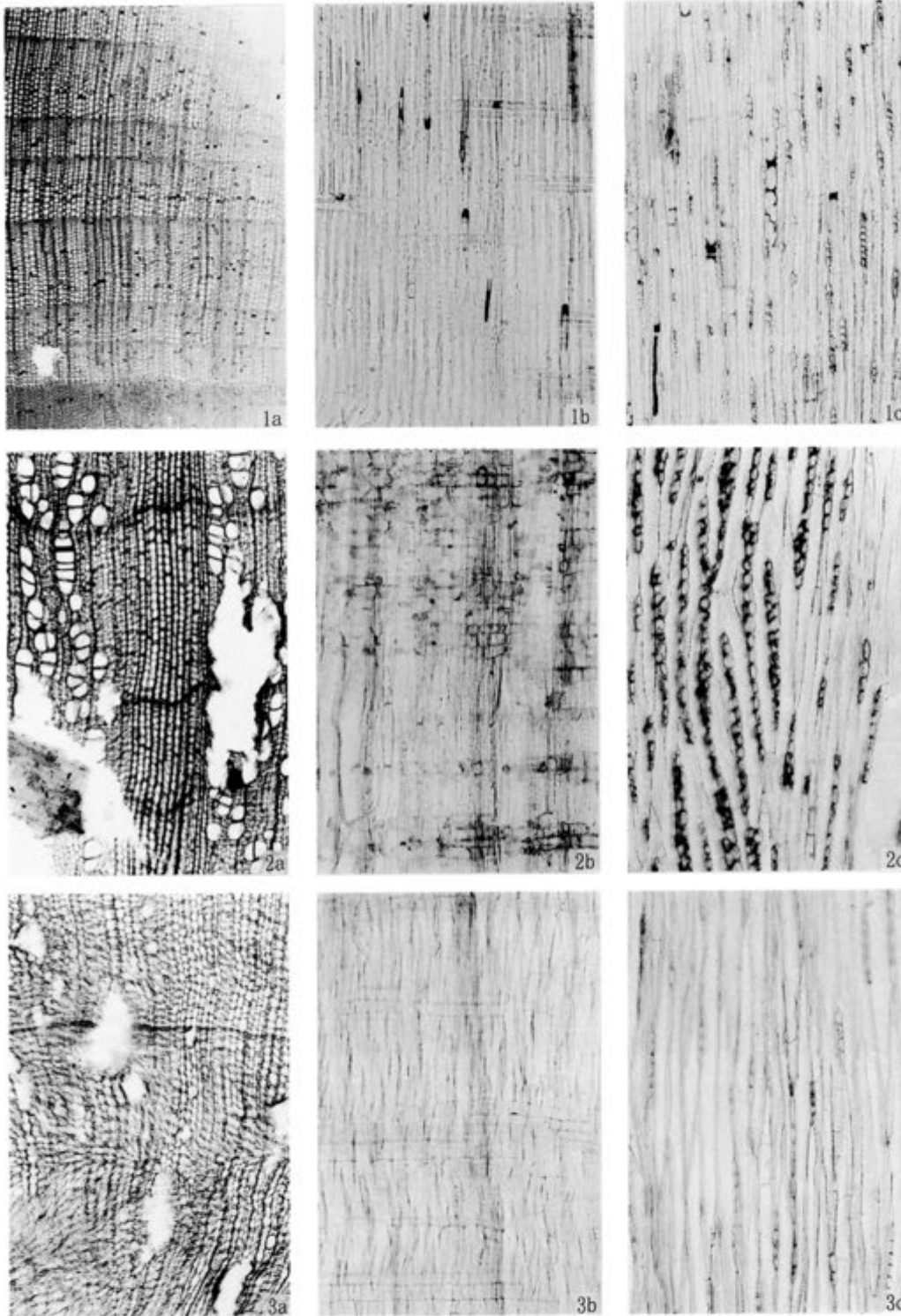
- |                        |                            |
|------------------------|----------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体 (A地点; 1)  | 2. タケ亜科短細胞珪酸体 (A地点; 1)     |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体 (C地点; 1)  | 4. コブナグサ属短細胞珪酸体 (B地点; 1)   |
| 5. ススキ属短細胞珪酸体 (C地点; 2) | 6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (C地点; 2) |
| 7. イネ属機動細胞珪酸体 (B地点; 1) | 8. タケ亜科機動細胞珪酸体 (A地点; 1)    |
| 9. ヨシ属機動細胞珪酸体 (C地点; 2) | 10. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (C地点; 1)  |

図版4 種実遺体



- |                                     |                        |                     |
|-------------------------------------|------------------------|---------------------|
| 1. ハンノキ属 (B地点; 1)                   | 2. ヒサカキ (B地点; 1)       | 3. ニワトコ (A地点; 1)    |
| 4. タラノキ (A地点; 1)                    | 5. カヤツリグサ属近似種 (A地点; 1) | 6. スゲ属 (A地点; 1)     |
| 7. ホタルイ属 (A地点; 1)                   | 8. カヤツリグサ科 (A地点; 1)    | 9. ミクリ属 (B地点; 1)    |
| 10. イネ科 (A地点; 1)                    | 11. イグサ属 (A地点; 1)      | 12. イボクサ (A地点; 1)   |
| 13. オモダカ科 (A地点; 1)                  | 14. オトギリソウ属 (A地点; 1)   | 15. ケシ科 (A地点; 1)    |
| 16. ポントクタテ近似種 (A地点; 1)              | 17. カタバミ属 (A地点; 1)     |                     |
| 18. キジムシロ属—ヘビイチゴ属—オランダイチゴ属 (A地点; 1) |                        |                     |
| 19. コミカンソウ属 (A地点; 1)                | 20. オカトラノオ属 (A地点; 1)   | 21. キランソウ属 (A地点; 1) |
| 22. イヌコウジュ属 (A地点; 1)                | 23. ナス科 (A地点; 1)       | 24. メロン類 (B地点; 1)   |
| 25. キク科 (A地点; 1)                    |                        |                     |

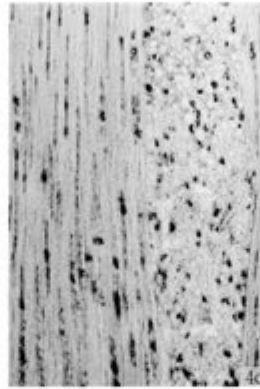
図版5 木材 (1)



1. マキ属 (1地点 南材)
  2. ハンノキ属ハンノキ亜属 (1地点北B-16グリッドNo. 2)
  3. ハンノキ属<根材> (1地点北A-16グリッドNo. 3)
- a : 木目, b : 柎目, c : 板目

200 μm : a  
 200 μm : b, c

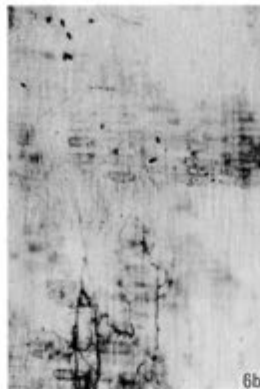
図版5 木材 (2)



4. コナラ属アカガシ亜属  
(2地点A-22グリッド図No.869)  
a: 木口, b: 柎目, c: 板目

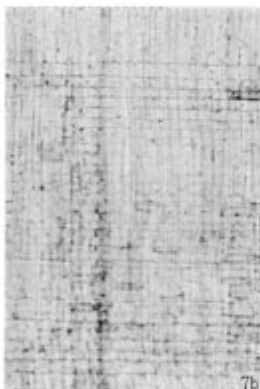
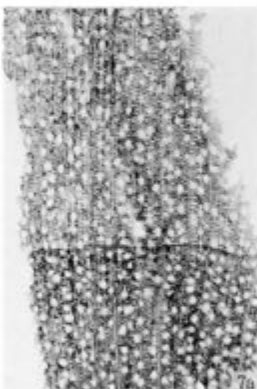


5. クリ (2地点 自然流路1 抗南列)  
a: 木口, b: 柎目, c: 板目



6. ツブラジイ  
(2地点 自然流路1 抗北列)  
a: 木口, b: 柎目, c: 板目

200 μm : a  
200 μm : b, c



7. エズリハ属  
(3地点 溝状遺構2 覆土中位)  
a: 木口, b: 柎目, c: 板目

200 μm : a  
200 μm : b, c

### 第3節 楠元遺跡の自然科学分析報告

(放射性炭素年代測定・種実同定・樹種同定)

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

楠元遺跡（鹿児島県川内市百次町所在）は、百次川右岸の標高11～12mの沖積地に立地し、現在は水田として利用されている。今回の発掘調査の結果、弥生時代末～古墳時代初頭の集落跡が見つかり、そこから木製品等が多量に検出されている。前回の分析調査では、花粉分析や植物珪酸体分析等を用いた稲作の検討や、出土材の種類構成に関する情報を得た。今回は、遺構の覆土を水洗選別することによって得られた種実遺体の種類を明らかにし、当時の植物利用に関する情報を得る。当初は、検出された炭化米などの栽培植物の種実を同定し、さらにDNA分析を行う予定であった。しかし、予察的に種実同定を行った結果、炭化米が比較的少ないことが明らかとなった。そこで今回は、種実同定によって得られた炭化米3点とムギ類1点の計4点についてDNA分析を行い、当時栽培されていた品種などに関する情報を得ることにした。DNA分析については、株式会社 ジェネテックに協力を依頼し、署名原稿として第4節に示した。なお、協議の結果、不足点数分については、本遺跡から出土した杭材について、放射性炭素年代測定と樹種同定を併せて実施し、出土材の時代観や用材についての知見を得ることで補うことにした。

#### I. 出土種実・木材の同定と年代測定

##### 1. 試料

種実同定用試料は、1号住居および2号住居の覆土、自然流路1（RI8）から出土した壺の中の土、溝状遺構2（A-22,23 SD1）の埋積土や、溝から出土した壺の中の土などから水洗選別によって得られた試料13ケースである。1つの遺構で篩目別に複数のケースが存在し、1ケースに複数の種類が数点～数十点含まれている。放射性炭素年代測定・樹種同定用試料は、遺跡から出土した杭材3点（杭2、杭53、杭列4）から一部を採取したもので、いずれも数グラムほどであった。試料は水を多量に含むことから、乾燥させると数分の1以下の重量になると予想されるため、湿重量で約2gを切り取り、年代測定用試料とした。残りの試料は樹種同定用試料とした。

また、3号住居から出土しイネに同定された種実遺体3点（No.1～3）と、溝状遺構2 No.943壺内から出土しムギ類に同定された種実遺体1点（No.4）について、DNA分析試料とした。

##### 2. 分析方法

###### (1) 放射性炭素年代測定

測定は、株式会社加速器分析研究所（Code No. IAA-）の協力を得、加速器質量分析法（AMS法）により測定した。年代の算出にはLibbyの半減期5568年を使用、BP年代値は1950年からさかのぼって何年前かを表している。付記した誤差は、標準偏差（1σ）に相当する時代である。 $\delta^{13}\text{C}$ の値は、AMS測定の場合、同時に測定される値を用いている。

## (2) 種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察・分類し、その形態的特徴および当社所有の現生標本との比較から種類を同定・計数した。分析後の植物遺体のうち、イネ、ムギ類はDNA分析対象試料とする。その他の植物遺体は、乾燥剤とともに種類毎にビンに入れ、保存する。

## (3) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

# 3. 結果

## (1) 放射性炭素年代測定

結果を第40表に示す。測定の結果、いずれも1,800~2,000年前に値が収束している。

第40表 放射性炭素年代測定結果

試料名	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code. No.	種類
杭2 313	1,970±30	-26.78±1.13	1,980±30	IAAA-11752	クリ
杭53 320	1,830±30	-30.04±1.02	1,880±30	IAAA-11753	クリ
杭列4 119	2,010±30	-30.08±1.05	2,050±30	IAAA-11754	クリ

## (2) 種実同定

種実同定結果を第41表に示す。木本16種類（ハンノキ、イチイガシ、アカガシ亜属、コナラ属、シイ属、ブナ科、エノキ、ムクノキ、クスノキ、カラスザンショウ、コバンノキ、アカメガシワ、ブドウ属、ヒサカキ、エゴノキ属、ガマズミ属）、草本10種類（イネ、ムギ類、ジュズダマ属、ホタルイ属、カヤツリグサ科、カナムグラ、イシミカワ近似種、タデ属、ハスノハカズラ、ヒョウタン類）の種実が同定された他、木の芽、材、炭化材、不明植物（木材組織が認められない、種類・部位ともに不明の植物片を示す）、不明炭化物（木材組織が認められない、種類・部位ともに不明の炭化物を示す）、昆虫遺骸の破片などが検出された。植物遺体の保存は悪く、イネ、コムギは炭化している状態であった。以下に、同定された種実遺体の形態的特徴などを木本・草本の順に記す。

### <木本>

・ハンノキ (*Alnus japonica* (Thunb.) Steud.) カバノキ科ハンノキ属

果序、果鱗の破片が同定された。灰褐色で木質。果鱗は軸から脱落している。果序は完形ならば卵状楕円体か。長さ7mm以上。果鱗は扇形で偏平。径3mm程度。基部は楔形。木質で縦筋が目立つ。上方は反りかえるように突出し、3~5つに分かれて開く。

・イチイガシ (*Quercus gilva* Blume) ブナ科コナラ属アカガシ亜属

幼果が同定された。灰褐色、環状椀の殻斗内に果実が包まれる。径5mm程度。輪状紋の部分は円柱状または円錐台状に突出し、柱頭は傘状で外側を向く。同定の決め手となる柱頭の保存状態が良好であった。

・アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科コナラ属



幼果が同定された。灰褐色，環状椀の殻斗に果実が包まれる。上述のイチイガシのように，柱頭が完全に残っていない個体をアカガシ亜属と同定するにとどめた。

・コナラ属 (*Quercus*) ブナ科

果実破片が同定された。灰褐色，完形ならば卵形か。長さ13mm以上，基部の着点の径は5mm程度。

第41表 種実同定結果

種類名	木本										草本										木の芽	炭化材	不明植物	不明炭化物	昆虫遺骸									
	ハンノキ	イチイガシ	アカガシ亜属	コナラ属	シイ属	ブナ科	エノキ	ムクノキ	クスノキ	カラスザンショウ	コバンノキ	アカメガシラ	ブドウ属	ヒサカキ	エゴノキ属	ガマズミ属	イネ	ムギ類	ジュズダマ属	ホタルイ属						カヤツリグサ科	カナムグラ	イシミカワ近似種	タデ属	ハスノハカズラ	ヒョウタン類	果実	種子	
地点・番号等	筒径																																	
A-26 1号住居	0.43	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1			
B-26 2号住居	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
A-25 跡1	0.43	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
自然流路1 内埋土	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	3	-	-			
自然流路1 出土壺の中の土	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	6	-	-		
自然流路1 108①	0.43	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	5	-	-	
自然流路1 108②	2.0	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	1	-	-	-	
2北地点 66 壺の土	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
2地点 No.943(壺の中)	溝状遺構2	0.43	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
2地点 No.943(壺の中)	溝状遺構2	2.0	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
2地点 No.943(壺の中)	溝状遺構2	2.0	-	-	3	1	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	溝状遺構2	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
	溝状遺構2	2.0	2	1	2	-	3	1	2	1	1	1	-	-	-	3	-	-	1	-	-	-	-	-	-	6	1	-	-	-	1	-	-	-

果実頂部を欠損し，輪状紋の有無が認められないので，コナラ属と同定するにとどめた。基部の着点は円形，淡褐色で維管束の穴が輪状に並ぶ。果皮外面は平滑で，ごく浅く微細な縦筋がある。

・シイ属 (*Castanopsis*) ブナ科

果実破片が同定された。灰褐色，広卵形体で丸い。径6mm程度。殻斗は果実を包み，短毛が配列する。熟した殻斗は3片に裂け，反りかえる。果実頂部はやや尖り，基部の着点は円形で大きい。果皮は薄く外面は平滑で，明瞭な縦方向の細溝がある。ツブラジイ (*Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky) に似る。

・ブナ科 (Fagaceae)

果実破片が同定された。頂部や基部を欠損する。果実表面は平滑で，ごく浅く微細な縦筋がある。上述のブナ科の果実破片と思われるが，クリやマテバシイ属の可能性も考えられるため，ブナ科にとどめた。

・エノキ (*Celtis sinensis* Persoon) ニレ科エノキ属

核が同定された。淡灰褐色，球形で基部は嘴状に尖る。径5mm程度。基部から稜が一周する。核表面には葉脈状模様が密布し，皺状。

・ムクノキ (*Aphananthe aspera* (Thunb.) Planchon) ニレ科ムクノキ属

核(内果皮)が同定された。灰褐色，広倒卵形でやや扁平。径7mm，厚さ3.5mm程度。基部に淡褐色の突起をもつ。内果皮は厚く，表面には微細な網目模様がありざらつく。断面は柵状。

・クスノキ (*Cinnamomum Camphora* (L.) Presl) クスノキ科クスノキ属

種子が同定された。黒色ないし茶褐色，球形。径5mm程度。種皮にはやや突起状の臍からはじまる低い稜があり，側面の途中で終わる。種皮は薄く硬い。種子表面は平滑，断面は柵状。

・カラスザンショウ (*Fagara ailanthoides* (Sieb. et Zucc.) Engler)

ミカン科イヌザンショウ属

核（内果皮）が同定された。黒褐色，偏円形で長さ3.5mm，幅4.3mm程度。片方の側面に核の長さの半分以上に達する深く広い臍がある。内果皮は厚く硬く，表面にやや深く大きな網目模様がある。

・コバンノキ (*Phyllanthus flexuosus* (Sieb. et Zucc.) Muell.-Arg.)

トウダイグサ科コミカンソウ属

種子が同定された。茶褐色，半広卵状円形。径3mm程度。背面は丸みを帯び，腹面の正中線は稜状。正中線の一端に臍がある。種皮表面には縦線条と凹点による模様がある。

・アカメガシワ (*Mallotus japonicus* (Thunb.) Mueller- Arg.) トウダイグサ科アカメガシワ属

種子破片が同定された。黒色，偏平な球形。径3mm程度。基部にはY字形の稜があり，稜に沿って3つに割れている。種皮は硬く，表面は瘤状突起を密布しゴツゴツしている。

・ブドウ属 (*Vitis*) ブドウ科

種子が同定された。灰褐色，広倒卵形，側面観は半広倒卵形。基部の臍の方に向かって細くなり，嘴状に尖る。長さ4mm，幅3mm程度。背面にさじ状の凹みがある。腹面には中央に縦筋が走り，その両脇には楕円形の深く窪んだ孔が存在する。種皮は柵状で薄く硬い。

・ヒサカキ (*Eurya japonica* Thunberg) ツバキ科ヒサカキ属

種子が同定された。茶褐色，不規則な多角形でやや偏平，径1mm程度。一端に臍があり，臍の方に薄い。臍を中心に楕円形や円形凹点による網目模様が指紋状に広がる。

・エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

種子が同定された。灰褐色，卵形体，半卵形体と不定形。長さ11mm，径7mm程度。基部は切形で淡灰褐色の大きな臍点がある。表面には3本程度の縦溝が走る。種皮は厚く（1mm程度）硬く，外面は微細な網目模様があり，内面はスポンジ状でざらつく。

・ガマズミ属 (*Viburnum*) スイカズラ科

核が同定された。灰褐色，広卵形で偏平。長さ5mm，幅4mm，厚さ1.5mm程度。先端がやや尖り，背面に2個と腹面に3個の浅い縦溝をもつ。核表面は凹凸があり，ざらつく。

#### <草本>

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

炭化した胚乳が同定された。黒色，胚乳は長楕円形でやや偏平。長さ4mm，幅2.5mm，厚さ1.5mm程度。基部には胚が脱落した凹部がある。両面はやや平滑で，2～3本の縦溝がある。

・ムギ類 イネ科

炭化した胚乳が同定された。黒色，楕円形で全体的に丸みを帯びている。径5mm程度。腹面には1本のやや太く深い縦溝がある。背面基部には胚の痕跡があり，丸く窪む。表面はや

や平滑。コムギ (*Triticum aestivum* L.) に似るが、焼けぶくれによる変形が激しい点、DNA分析の結果より、小麦に特有なDNAが検出されなかった点からムギ類とした。

・ジュズダマ属 (*Coix*) イネ科

苞鞘が同定された。淡灰褐色、卵形体で頂部は尖る。長さ7mm、径5mm程度。表面には多数の浅く微細な縦溝が配列する。

・ホタルイ属 (*Scirpus*) カヤツリグサ科

果実が同定された。黒色で片凸レンズ状の広倒卵形。長さ2mm、幅1.5mm程度。先端部は尖り、背面正中線上には鈍稜がある。基部から伸びる逆刺のある髭状の腕が残る。表面は光沢があり、不規則な波状の横皺が発達する。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が同定された。淡褐色、円形で両凸レンズ形。径1.5mm程度。頂部は尖り、基部は切形。表面には明瞭な多角形の網目模様が密布する。

・カナムグラ (*Humulus japonicus* Sieb. et Zucc.) クワ科カラハナソウ属

種子が同定された。灰～黒褐色で側面観は円形、上面観は両凸レンズ形。径4mm、厚さ1mm程度。果皮が残存する個体が多くみられた。基部には淡黄褐色でハート形の臍点をもつ。縦方向に一周する稜があるため、稜に沿って2つに割れやすい。種皮は薄く、表面はざらつく。

・イシミカワ近似種 (*Polygonum cf. perfoliatum* L.) タデ科タデ属

果実が同定された。黒褐色、広楕円形状球形。径3mm程度。基部に萼片が大きく残る。先端はわずかに尖り、3裂する。果皮は平滑で光沢が強い。

・タデ属 (*Polygonum*) タデ科

果実が同定された。黒色、広卵状円形で両凸レンズ状。長さ2.5mm、幅1.5mm程度。両面正中線上に縦方向の稜がある。表面には明瞭な網目模様があり、ざらつく。ヤナギタデ (*Polygonum Hydropiper* L.) に似る。

・ハスノハカズラ (*Stephania japonica* (Thunb.) Miers) ツツラフジ科ハスノハカズラ属

核が同定された。淡灰褐色、馬蹄形状広倒卵形でやや扁平。径4.5-6mm、厚さ2mm程度。中心部は馬蹄形状に凹む。基部は切形。基部を除く縁には、隆条が長軸に対し直角に列生する。

・ヒョウタン類 (*Lagenaria siceraria* Standl.) ウリ科ヒョウタン属

種子が同定された。淡灰褐色、倒広皮針形でやや扁平。長さ13mm、幅5mm、厚さ2.5mm程度。基部に明瞭な臍と発芽口がある。両面外縁部に発達する2本の幅広く低い稜は明瞭であるので、完熟種子である。

### (3) 樹種同定

3点ともクリであった。以下に検出された種類の解剖学的所見を述べる。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1～4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

#### 4. 考察

年代測定の結果、各試料の年代値は1,800~2,000年前を示す。弥生時代末よりも若干古い年代値が得られているが、遺物などから推定されている年代値と比較して大きく矛盾しない。また前報で実施した2地点の立木や杭列試料の測定結果とは、よく一致している。また、杭材の樹種はクリであった。クリは前回の調査で検出されていない種類である。おそらく、クリの木材が周辺で手に入りやすく、杭として用いたと考えられる。本遺跡周辺はクリ生育の南限にあたり、現在多く生育しているわけではないが、かつては現在よりも南に分布があり、かつ生育地も多かった可能性がある。

一方、種実同定の結果では、木本16種類、草本10種類の種実が確認された。木本は全て広葉樹で、イチイガシ、アカガシ亜属、シイ属、クスノキなどの常緑高木や、ハンノキ、エノキ、ムクノキ、アカメガシワ、エゴノキ属、ガマズミ属などの落葉高木、コバンノキ、カラスザンショウ、ヒサカキ属などのソデ・マント群落を形成する中・低木類、ブドウ属などの藤本類などが検出される。おそらく、検出された常緑高木は本遺跡周辺の山野を中心に生育し、その他の落葉樹や中・低木類は低地との林縁を中心に生育していたと思われる。このような景観は、前報の花粉分析結果と比較しても矛盾しない。ただし、クスノキ科の花粉は風化に極めて弱く、化石としては検出されない。また、ハンノキ、コバンノキなどは、沢沿いなどの湿った場所を好んで生育する種類であり、低地の河川付近などに自生していたと考えられる。草本類は、つる性植物のカナムグラなど、殆どが人里など明るい開けた場所に草地を形成するいわゆる「人里植物」で、人為的に切り開かれた土地に先駆的に侵入して生育する種類である。このことから、低地にはハンノキなどの湿地林が残っていたものの、一部は開発によって草地化し、集落が形成されたと考えられる。また、前回の植物珪酸体分析結果では、低地での稲作が推定されていることから、水田化に伴う草本類の増加も考えられる。今回検出された、ジュズダマ、ホタルイ属、カヤツリグサ科の一部、タデ属などは水湿地に生育する植物であるが、水田雑草として普通にみられる種類でもあることから（現在は農薬の影響で減少してきた）、当時の水田内に生育していた可能性もある。また、種実の種類には、有用植物が多く認められる。有用植物には、大陸などから持ち込まれた栽培植物と自生していたと考えられる種類がある。渡来した栽培植物は、イネ、ムギ類、ジュズダマ属、ヒョウタン類で、穀類のイネやムギ類は完全に炭化した状態であったため、火熱を受けたものと思われる。ヒョウタン類は果実が食用や容器に利用できる。このほか、前回の同定結果では、食用となるメロン類の種実が検出されている。これらの栽培植物は、本遺跡の近辺で栽培もしくは持ち込まれ利用されていたものが、生活残渣として廃棄されたと推定される。また自生していたと考えられる植物では、イチイガシや、シイ属などの堅果類が挙げられる。これらは、長期保存が可能で収量も多いことから、古くから利用され、里山では保護されてきた種類である。その他に、ガマズミ属は果実が多汁で生食が可能である。これらの種類は、遺跡周辺で入手し、利用していた可能性がある。

## 第4節 楠元遺跡出土種子の分析結果について

株式会社 ジェネテック

### 1. 目的

鹿児島県川内市・楠元遺跡出土の種子等の分析を行なった。日本に稲作が伝播したと考えられる3つのルートのうち、一番南のルートが中国から台湾、八重山諸島を伝わって九州南部に入ったルートである。本遺跡は弥生時代末期から古墳時代初頭（約1700年前）のもので、伝播した当時のイネがどんなイネであったかを探る上で、ここの出土イネ種子の分析はたいへん意義深いものである。

今回は下記のとおり、2号住居から出土しイネに同定された3点（サンプル1～3）および1号溝No.943壺から出土しムギ類と同定された1点（サンプル4）の計4点について、分析結果を示す。

第42表 試料一覧

サンプル番号	受入サンプル名	調査時の遺構名	場所
1	イネ1	B-26 SC3	2号住居
2	イネ2-1	B-26 SC3	2号住居
3	イネ2-2	B-26 SC3	2号住居
4	ムギ類	A-22,23 SD1	溝状遺構2

### 2. 分析方法

分析はまず、遺物を顕微鏡写真などによって外見的に観察したあと、これを1点ずつすりつぶしDNAを抽出してその種および品種の特定を試みた。遺物の写真は1点ずつ、大きさ約1MBのデジタル画像として保存してある。

DNA抽出は静岡大学佐藤研究室の定法によった。DNA抽出の方法はSDS法を植物の遺体用に改変したものである。DNA抽出法の詳細は、別に参考書等があるのでそれを参照されたい。

抽出されたDNAはプライマーCMN-B20と、PSIDプライマーによって増幅させた。CMN-B20は温帯ジャポニカと熱帯ジャポニカを判別するためのプライマーである。PSIDプライマーは植物を特定するための葉緑体DNAのPSID領域を挟むプライマーで、出土遺物の場合、通常1回目をプライマーAとBによってDNAを増幅し、そのPCR産物をテンプレートとしてさらに2回目をプライマーA2およびBによって増幅し、シーケンスにより382bpの塩基配列を特定する。従来の分析から、遺跡からはインディカが出土したと考えられる状況にはないので、今回はインディカとジャポニカの判別は行なわなかった。プライマーはDNAの増幅にあたり、その始点と終点を決めるごく短いDNA断片である。PCR増幅とは、DNA合成酵素の活性を利用して、DNAの特定の部分だけを増幅させる実験手法である。遺物に残されたDNAはごく微量であるため、PCR法以外の方法はまだ開発されていない。

### 3. 結果・考察

種子の外観を図1（図版3）に示す。4点のうちサンプル1からサンプル3については、それらの大きさや形状など外観上の情報からイネと同定された。まず、これら3サンプル（サンプル番号1から3）の結果について述べる。プライマーCMNB-20によって2回増幅後の増幅産物の電気泳

動写真を図2（図版3）に示す。この3点のDNAはレーン1から3に示されている。図で、最左端（M）は、増幅されたDNA断片のサイズを測るためのサイズ・マーカである。また最右端（レーン6）はDNA操作時の誤入をチェックするためのネガティブ・コントロールである。このレーンに明瞭なバンドが現れた場合には何らかの誤入があったことを示すもので、その場合には得られた結果は破棄することになっている。また、レーン4および5は、それぞれ現存の熱帯ジャポニカおよび温帯ジャポニカ品種のDNAである。

図2から明らかなように、3点のうちサンプル2だけがレーン4の熱帯ジャポニカ（現存品種）と同じ位置（図の右欄外矢印Aの位置）に明瞭なバンドを産生した。よってサンプル2は熱帯ジャポニカと相同なDNAを持っている可能性がある。サンプル1および3についても異なる位置に明瞭なバンドが得られているが、レーン4および5の現存サンプルにはこれらに対応するバンドがなかった。このためこれらのバンドは、イネの遺体自体に由来するものではないと考えられ、品種群の特定からは除外することとする。

当該のバンドが真にイネ種子自体に由来するものであることは、通例サザン分析によって確認しているが、今回は時間的な都合でサンプル2由来の増幅産物に対してこの操作が行なえなかった。よって本結果は参考データであるというにとどめる。

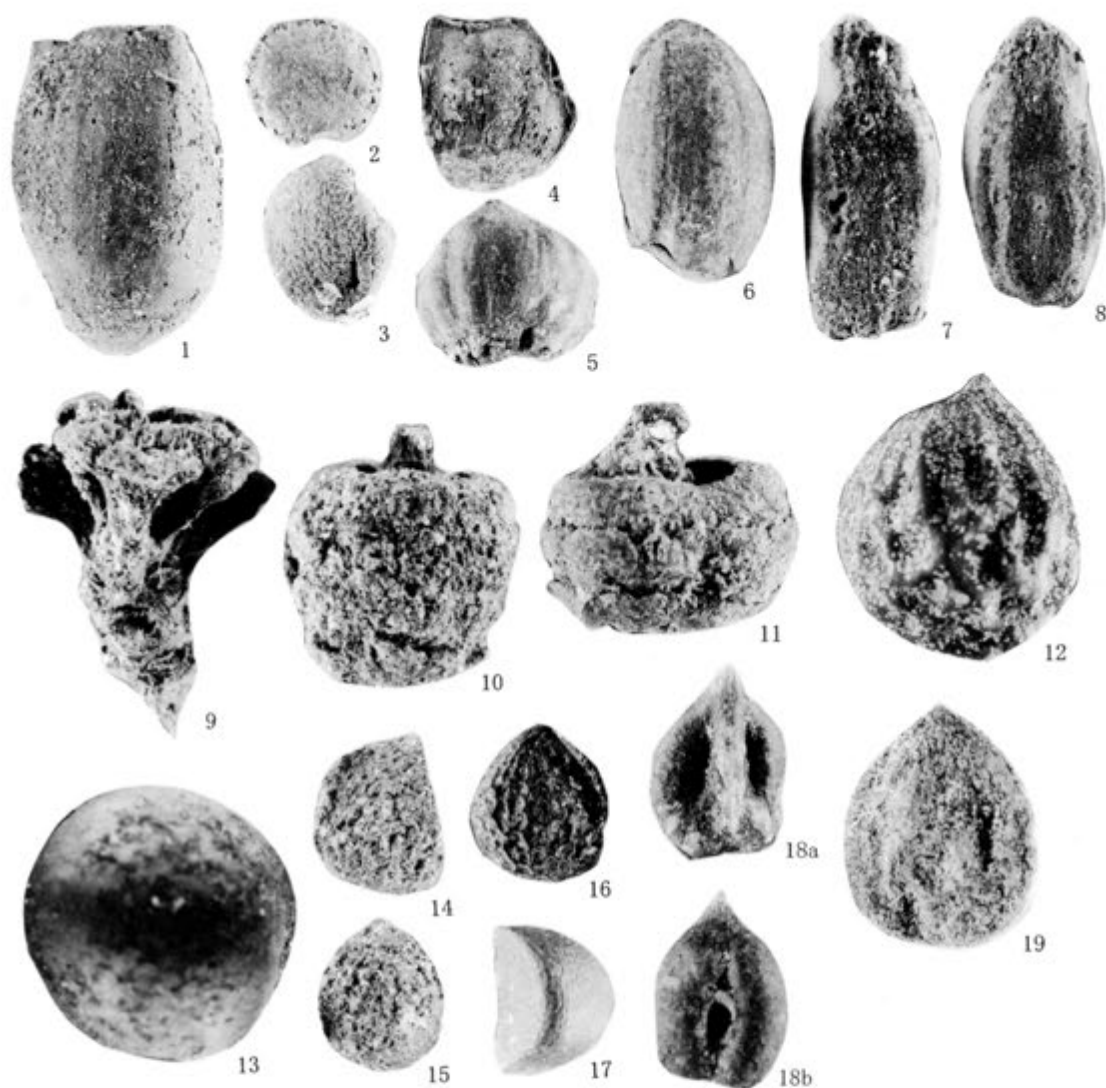
またこれら3サンプルがイネであることを確認するために、葉緑体DNAのPS-ID領域の増幅を3度試みた。この結果のうち一度のサンプルではわずかにDNA増幅がみられ、シーケンスをおこなったが、いずれも配列は決定できなかった。

サンプル4についても、葉緑体DNAのPS-ID領域の増幅を試みた。これについても3度試行を行なったが、DNA増幅に成功したケースはあったものの配列決定には至らなかった。外観的特徴からムギ類に同定されているが、DNA分析の結果からそれを裏付けることはできなかった。

#### 引用文献

- 佐藤洋一郎（2002）『イネの日本史』、角川書店
- 佐藤洋一郎（2002）DNA考古学のすすめ 丸善ライブラリー pp164
- 佐藤洋一郎（2000）縄文農耕の世界 PHP新書 pp218
- 佐藤洋一郎（1999）DNA考古学 東洋書店 pp201
- 佐藤洋一郎（1999）古代米の遺伝的特性（1）-2つのjaponicaの混在- 日本文化財科学会第16回大会研究要旨集p8-9
- 佐藤洋一郎（1998）DNA考古学事始 DNA多型6：1-4
- 佐藤洋一郎（1998）DNAから栽培と農耕の歴史を探る 遺伝52（6）：29-33
- 中村郁朗（1995）DNAフィンガープリント法 「植物遺伝育種学実験法」朝倉書店p113-117
- Nakamura, I. (1990) New DNA Fingerprinting Procedure. Amplified Fragment Length Polymorphism of Hazy Association (ALPHA) . Annu. Rep. Natl. Inst. Genet. 41:105-106
- Nakamura, I. and Y.I.Sato (1991) Amplification of DNA fragments Isolated from a Single Seed of Ancient Rice (AD800) by Polymerase Chain Reaction. Chinese J.Rice Sci.5:175-179

図版1 種実遺体



5 mm (1-8)      5 mm (9-18)

- |                              |                              |
|------------------------------|------------------------------|
| 1. コナラ属 果実 (溝状遺構2)           | 2. コナラ属 果実 (自然流路1 出土壺の中の土)   |
| 3. ムクノキ 核 (溝状遺構2)            | 4. シイ属 果実 (溝状遺構2)            |
| 5. シイ属 果実 (溝状遺構2)            | 6. エゴノキ属 種子 (溝状遺構2)          |
| 7. ヒョウタン類 種子 (溝状遺構2)         | 8. ヒョウタン類 種子 (溝状遺構2)         |
| 9. ハンノキ 果序 (溝状遺構2)           | 10. アカガシ亜属 幼果 (溝状遺構2)        |
| 11. イチガシ 幼果 (溝状遺構2)          | 12. エノキ 核 (溝状遺構2)            |
| 13. クスノキ 種子 (溝状遺構2)          | 14. アカメガシワ種子 (自然流路1 出土壺の中の土) |
| 15. アカメガシワ種子 (自然流路1 出土壺の中の土) | 16. カラスザンショウ核 (溝状遺構2)        |
| 17. コパンノキ 種子 (溝状遺構2)         | 18. ブドウ属 種子 (自然流路1 出土壺の中の土)  |
| 19. ガマズミ属 核 (自然流路1 出土壺の中の土)  |                              |

図版3 DNA分析

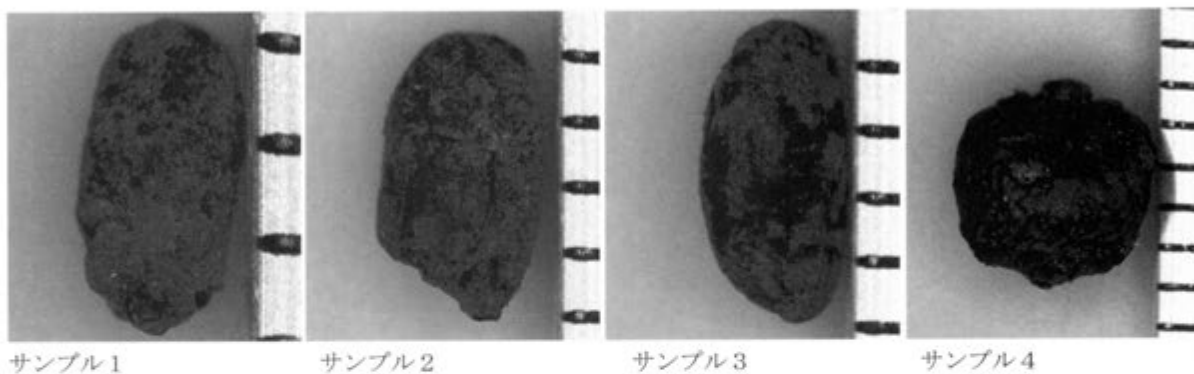
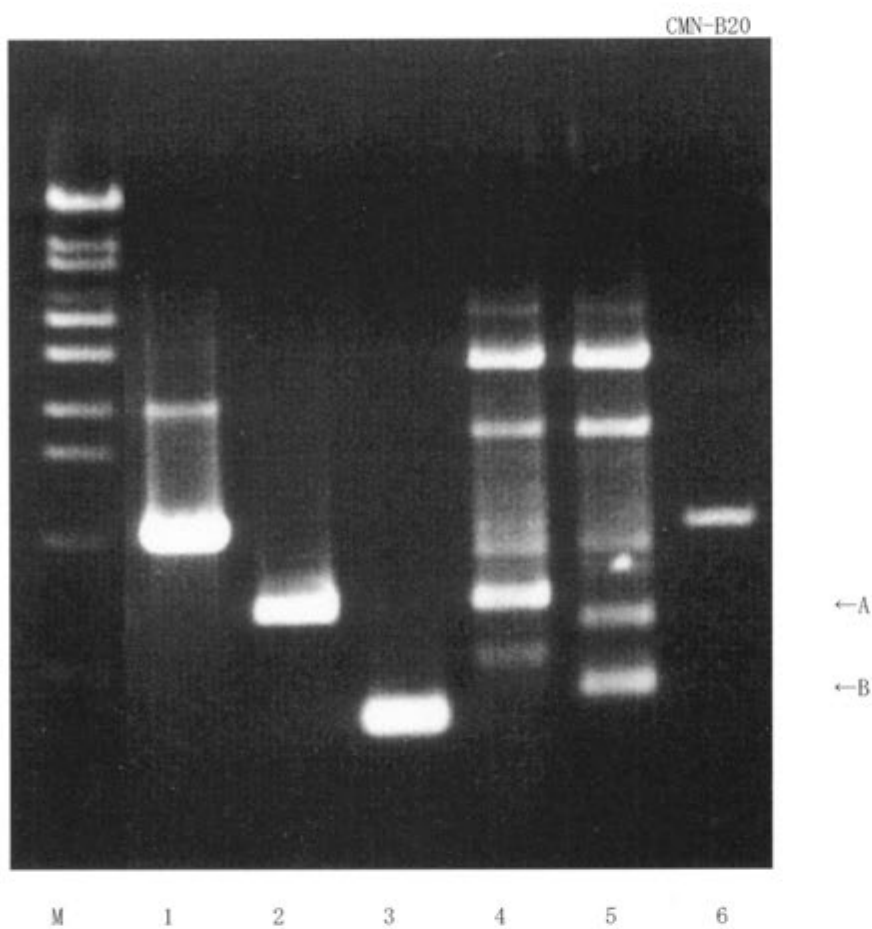


図1 分析試料

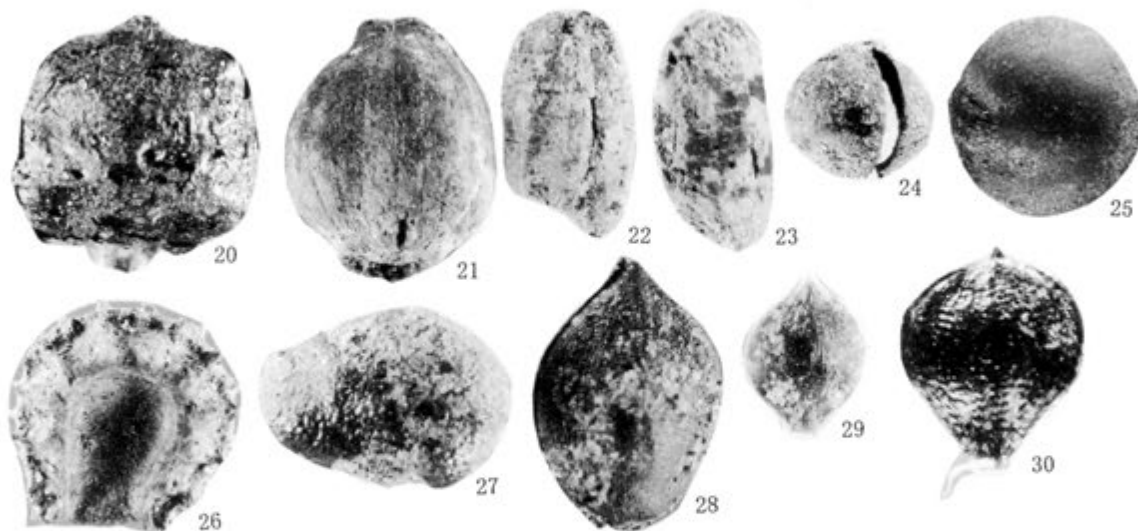


M: サイズ・マーカ  
1 サンプル1 2: サンプル2 3: サンプル3  
4: 熱帯ジャポニカ 5: 温帯ジャポニカ  
6: ネガティブ・コントロール

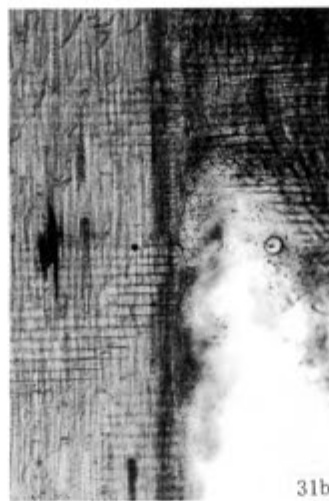
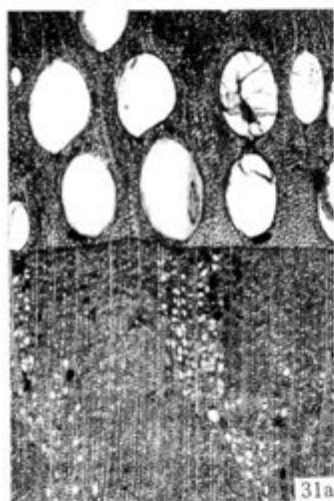
図2 泳動写真



図版2 種実遺体・木材



5 mm (19-26)      2 mm (27-30)

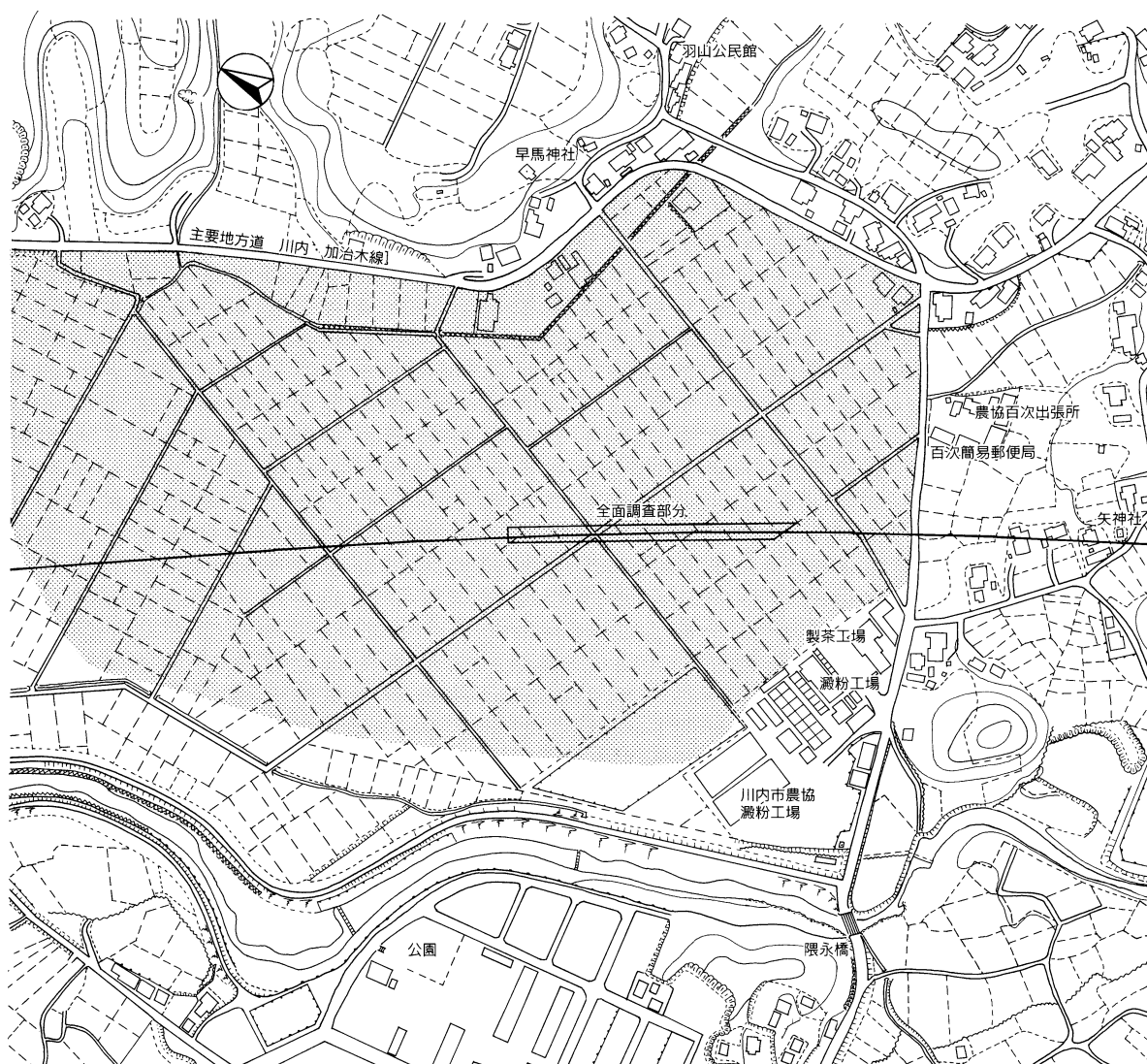


200 μm (31a)      200 μm (31b, c)

- 20. ムギ類 炭化胚乳 (溝状遺構2)
- 21. ジュズダマ 苞鞘 (溝状遺構2)
- 22. イネ 炭化胚乳 (B-26 2号住居)
- 23. イネ 炭化胚乳 (B-26 2号住居)
- 24. イシミカワ近似種 果実 (溝状遺構2)
- 25. カナムグラ 種子 (溝状遺構2)
- 26. ハスノハズラ 核 (自然流路1 出土壺の中の土)
- 27. ヒサカキ 種子 (溝状遺構2)
- 28. タデ属 果実 (溝状遺構2)
- 29. カヤツリグサ科 果実 (溝状遺構2)
- 30. ホタルイ属果実 (溝状遺構2)
- 31. クリ属 (杭2 313)

### 第3章 遺跡の残存状況

現在、楠元遺跡は周知の遺跡として遺跡台帳に登録されている。遺跡は全面調査区外に広範囲に広がることが予想され、特に調査区の南北には高い密度で残っている。これまでに、隈之城平野において楠元遺跡の他に知られている遺跡は、宮崎町赤沢津遺跡（縄文～古墳）のみである。先述したように、隈之城平野には条里制に関わる地名も残っており、集落遺跡だけでなく、水田跡の存在も視野にいた分布調査の再検討が望まれる。今後は遺跡に登録されていない地区についても諸開発との調査を行なっていく必要がある。



第151図 遺跡の残存状況図（1/5000）

## 第4章 まとめ

楠元遺跡では縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が検出された。最も古い遺物は縄文時代早期の押型文土器である。押型文土器は、出土数が少ないために早期の遺跡が平野部に存在する可能性は低い。権現原台地に立地する上野城跡では押型文土器に伴って石鏃が出土しており、早期の段階では台地上を拠点として生活していたことがうかがえる。隈之城平野に遺跡が形成される時期は縄文時代後期である。後期の遺構は未検出ではあるが、出土遺物に大型の台石・石皿が含まれていることや遺物の分布が微高地上もしくは、微高地に近い傾斜面に集中していることから調査区付近の微高地上に遺構が存在すると思われる。なお、扇状地礫層堆積時にはすでに微高地が形成されたことを付け加えておきたい。

弥生時代末～古墳時代初頭の水田跡が科学分析によって確認され、水田耕作に関わる木製農具や溝状遺構なども検出された。また、近世の水田跡に関わる遺構も検出され、弥生時代以降、連綿と平野を開拓してきた人々の姿が明らかとなった。残念ながら条里制が施行された古代、その後の中世の遺構については今回の調査でその性格を明らかにすることはできなかった。今後の課題である。以下、縄文時代、弥生時代の遺構・土器・木製品について考察を行う。

### 1. 縄文土器について

I類は松山式に比定される。口唇部が平坦となり、平坦面に貝殻刺突文や沈線文を施す。文様帯幅が狭いため、単純な文様を施したものが多い。本田道輝氏の市来式I期に相当するものである<sup>(1)</sup>。総出土点数41点。

II類は口縁部を肥厚させて断面三角形、あるいは「く」字状に形作られたものであり、市来式に比定される。口縁部は平口縁になるものと、波状口縁になるものがある。本田氏の市来式II・III期に相当する<sup>(2)</sup>。II類は口縁部形態によって、4類に区分した。

II a類は口縁部が断面三角形を呈するものである。I類と類似し、区別することが難しいものもある。文様帯が狭いため、貝殻刺突文、沈線文を中心に単純な文様を施すものが多い。本田氏による市来式の口縁部形態区分の「1」に当てはまるものである<sup>(3)</sup>。総出土点数71点。

II b類はII a類が間延びしたもの、あるいは断面「く」字形を呈するものである。本田氏による口縁部形態区分の「2」・「3」に当てはまる。文様は刺突文、沈線文、貝殻刺突文などを組み合わせて施される。文様帯幅が広くなるにつれ文様が華やかになる傾向がある。さらに、II b類は口唇部形態により2類に分けた。II b-1類は口唇部が舌状を呈するもの、II b-2は口唇部が平坦面をもつもの、あるいは断面かまぼこ状を呈するものである。総出土点数はII b-1類が139点、II b-2類が88点である。

II c類は口縁部断面が三角形、あるいは「く」字状を呈さず、方形に近い形を呈するものである。総出土点数61点である。なお、II b類とII c類に関しては、下記で詳述する。

II d類は市来式に比定されるが、特殊なものを取り上げた。総出土点数93点。

また、市来式の器面調整に貝殻条痕が行われることが多いが、本遺跡出土の市来式の器面調整には貝殻条痕がみられるものは少ない。

Ⅲ類はいわゆる草野式に比定されるものである。また、本田氏の市来式Ⅱ・Ⅲ期の一部に当てはまるものである。草野式については市来式と区別されず、一括して市来式と総称される場合もある。ここでは草野式として区分したが、市来式との明確な区分は難しく今後の課題となる。総数28点。

Ⅳ類は胴部片であり、口縁部形態からの型式比定はできないが、幅の広い沈線文と縄文施文部をもつことから小池原上層式と考えた。本遺跡出土は一点のみである。

Ⅴ類は御手洗A式と考えられるものであり、一点のみの出土である。

Ⅵ類は鉢形を呈し、口唇部は平坦となり、刺突文と沈線文を施し、口縁部下には磨消縄文を施したものであり、鐘崎式に比定できる。総出土点数101点。

Ⅶ類は前迫亮一氏により白浜タイプ、浜ノ須タイプとして設定されたものである<sup>(4)</sup>。口縁部が外反し、口縁部から胴部にまで磨消縄文などの文様を施す。総出土点数は20点である。前迫氏は干迫遺跡の報告書の中で白浜タイプと浜ノ須タイプの特徴を幾つか述べているが、それらの中で本遺跡においてみられる特徴を以下に挙げる。

- ・ 口縁部が鐘崎式に比べ間延びし、口唇部と口縁部文様帯の無文部が広がる。
- ・ 把手の上端・下端に瘤状突起をもつ。
- ・ 口縁部内面にも文様を施すものがある。
- ・ 沈線の端に円形の刺突文がつく。

Ⅷ類は胴部が張り、口縁部が肥厚するものや緩やかな断面三角形を呈することから北久根山式に比定できる。総出土点数17点。

Ⅸ類は口縁部が内弯し、口縁部外面に横位の沈線文が施されることから西平式に比定でき、3点出土。

Ⅹ類は無文土器を一括して取り上げたが、市来式や草野式に比定されるものが多い。13点出土。

Ⅺ類はその他の型式不明の土器をとりあげた。総出土点数は90点。

底部は深鉢形土器に伴うと考えられるもので、平底のものと、脚台をもつものがある。出土点数は平底のものが17点、脚台をもつものが11点である。

台付皿形土器については断定はできないが、市来式に伴うものや磨消縄文系土器に伴うものがありそうである。総出土点数は皿部14点、脚部25点である。

## Ⅱb-2類・Ⅱc類について

本遺跡出土の市来式(Ⅱ類)の中には、一般に市来式と呼ばれる典型的なものとは形状を異にするものがある。それはⅡb-2類・Ⅱc類として分類した一群である。つまり、口唇部に平坦面をもつものあるいは断面かまぼこ状を呈するもの(Ⅱb-2類)、また市来式の特徴として取り上げられる口縁部が断面三角形や「く」字形を呈さずに、断面方形に近い形状を呈するもの(Ⅱc類)である。本田道輝氏からこれらの形状を呈するものが北薩地域に多くみられるというご指導を受け、今回検討を試みた。

検討の方法については、鹿児島県と宮崎県で市来式を比較的多く出土した遺跡の土器に対して、本書での分類にあてはめ、それぞれの比率を算出するというものである。なお、Ⅱa～Ⅱc類に当てはまらないものと口縁端部が欠損しているものはその他として扱った。また、

対象とした遺跡は北薩地域の楠元遺跡・麦之浦貝塚<sup>(5)</sup>・川上(市来)貝塚<sup>(6・7)</sup>、鹿児島湾奥の干迫遺跡、鹿児島湾西岸の草野貝塚<sup>(8)</sup>、帖地遺跡<sup>(9)</sup>、鹿児島湾東岸の武貝塚<sup>(10)</sup>、大隅半島の榎木原遺跡<sup>(11)</sup>、中ノ原遺跡<sup>(12)</sup>、柳井谷遺跡<sup>(13)</sup>、宮崎県南部の竹ノ内遺跡<sup>(14)</sup>という9遺跡である。その検討の結果は以下の表の通りである(第43表)。表では点数比率を示した。

また、指宿市教育委員会の御好意により、大渡遺跡出土資料(指宿市役所(編)1958)<sup>(15)</sup>を実見させていただいた。その結果は時間的制限もあり具体的な数値を算出できなかったが、II c類は全く見られず、またII b-2類についてはごく少量見られるのみであった。

検討の結果からは本田氏の見解通りに、北薩地域においてII b-2類とII c類の比率が高いことが分かった。また、II b-2類については北薩地域で比率が高く、北薩地域から離れるにつれてその比率が低くなるという地理的勾配も認められる。II c類については大隅半島と宮崎県南部ではまったく認められていないことも分かった。また、北薩地域の中でも、本遺跡での比率がかなり高いという傾向が認められた。

つまり、市来式の中にも地域差が存在することが分かる。II b-2類に関してはII b類の地域差と考えられる。一方、II c類に関しては、市来式における地域性であるものの、市来式の中の時間的な位置付けが確立していない。

ところで、市来式の起源については、指宿式に求める見解<sup>(16) (17) (18)</sup>や出水式に求める見解<sup>(19)</sup>、また阿高式系土器と指宿式の二系統に求める見解<sup>(20)</sup>があり、まだ解決していない問題である。

ここで注目できるのが出水式との関係である。出水式には口縁部が肥厚するものや口唇部に平坦面をもつものが見られる。河口氏は出水式と市来式との関係について、口縁部が肥厚する点と底部に上げ底を伴う点は両者に共通するが、出水式には貝殻条痕が認められず、逆に市来式では盛行することから両者は結びつけられないとしている<sup>(21)</sup>。

第43表 遺跡一覧表

遺跡名	II b-2類	II c類	II a・II b-1類	その他	総数
楠元遺跡(川内市)	48 (27.0%)	37 (20.8%)	89 (50.0%)	4 (2.2%)	178
麦之浦貝塚(〃)	85 (40.9%)	5 (2.4%)	112 (53.8%)	6 (2.9%)	208
市来貝塚(市来町)	144 (36.3%)	28 (7.0%)	198 (49.9%)	27 (6.8%)	397
干迫遺跡(加治木町)	362 (22.6%)	22 (1.3%)	1179 (73.5%)	41 (2.6%)	1604
草野貝塚(鹿児島市)	25 (11.9%)	3 (1.4%)	176 (83.4%)	7 (3.3%)	211
帖地遺跡(喜入町)	7 (14.0%)	0 (0%)	34 (68.0%)	9 (18%)	50
武貝塚(桜島町)	15 (23.4%)	0 (0%)	49 (76.6%)	0 (0%)	64
榎木原遺跡(鹿屋市)	14 (10.9%)	0 (0%)	85 (66.4%)	29 (22.7%)	128
中ノ原遺跡(鹿屋市)	11 (15.5%)	0 (0%)	50 (70%)	10 (14.5%)	71
柳井谷遺跡(志布志町)	9 (12.2%)	0 (0%)	63 (85.1%)	2 (2.7%)	74
竹ノ内遺跡(清武町)	37 (17.0%)	0 (0%)	156 (71.6%)	25 (11.4%)	218

ところが、本遺跡を含め北薩地域出土の市来式には貝殻条痕がみられるものは少ない。従って、市来式は出水式との関係が考えられよう。特にII b-2類や、II c類のような、口唇部に平坦面をもつものや断面かまぼこ状を呈するもの、口縁部断面が方形を呈するものは、出水式との関係を考えてもよいのではないだろうか。そして、根拠はなく想像の域は越えないが、II c類→II b-2類という型式変化が想定できるかもしれない。

今後、市来式については型式学・層位学的検討による細分編年だけでなく、地域性を考慮しつつ、そして中九州にみられる御手洗c式との関係もふまえた上で検討していく必要がある。そのことで、市来式の発生について解明できると思われる。

今回は、時間的な制限もあり、直接遺物を見ることができず、各遺跡の報告書記載の遺物からの検討にとどまった。従って、今回求めた比率が各遺跡の実態をそのまま反映していないかもしれない。この他にも検討できた遺跡数が限られたことや各地域・遺跡毎に資料数の格差がみられたことなど、問題点も幾つか残った。また、なぜ北薩地域においてII b-2類とII c類が多くみられるのか、以上の点は今後の課題としたい。

しかしながら、今回は報告書記載の資料のみを用いて、市来式の地域性についてある程度の傾向を促えることができたと思う。(加藤)

## 2. 弥生時代の遺跡の立地・遺構について

楠元遺跡では堅穴住居跡・炉跡・溝状遺構・土坑が微高地上に、自然流路を利用した水田跡とそれに伴う杭列・溝状遺構が低地部で検出された。重要であるのは、安定した微高地とその周囲を取り囲む湿地の存在が水田をつくる要因となるのではなく、微高地に隣接する自然流路があって初めて水田がつくられていることである。自然流路1で検出された杭列は、流路が砂層で埋没し、水量が少ない段階で打ち込まれている。楠元遺跡ではその性格を明らかにすることはできなかったが、京田遺跡でも自然流路が埋没する途中に杭列が検出されており、自然流路埋没後の沼沢地を利用した水田跡の可能性も含めて検討していく必要がある。溝状遺構2では、水田跡の取水口と井堰を構築する杭列が検出され、本県において初の灌漑施設の発見となった。各取水口を構成する杭の間隔は約4 mであり、水田跡の1区画の大きさを推測することができる。遺構の時期は土器の分析から、微高地上で検出された遺構群と自然流路1が弥生時代終末、溝状遺構2は古墳時代初頭頃である。

近年、南九州では水田遺構に関わる調査例が増加してきている。都城市坂元A遺跡<sup>(22)</sup>・黒土遺跡<sup>(23)</sup>・肱穴遺跡<sup>(24)</sup>・鹿児島市鹿児島大学構内遺跡<sup>(25)</sup>では、縄文時代晩期の水田跡が確認され、内陸部においても北部九州に遅れることなく水田稲作が伝播したことが明らかとなってきている<sup>(26)</sup>。同時に、朝鮮半島南部から北部九州に伝播した初期の水田は完成された灌漑施設を備えた形態であったのに対し、南九州で発見された水田の形態は河川の埋没した場所や沼沢地などの湿潤な場所を利用した小規模なものであったことが分かってきた。灌漑施設をもたない小規模な水田跡は、京田遺跡や坂元A遺跡の弥生時代前期以降の水田形態と同様であることから南九州では弥生時代中期まではこのような形態が一般的であったと考えられる。楠元遺跡では、水田跡に灌漑施設が伴う可能性が高く、水田の形態は弥生時代

終末から古墳時代初頭に水利施設の向上に伴う大きな変化があることが明らかとなった。しかし、弥生時代中期までと立地条件に大きな違いはみられず、地形に制約を受ける形で耕地面積の拡大や生産性の向上が図られたと考えられる。楠元遺跡の調査成果は南九州における水田の規模や変遷、稲作の技術を考える上で重要である。

イネの種子が2号竪穴住居跡の埋土から3点検出された。種子のDNA分析では熱帯ジャポニカである可能性が指摘されており、稲作の起源を考える上で重要な発見となった。また、コムギの可能性のある種子が溝状遺構2出土の壺の中から1点検出された。種子は煮炊きによって焼けぶくれている可能性があり、遺跡から出土している煤の付着した壺は雑穀類などの煮炊きに使用したことが想定される<sup>(28)</sup>。これらの分析結果は、南九州における弥生時代の生業を考える上で重要である。(川口)

### 3. 弥生土器について

楠元遺跡から出土した土器の一部は中津野式土器と呼ばれる様式に該当する。中津野式土器は鹿児島県日置郡金峰町中津野にある中津野遺跡で出土した土器群を指標としており<sup>(29)</sup>、弥生時代後期後半～終末または古墳時代初頭の土器であるという二つの見解がある。今回楠元遺跡から出土した土器のうち、甕は口縁部が「く」字に外反し、内面に稜がつくI b・c類と、壺は胴部が長胴形あるいは凸帯をもつ部分が張り出した形態をもつI・II類が中津野式土器に該当すると考えられる。

弥生時代の遺構の中でも遺構の切り合い関係により、時期の前後関係をおさえることができ、型式変化を考える上での良好な資料になると思われる自然流路1・溝状遺構2の出土土器を中心に検討を行いたい。

自然流路1と溝状遺構2の出土土器は底面に近い砂層部分から出土しており、上層部分からの混入が認められないことから一括性が高い。2つの遺構の前後関係について考えると溝状遺構2は自然流路1が完全に埋没した後に自然流路1の中央部に沿って掘削していることから、自然流路1は溝状遺構2よりも時期が古い。

#### 自然流路1出土土器

甕はI b類が主体となって出土している。出土数の少ないI a類は、断面三角形で内面に張り出すように屈折して強い稜がつく口縁部と体部に対して小さい脚部をもつことから、I類の中で最も古い型的特徴をもつ。III類の胴部は丸みをもち、内面に丁寧なケズリ調整が施され、近畿地方で弥生時代後期後半～終末に該当する庄内式土器の甕形土器の影響を受けていると考えられる<sup>(30)</sup>。

壺はI類を主体とし、多重突帯をもつ壺(III類)・短頸壺(IV類)や長頸壺(V類)など多くの型式が出土している。V類の免田式土器は幅広の下向きの重弧文が施され、免田式土器の中でも古い特徴をもっている<sup>(31)</sup>。

高坏は脚高が低く、全体的に小さいつくりである。

#### 溝状遺構2出土土器

甕はI b・c類が出土している。溝状遺構2ではI b類はほとんど出土せず、I c類が主

体となっている（第21表）。I c類の口縁部は自然流路1出土土器に比べ直立し、器壁が薄い。調整は、いわゆる「かきあげ口縁」と呼ばれる頸部から口縁部に向けてハケ目が施され、胴部との境に段がつく技法が確立している。口縁部の調整はナデ（I a類）→ハケ目後ナデ（I b類）→ハケ目（I c類）という変遷をたどり、胴部もI c類になると張りがなくなる。また、溝状遺構2は自然流路1で主体となっていた甕I b類が著しく減少していることからI b類からI c類への型式変化が考えられる。底部は自然流路1出土土器よりも脚高が高く、大きなつくりになっている。

壺は自然流路1では5種類の型式が見られたのに対し、溝状遺構2では2種類の型式に減少していることから型式の斉一化が図られたものと思われる。ここで特筆すべき点は小型丸底壺が出土していることである。小型丸底壺はいわゆる坩のことであり、古墳時代に特徴的な器種である。底部は自然流路1で平底が多く見られたのに対して、溝状遺構2では丸底が多く出土している。高坏は脚部に透孔が施されているものや円柱状の脚部が出土しており、自然流路1にはみられないタイプである。また、つくりも大きくなっている。

1・2号竪穴住居跡・炉跡1・土坑1では甕I b類のみが出土し、甕I c類や小型丸底壺が出土していないことから自然流路1と同時期の遺構であると考えられる。

#### 出土土器の位置づけ

楠元遺跡からは辻堂原遺跡溝状遺構1・2号出土遺物と類似した型式の遺物が出土している<sup>(32)</sup>。池畑耕一氏は辻堂原遺跡溝状遺構1号と中津野遺跡出土の土器を同時期であるとし、辻堂原遺跡溝状遺構1号から坩が出土していることから古墳時代前期に位置づけている<sup>(33)</sup>。しかし、多々良友博氏は中津野式土器が辻堂原遺跡溝状遺構2号出土遺物に近い様式をもつとしており、中津野式土器を弥生時代後期、辻堂原遺跡溝状遺構1号を古墳時代前期であるとしている<sup>(34)</sup>。また、中村直子氏は中津野式土器は弥生時代終末であるとしており、甕や壺のほかに高坏の編年も試みている<sup>(35)</sup><sup>(36)</sup>。

以上のことから自然流路1は弥生時代の古い様式を残す土器が出土していることや出土した甕の型式から中村直子編年の「中津野式土器」に該当し、弥生時代終末に位置づけることができると考えられる。溝状遺構2は甕や高坏に型式変化がみられ、壺の斉一化が図られている。また、坩の出現が認められることから溝状遺構2は古墳時代初頭である可能性が考えられる。ゆえに、自然流路1と溝状遺構2出土遺物は弥生時代～古墳時代への土器の変遷を確認することができる重要な資料であると考えられる。（山元）

#### 4. 木製品について

近年、南九州では低湿地遺跡の調査が増え木製品の出土例が増加している。しかし、出土した木製品のほとんどは農具であり、楠元遺跡の調査によって初めて木製品のセット関係が明らかとなった（第44表）。楠元遺跡では、居住域と木製品が出土した遺構が隣接しており、木製品の組成はこのような立地条件を反映しているものと思われる。木製品は、共伴した土器から弥生時代終末～古墳時代初頭にかけてのものであり、土器によって年代が押さえることのできる良好な資料である。以下、農具を中心にまとめてみたい。



楠元遺跡から出土している鋤はすべて曲柄鋤であり、南九州では弥生時代を通して曲柄鋤と膝柄の組み合わせが主流であることが明らかとなった。また、弥生時代V期末頃に九州へ伝播したナスビ型曲柄鋤は出土していない<sup>(37)</sup>。山田昌久氏は、弥生時代末に鋤の大型化が顕著でなかった地域では反柄への移行が必ずしも要求されなかったことを指摘し、縛り固定鋤鋤類を縄文時代以来の材固定技術による農耕土木具として位置づけている<sup>(38)</sup>。京田遺跡と楠元遺跡の曲柄鋤は、形態に大きな違いがみられないことから南九州は山田氏の指摘する鋤の大型化が進行しない地域である可能性があり、水田の規模や、稲作の技術を考える上で重要である。また、南九州は弥生時代・古墳時代を通して縄文時代晩期の文化を色濃く残す地域であり、このような地域における曲柄鋤の系譜も注目される。溝状遺構2からは、身に1対の孔を開ける組み合わせ式鋤が1点出土している。同様の木製品は鹿児島大学構内遺跡・坂元A遺跡・京田遺跡でも出土しており弥生時代前期末から南九州に分布することが明らかとなってきた。山田氏は組み合わせ式針葉樹製鋤を検討し、その用途について儀器的役割を果たしたことを提唱している<sup>(39)</sup>。楠元遺跡出土の組み合わせ式鋤は刃部の先端が摩耗し、方形板刃先を装着した痕跡が残っていることや、坂元A遺跡では水田跡から出土していることから、南九州においては耕起具として使用された可能性がある。本県では、弥生時代中期後半以降、大陸系磨製石器が姿を消し<sup>(40)</sup>、それに変わるように集落遺跡で鉄器の出土数が増えてくる。方形板刃先の存在は南九州において農具の鉄器化が弥生時代終末以降に始まることを示唆している。

自然流路1・溝状遺構2から出土した杭の加工痕は、A種刃先痕33点、B種刃先痕の可能性のあるもの9点であった。加工痕の比率から、加工具の主体は鉄器であったことが考えられる。A種刃先痕の加工幅は2.7cm程のものが多く、断面形が湾曲していることから杭の多くは鉄製横斧で加工されたと推測される<sup>(41)</sup>。A種刃先痕が残る杭の先端は多方面から加工され鋭く尖っているのに対し、B種刃先痕の可能性のある工具痕が残る杭の先端は片面のみの加工で杭先の尖りが鈍い。工具の種類によって、加工方法が違う可能性があり、今後とも注意が必要である。鉄器による加工痕は鹿児島大学構内遺跡でも確認されており、楠元遺跡の分析結果と併せて鉄器の普及を考える上で重要な情報である。

第44表 木製品出土遺跡

遺跡名	時期	出土木製品	出土遺構
鹿児島大学構内遺跡	弥生前期末	組み合わせ式鋤1・容器1	自然流路
坂元A遺跡	弥生中期後半	組み合わせ式鋤1・田下駄2	水田跡
京田遺跡	弥生中期	直柄平鋤・曲柄平鋤・曲柄又鋤・組み合わせ式鋤・田下駄・網杵・一木梯子	水田跡・自然流路
外川江遺跡	弥生後期	農具未製品1	自然流路
楠元遺跡	弥生終末～古墳初頭	曲柄平鋤1・曲柄又鋤4・膝柄1・横鋤1 ・組み合わせ式鋤1・農具未製品4・掘り棒1・容器2・丸木弓1・用途不明品	溝状遺構・自然流路

註

- (1) 本田道輝 1989「市来式土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣出版
- (2) (1) に同じ。
- (3) 本田道輝 1978「西之表市納曾遺跡」『鹿児島考古』第12号 鹿児島県考古学会
- (4) 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1997『干迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(22)
- (5) 川内市教育委員会 1987『麦之浦貝塚』
- (6) 日置郡市来町教育委員会 1991『川上(市来)貝塚』市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- (7) 日置郡市来町教育委員会 1993『川上(市来)貝塚』市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
- (8) 鹿児島市教育委員会 1988『草野貝塚』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
- (9) 喜入町教育委員会 1999『帖地遺跡』喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
- (10) 三輪晃三 1998「南九州縄文後期再論」『鹿児島県桜島町武貝塚発掘調査研究報告書』  
奈良大学考古学研究室調査報告書 第16集 奈良大学文学部考古学研究室
- (11) 鹿児島県教育委員会 1987『榎木原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(44)
- (12) 鹿児島県教育委員会 1989『中ノ原遺跡他』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(48)
- (13) 志布志町教育委員会 1984『柳井谷遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
- (14) 宮崎県埋蔵文化財センター 2002『竹ノ内遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第27集
- (15) 指宿市役所編 1958『指宿市誌』
- (16) 河口貞徳 1957「南九州後期の縄文式土器」『考古学雑誌』42巻2号 日本考古学会
- (17) 河口貞徳 1981「市来式の祖形と南島先史文化への影響」『鹿児島考古』第15号 鹿児島県考古学会
- (18) (3) に同じ。
- (19) 田中良之 1982「磨消縄文土器伝播プロセス—中九州を中心として—」  
『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』上巻 森貞次郎先生古稀記念古文化論集刊行会
- (20) 松永幸男 1989「土器様式変化の一類型—縄文時代後期の東南九州地方を事例として—」  
『横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念事業会
- (21) (16) に同じ。
- (22) 都城市教育委員会 2001『横市地区遺跡群 馬渡遺跡(第2次調査)・坂元A遺跡』  
都城市文化財調査報告書第55集
- (23) 都城市教育委員会 1994『黒土遺跡』都城市文化財調査報告書第28集
- (24) 都城市教育委員会 2000『横市地区遺跡群 肱穴遺跡(1) 今房遺跡 馬渡遺跡』都城市文化財調査報告書第50集
- (25) 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1999『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』13
- (26) 葉畑光博・横山哲英 2000「稲作文化は南九州へどう広まったか—宮崎市内陸部の遺跡から—」  
歴史九州十一月号九州歴史大学講座事務局
- (27) 川口雅之 2002「南九州における稲作文化と木製品—最新の調査成果から—」『月刊文化財』11  
第一法規出版株式会社
- (28) 椿坂恭代氏のご教授による。
- (29) 河口貞徳 1985「鹿児島県の弥生式諸遺蹟について」『鹿児島県考古学会紀要』第2号
- (30) 置田雅昭 1997「庄内式土器」『弥生文化の研究』4 雄山閣出版
- (31) 西健一郎 1997「重弧文長頸壺」『弥生文化の研究』4 雄山閣出版
- (32) 吹上町教育委員会 1977『辻堂原遺跡』
- (33) 池畑耕一 1980「成川式土器の細分編年試案」『鹿児島考古』第14号 鹿児島県考古学会
- (34) 多々良友博 1981「成川式土器の検討」『鹿児島考古』第15号 鹿児島県考古学会
- (35) 中村直子 1993「中津野式土器に表れる地域色」『鹿児島考古』第27号 鹿児島県考古学会
- (36) 中村直子 1987「成川式土器考」『鹿児島考古』第6号 鹿児島大学法文学部考古学研究室
- (37) 樋上昇 2002「曲柄鍬の伝播と流通」『月刊考古学ジャーナル』No.486 4月号 ニューサイエンス社
- (38) 山田昌久 2002「組合わせ針葉樹製鋤の検討」『月刊考古学ジャーナル』No.486 4月号 ニューサイエンス社
- (39) (38) に同じ。
- (40) 宮田栄二 1996「鹿児島県の石器」『農耕開始期の石器組成2 九州』国立歴史民俗博物館
- (41) 宮原晋一 1997「石斧、鉄斧のどちらで加工したか」『弥生文化の研究』10 雄山閣出版

図

版



楠元遺跡航空写真（写真中央が楠元遺跡）



調査前風景



3 地点土層断面 (A-30区東壁)



2 地点土層断面 (A-20区東壁)



台付皿 (A-17・18区 土器集中区出土)



縄文土器出土状況 (A-17・18区土器集中区)



1号竪穴住居跡



2号竖穴住居跡



2号竖穴住居跡内土坑



台石出土状況





炉跡 1



炉跡 1 炭化層・焼土



炉跡 1 土器出土状況 (No578)



杭列 1 出土状況 (自然流路 1)



杭列 5 出土状況 (自然流路 1)



曲柄又鍬出土状況



曲柄又鍬未製品出土状況



農具未製品出土状況（自然流路1）



ひょうたん出土状況（自然流路1）



溝状遺構 2 遺物出土状況



木製品出土状況（溝状遺構 2）



曲柄平鍬出土状況（溝状遺構 2）



溝状遺構 2 完掘



杭出土状況（溝状遺構 2）



溝状遺構 2 土層



A-11～12区樹根出土状況（弥生～古墳）



石組遺構（古代）



溝状遺構 3 (中世)



作業風景 (自然流路1掘り下げ)



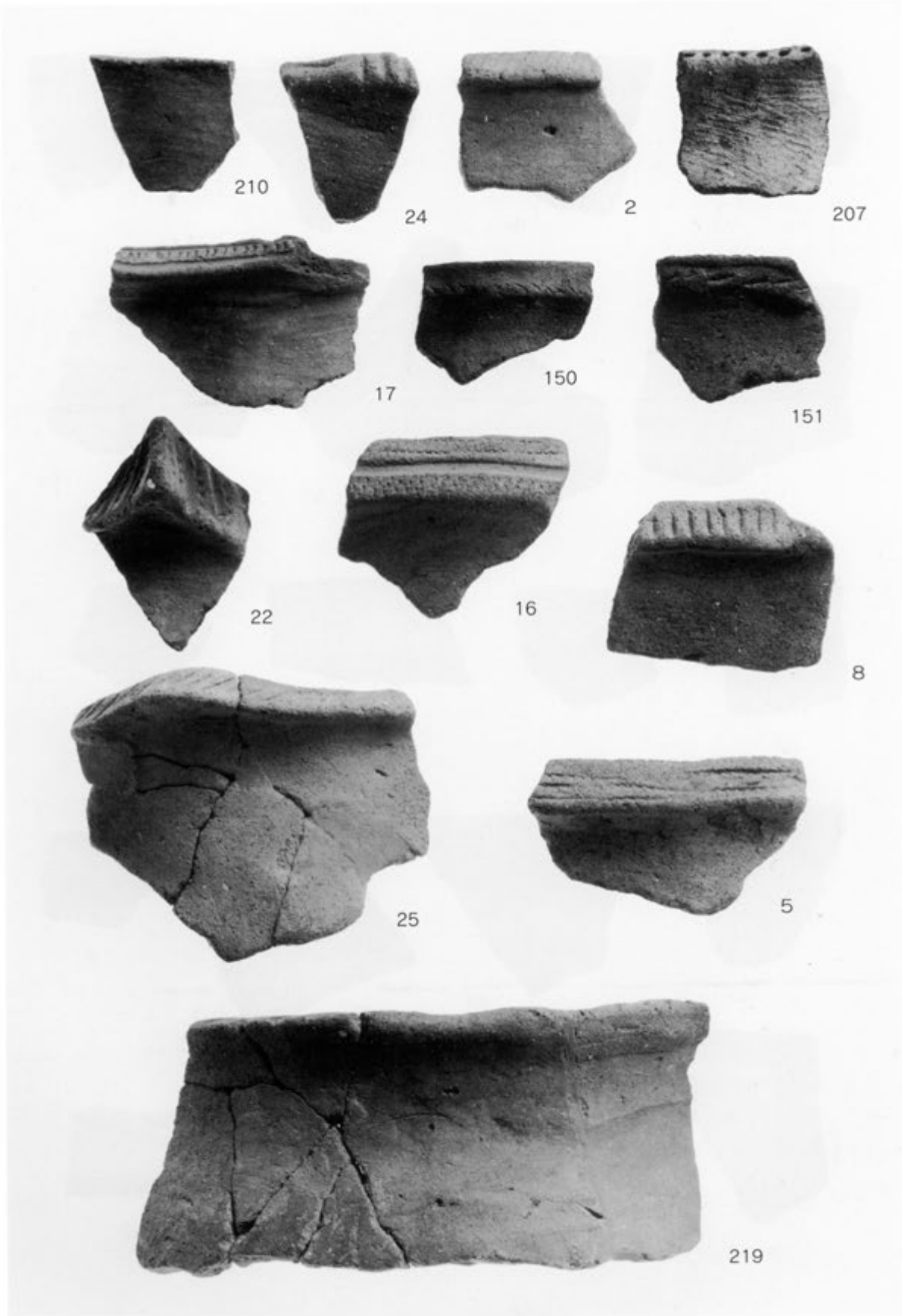
作業風景 (木製品取り上げ)



溝状遺構 6

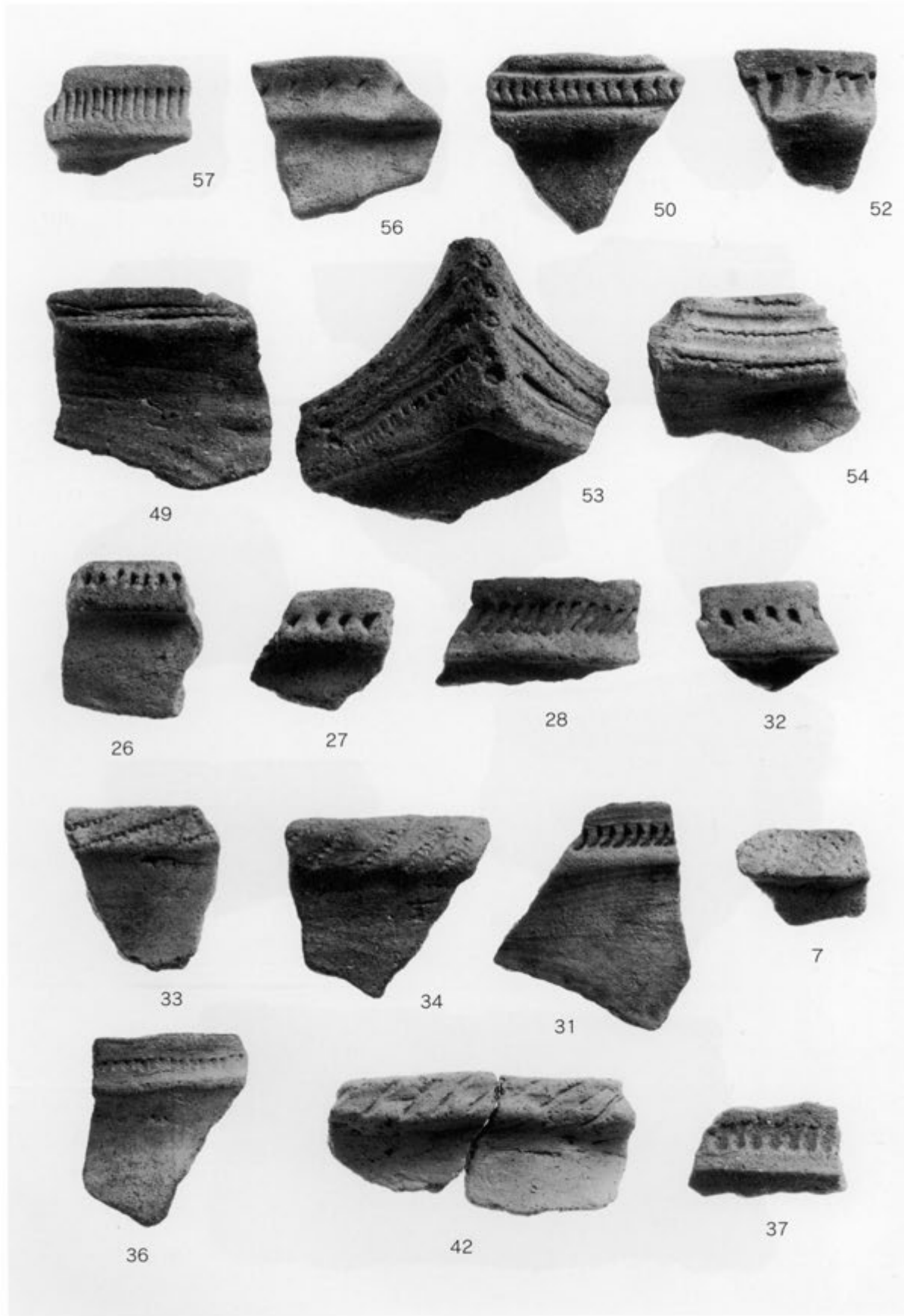


溝状遺構 6 石列

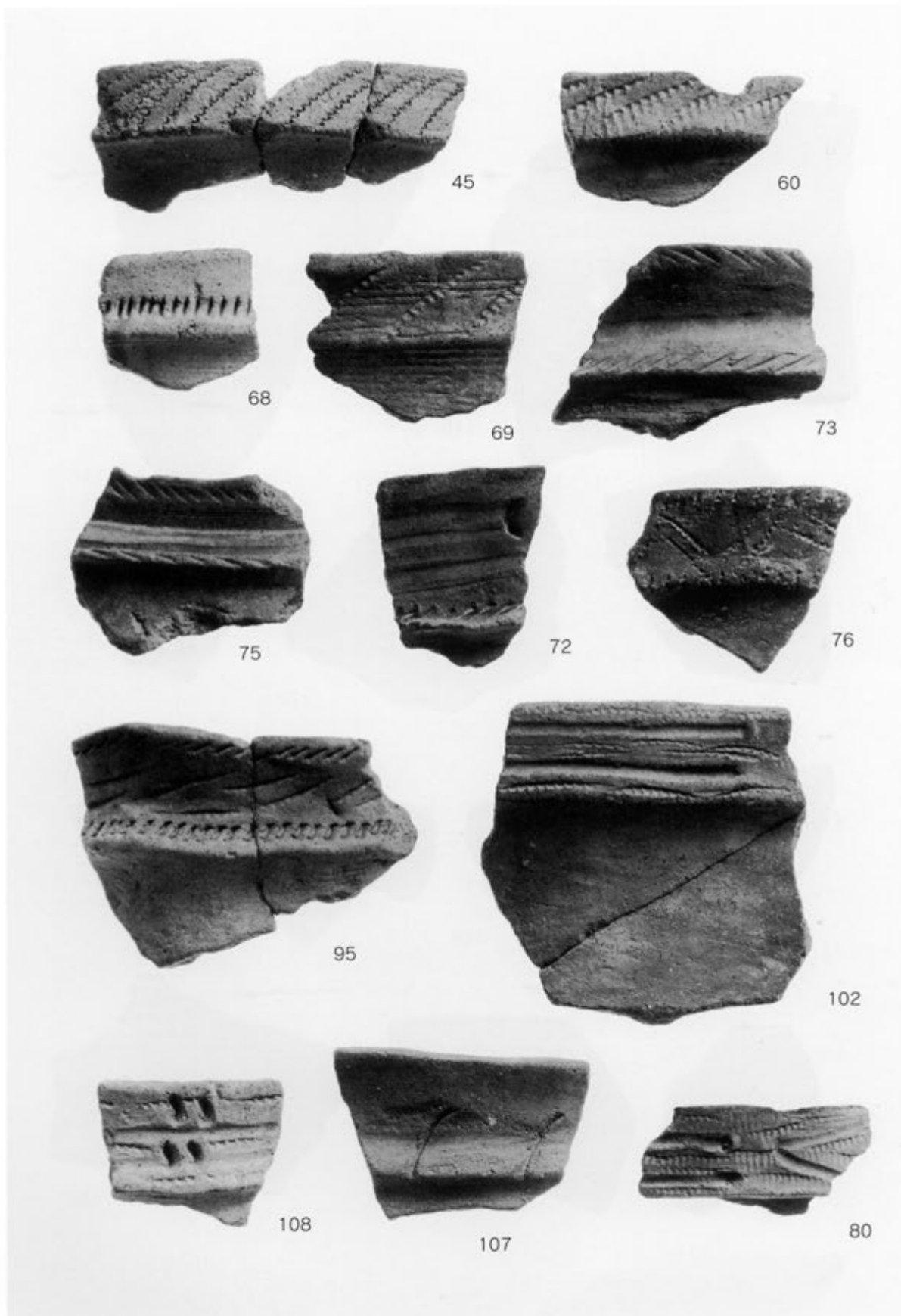


繩文土器 1

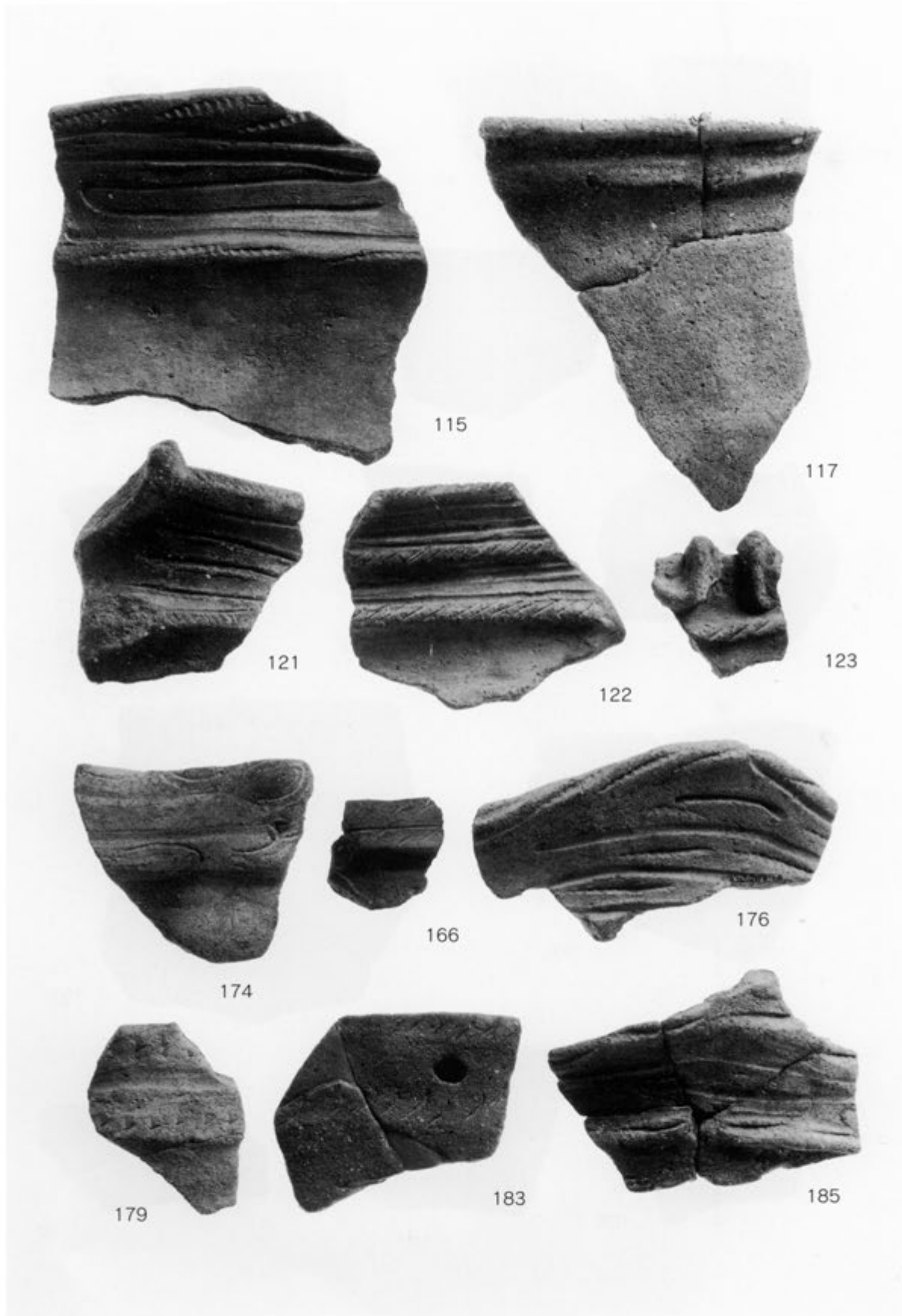




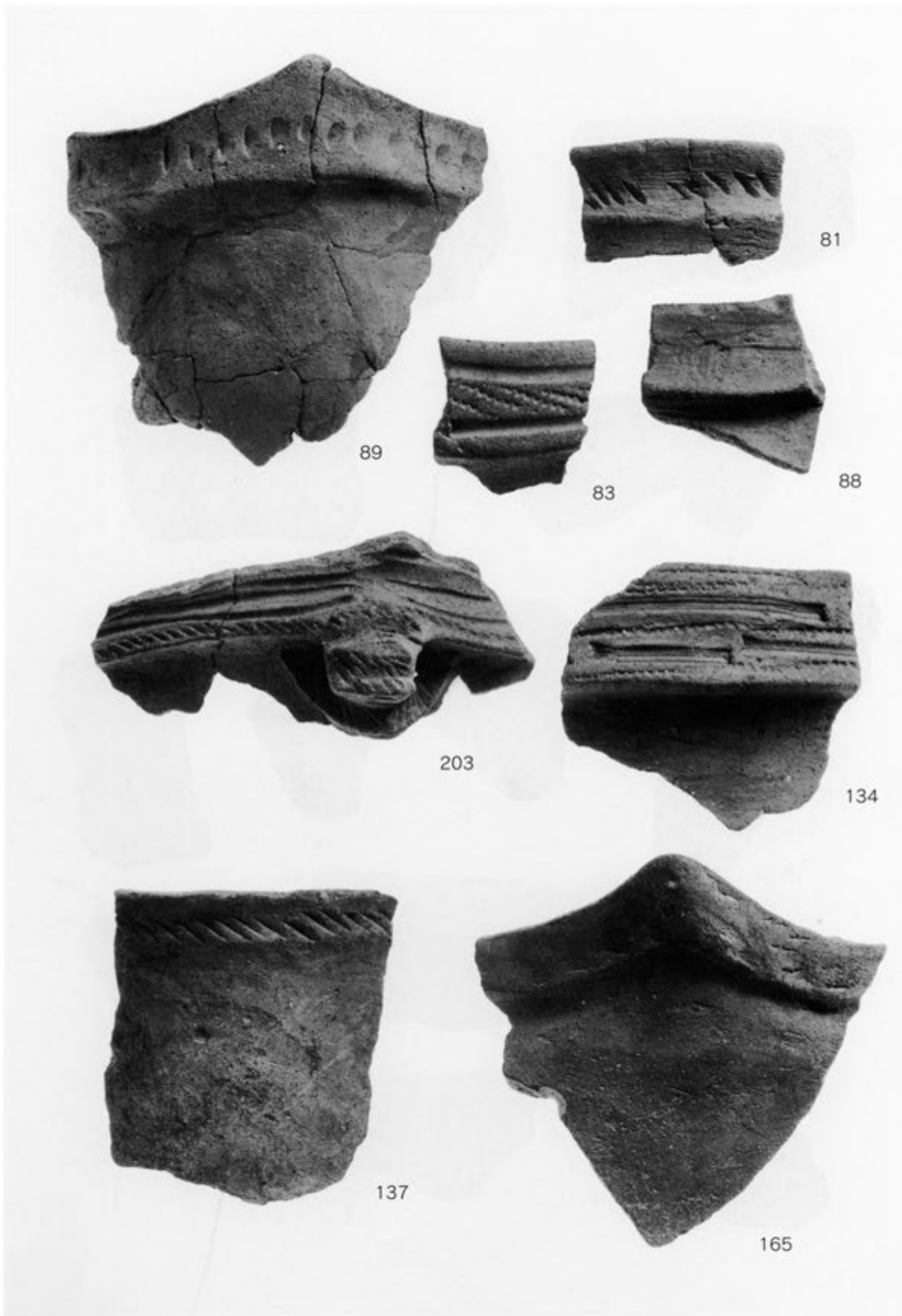
縄文土器 2



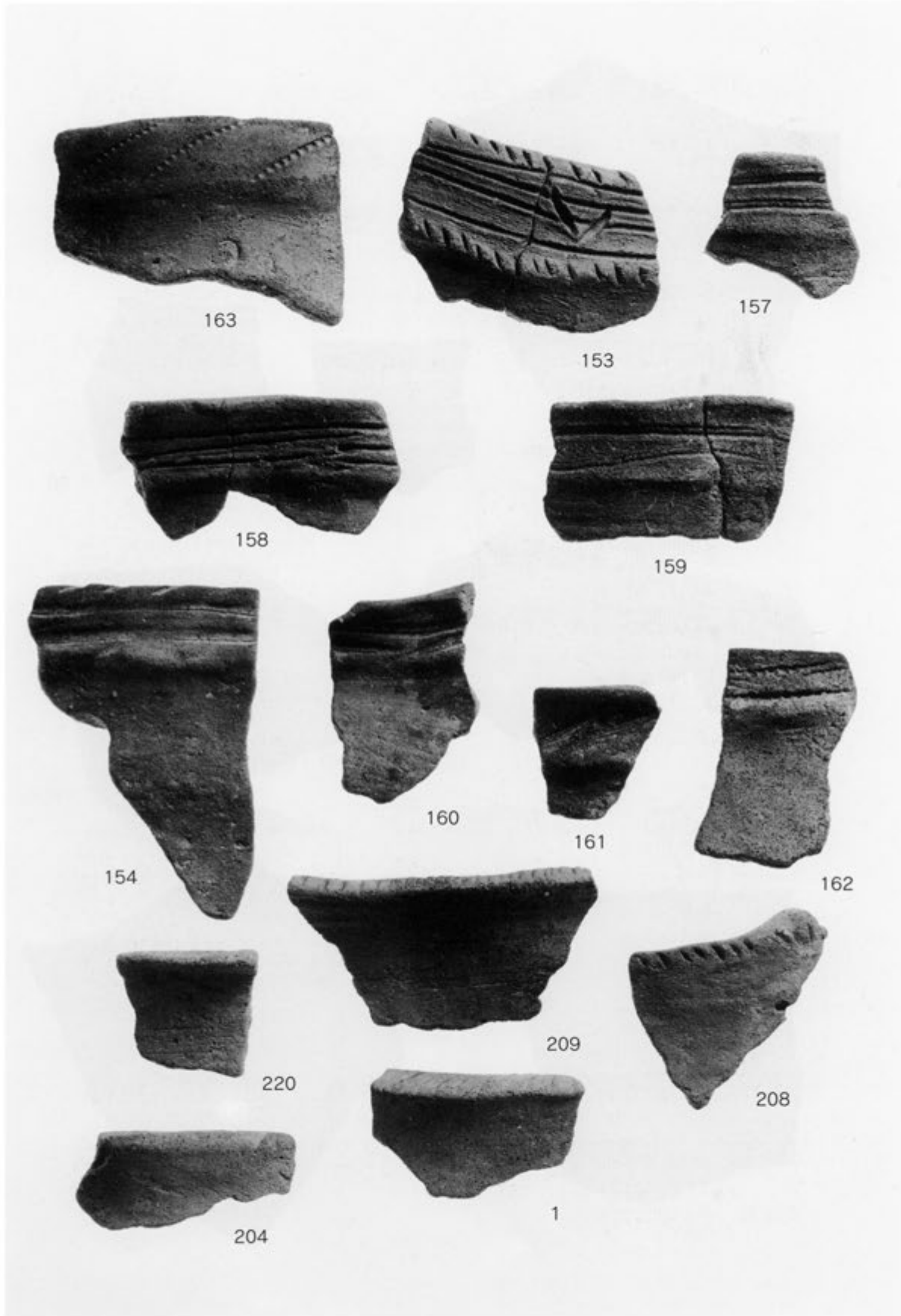
縄文土器 3



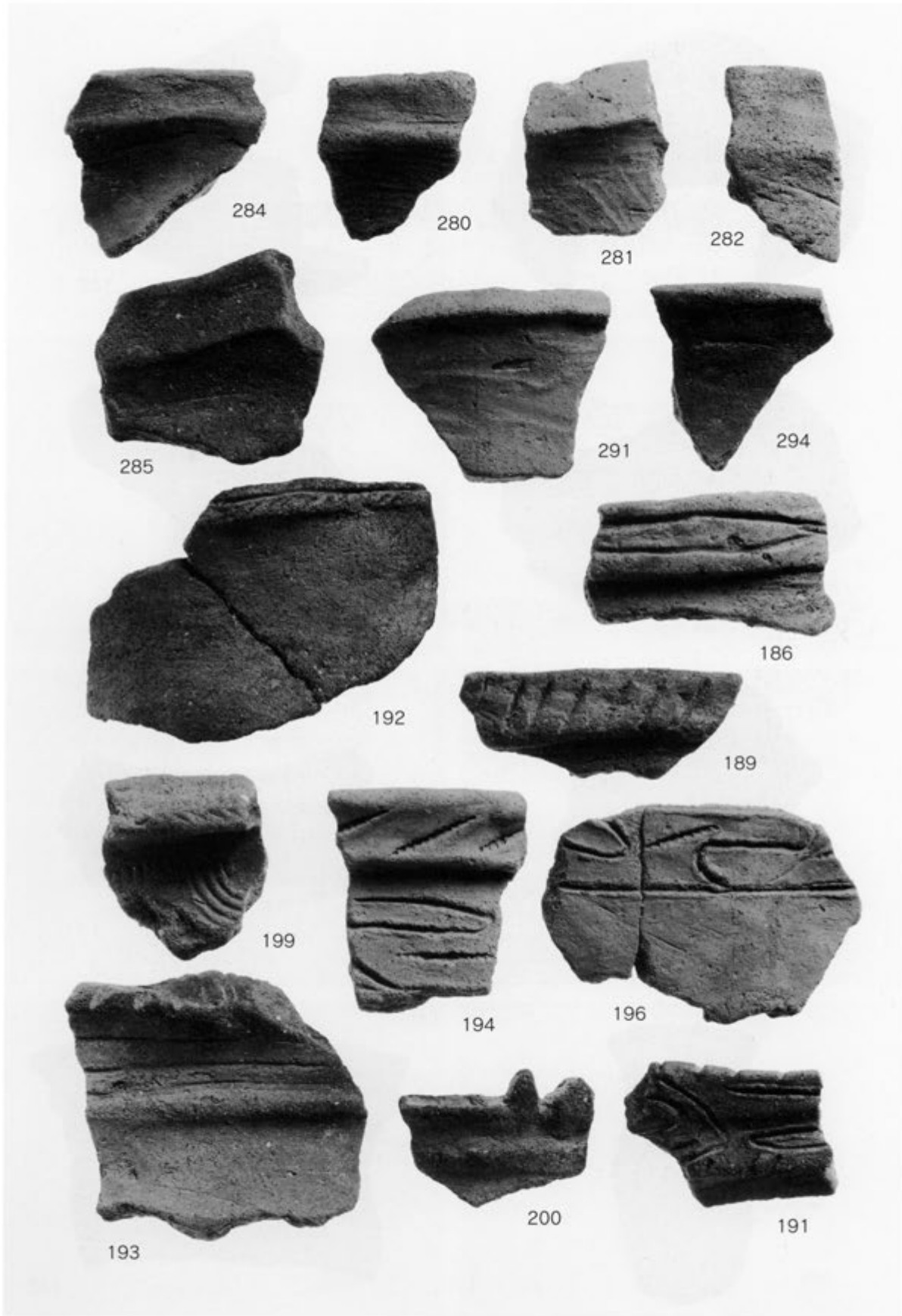
縄文土器 4



縄文土器 5



縄文土器 6



繩文土器 7



縄文土器 8



141



320

332

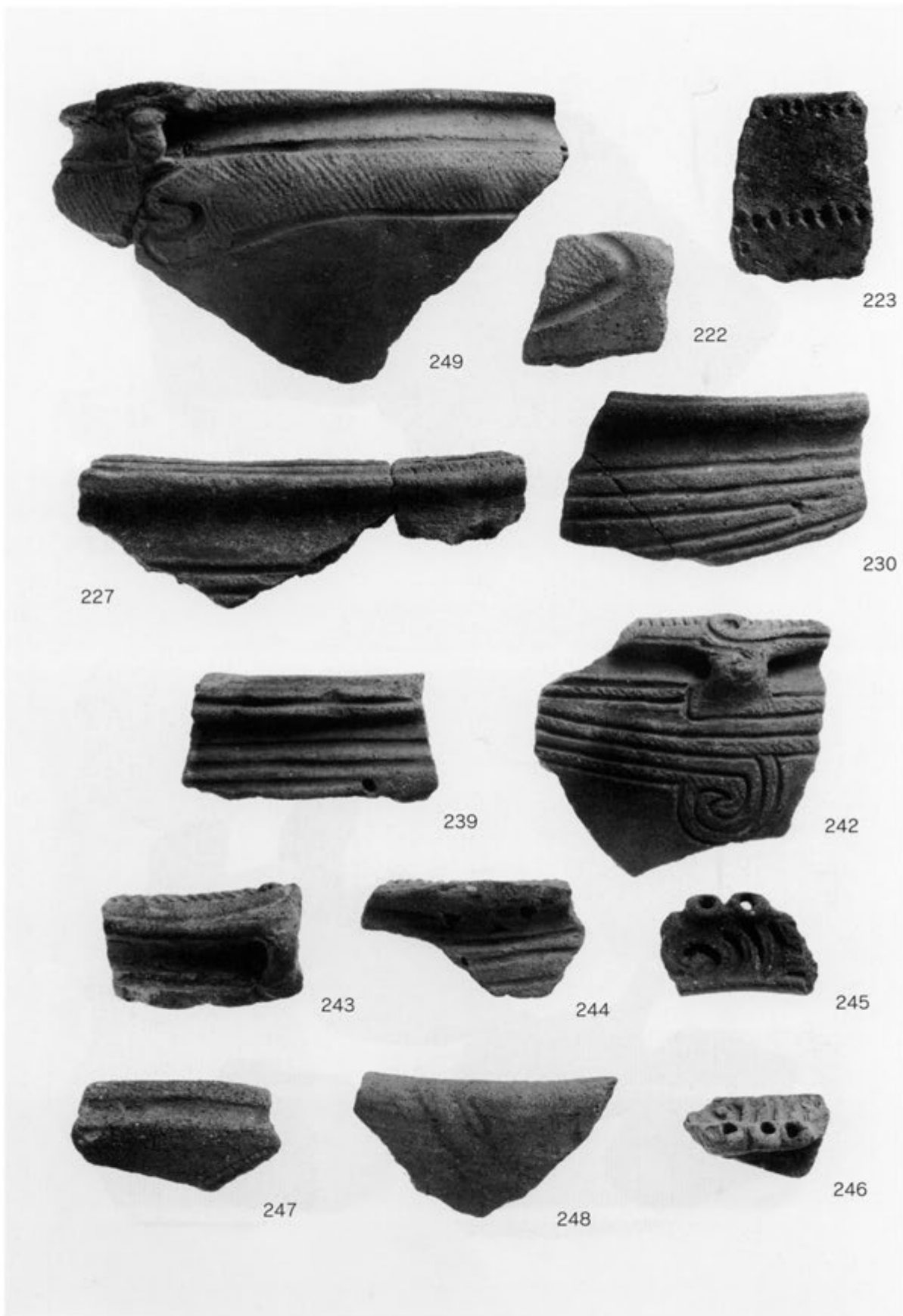
318

319

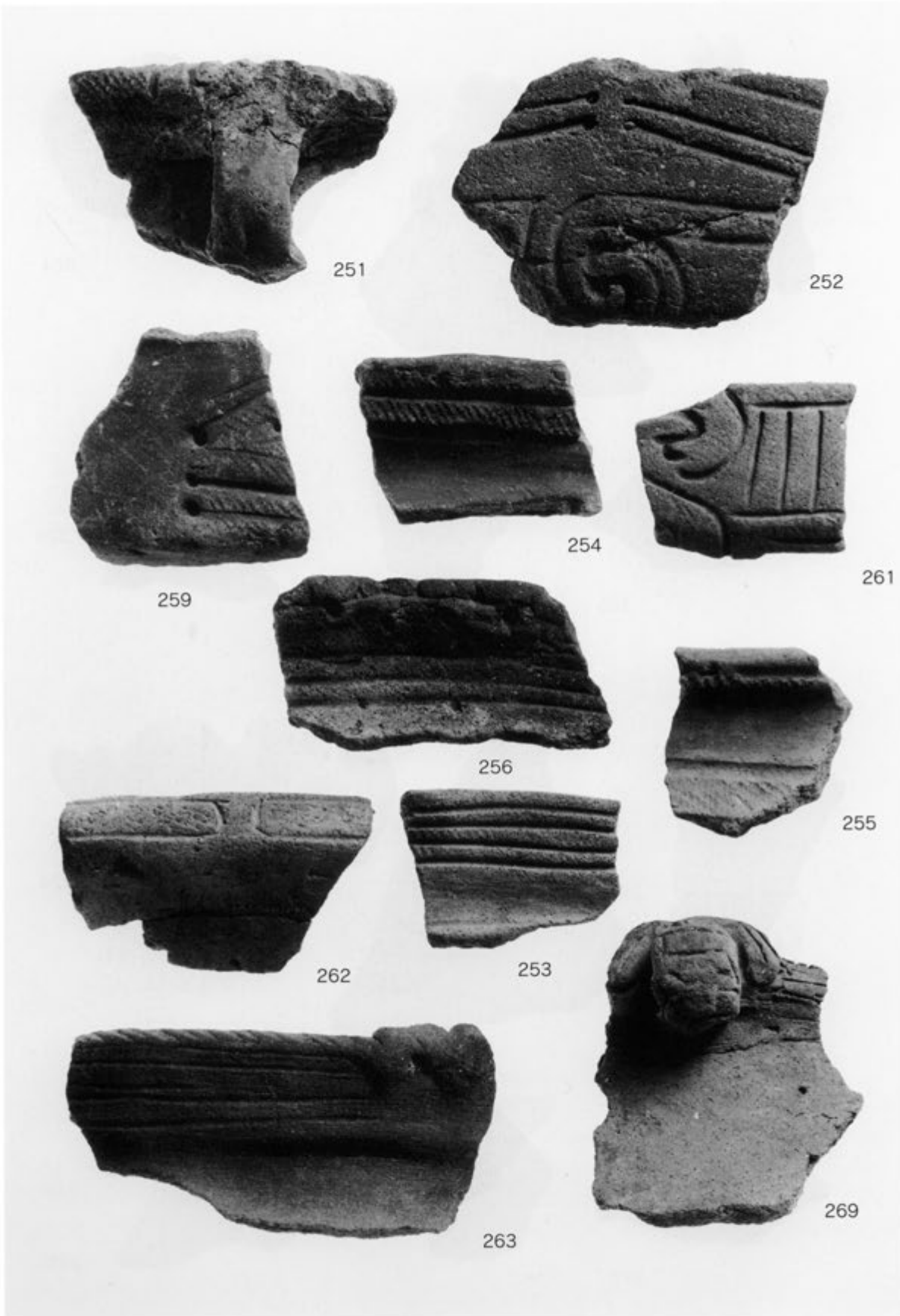
319

縄文土器 9

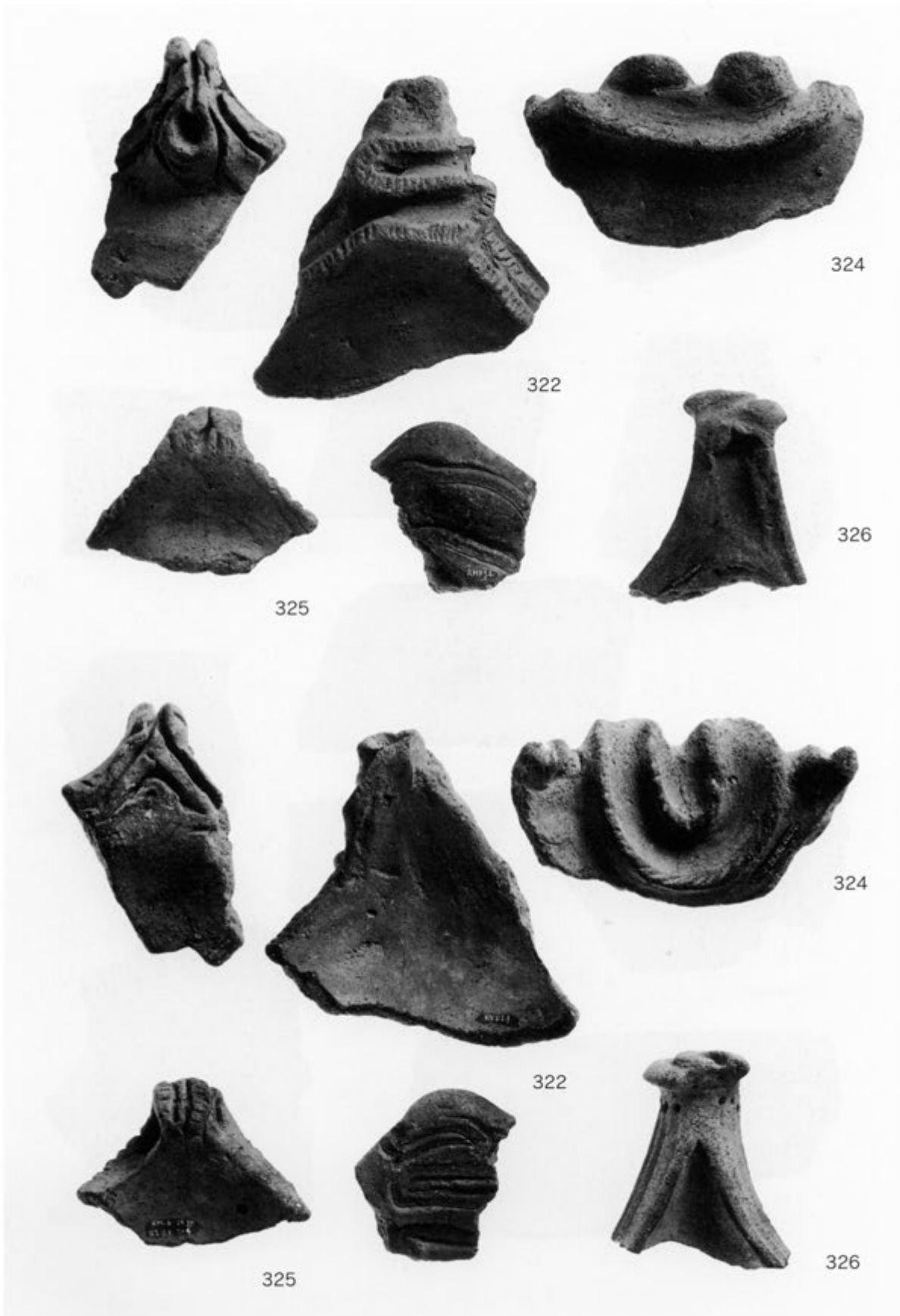




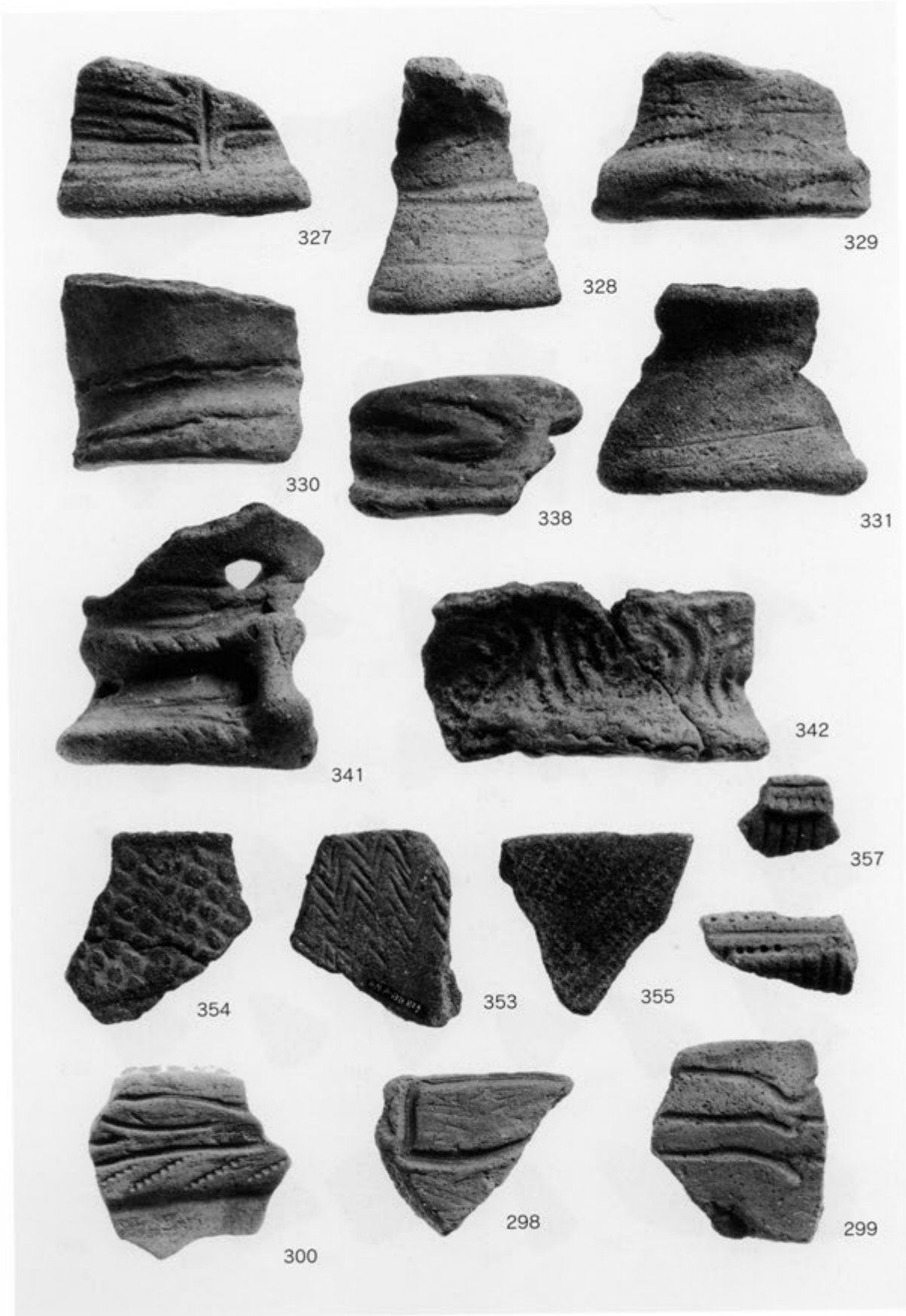
縄文土器10



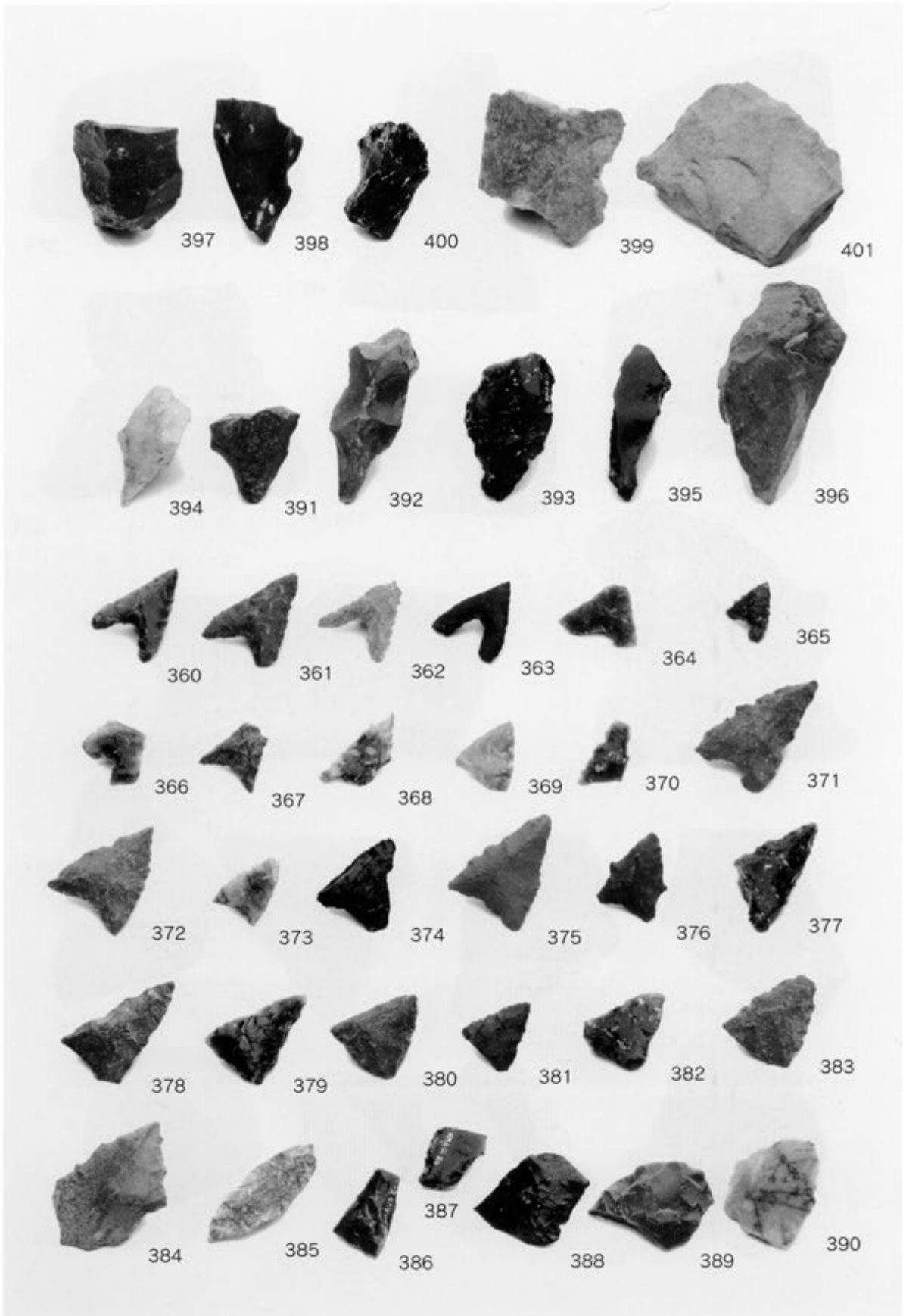
縄文土器11



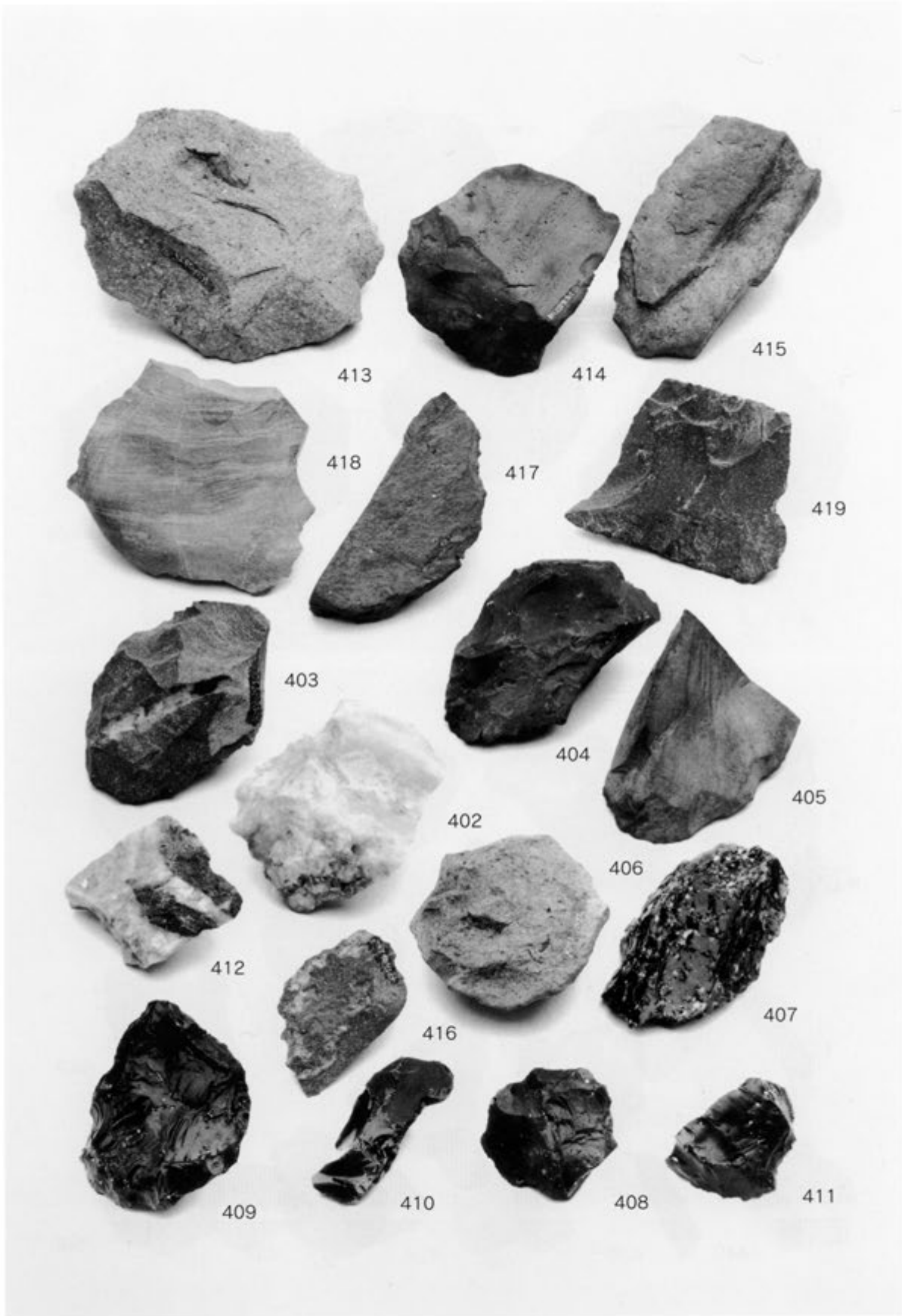
縄文土器12



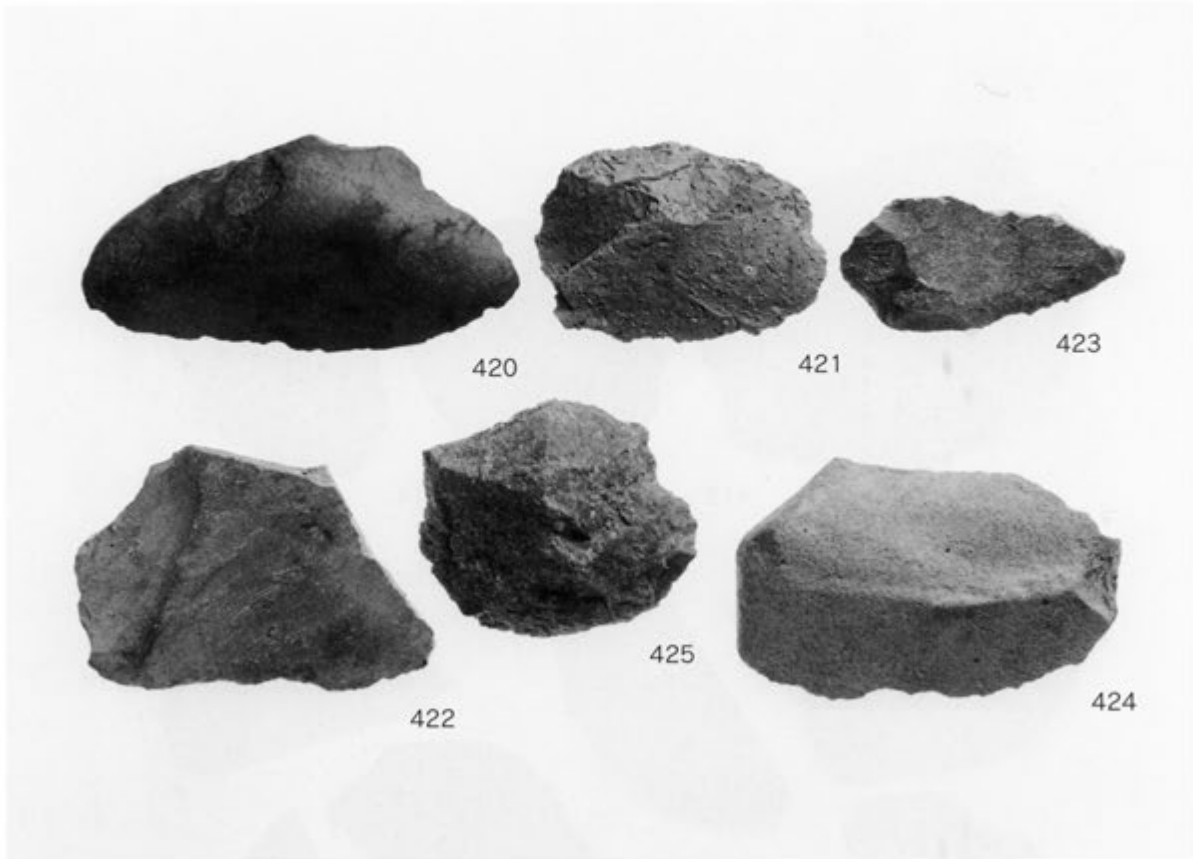
縄文土器13



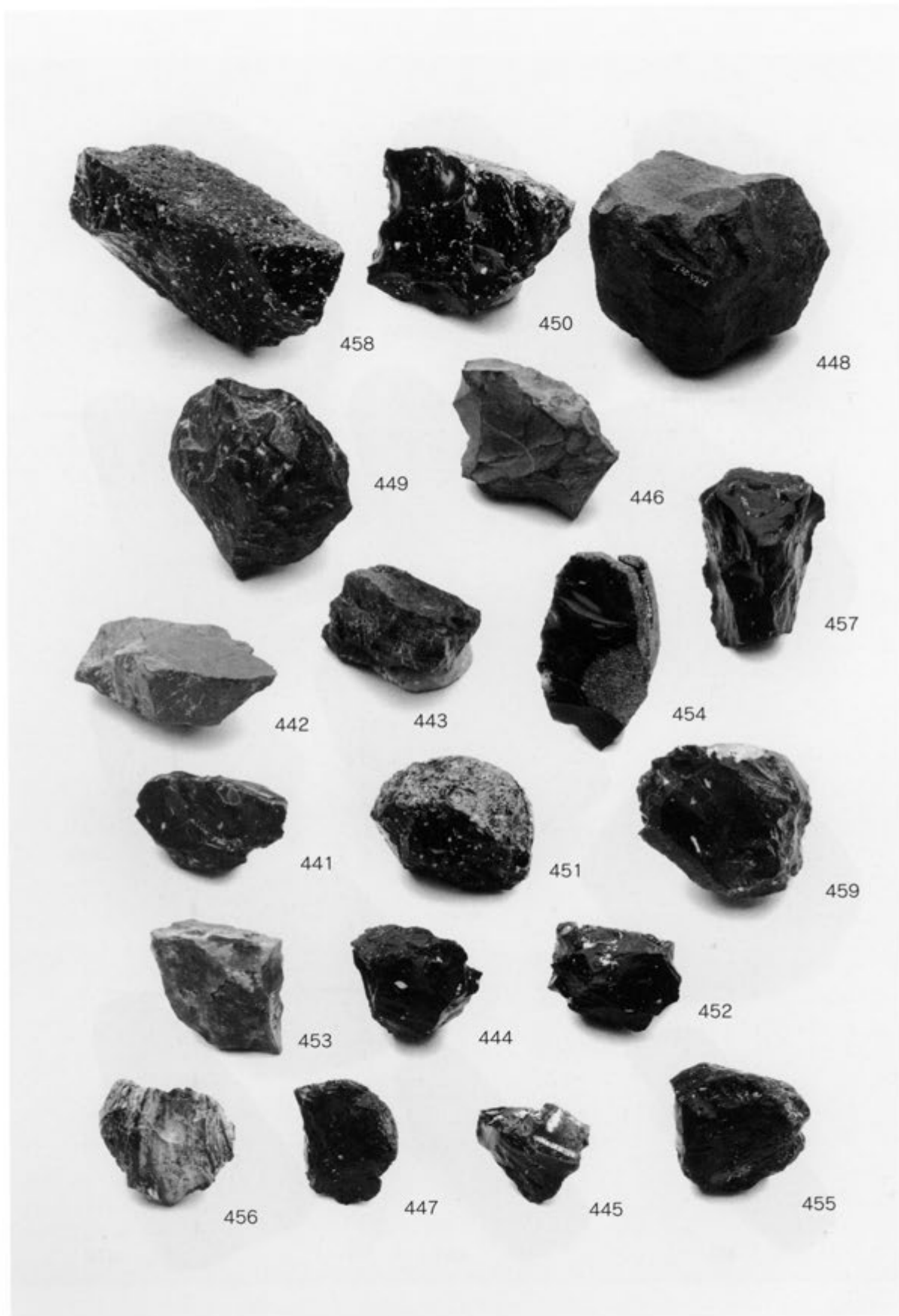
出土石器 1



出土石器 2

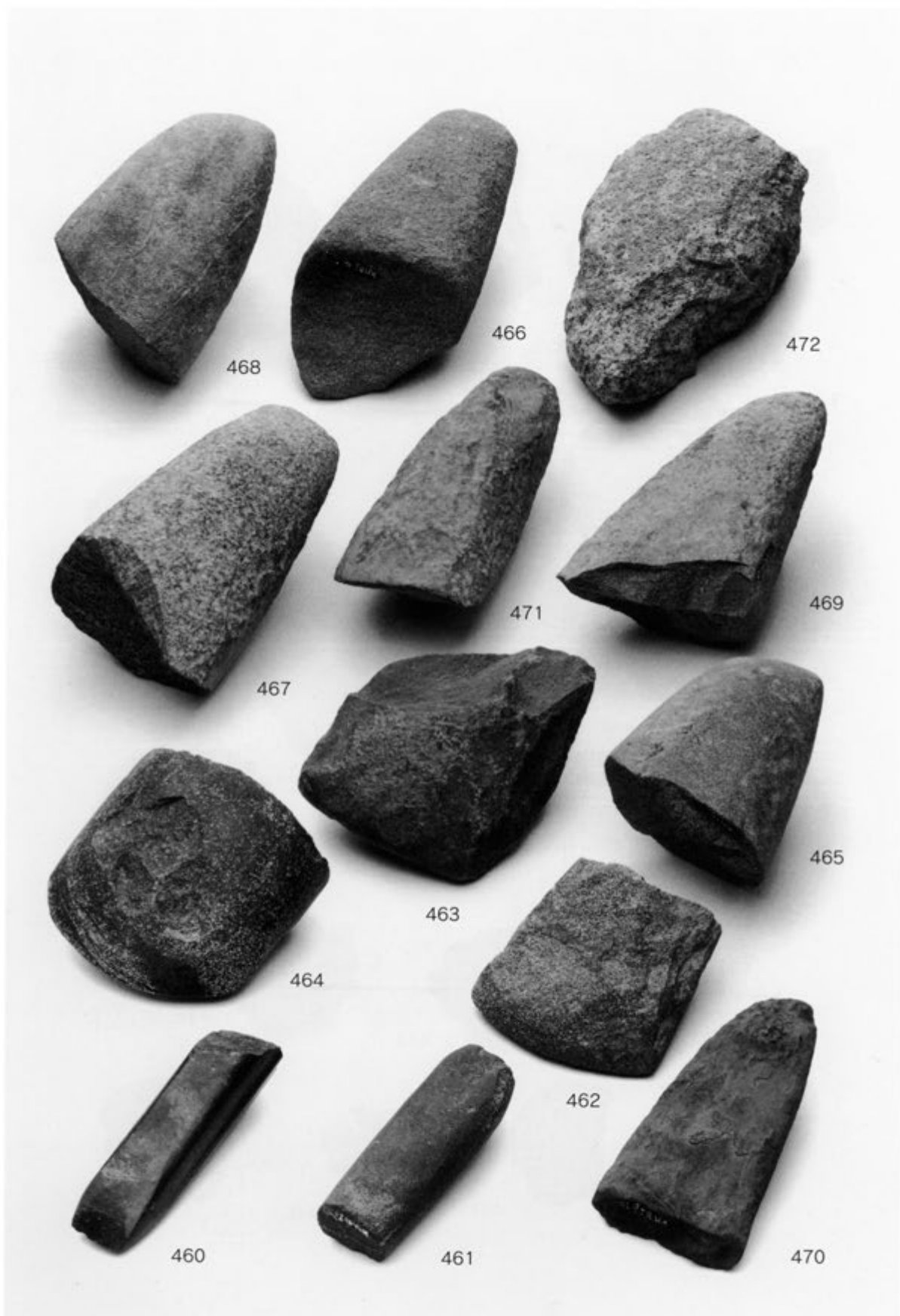


出土石器 3

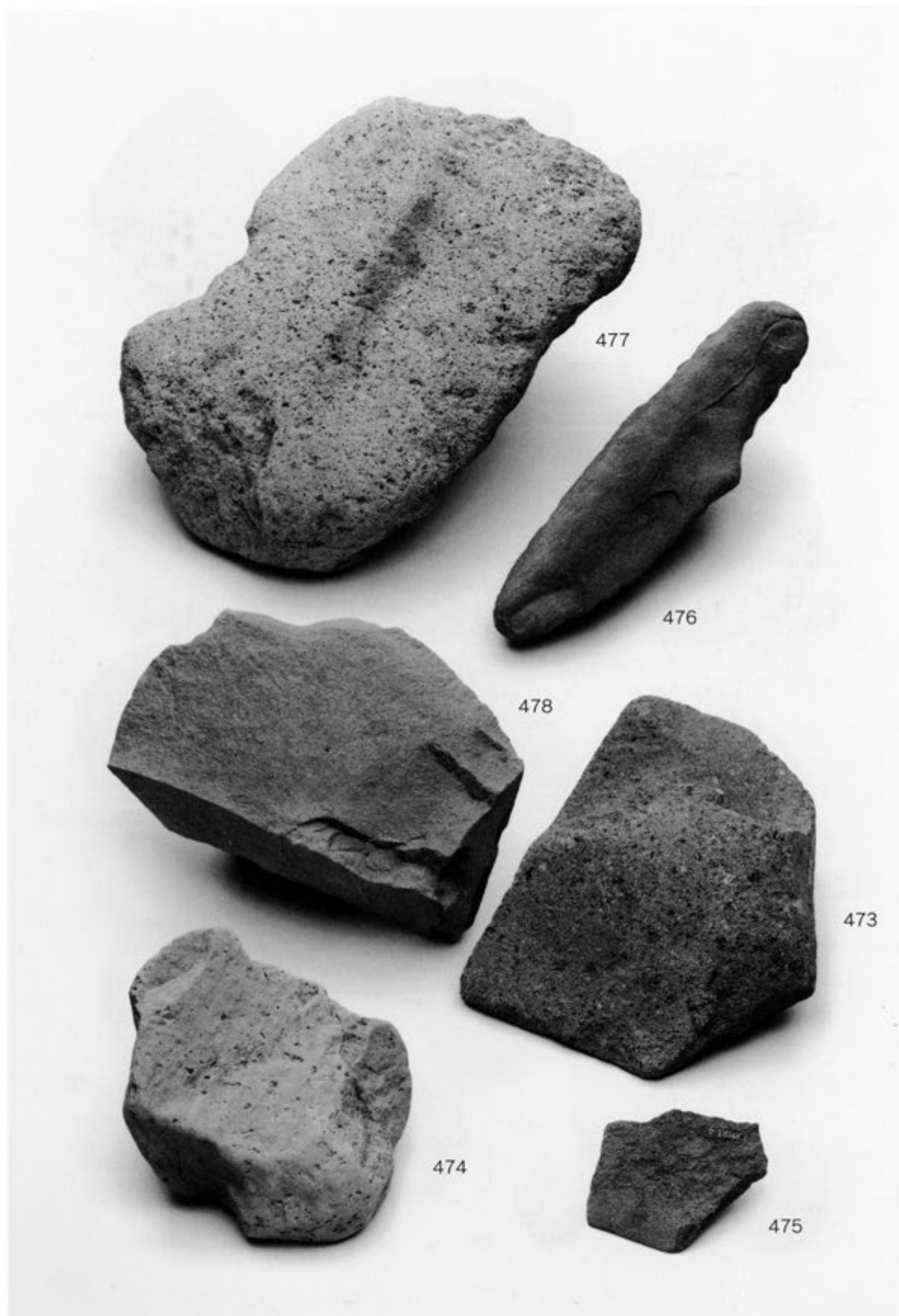


出土石器 4

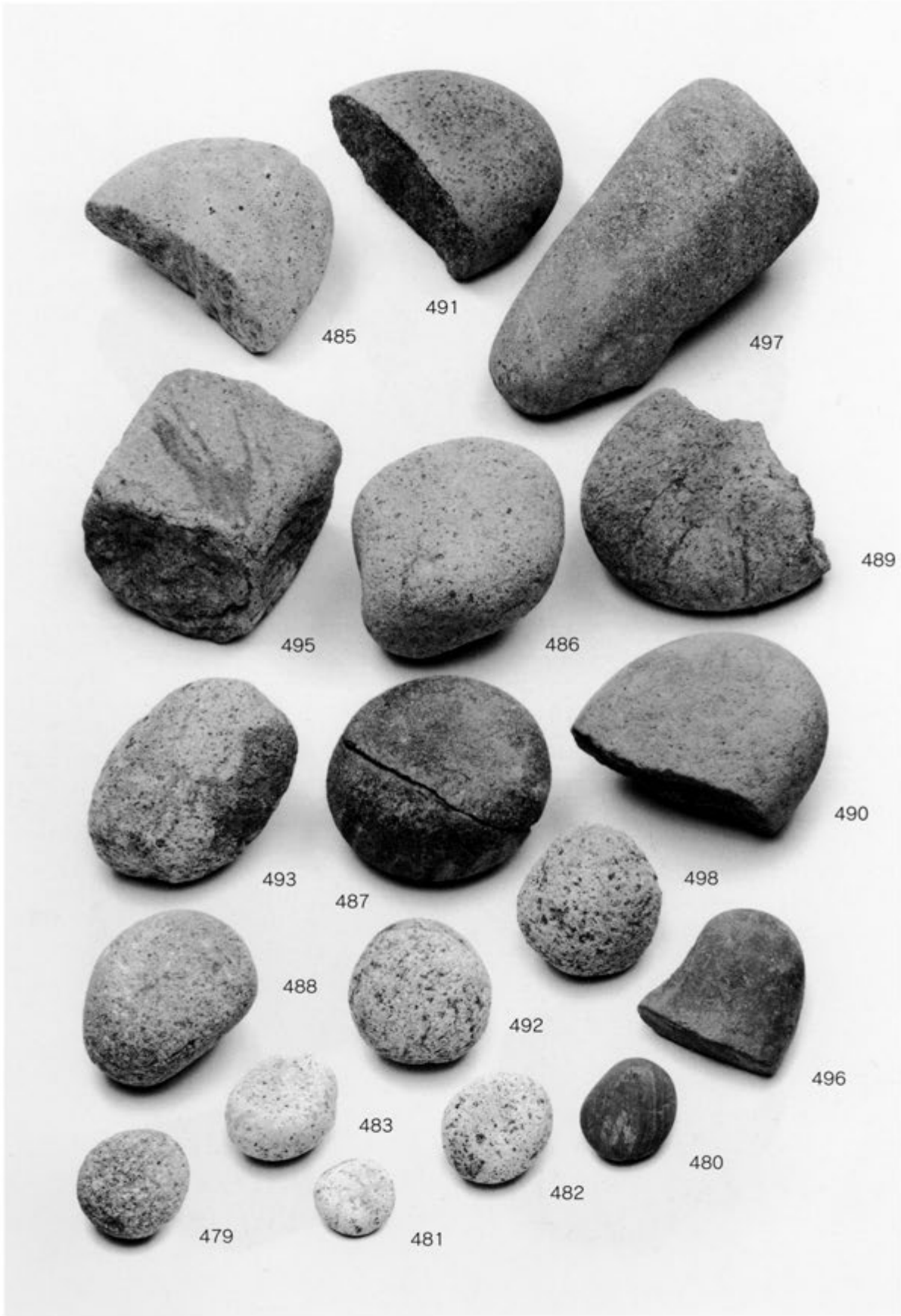




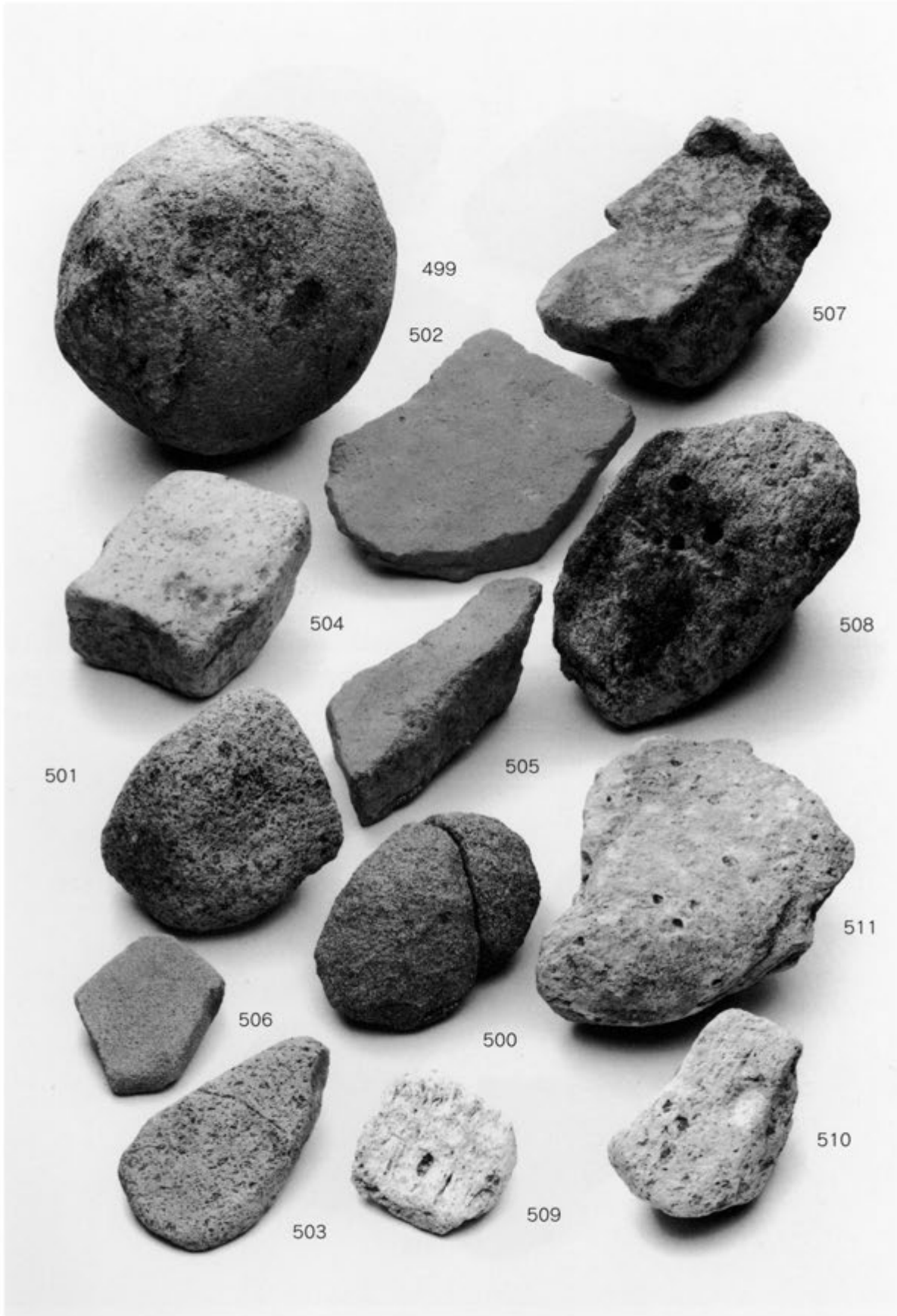
出土石器 5



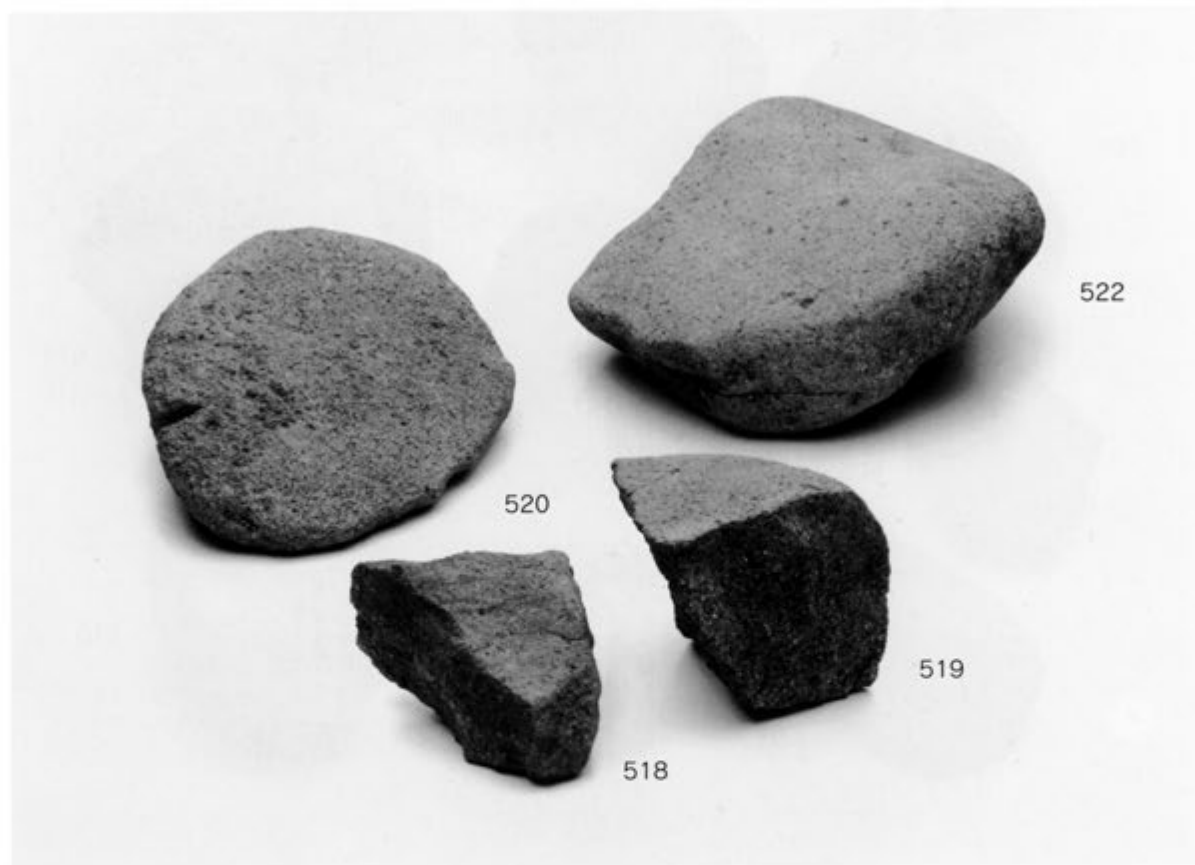
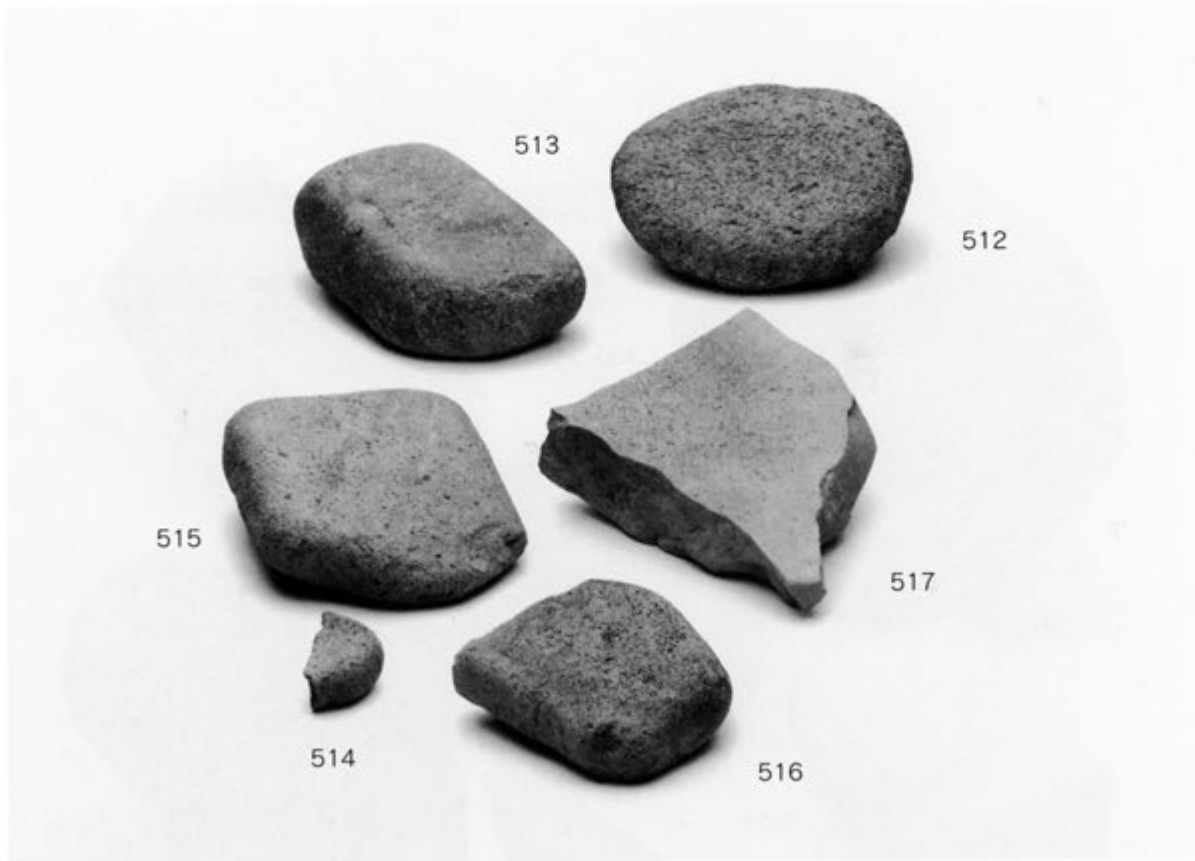
出土石器 6



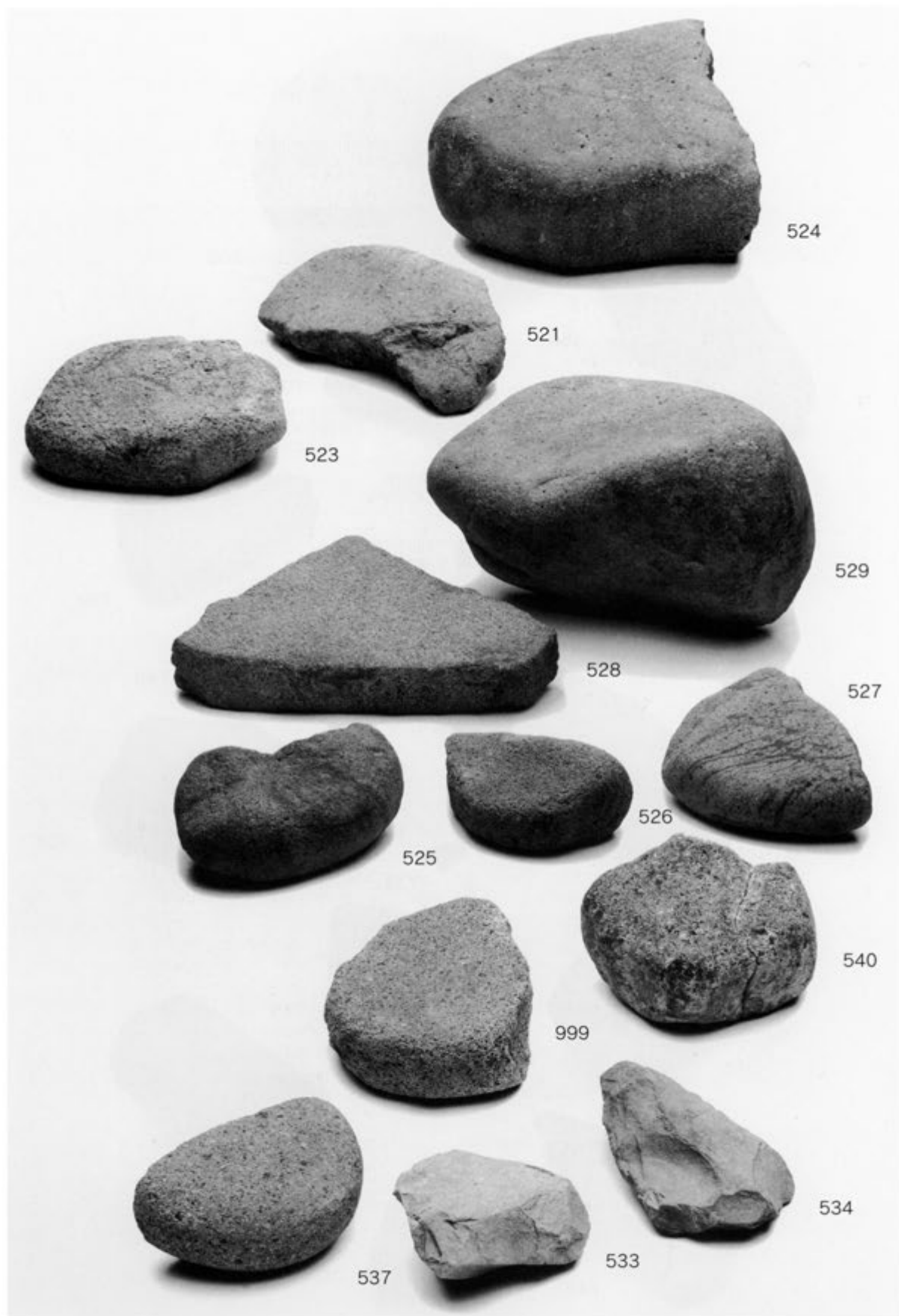
出土石器 7



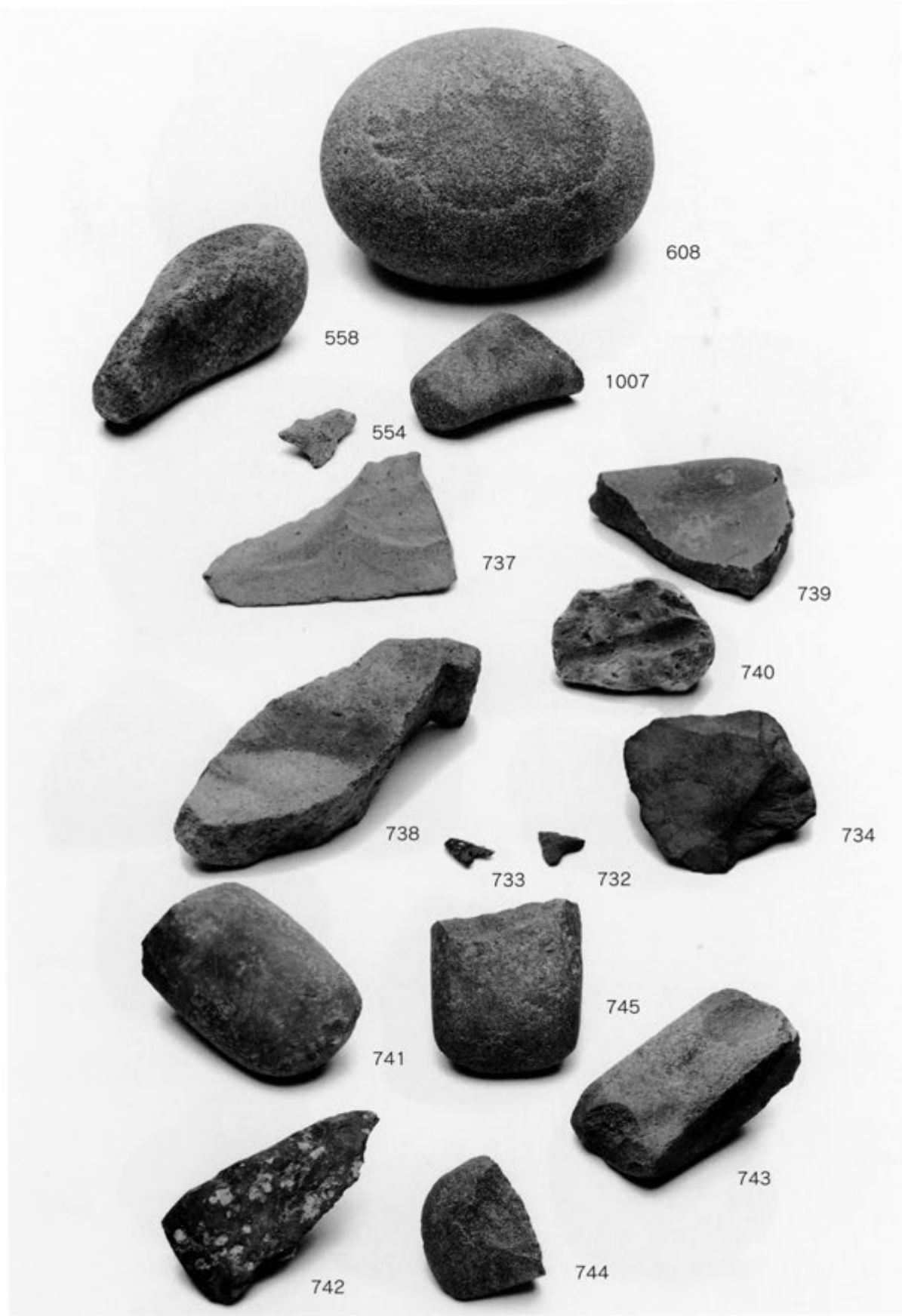
出土石器 8



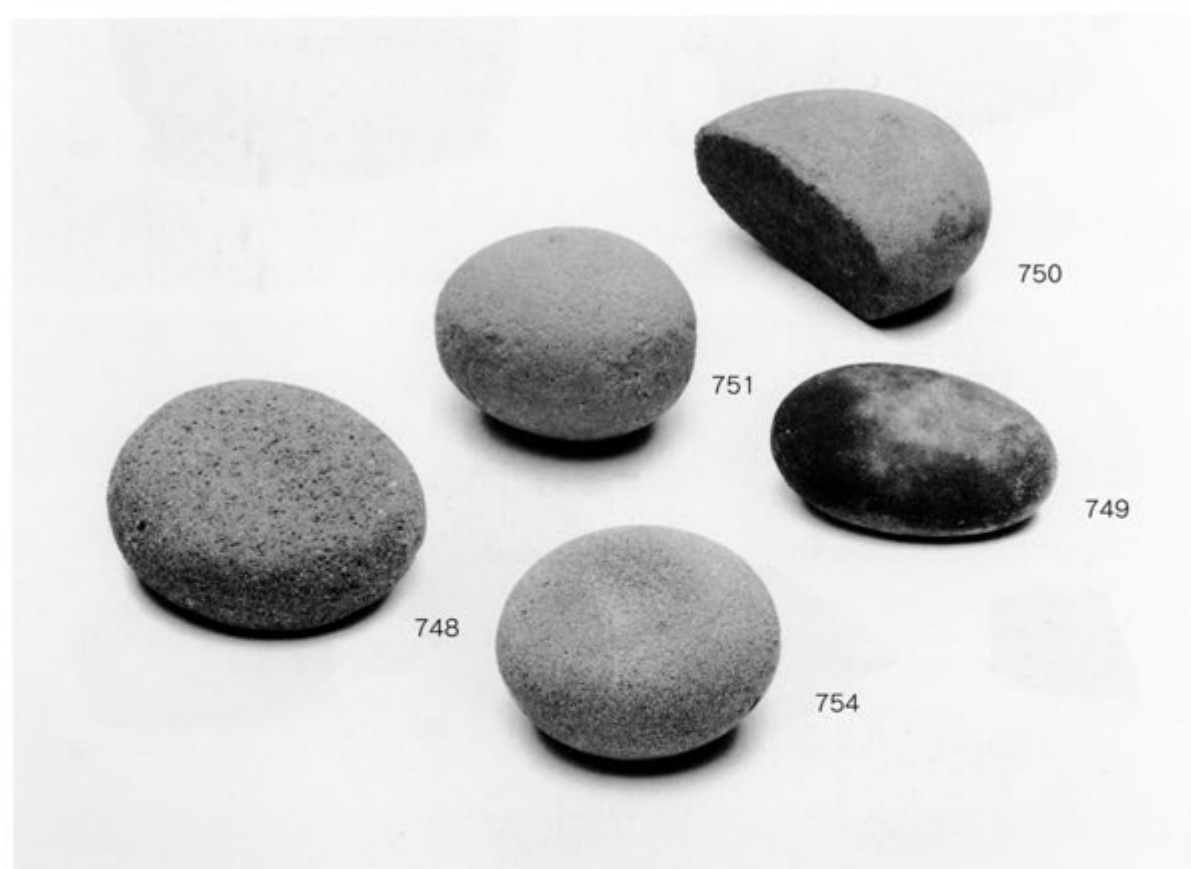
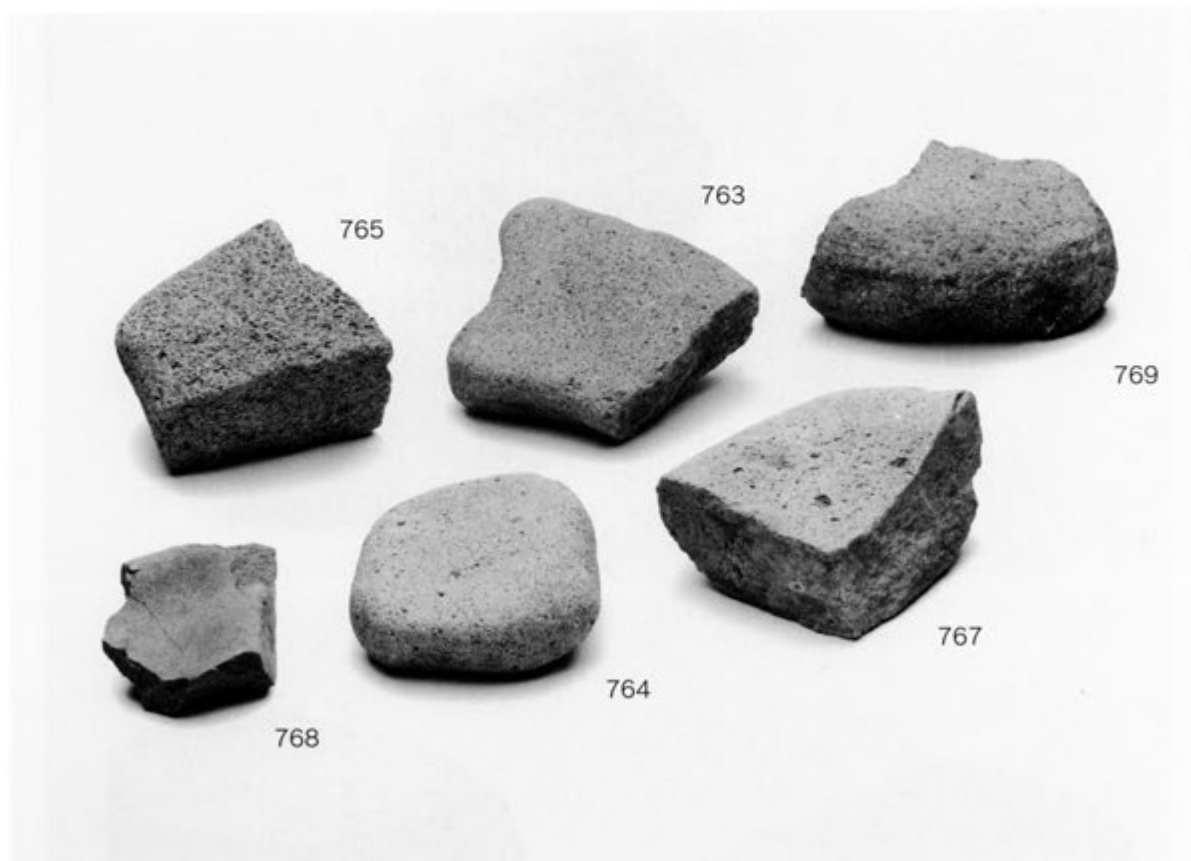
出土石器 9



出土石器10

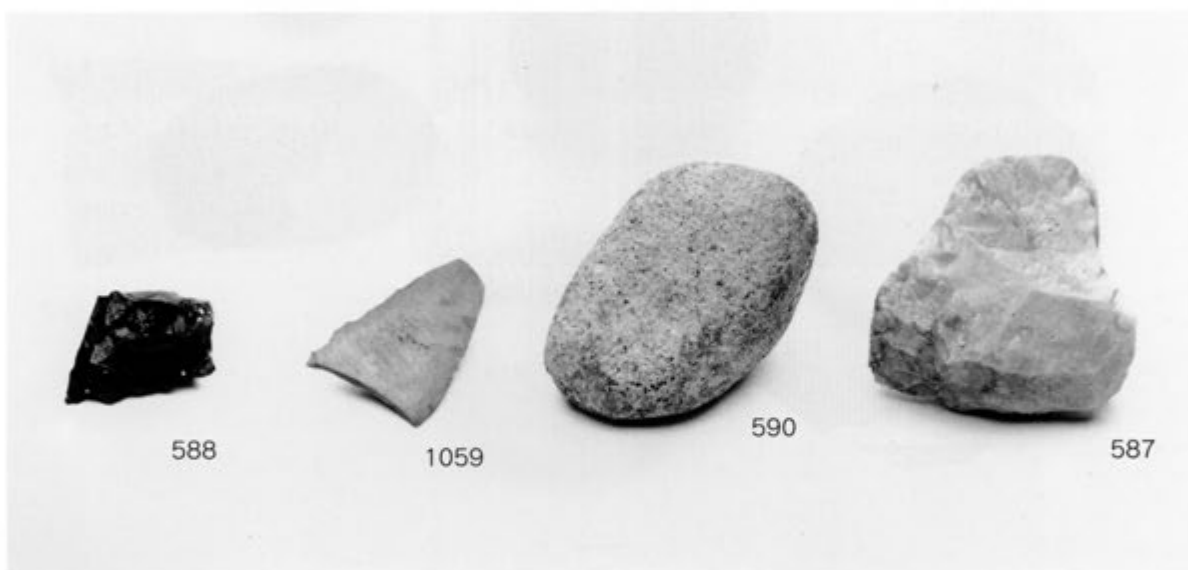


出土石器11

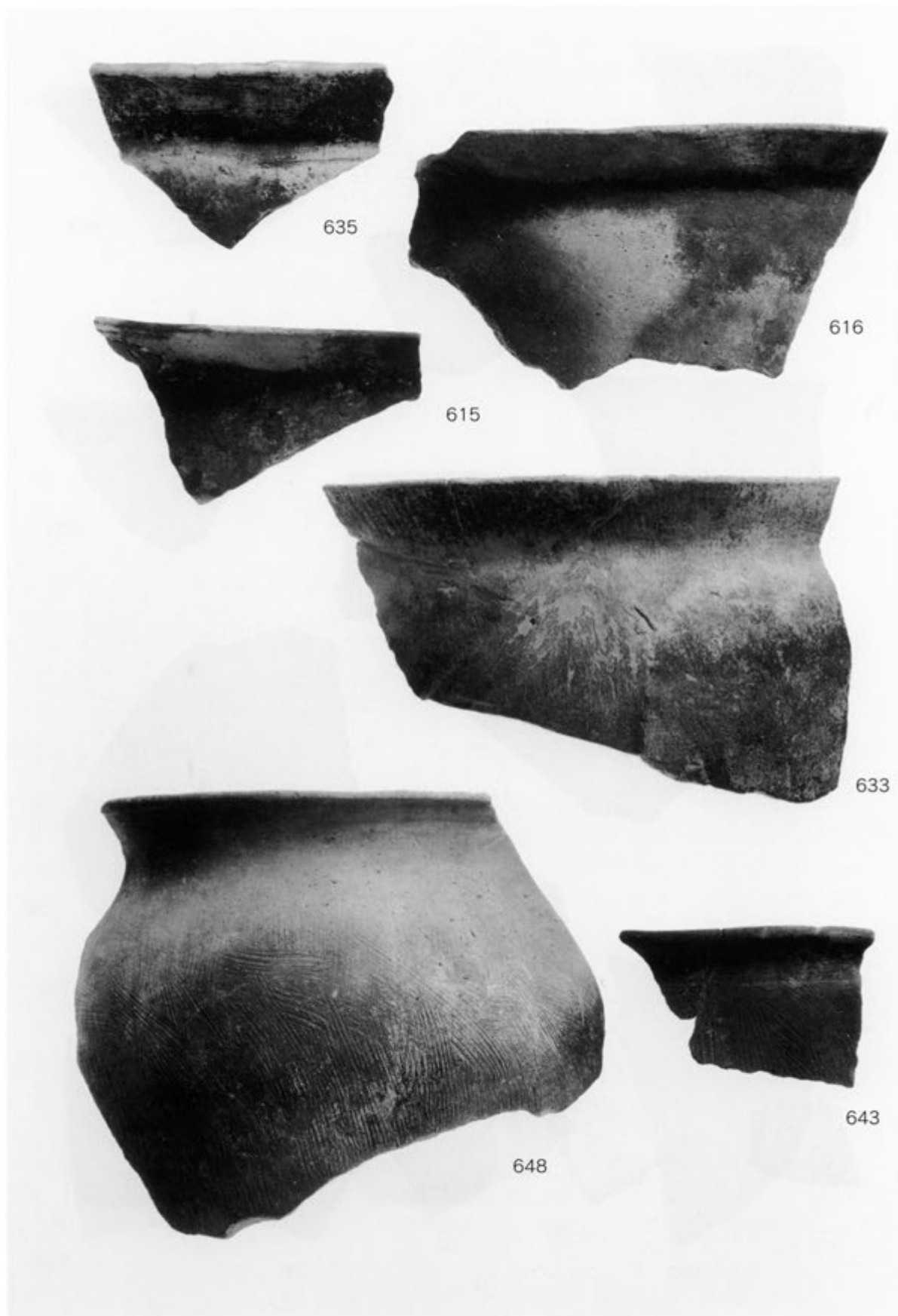


出土石器12

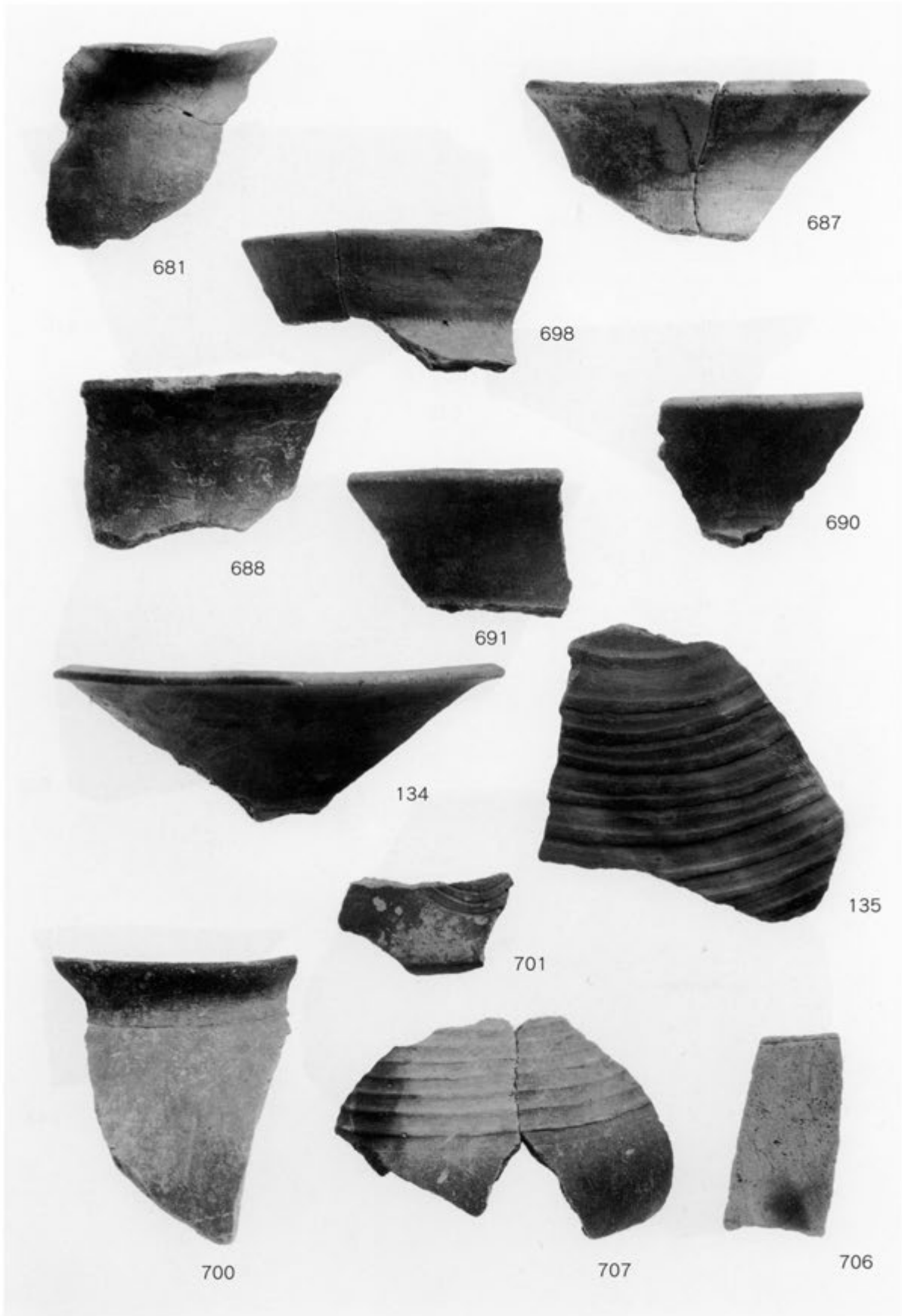




出土石器13



自然流路1甕



自然流路1壺



自然流路1・溝状遺構2出土土器（甕・壺）



溝状遺構 2 壺



自然流路 2 壺



溝状遺構 2 小型丸底壺



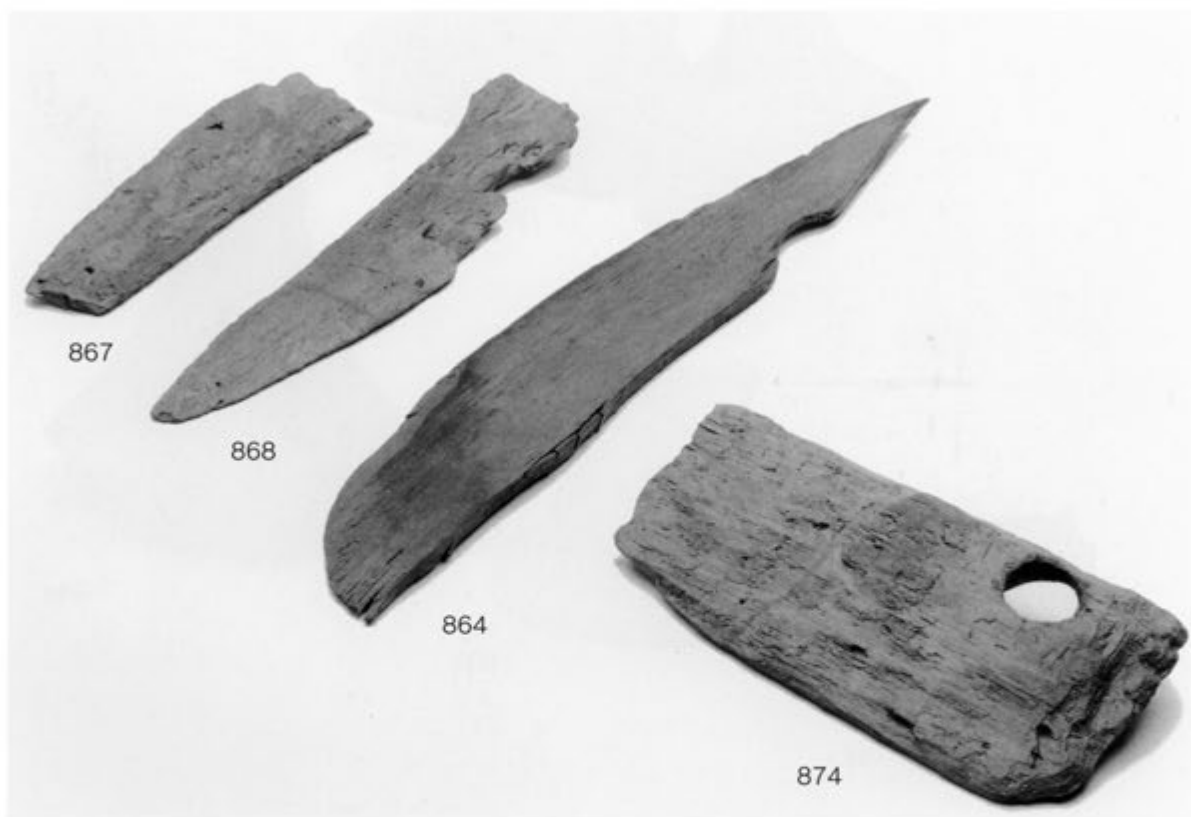
自然流路 1・溝状遺構 2 出土土器 (匙状土製品他)



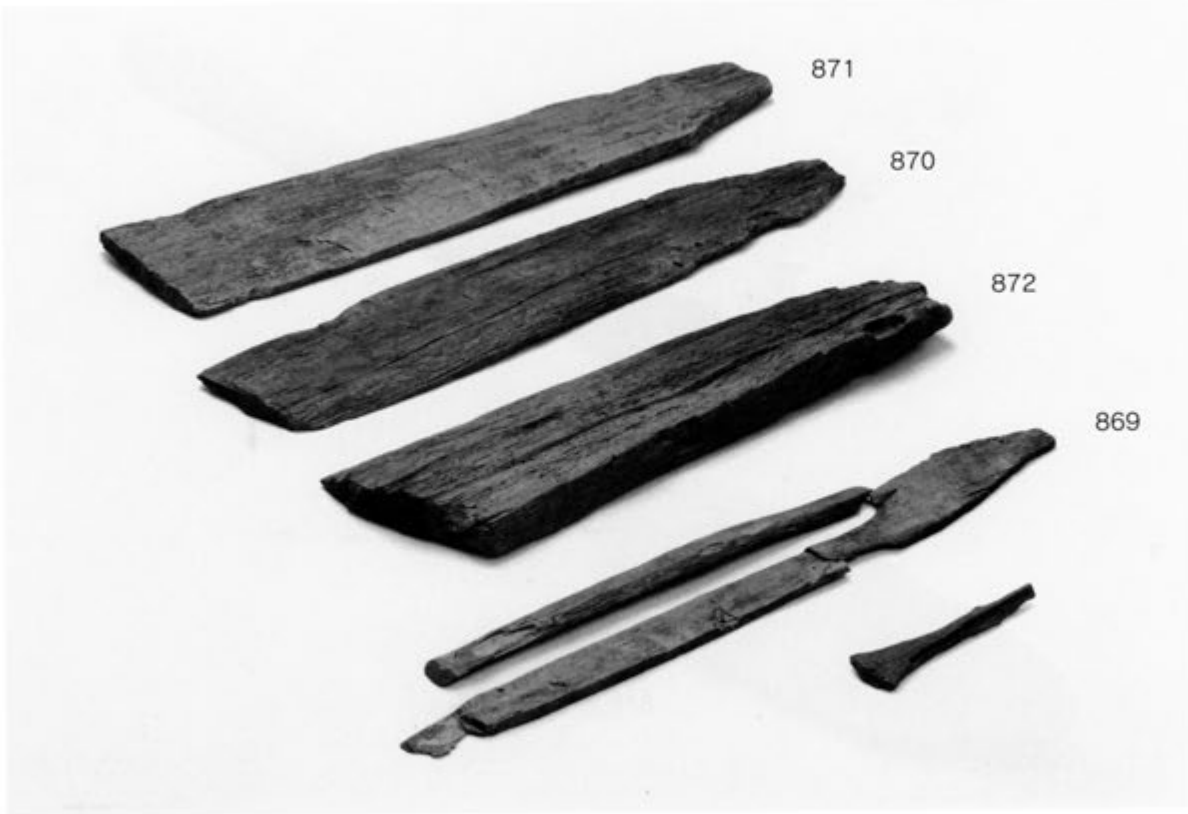
自然流路1・溝状遺構2出土土器（鉢・高坏）



曲柄鍬



曲柄鍬・横鍬



農具未製品



鍬の柄

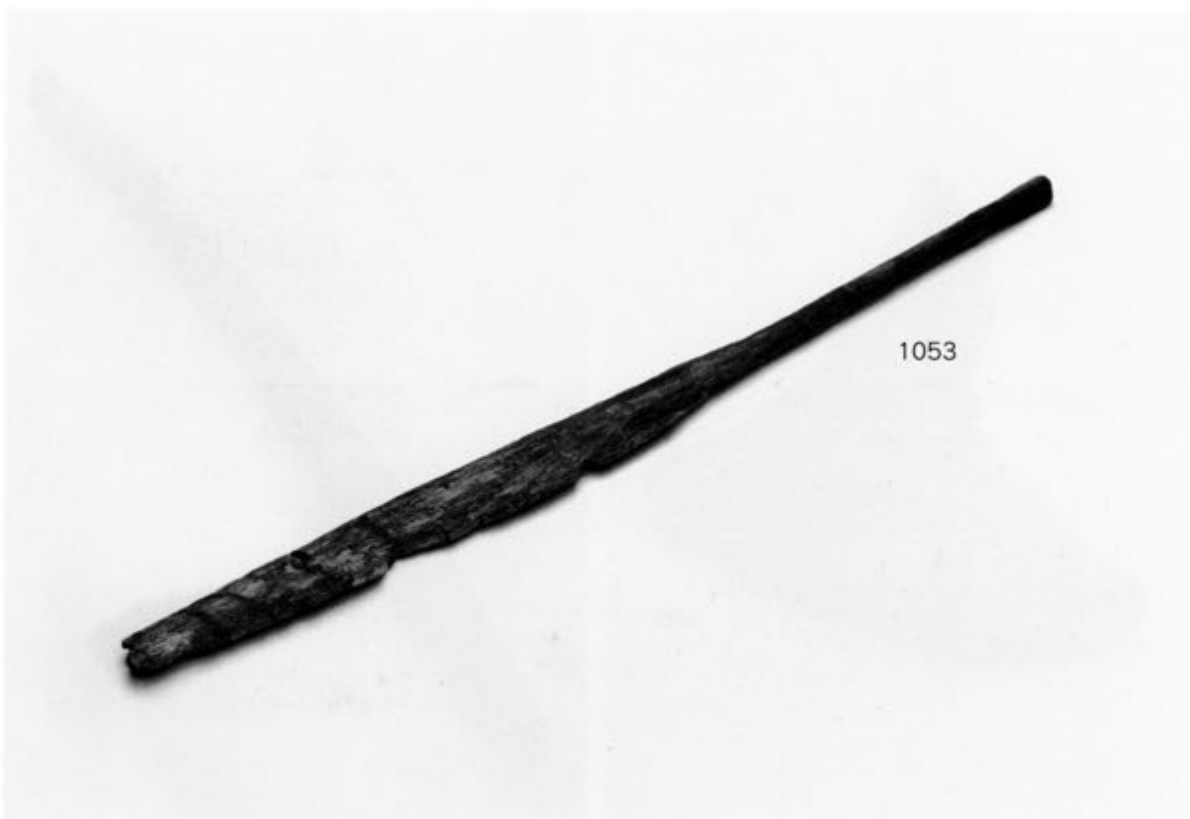


丸木弓





掘り棒



用途不明木製品



容器



ひょうたん



建築材・用途不明木製品



用途不明木製品



建築材の可能性のある木製品



加工のある杭（溝状遺構1）

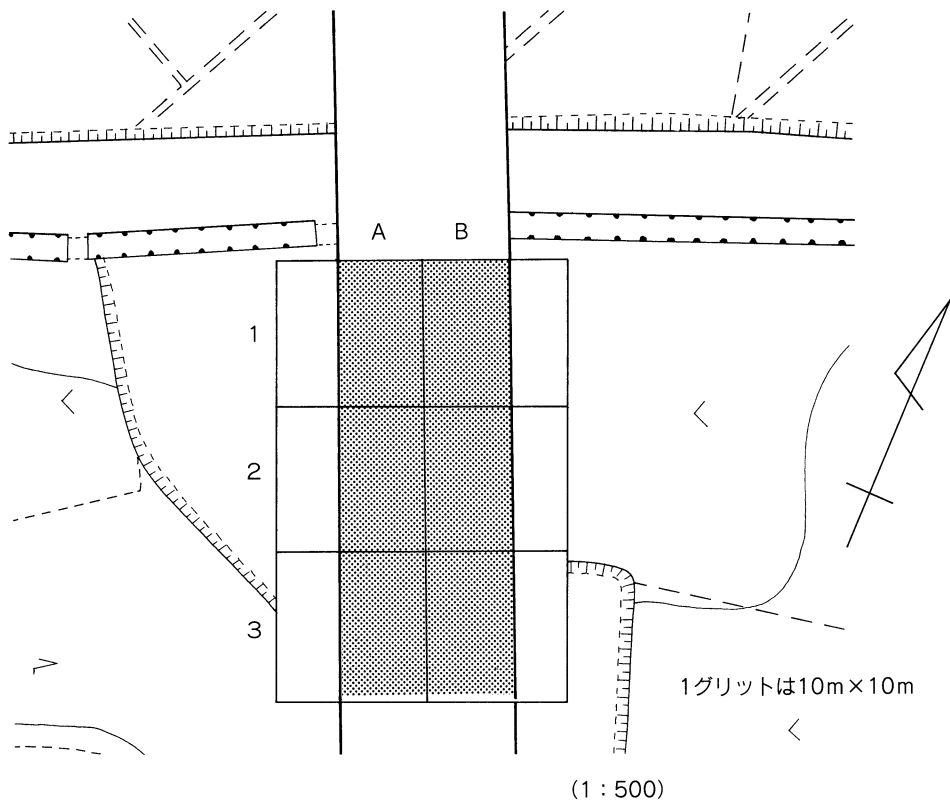
# 城 下 遺 跡

# 第1章 発掘調査の概要

## 第1節 発掘調査の方法

全面調査は、確認トレンチの結果をもとに遺跡の北端を中心に行った。全面調査区の南側に設定した3トレンチでは、中近世の遺物が少量出土したが遺構は検出されなかった。3トレンチの南側はシラス台地の末端部にあたるが、削平を受けているために遺構・遺物は検出されなかったことから、全面調査の範囲を3トレンチより以北を対象とした（第2図）。また、確認調査の結果をもとに、基本土層Ⅱ層とⅢ層を調査対象とした。Ⅲ層より下層は無遺物層である。

全面調査にあたっては、工事用の杭を基準として調査区に10m×10mのグリッドを設定し、北西隅を起点に南に向かって1～3、東に向かってA～Bとそれぞれグリッド名を付して遺物の取り上げを行った（第1図）。発掘調査は表土を重機で取り除いた後、遺物包含層を人力で掘り下げ各層ごとに遺物を取り上げた。基本土層のⅡ層とⅢ層、谷部の傾斜面に堆積した①層～⑩層から古代～近世にかけての遺物が出土した（第3図）。遺物の出土状況は、各時代の遺物が各層から混在した状態で出土した。平成10年度の確認調査で溝状遺構の可能性のある落ち込みが報告されていたので、包含層を掘り下げた後、Ⅳ層上面で遺構検出を行った。調査の結果、遺構は検出されず、自然地形の落ち込みであることが判明した。出土遺物はパンケース15箱分であった。



第1図 グリッド配置図（1/500）

## 第2節 遺跡の層位

表土を含めて5層に分層でき、II層とIII層が古代から近世にかけての遺物包含層である。II層とIII層の土質は大きな違いはなく、鉄分や軽石の量がわずかに違うだけである。IV層は遺跡後方の台地より供給されたシラスの2次堆積土でV層は砂礫層となる。基本土層は調査区の東側の平坦面にのみ観察することができ、調査区の中でも谷部に傾斜していく西側では落ち込みに沿って基本土層にはみられない粘質土が堆積している（第3図）。谷部の包含層からは、古代～近世にかけての遺物が混在した状態で出土している。

▽	▽	
I層	I層	表土（褐色砂質土）厚さ 約20 cm。
II層	II層	暗褐色粘質土 鉄分を多く含む。古代～近世の遺物包含層。
III層	III層	茶褐色粘質土 軽石を所々に含む。古代～近世の遺物包含層。
IV層	IV層	茶褐色粘質土 シラスの2次堆積土。無遺物層。
V層	V層	砂礫層 遺跡の基盤層である。
-----		

第2図 基本土層柱状模式図

## 第3節 発掘調査の成果

城下遺跡は縄文から近世にかけての複合遺跡である。遺構は検出されなかったものの、遺跡からは土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、石製品が出土した。土器は細片が多く出土量は少なく、主体となる遺物は古代から近世にかけてのものである。そのために本報告では、遺跡の主体となる古代から中世の遺物を中心に掲載した。遺物の報告については、遺物包含層から各時代の遺物が混在して出土していることから各時代ごとに行う。

### 1 古墳時代の出土遺物（第4図）

1は皿形を呈する鉢形土器である。器壁が厚く、口唇部の上面は平坦に成形されている。丁寧な作りで、内外面に指頭圧痕が多く残っている。古墳時代後期（笹貫式期）頃のものと思われる。

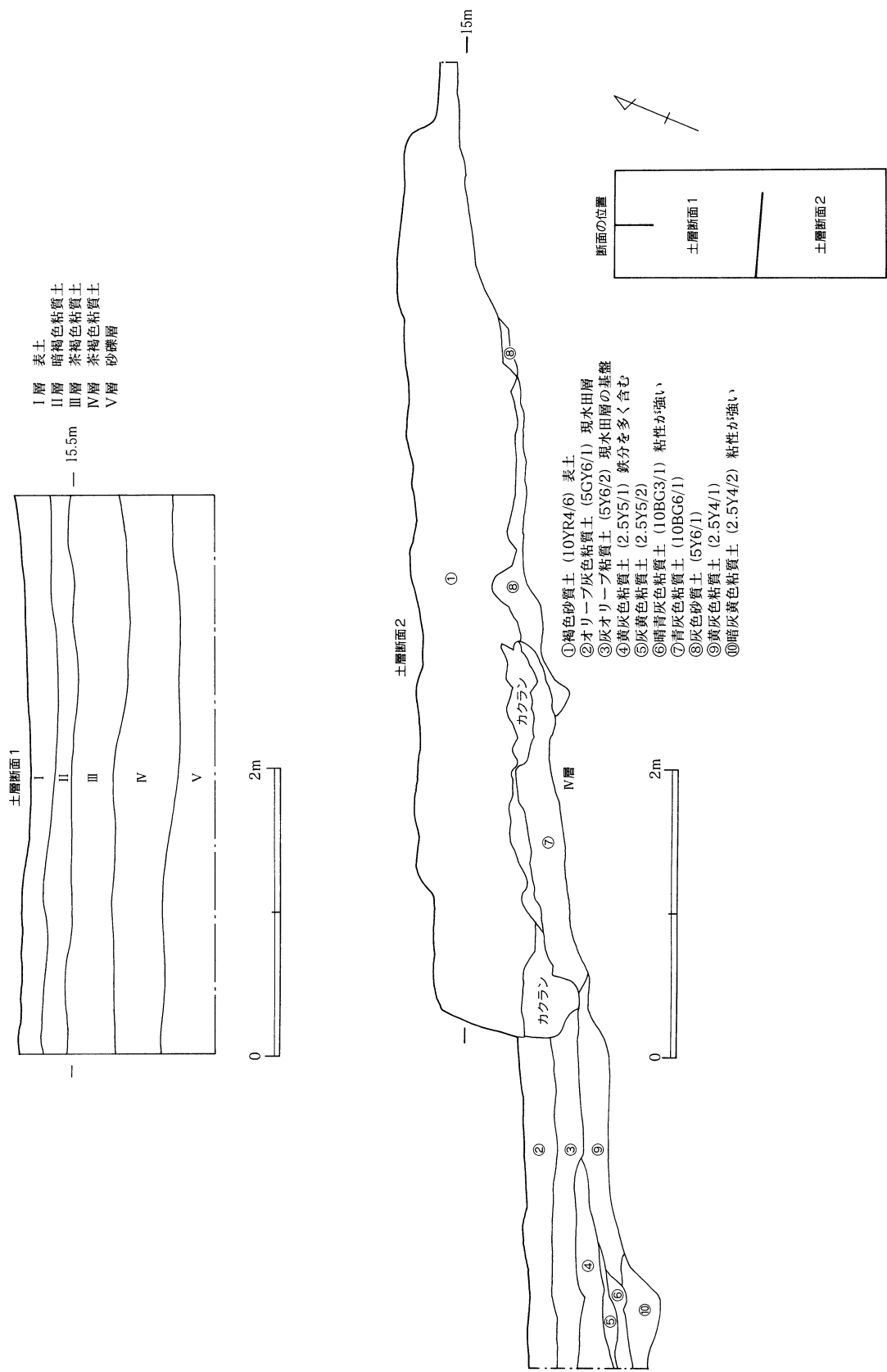
### 2 古代の出土遺物

#### (1) 土師器（第4図）

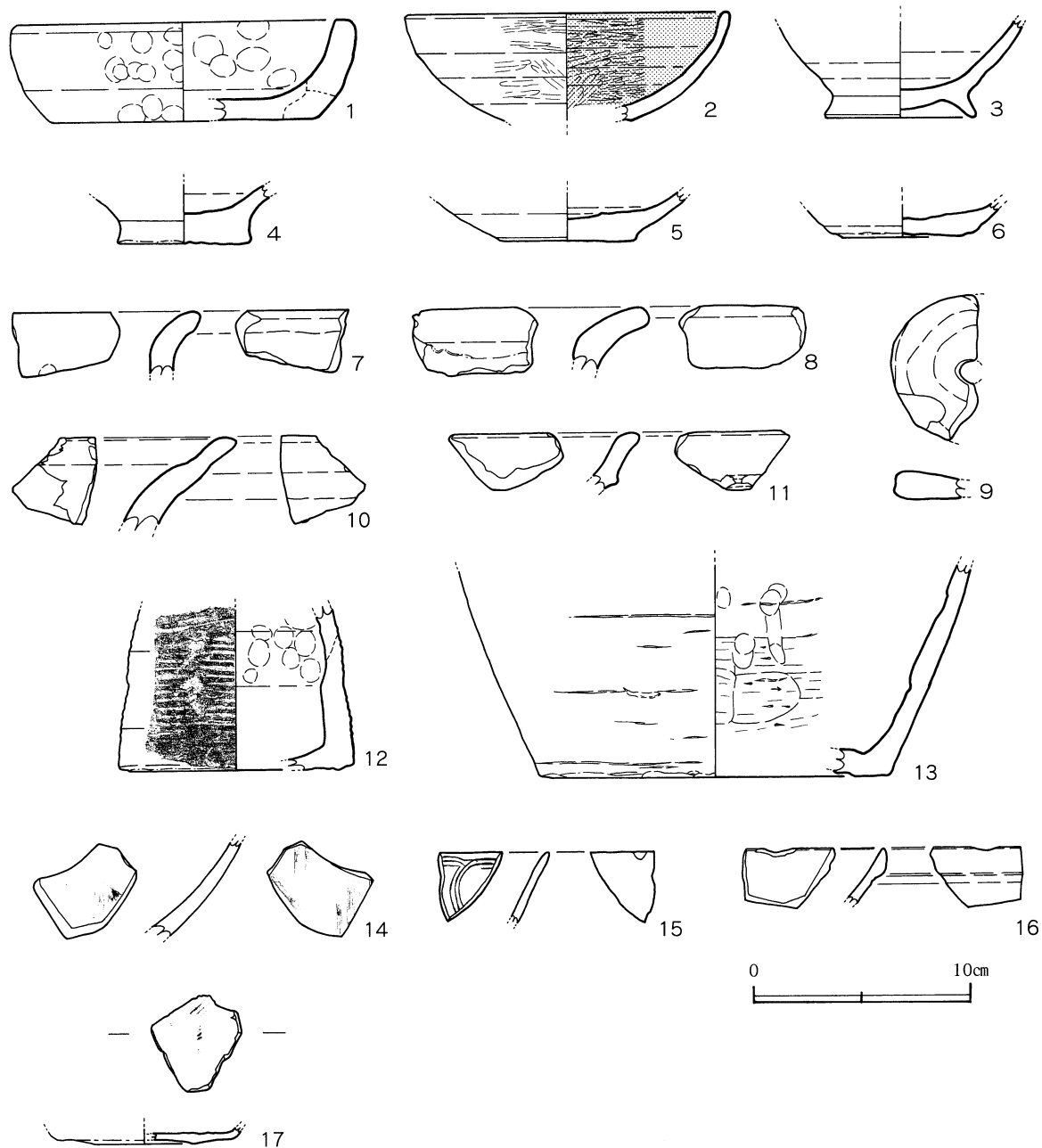
3は椀である。低く横に張り出す高台をもち、体部はわずかに丸みを帯びる。体部外面には横ナデの痕跡が明瞭に残っている。4は低い充実高台で、底部の切り離しはへら切りである。

#### (2) 黒色土器（第4図）

2は黒色土器A類である。口縁から体部中央には横方向のミガキが、体部下半には縦方向にミガキが施されている。外面は摩滅している。



第3図 土層断面図



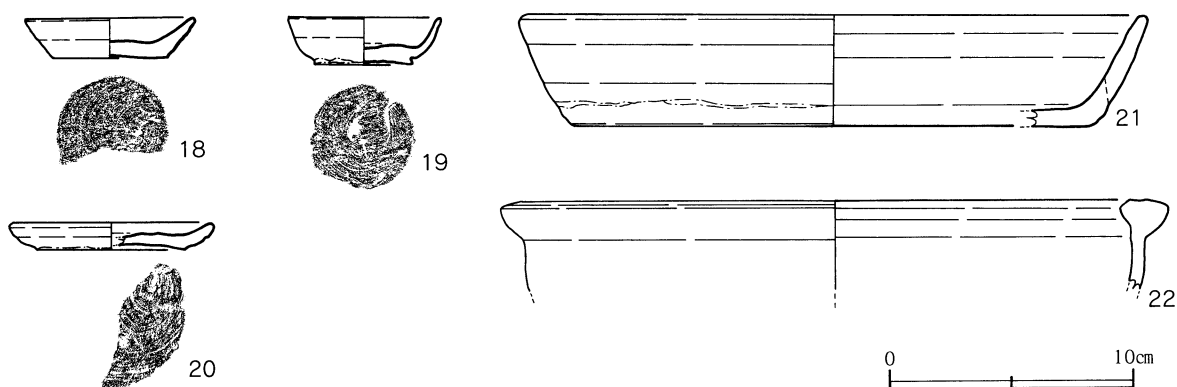
第4図 古墳時代・古代の出土遺物

5・6は坏の底部。底部の立ち上がりが不明瞭である。共に底部の切り離しはヘラ切りで、内外面に横ナデが施されている。6は底部外面に接合痕が見られる。

7・8は甕の口縁である。8の外面には煤の付着が見られる。

9は坏の底部を転用した紡錘車の紡輪である。中央にあけられた穿孔は、直径1 cm程である。全体的に摩滅が著しい。





第5図 中世の出土遺物 (1)

## (2) 須恵器(第4図)

10・11は壺の口縁部である。10は外面の口縁部と頸部の境がわずかに膨らんでいる。外面は自然釉がかかり灰色に発色している。11は二重口縁壺の口縁である。口縁端部は弱く外反し、口縁部と頸部の境に小さな断面三角形の突帯が施されている。内外面は自然釉のために灰白色を呈している。12は壺の体部である。外面は平行線状のタタキが施される。内面はナデ調整で胴部中央付近は指頭圧痕のために凹凸が著しい。

13は壺の底部である。外面は工具によって強くナデられた後、横ナデが施されている。砂粒の移動により器面が荒れ、所々に接合痕がみられる。内面は横方向のケズリの後に縦方向にナデ調整が施されている。ケズリの痕跡は底部に近いほど残りがよく、幅2cmの間隔で接合痕がみられる。

## (3) 磁器(第4図)

磁器の分類については、大宰府分類を参考にしてしている。14は同安窯系青磁碗である。外面は縦方向の粗い櫛目文が、内面には櫛状の工具によって細かい櫛目文が施されている。15は龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、内面に劃花文が施されている。16は白磁碗である。口縁部の断面形は間延びした三角形状である。17は同安窯系青磁の皿である。底部は浅い上げ底で、体部下半以下は施釉されていない。見込みにはへら描き文と櫛点描文が施されている。

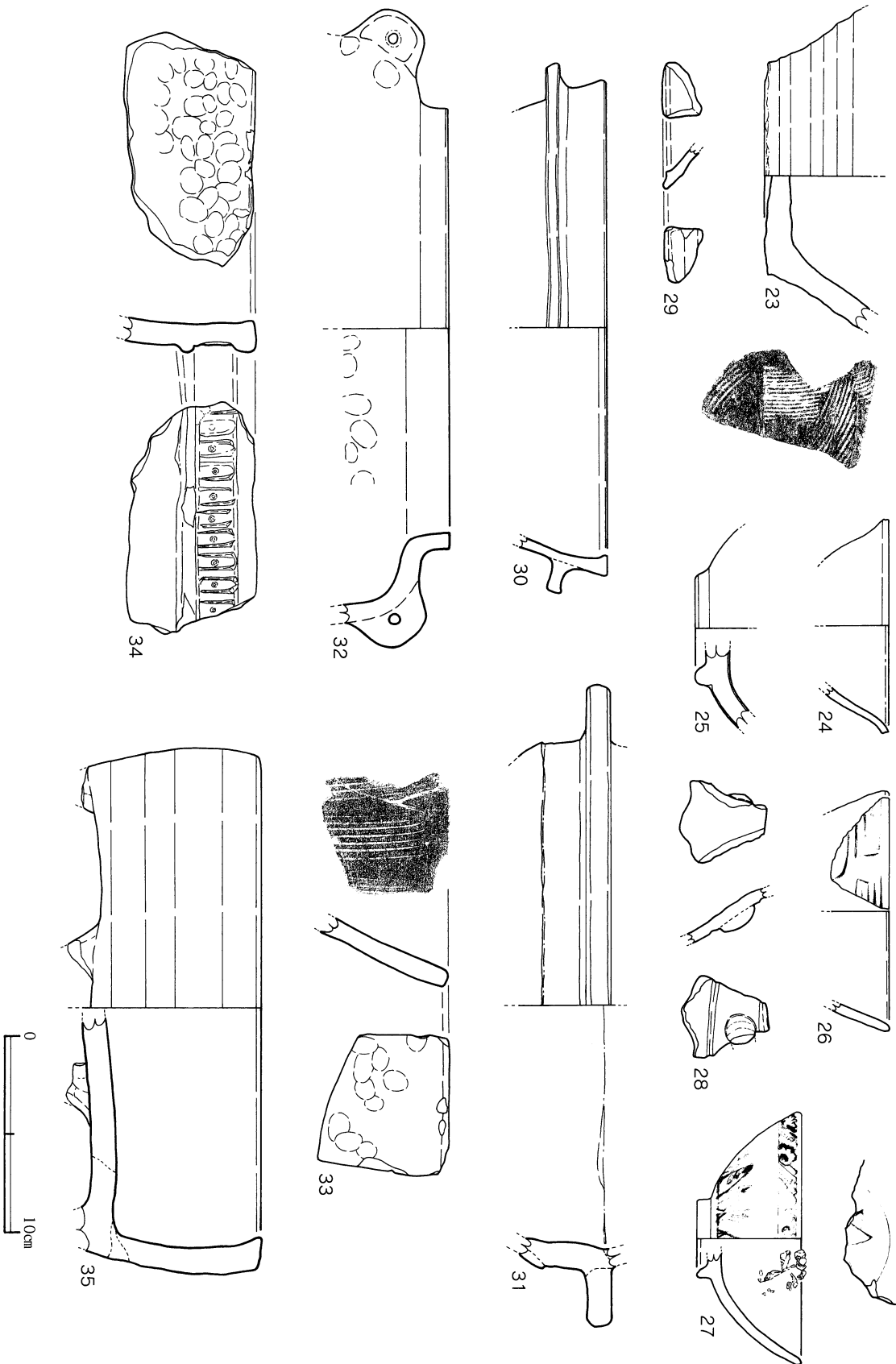
## 3 中世の出土遺物

### (1) 土師器 (第5図)

18～21は糸切り底の皿である。18は内外面にナデ調整が施される。推定口径7cm、器高1.6cm。19の体部下半には糸切り痕が残っていることから体部をつくった後、円盤状の粘土を貼り付け底部をつくっている。20は器高が1.1cmと低く、底部は浅い上げ底である。21は推定口径が25.5cmの大型の皿である。体部下半には接合痕が残っている。底部の糸切り痕は丁寧にナデ消されている。

### (2) 陶磁器 (第5・6図)

22は中国産陶器の鉢である。口縁部内面はナデのために浅く窪んでいる。全体的に丁寧な



第6図 中世の出土遺物(2)

作りである。23は備前焼の搦鉢である。内面は胴部と底部にかき目が見られ、全面に渡って研磨されている。

24は口禿の白磁碗である。推定口径10.8cm。25・26は龍泉窯系青磁碗である。25の高台は器壁が厚くしっかりとした作りで、体部には連弁文がみられる。内外面の体部から高台にかけて施釉されている。26は口縁部に雷文帯が、胴部には簡略化した連弁文が施されている。27は中国産の染付碗である。口縁部には波濤文、体部には芭蕉葉文がみられ、見込みには連花文が施されている。2次焼成を受けているために器面全体が荒れており、口縁部内面には溶けた釉が付着している。28は四耳壺の肩部と思われる。把手は横方向に付いており、その上下に1条のヘラ描沈線文が残っている。全体的に丁寧な作りで、内外面は施釉のために灰オリーブ色を呈している。29は瀬戸焼の蓋と思われる。口縁内面は小さく突出している。緻密な胎土を使用し、内面から口唇部の外面にかけて施釉されている。

### (3) 瓦質土器 (第6図)

30・31は羽釜である。30は口縁内面が小さく突出し、器壁が薄く丁寧な作りである。羽は上胴部に下向きについている。口縁部から胴部にかけては赤橙色を呈しているが、羽以下は褐灰色である。31は胴部中央に水平に羽がつき、破片の下部に残っている接合痕を境に器壁が薄くなる。胴部外面と羽の一部が黒色を呈している。32は湯釜である。口縁部は短く直立し、胴部は丸みを帯びて膨らむ。肩部の把手には、直径6mmの穿孔が施されている。

33は搦鉢の口縁部である。内面は全体的に研磨されていて、かき目がみられる。外面には多くの指頭圧痕が残っている。34・35は火鉢である。34は口縁部と上胴部の突帯の間に、縦方向の沈線文と竹管文が施されている。内面には指頭圧痕が多く残る。35は底部の端に4箇所短い脚がつくと推定される。体部は垂直に立ち上がり、口縁部の内面は小さく突出している。

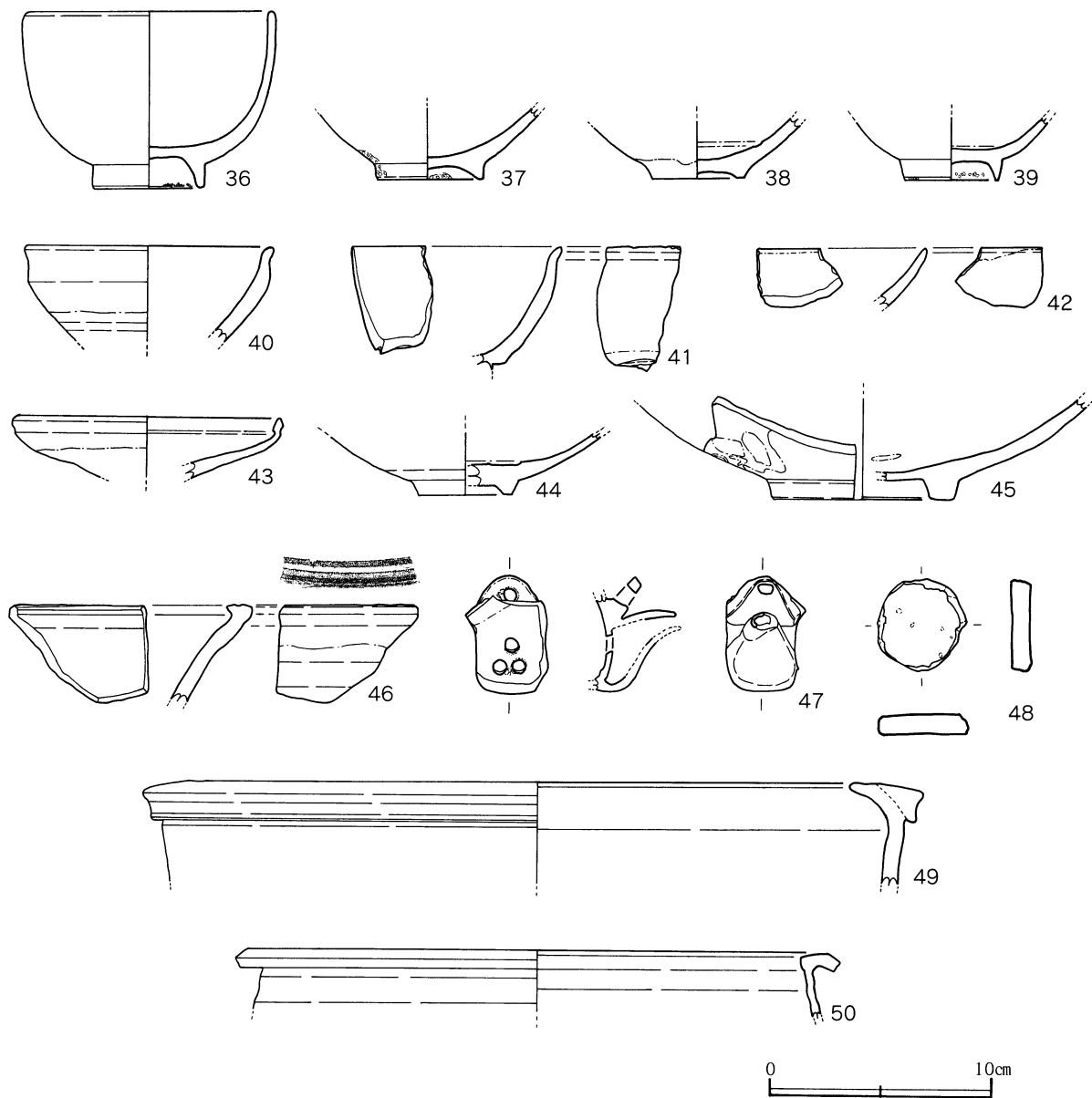
## 4 近世の出土遺物

### (4) 陶器 (第7図)

36～41は碗である。36は推定口径11.3cm、器高7.9cmである。全体に透明釉がかかり、浅黄色を呈している。高台の内面には砂粒が付着している。37・38は肥前系の碗である。37は高台の内面から畳付にかけて砂粒が付着している。38は体部内面に重ね焼きの痕跡が残っている。体部内面から、外面の体部下半にかけて灰オリーブ色の釉がかかっている。39は内外面に巻刷毛目が施されている。高台の内面には砂粒が付着している。40・41は天目茶碗である。両方とも口縁部が弱く外反し、内面から体部下半にかけて鉄釉がかかっている。丁寧な作りである。

42は唐津産の皮鯨の皿である。口唇部は鉄釉がかかるために暗赤褐色を呈する。43は杯と思われる。口縁部は短く直立し、内面に1条の浅い沈線が施されている。44・45は鉢である。44は内野山窯産で内面は銅緑釉がかかり、蛇の目釉剥ぎが施されている。45は見込みに目跡が2か所残っている。

46は盤である。口縁部は内側へ突出し、口縁部上面に2条の浅い沈線が施されている。口縁外面にはにぶい赤褐色の釉がかかっている。



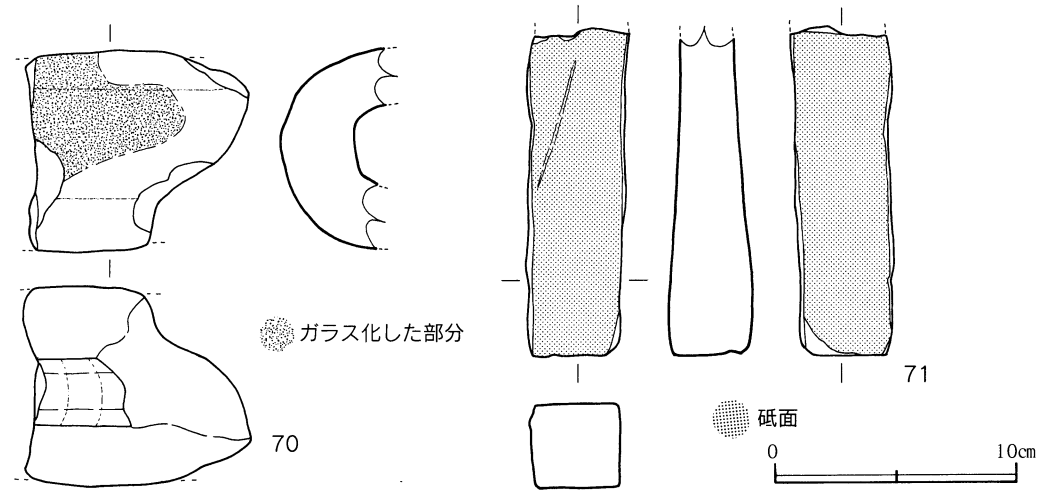
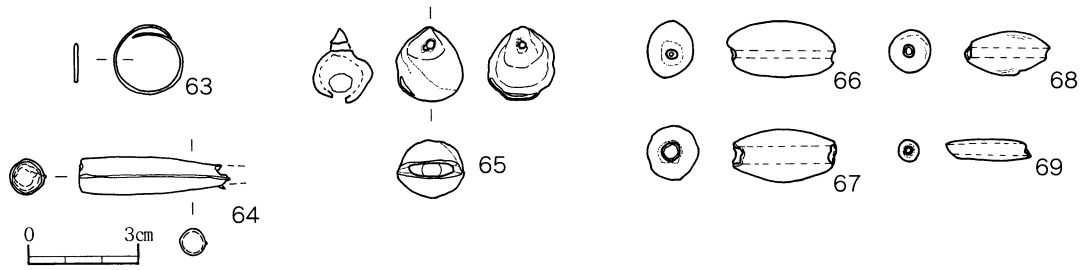
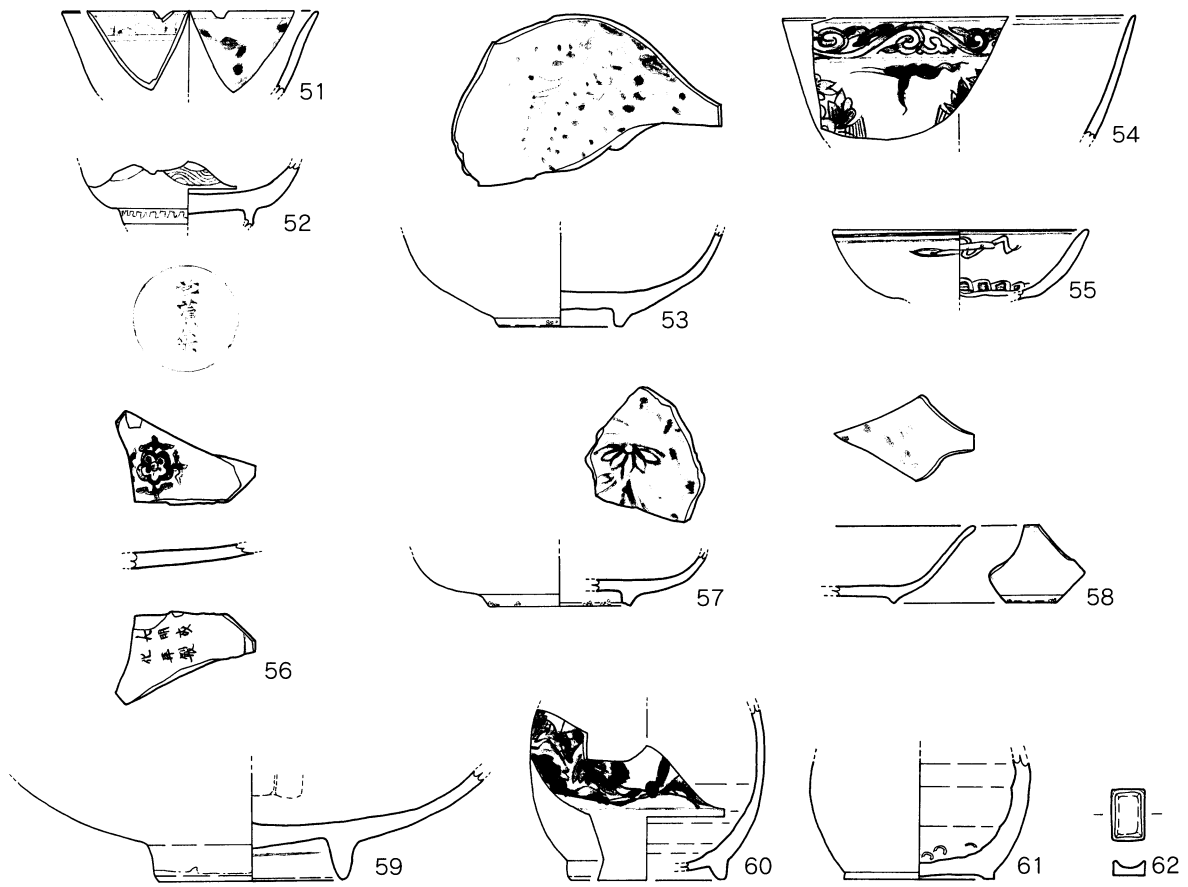
第7図 近世の出土遺物 (1)

47～50は薩摩焼である。47は急須の注口である。48の円盤状土製品は周辺を丁寧に打ち欠いてつくっている。49は半胴甕である。丁寧な作りで、口縁部上面には貝目が残っている。50の甕は口縁が逆L字状で、胴部の器壁は2mmと薄い。

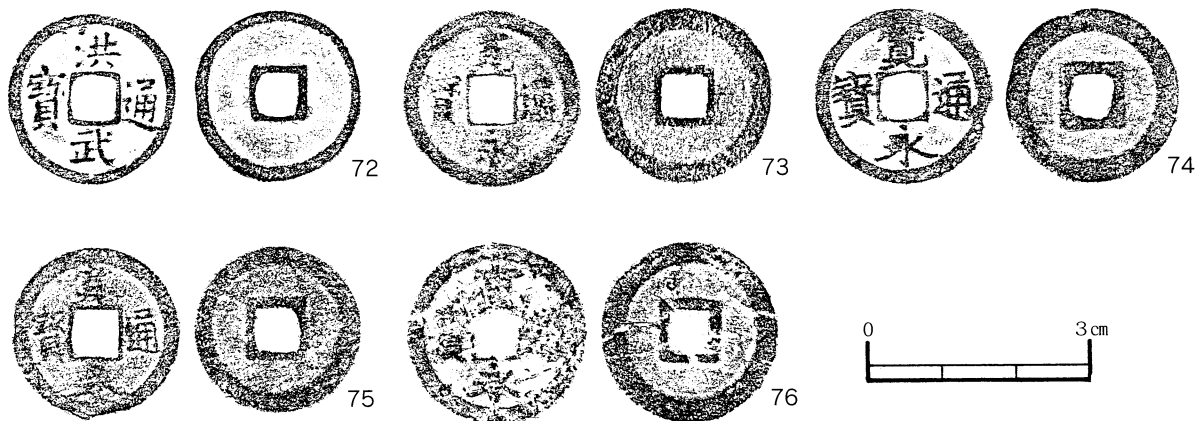
(5) 磁器 (第8図)

51は在地産の端反り椀である。口縁内面の文様は四方禪文と思われる。

52・53肥前系の鉢である。52は高台の内面に「芭蕉製」の銘がみられる。佐賀県楠木谷1号窯に出土例がある。53は見込みに植物の文様が描かれている。底部には少量の砂粒が付着している。54は景德鎮系の鉢である。口縁部には唐草文が施されている。



第8図 近世の出土遺物 (2)



第9図 出土古銭

55～57は肥前系の皿である。55の見込みには花文と思われる文様がみられる。56は見込みに花文が、外面には「大明成化年製」の銘が残っている。57の内面には花文が描かれ、畳付には砂粒が付着している。58は中国産の皿である。59は盤と思われる。全体的に明緑色を呈し内面には文様がみられる。精良な胎土を使用している。

60は肥前系の袋物である。内面には横ナデの痕跡が明瞭に残っている。61の袋物は底部が小さな高台を呈する。外面には透明釉がかかり、明褐色を呈しているが、剥落して胎土が露出している部分もある。内面には横ナデの痕跡や工具痕が残っている。焼成不良の近世磁器と思われるが、時期が古くなる可能性も考えられる。

62は方形の小容器である。

#### (6) 金属製品 (第8図)

63は厚さ1mm、幅1.1cmの銅板を円形に曲げたもの。64は青銅製の煙管である。吸口部には竹製の吸管片も残っている。

#### (7) 土製品・石製品 (第8図)

65は土製の鈴である。上部のつまみ部には直径4mmの穿孔が施され、鈴の中には直径約8mmの土製の小玉が入っている。

66～69は土錘である。平面形は紡錘形を呈し、幅、長さ様々なものがある。3mm～9mmの穿孔が施されている。

70は土製の羽口である。外面は部分的にガラス化し黒色を呈している。推定内径3.1cm。

71は砥石である。正面、裏面共に研磨されているために中央に向かって器壁が薄くなる。天草産の石材を使用していると思われる。

### (8) 古銭 (第9図)

総数5枚の古銭が出土した。遺存状態が良く、銭文がはっきりと観察できる。72は洪武通寶、73~76は寛永通寶である。全て背文は無文である。

第1表 出土古銭観察表

挿図 番号	遺物 番号	銭貨名	径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	背文字
9	72	洪武通寶	2.3	0.16	0.6	2.4	なし
9	73	寛永通寶	2.4	0.11	0.6	2.5	なし
9	74	寛永通寶	2.4	0.14	0.5	2.7	なし
9	75	寛永通寶	2.3	0.1	0.6	2.3	なし
9	76	寛永通寶	2.5	0.13	0.6	2.5	なし

第2表 出土遺物観察表

( )は復元径

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区	色調	調整・文様		法量 (cm)			胎土	焼成	備考
						外面	内面	口径	底径	器高			
5	1	土器	鉢	A-3	灰白色2.5Y7/1	ナデ	横ナデ	(15.8)		4.4	石英、角閃石を多く含む	良好	
5	2	土師器	椀	A-2	外:浅黄褐色 10YR8/3 内:黒色10YR7/1	ミガキ	ミガキ	(14.8)			砂粒を含まない精製された胎土	良好	
5	3	土師器	椀	A-1	内外:灰白色 2.5Y8/	横ナデ	横ナデ		6.9		1~2mm大の角閃石を多く含む	良好	
5	4	土師器	椀	A-1	外:灰白色2Y7/1 内:灰白色10YR8/3	横ナデ	横ナデ		6.2		砂粒を含まない精製された胎土	良好	
5	5	土師器	坏	A-1	外:黒褐色 10YR3/1 内:灰白色10YR8/2	横ナデ	横ナデ		(6.2)		砂粒を含まない精製された胎土	良好	
5	6	土師器	坏	A-3	内外:浅黄色 2.5Y7/3	横ナデ	横ナデ		(6.8)		石英、角閃石の粒子を多く含む	良好	
5	7	土師器	甕	A-2	内外:黄褐色 10YR5/6	横ナデ	横ナデ				1mm大の砂粒を含む	良好	
5	8	土師器	甕	A-2	内外:黄褐色 10YR6/2	横ナデ	横ナデ				所々に2mm大~4mm大の石英、小石を含む	良好	
5	9	土師器	紡錘車	A-3	内外:灰黄褐色 10YR6/2	摩滅	摩滅	直径 (6.8)			砂粒を含まない精製された胎土	良好	
5	10	須恵器	甕	表土	内外:灰色 10Y4/1	回転横ナデ	回転横ナデ				精製された胎土	良好	
5	11	須恵器	壺	A-3	内外:灰白色N7/	横ナデ	横ナデ				2, 3mmの小石を少量含む	良好	
5	12	須恵器	壺	B-3	外:灰黄褐色 10YR5/2 内:黄灰色 2.5Y5/1	平行タタキ	横ナデ		(10.6)		砂粒を含まない精製された胎土	良好	
5	13	須恵器	壺	A-3	内外:灰色色N5/	擦過後ナデ	ケズリ後ナデ	(16)			1~2mm大の長石を所々に含む	良好	

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
						外面	内面	口径	底径	器高			
5	14	青磁	碗	A-1	内外:灰オリーブ 色10Y5/2	内外面 櫛目文					灰白色精良	精良	同安窯系 大宰府分類Ⅲ-I 類(12c中～後)
5	15	青磁	碗	A-2	内外:灰オリーブ 色7.5Y5/2		劃花文				灰白色精良	精良	龍泉窯系 大宰府分類Ⅰ- Ⅳ類(12c中～後)
5	16	白磁	碗	A-3	内外:明オリーブ 灰色2.5GY7/1						灰白色良	精良	大宰府分類Ⅳ類 (11c後～12c後)
5	17	青磁	皿	A-1	釉薬部分:緑灰色 10GY6/1 露胎部分:暗灰色 2.5Y5/2	横ナデ	ヘラ描 き文櫛 点描分		(4.4)		灰白色精良	良好	同安窯系 大宰府分類Ⅲ-I 類
6	18	土師器	皿	B-3		横ナデ	横ナデ		(4.6)	1.6	精製された胎 土	良好	
6	19	土師器	皿	A-1	内外:浅黄色 2.5Y7/3	横ナデ	横ナデ	(6.3)		1.9	精製された胎 土	良好	
6	20	土師器	皿	A-2	内外:にぶい黄橙 色10YR7/4	横ナデ	横ナデ	(8.4)		1.1	1mm大の砂粒を 少量含む	良好	
6	21	土師器	皿	A-3	内外:淡黄色 2.5Y8/3	横ナデ	横ナデ	(25.5)	(21)	4.6	精製された胎 土、ごく細かな 砂粒が少量含 まれている	良好	
6	22	陶器	鉢	A-3	内外:にぶい黄橙 10YR6/3	回転横 ナデ	回転横 ナデ	(27)			1mm大の砂粒を 少量含む	良好	中国産
7	23	陶器	播鉢	A-3	外:赤色10R5/6 内:赤褐色10R 4/3	横ナデ			(10.8)	4.9	1mm大の砂粒を 多く含む	良好	備前焼
7	24	白磁	碗	3T	内外:灰白色 7. 5Y7/1			(10.8)		4.9	白色精良	精良	大宰府編年Ⅳ類 (13c中～14c前)
7	25	青磁	碗	A-3	内外:灰オリーブ 7.5Y5/3				(5)		灰色良	精良	龍泉窯系大宰府 編年Ⅱ類(13c前 ～14c代)
7	26	青磁	碗	A-1	内外:灰白色 7.5Y8/1	口縁:雷文帯 胴部:連弁文		(6)			灰白色精良	精良	龍泉窯系上田分 類(14c後半)類
7	27	陶磁器	染付碗	B-3		口縁:波濤文 体部:芭蕉葉文 見込み:連花文		(12.4)			白色良	精良	2次焼成を受けて いる。小野分類 染付碗c群(16c後 ～17c中)
7	28	陶器	壺	A-2	内外:灰オリーブ 7.5Y6/2	横ナデ	横ナデ				灰色良	良好	把手有
7	29	陶器	蓋	A-2	内外:オリーブ黄 色7.5Y6/3	回転横 ナデ					灰白色良	良好	瀬戸焼
7	30	瓦質土 器	羽釜	A-3	内外:淡赤橙 2.5YR7/4	回転横 ナデ	回転横 ナデ	24.8			1mm大の砂粒を 含む	良好	
7	31	瓦質土 器	羽釜	A-1	内外:浅黄色 2.5Y7/3	回転横 ナデ	回転横 ナデ	胴部径 (26.6)			1mm大の石英、 角閃石を所々に 含む	良好	
7	32	瓦質土 器	湯釜	A-3	内外:灰色5Y7/1	回転横 ナデ	回転横 ナデ	22.3			所々に1～2mm 大の砂粒を含む	良好	
7	33	瓦質土 器	すり鉢	A-3	内外:浅黄色 2.5Y7/3	ナデ	ナデ				1mm以下の長 石、石英を多く 含む	良好	
7	34	瓦質土 器	火鉢	B-3	外:灰黄褐色 10YR4/2 内:褐色 10YR6/1	ナデ	ナデ				砂粒を含まない 胎土	良好	
7	35	瓦質土 器	火鉢	A-3	内外:にぶい黄橙 色10YR7/2	横ナデ	横ナデ	(25.8)		8.8	1mm以下の砂 粒を多く含む	良好	
8	36	陶器	碗	A-2				(11.3)	(5.2)		灰白色精良	良好	
8	37	陶器	碗	表土					(4.6)		灰白色精良	良好	備前系 17c～18c
8	38	陶器	碗	A-2					4.2		にぶい黄色良	良好	備前系
8	39	陶器	碗	A-3		巻刷目		(4.2)			浅黄色良	良好	



挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	出土区	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
						外面	内面	口径	底径	器高			
8	40	陶器	碗	表土		体部下 半削り		(11.2)			灰白色良	良好	鉄釉
8	41	陶器	碗	A-1							灰白色良	良好	鉄釉
8	42	陶器	皿	B-3							灰白色良	良好	唐津産 口縁に鉄釉
8	43	陶器	杯	A-2		回転横 ナデ		(12.2)			灰色良	良好	
8	44	陶器	鉢	表土			銅緑釉 蛇の目 釉剥ぎ		(4.2)		灰白色良	良好	内野山窯産
8	45	陶器	鉢	A-3		回転横 ナデ			(8.2)		灰褐色良	良好	
8	46	陶器	鉢	B-2		回転横 ナデ					にぶい赤褐色 良	良好	
8	47	陶器	急須	3T			回転横 ナデ				赤褐色良	良好	
8	48	陶器	マンコ	3T				幅4 厚さ0.8 長さ3.9			褐灰色粗	良好	
8	49	陶器	甕	A-3		回転横 ナデ	回転横 ナデ	(34.4)			にぶい赤褐色 粗	良好	
8	50	陶器	甕	A-1		回転横 ナデ	回転横 ナデ	(27)			褐灰色良	良好	
9	51	磁器	碗	B-3			四方繡 文	(10.64)			灰白色精良	精良	19c前半
9	52	磁器	鉢	表土					(5.4)		灰白色精良	良好	「芭蕉製」の銘有
9	53	磁器	鉢	表土			植物文	(5.2)			灰白色精良	良好	
9	54	磁器	鉢	A-3			唐草文	(14.8)			灰白色精良	良好	16c後半～17c前 半
9	55	磁器	皿	A-1			花文	(10.6)			灰白色良	良好	16c後半～18c前 半
9	56	磁器	皿	A-2							灰白色精良	良好	「大明成化年製」 の銘有
9	57	磁器	皿	A-1			花文		(5.8)		灰白色良	良好	17c後半
9	58	磁器	皿	A-1						3.15	灰白色精良	良好	
9	59	青磁	盤	A-1	内外:明緑灰色 10GY8/1	回転横 ナデ	回転横 ナデ		(7.6)		灰白色精良	良好	
9	60	磁器	袋物	B-2			回転横 ナデ		(6.4)		灰白色精良	良好	
9	61	磁器	袋物	A-1	外:明褐色 7.5YR5/6		横ナデ		(6.2)		灰白色良	良好	
9	62	磁器	小容 器	3tr				幅1.3 長さ2.1 高さ0.5			灰白色精良	良好	
9	63	銅製品	不明	A-2				幅1.2 縦1.9 横1.9 重さ4.6g					
9	64	銅製品	煙管	A-2				幅0.95 長さ4.1 重さ4.9g					竹製の吸管部が 残る。
9	65	土製品	土鈴	6T	内外:浅黄橙 7.5YR8/3			長さ3 厚み2.3 重さ9g			細かい砂粒を 含む	良好	
9	66	土製品	土錘	A-1	内外:灰色5Y4/1 粗	摩滅	摩滅	長さ4.35 厚み1.8 重さ16.4g			角閃石の粒子 を多く含む	良好	
9	67	土製品	土錘	A-3	内外:橙色 2.5YR6/8粗	摩滅	摩滅	長さ4.1 厚み2.1 重さ14.5g			細かい砂粒が みられる精製さ れた胎土	良好	
9	68	土製品	土錘		内外:灰白色 10YR8/2			長さ3.45 厚み1.8 重さ8g			細かい砂粒が 少量混ざる, 精 製された胎土	良好	
9	69	土製品	土錘	A-3	内外:にぶい橙 5YR6/3	摩滅	摩滅	長さ3.25厚み1.0重さ1.9g			砂粒を含まな い精製された 胎土	良好	
9	70	土製品	羽口	B-3	外:灰色2.5Y7/1 内:にぶい橙色 7.5YR7/4		ナデ	内径(3.1)			1mm大の砂粒が 多く見られる	良好	外面の一部がガ ラス化
9	71	石製品	砥石	A-3				幅4.1 長さ13.4 厚さ3.3 重さ300g					天草石の可能性

## 第2章 遺跡の残存状況

全面調査区は谷への落ち際にあたるために、遺構は検出されなかった。しかし、古墳時代～近世にかけての遺物が出土したことから調査区の東側に遺跡が広がることが予想される（第10図）。特に古代～中世においては、遺跡後方の台地上に上野城跡、善応寺跡が残っていることから注意が必要である。今後も周辺に広がる遺跡の保護に努めながら開発との調整を計っていく必要がある。



第10図 遺跡の残存範囲（1/2500）

## 第3章 発掘調査のまとめ

城下遺跡は古墳時代から近世にかけての複合遺跡である。谷の縁辺部にあたるために、遺構は検出されなかったが、古代から近世を中心とする遺物が出土した。これらの遺物は、全面調査区の東側及び背後の権現原台地から供給されたと考えられる。出土した古代の土師器、須恵器は9世紀後半～10世紀頃のものと考えられる。龍泉窯系、同安窯系の青磁碗・皿は12世紀中頃から後半頃のものであり、白磁も同時期のものであると考えられる。

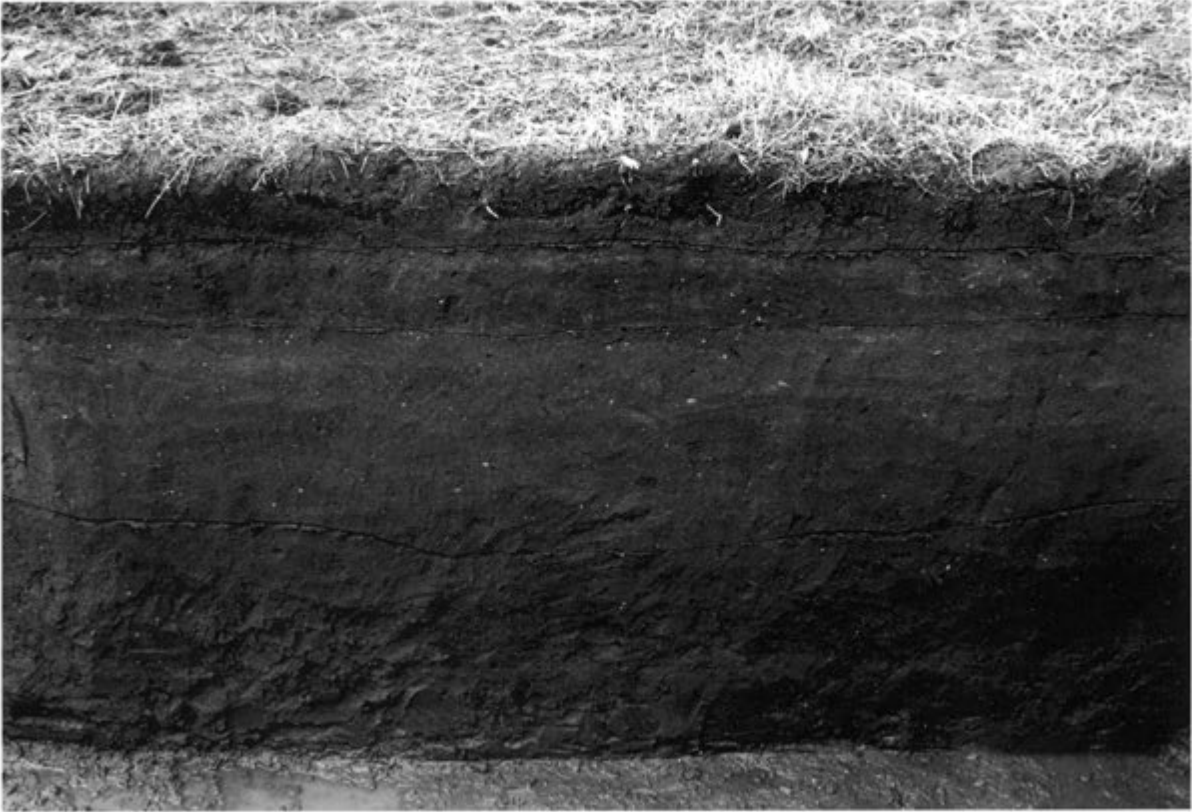
中世の青磁、磁器については連弁文や雷文帯の施された青磁、芭蕉文をもつ磁器が出土することから13世紀～16世紀頃と考えられる。出土している羽釜や湯釜、甕、火鉢などは中世後半頃に属すると思われる。古代から中世にかけては、城下の字名に現れているように、遺跡後方の台地上に所在する上野城跡や善応寺跡との関係が注目される。

近世陶磁器の主体を占めるのは、肥前系で、在地産の平佐焼と思われるものは1点のみの出土である。遺物の所属年代は16世紀後半～17世紀頃が中心である。金属製品や土錘、土製品、羽口はその形態から近世に属すると思われる。

これまで隈之城平野周辺で見つかった遺跡は台地上の立地するものがほとんどであった。城下遺跡の調査で、台地と平野の境に広がる遺跡の存在が明らかとなった。城下遺跡では古代以降の遺物が主体を占めている。川内平野における条里制の導入は隈之城平野を起点に始まったことが指摘されており、このような歴史的な背景との関係が注目される。楠元遺跡の調査成果を含めて川内平野における遺跡の広がりを再考する時期にきている。

図

版



土層断面図



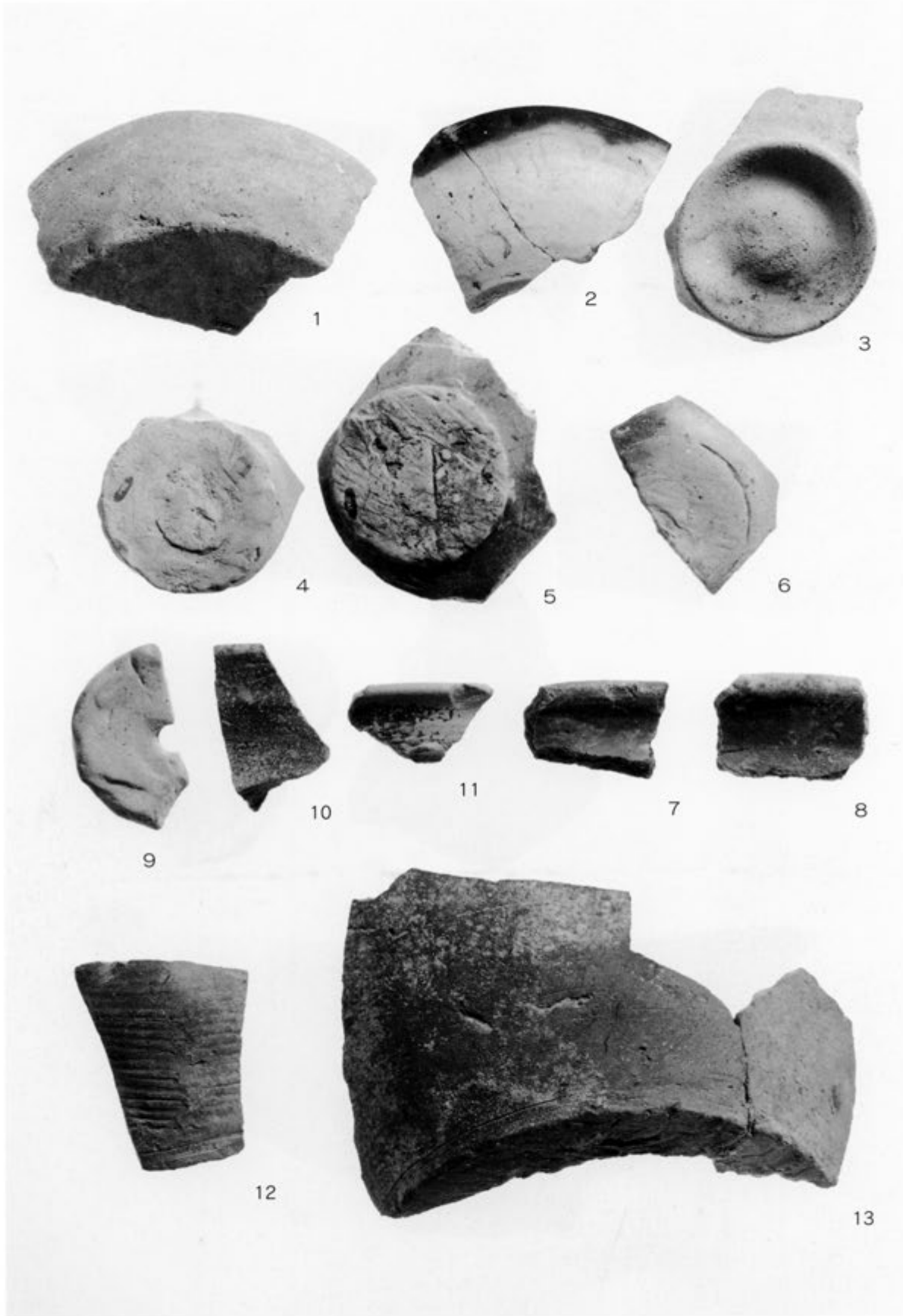
3 トレンチ遺物出土状況



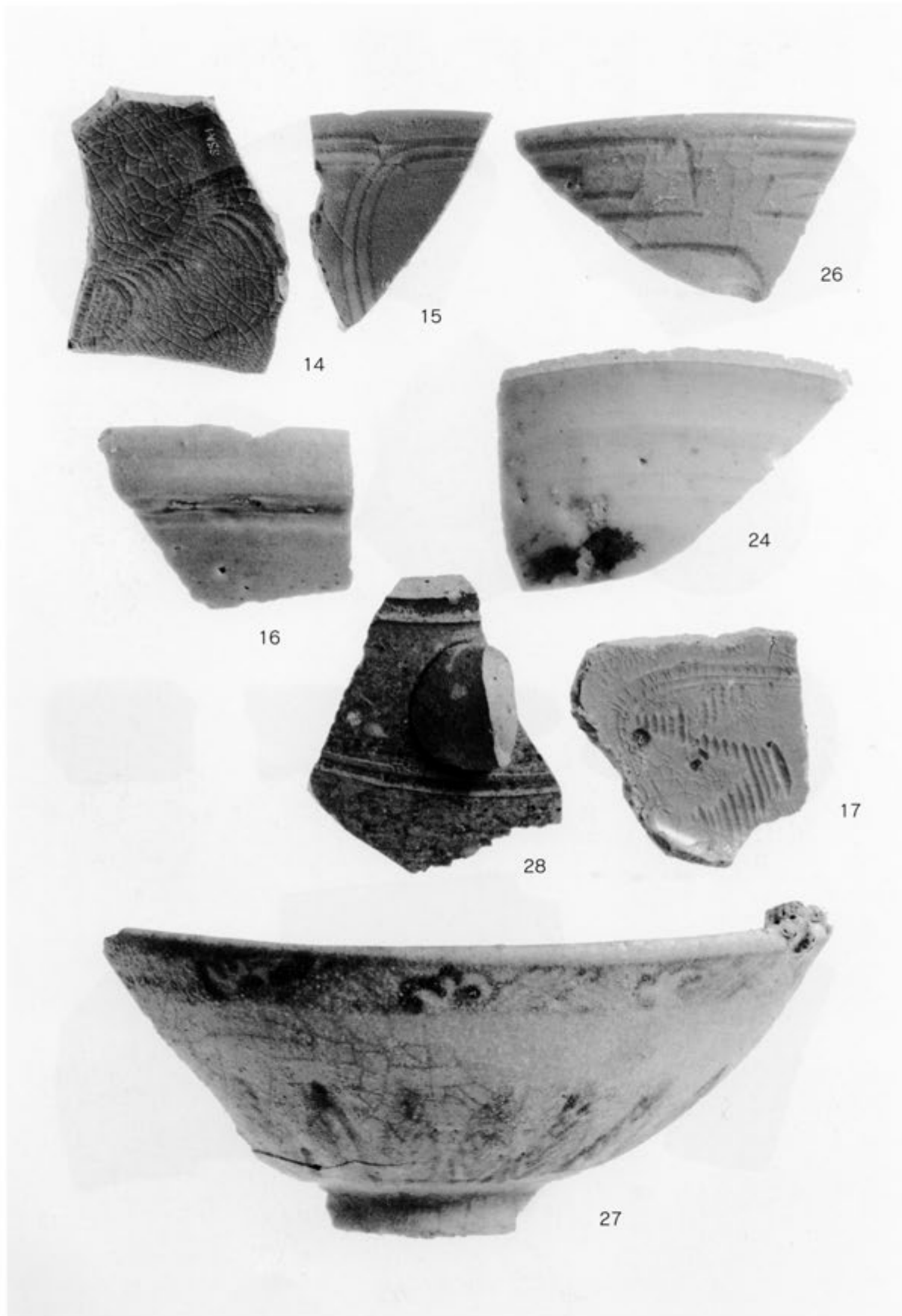
遺物出土状況



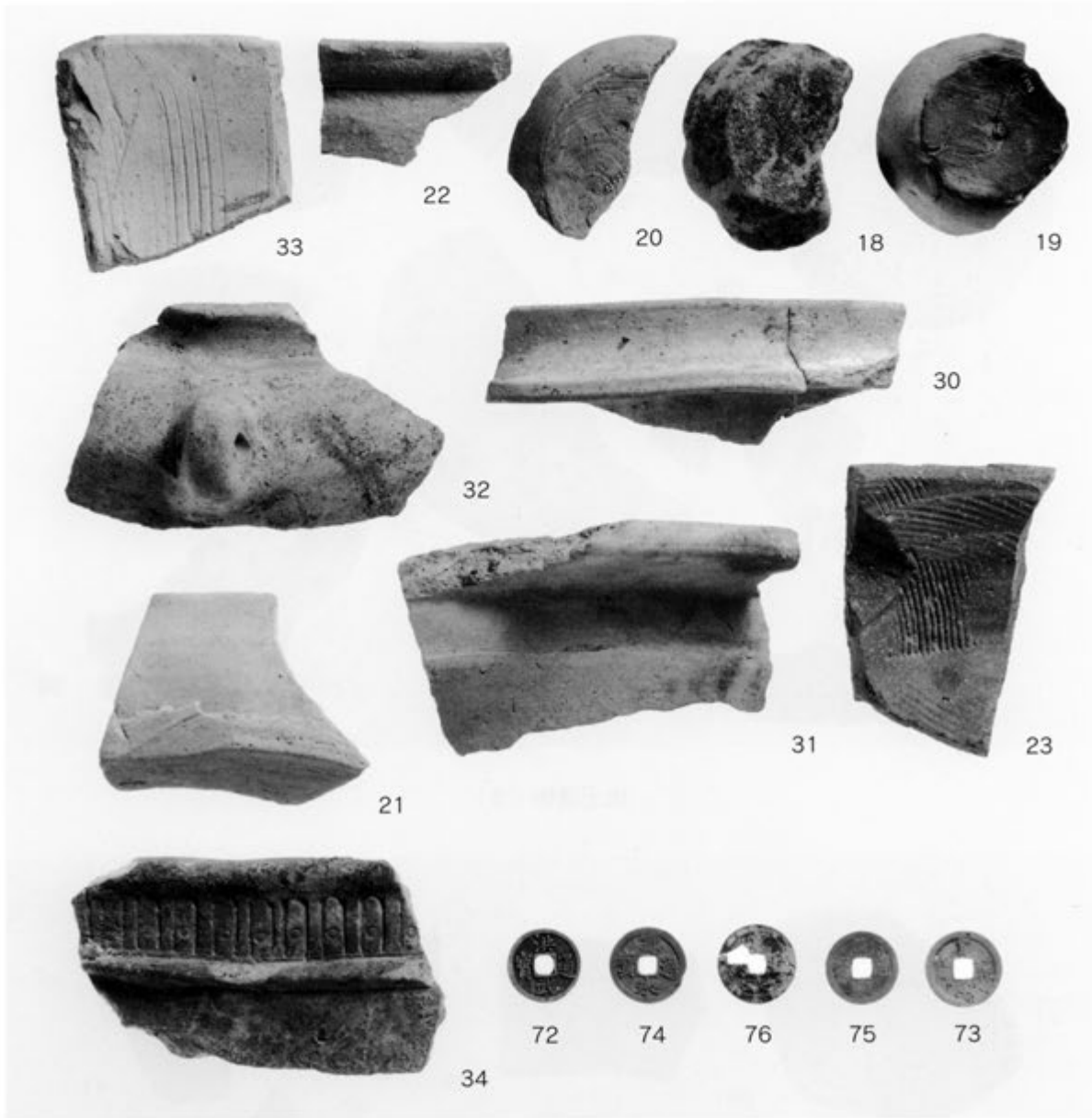
作業状況



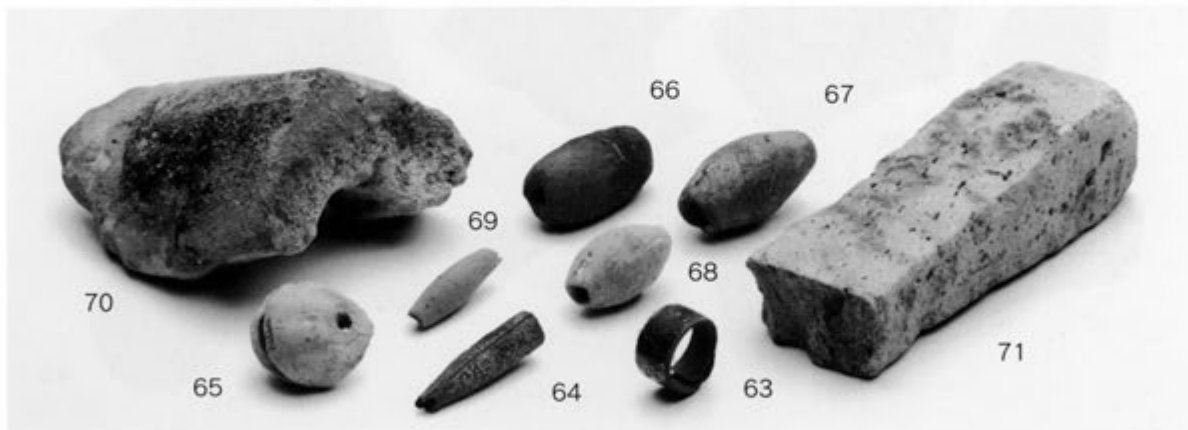
出土遺物 (1)



出土遺物 (2)

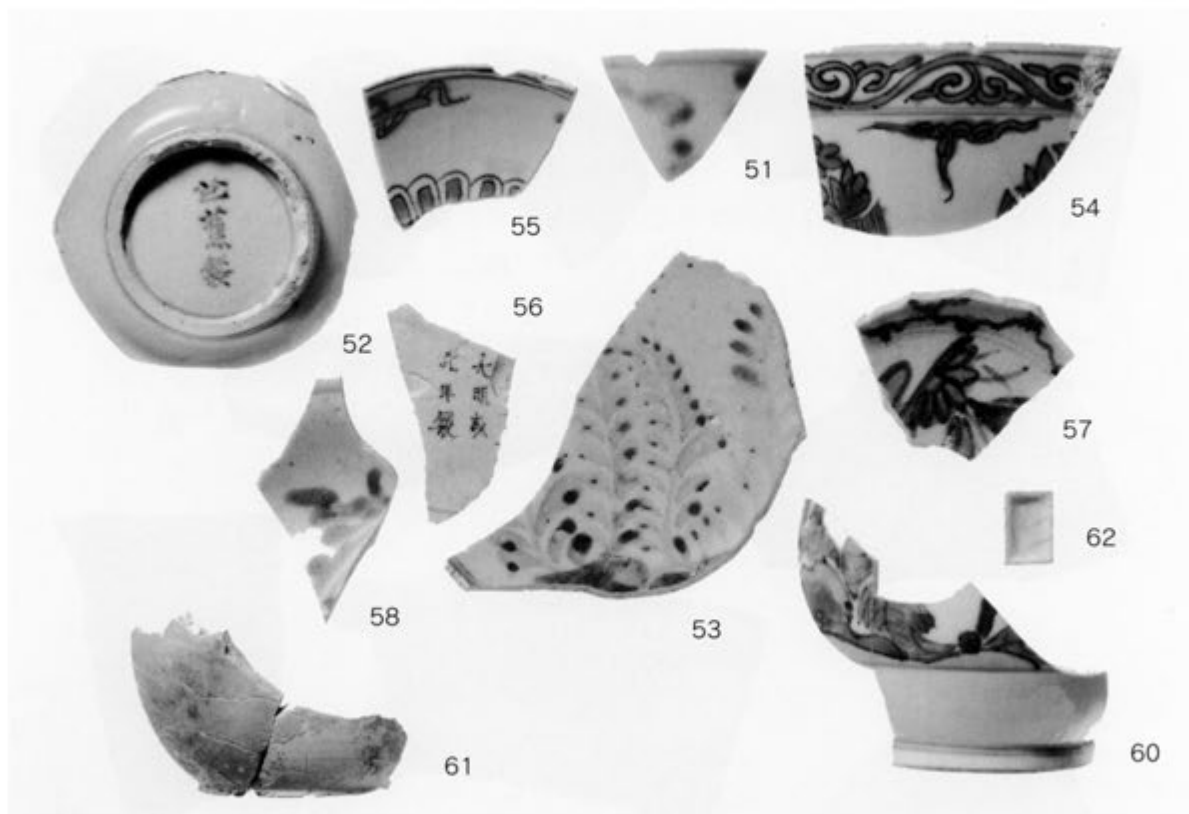


出土遺物 (3)

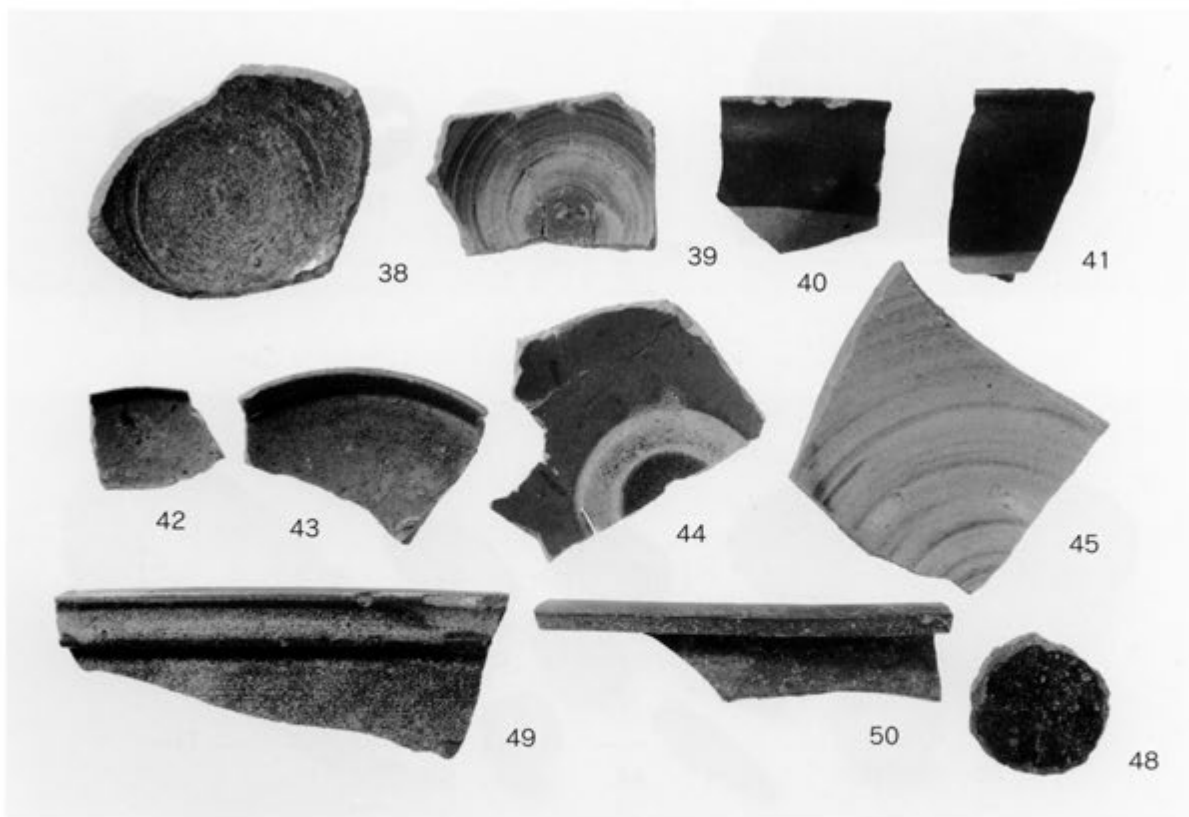


出土遺物 (4)





出土遺物 (5)



出土遺物 (6)

## あ と が き

楠元遺跡の発掘調査は、低湿地遺跡の調査方法や出土遺物の保存処理を考え直す上で1つの大きな契機となった。調査や整理作業は不十分な点が多く、悔やまれるが、これらの経験を今後の調査や整理作業に活かしていきたい。

報告書作成作業は終了したが、これからの大きな課題である木製品の保存処理や出土遺物の活用などに積極的に取り組んでいきたい。

発掘調査から報告書作成にあたり、地元の作業員・川内市教育委員会・鉄道建設公団など多くの方々からご指導やご支援を頂き、深く感謝いたします。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (57)  
九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (VI)

### 楠元・城下遺跡

発行日 平成15年3月24日  
発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1  
☎ (0995) 48-5811  
印刷所 斯文堂株式会社  
〒892-0838 鹿児島市新屋敷町14-16  
☎ (099) 226-3747